

宮城県文化財調査報告書第192集

嘉倉貝塚

序 文

新たな世紀、21世紀を迎え、携帯電話やパソコンなど高度情報通信機器が普及し、これらなくしての社会生活は考えられない時代となりました。これら的情報通信技術や情報処理技術はこれからも進歩し、私たちの社会生活や世の中の仕組みまでもえていくことでしょう。このような日々変化していく時代の中にあって私たちの行く末を考えるとき、来し方を正確に知ることの重要性はますます増してきております。

歴史は、過去に起こった事実の積み重ねから明らかにされていかねばなりません。県内各地域は情報の共有化により均質化しておりますが、特に地域との結びつきの強い埋蔵文化財は各地域の個性溢れる歴史を明確にするためにも欠くことのできない重要な位置を与えられておりまます。しかし、埋蔵文化財は道路や宅地の造成、ほ場整備などの大規模開発により年々破壊され、消滅の危機にさらされています。

このような中にあって、宮城県教育委員会では、開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発と関わりが生じた場合には積極的に保護することに努めてきております。

本書は、当教育委員会が宮城県土木部との保存協議に基づき、みやぎ県北高速幹線道路事業にともなって実施した築館町嘉倉貝塚の発掘調査報告書です。この成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後に、遺跡の保存にご理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係各機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成15年3月

宮城県教育委員会教育長

千葉眞弘

例　　言

1. 本書は宮城県が計画したみやぎ県北高速幹線道路事業に伴う嘉倉貝塚の発掘調査成果をまとめたものである。
2. 調査、報告書の作成は宮城県教育委員会が担当した。
3. 本書における土色の記述は『新版標準土色帳』(小山・佐竹：1973)に基づく。
4. 本書の図版2は国土地理院発行の1/25,000「築館」「佐沼」を複製して使用した。
5. 報告書の作成に際して、発掘調査時に登録した遺構番号に欠番が出たが、原図の番号をそのまま本書に使用した。また、遺構番号は通し番号である。
6. 報告書における遺構、遺物の実測図、写真図版の縮尺は原則として以下の通りである。

遺構・・・全体図1/500 遺構配置図1/150 平・断面図1/60・1/80

遺物・・・土器・金属製品1/3 石器・土製品(土偶は一部原寸)・石製品2/3(縄石器のみ1/3)

7. 遺構の種別については次の略号を使用して区別した。

竪穴住居跡(S I)、掘立柱建物跡(S B)、土壙(S K)、溝跡(S D)、

柱列(S A)、竪穴状遺構・工房跡・遺物堆積層・倒木痕(S X)

8. 発掘調査及び遺物調査については、阿子島香氏、岡村道雄氏、坂井秀弥氏、佐藤信行氏、

須藤 隆氏、藤沼邦彦氏、宮本長二郎氏から御教示、御指導を賜った。(五十音順)

9. 本書の編集、執筆は宮城県文化財保護課職員の検討を経て次のとおり分担して行った。

遺構-佐藤憲幸、三好秀樹、須田良平

土器-佐藤憲幸　　石器-三好秀樹

土製品-佐藤憲幸、千葉直樹　　石製品-三好秀樹　　動物遺体-西村 力

10. 遺構のトレースは、1/20の実測原図をスキャナーでコンピュータに取り込み、それを下図としてドロー系ソフトによりデジタルトレースした。

11. 遺物の実測・トレースは、実寸の実測原図をスキャナーでコンピュータに取り込んだものと、デジタルカメラによる望遠撮影後、コンピュータ内での画像処理により歪みを補正したデジタル写真的2つを併用し、これを下図としてデジタルトレースした。

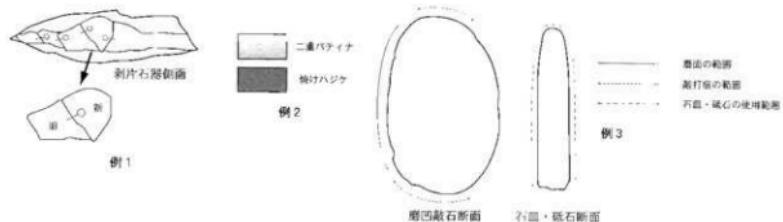
12. 本遺跡の調査成果については、宮城県遺跡調査成果発表会・東北史学会考古学部会でその内容の一部を報告しているが、これらと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。

13. 出土石器の石材同定および黒曜石の原産地推定は(株)パレオ・ラボに委託して行った。

14. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

石器実測図の凡例

1. 石器は基本的に両面のデジタル写真と断面図によって提示しており、定形・不定形石器については器種・類型に分類した中で代表的なものの実測図を合わせて示した。
2. 剥片石器の側面図では剥離面の前後関係を例1に示すかたちで表記している(松沢亜生：1959に基づく)。
3. 剥片石器で、刃部などに著しいマツツが認められる場合は、その範囲を矢印で示した。
4. 実測図を示した剥片石器に、二重バティナ、焼けハジケが認められる場合は、その範囲を例2で示した塗りで表現している。
5. 磨凹敲石では磨・敲打痕の及ぶ範囲、石皿・砥石ではその使用範囲を例3の凡例に基づいて断面図に印した。



調査要項

遺跡名：嘉倉貝塚(宮城県遺跡地名表登載番号：41005)

所在地：宮城県栗原郡築館町字萩沢加倉

調査原因：みやぎ県北高速幹線道路事業

調査対象面積：約 12000m²

調査面積：約 5000m²

調査期間：1999年(平成11年)4月12日～12月10日

2000年(平成12年)4月10日～12月19日

2002年(平成14年)7月29日～8月28日

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：築館町教育委員会生涯学習課

調査員：1999年 佐藤則之、須田良平、佐藤憲幸、三好秀樹(宮城県教育庁文化財保護課)

千葉長彦(築館町教育委員会)

2000年 佐藤憲幸、三好秀樹、西村 力、山田晃弘、古川一明、相原淳一

村田晃一(宮城県教育庁文化財保護課)、千葉長彦(築館町教育委員会)

2002年 佐藤憲幸、白崎恵介(宮城県教育庁文化財保護課)

目 次

第一章 遺跡の位置と周辺の遺跡	
1 遺跡の位置	1
2 周辺の遺跡	1
第二章 調査に至る経緯と調査の方法と経過	4
第三章 基本層序	6
第四章 発見された遺構と遺物	
A 繩文時代	
1 竪穴住居跡	16
2 竪穴状遺構	215
3 掘立柱建物跡	216
4 土壙	240
B 古代	
1 竪穴住居跡	429
2 工房跡	453
C 近世以降および時期不明の遺構	456
第五章 考察	
A 繩文時代	
1 出土遺物について	
(1) 繩文土器	457
a 土器の分類	
b 土器の組み合わせ	
c 編年の位置	
(2) 石器	468
a 出土石器の分類	
b 共伴関係と石器の時期	
c 繩文時代前期後葉から中期初頭頃の石器の特徴	
(3) 石製品	483
a 痕状耳飾	
b 装飾品	
c 石 剣	
d 石 錘	
e 円盤状石製品	
f その他の石製品	
(4) 土製品	486
a 土 偶	
b イチジク形土製品	
c 耳飾り	
d 円盤状土製品	
e 袖珍土器	
f その他の土製品	
(5) 動物遺体	508
2 遺構について	
(1) 遺構の重複関係と時期	512
a 重複関係	
b 時 期	
(2) 竪穴住居跡の分類と各類の前後関係	516
a 竪穴住居跡の分類と特徴	
b 竪穴住居跡各類の前後関係	
(3) 掘立柱建物跡について	522
(4) 土壙について	523
(5) 集落の構成	527
B 古代	
1 SI310 住居跡カマド上部出土の遺物について	532
第六章 付編	534
第七章 まとめ	538
引用・参考文献	539
空撮写真	541
土器・石器観察表	544
索引	559
報告書抄録	560

第一章 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置



図版1 遺跡の位置

嘉倉貝塚は、宮城県栗原郡築館町字桜沢加倉に所在し、築館町は宮城県北西部にある栗原郡の南東に位置する。

県北部の地形をみると、中央部に北上川が流れ、その西側には奥羽山脈が南北に大きく横たわっており、栗原郡付近にはこの奥羽山脈から東に派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵が発達している。

築館丘陵は築館町内を東流する迫川やその各支流によって複雑に開析され、いくつかの小丘陵に分岐し樹枝状の地形を形成している。これらの中に、町の東端から志波姫・若柳両町にかけて、県内最大の湖沼である伊豆沼の北岸に発達した、東西に延びる低丘陵がある。本遺跡はこの丘陵の南西端、伊豆沼から北西に約2kmの地点にあり、L字状に張り出して半島状となつた台地上に立地している。標高は約20m。現在は宅地、畑、水田などに利用されている。

また、伊豆沼やそれに隣接する内沼周辺と、これらに流入する荒川・照越川・八沢川・太田川等の各河川流域には扇状地性低地が発達しており、伊豆沼の南東約2.5kmにある長沼を含め、東北有数の湖沼地帯となっている。

2 周辺の遺跡(図版2)

築館町には極めて多くの遺跡が残されており、現在53ヶ所の遺跡が確認されているが、ここでは縄文時代の遺跡に限って説明する。

伊豆沼や内沼周辺は、国内最大といわれ、北上川下流域に分布する内陸淡水貝塚群の北部にあたり、本遺跡の他には町外の遺跡を含め、糠塚貝塚、砂子崎貝塚、横須賀貝塚、浄土遺跡、原貝塚、敷味貝塚、唐木崎貝塚、倉崎貝塚、玉荻台遺跡、照越台遺跡、木戸遺跡、鰐沢遺跡、佐内屋敷遺跡、宇南遺跡等の縄文時代前期～晚期の多くの集落跡や貝塚等が分布している。これらの殆どは、標高20～30mの緩やかな丘陵や段丘上に立地している。

これらの中、過去に本格的な発掘調査が行われたものは木戸遺跡(森：1980)、鰐沢遺跡(宮教委：1975)、佐内屋敷遺跡(森：1983)、敷味貝塚(伊藤：1965)、唐木崎貝塚(阿部：1990)、倉崎貝塚(阿部：1990)、宇南遺跡(遊佐他：1980)の7遺跡あり、以下の3遺跡で竪穴住居跡が検出されている。

鰐沢遺跡は、嘉倉貝塚の西、約1.7kmに位置し、嘉倉貝塚と同様、築館丘陵から派生した、独立丘陵上にある縄文時代中期の遺跡である。昭和49年に宮城県教育委員会と金野 正氏、三宅宗議氏を中心となって発掘調査が行われ、9軒の竪穴住居跡が確認された。それらの内1軒が精査されており、大木10式期の土器や石器、土製品等が出土している。

木戸遺跡は鰐沢遺跡の西に隣接する縄文時代中期の遺跡である。昭和51～52年にかけて宮城県教育委員会によって調査が行われており、その結果、竪穴住居跡3軒、竪穴造構5基、焼土造構1基、土壙2基が精査されている。それらの内、竪穴住居跡1軒が大木8b式期もので、土器や石器が出土している。

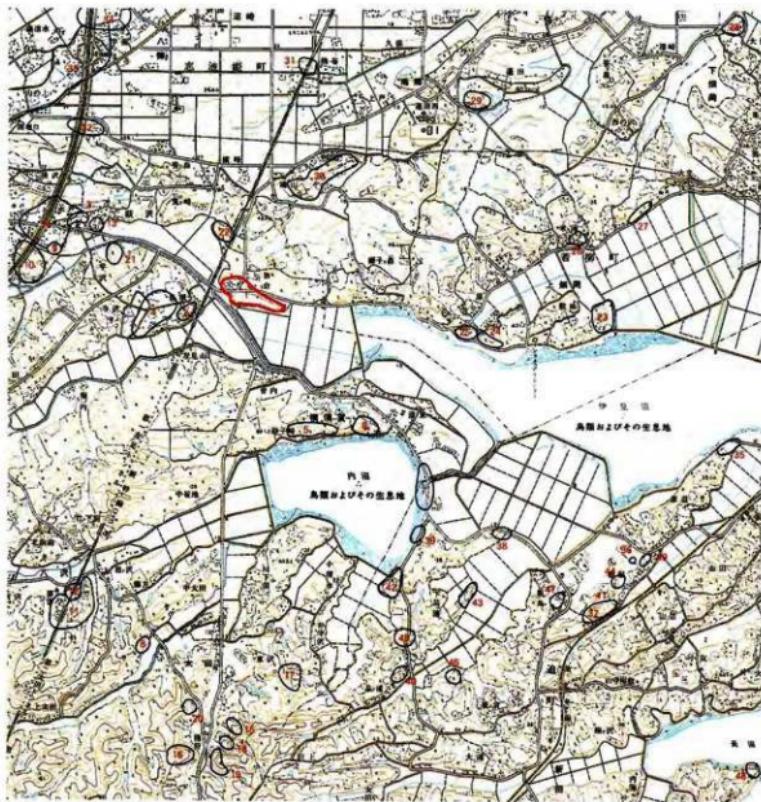
佐内屋敷遺跡は、鰐沢・木戸両遺跡がある丘陵と、谷を挟んで南側の丘陵上に立地する、縄文時代中期から古代にかけての遺跡である。昭和52年に宮城県教育委員会によって調査が行われており、その結果、竪穴住居跡38軒の他、土壙、合口カメ棺、鍛冶造構が精査されている。それらの内、竪穴住居跡2軒が大木8a式期もので、土器や石器が出土している。

また、追町糠塚貝塚は、伊豆沼東岸から約1.8km東にある縄文時代前期から後期の遺跡である。昭和40年と51年の開田工事の際に土器、土偶、土製品など非常に多量の遺物が採取されており、興野義一氏によって、遺物の分析がなされている。

その他、発掘調査や表面採取品等で土器形式のわかる縄文土器が出土している遺跡としては、以下のようなものがあげられ、縄文時代中～晚期の遺跡が多い。

築館町：照越台遺跡(大木9式、宝ヶ峯式、大洞A式)
砂子崎貝塚(大洞C1～A式)
横須賀貝塚(大洞C1～A'式)
浄土遺跡(大木9・10式、大洞A・A'式)
志波姫町：宇南遺跡(大木1式、大洞C2or A式)

若柳町：敷味貝塚(金剛寺式、大洞A・A'式)
大浦貝塚(大木9・10式、南境式、大洞C2式)
追町：砂崎(品崎)遺跡(大洞C1・C2式)
浄土遺跡(大木9・10式、大洞A式)
深沢B貝塚(大木8b式、金剛寺式、大洞A式)
坂戸遺跡(大木6～10式、南境式、大洞C2式)
倉崎貝塚(金剛寺式、大洞B・C・C1・C2・A式)
唐木崎貝塚(宝ヶ峯式、金剛寺式、大洞B～A'式)



番号	地名	面積	形状
1.	高麗貝塚	貝塚	高麗一帯、共生
2.	三谷貝塚	貝塚	高麗一帯、共生
3.	鹿島貝塚	貝塚	高麗中
4.	高麗遺跡	遺跡	高麗一帯、共生
5.	高麗瓦窯	瓦窯	高麗一帯、共生
6.	高麗瓦窯	瓦窯	高麗一帯、共生
7.	手力遺跡	遺跡	高麗一帯、共生
8.	大泊遺跡	遺跡	高麗一帯、共生
9.	手力平野遺跡	遺跡	高麗
10.	高麗	高麗	高麗一帯、共生、生息
11.	高麗瓦窯	瓦窯	高麗一帯、共生、生息
12.	八郎遺跡	遺跡	高麗一帯、共生
13.	高麗瓦窯	瓦窯	高麗一帯、共生
14.	手力瓦窯	瓦窯	高麗一帯、共生
15.	高麗人跡跡	人跡跡	高麗
16.	高麗瓦窯	瓦窯	中空
17.	高麗瓦窯	瓦窯	中空
18.	高麗瓦窯	瓦窯	中空
19.	高麗瓦窯	瓦窯	中空
20.	高麗瓦窯	瓦窯	中空
21.	小泊遺跡	遺跡	小泊
22.	高麗	高麗	中空
23.	高麗瓦窯	瓦窯	中空
24.	高麗瓦窯	瓦窯	中空
25.	手力遺跡	遺跡	中空、近隣
26.	手力瓦窯	瓦窯	中空
27.	手力瓦窯(内堀跡)	瓦窯	第六空
28.	手力瓦窯	瓦窯	第六空

番号	地名	面積	形状
29.	高麗遺跡	石物	高麗一帯、共生
30.	高麗瓦窯(内堀跡)	瓦窯	中空
31.	高麗遺跡	石物	高麗・古戻
32.	手力遺跡	石物	高麗・古戻
33.	手力瓦窯	瓦窯	高麗・古戻
34.	手力瓦窯	瓦窯	高麗・古戻
35.	手力瓦窯	瓦窯	高麗・古戻
36.	手力瓦窯	瓦窯	高麗・古戻
37.	手力瓦窯	瓦窯	高麗・古戻
38.	手力瓦窯(内堀跡)	瓦窯	高麗一帯、共生
39.	手力瓦窯	瓦窯	高麗一帯、共生
40.	手力瓦窯	瓦窯	高麗一帯、共生
41.	高麗遺跡	石物	中空
42.	手力瓦窯	瓦窯	中空
43.	手力瓦窯	瓦窯	中空
44.	高麗瓦窯	瓦窯	中空
45.	手力瓦窯	瓦窯	中空、古戻
46.	手力瓦窯	瓦窯	中空、古戻
47.	高麗遺跡	石物	中空
48.	手力瓦窯	瓦窯	高麗一帯、共生
49.	手力瓦窯	瓦窯	高麗
50.	手力遺跡	石物	高麗一帯、共生
51.	手力瓦窯	瓦窯	高麗一帯、共生
52.	手力瓦窯	瓦窯	高麗一帯、共生



図版2 周辺の遺跡

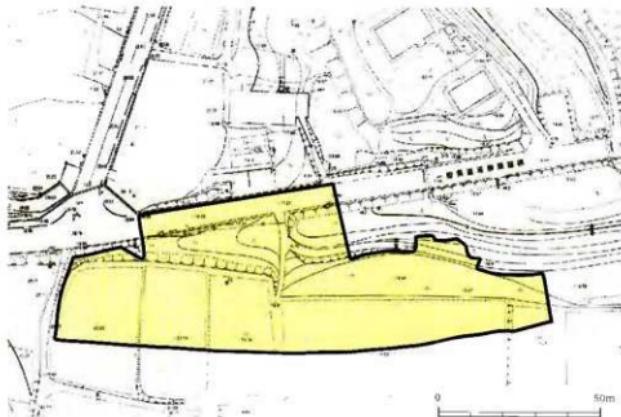
第二章 調査に至る経緯と調査の方法と経過

嘉倉貝塚は、追川流域において最も内陸部に位置する縄文時代後期後半～晚期にかけての貝塚である。遺跡の存在は、古くから知られており、大正時代には既に築館中学校に在職していた池内儀八郎氏によって遺物が採集されている。その後、江坂輝弥氏が踏査し、昭和25年の「貝塚二九号」にその記録が掲載されている。昭和30年代前半には、興野義一氏によって本遺跡を含む追川流域の貝塚研究（興野：1958）がなされた。

昭和30年代後半から40年代前半にかけて、本遺跡周辺では大規模な河川堤防工事や開田工事が行われ、本遺跡も貝層の大部分を含む遺跡の一部が壊される結果となった。かろうじて、昭和42～43年におこなわれた重機による大規模な開田工事の際に、佐藤信行氏の尽力により多量の遺物が採集され、それらについては築館町史資料「築館町嘉倉貝塚調査概報」（築館町文化財保護委員会：1973）として報告されている。

昭和58年8月には、志波姫町へ延びる町道の改良拡幅工事に際し、宮城県教育委員会による調査が行われている。拡幅部分にトレーンチを設定し遺構の確認調査を行ったが、その際には、近世以降の掘立柱建物跡が数棟と時期不明の土壙が数基検出されたのみで、縄文時代の遺構は検出されなかった。その後、本格的な発掘調査は現在まで行われておらず、本遺跡の実体はいまだ不明な点が多いのが現状であった。

こうした状況の中、平成6年にみやぎ県北高速幹線道路事業が計画された。計画路線区域が本遺跡の範囲内にあることから、平成8年以降、宮城県教育庁文化財保護課と宮城県築館土木事務所、築館町とが対応について協議を行い、平成9年10月に遺構の存在の有無や遺跡の広がりを把握するための確認調査を行った。はじめに、遺跡内を東西に横断する県道以南が遺跡中心部と考えられることから、



図版3 調査区の位置

これらの工事対象区域内に幾つかの任意のトレンチを設定した。重機による表土の除去後、遺構確認作業を行った結果、工事対象区域の西端では遺構は確認されなかつたものの、中央部においては多数の竪穴住居跡、土壤、溝跡などの存在が確認された。そのため、再度関係各所と遺跡取り扱いの協議を行い、工事に先立ち、次年度以降、県道北側を含め、遺跡に工事計画が及ぶ全城の発掘調査を実施することとなつた。対象面積は約12000m²である。

平成11年度の発掘調査は県道の南側を対象に平成11年4月12日～12月10日にかけて実施した。その経過と方法は以下の通りである。

昨年度に遺構が確認された県道南側の丘陵部の表土を重機により除去して、地山面で遺構確認を行つた。その結果、多くの竪穴住居跡、溝跡、土壤などが検出されたが、調査区東側に行くにつれて遺構密度が希薄となる状況が確認された。そのため、工事対象区域東端では任意のトレンチによる遺構確認作業に切り替えて調査を行つたが遺構、遺物は検出されず、集落北東部の範囲が確定された。その後には県道と重複し、遺跡東側から東西に入り込む沢地の南側斜面の表土を除去し、遺構の有無を確認した。その結果、沢頭から東側30mの範囲にかけて、丘陵斜面上方から落ち込んだと考えられる遺物を比較的多く含む2次堆積層が確認されたため、遺物の取り上げ作業を行つた。

丘陵部の遺構精査は調査区東側から開始し、西にむかって調査を進めた。遺構精査に際しては、調査区東端に任意の基準点を設け、これを原点として南北軸を座標北に合わせて組んだ直角座標をもとに3m単位のグリッドを設定した。調査原点の国家座標はX=-141566.000 Y=20382.000(Tokyo Datum)である。その後、調査の状況に応じて、20分の1の平面図・断面図を作成し、また、35mmカラースライド・白黒および60mmのカラー・白黒写真による記録も合わせて行った。平成11年度の調査は12月10日に調査区東半部の調査を終了した。

尚、県道北側の工事対象区域の試掘調査も11月12日に行つた。任意にトレンチを設定し、重機による表土の除去後、遺構確認を行つた結果、丘陵南西縁の2ヶ所で性格不明の土抗を検出し、更に少量の繩文土器片が出土したため、次年度にあらためて対象区域全面の確認調査を行うこととした。

平成12年度は4月10日から調査を行つた。昨年度から継続して県道南側の調査区西半の調査から開始し、遺構の希薄な調査区西端から遺構が集中する中央部にむかって調査を進めた。遺構精査に際しては昨年度と同一原点を使用してグリッドを設定し、平・断面図を作成した。写真による記録も同様である。

また、県道北側については、9月11日に確認調査を開始した。昨年度、土抗が検出された丘陵南西縁を中心に東西約50m、南北約10mのトレンチを設定し、他の地点にも任意のトレンチを設定して、重機による表土除去を行い、遺構確認作業を行つた。その結果、上記の土抗の他に数軒の掘立柱建物跡が検出されたものの、土抗からは近世陶器が出土し、掘立柱建物跡も埋土の状況から近世以降と考えられるもので、昭和58年の調査成果と考えあわせ、繩文時代の集落範囲は県道以南の丘陵に限定されるものと判断した。

尚、遺構精査が進むに従い、極めて多数の大型竪穴住居跡や、掘立柱建物跡が重複して検出された。これらの様々な施設は同じ場所で何度も建て替えられ、集落内において長期間、同じ性格をもつた施

設としての使われ方がなされていたことが判明し、本遺跡がこの時期の拠点的な大集落であったことがわかつてききた。また、これらの施設は環状に配置されており、環状集落は県内では初めての発見で、遺構変遷も重複関係から明確にとらえられるなど、縄文研究の資料としてもきわめて重要な遺跡であることがわかつた。

そこで、平成12年8月7日に築館土木事務所に遺跡保存のための協議開始の要望を伝え、以後、文化庁、築館町等の関係機関を交えて数回にわたる協議を行い、集落跡のある丘陵部を避けるかたちで道路建設計画が変更される事となった。その後、平成14年5月17日に県庁文化財保護課において当課と道路建設課、築館土木事務所の3者で協議を行い、新しい工事計画範囲が決定した。

平成14年度は、上記の協議の結果、最終的に工事範囲内となった現県道部分と県道南側の丘陵北端部分の調査を行った。7月30日から丘陵北端部の約85m²を対象に調査を開始した。この部分は平成12年度に調査が行われており、掘立柱建物跡や土壌、材木列が確認され、遺構確認及び堆積土の断面観察まで終了していた部分である。工事により掘削を受けることが確定したため完掘し、縮尺1/20の平面図の補足と掘り上げた状況の写真撮影を行った。県道部は付け替え道路が完成し、路面の舗装の剥ぎ取りが終了した8月8日から開始した。調査面積は約320m²である。重機による表土の除去後、平成11年に調査を行った遺物堆積層の県道下への延びを確認して、掘り下げを行った。遺構平面図は1/200の縮尺で作成し、写真による記録には211万画素のデジタルカメラを使用した。8月12～16日の夏季休暇期間中の中断を挟み、すべての調査を8月28日に終了した。

第三章 基本層序

今回の発掘調査区は、「L」字状に張り出して東西に延びる低平な丘陵の北半と、それと接する沢地部分に設定されている。丘陵部は調査前は休耕田・畠となっていたが、昭和40年代の開田工事の際に削平を受けている。このことから細部においては各地点毎に堆積状況や残存状況に多少の相違が認められるが、大筋では基準となる層を中心にはほぼ同じ層序を示しており、丘陵部の基本層序は以下の通りである。

第1層 調査区全体を覆う表土や水田耕作土と床土である。

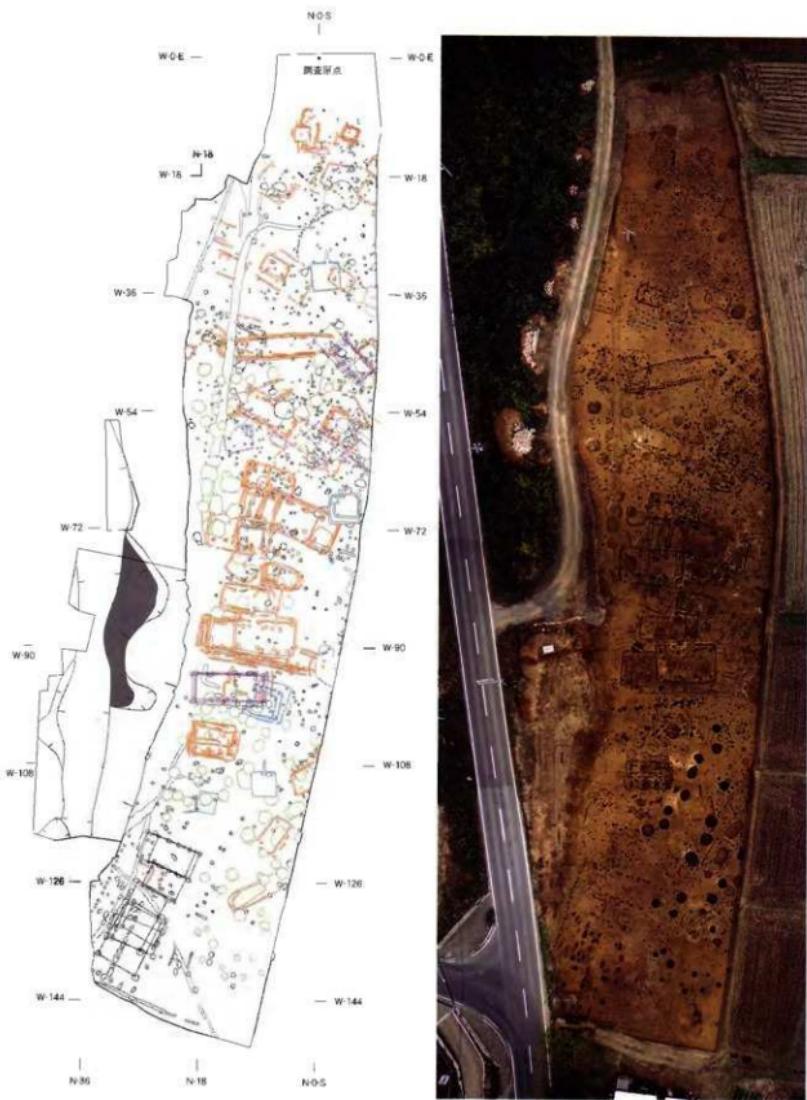
第2層 小礫を少量含む黒褐(7.5YR3/2～10YR2/3)色シルトの自然堆積層である。調査区中央付近(W-55～85)は北側の沢地に向かって、浅い窪地になっており、本層はこの部分にのみ残存する。縄文時代の遺構を覆っており、奈良・平安時代の遺構との新旧関係は不明である。層厚は最も厚いSI120周辺で約25cmである。

第3層 地山である。侵食と削平により、地点によって残存状況が相違するが、第3 a～c層に細分される。この内a・b層が遺構確認面となる。

第3 a層 明褐色(7.5YR5/6)～黄褐色(10YR5/6)の粘質シルトである。調査区東部(W-0～30)と西端(W-110～)にのみ分布する。

第3 b層 小礫を含む黄褐色(10YR5/8)のシルトである。

第3c層 黄褐色(10YR5/8)や黄灰色(10YR6/1)等の砂層や砂礫層が互層になっている。



図版4 遺構全体図



図版5 調査区東半(左が北)



図版 6 調査区西半(左が北)

W-147

W-141

W-135

W-129

W-123

N-36

N-30

N-24

N-12

N-6

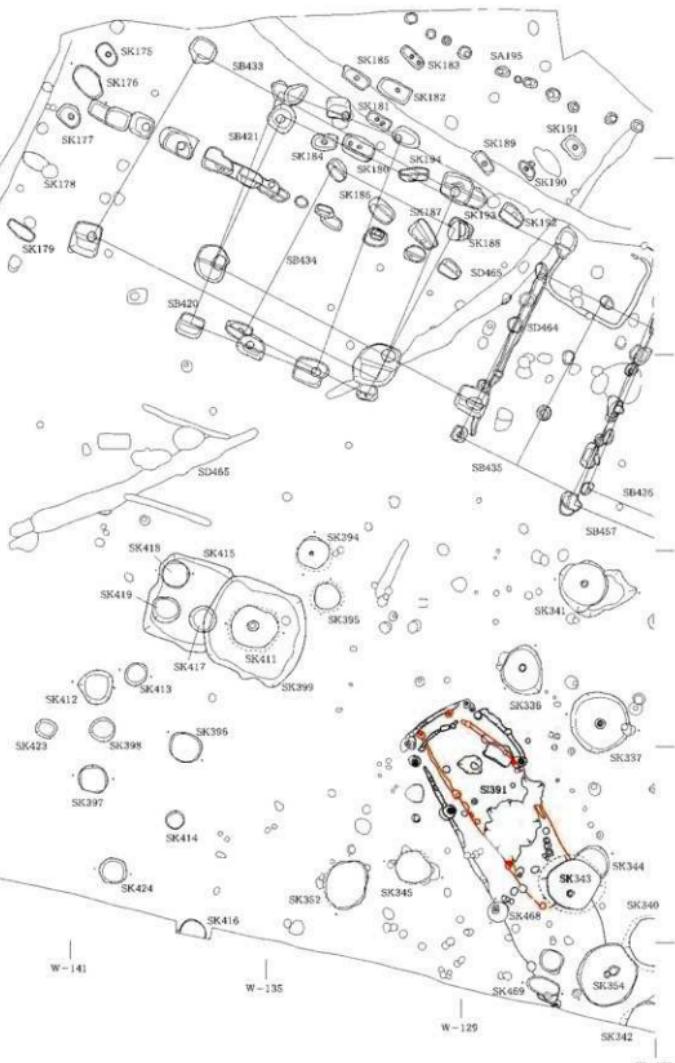
W-147

W-141

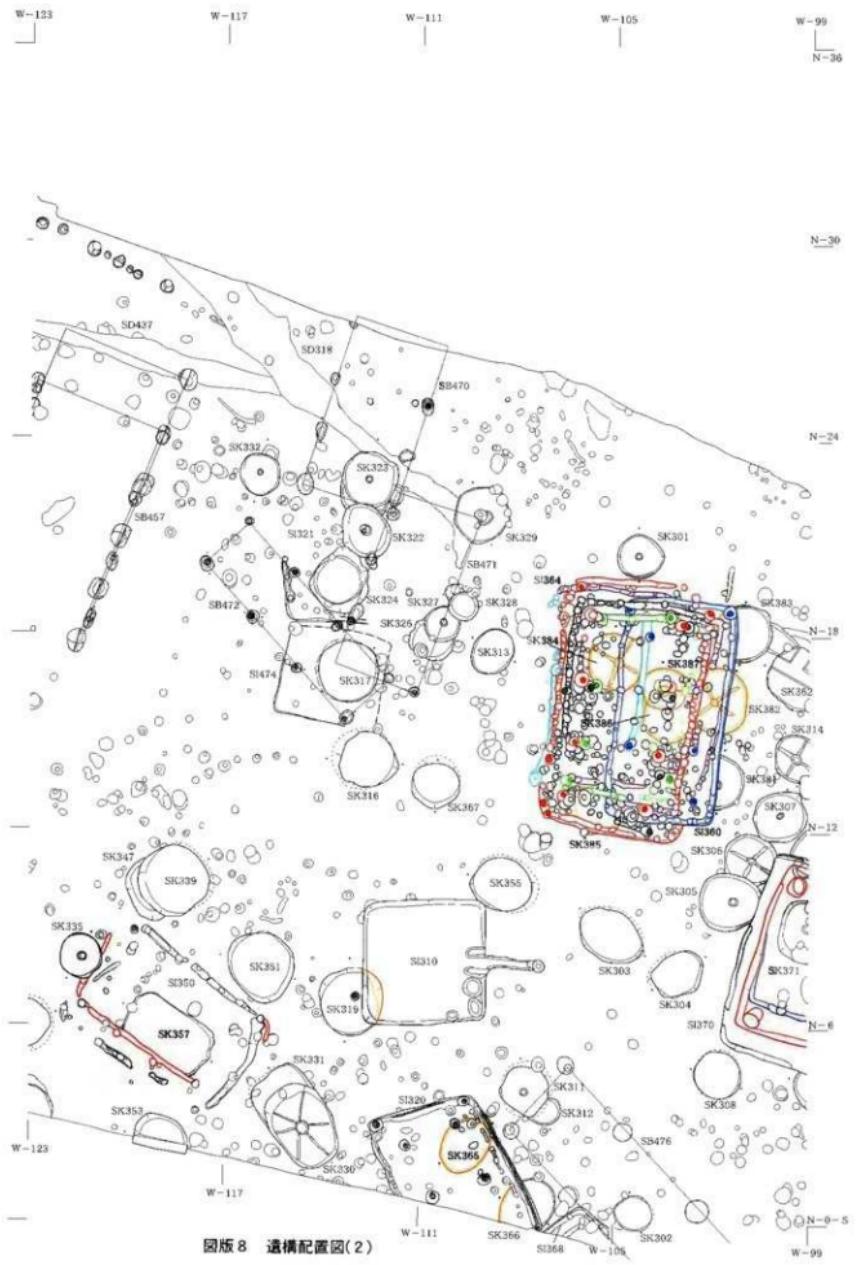
W-135

W-129

W-123



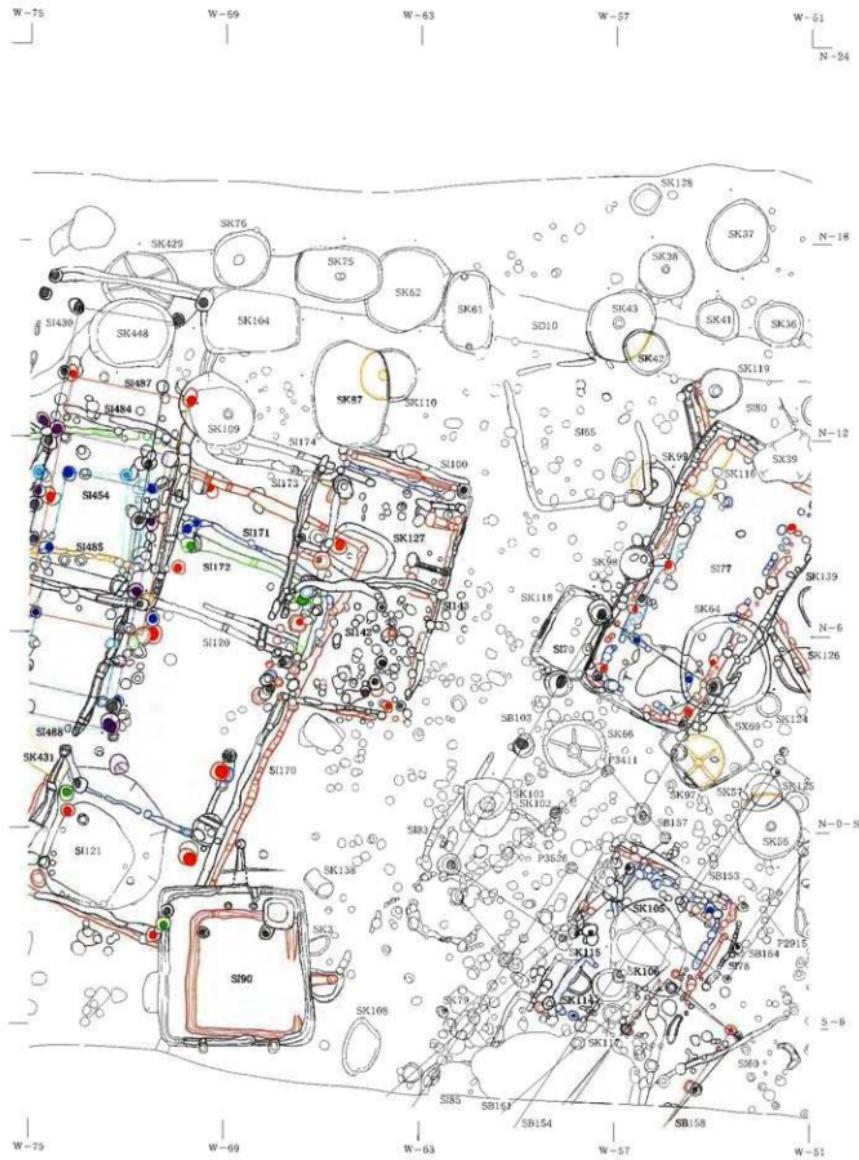
図版7 遺構配置図(1)



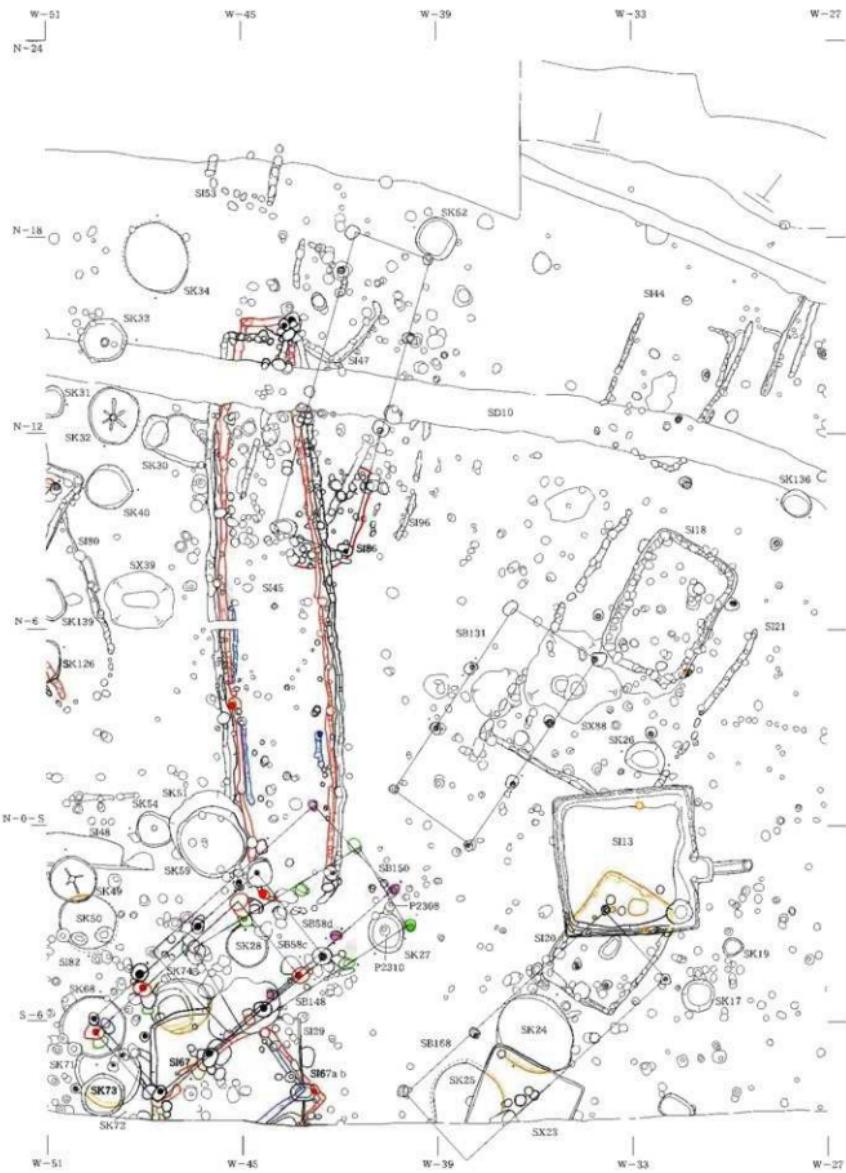
図版8 遺構配置図(2)



図版9 遺構配置図(3)



図版10 遺構配置図(4)



図版11 遺構配置図(5)



図版12 遺構配置図(6)

第四章 発見された遺構と遺物

今回の調査では竪穴住居跡119軒、掘立柱建物跡27棟、土塙172基、工房跡1軒、竪穴状遺構1軒、柱列3条、遺物堆積層1か所等を検出した(図版7~12)。遺物は縄文土器を中心に石器、土製品、石製品の他、土師器、須恵器などが出土している。

A 縄文時代

1 竪穴住居跡

【SI 2 a~d住居跡】(図版13)

【位置】S-5・W-11 [確認面] 地山

【重複】重複は認められない。本住居跡は3度建て替えられており、拡張されている。古いものからSI 2 a~dとする。

《SI 2 a》

【規模・平面形】残存不良のため詳細は不明であるが、周溝と壁柱穴から推定すると1辺1.9m前後の正方形を呈すると考えられる。

【堆積土・床面・壁】残存していない。

【炉】検出されなかった。

【主柱穴】確認できなかったが、SI 2 dで検出したP 1とほぼ同位置に存在した可能性が考えられる。

【周溝】東辺と南辺の一部に認められた。上幅8~15cm、下幅5~12cmで、深さは3cm前後である。

【壁柱穴】17個検出した。直径10~25cm、深さ14~43cmの円形で、壁際には5~50cmの間隔で認められ、南辺は特に密である。これらの内、柱痕跡を確認できるものは1個あり、直径11cm前後のやや不整な円形である。

【方向】西側壁柱列でみると、北で東に約40° 傾いている。

【出土遺物】出土していない。

《SI 2 b》

【規模・平面形】東西2.0m×南北2.3mの正方形を呈する。

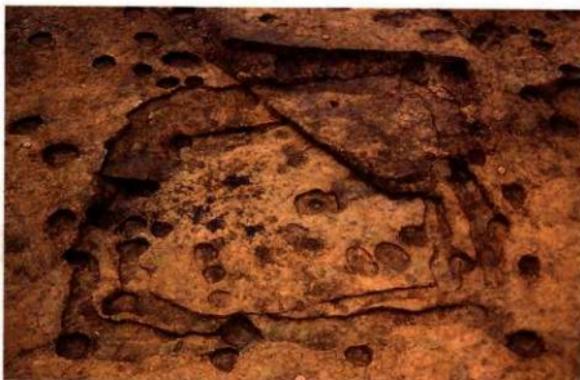
【堆積土】南側のほとんどが削平されているため不明な点が多いが、残存している部分では、床面直上に厚さ1~2cmほどの炭化物層が堆積している。

【壁】地山を壁としている。最も残りの良い北壁で約12cm残存しており、ほぼ垂直に立ち上がっていいる。

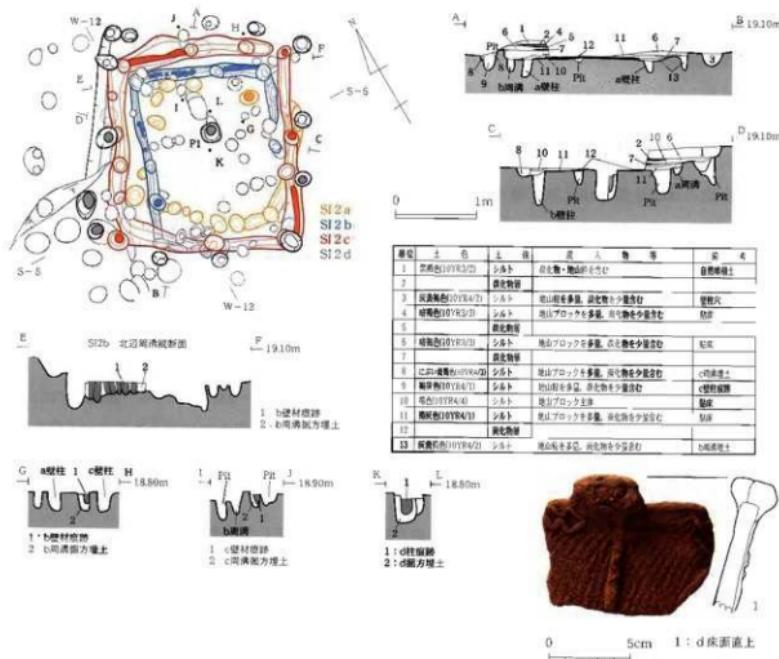
【床】地山を床面としている。中央やや南寄りが低く、わずかな凹凸はあるがほぼ平坦である。

【炉】床面のほぼ全面に炭化物が薄く堆積していたが、明確に炉と認められる焼け面は検出されなかった。

【主柱穴】確認できなかったが、SI 2 dで検出したP 1とほぼ同位置に存在した可能性が考えられる。



SI 2 住居跡(東から)



図版13 SI 2 住居跡および出土土器

【周溝】全辺で検出した。幅6～15cm、深さは5～20cmで、北辺および北東隅、南東隅付近が深くなっている。また、北辺東半や北辺西半では壁材痕跡が検出されており、後者では直径5～10cmの円形の杭列状となっている。

【壁柱穴】住居跡の四隅と、各辺中央付近に1～2個の計10個を検出した。平面形は直径15～28cmの円形や長軸23cm、短軸12cmの楕円形で、深さは15～41cmである。堆積土は地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルト等である。

【方向】西側壁柱列でみると、北で東に約21°偏している。

【出土遺物】出土していない。

《SI 2 c》

【規模・平面形】東西2.4m×南北2.6mの正方形を呈する。

【堆積土】床面直上に厚さ1～2cmほどの炭化物層が堆積している。

【壁】南辺と西辺の一部に残存し、地山を壁としている。周溝底面から緩やかに立ちあがっており、壁高は最も残りの良い南辺で6cmである。

【床】地山主体の褐色土を貼って床面としている。残存している範囲ではほぼ平坦で、壁際がやや高い傾向が認められる。

【炉】床面のほぼ全面に炭化物が薄く堆積していたが、明確に炉と認められる焼けた部分は検出されなかった。

【主柱穴】確認できなかつたが、SI 2 dで検出したP 1とほぼ同位置に存在した可能性が考えられる。

【周溝】全辺で検出し、ほぼ全周している。幅12～30cm、深さは3～13cmで、北辺と東辺の一部では壁材痕跡が検出されている。堆積土は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトで人為的埋土である。

【壁柱穴】住居跡の四隅と各辺で計13個検出した。平面形は直径12～28cmの円形や長軸20cm、短軸12cmの楕円形で、深さは10～45cmである。これらの内、柱痕跡を確認できるものは3個あり、直径10～12cmの円形である。堆積土は地山粒や炭化物を含む褐灰色シルト等である。

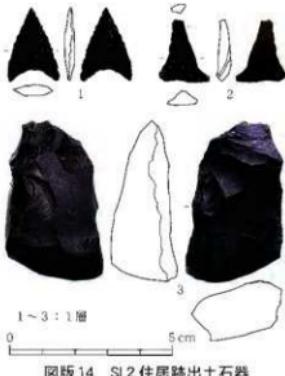
【方向】西側壁柱列でみると、北で東に約30°偏している。

【出土遺物】周溝から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

《SI 2 d》

【規模・平面形】残存不良のため詳細は不明であるが、壁柱穴から推定すると東西約2.8m×南北約3.1mの正方形を呈すると考えられる。

【堆積土】床面直上に厚さ1～2cmほどの炭化物層が堆積し、その上に黒褐色の自然流入土が堆積している。



図版14 SI 2 住居跡出土石器

【壁】西辺のみ残存しており、地山を壁としている。床面からやや急に立ちあがり、壁高は約12cmである。

【床】地山ブロックを多く含む、暗褐色シルトを貼って床面としている。ほぼ平坦であるが、壁際がやや高い傾向が認められる。

【炉】床面のはば全面に炭化物が薄く堆積していたが、明確に炉と認められる焼けた部分は検出されなかった。

【主柱穴】住居のはば中央で1個検出した(P 1)。a～c住居跡に伴う柱穴の可能性も考えられる。平面形は掘り方が直径24cm、柱痕跡が直径約12cmの円形で、深さは36cmである。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロック・炭化物を多く含む、褐色粘土、柱痕跡は地山粒・炭化物を少量含むにぶい黄褐色粘土である。

【周溝】検出されなかった。

【壁柱穴】住居跡の四隅と各辺で計14個検出した。平面形は直径20cm前後の円形や長軸22～36cm、短軸15～25cmの楕円形で、深さは13～39cmである。これらの内、柱痕跡を確認できるものは6個あり、平面形は直径8～14cmの円形や長軸20cm、短軸14cmの楕円形である。

【方向】西側壁柱列でみると、北で東に約33°偏している。

【出土遺物】堆積土や床面直上から、繩文土器深鉢の破片(図版13-1)や石鏃(図版14-1・2)、石核(3)が出土している。

【SI 3 a・b住居跡】(図版15)

【位置】S-9・W-16【確認面】地山

【重複】重複は認められない。本住居跡は一度建て替えられており、住居南側が調査区外に及ぶため詳細は不明であるが、調査区内では古い住居の東・西壁から幅40cm程を埋め戻して新しい住居の壁を構築している。古いものからSI 3 a・bとする。

《SI 3 a》

【規模・平面形】SI 3 bに棲されていることや住居南側が調査区外に及ぶことから全体の規模は不明であるが、東西2.9m×南北2.1m以上で、隅丸の方形を基調とする。

【堆積土】地山と黒褐色土のブロックが均質に混じるにぶい黄褐色シルト1層のみで、縦まりもあることから改築時に埋め戻された土と考えられる。

【壁】地山を壁としており、床面から高さ10cm程残る。東壁は急角度で立ち上がるが、北・西壁は住居外側へ大きく開いて立ち上がる。

【床】地山を床としている。床面にはやや凹凸があり、東西の壁際は中央に向かって緩やかに傾斜している。

【炉】検出されなかった。

【主柱穴】検出されていないが、SI 3 bの床面で検出したP 1と、ほぼ同位置に存在した可能性が考えられる。

【周溝】周溝は壁の直下を巡っており、北辺の西半はSI 3 bの周溝に棲されている。上幅10～15cm、



SI 3 住居跡(北東から)



図版15 SI 3 b 住居跡および出土遺物

深さ5~10cmで、断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する。

[堅柱穴] 周溝を掘り上げた段階で、壁柱穴の残痕と考えられる直径5~15cmの円形を基調とする小ピット10個を検出している。深さは周溝底面から5~10cmある。ピットは周溝内を壁添いに巡るが、間隔は不規則で、西辺の分布密度が濃い。周溝・壁柱穴の堆積土はいずれも地山小ブロックを多く含む灰黄褐色シルトである。

[方向] 南北の軸線でみると、北で東に約35° 傾いている。

[出土遺物] 住居埋土から地文のみの繩文土器器部破片等が極少量出土している。

《SI 3 b》

[規模・平面形] 住居の南側が調査区外に及ぶことから全体の規模は不明であるが、東西2.2m×南北

2.1m以上で、隅丸の方形を基調とする。

【堆積土】3層認められ、いずれも自然流入土である。なお、1層は周辺全体の遺構を覆う黒褐色土層である。

【壁】地山もしくは埋土を壁としている。壁は住居外側へ大きく開いて立ち上がり、床面から高さ10cm程残る。

【床】地山を床としている。床面にはやや凹凸があり、東西の壁際から中央に向かって皿状に緩やかに傾斜している。a住居跡の床をそのまま利用したと考えられる。

【炉】検出されなかった。

【主柱穴】床面で1個検出しており(P1)、このビットは南北のほぼ軸線上に位置している。平面形は直径15cm程の円形を呈し、深さは15cmある。なお、ビットの上部には深さ5cm程の抜き取り痕が認められる。

【周溝】壁の直下を巡っており、上幅7~15cm、深さ10cm前後で、断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する。

【壁柱穴】周溝を掘り上げた段階で、壁柱穴の残痕と考えられる直径5~15cmの円形を基調とする小ビット13個を検出している。深さは周溝底面から5cm前後ある。ビットは周溝内を壁添いに巡るが、間隔は不規則で、西辺の分布密度が濃い。周溝・壁柱穴の堆積土はいずれも地山小ブロックを含む褐灰色シルトである。

【出土遺物】床面や床面直上、堆積土等から、縄文土器深鉢の破片(図版15)やイチジク形土製品(図版436)が出土している。

【SI111住居跡】(図版17)

【位置】S-3・W-18【確認面】地山

【重複】SI112・113・129住居跡、SK6土壤と重複し、SI112より新しく、SI113、SK6より古い。SI129との新旧関係は不明である。また、南西側が倒木根で埋されている。削平により、主柱穴、炉、北側両隅の壁柱穴のみが残存しており、平面形・規模やその他の詳細は不明である。

【規模・平面形】残存する主柱穴や壁柱穴の規模から、東西4.5m×南北8.0m前後の長方形を呈するものと考えられる。

【堆積土・壁】残存していない。

【床】床面は削平により残存していないが、焼け面の状況からみるとSI12・129の掘り方埋土を床としていたものと考えられる。

【炉】長軸方向にほぼ平行して、3ヶ所焼け面が認められる。いずれも不整形であるが、規模は、Y1が最大長1.7m、最大幅1.0m、Y2は同じく0.7m、0.5m、Y3はSK6に埋されているが現存で0.4m、0.3mである。表面は後世に削られているためか、いずれもほぼ平坦である。

【主柱穴】長軸3間×短軸1間で計8個検出している。掘り方は長軸26~36cmの横円形を基調とし、埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。柱痕跡は2個の柱穴で認められており、直径15cmの円形で、深さは13~74cmである。柱間は、西柵で北から約2.3m・約2.3m・約2.6m、同



図版16 SI112住居跡(北東から)

じく東桁で約2.5m・約2.0m・約2.6m、梁間は北梁で約3.5mである。

〔周溝〕検出されなかった。

〔壁柱穴〕想定される壁の周辺には東辺を中心に多数のPitが検出されているが、本住居にともなうものを明確にすることはできなかった。

〔方向〕東側柱列でみると、北で東に約10°偏している。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SI112住居跡〕(図版16・17)

〔位置〕S-3・W-18 [確認面] 地山

〔重複〕SI111・129住居跡、SK 6 土壌と重複し、SI111、SK 6 より古い。SI129との新旧関係は不明である。また、南西側が倒木痕で壊されている。

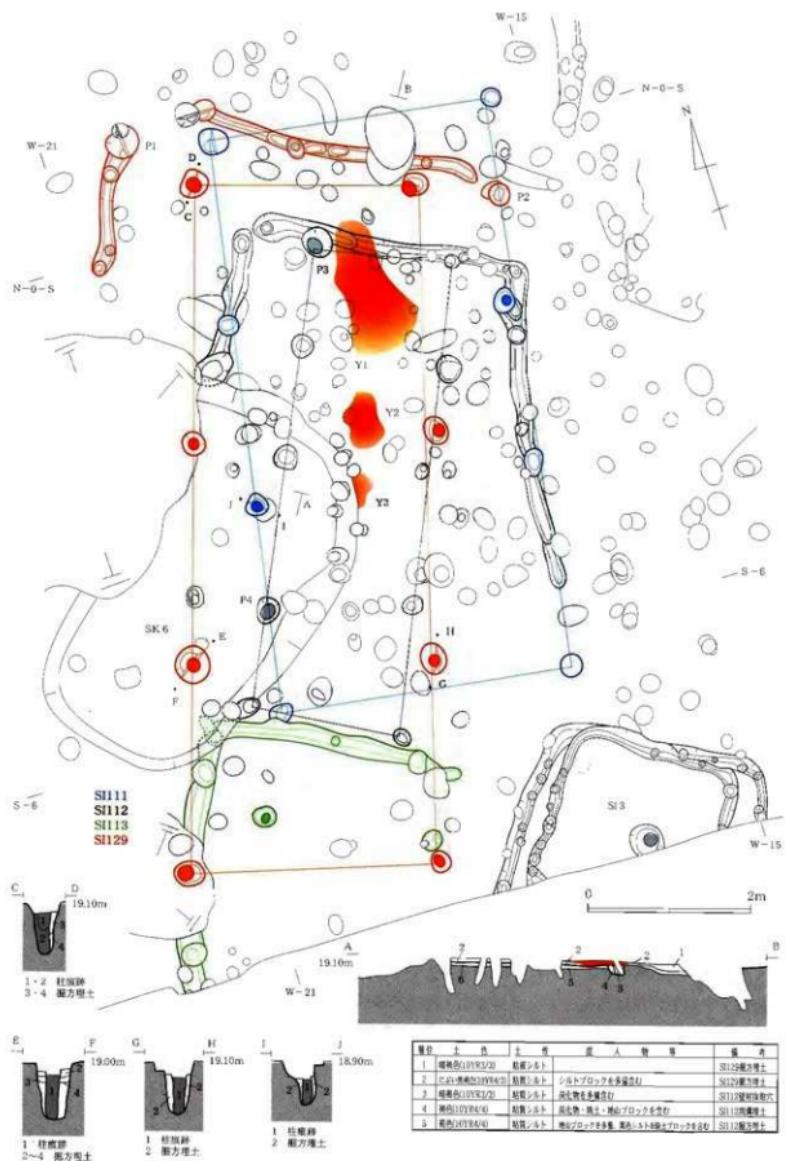
〔規模・平面形〕壁は残存せず、周溝も北辺と東辺、および西辺の北半分にのみ残存するため、全体の規模は不明であるが、主柱穴の規模から長軸は6.0m以上と推定され、短軸は北辺で約3.6mである。東辺は南に向かってやや開いており、平面形は不整の長方形を呈するものと考えられる。

〔堆積土・壁〕残存していない。

〔床〕地山ブロックや黒色シルト、焼土ブロックを含む、褐色の粘質シルトの掘り方埋土を床としている。

〔主柱穴〕長軸4間×短軸1間で計10個検出している。掘り方は径18~35cmの不整円形や楕円形で、埋土は主に地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。柱痕跡は2個の柱穴で認められており(P3・4)、ともに長径約20cm、短径約15cmの楕円形で、深さはP3が55cm、P4が78cmと深い。柱間は、西桁で北から約1.2m・約1.4m・約1.9m・約1.2m、同じく東桁で約1.3m・約1.3m・約1.7m・約1.6m、梁間は北梁で約1.7mである。

〔周溝〕北辺と東辺、および西辺の北半分に認められる。断面は逆台形状を呈し、上幅15~30cm、



図版17 SI 3 111・112・113・129住居跡

深さは5～17cmである。

【壁柱穴】周溝の底面から、壁柱穴と考えられる直径10～50cmの円形や楕円形を呈するビット9個を検出している。深さは周溝底面から3～22cmである。周溝・壁柱穴の堆積土は、主に地山粒や炭化物、焼土を含む褐色や暗褐色の粘質シルトである。

【炉】検出されなかった。

【方向】西側柱列でみると、北で東に約29°偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SI113住居跡】(図版17)

【位置】S-6・W-21【確認面】地山

【重複】SI111・129住居跡、SK6土壤と重複し、SI111よりも新しく、SK6よりも古い。SI129との新旧関係は不明である。西側は倒木痕によって壠されている。

【規模・平面形】南側は調査区外のため不明であるが、周溝から推定すると、長軸3.4m以上、短軸は北辺周溝で3.2mである。

【堆積土・壁・床面】残存していない。

【主柱穴】2個検出している。掘り方は直径25cm前後のやや不整の円形で、深さは約25cmである。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。柱痕跡は1個の柱穴で認められており、径約10cmの円形である。柱間は北側柱列で約2.1mである。

【周溝】北辺と西辺に認められる。上幅18～30cm、深さは4～28cmで、もっとも深い北西隅から離れるにしたがって浅くなる。断面は逆台形状を呈する。

【壁柱穴】周溝の底面に、壁柱穴の残痕と考えられる直径10～30cmの楕円形や不整円形を基調とする小ビット5個を検出している。深さは周溝底面から6～25cmである。周溝・壁柱穴の堆積土は、主に地山粒を多く含む暗褐色砂質シルトである。

【炉】検出されなかった。

【方向】西辺でみると、北で東に約25°偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SI129住居跡】(図版17)

【位置】S-3・W-18【確認面】地山

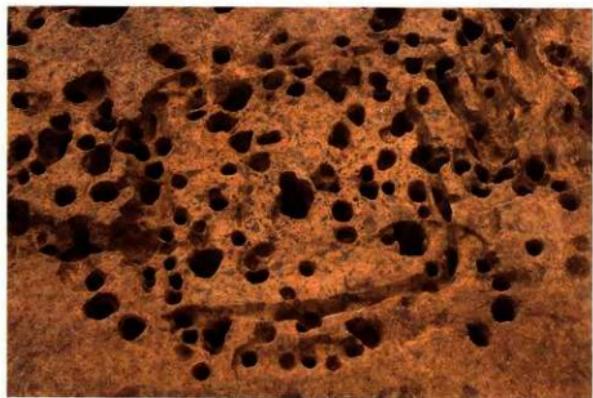
【重複】SI111・112・113住居跡、SK6土壤と重複し、SK6よりも古い。その他の新旧関係は不明である。また、南西側が倒木痕で壠されている。

【規模・平面形】壁は残存せず、周溝も北・西辺のみ残存するため、全体の規模は不明であるが、主柱穴や壁柱穴の位置から、東西5.0m×南北9.0m以上の長方形を呈するものと考えられる。

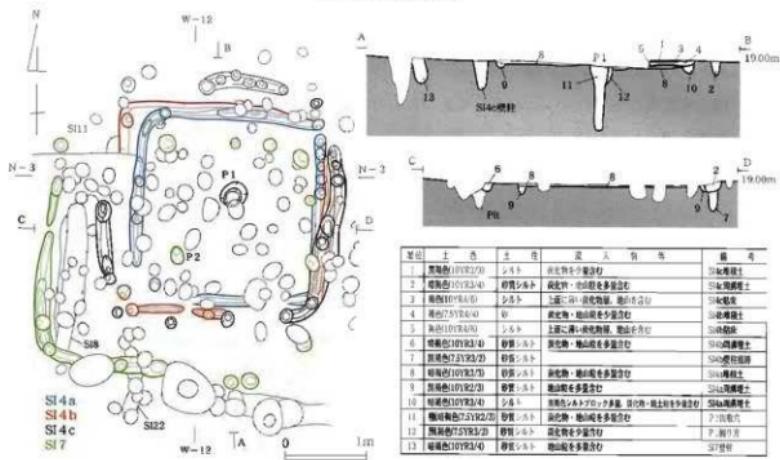
また、南辺は調査区外に延びる可能性も考えられる。

【堆積土・壁】残存していない。

【床】床面は削平により残存していないが、SI112の床面上に暗褐色シルトブロックを含む、にぶい黄褐色シルトを貼って床としている。



SI 4 住居跡(北から)



図版18 SI 4・7住居跡

[炉] 検出されなかった。

[主柱穴] 長軸3間以上×短軸1間で計8個検出している。掘り方は径30~40cmの円形~梢円形で、埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。すべての柱穴で柱痕跡が確認されており、径13~17cmの円形で、深さは60~80cmと深い。柱間は、西桁で北から3.2m・2.7m・2.5m、同じく東桁で3.0m・2.8m・2.5m、梁間は北梁で2.6m、南梁で3.0mである。

[周溝] 北辺とおよび西辺の北端に認められる。断面は逆台形状を呈し、上幅15~23cm、深さは3~6cmである。

[壁柱穴] 周溝の底面や住居北側両隅で、壁柱穴と考えられる直径10~40cmの円形や梢円形を呈す

るピット8個を検出している。深さは両隅のP1とP2が特に深く、ともに約40cm、他は周溝底面から3~18cmである。堆積土は、周溝・壁柱穴とともに、主に地山ブロックや炭化物を含む暗褐色粘質シルトである。

〔方向〕西側柱列でみると、北で東に約17°偏している。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SI 4 a ~ c 住居跡〕(図版18・19)

〔位置〕N-3・W-12 [確認面] 地山

〔重複〕SI 7~9・11・22住居跡等と重複し、そのいずれよりも古い。また、本住居跡は2度建て替えられており、拡張されている。古いものからSI 4 a~cとする。

《SI 4 a》

〔規模・平面形〕一辺約2.4mの正方形を呈する。

〔堆積土〕住居の北側にのみ残存しており、床面上に、暗褐色シルト質土が堆積している。住居機能時の汚れた土である。

〔壁〕北辺にのみ残存しており、地山を壁としている。周溝の底面からやや急激に立ち上がり、床面から高さ25cm程が残っている。

〔床〕地山を床面としており、北側がやや低いもののほぼ平坦である。

〔炉〕検出されなかった。

〔主柱穴〕確認はできなかったが、SI 4 cで検出したP1とほぼ同位置に存在した可能性が考えられる。

〔周溝〕南辺の一部を除き、ほぼ全周している。上幅10~14cm、深さ2~10cmで断面は「U」字状を呈する。

〔壁柱穴〕南辺を除く各辺の周溝の底面で、壁柱穴の残痕と考えられる直径12~16cmの円形を基調とする小ピット10個を検出している。深さは周溝底面から7~37cmある。ピットは周溝内を壁添いに巡るが、間隔は不規則で、東辺の分布密度が濃い。周溝・壁柱穴の堆積土は、主に地山粒を多く含む黒褐色砂質シルトである。

〔方向〕南北の軸線でみると、北で東に約2°偏している。

〔出土遺物〕出土していない。

《SI 4 b》

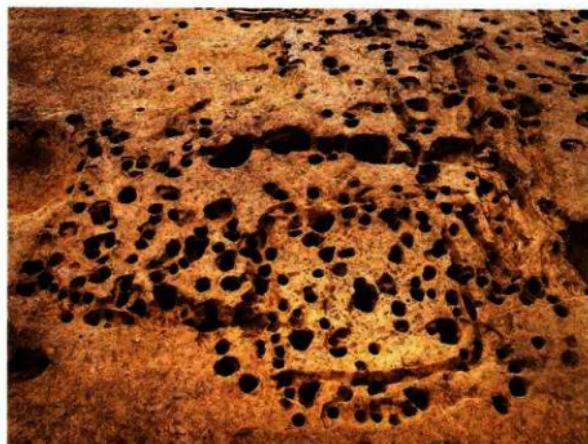
〔規模・平面形〕一辺約2.6mの正方形を呈する。

〔堆積土〕住居の北側にのみ残存しており、床面上に、砂質の褐色土が自然堆積している。

〔壁〕北辺と西辺北側にのみ残存しており、地山を壁としている。床面から緩やかに立ちあがり、高さ8cm程が残っている。

〔床〕北辺沿いにのみ残存しており、その範囲では平坦である。SI 4 aの堆積土上に、地山起源の褐色砂質シルトを、厚さ1cm前後貼って床面としている。

〔炉〕検出されなかった。



図版19 SI 4・7～9・11・22住居跡(北から)

【主柱穴】確認はできなかったが、SI 4 cで検出したP 1とほぼ同位置に存在した可能性が考えられる。

【周溝】東辺と南辺の一部に残存しており、東辺南部には壁材痕跡と考えられる織りのない黒褐色土の分布が認められる。壁の残存している北辺と西辺には認められない。上幅10～15cm、深さは2～10cmで断面は「U」字状を呈する。

【壁柱穴】南・西辺で、壁柱穴と考えられる直径16cm前後の、円形を基調とする小ビット4個を検出している。深さは18～33cmである。堆積土は、炭化物や地山粒が多く含む暗褐色砂質シルトである。

【方向】南北の軸線でみると、ほぼ真北方向である。

【出土遺物】出土していない。

《SI 4 c》

【規模・平面形】一辺約3.1mの正方形を呈する。

【堆積土】住居の北側にのみ残存しており、床面上に、砂質の黒褐色土が自然堆積している。

【壁】残存していない。

【床】北辺沿いにのみ残存しており、その範囲では平坦である。SI 4 bの堆積土上に、地山起源の褐色砂質シルトを、厚さ2～3cm貼って床面としている。

【炉】検出されなかった。

【主柱穴】床面が残存しないため掘込み面は不明であるが、住居のほぼ中央でビットを1個(P 1)検出しておおり、位置的に本住居跡の主柱穴である可能性が考えられる。平面形は長軸35cm、短軸28cm程の楕円形を呈し、検出面からの深さは83cmである。なお、断面形は漏斗状になっており、柱は抜き取られたものと考えられる。

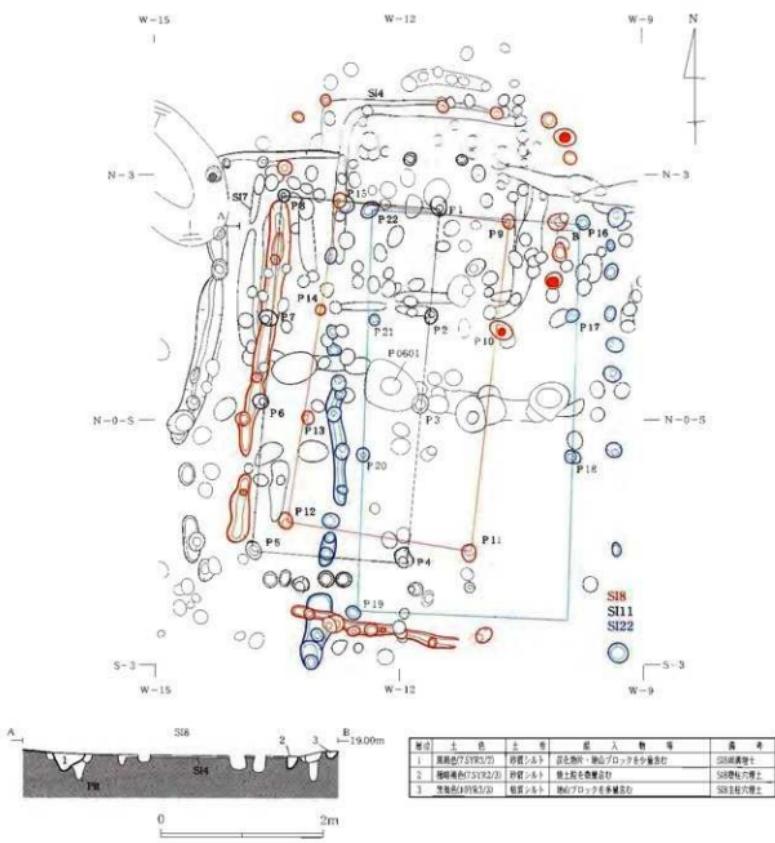
【周溝】東辺と北・西辺の一部に認められる。上幅12~30cm、深さは3~17cmで断面は「U」字状を呈する。

【壁柱穴】周溝を掘り上げた段階で、壁柱穴と考えられる、直径8~20cmの円形や、長軸25cm前後、短軸15cm前後の楕円形を呈する小ピット21個を検出している。深さは周溝底面から4~25cm前後ある。間隔は不規則で、北・東辺の分布密度が濃い。堆積土は周溝・壁柱穴いずれも炭化物や地山粒を多く含む暗褐色沙質シルトである。

【方向】南北の軸線でみると、ほぼ真北方向である。

【出土遺物】堆積土等から地文のみの繩文土器胴部破片が極少量出土している。

【SI 7 住居跡】(図版18・19)



図版20 SI 8・11・22住居跡

【位置】 N – 2 • W – 12 [確認面] 地山

【重複】 SI 4 • 8 • 9 • 11 • 22 住居跡、P 0601等と重複し、SI 4 • 9 より新しく、SI 8 • 11 • 22、P 0601よりも古い。

【規模・平面形】 東西約3.4m×南北約2.9mの正方形を呈する。

【堆積土・壁・床】 残存していない。

【炉】 検出されなかった。

【主柱穴】 床面が残存しないため掘込み面は不明であるが、住居のほぼ中央でビットを1個検出しておる(P 2)、位置的に本住居跡の主柱穴である可能性が考えられる。平面形は長軸20cm、短軸15cmの楕円形を呈し、深さは24cmである。

【周溝】 南・西辺の一部に認められる。上幅7~19cm、深さは2~17cmで断面は「U」字状を呈する。

【壁柱穴】 周溝底面や北・東辺沿いで、壁柱穴と考えられる直径15~22cmの円形や、長軸30cm前後、短軸20cm前後の楕円形を呈する小ビットを16個検出している。残存する深さは13~49cmである。間隔は5cm~105cmと不規則で、比較的東辺の分布密度が濃い。堆積土は周溝・壁柱穴いずれも地山粒を多く含む暗褐色砂質シルトである。

【方向】 南北の軸線でみると、ほぼ真北方向である。

【出土遺物】 壁柱穴から地文のみの繩文土器胴部破片が極少量出土している。

【SI 8 住居跡】 (図版20)

【位置】 N – 0 – S • W – 12 [確認面] 地山

【重複】 SI 4 • 7 • 11 • 22 等と重複し、SI 4 • 7 • 22 より新しく、SI 11 より古い。

【規模・平面形】 東西約3.6m×南北約6.7mの長方形を呈する。

【堆積土・壁・床面】 残存しない。

【炉】 検出されなかった。

【主柱穴】 住居内には壁柱穴の他に大小多数のビットがある。この内、長軸線と平行し、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP 9~11、P 12~15が主柱穴と考えられる。平面形は直径15~20cmの円形や長軸が20~30cmの楕円形を呈し、深さは18~36cmである。これらの内、柱痕跡のわかるものは1個あり、平面形は直径10cmの円形である。柱間寸法は、長辺(3間)が西側柱列で北から約1.3m等間、短辺(1間)が北側柱列で約2.1mである。

【周溝】 西・南辺に認められる。幅10~28cm、深さ4~25cmで断面は「U」字状を呈する。

【壁柱穴】 23個を検出した。直径8~25cmの円形や長軸13~30cmの楕円形を呈し、深さは9~34cm残存している。間隔は不規則で、東・南辺の分布密度が比較的濃い。これらの内、柱痕跡のわかるものは2個あり、平面形は直径15cmの円形や長軸15cm、短軸10cmの楕円形である。

【方向】 長軸線でみると、北で東に約9°偏している。

【出土遺物】 壁柱穴から地文のみの繩文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI 11 住居跡】 (図版19・20)

【位置】 N – 0 – S • W – 12 [確認面] 地山。

- [重複] SI 4・7・8・22等と重複し、全ての遺構より新しい。
- [規模・平面形] 東西約3.7m×南北約5.4mの長方形を呈する。
- [堆積土] 北西のみに認められる。堆積土は1層で暗褐色砂質シルトの自然堆積層である。
- [壁・床面] 北西部のみ残存する。地山を床としており、壁は8cm程残存し、やや緩やかに立ち上がっている。
- [炉] 検出されなかった。
- [主柱穴] 住居内には壁柱穴の他に大小多数のビットがある。この内、長軸線と平行し、軸線を挟んではほぼ対称に位置するP 1~4、P 5~8が主柱穴と考えられる。平面形は長軸が18~28cmの不整円形もしくは楕円形を呈し、深さは21~42cmある。柱間寸法は、長辺(3間)が東側柱列で北から約1.3m・約1.1m・約1.9m、短辺(1間)が北側柱列で約1.9mである。
- [周溝] 西辺に一部認められる。幅23~30cm、深さ3~13cmで断面は「U」字状を呈する。
- [壁柱穴] 21個検出している。平面形は直径8~30cmの円形を基調とし、深さは9~43cm残存している。間隔は不規則で、南辺の分布密度が濃い。これらの内、柱痕跡のわかるものは3個あり、平面形は直径10cm程の円形や不整円形である。
- [方向] 長軸線でみると、北で東に約5°偏している。
- [出土遺物] 出土していない。
- 【SI22住居跡】(図版20)
- [位置] N-0-S・W-12 [確認面] 地山。
- [重複] SI 4・7~9・11住居跡等と重複し、SI 4・7・9より新しく、SI 8・11より古い。
- [規模・平面形] 東西約3.6m×南北約5.8mの長方形を呈する。住居は全体に削平されており、壁・堆積土は残存しない。
- [堆積土・壁・床]] 残存しない。
- [炉] 検出されなかった。
- [主柱穴] 住居内には壁柱穴の他に大小多数のビットがある。この内、長軸線と平行し、軸線を挟んではほぼ対称に位置するP 16~18、P 19~22が主柱穴と考えられる。平面形は直径15cm前後の円形や長軸が13~25cmの楕円形を呈し、深さは14~39cmある。柱間寸法は、長辺(3間)が西側柱列で北から約1.3m・約1.7m・約1.9m、短辺(1間)が北側柱列で約2.6mである。
- [周溝] 西辺に一部認められる。幅13~17cm、深さ5~11cmで断面は「U」字状を呈する。
- [壁柱穴] 23個検出した。平面形は直径10~20cmの円形を基調とし、深さは11~47cm残存している。間隔は不規則で、東・西辺の分布密度が比較的濃い。
- [方向] 長軸線でみると、北で東に約3°偏している。
- [出土遺物] 主柱穴埋土から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。
- 【SI 9 a~c 住居跡】(図版19・21)
- [位置] N-2・W-9 [確認面] 地山
- [重複] SI 4・7・8・22住居跡等と重複し、SI 7・8・22より古く、SI 4より新しい。削平によ

り、北東部の周溝、壁柱穴のみが残存しており、平面形・規模やその他の詳細は不明である。また、本住跡は2度建て替えられており、東辺の内側から外側へSI 9 a～cとする。新旧関係はcが最も古く、aとbの関係は不明である。

《SI 9 a》

【周溝】上幅14～15cm、深さ2～5cmで断面は「U」字状を呈する。

【壁柱穴】8個検出している。平面形は径11～17cmの円形や長軸19～24cmの楕円形で、深さは30～42cmである。

【方向】東辺でみると、北で東に約12°偏している。

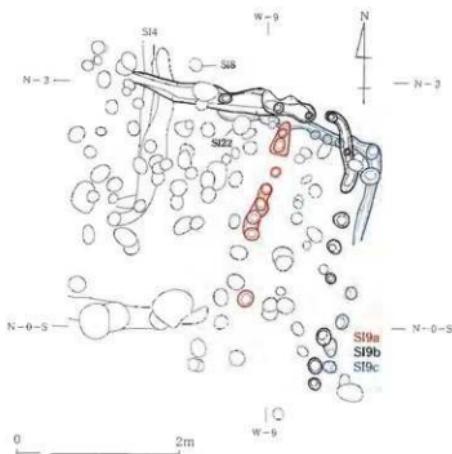
【出土遺物】出土していない。

《SI 9 b》

【周溝】上幅13～28cm、深さ5～19cmで断面は「U」字状を呈する。

【壁柱穴】11個検出している。平面形は直径8～21cmの円形や長軸16～23cmの楕円形で、深さは10～38cmである。

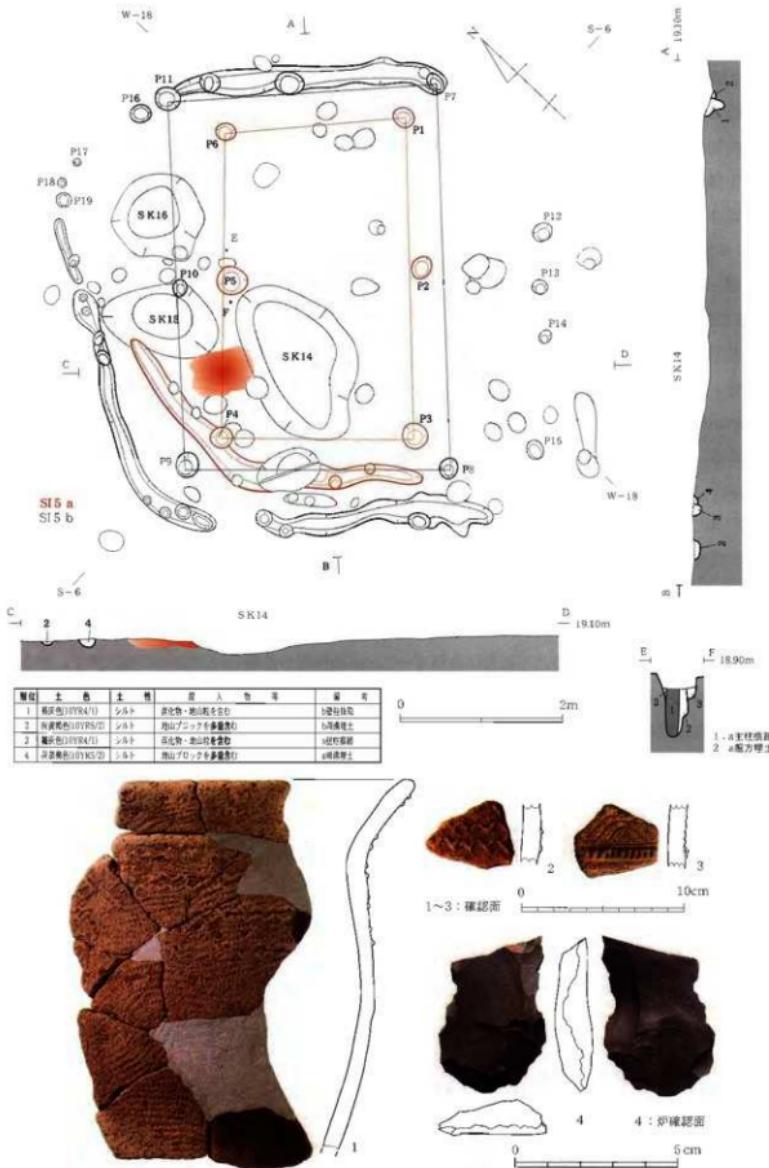
【方向】東辺でみると、北で東に約9°偏している。



図版21 SI 9 住居跡



図版22 SI 5 住居跡(北東から)



図版23 SI 5 住居跡および出土遺物

【出土遺物】出土していない。

《SI 9 c》

【周溝】上幅12~14cm、深さ3~15cmで断面は「U」字状を呈する。

【壁柱穴】10個検出している。平面形は径10~18cmの円形や長軸25~28cmの梢円形で、深さは18~39cmである。

【方向】東辺でみると、北で東に約12°偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SI 5 a・b住居跡】(図版22・23)

【位置】N-6・W-18【確認面】地山で、北側へ傾斜している。

【重複】SK14~16・123土壤と重複しており、SK14・15・123より古い。SK16との新旧関係は不明である。

【規模・平面形】住居は全体に削平されており、壁・堆積土は残存しない。残された周溝・主柱穴の状況から建て替えが行われていることが窺われるが、詳細は不明である。残存する炉が外側の住居に伴うとみられることから、外側へ拡張改築されている可能性が強い。内側の住居は東西2.8m以上×南北約5.2m、外側の住居は東西約5.8m×南北約5.8mで、いずれも隅丸の方形を基調としている。内側の住居をSI5 a、外側の住居をSI5 bとする。

【床】削平されているため詳細は不明であるが、炉周辺の様子から地山を床としていたと思われる。

【炉】南西部で1ヶ所焼け面を検出しており、その位置からみて外側の住居に伴うものと思われる。焼け面は90cm×55cmの不整な隅丸長方形を呈し、地床炉と考えられる。

【主柱穴】住居内には壁柱穴の他に大小40数個のピットがある。この内、長軸線と平行し、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP1~3、7・8とP4~6、P9~11は主柱穴と考えられる。P1~6はSI5 a、P7~11はSI5 bに伴うもので、P2はSI5 bでもそのまま用いられていた可能性がある。平面形は長軸が20~40cmの不整な円形もしくは梢円形を呈し、深さは30~60cmある。柱間寸法は内側の住居で、長辺(2間)約1.8~2.1m、短辺(1間)約2.2~2.4m、外側の住居で、長辺(2間)約2.0~2.4m、短辺(1間)約3.2mである。

【周溝】周溝は南辺から西辺にかけ断続して2重に巡り、北辺でも1条検出されている。上幅12~35cm、深さ5cm前後で、断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する。堆積土は地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで、縮まりもあることから埋め戻されていたとみられる。なお、北辺の溝については内外どちらの住居に伴うか明らかでない。

【壁柱穴】内外の周溝外面では壁柱穴と考えられる長軸10~30cmの不整な円形もしくは梢円形を呈するピット16個を検出している。深さは10~30cmで、周溝底面よりも下がる。ピットは周溝内を巡るが、配置は不規則である。更に、P12~19についても周溝の延長上や住居平面形の推定線上に位置することから、壁柱穴の可能性があるものと考えられる。

【方向】長軸線でみると、北で東に約44°偏している。

【出土遺物】確認面から縄文土器深鉢の破片が少量出土しており、炉の周辺からは不定形石器も出土



SI18住居跡(南西から)



西侧周溝



東側周溝



主柱穴(P.1)



西侧周溝断面



東側周溝断面

図版24 SI18住居跡(1)

している(図版23)。

【SI18住居跡】(図版24・25・27)

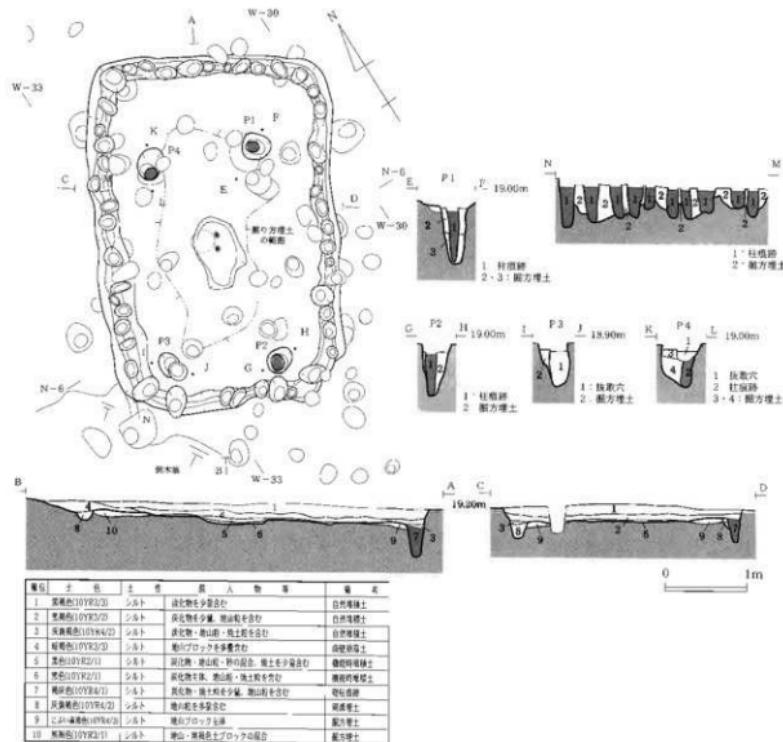
【位置】N-6・W-30 [確認面] 地山で、北側へ緩やかに傾斜している。

【重複】SI21住居跡、倒木痕と重複しており、いずれよりも新しい。

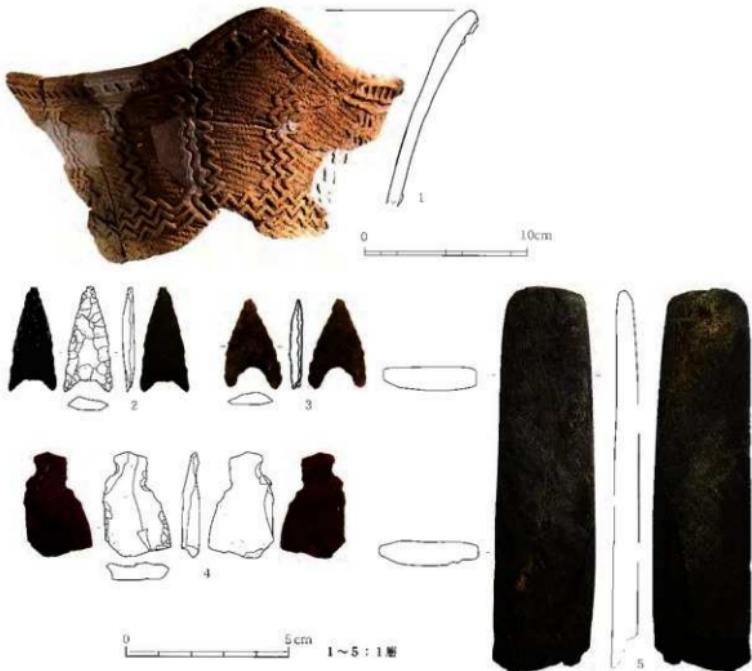
【規模・平面形】東西2.8m×南北4.3mの隅丸長方形を呈する。

【堆積土】6層認められる。1～3層は自然流入土、4層は住居南壁の崩落土である。5層は炉の附近を中心に床面直上に分布し、炭化物と地山(ローム)・砂の小ブロックが混入する黒色土で、人為堆積土とみられる。6層は炉の部分に堆積した焼土混じりの薄い炭化物層で、炉機能時の堆積と考えられる。

【壁】基本的に地山を壁としている。壁は住居外側へやや開き気味に立ち上がり、壁高は残りの良い北・西の壁で床面から20cm程ある。なお、南壁は大きく崩落している。



図版25 SI18住居跡(2)



図版26 S18住居跡出土遺物—縄文土器・石器・石製品—

[床] 中央部では地山、周辺部では掘方埋土を床としている。床面にはやや凹凸があり、四方の壁際が若干「八」字状に下がる。また、全体としては北西方向へ緩やかに傾斜しており、中央の地山部分は硬化が著しい。

[炉] 住居中央部の床面に皿状の窪みが認められる。平面形は90cm×55cmの不整な楕円形を呈し、深さは8cm程である。その底面には10cm×8cmの不整形を呈する小さな焼け面が2ヶ所残っており、この部分が炉と考えられる。

[主柱穴] 住居内には大小20数個の柱穴・ピットがある。この内、床面で検出されたP 1～4はやや南へ寄るが、住居平面形の対角線上に位置しており、主柱穴と考えられる。P 1・2・4では柱痕跡、P 3・4では柱抜き取り痕を検出している。柱穴の平面形は長軸が35～40cmの不整な隅丸長方形もしくは楕円形を呈し、深さは50～75cmで、底面に向かって窄まる傾向にある。P 1・2とP 4下部に認められる柱痕跡は長軸15～20cmの円形もしくは楕円形を呈する。柱間寸法は長辺で2.5m前後、短辺で1.3mである。

[周溝] 壁の直下を全周している。上幅14～36cm、深さ5～46cmで、縦断面を見ても分かるように底面の凹凸が著しい。横断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈し、北・西辺、特に西辺の溝



図版27 SI18・21住居跡(南西から)

が深くなる傾向にある。堆積土は地山小ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで、締まりもあることから埋め戻されていたとみられる。

【壁柱穴】周溝上面では壁柱穴と考えられる長軸10~38cmの不整な円形もしくは精円形を呈するピット48個を検出している。深さは15~70cmで、周溝底面よりも下がるもののが殆どである。ピットは周溝内をほぼ連続して巡るが、南辺にやや少ない。四隅付近と西辺に深さ40cm以上のものが多く、他よりも深くなる傾向にある。

【方向】長軸線でみると、北で東に約26° 傾いている。

【出土遺物】堆積土や確認面から縄文土器深鉢の破片(図版26-1)や石礫(図版26-2・3)、石匙(4)、石劍(5)、土偶(図版428)が出土している。

【SI21住居跡】(図版27・28)

【位置】N-6・W-30【確認面】地山で、北側へ緩やかに傾斜している。

【重複】SI13・18・44・447住居跡、SB131掘立柱建物跡、SD10溝跡、SK26・136土壤、倒木痕2ヶ所と重複している。SB131よりも新しく、SI13・18・447、SD10、倒木痕2ヶ所よりも古い。他の遺構との新旧関係は不明である。

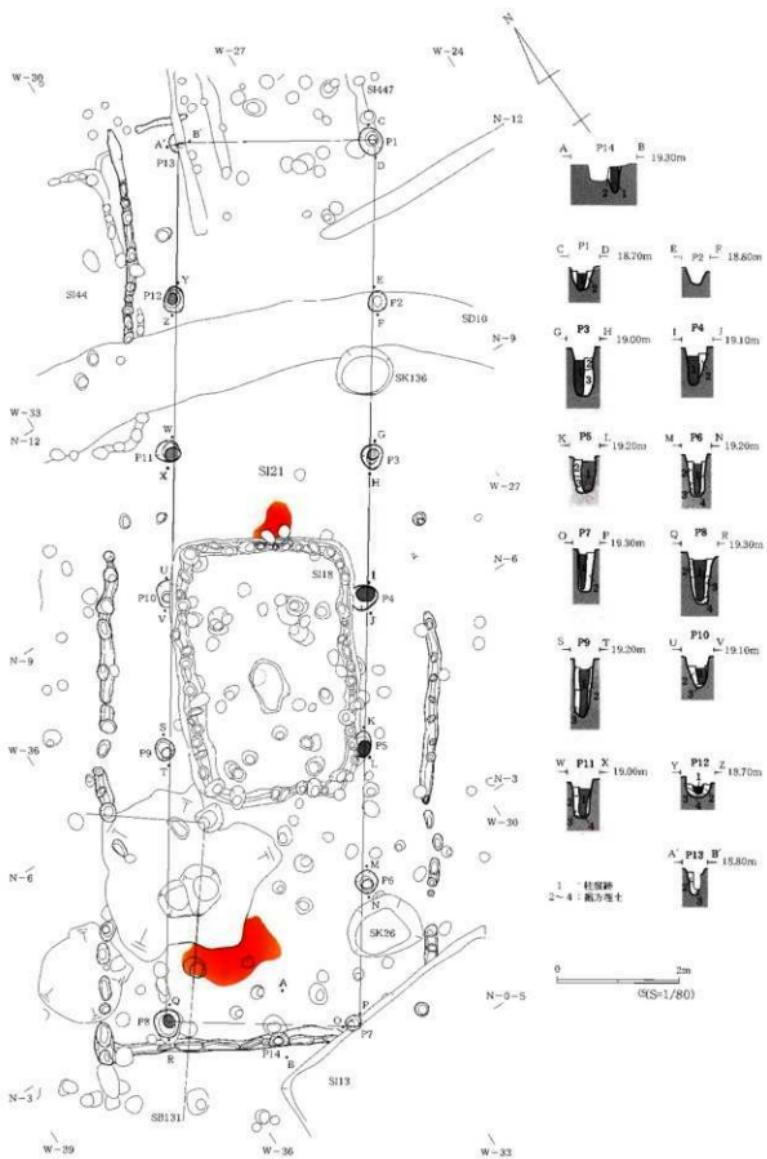
【規模・平面形】東西約5.5m×南北15.3mで、長方形を基調としている。

【堆積土・壁】残存しない。

【床】削平されているため詳細は不明であるが、2ヶ所に残る炉周辺の様子から地山を床としていたと思われる。また、焼け面間の比高差から北側へ傾斜していたことも窺われる。

【炉】長軸線上で2ヶ所焼け面を検出している。双方とも地床炉で、他の遺構や倒木痕によって壊されている。北側のものは60cm以上×55cmの住居長軸方向に長い不整形を呈し、P 3・4・10・11に囲まれた範囲のほぼ中央に位置する。南側のものは160cm×90cmの住居短軸方向に長い不整形を呈し、P 6~8に囲まれた範囲の中央やや西寄りに位置している。

【主柱穴】住居内には大小100個以上のピットがある。この内、長軸線と平行し、軸線を挟んではば



図版28 SI21住居跡

対称に位置するP 1～13が主柱穴と考えられる。P 2・13以外では柱痕跡もしくは柱抜き取り痕を検出している。掘方の平面形は長軸が30～45cmの不整な円形もしくは楕円形を呈し、深さは30～95cmで、底面に向かって窄まる傾向にある。深さ60cm前後のものが多い。柱痕跡は長軸15～20cmの円形もしくは楕円形を呈する。柱間寸法は長辺で2.2～2.6m、短辺で3.1m前後である。

【周溝】部分的に途切れるが各辺で検出した。上幅10～30cm、深さ3～10cmで、断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する。堆積土は主に地山小ブロックを多く含む暗褐色の粘土質シルトで、埋め戻されている。

【壁柱穴・壁材】東西の周溝上面もしくはその延長上では壁柱穴と考えられる長軸10～40cmの不整な円形もしくは楕円形を呈するピット40数個を、南辺の周溝上面では壁材の痕跡と考えられる長さ15～60cm、幅8～15cm単位の黒褐色の堆積土をそれぞれ検出している。深さは5～50cmで、いずれも周溝底面より下がる。ピットは深さ10cm前後のものが主体であるが、西辺には2.2～2.8mの間隔で深さ40cm以上のものが配されており、その位置は主柱穴のほぼ西脇にあたる。南辺中央に位置するP 14は深さ45cmで、30cm×12cmの楕円形を呈する柱痕跡が検出されている。

【方向】長軸線でみると、北で東に約33°偏している。

【出土遺物】確認面から、地文のみの繩文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI44住居跡】(図版29・30)

【位置】N-12・W-33 [確認面] 地山で、北側へ緩やかに傾斜している。

【重複】SI21住居跡、SD10溝跡と重複し、SD10よりも古い。SI21との新旧関係は不明である。

【規模・平面形】東西約3.2m×南北約4.6mの隅丸長方形を呈する。

【堆積土】全体に削平されており、殆ど残存しないが、炉の周囲が若干窪み、この部分にわずかに残存する。

【壁】残存しない。また、南辺はSD10溝跡によって大きく壊されている。

【床】削平のため詳細は不明であるが、炉付近は浅く窪んでおり、この周辺のみ床が残存する。これらの部分的状況から地山を床としていたと思われる。

【炉】P 1～4に埋れた長軸線上のやや南寄りに小さな焼け面が連続して2ヶ所認められる。平面形は20cm×20cm・60cm×20cmの不整形で、焼け面とその周辺が浅く窪んでいる。地床炉と考えられ地山が硬く締まっており、若干の凹凸も認められる。

【主柱穴】住居内には壁柱穴の他に大小17個のピットがある。この内、長軸線と平行し、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP 1・2、P 3・4は主柱穴と考えられる。P 3には柱痕跡、P 1・2の底面には柱押圧痕が残る。掘方の平面形は長軸が25～35cmの不整な隅丸長方形もしくは楕円形を呈し、深さは25～70cmである。底面に向かって窄まり、東側の柱列が深くなる傾向にある。柱痕跡は長軸20cm前後の円形もしくは楕円形を呈する。柱間寸法は長辺で1.5m前後、短辺1.6m前後である。

【周溝】周溝は各辺で断続的に検出されている。上幅10～18cm、深さ4～12cmで、断面は「U」字状を呈する。堆積土は地山小ブロックを多く含む暗褐色の砂質シルトで、縦まりもあることから埋

め戻されていたとみられる。

【壁柱穴】周溝上面もしくはその延長上では壁柱穴と考えられる長軸10~25cmの不整な円形もしくは梢円形を呈するピット29個を検出している。ピットは周溝内を巡り、西辺では密に並ぶ。深さは15cm前後のものが主体で、いずれも周溝底面よりも下るが、南東・南西隅のP5・6と南辺中央のP7は深さ30cm以上と他よりも深くなっている。

【方向】長軸線でみると、北で東に約20°偏している。

【出土遺物】堆積土から石鐵が出土している(図版30-1)。

【SI447a・b住居跡】(図版29・30)

【位置】N-15・W-27【確認面】地山で、北側へ緩やかに傾斜している。

【重複】SI21住居跡と重複し、これより新しい。また、本住居跡は一度建て替えられている。古いものからSI447a・bとする。

《SI447a》

【規模・平面形】東西約2.6m×南北約4.0mの隅丸長方形である。

【床】地山を床面としている。

【炉】住居はほぼ中央部で、径約14cmの不整円形の焼け面を1ヶ所検出した。地床炉で、焼け面周辺が長軸約90cm、短軸約50センチの梢円形状に10cm程窪んでいる。他に焼け面等は検出されておらず、SI447bまで継続して使用されたと考えられる。

【主柱穴】2個検出した。本来は炉を取り囲むように東西1間×南北1間で並んでいたものと考えられるが、北側は水道管理設による攪乱溝で壊されている。南側柱間寸法は1.6mである。柱穴は径約25cmの円形や長軸38cm、短軸24cmの梢円形で、深さは55~60cmである。柱痕跡は直徑約18cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山粒を小量含む暗褐色シルト、柱痕跡が炭化物粒、地山粒を少量含む暗褐色シルトである。

【周溝】東西辺で検出している。北東隅を除き、確認のみの調査である。南北辺については削平により、残存しない。幅10~25cmで、堆積土は地山粒を含む暗褐色シルトである。

【壁柱穴】南辺で5個、北東隅で3個の計8個検出した。東西各辺は確認のみの調査のため詳細は不明である。柱穴は直徑12~30cmの円形ないしは不整円形で、深さは15~36cmである。堆積土は地山粒を含む暗褐色シルトである。

【方向】東側主柱列でみると、北で東に約24°偏している。

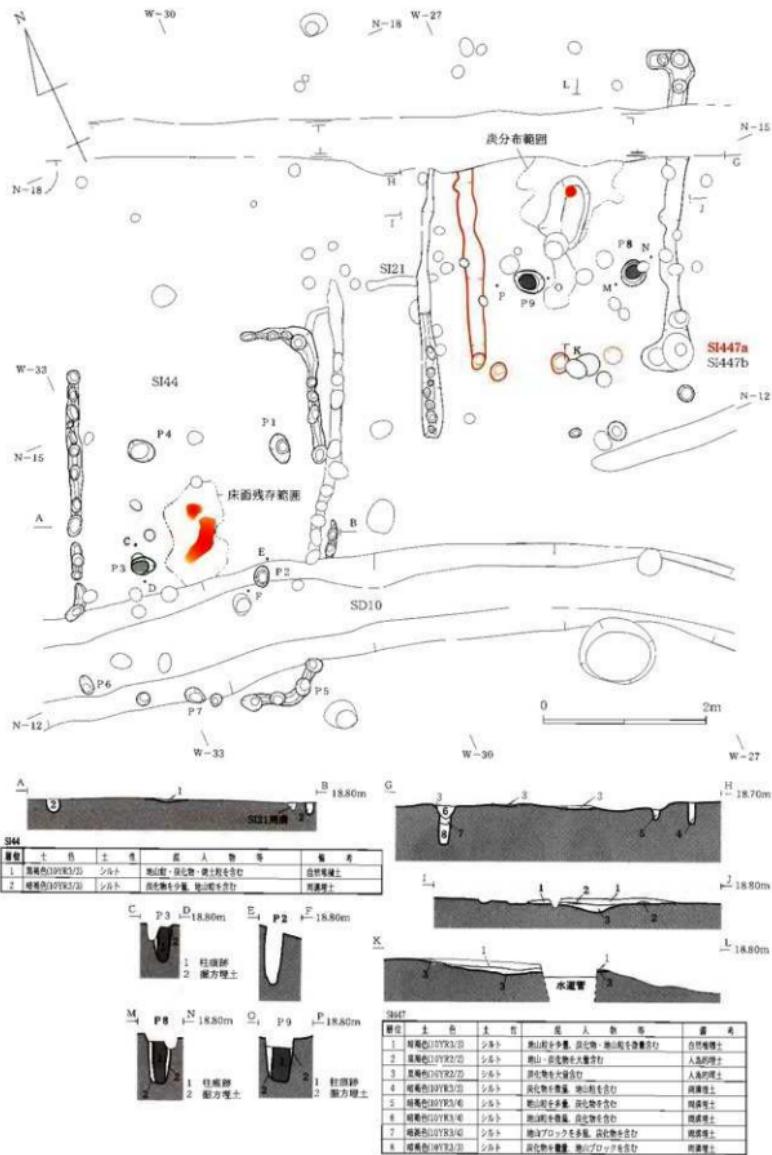
【出土遺物】出土していない。

《SI447b》

【規模・平面形】SI447aの西・南各辺を拡張して立て替えられており、西辺は約60cm、南辺は約100cm拡張されている。東西約3.2m×南北約5.0mの隅丸長方形である。

【堆積土】3層確認された。住居中央部の壠みにのみ残存しており、第1層は暗褐色シルトの自然堆積層、2・3層は炉の周囲に分布する炭を多量含む黒褐色シルトで、住居機能時の堆積土である。

【壁】残存していない。



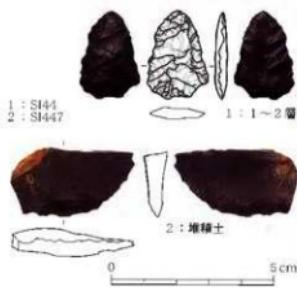
図版29 SI44・447住居跡



SI44住居跡(北東から)



SI447住居跡(南西から)

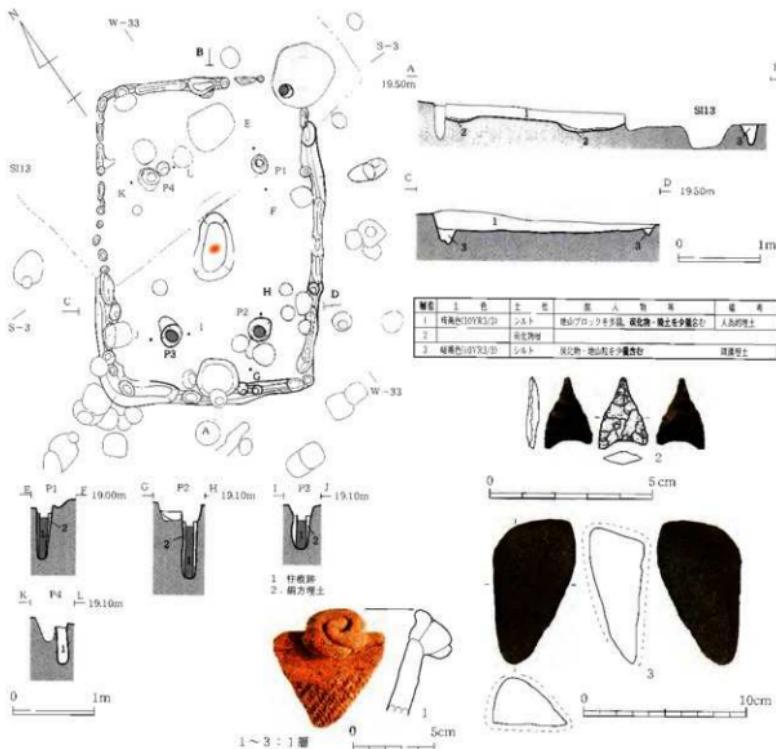


SI447堆積土断面

図版30 SI44・447住居跡および出土遺物－石器－

- 【床】 SI447 a と同一面を床としており、床面は地山である。
- 【炉】 SI447 a から継続して使用されたと考えられる。
- 【主柱穴】 SI447 a の主柱をそのまま使用していたと考えられる。
- 【周溝】 西辺のみ検出されており、南辺は削平により残存していない。上幅 6 ~ 26cm、下幅 5 ~ 8 cm、深さは 10cm 前後で、堆積土は地山粒、炭化物粒を少量含む暗褐色シルトである。
- 【壁柱穴】 南辺で 3 個、西辺南半で 7 個の計 10 個検出した。西辺北半は確認のみの調査で詳細は不明である。平面形は直径 8 ~ 23cm の円形や不整円形で深さは 10 ~ 21cm である。堆積土は地山粒、炭化物粒を少量含む暗褐色シルトである。
- 【方向】 西辺でみると、北で東に約 23° 傾している。
- 【出土遺物】 堆積土から不定形石器(図版 30-2)や、地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI20住居跡】(図版 31)



図版 31 SI20住居跡および出土遺物

【位置】 S - 4・W - 33 【確認面】 地山

【重複】 SI13住居跡・SB168掘立柱建物跡と重複し、SI13より古く、SB168より新しい。

【規模・平面形】 東西約2.8m×南北約4.0mの隅丸長方形である。

【堆積土】 地山ブロックや焼土、炭化物を含む暗褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

【壁】 最も残りの良い南西隅で高さ18cm程が残存し、やや斜めに立ち上がっている。

【床】 地山を床面としており、北西部はSI13により壊されている。

【炉】 住居中央で1ヶ所検出した。地床炉である。平面形は長径約85cm、短径約45cmの不整楕円形を呈し、深さ約10cmの浅い窪みで断面は皿状となっている。底面は中央の一部が直径5cm程赤変しているものの、硬化はしていない。また、底面直上には厚さ2~3cmの炭が堆積している。

【主柱穴】 P 1~4の4個検出した。床面のほぼ対角線上にあり、これらの内P 1~3の3個で柱痕跡を検出している。柱間寸法は東西1.1m前後、南北2.0m前後である。形態・規模は直径17~28cmの円形や長径約30cm、短径約23cmの楕円形等で、深さは62~93cmである。

【周溝・壁柱穴】 全辺で検出した。上幅8~25cm、下幅4~12cm、深さは9~40cmで、底面には凹凸があり、特に西辺中央部は深くなっている。また、所々に直径10cm前後の円形や長径15~35cm、短径10~20cmで楕円形の壁柱穴と考えられるピットの痕跡が検出されている。深さは5~15cmである。堆積土は地山、炭化物を粒状に含む暗褐色シルトである。

【その他の土壤】 南辺中央部にほぼ接するような位置で1ヶ所検出した。1辺50cm前後、深さ約7cmの隅丸方形を呈し、底面直上には炉と同様の炭が2~3cmの厚さで堆積している。但し、赤変や硬化の痕跡は認められない。

【方向】 東側柱列でみると、北で東に約36° 傾している。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器片(図版31-1)、石鎚(2)、砥石(3)が出土している。その他には確認面から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土したのみである。

【SI45 a・b 住居跡】 (図版32~35)

【位置】 N - 6・W - 45 【確認面】 地山

【重複】 SI47・86・96住居跡、SK59土壌、SD10溝跡等と重複し、SI86より新しく、SI47、SK59、SD10よりも古い。SI96との新旧関係は不明である。また、本住居跡は2度建て替えられており、拡張されている。古いものからSI45 a・bとする。

【SI45 a】

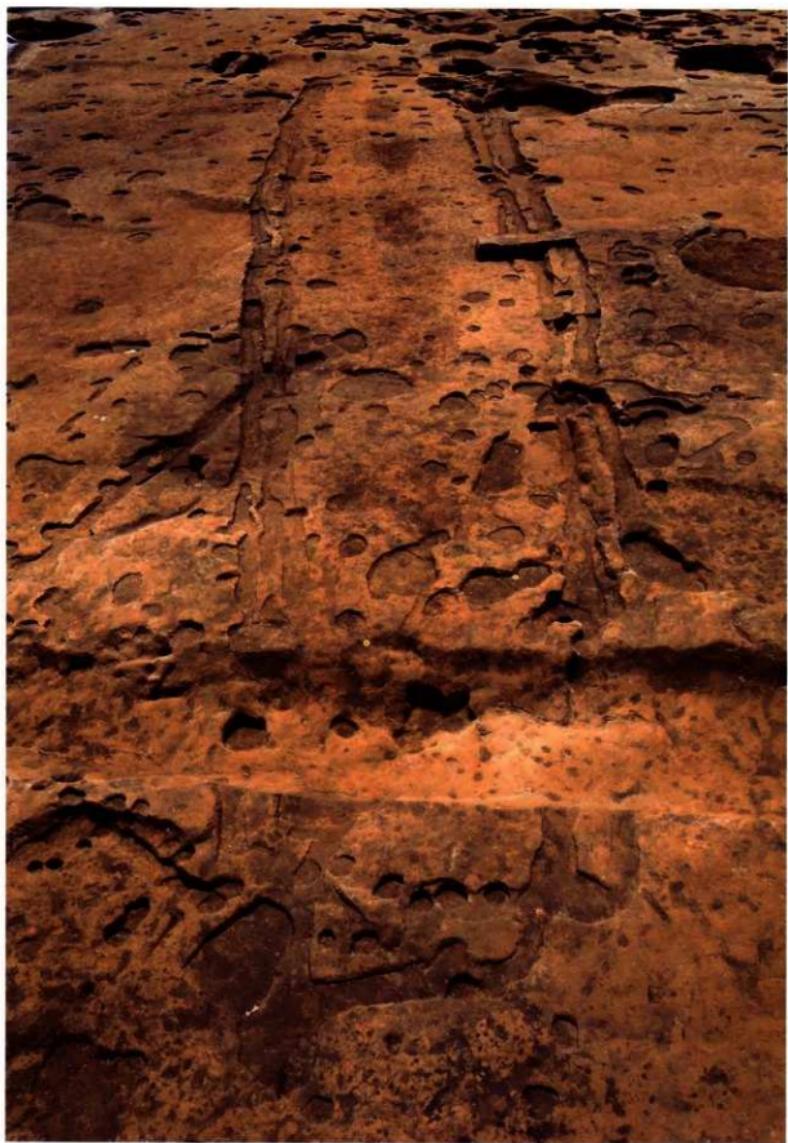
【規模・平面形】 北辺に角がつく長楕円形を呈する。規模は長軸18.0m、短軸は最大幅3.2mである。

【堆積土】 残存していない。

【壁】 西辺中央部から北側にのみ残存しており、最大高18cm、周溝底面からやや急激に立ち上がる。

【床】 周溝付近は掘り方理土を、中央部は地山を床面としている。床面にはやや凹凸があり、炉の周辺が若干低くなっている。また、長軸方向でみると、南半は水平であるが北半は北に傾斜しており、北端は南の床面よりも40cm低くなっている。

【炉】 床面には大きく6ヶ所の焼け面集中地点が認められる(Y 1~6)。Y 3以外は、強く火を受けて



図版32 SI45住居跡(1)－北から－



SI45堆積土(南西から)



炉跡Y5・6(南から)



東辺周溝石剣出土状況(南西から)

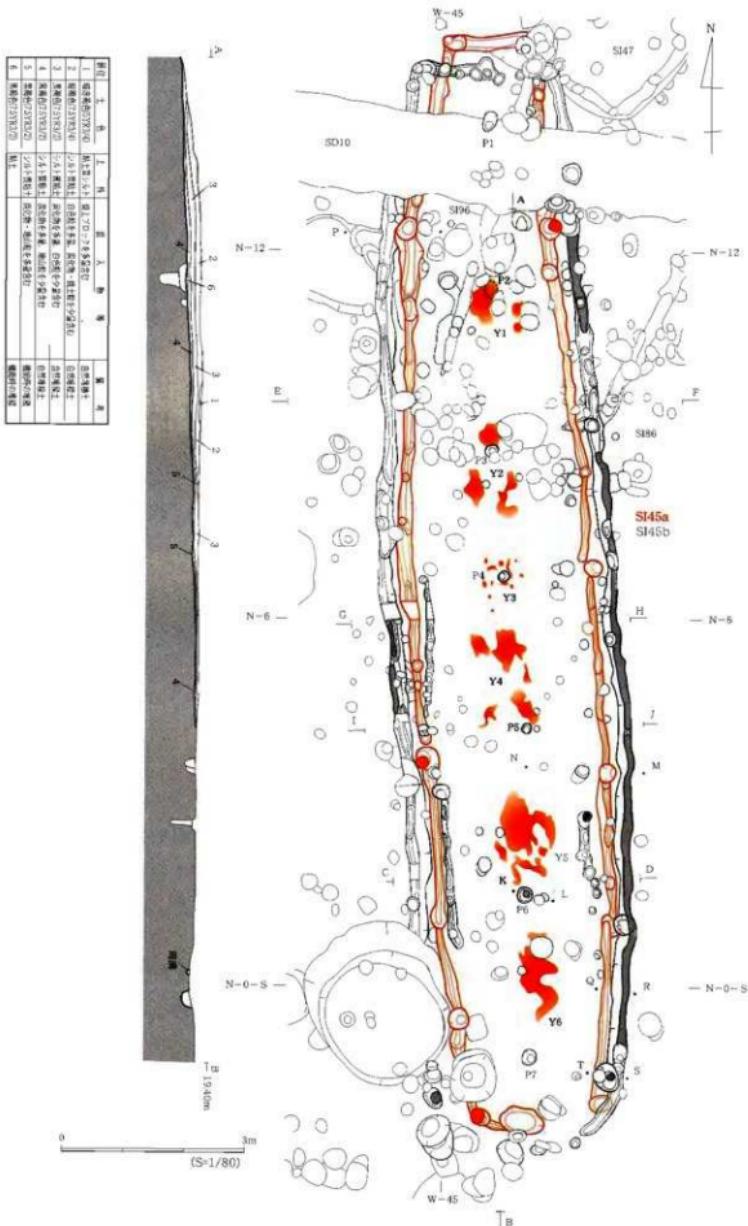


西辺周溝(南から)

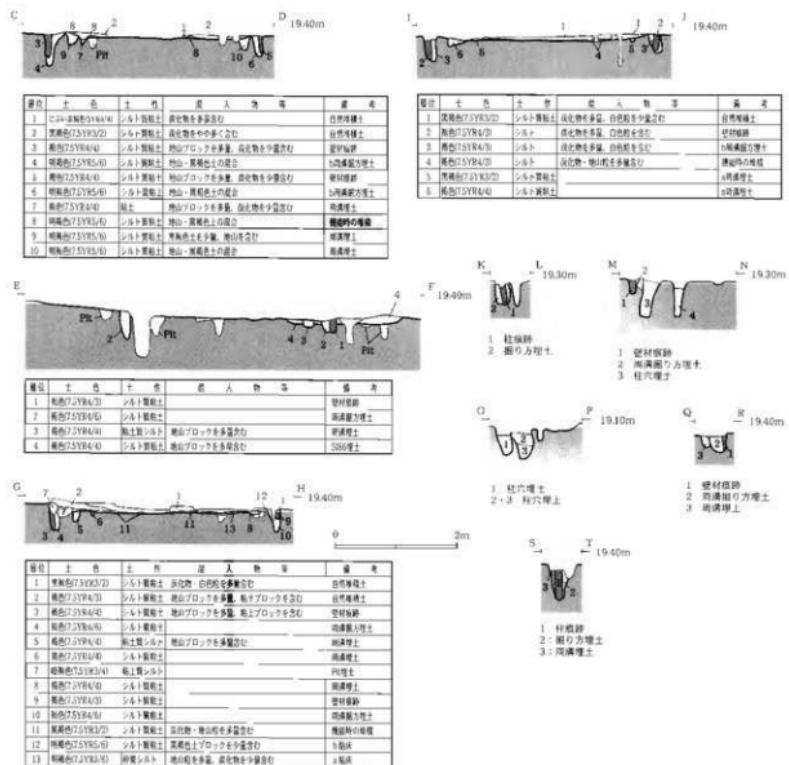


東辺周溝壁材痕跡(北から)

図版33 SI45住居跡(2)



図版34 SI45住居跡(3)

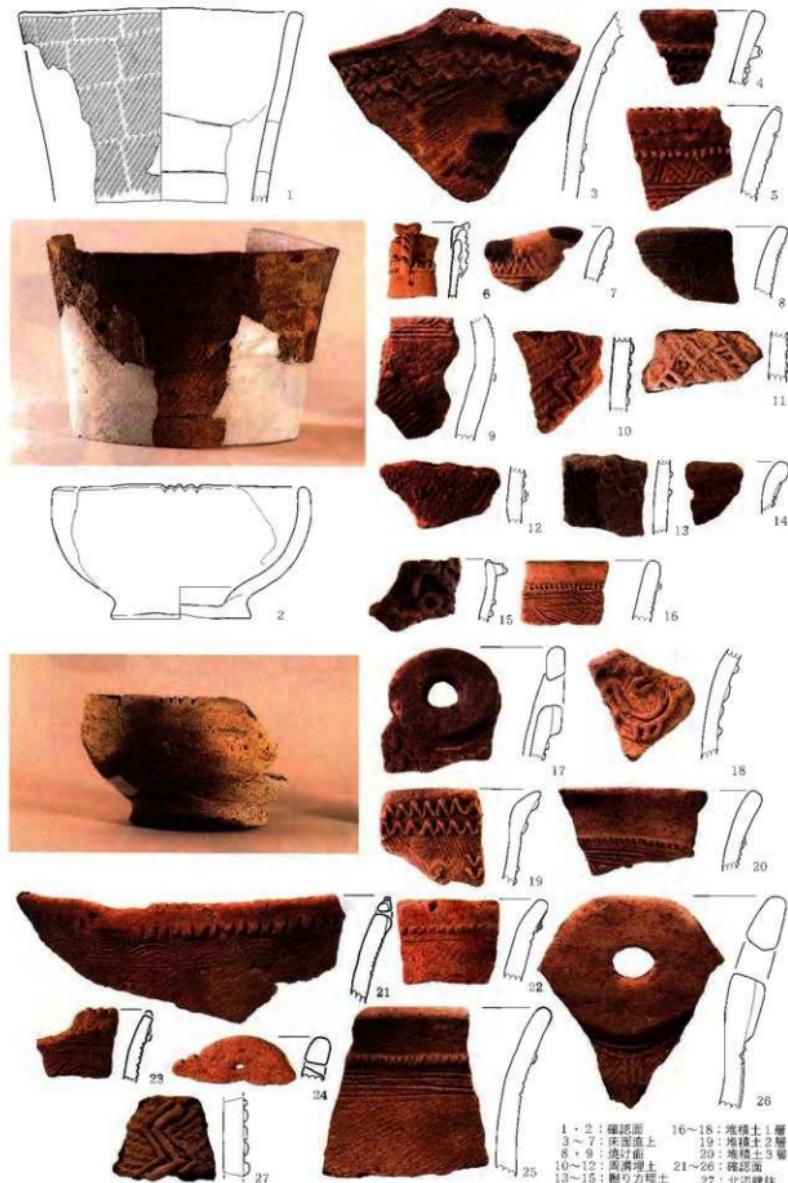


図版35 SI45住居跡(4)

堅く締まっており、長さ0.8～1.6m、幅0.7～1.0mの範囲に焼け面が広がっている。表面はほぼ平坦である。Y3は住居のほぼ中心に位置し、70×90cmの範囲にやや弱い焼け面が分布している。Y3を除いてY1・Y2・Y4・Y5・Y6の間隔は2.5～3.0mであり、間隔から推定すると、SD10溝跡によって壊されている部分に焼け面があった可能性が高い。

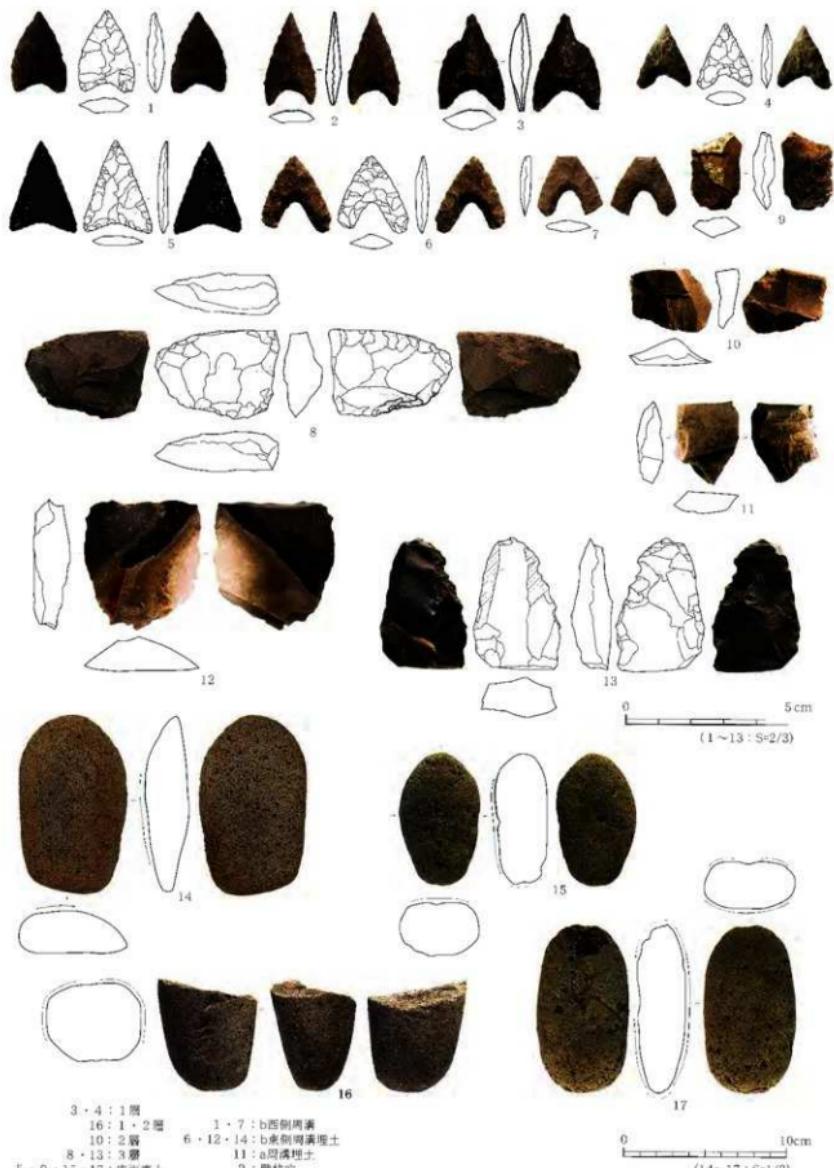
【主柱穴】住居内には多数のビットがある。この内、ほぼ長軸線上に位置するP1～7が主柱穴となる可能性が考えられるものの、焼け面に接するなど疑問な点も多く、住居との関係を明確にすることは出来なかった。

【周溝】壁際をほぼ全周するが、南北辺は痕跡的に認められるのみである。断面は逆台形を基調とし、場所によっては「U」字状を呈して外側の壁がオーバーハングする部分も見られる。上幅は10～20cm、深さは3cm～23cmで、深さは平均すると20cm前後である。また、東西両辺の中央部を中心、断続的に5～40cmの長さで底面よりもさらに1～11cm深い部分が認められる。西辺よりも

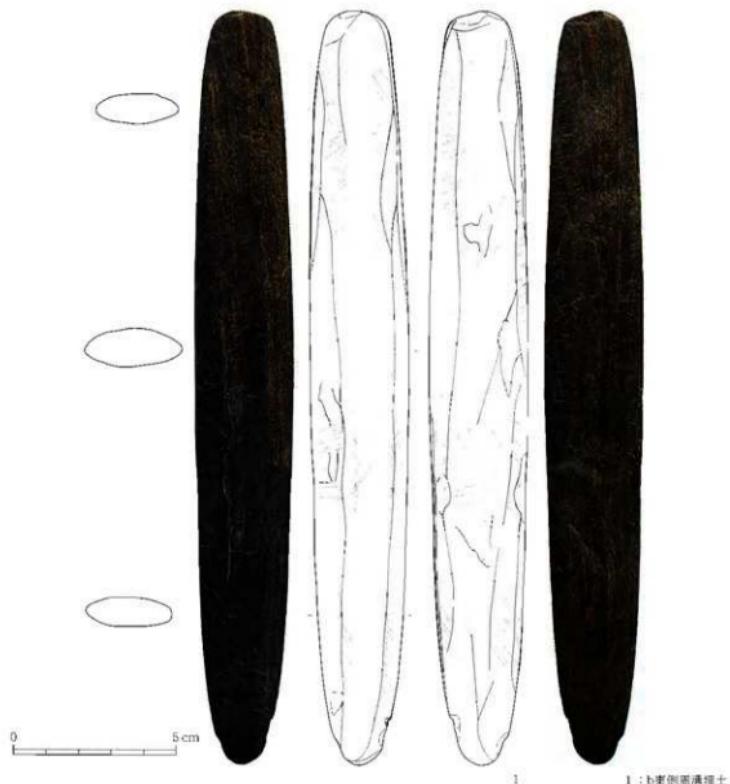


图版36 Si45住居跡出土遺物—繩文土器—

1·2: 碓説面 16~18: 堆積土1層
 3~7: 床面直上 19: 堆積土2層
 8·9: 浸計面 20: 堆積土3層
 10~12: 隅溝埋土 21~26: 碓説面
 13~15: 繩り方程土 27: 北邊壁柱



图版37 SI45住居跡出土遺物—石器—



図版38 SI45住居跡出土遺物－石製品－

東辺が深い傾向があり、特に東辺北側は深い。

[壁柱穴] 20個検出した。柱穴は径10~35cmの不整円形や不整楕円形を基調としており、深さは30~72cmである。堆積土は、主に地山ブロックや炭化物を含む褐色砂質シルトである。

[方向] 東辺駆柱隅柱でみると、北で西に約4° 傾している。

[出土遺物] 周溝等から地文のみの縄文土器の口縁部や肩部破片が少量出土している。

《SI45 b》

[規模・平面形] 北辺に角がつく長楕円形を呈する。規模は長軸17.6m×短軸最大幅3.9mである。

[堆積土] 堆積土は6層で、1~4層が暗褐色~黒褐色のシルト質粘土の自然堆積層、5層は住居機能時に堆積した地山や炭化物を多く含む、黒褐色のシルト質粘土層、6層は炉の周辺に堆積した炭化物層である。南端は削平により堆積土は残存していない。

【壁】西辺中央部から北側にのみ残存しており、最大高18cm、周溝底面からやや急激に立ち上がる。

【床】床面はSI45 aとほぼ共有していると考えられる。

【炉】SI45 aと連続して使用されたものと考えられる。

【主柱穴】a住居跡と同様である。

【周溝】壁際をほぼ全周するが、南北辺は痕跡的に認められるのみである。断面は「U」字状を基調とし、場所によっては外側の壁がオーバーハングする部分も見られる。上幅は16~40cm、深さは3cm~53cmで、深さは平均すると40cm前後である。また、東西両辺の中央部を中心に、断続的に10~60cmの長さで底面よりもさらに1~12cm深い部分が認められる。西辺よりも東辺が浅い傾向があり、特に東辺北側は浅い。また、東西辺の北側を除いて、周溝堆積土の堅際に壁材痕跡と思われる幅10~30cmの継まりのない褐色土の分布が認められた。断面は「U」字状を基調とし、深さは18~39cmで、平均すると30cm前後である。

【壁柱穴】31個検出した。柱穴は径20~45cmの不整円形や不整梢円形を基調としており、深さは12~77cmである。堆積土は、主に地山ブロックや炭化物を含む褐色砂質シルトである。

【その他の溝跡】南側の床面の東西端に周溝に沿って溝が認められる。西辺の溝は2.6m、東辺の溝は現存長で1.9mである。上幅は8~17cm、深さは3~6cmで、断続的に5~55cmの長さで底面よりもさらに1~7cm深い部分が認められる。また、西辺の両端と東辺の北端には径20~30cm、深さは41~62cmの円形を基調としたピットが認められる。

【方向】東辺壁柱隅柱でみると、北で西に約4°偏している。

【出土遺物】堆積土や周溝埋土等から縄文土器深鉢や浅鉢(図版36)、石器(図版37-1~7)、楔形石器(8)、不定形石器(9~13)、磨石(14)、磨・敲石(15)、磨・凹・敲石(16・17)、土偶(図版425)が出土している。縄文土器の多くは小破片で、器形を復元できるものは確認面出土の深鉢・浅鉢各1点のみである(図版36-1・2)。また、周溝埋土からは完形の片岩製石剣(図版38)が出土している。

【SI47住居跡】(図版39)

【位置】N-15・W-42【確認面】地山

【重複】SI45・96住居跡と重複し、SI45より新しく、SI96との新旧関係は不明である。

【規模・平面形】西側が削平されているため全体の規模は不明であるが、東辺および北辺と南辺の一部に周溝が認められ、東辺の規模から一辺2.1m前後の隅丸正方形を呈するものと考えられる。

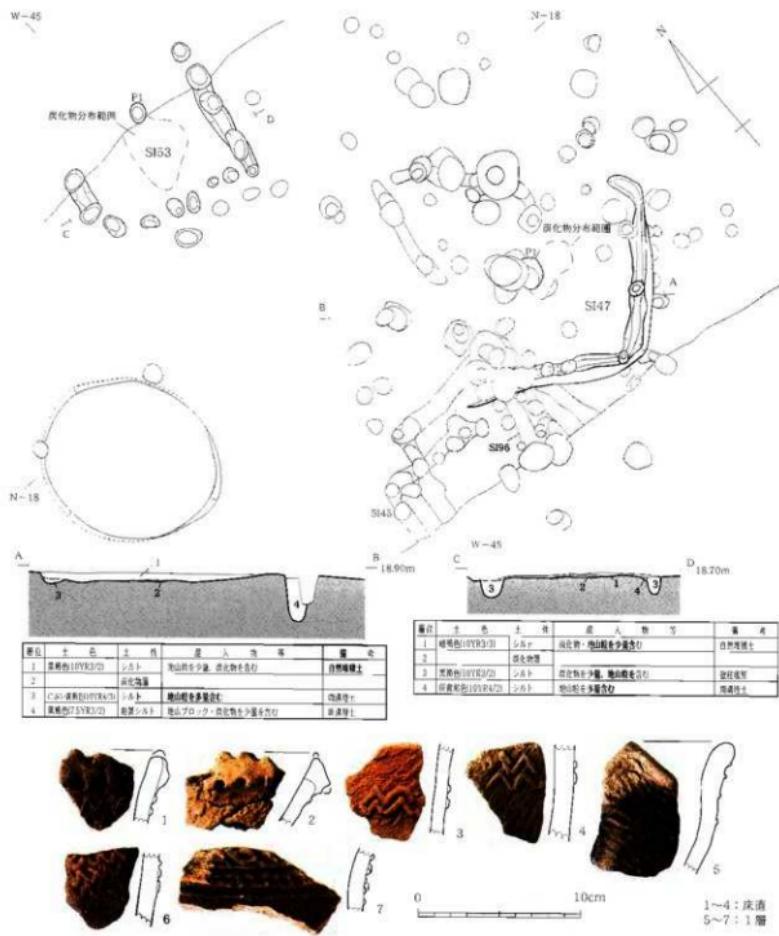
【堆積土】堆積土は1層で、黒褐色シルトが自然堆積している。

【壁】残存する部分では地山を壁としており、周溝底面および周溝外側の床面から緩やかに立ちあがる。壁高は最も残りの良い南端で15cmである。

【床】地山を床面としている。床面の東側は西側に比べて10cmほど低く窪んでおり、全体に若干凸が認められる。床面は全体的に硬く締まっている。

【炉】炉は不明であるが、床面東側中央部に1.5m×0.9mの範囲でごく薄い炭化物層の広がりが認められる。

【主柱穴】推定される南北のほぼ軸線上にピットが1個(P1)検出されており、位置的に本住居跡の主



図版39 SI47・53住居跡およびSI47出土遺物

柱穴である可能性が考えられる。平面形は西半をSB137に接しているため詳細は不明だが、直径約25cmの不整円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは27cmである。

【周溝】東辺および北辺と南辺の一部に認められる。断面は皿状を呈し、上幅で15~20cm、深さは1~4cmと非常に浅い。

【壁柱穴】東辺周溝底面では壁柱穴と考えられる直径約15cmの円形や長軸約20cm、短軸約15cmの横円形を呈するピット4個を検出している。深さは10~24cmである

【方向】東辺でみると、北で東に約42°偏している。



図版40 SI53住居跡(北から)

【出土遺物】堆積土等から、縄文土器深鉢の破片が出土している(図版39)。

【SI53住居跡】(図版40)

【位置】N-21・W-45【確認面】地山

【規模・平面形】住居は全体に削平されており、壁は残存しない。また、調査区より北側は大きく削られて、造構が失われている。全体の規模は不明であるが、東西約2.2m×南北1.8m以上で、方形を基調としている。

【堆積土】2層認められる。1層は自然流入土で、2層は床面中央部に堆積した極薄い炭化物層である。

【床】地山を床としている。床面は硬く縮まっており、若干の凹凸がある。

【主柱穴】南北の軸線上で1個検出している(P1)。平面形は長軸28cmの不整な橢円形を呈し、深さは30cmある。

【周溝】東・西辺では周溝が検出されている。上幅15~25cm、深さ5~15cmで、断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する。堆積土は地山小ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで、締まりもあることから埋め戻されていたとみられる。

【壁柱穴】周溝上面と南辺では壁柱穴と考えられる長軸15~40cmの不整な隅丸長方形もしくは橢円形を呈するピット13個を検出している。ピットは30~40cmの間隔で配されており、深さは20~45cmある。

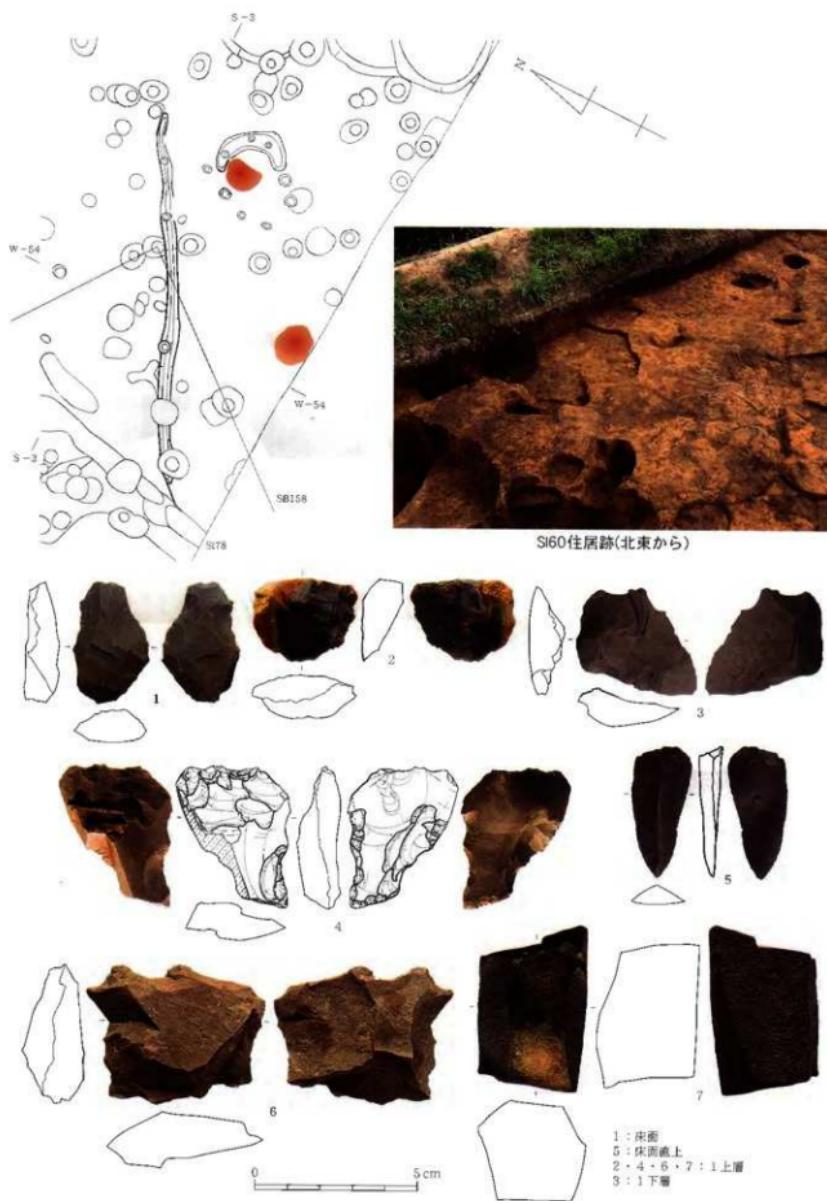
【方向】南北の軸線でみると北で東に約15°偏している。

【出土遺物】出土していない。

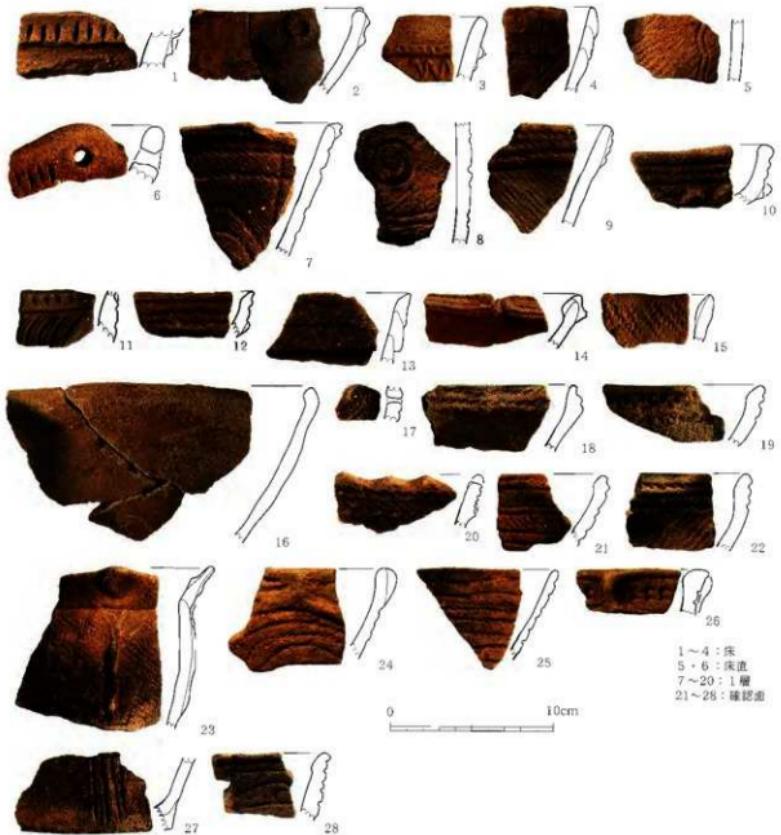
【SI60住居跡】(図版41)

【位置】S-8・W-51【確認面】地山

【重複】SI78住居跡、SB158掘立柱建物跡などと重複するが、新旧関係は不明である。



図版41 SI60住居跡および出土遺物－石器－



図版42 Si60住居跡出土遺物

〔規模・平面形〕長軸6.0m以上×短軸1.0m以上の隅丸長方形と考えられるが、北辺の周溝と北東隅の壁柱穴のみが検出されたのみで詳細は不明である。

〔堆積土〕殆ど残存しないが、炉の周辺に地山ブロックや焼土、炭化物を含む暗褐色シルトが薄く堆積している。

〔床〕暗褐色シルトをブロック状に含む、褐色粘質シルトの掘り方埋土を床面としている。

〔壁〕削平により殆ど残存しておらず、北辺西よりに若干認められるのみである。

〔炉〕2ヶ所検出した。地床炉である。住居ほぼ中央と想定される長軸線上にあり、平面形は長径約50cm、短径約30cmの楕円形である。焼け面は赤変し硬化しており、東側の焼け面の周縁には、「コ」の字状に巡る上幅20cm前後、下幅13cm前後、深さは約7cmの溝や、直径8～14cmの円形

や、長径約13cm、短径約7cmの楕円形で深さ2～18cmのピットが9個検出されている。堆積土は地山、焼土、炭化物を粒状に含む黒褐色シルトである。

【周溝】上幅6～22cm、下幅3～10cm、深さは3～7cmで、堆積土は地山粒を含む暗褐色シルトである。

【主柱穴】検出されなかった。

【壁柱穴】3個検出した。直径17～26cmの円形で、深さは7～23cmである。堆積土は地山を含む暗褐色シルトである。

【方向】北辺の周溝でみると、概ね北で東に約63°偏している。

【出土遺物】床面や堆積土、確認面等から縄文土器深鉢、浅鉢(図版42)、不定形石器(図版41-1～5)、石核(6・7)、土製品(図版438・440)等が出土している。

【SI67 a・b住居跡】(図版43)

【位置】S-7・W-45

【重複】SI29住居跡、SB58掘立柱建物跡と重複し、SI29、SB58より古い。また、本住居跡は一度建て替えられており、南辺が約25cm、東辺が約90cm拡張されている。古いものからSI67 a・bとする。

《SI67 a》

【規模・平面形】東西推定約4.2m×南北約2.7mの隅丸長方形である。

【床】炉の周辺のみ残存し、地山を床面としている。他はSI29等により削平されている。

【壁】残存していない。

【炉】1ヶ所検出した。地床炉である。住居ほぼ中央にあり、長軸約114cm、短軸約83cmの不整形を呈する。焼け面は赤変し、硬化している。

【主柱穴】検出されなかった。

【周溝】全辺で検出した。幅10～23cm、深さは20～28cmで、溝は地山粒を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。また、周溝底面では、北東隅において直径10cm前後、深さ3cm前後のピットの痕跡が4ヶ所検出されている。

【出土遺物】出土していない。

《SI67 b》

【規模・平面形】東西約4.4m×南北約3.4mの隅丸長方形である。

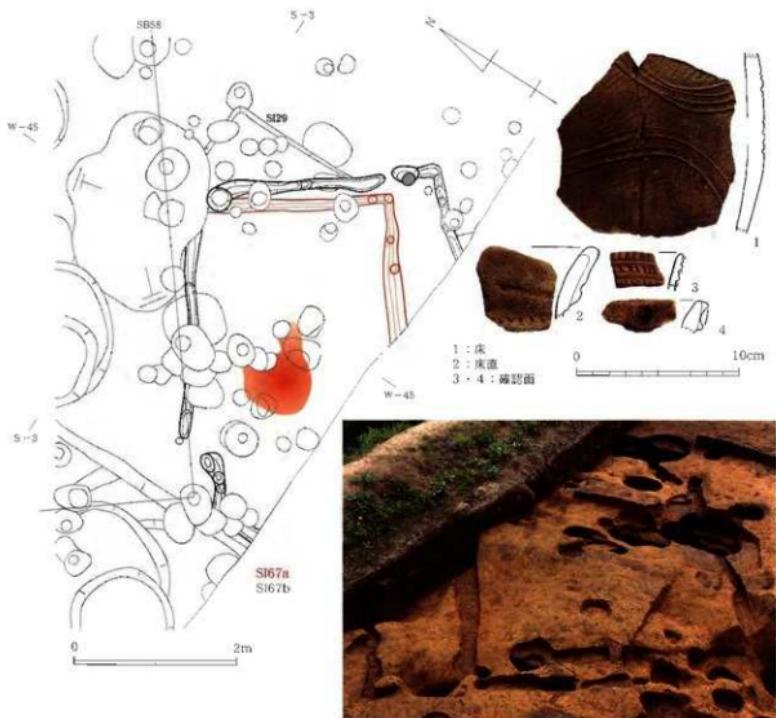
【床】SI67 aと同一の面を床としており、床面は地山である。

【壁】残存していない。

【炉】SI67 aから継続して使用されたと考えられる。

【主柱穴】検出されなかった。

【周溝・壁柱穴】全辺で検出した。幅10～24cm、深さは7～35cmで、堆積土は地山、焼土、炭化物を粒状に含む暗褐色シルトである。また、周溝底面では、各辺において直径10～32cm、深さ4～37cmの壁柱穴と考えられるピットの痕跡を7個検出しており、北辺の1個で、直径32cmの円形



図版43 SI67住居跡(北東から)

の柱痕跡を検出している。

【方向】 東辺でみると、東で北に約37° 傾している。

【出土遺物】 床面や床面直上、確認面等で縄文土器深鉢の破片が少量出土している(図版43)。

【SI70住居跡】(図版44・49)

【位置】 N-6・W-58【確認面】 地山

【重複】 SI77住居跡、SB103建物跡、SK118土壤と重複している。SI77、SK118よりも新しく、SB103よりも古い。

【規模・平面形】 東西1.7m×南北2.8mの隅丸長方形を呈する。

【堆積土】 3層認められ、1・2層は自然流入土である。3層は炉の部分に堆積した焼土主体の層で、炉機能時の堆積と考えられる。

【壁】 基本的に地山を壁としているが、SI77住居跡と重複する部分ではその埋土を壁とする。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は残りの良い南壁で床面から約20cmある。



S170住居跡(南東から)



図版44 S170住居跡断面

[床] SK118土壤を30cm程埋め戻して住居の床としている。床面は南側へ緩やかに傾斜しており、四方の壁際が若干「ハ」字状に下がる。

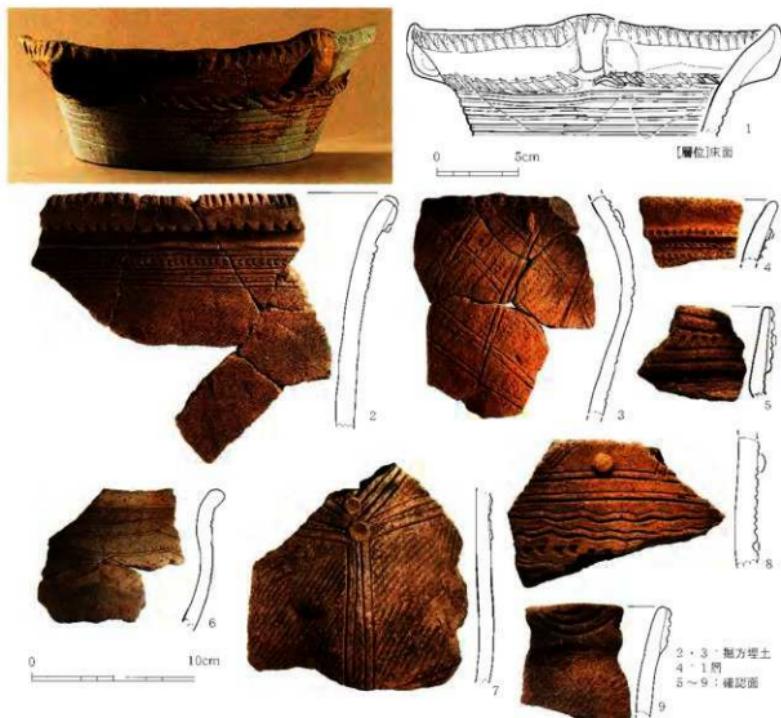
[周溝] 周溝は壁の直下を巡り、北東隅でSB103建物跡の柱穴によって壊されているが、全周していたと思われる。上幅13~28cm、深さ18~35cmで、断面は「U」字状を呈する。堆積土は地山ブロックを多量に含む灰黄褐色もしくはぶい黄褐色のシルトで、締まりもあることから埋め戻されていたとみられる。

[櫛柱穴・壁材] 周溝上面では櫛柱穴とみられる長軸12~23cmの不整な円形もしくは梢円形を呈するピット9個と壁材の痕跡と考えられる幅4~10cmの褐灰色の堆積土を検出している。深さは20~40cmで、いずれも周溝底面より若干下がる。ピットは四隅付近に集まる傾向があり、南・北辺の長軸線上にも各1個(P1・2)配されている。壁材の痕跡は東・西辺でのみ検出されており、周溝内を壁添いに延びる。

[炉] 長軸線上や北寄りの床面で焼け面を1ヶ所検出している。平面形は64cm×55cmの不整な隅丸長方形を呈し、やや凹凸がある。地床炉と考えられる。

[方向] 長軸線でみると北で西に約28°偏している。

[出土遺物] 床面や掘り方埋土等から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版45)他、石鏃(図版46-



図版45 SI70住居跡出土遺物－縄文土器－

1)、磨石(2)、石皿(3)、土偶(図版428)等が出土している。

【SI77a～d住居跡】(第24・25図)

【位置】N-6・W-54【確認面】地山で、北側へ緩やかに傾斜している。

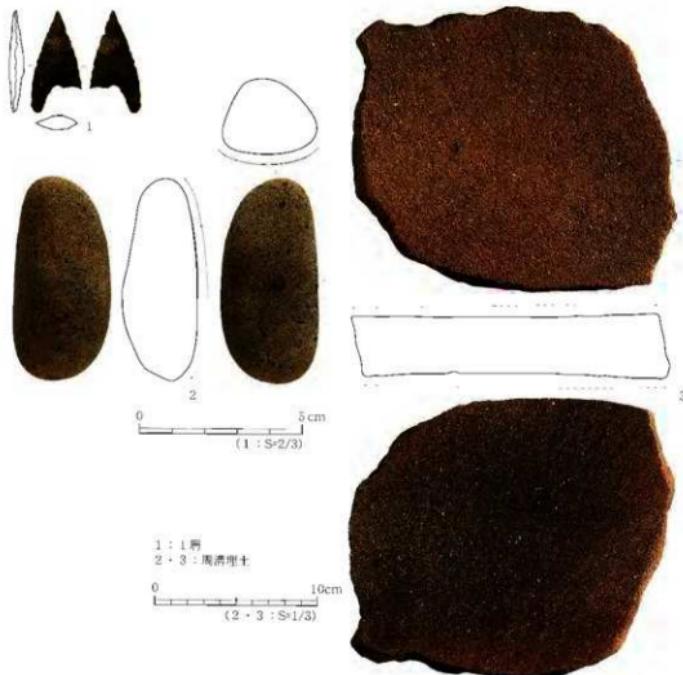
【重複】SI70・80住居跡、SX69竪穴状造構、SB103建物跡、SK64・98・99・116土壤、倒木痕2ヶ所と重複しており、SI80住居跡、SK116土壤よりも新しく、その他の造構よりも古い。住居の方向は、長軸線でみると、北で東に約30° 傾してあり、精査の結果、建て替えが行われていることがわかった。改築は住居を拡張していくかたちで3回行われており、古いものから順にa～dとする。なお、住居の南・北部にはそれぞれ倒木痕に壊されて失われている部分がある。

《SI77a》

【規模・平面形】周溝・主柱穴の配置から東西約3.0m×南北5.6m以上で、長方形を呈するものと思われる。なお、北辺の位置は不明で、壁・堆積土は残存しない。

【床】この時期に伴う床面が認識できなかったため、詳細は不明である。

【主柱穴】SI77aの内には壁柱穴の他に大小20個程のビットがある。この内、長軸線と平行し、軸線



図版46 S70住居跡出土遺物－石器－

を挟んではば対称に位置するP 1～3、P 4～6がこの住居の主柱穴と考えられる。いずれの柱穴でも柱が抜き取られ、地山小ブロックを多く含む褐灰色または灰褐色のシルトで埋め戻されている。掘方の平面形は長軸が30～40cmの不整な楕円形を呈し、深さは65～90cmで、底面に向かって窄まるものもある。また、柱は抜き取り廻下部の形状から直径15～20cmの円形を呈するものと推測される。柱間寸法は長辺で2.0～3.1m、短辺で約2.0mあり、北と中央の柱穴の間隔がやや開く。

【周溝】周溝は西辺から南辺にかけて巡り、東辺では断続的に延びる。西辺の中央やや北寄りでは、周溝が30cm程内側へ入り込む部分が認められる。上幅13～40cm、深さ5～15cmで、断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する。堆積土は地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで、綺まりもあることから埋め戻されていたとみられる。

【壁柱穴】周溝上面もしくはその延長上では壁柱穴と考えられる長軸10～30cmの不整な円形もしくは楕円形を呈するピット17個を検出している。深さは20～60cmで、いずれも周溝底面より下がる。ピットは北辺以外の3辺を巡るが、配置に規則性は認められない。

【出土遺物】周溝等から地文のみの縄文土器胴部破片が極少量出土している。

《SI77b》

SI77・80住居跡(北東から)



SI77住居跡断面(南西から)



SI77北辺・SI80断面拡大(南西から)



SI77白色粘土

図版47 SI70・77・80住居跡(1)



SI77 d 主柱穴(N1E1)



SI77 d 主柱穴(N4E1)



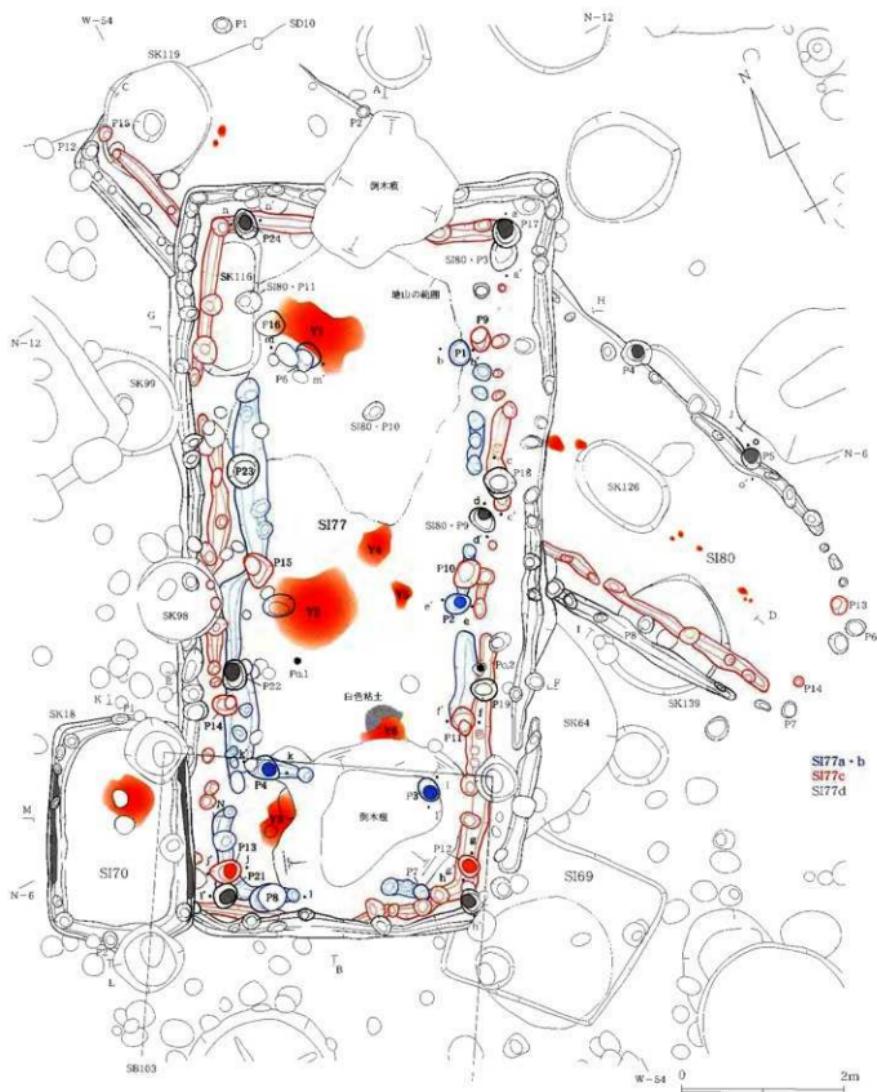
SI77 a 主柱穴(N3E2)

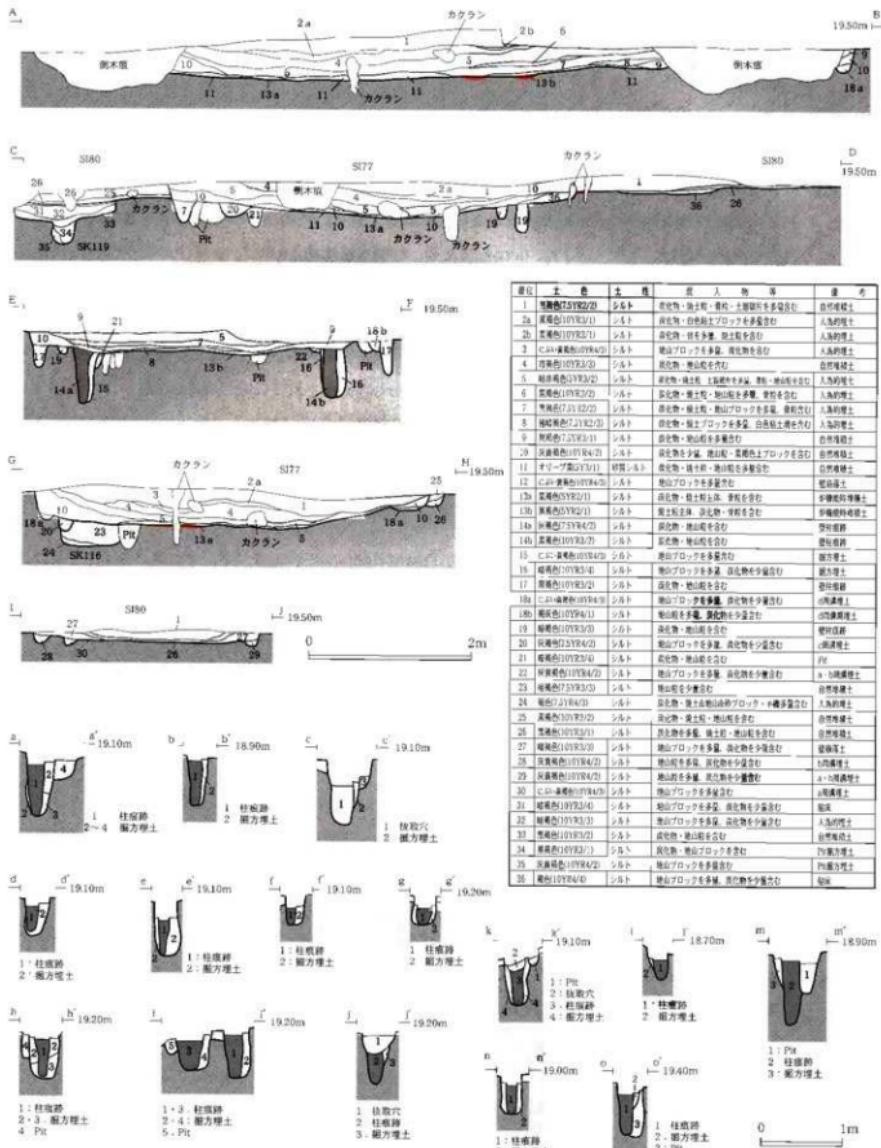


床面出土土器(Po.1)



床面出土土器(Po.2)





図版50 SI77・80住居跡断面

〔規模・平面形〕 SI77aの南辺を1.5m程南側へ拡張しており、周溝・主柱穴の配置から東西約3.0m×南北7.1m以上で、長方形を呈するものと思われる。SI77a同様、北辺の位置は不明で、壁・堆積土は残存しない。

〔床〕 この時期に伴う床面が認識できなかったため、詳細は不明である。

〔主柱穴〕 SI77aの主柱穴(P 1～6)をそのまま利用していたと考えられるが、更にP 1～3、P 4～6の南延長線上に位置するP 7・8も主柱穴に加えられていたとみられる。P 7は柱の抜き穴で、P 8は柱抜き取り痕によって大部分が壊されている。いずれも地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで埋め戻されており、深さは50cm程である。柱間寸法は約2.0mで、P 7・8はそれぞれP 3・4から1.3m～1.5m南に配されている。

〔周溝〕 倒木痕によって壊されているものの、拡張部分では西・南辺を巡る周溝が残る。上幅15～22cm、深さ10cm前後で、断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する。堆積土は地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで、締まりもあることから埋め戻されていたとみられる。

〔壁柱穴〕 周溝上面もしくはその延長上では壁柱穴と考えられる長軸15～28cmの不整な円形もしくは楕円形を呈するピット6個を検出している。深さは20～35cmで、いずれも周溝底面より下がるが、配置に規則性は認められない。なお、拡張部分以外ではSI77aの周溝・壁柱穴がそのまま利用されていたと推測される。

〔出土遺物〕 周溝等から地文のみの縄文土器の口縁部や胴部破片が少量出土している。

《SI77c》

〔規模・平面形〕 SI77bの4辺を20～60cm外側へ拡張しており、周溝・主柱穴の配置から東西約3.8m×南北約8.6mで、長方形を呈するものと思われる。なお、壁・堆積土は残存しない。

〔床〕 この時期に伴う床面が認識できなかったため、詳細は不明である。

〔主柱穴〕 SI77cの内には壁柱穴の他に大小30個程のピットがある。この内、長軸線と平行し、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP 9～12、P 13～16がこの住居の主柱穴と考えられる。いずれの柱穴でも柱が抜き取られ、地山ブロックを多く含む暗褐色や黒褐色のシルトで埋め戻されている。掘方の平面形は長軸が30cm前後の不整な楕円形を呈し、深さは35～90cmある。深さ60cm前後のものが多く、底面に向かって窄まる傾向がある。また、柱は抜き取り痕下部の形状から直径15～20cmの円形を呈するものと推測される。柱間寸法は長辺(3間)で1.8～2.9m、短辺(1間)で2.6～2.9mあり、北端とそこから1間目の柱穴の間隔がやや開く。なお、主柱穴は全体的に住居平面形の南寄りに配されている。

〔周溝〕 4辺を断続的に巡り、西辺の中央やや北寄りでは「コ」字状に20cm程内側へ入り込む。上幅10～30cm、深さ5～20cmで、北・西辺がやや深くなる傾向にある。断面は「U」字状を呈する部分が多く、堆積土は地山ブロックを多く含む灰褐色シルトで、締まりもあることから埋め戻されていたとみられる。

〔壁柱穴〕 周溝上面もしくはその延長上では壁柱穴と考えられる長軸10～32cmの不整な円形もしくは楕円形を呈するピット39個を検出している。深さは15～55cmで、いずれも周溝底面より下がる。

ピットは4辺を巡るが、配置に規則性は認められない。

【出土遺物】周溝等から地文のみの縄文土器の口縁部や胴部破片が少量出土している。

《SI77d》

【規模・平面形】SI77cの4辺を20~60cm外側へ拡張しており、東西4.4m×南北9.0mで、長方形を呈する。

【堆積土】15層認められる。1・4・9~11層は自然流入土で、1層は本住居跡とSI80住居跡を覆っている。12層は東壁の崩落土である。2~3層と5~8層は大きくこの2つのまとまりで捉えられ、いずれも廃絶後の住居内に捨てられた土と考えられる。各層には焼土・炭化物・焼けた骨粒が多量に含まれ、2a・8層には白色粘土のブロックが、2b層には獸骨が集中している。13層は焼土・炭化物を主体とする層で、Y1・Y2の焼け面上を中心に分布しており、炉機能時に堆積したものと思われる。

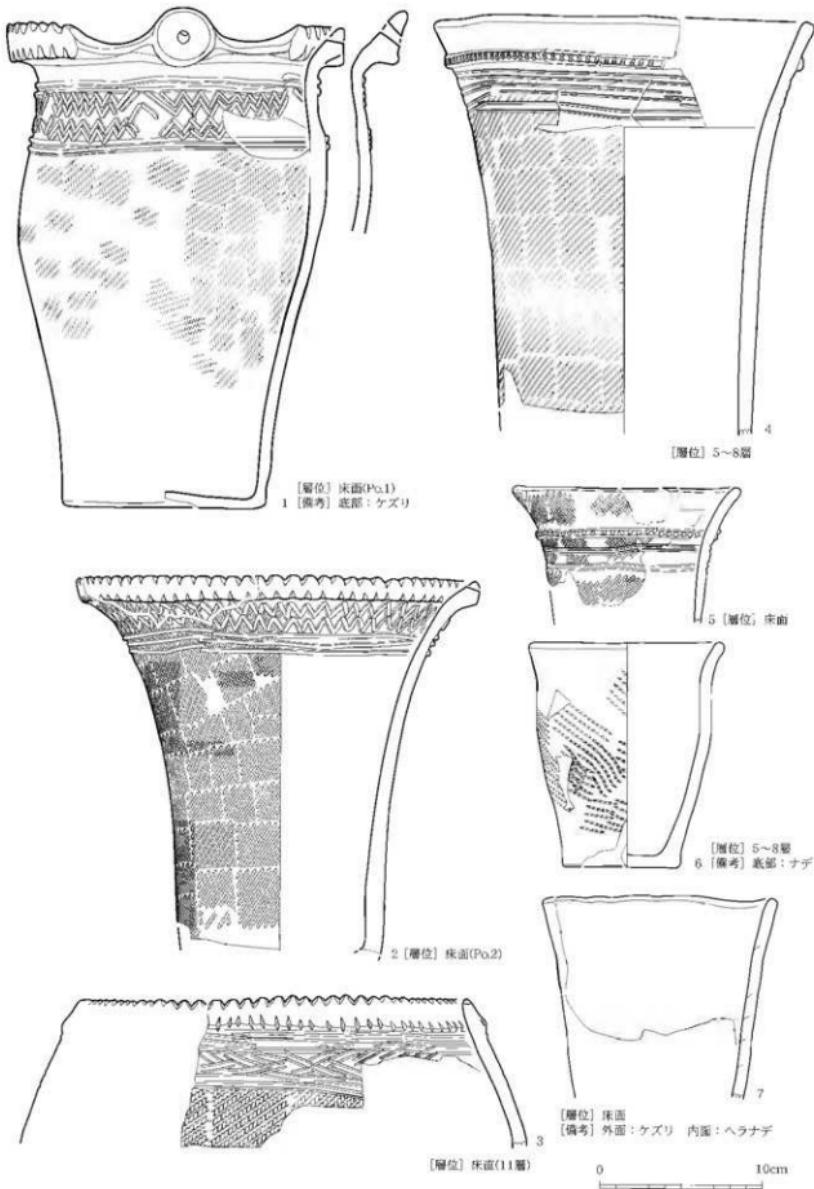
【壁】地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りの良い西壁北部で床面から25cmある。

【床】最終的に検出された床面は地山を床とする1面のみで、全ての時期を通じてこの面を床として利用していた可能性がある。断面をみると、床面は4辺の壁際から中央に向かって皿状に窪み、全体として北側へ緩やかに傾斜している。東壁際は西壁際より15cm程高くなっている、中央部へ向かっての傾斜がきつい。なお、住居北半部の床面には地山が黄褐色ローム下の砂層となる部分が認められる。

【炉】ほぼ長軸線上で3ヶ所(Y4~6)、長軸線より西寄りで3ヶ所(Y1~3)焼け面を検出している。平面形は長軸33~128cmの不整形を呈し、いずれも地床炉と考えられる。この内、Y1~3は長軸線と平行して並び、順にP17・18・23・24、P18・19・22・23、P19・20・21・22に囲まれた範囲の中央西寄りに位置しており、同時に機能していたことが窺われる。更に、Y1がSI77cの主柱穴であるP16よりも新しいことや各面の直上に薄い焼土・炭化物層が残っていることから、この時期(SI77d)に伴う炉と判断される。なお、Y4~6についてはどの時期に伴うものか明らかでない。

【主柱穴】SI77dの内には壁柱穴の他に大小40個程のピットがある。この内、長軸線と平行し、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP17~20、P21~24がこの住居の主柱穴と考えられる。P18・19・23では柱が抜き取られ、その他には柱痕跡が残る。掘方の平面形は長軸が30~40cmの不整な円形もしくは楕円形を呈し、深さは60~80cmで、底面に向かって窄まるものもある。また、柱痕跡は直径15~20cmの不整な円形を呈する。柱間寸法は長辺(3間)で2.4~3.0m、短辺(1間)で約3.1mあり、北端とそこから1間目の柱穴の間隔がやや開く。なお、P18の柱抜き取り穴には焼けた骨を多量に含む土が投入されていた。

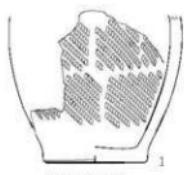
【周溝】壁の直下をほぼ全周するが、東辺では部分的な途切れや重なりが認められる。上幅10~25cm、深さ3~10cmで、全体に浅い。断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する部分が多く、堆積土は地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐色または褐色のシルトで、縮まりもあることから



図版51 SII77住居跡出土遺物—縄文土器(1)—床面・床面直上・5~8層



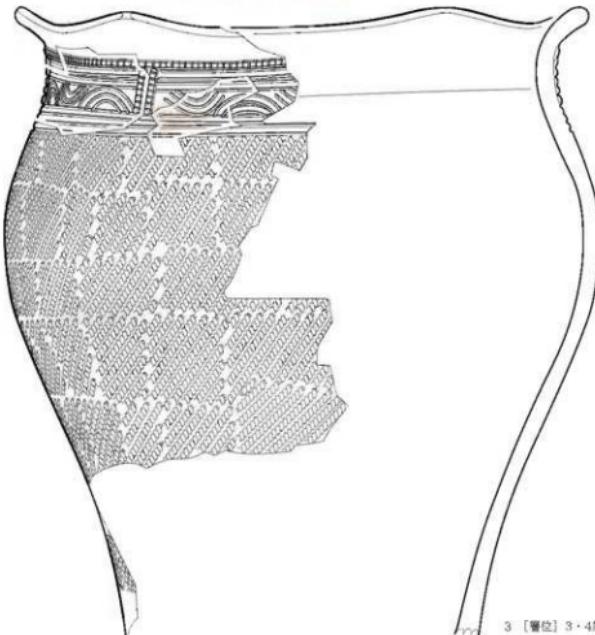
图版52 SI777住居跡出土遺物—縄文土器(2)—床面・床面上 5~8層



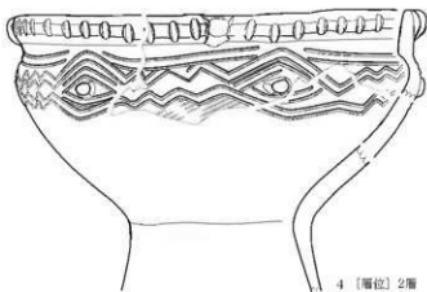
[層位] 5~8層
[備考] 底部: ナデ



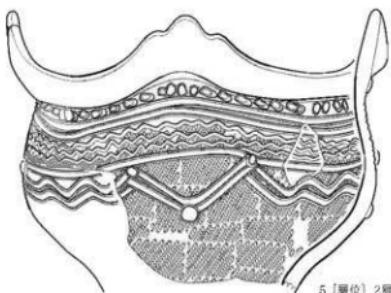
[層位] 5~8層
[備考] 底部: ナデ



3 [層位] 3・4層



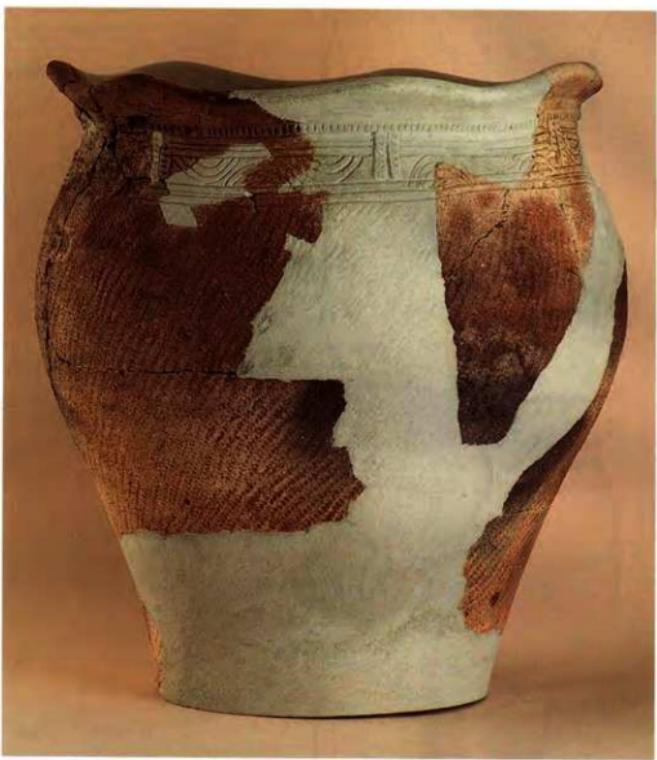
4 [層位] 2層



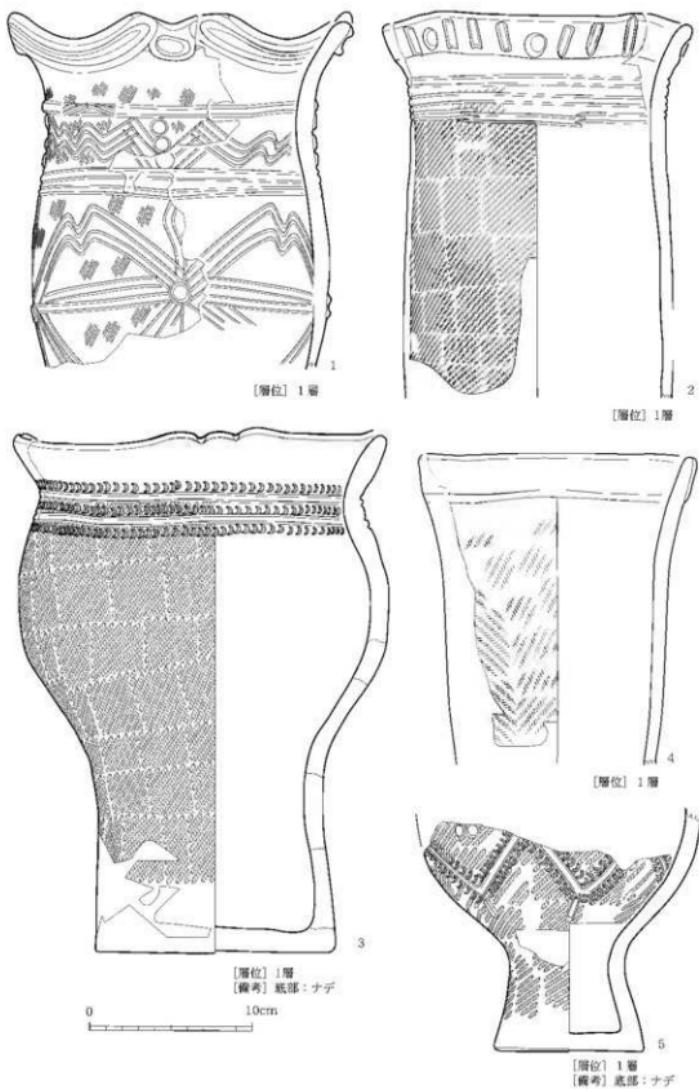
5 [層位] 2層

0 10cm

図版53 SI77住居跡出土遺物－縄文土器(3)－



图版54 S177住居跡出土遺物—繩文土器(4)—



図版55 SI77住居跡出土遺物－縄文土器(5)－

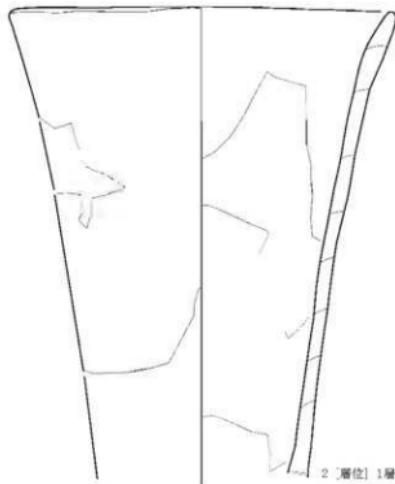


図版56 SI77住居跡出土遺物－縄文土器(6)－

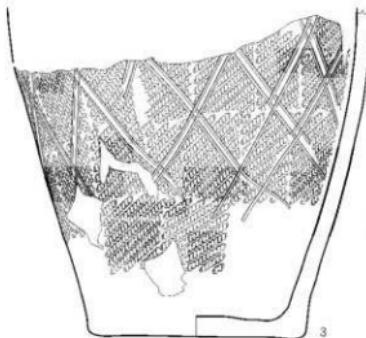


1

[層位] 1層一括
[備考] 底部: ナデ



2 [層位] 1層

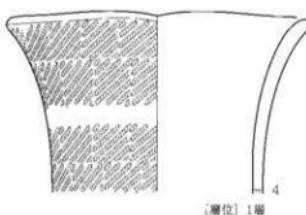


3

[層位] 1層一括
[備考] 底部: ナデ

5 [層位] 1層
[備考] 底部: ナデ

0 10cm

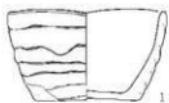


[層位] 1層

図版57 SI77住居跡出土遺物—縄文土器(7)—



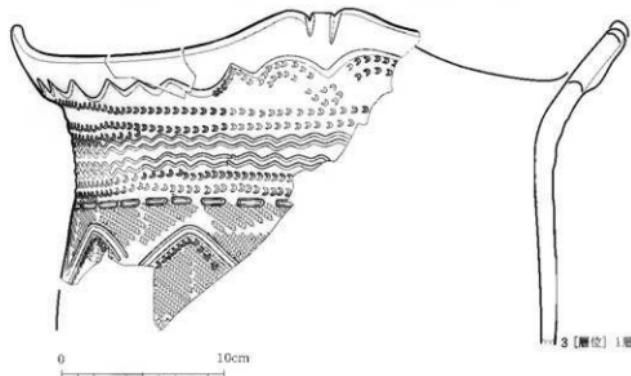
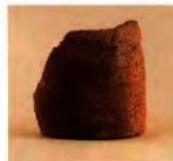
図版58 S177住居跡出土遺物－縄文土器(8)－



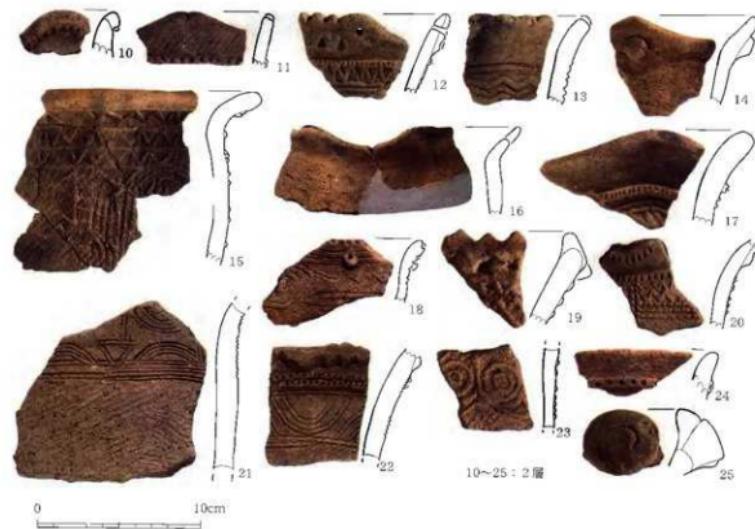
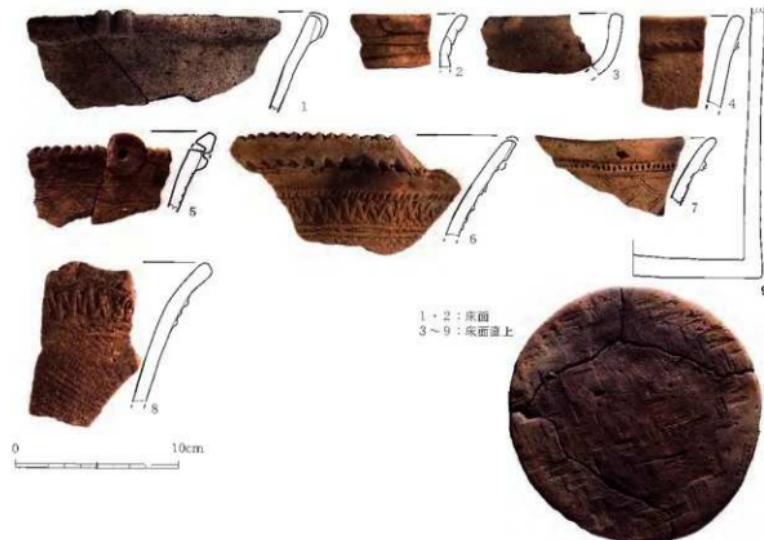
[層位] 1層
[備考] 内面：ヘラナデ



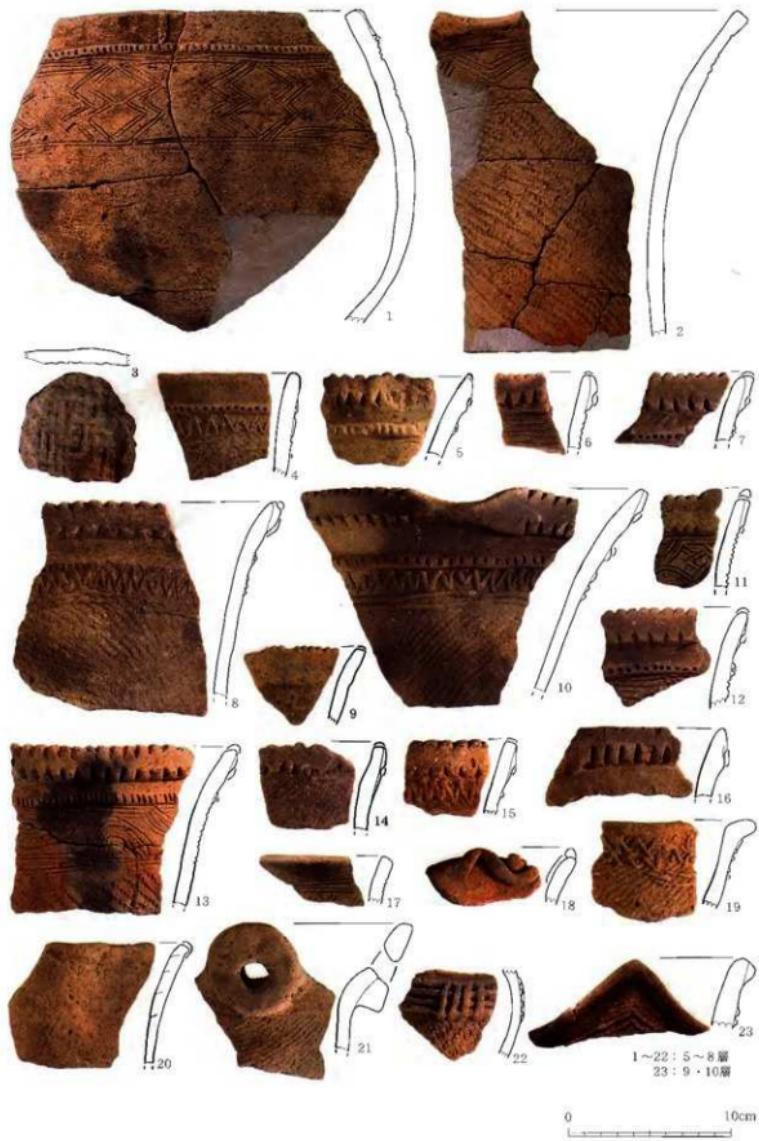
[層位] 1層
[備考] 底部：アジロ痕



図版59 SI77住居跡出土遺物－縄文土器(9)－



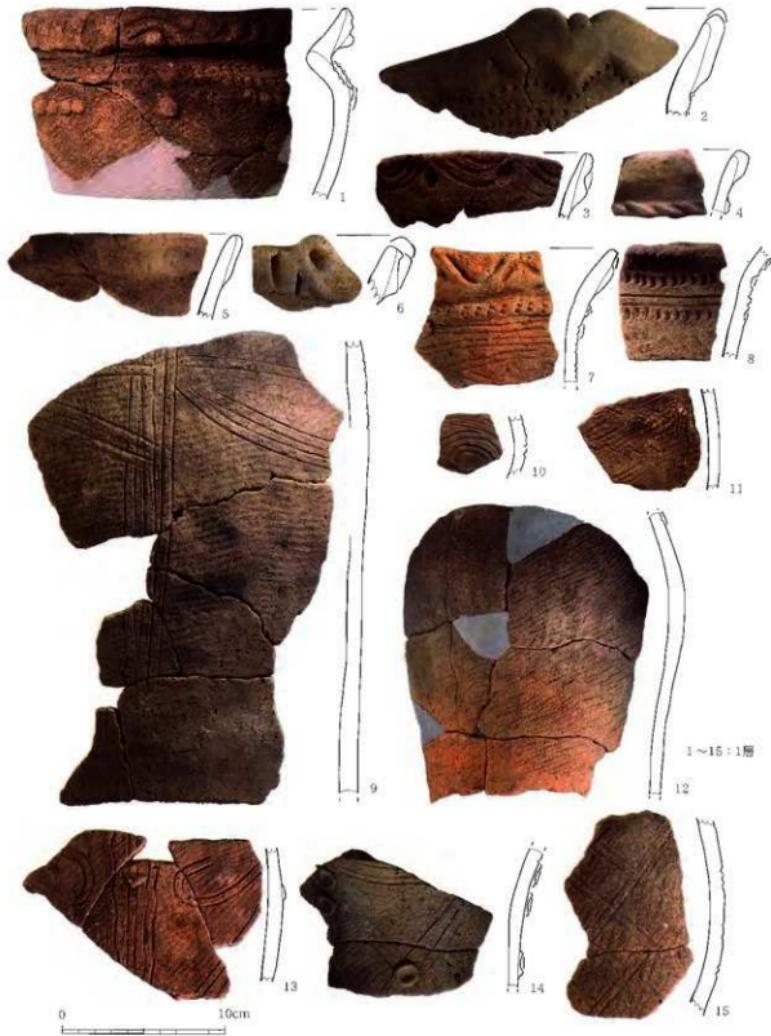
图版60 SI77住居跡出土遺物－縄文土器(11)－床面・床面直上・2層



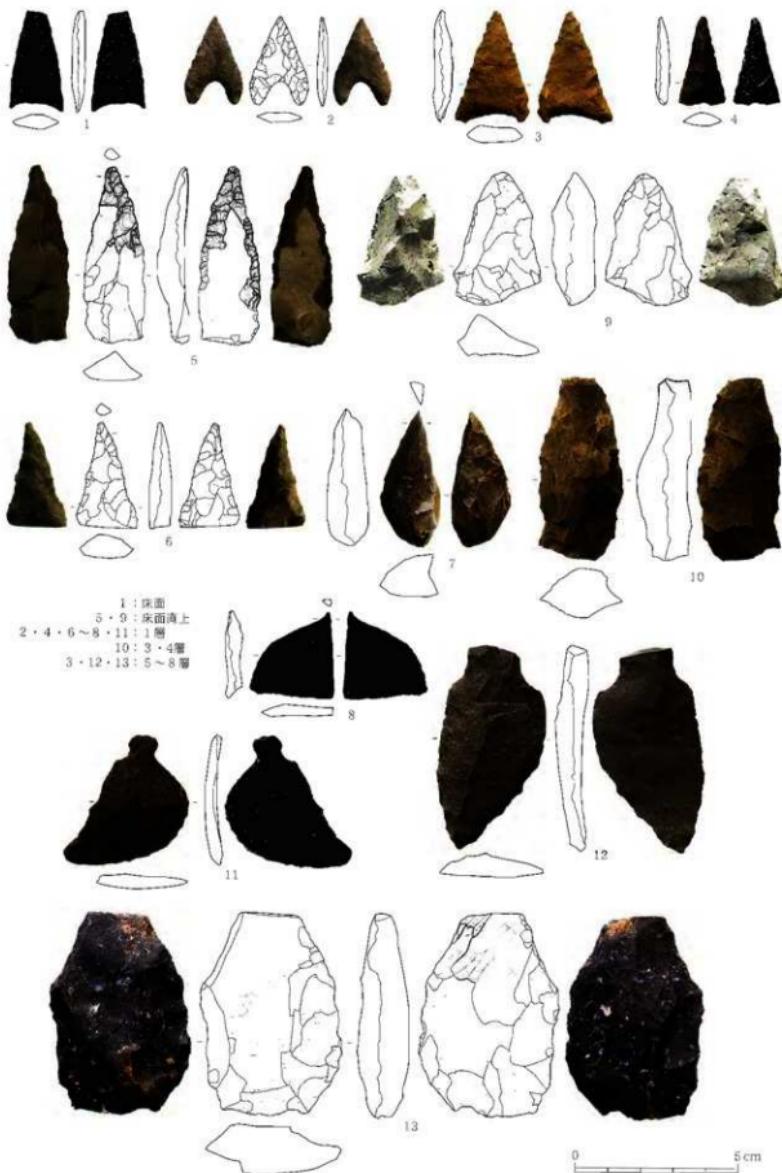
図版61 SI77住居跡出土遺物－縄文土器(12)－5～10層



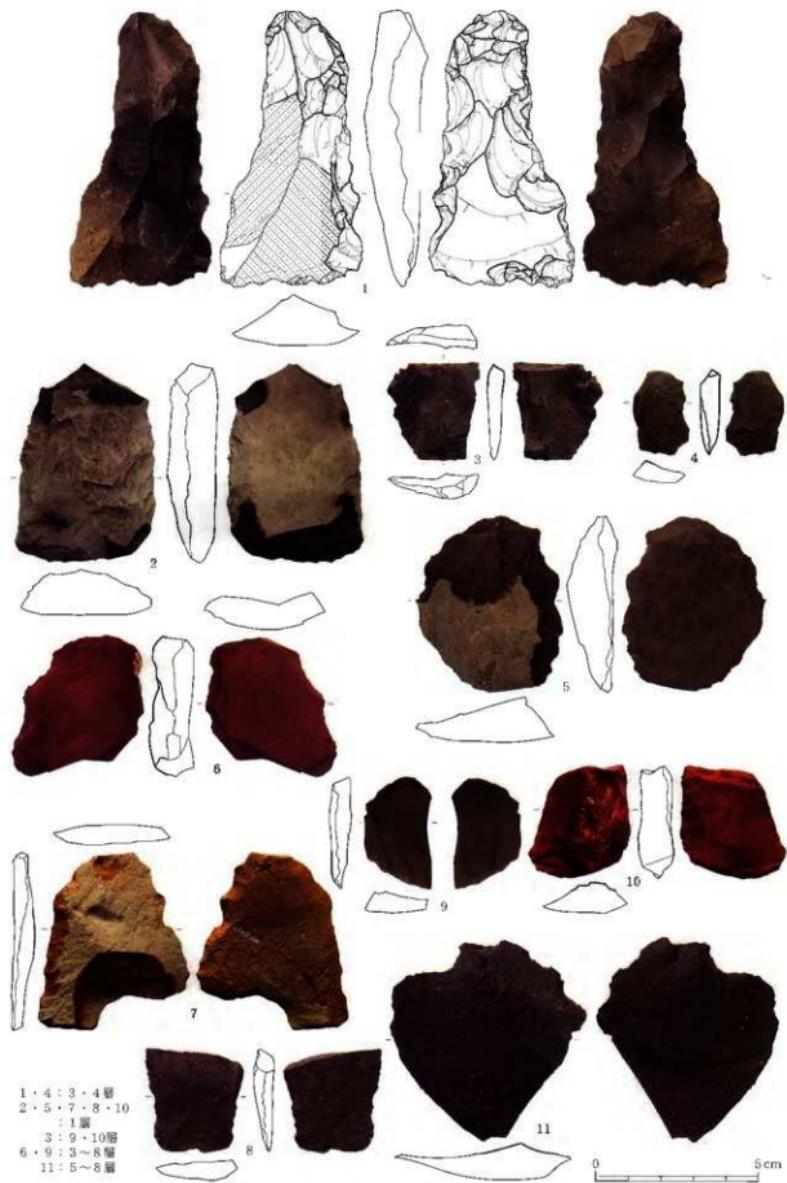
圖版62 Si77住居跡出土遺物—繩文土器(13)—1層



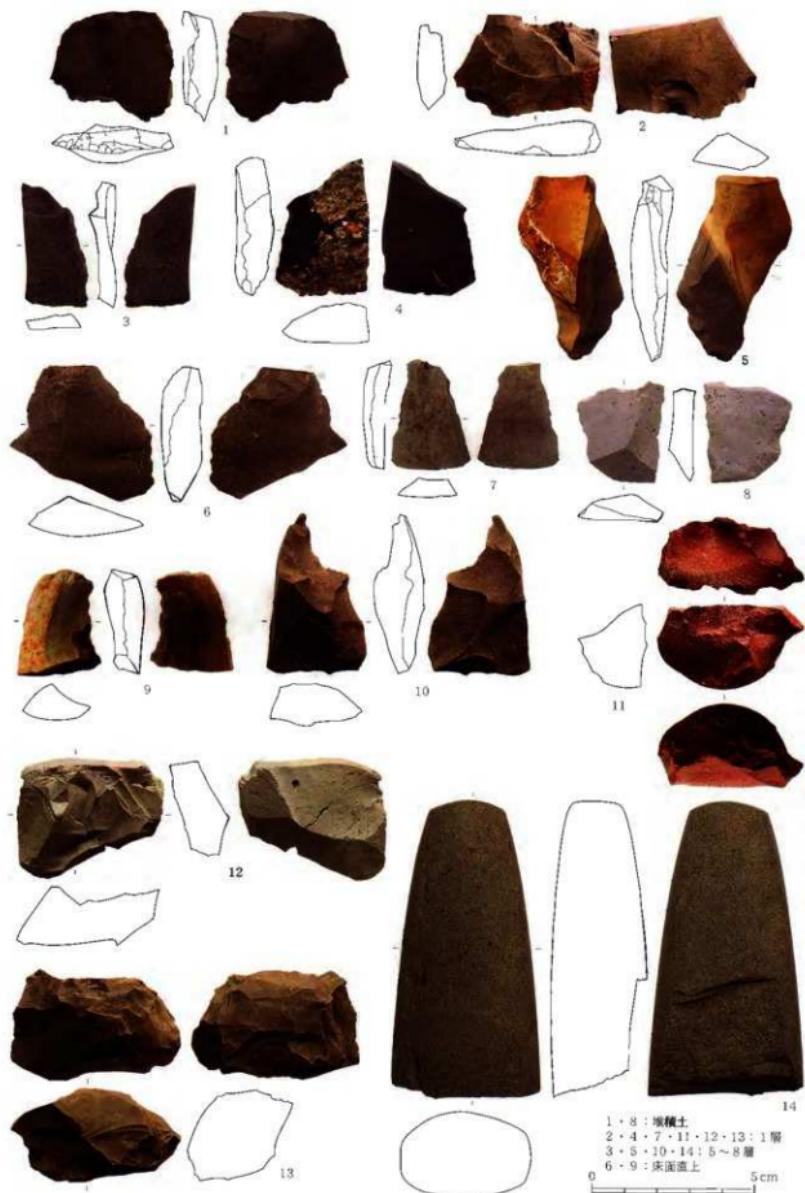
图版63 SI77住居跡出土遺物－縄文土器(14)－1層



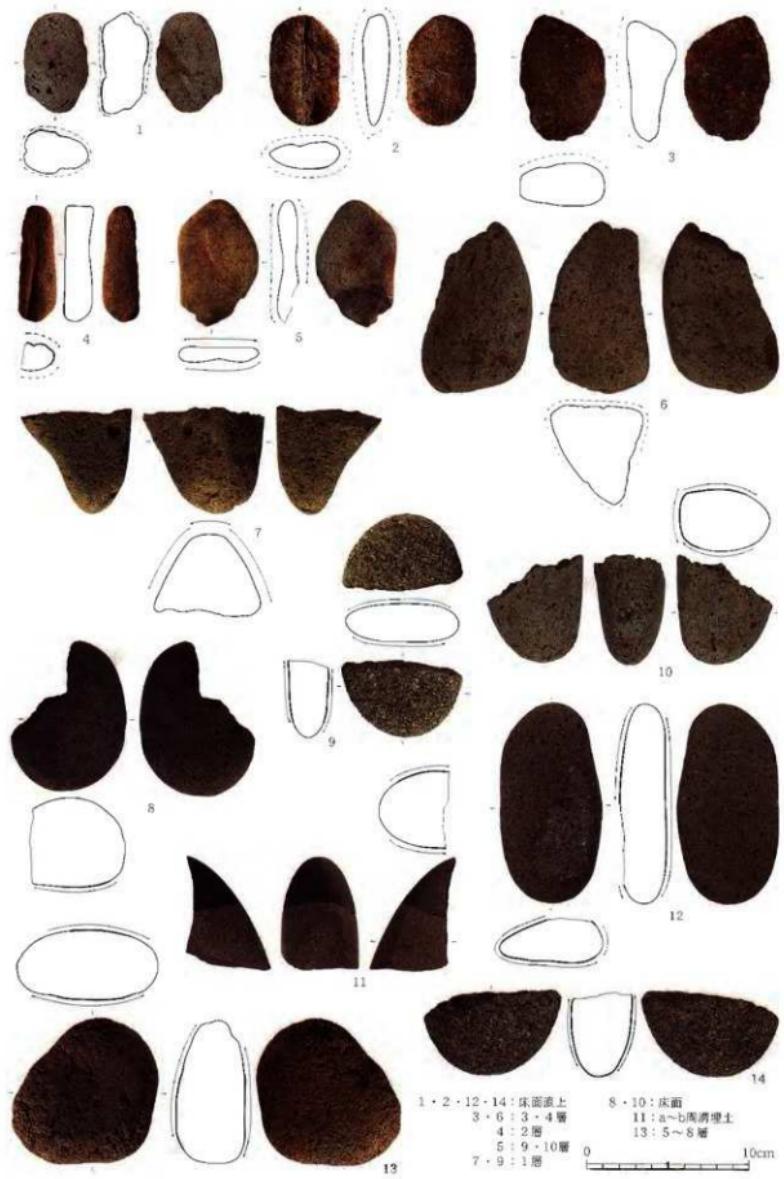
図版64 S177住居跡断面および出土遺物—石器(1)—



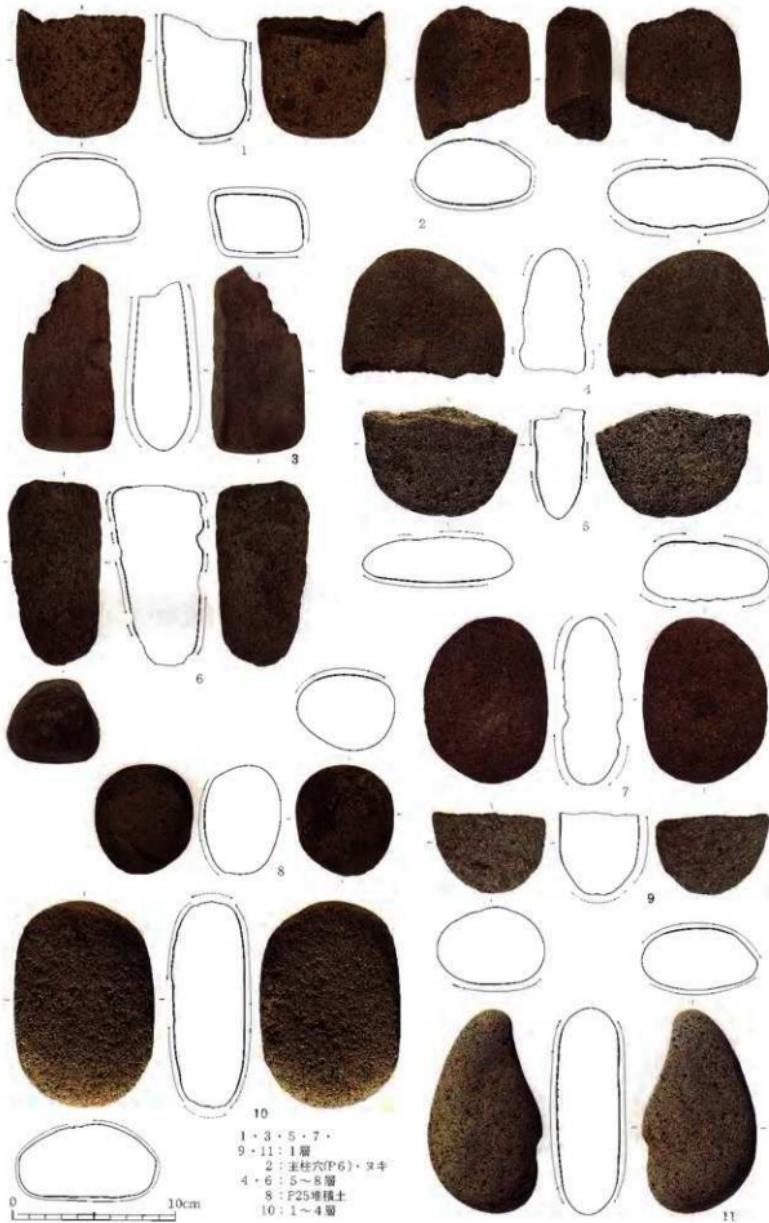
図版65 SI77住居跡断面および出土遺物—石器(2)—



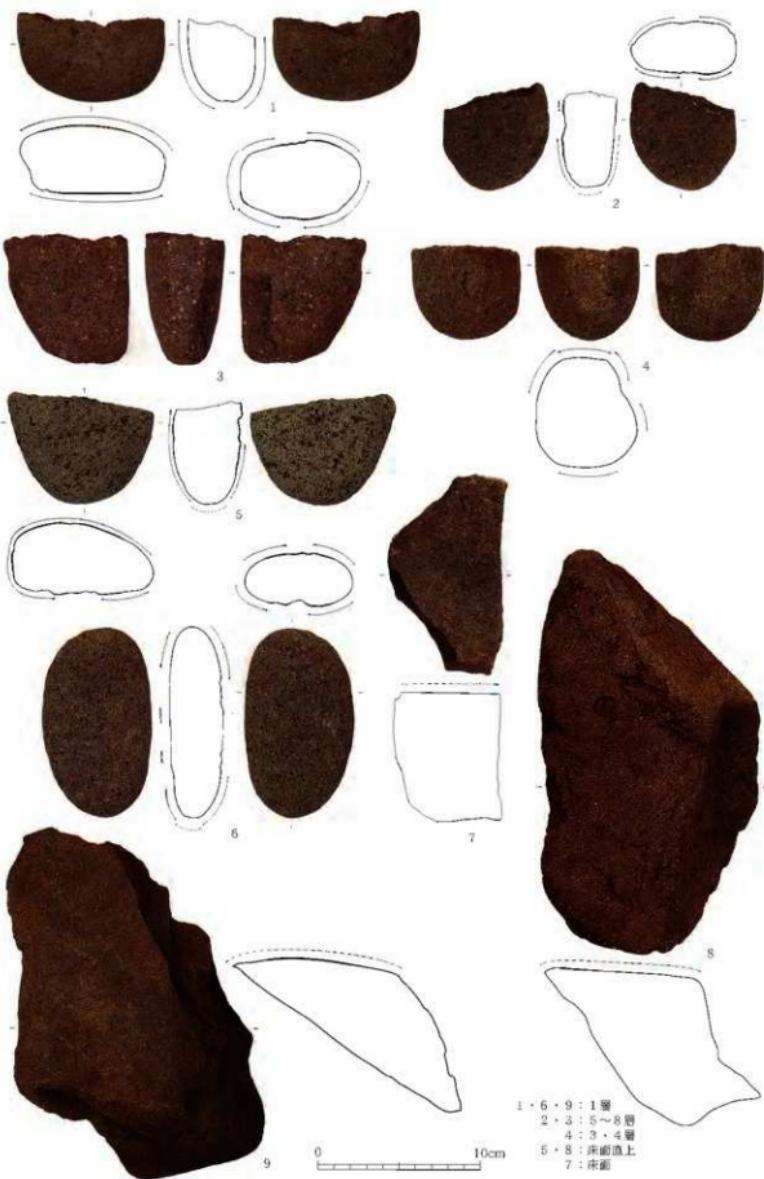
図版66 SI77住居跡断面および出土遺物—石器(3)—



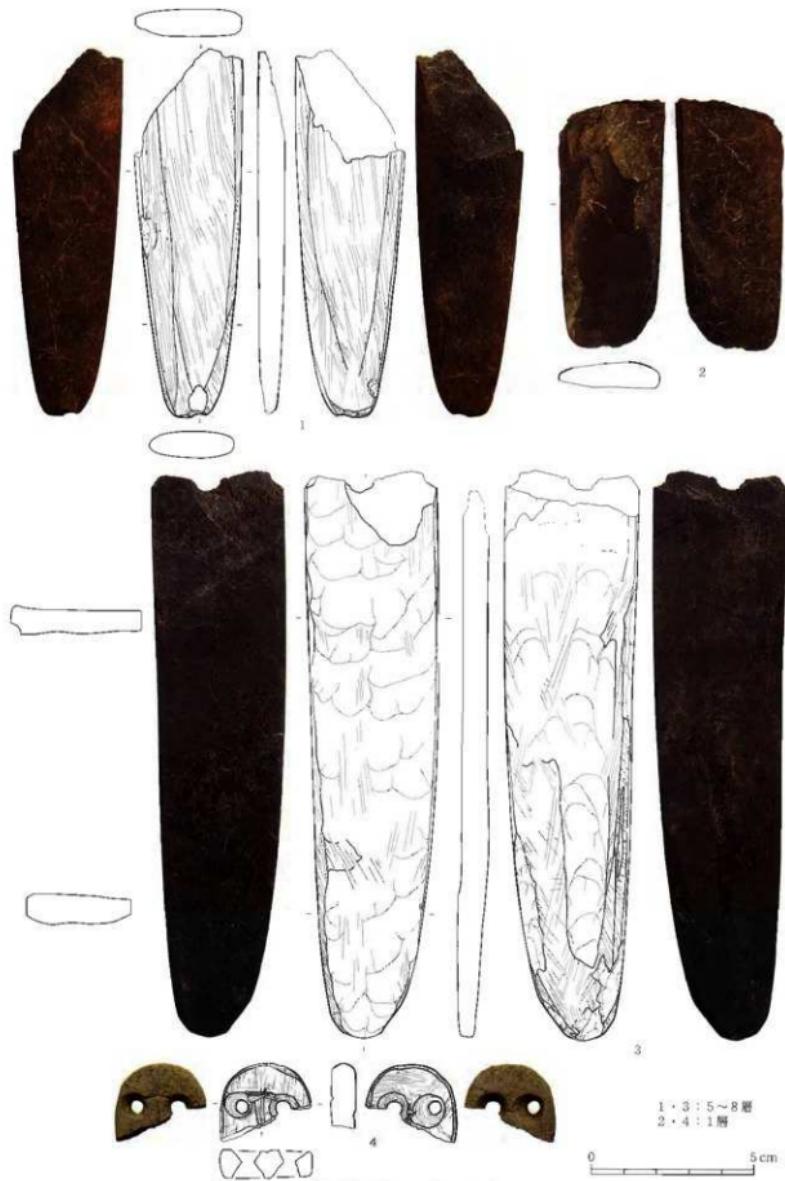
図版67 SI77住居跡断面および出土遺物－石器(4)－



図版68 SII-7住居跡断面および出土遺物－石器(5)－



図版69 SI77住居跡断面および出土遺物－石器(6)－



図版70 SI77住居跡断面および出土遺物－石製品－

埋め戻されていたとみられる。

【壁柱穴】周溝上面もしくはその延長上では壁柱穴と考えられる長軸15~45cmの不整な円形もしくは橢円形を呈するピット42個を検出している。深さは15~50cmで、いずれも周溝底面より下がる。ピットは4辺を巡り、北東・北西隅のものが深さ50cmと深い。さらに、東・西辺には2.4~2.8mの間隔で深さ30cm以上のピットが配されており、その位置は主柱穴のはば東・西脇にあたる。

【出土遺物】床面からは完形に近い繩文土器深鉢(図版51-1・2)や、石鎌(図版64-1)、磨石(図版67-8)、石皿(図版69-7)等が出土している。また、堆積土や周溝埋土からも非常に多くの繩文土器(図版51~63)や石鎌(図版64-2~4)、石錐(5~8)、尖頭器(9・10)、石匙(11・12)、壺状石器(図版64-13、図版65-1・2)、不定形石器(図版65-3~11、図版66-1~10)、磨製石斧、石錐、楔形石器、石核(図版66-11~14)、磨・凹・敲石(図版67・図版68)、石皿(図版69-7~9)、砥石(図版69-1~6)、石劍(図版70-1~3)、石製垂飾品(4)、土偶(図版422・423・428・430・432)、その他土製品(図版438・439)等が出土している。特に1・2層や5~8層からは多くの遺物が出土しており、5~8層出土遺物は住居廃絶後、9~12層が自然堆積した後、埋土と共に廃棄されたもの。1・2層出土遺物は、更にその後、4層の自然流入土が堆積した後の凹地に廃棄されたものと考えられる。

【SI80住居跡】(図版47・49・50)

【位置】N-6・W-58 [確認面] 地山面で、北側へ緩やかに傾斜している。

【重複】SI77住居跡、SK119・126・139土壙、SD10溝跡、倒木痕と重複しており、SK119・126・139土壙よりも新しく、その他の遺構よりも古い。

【規模・平面形】中央部をSI77住居跡と倒木痕によって壊されているが、東西約2.9m×南北約11.2mで、北辺に角がつく長楕円形を呈している。なお、西辺で周溝が2条検出されていることから、拡張改築されている可能性がある。この場合、改築前は東西約2.5mの規模となる。

【堆積土】3層認められ、いずれも自然流入土である。この内、3層は中央から南部にかけての壁際を中心に分布しており、層中には壁の崩落土が含まれる。また、住居南西部の1層はSI77から延びる自然堆積層で本住居跡を覆っている。

【壁】殆ど削平されているが、東・西辺の一部に残る。残存する部分では地山を壁としており、外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は10~15cmである。

【床】基本的には地山を床としており、SK119・126・139土壙の上部には厚さ2cm前後の貼床が認められる。横断面をみると、床面は東西の壁際から中央に向かって浅く窪む皿状で、全体的に北東方向へ緩やかに傾斜している。また、長軸線に沿って中央部が硬化している。

【周溝】東辺の南部で1条、西辺で2条、壁に沿って延びる溝を検出している。上幅10~28cm、深さ5~10cmで、断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する。堆積土は地山小ブロックを多量に含む灰黄褐色またはにぶい黄褐色のシルトで、締まりもあることから埋め戻されていたとみられる。なお、西辺の2条の溝は約40cmの間隔で平行して延び、外側のものが壁の直下に位置することから、改築に伴った内から外への造り替えが推測される。

【壁柱穴】溝上面や東・西辺の壁際、四隅付近では壁柱穴と考えられる長軸12~40cmの不整な円形

もしくは梢円形を呈するビット40数個を検出している。この内、P 1～6、P 7～12は長軸線と平行し、1.9～2.5mの間隔で軸線を挟んでほぼ対称に位置している。深さは35～65cmで、他のビットが10cm前後であるのに比べると、かなり深い。細かく配置をみると、P 1～6は東壁からやや外側へ張り出して、P 7～12は西辺外側周溝のやや内寄りに配されており、役割は主柱的なものであったと推測される。なお、P 4・5では、直径20cmの円形を呈する柱痕跡を検出している。更に、P 13～15も同様に深いビットで、その配置からみて改築以前の主柱的な役割のビットであった可能性が強い。

[炉] 長軸線上で長軸5～25cmの不整形を呈する小さな焼け面を10個検出している。大きくみると焼け面の分布範囲は4ヶ所に分けられ、いずれも地床炉と考えられる。

[方向] 長軸線でみると北で約21°西に偏している。

[出土遺物] 堆積土や床面等から、地文のみの縄文土器の口縁部や胴部破片が少量出土している。

【SI78 a～c 住居跡】(図版71・72)

[位置] S-3・W-57 [確認面] 地山

[重複] SB103・154・155・157・158・161掘立柱建物跡、SK105・106・114・115・117土壙などと重複し、SB103・154・155・157、SK105・106より古く、SK114・115より新しい。その他の新旧関係は不明である。また、本住居跡は二度建て替えられており、拡張されている。古いものから順にa～cとする。

《SI78 a》

[規模・平面形] 東西約3.3m×南北約5.3mの隅丸長方形である。

[床・炉] 検出されなかった。

[主柱穴] 4個検出した。南北各辺の20～30cm内側に各2個ずつあり、この内、各々1個で柱痕跡や柱を抜き取った痕跡が認められた。柱間寸法は東西が北側柱列で約1.5m、南北が西側柱列で約4.8mである。柱穴は直径25～30cmのやや不整の円形で、深さは16～28cmである。柱痕跡は長径約13cm、短径約10cmの梢円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含む褐色砂質シルト、柱痕跡が暗褐色砂質シルトである。

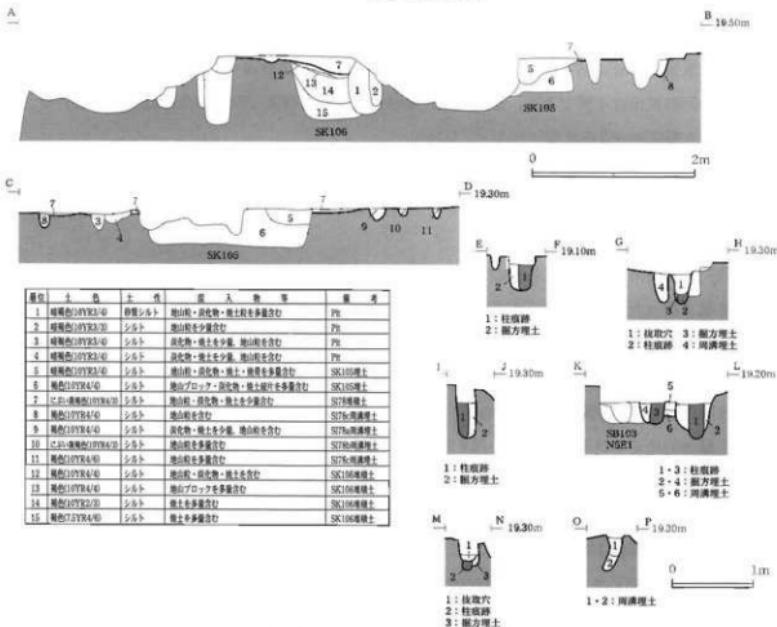
[周溝] 部分的に途切れるものの、南辺をのぞく各辺で検出した。上幅7～32cm、下幅4～18cm、深さ3～33cmで、堆積土は地山ブロックを含む褐色砂質シルトである。西辺では北西隅から南に約1.6m、南西隅から北に約1.7mの部分で溝は内側に約40cm折れ曲がっており、その間、溝は途切れている。堆積土は地山粒、ブロックを含む褐色砂質シルトである。

[壁柱穴] 15個検出した。直径12～24cm、深さ5～43cmの円形である。この内、南西隅の柱穴で柱痕跡や柱を抜き取った痕跡が認められた。柱痕跡は直径約14cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色砂質シルト、柱痕跡は地山ブロックを少量含む褐色砂質シルトである。

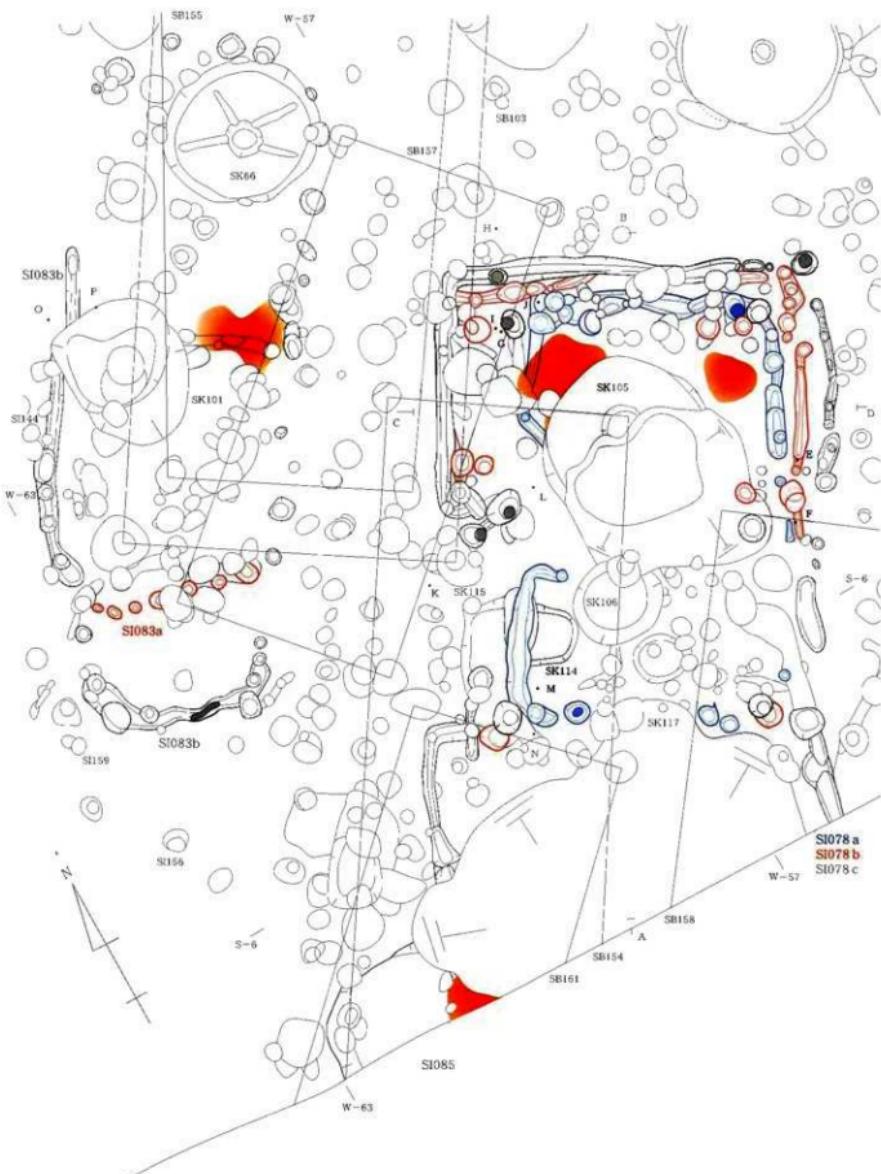
[その他のビット] 周溝が住居内側に折れ曲がった先端部分で1個検出した。直径約14cm、深さ約5cm前後の円形である。



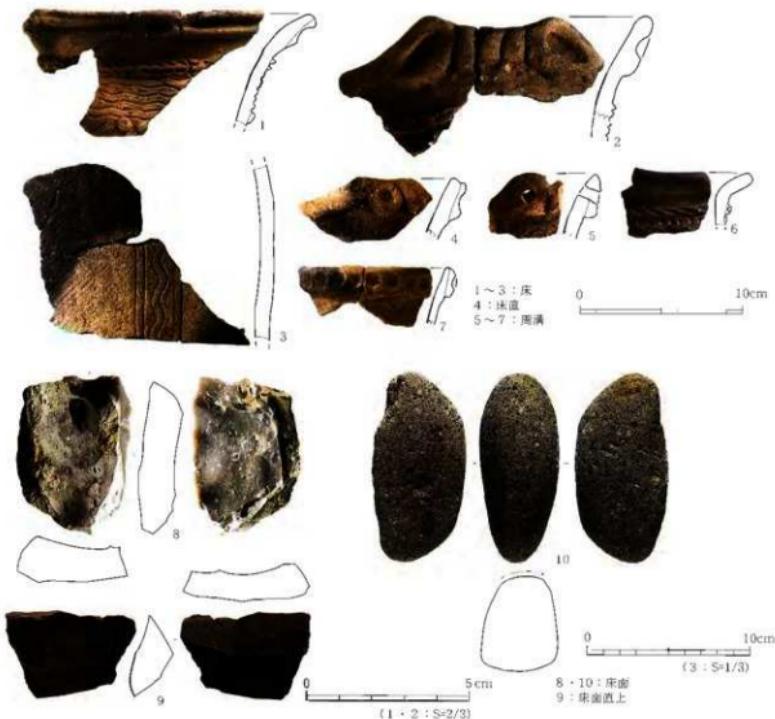
S178・85住居跡(北東から)



図版71 S178・83・85住居跡(1)



図版72 SI78・83・85住居跡(2)



図版73 SI78住居跡出土遺物－繩文土器・石器－

〔方向〕西側主柱列でみると、北で東に約32° 傾している。

〔出土遺物〕出土していない。

《SI78 b》

〔規模・平面形〕東西約4.5m×南北約7.0m以上の隅丸長方形で、南側は調査区外に延びている。

〔床〕地山を床面としている。

〔炉〕2ヶ所検出した。地床炉である。住居北側の両隅付近にあり、東側は1辺65cm前後の不整形を呈する。西側はSK105に接されているため、詳細は不明であるが1辺90cm前後の不整形を呈すると考えられる。焼け面は赤変し、硬化している。

〔主柱穴〕6個検出した。東西1間×南北2間以上で直線的に並んでいる。柱間寸法は東西が北側柱列で約3.4m、南北が西側柱列で北から約1.7m・約3.4mである。柱穴は1辺20~33cmの隅丸方形や直径22~31cmの円形で、深さは30~51cmである。堆積土は地山を含む褐色砂質シルトである。これらの内、柱痕跡を確認できるものは1個のみで長径15cm、短径12cmの楕円形である。

〔周溝〕部分的に途切れるものの、各辺で検出した。上幅7~22cm、下幅5~18cm、深さ3~

11cmで、溝は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

【壁柱穴】主に東西両辺で11個検出した。長径33～40cm、短径23～35cmの楕円形のものと、直径15～20cmの円形のものとがある。深さは20～67cmである。この内、2個で柱痕跡を検出しており、長径約27cm、短径約20cmの楕円形や直径約15cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色砂質シルト、柱痕跡は地山粒、炭化物粒を含む黒褐色砂質シルトである。

【方向】西側主柱列でみると、北で東に約28° 傾している。

【出土遺物】周溝から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

《SI78 c》

【規模・平面形】東西約4.9m×南北7.0m以上の隅丸長方形である。

【壁】残存していない。

【床】SI78 aと同一の面を床としており、床面は地山である。

【炉】SI78 aから継続して使用されたと考えられる。

【主柱穴】6個検出した。東西1間×南北2間以上で直線的に並んでいる。柱間寸法は東西が北側柱列で約3.0m、南北が西側柱列で北から約2.3m・約2.6mである。柱穴は長径34～48、短径24～32cmの楕円形や直径30cm前後の円形などで、深さは49～67cmである。これらの内、柱痕跡を確認できるものは3個あり、長径20cm、短径15cmの楕円形や直径約15cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色砂質シルト、柱痕跡が地山ブロック、炭化物を含む褐色シルトである。

【周溝】部分的に途切れるものの、各辺で検出した。上幅8～30cm、下幅5～24cm、深さ3～29cmである。西辺では溝は北西隅から南に約3.1m、約5.8mの部分で、各々主柱穴に向かって60cm程、ほぼ直角に折れ曲がっており、その間、溝は途切れている。また、先端部は「T」字状となっている。堆積土は地山粒、ブロックを含む褐色砂質シルトである。

【壁柱穴】主に東西両辺で18個検出した。直径11～32cm、深さは5～56cmの円形で、北東隅が特に大きい。この内、掘り方埋土と柱痕跡が明確なものは北東隅の1個のみで、柱痕跡は直径約16cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色砂質シルト、柱痕跡が地山ブロック、炭化物を含む褐色シルトである。

【その他のピット】西辺の南北から延びる周溝が主柱穴方向に折れ曲がり「T」字状となる部分の内側2ヶ所で検出した。掘り方は直径約30cm前後、深さ約35cmのやや不整の円形で、柱痕跡は直径約16cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色砂質シルト、柱痕跡が地山ブロック、炭化物を含む褐色シルトである。

【方向】西側主柱列でみると、北で東に約30° 傾している。

【出土遺物】床面や周溝から縄文土器深鉢の破片(図版73-1～7)や石核(8・9)が磨・凹石(10)等が出土している。

【SI83 a・b住居跡】(図版72)

【位置】 N - 0 - S · W - 60 【確認面】 地山面で壁柱穴と西辺南半の周溝を確認した。

【重複】 SI144・156・159住居跡、SB103・157掘立柱建物跡、SK66・101土壙などと重複し、SI144・156、SK101より古く、SK66より新しい。その他の新旧関係は不明である。また、本住居跡は一度建て替えられており、南辺が1.4m程拡張されている。古いものからSI83 a・bとする。

【方向】 西辺でみると、北で約36° 東に偏している。

《SI83 a》

【規模・平面形】 東西約3.0m×南北約7.1mの長楕円形を呈する。

【床・壁】 残存していない。

【炉】 住居内で約0.5×約1.2mの不整形の焼け面を1ヶ所検出したが、東辺に極めて近いなど、不明な点もあり、本住居に伴なわないものである可能性も残すものと考えられる。

【主柱穴】 検出されなかった。

【周溝】 西辺南半で検出した。上幅15～25cm、下幅4～14cm、深さ13～42cmで、堆積土は地山ブロックを含む褐色やぶい黄褐色砂質シルトである。

【壁柱穴】 25個検出した。平面形は直径12～36cmの円形や、1辺約30cm前後の隅丸方形、長径36～45cm、短径18～23cmの楕円形等である。深さは5～79cmである。柱痕跡は検出されなかった。堆積土は地山を含む暗褐色シルトである。

【出土遺物】 出土していない。

《SI83 b》

【規模・平面形】 東西約3.0m×南北約8.5mの長楕円形を呈する。SI183 a南辺を拡張したものであり、他は同様である。

【壁柱穴】 26個検出した。その内、拡張後のものは8個である。これらは直径14～24cmの円形や、長軸30～42cm、短軸24～32cmの隅丸長方形で、後者は両隅に配置されている。深さは5～54cmで両隅が深い。柱痕跡は検出されなかった。堆積土は地山を含む暗褐色シルトである。

【周溝】 南東隅で検出した。上幅13～23cm、下幅4～14cm、深さ3～11cmで、堆積土は地山ブロックを含む褐色砂質シルトである。

【出土遺物】 周溝や確認面などから縄文土器深鉢の破片が極少量出土している(図版74)。

【SI85住居跡】(図版71・72)

【位置】 S - 4 · W - 63 【確認面】 地山

【重複】 東側の倒木痕に接されている。

【規模・平面形】 住居北側の一部が調査区にかかったもので、平面形や全体の規模は不明である。

【堆積土】 地山や焼土粒を少量含む暗褐色シルトである。

【壁】 約7cm残存している。



図版74 SI83住居跡出土遺物

【床】地山を床としている。

【炉】地床炉である。東側は倒木痕に壊され、南側は調査区外の為、平面形・規模は不明である。

【主柱穴・壁柱穴・周溝】検出されなかった。

【出土遺物】出土していない。

【SI86住居跡】(図版75)

【位置】N-9・W-42 [確認面] 地山

【重複】SI45・96住居跡、SB137掘立柱建物跡などと重複し、これらより古い。

【規模・平面形】北西部がSI45に壊されているため、平面形は明確ではないが、東西約2.1m×南北約3.4mが残存し、隅丸長方形あるいは不整橢円形を呈していたものと考えられる。

【堆積土】1層確認されている。地山ブロックを多く含む褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

【壁】東辺と南辺に残存し、地山を壁としている。床面から緩やかに立ち上がっており、最も残りの良い東辺で約6cm残存する。

【床】他の遺構に壊されているため、残りが悪く不明な点が多いが、地山を床としており、壁際に向かってやや高くなっている。

【炉】床面北寄りに、地床炉と考えられる、径約3~18cmの不整形を呈する小さな焼け面を10ヶ所検出している。

【主柱穴・壁柱穴】住居内には多数のビットが確認されているが、本住居に伴うものを明確にすることは出来なかった。

【周溝】検出されなかった。

【方向】東辺でみると、北で約15°東に偏している。

【出土遺物】周溝等から地文のみの縄文土器胴部破片が極少量出土している。

【SI96住居跡】(図版75)

【位置】N-9・W-42 [確認面] SI86堆積土および地山である。

【重複】SI45・47・86住居跡と重複し、SI86よりも新しく、SI45・47との新旧関係は不明である。

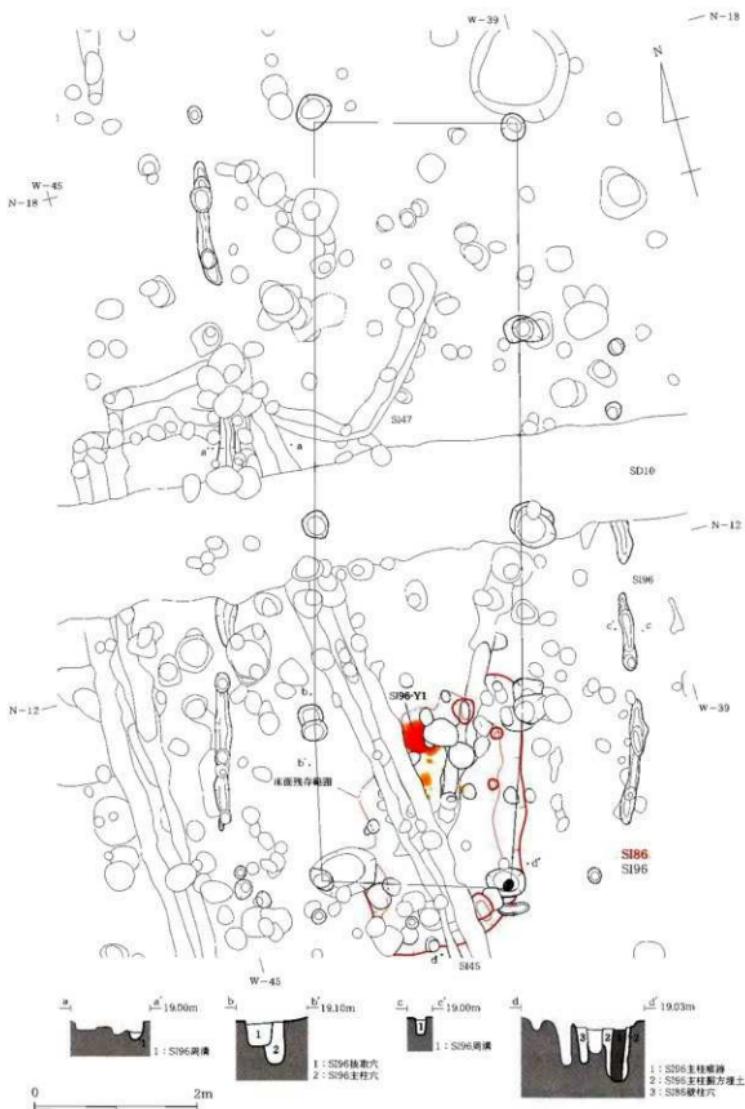
【規模・平面形】北部が調査区外に延びているため規模は明確ではないが、現存長で東西5.3m×南北10.3mの長方形あるいは隅丸長方形を呈していたと推定される。

【堆積土・壁】残存していない。

【床】炉付近はSI86堆積土を床面としているが、そのほかの部分については不明。

【炉】南から2本目の柱穴の間に焼け面が認められる(Y1)。他の遺構に壊されているため平面形は不明であるが、現存で南北50cm、東西55cmで、表面はほぼ平坦である。

【柱穴】10個検出した。東西1間×南北4間以上ではほぼ直線的に並んでいる。柱間寸法は東西が北側柱列で約2.6m、南北が東側柱列で南から約2.2m・約2.3m・約2.4m・約2.5mである。柱穴は径24~35cmの円形や橢円形で、深さは16~77cmである。これらの内、柱痕跡を確認できるものは1個あり、長径15cm、短径12cmの橢円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色シルト、柱痕跡が地山粒、炭化物を含む褐色シルトである



図版75 SI86・96住居跡

【周溝・壁柱穴】東辺南側および西辺に断続的に認められる。幅15~26cmで、確認面からの深さは6~22cmである。また、周溝底面もしくはその延長上では壁柱穴と考えられる径15~30cmの円形を基調とするピット13個を検出している。深さは16~47cmである。

【方向】東側柱列でみると北で東に約13°偏している。

【出土遺物】周溝や確認面から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI100 a・b住居跡】(図版76~78)

【位置】N-9・W-64 [確認面] 地山およびSI120堆積土上面

【重複】SI120・173・174住居跡、SK87・127土壤と重複し、SK87より古く、その他より新しい。また、本住居跡は一度建て替えられており、南辺を除く各辺が10~35cm程拡張されている。古いものからSI100 a・bとする。

《SI100 a》

【規模・平面形】東西約4.6m×南北約7.8mの隅丸長方形である。

【床】地山を床面としている。

【炉】7ヶ所検出した。SI100 bと継続して使用されたと考えられる、地床炉である。住居ほぼ中央の長軸線上にあり、平面形は最も大きいものが長軸約200cm以上、短軸約66cm、他は長軸30~54cm、短軸12~40cmの不整形を呈している。焼け面は赤変しており、北側の大きな焼け面は硬化している。

【主柱穴】8個検出した。炉を取り囲むように東西1間×南北3間で直線的に並んでいる。柱間寸法は東西が南側柱列で約2.7m、南北が東側柱列で北から約1.9m・約1.8m・約1.8mで、総長約5.5mである。柱穴は1辺35~50cm、深さ59~85cmの隅丸方形で、柱は多くが抜き取られており、柱痕跡を確認できるものは2個のみで直径17~20cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む暗褐色シルト、柱痕跡が炭化物粒、地山粒を含む暗褐色シルトである。

【周溝】部分的に途切れるものの、全辺で検出した。上幅12~22cm、下幅8~14cm、深さ9~31cmで、溝は地山ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されており、北辺では壁側に沿って上幅8~10cm、下幅3~5cm、深さ30cm前後の壁材と思われる痕跡やあるいはそれを抜いたと考えられる上幅20cm前後、下幅10cm前後、深さ25~29cmの暗褐色シルトの堆積土が認められる。

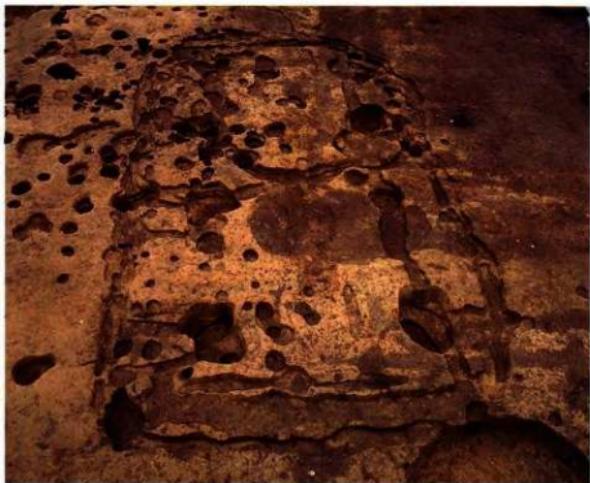
【壁柱穴】18個検出した。四隅と東西各辺にあり、その多くは直径14~25cm、深さ21~54cmの円形である。但し、南西隅のみ、長軸約50cm、短軸37cm、深さ92cmの不整隅丸長方形を呈する明確な掘り方埋土を有している。堆積土は暗褐色シルトである。

【その他の溝】東西壁柱から主柱穴へ延びる溝を4条検出した。これらは間仕切り溝と考えられ、長さは60cm前後、上幅17~30cm、下幅6~15cm、深さ18~39cmで、北東側の溝の底面には凹凸が認められる。堆積土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【方向】東側主柱列でみると、北で東に約17°偏している。

【出土遺物】地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

《SI100 b》



SI100・142・143住居跡(北東から)



SI100a南西隅壁柱(北西から)



SI100b南西隅壁柱(北西から)

図版76 SI100・142・143住居跡(1)

〔規模・平面形〕東西約5.0m×南北約8.2mの隅丸長方形である。

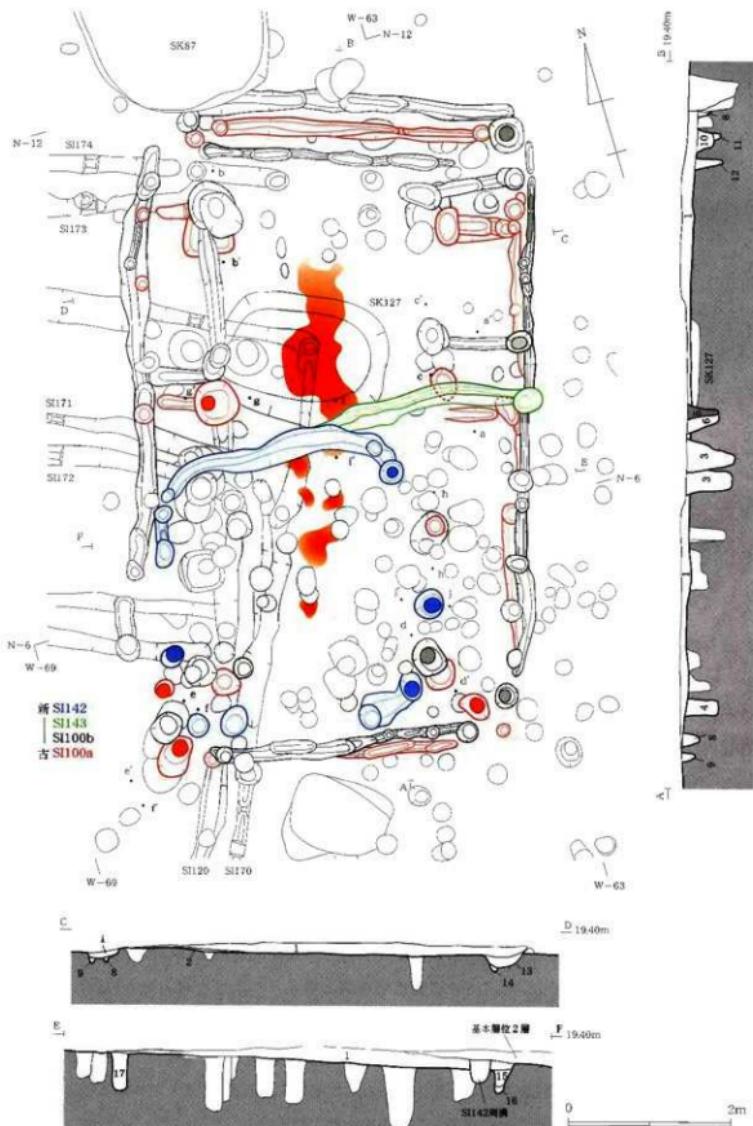
〔堆積土〕2層認められる。ともに自然流入土で1層は地山や炭化物を含む黒褐色シルト、2層も同様の黒褐色シルトであるが、黑色土や焼土粒をやや多く含む。

〔壁〕最も残りの良い北壁で約8cm残存しており、ほぼ垂直に立ち上がっている。

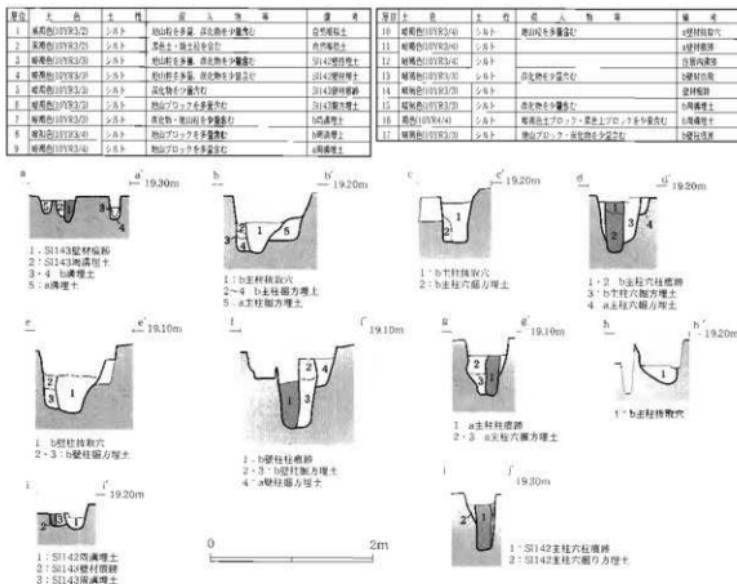
〔床〕SI100aと同一の面を床としており、床面は地山である。

〔炉〕SI100aから継続して使用されたと考えられる。

〔主柱穴〕8個検出した。炉を取り囲むように東西1間×南北3間で直線的に並んでいる。規模は東西が北側柱列で約2.7m、南北が東側柱列で総長約5.6m、柱間寸法は北から約1.7m・約1.8m・約2.1mである。柱穴は直径28~50cm、深さ64~80cmのやや不整円形で、柱は多くが抜き取られており、柱痕跡を確認できるものは南東隅のみで直径22cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む暗褐・褐色シルト、柱痕跡が地山粒を含む暗褐色シルトである。



図版77 Si100・142・143住居跡(2)



図版78 SI100・142・143住居跡(3)

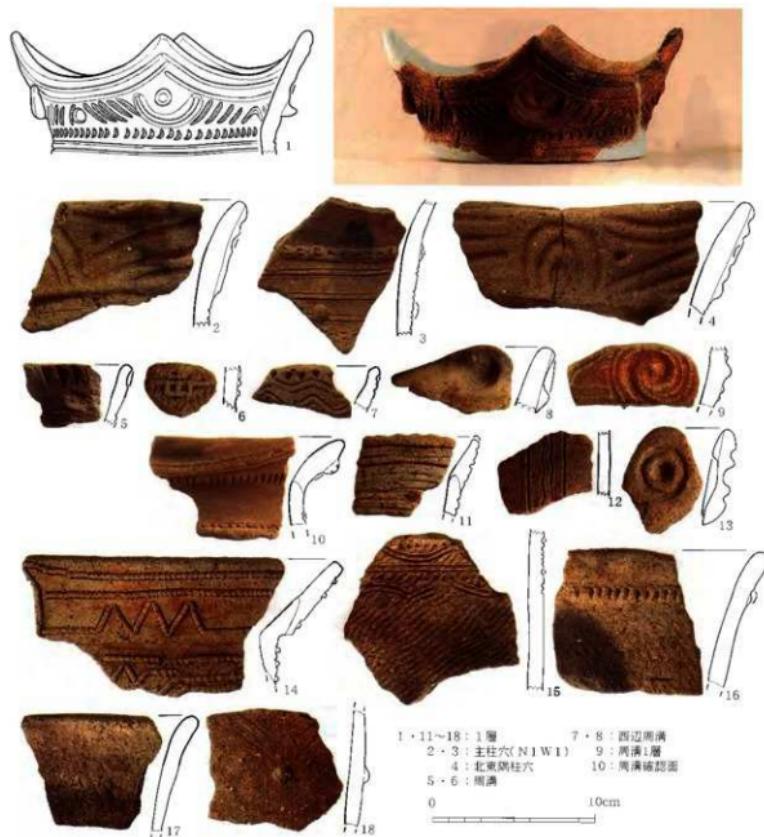
【周溝】四隅やその周辺で部分的に途切れるものの、全辺で検出した。上幅8~35cm、下幅5~15cm、深さ8~32cmで、溝は炭化物粒を含む暗褐色シルトで埋め戻されており、東西辺の一部には壁に沿って壁材と思われる上幅10cm前後、下幅5cm前後の溝状の痕跡も認められる。

【壁柱穴】22個検出した。四隅と東西各辺にあり、四隅の柱穴は比較的大きく、平面形は直径25~45cm、深さ55~72cmのやや不整円形で、柱痕跡は直径約18cmの円形である。西側の2ヶ所で抜き取りの痕跡が認められる。その他は直径15~30cmの円形や長径28~32cm、短径20~22cmの楕円形で、掘り方と柱痕跡が明確なものは2個有り、直径15cm前後の円形や長軸19cm、短軸13cmの楕円形である。堆積土は掘り方理土が地山ブロックを含む暗褐色シルト、柱痕跡は地山粒、炭化物粒を含む暗褐色シルトである。

【その他の溝】東西壁柱から主柱穴に向かって延びる溝を3条、北壁の約70cm内側を壁に平行して東西に延びる溝を1条検出した。前者は間仕切り溝と考えられ、長さは70cm前後、上幅13~18cm、下幅7~8cm、深さ10~24cmである。堆積土は地山を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。後者は長さ約3.1m、上幅10~18cm、下幅4~10cm、深さ7~36cmで、底面には凹凸が認められ、8~44cmの間隔をあけて、長さ50~65cm単位で溝底が13~29cm深くなっている。堆積土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【方向】東側柱列でみると、北で東に約16°偏している。

【出土遺物】主柱穴、周溝、堆積土等から縄文土器深鉢の破片(図版79)や石鎌、石斧、不定形石器(図



図版79 SI100住居跡出土遺物－縄文土器－

版80)等が出土している他、堆積土中から土偶や土製品(図版424・438・439)等が出土している。

【SI142住居跡】(図版76~78)

【位置】N-6・W-66【確認面】地山およびSI100堆積土上面

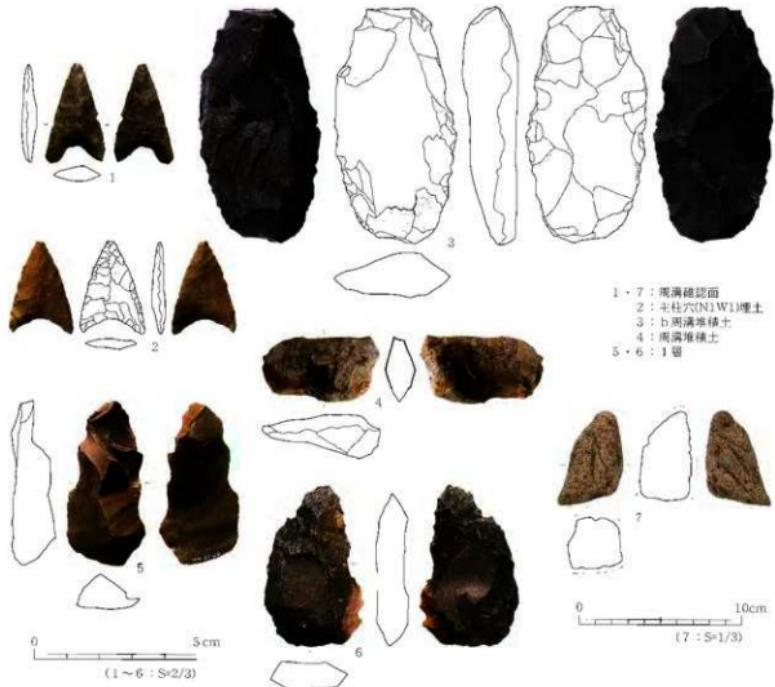
【重複】SI100・120・143住居跡などと重複し、これより新しい。

【規模・平面形】東西約3.3m×南北約3.5mの不整な円形である。

【壁・床面】残存していない。

【炉・主柱穴】検出されなかった。

【周溝】北辺と南東隅で検出した。北辺は幅17~35cm、深さ17~31cm、南東隅では、幅22~45cm、深さ約35cmで、溝には地山粒を多く含む暗褐色シルトが堆積している。



図版80 SI100住居跡出土遺物－石器－

【壁柱穴】11個検出した。これらは直徑20~40cm、深さ31~73cmの円形で、堆積土は地山粒を含む暗褐色シルトである。掘り方と柱痕跡が明確なものは4個有り、柱痕跡は直徑15~20cmの円形である。堆積土は掘り方が地山粒を多く含む暗褐色シルト、柱痕跡が地山粒、炭化物粒を少量含む暗褐色シルトである。

【方向】北辺でみると、東で約3° 南に偏している。

【出土遺物】周溝や壁柱穴から縄文土器片が少量出土したのみである。

【SI143住居跡】(図版76~78)

【位置】N-6・W-63 【確認面】地山およびSI100堆積土上面

【重複】SI100・142住居跡などと重複し、SI142より古く、SI100より新しい。

【規模・平面形】北辺の周溝および壁柱穴が検出されたのみであり、全体の規模や平面形は不明である。また、周辺では多数のPitが確認されているが、削平による残存不良のため、本住居跡にともなうものを明確にすることはできなかった。

【壁・床面】残存していない。

【炉・主柱穴】検出されなかった。

【周溝】北辺で検出した。上幅16~30cm、下幅8~13cm、深さ28~33cmで、溝は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで埋め戻されており、壁側に沿って壁材を抜き取った痕跡と思われる幅7~16cm、深さ30前後の地山粒を含む暗褐色シルトの堆積土が認められる。

【壁柱穴】1個検出した。長径35cm、短径30cmの楕円形で、深さは16~49cmである。堆積土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

【方向】東辺でみると、北で約8° 東に偏している。

【出土遺物】周溝から地文のみの縄文土器腹部破片等が極少量出土している。

【SI120住居跡】(図版81~84)

【位置】N-0-S・W-87 [確認面] 地山およびSI121堆積土上面

【重複】SI90・100・121・142・170・171・172・430住居跡、SK431土壌と重複している。
SI90・100・142・430、SK431よりも古く、その他の住居よりも新しい。

【規模・平面形】東西5.6m×南北9.8mで、長方形を呈する。

【堆積土】1層認められる。焼土を多量、炭化物・地山粒を多量含む暗褐色シルトで自然流入土である。

【壁】殆ど残存しないが、最も残りの良い東辺で約5cm前後あり、地山を壁としている。

【床】地山やSI121堆積土上面、炉跡付近では焼土、炭化物、地山粒を少量含む暗褐色シルトを部分的に貼って床としている。各辺から中央部に向かって若干、窪んでいるが、床面はほぼ平坦である。

【炉】住居内では合計16個の焼け面を検出しているが、この中でもY1~8は貼床上面で検出しており、本住居跡が作られてから形成された焼け面である。これらは大きくみると住居長軸線の両脇に2列に配置されており、そのことから、貼床との関係が不明なY9や貼床下から貼床のない地山部分にかけて範囲が広がっているY10~14についても、ほぼ2列の軸線上にのっており、旧住居跡から連続して、この場所が使用された結果、焼け面範囲が形成されたものである可能性も否定できない。

平面形はいずれも不整形で、全て地床炉と考えられる。焼け面はいずれも強く焼けて硬化している。

範囲の規模は以下の通りである。

Y1: 約40cm×約88cm Y2: 約105cm×約200cm Y3: 約72cm×約136cm

Y4: 約68cm×約104cm Y5: 約48cm×約200cm Y6: 約18cm×約24cm

Y7: 約24cm×約42cm Y8: 18cm×約24cm Y9: 約36cm×約176cm

Y10: 約70cm×約96cm Y11: 約12cm×約24cm Y12: 約24cm×約47cm

Y13: 約16cm×約48cm Y14: 約30cm×約248cm

【主柱穴】8個検出した。掘り方は径約40~95cmの不整円形や長軸30cm、短軸45cmの不整楕円形で、深さは40~65cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは4個あり、柱痕跡の平面形は径20~30cmの円形や長軸25cm、短軸18cmの楕円形である。柱間寸法は、南側柱列で約4.1m、西側柱列でほぼ約2.6m等間で全長約7.8mである。堆積土は柱痕跡が地山粒や炭化物を含む



SI120・170～172住居跡(北東から)



炉跡(南西から)



炉跡断面(南から)



SI170東周溝(北から)



SI120東周溝(北から)

図版81 SI120・170～172住居跡(1)



図版82 SI120・170～172住居跡(2)



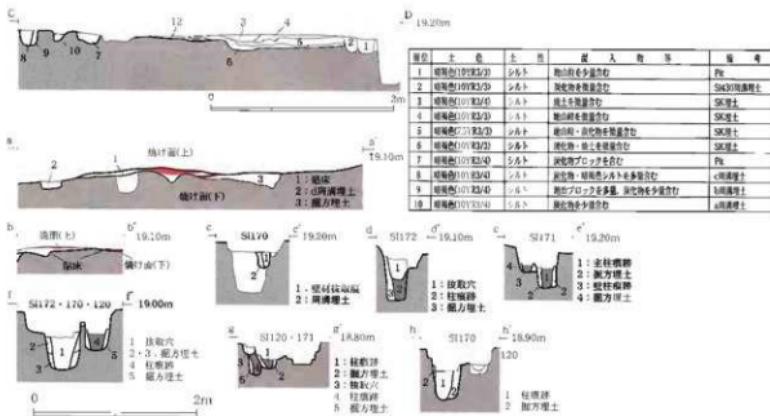
SI120主柱穴(N2E1)



SI120主柱穴(N2W1)



SI170床面出土遺物(北から)



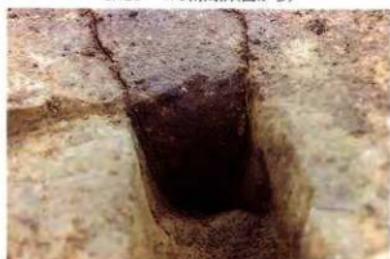
図版83 SI120・170～172住居跡(3)



SI120・170南周溝(西から)



SI170北周溝(東から)



SI171北周溝(東から)



SI120北周溝(東から)



SI172北周溝(東から)



SI172主柱穴(N1W1)

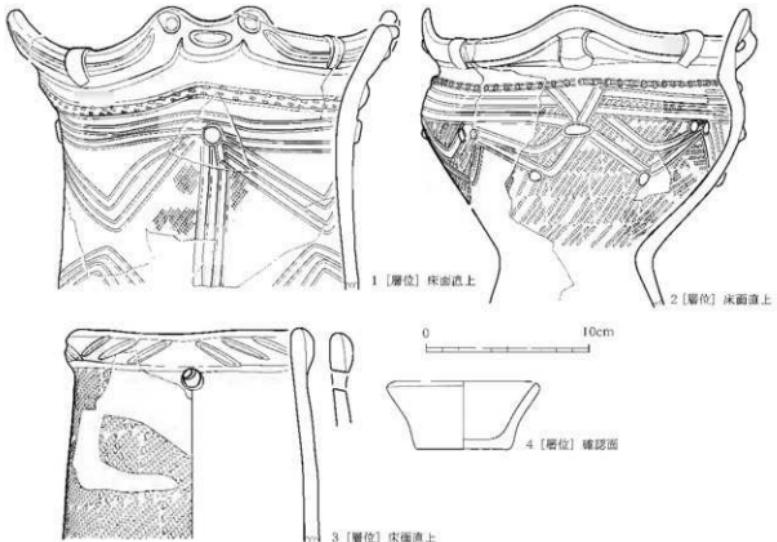


SI171主柱穴(N1W1)



SI170主柱穴(N4W1)

図版84 SI120・170～172住居跡(4)



図版85 SI120住居跡出土遺物－縄文土器(1)－

暗褐色シルト、掘り方理土が地山を含む褐・暗褐色シルトである

【周溝】周溝は各隅と西辺中央部で部分的に途切れるがほぼ全周する。上幅10～30cm、深さ5～25cmで、断面は基本的に「U」字状を呈する。各辺の中では北辺が他よりやや深くなっている。堆積土は主に地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

【壁柱穴】北東・南東の各隅と周溝上面では壁柱穴と考えられる長軸16～35cmのやや不整な円形を呈するピット8個を検出している。深さは24～62cm前後で、隅柱が他と比べて深くなっている。

【その他の溝跡】住居北辺の約40cm外側で、北辺と方向を一にする溝跡を1条検出している。上幅15～30cm、深さ5cm前後で、断面は基本的に「U」字状を呈する。重複関係では、本住居跡と同様焼け面Y16より新しく、本住居を抵張した周溝の可能性も考えられる。

【方向】東側柱列でみると、北で東に約23°偏している。

【出土遺物】床面や周溝、主柱穴、堆積土等から縄文土器深鉢や小型土器(図版85・86・89-1～10)、石錐(図版90-2)、楔形石器(3)、石核(4)、磨石(5)、磨・敲石(6)、磨・凹石(7・8)、土製品(図版439)が出土している。

【SI170住居跡】(図版81～84)

【位置】N-0-S・W-87【確認面】地山およびSI121堆積土上面

【重複】SI90・100・120・121・142・171・172・174・430住居跡、SK127・431土壤と重複している。SI90・100・120・121・142・430、SK127・431よりも古く、その他の住居よりも



図版86 SI120住居跡出土遺物－縄文土器(2)－

新しい。

[規模・平面形] 東西6.5m×南北14.1mで、長方形を呈する。

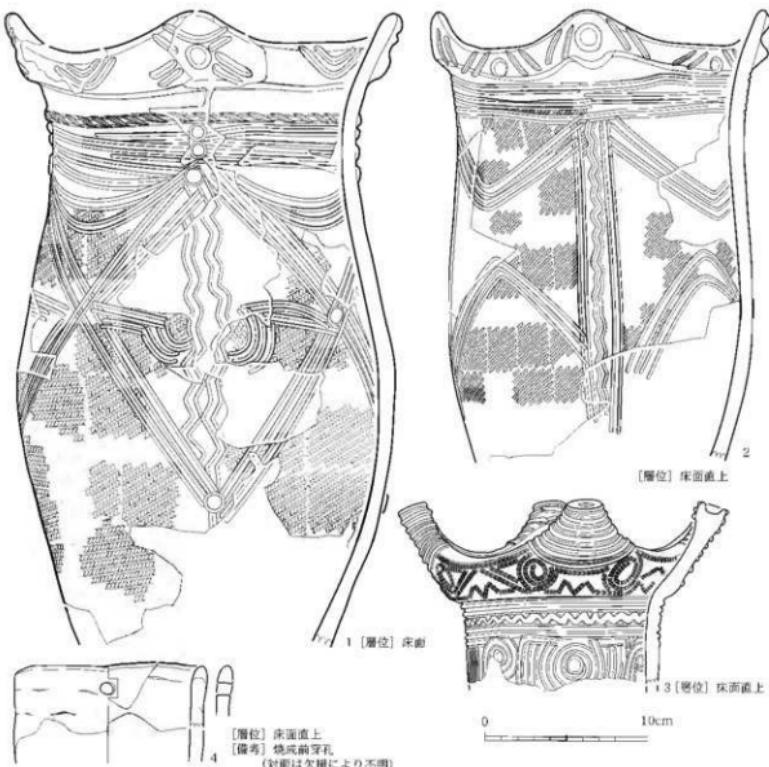
[堆積土] 1層認められる。焼土を多量、炭化物・地山粒を多量含む暗褐色シルトで自然流入上である。

[壁] 残りしないが、最も残りの良い東辺で約8cm前後あり、地山を壁としている。

[床] 地山やSI121堆積土上面を床としている。床面はほぼ平坦である。

[炉] 住居内にあり、SI120貼床より古い、あるいは貼床との重複がない焼け面はY9～19の合計11ヶ所検出している。本住居跡に伴うものとしては、SI171・172よりも新しいY17～19が考えられる。但し、その他についても、Y14をのぞき、SI120と同様、ほぼ住居長軸線の両脇に2列に配置された位置にあり、これらも本住居機能時に使用されていた可能性のあるものものと考えられる。Y14については住居ほぼ中軸線上にあり、他とは、若干異なった、位置関係にあるが、確認面や重複関係から、住居との関係を明確にすることは出来なかった。平面形はいずれも不整形で、全て地床炉と考えられる。焼け面はいずれも強く焼けて硬化している。範囲の規模は以下の通りである。

Y15：約96cm×約112cm Y16：約48cm×約280cm



図版87 SI170住居跡出土遺物－縄文土器(1)－

Y17：約70cm×約112cm Y18：約45cm×約55cm Y19：約15cm×約35cm

【主柱穴】12個検出した。掘り方は径約38～65cmの不整円形で、深さは63～78cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは6個、柱の抜き取り痕跡が認められたものは3個あり、柱痕跡の平面形は径25cm前後の円形である。柱間寸法は、北側柱列で4.4m、西側柱列で北から2.6m・2.8m・2.4m・2.9mである。堆積土は柱痕跡や抜き取り痕跡が地山や炭化物を含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山や炭化物を少量含む暗褐色シルトである。

【周溝】残りの悪い西辺で部分的に途切れるがほぼ全周する。上幅8～40cm、深さ22～59cmで、各辺の中では北辺が他よりやや深くなっている。断面は基本的に「U」字状を呈し、北辺では壁材を抜き取ったと考えられる溝状の痕跡が認められた。堆積土は主に焼土や地山粒を含む暗褐色シルトである。

【壁柱穴】SI90に壊される南東隅を除く住居隅と周溝上面で、壁柱穴と考えられる径15～35cmのや



3-1

3-2



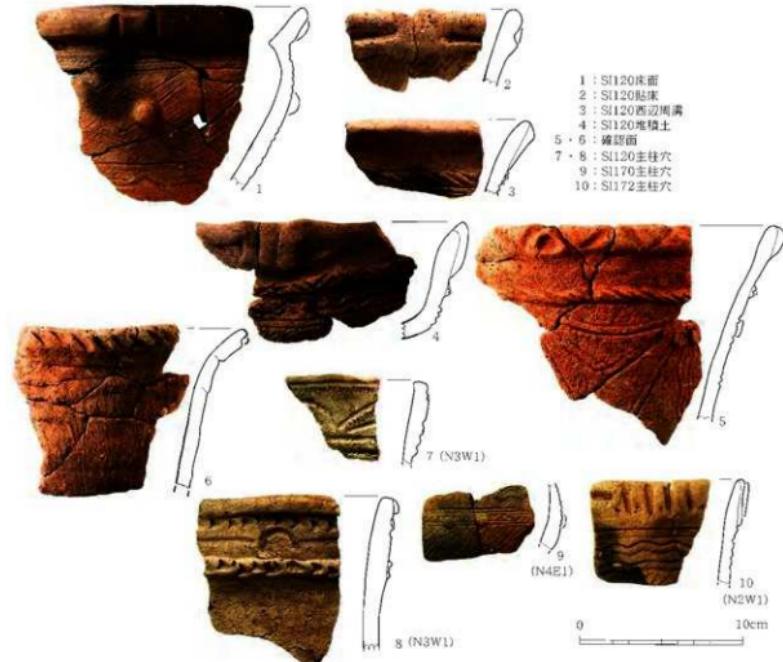
3-3



3-4

图版88 SI170住居跡出土遺物—繩文土器(2)—

<回転方向



図版89 SI120・170・172住居跡出土遺物—繩文土器—

や不整な円形を呈するピット14個を検出している。深さは27~45cmである。

[方向] 東側柱列でみると、北で東に約25° 傾いている。

[出土遺物] 床面や周溝、主柱穴、堆積土等から繩文土器深鉢(図版87・88・89-11・12)や、石鏃(図版90-1)、石皿(9)等が出土している。

[SI171住居跡] (図版81~84)

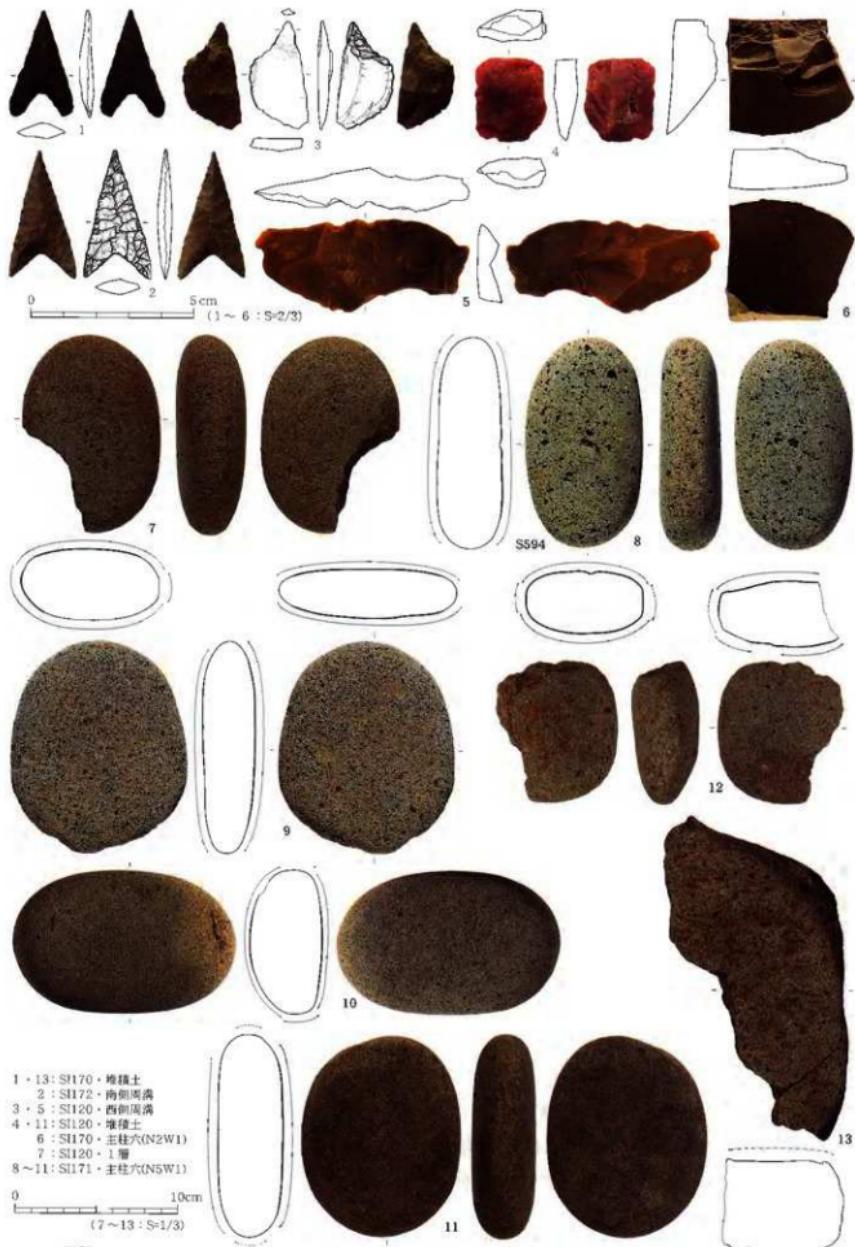
[位置] N-0-S・W-87 [確認面] 地山およびSI121堆積土上面で、北・東側周溝と主柱穴、壁柱穴を確認した。

[重複] SI90・100・120・121・142・170・172・430住居跡、SK431土壤等と重複している。SI90・100・120・142・170・430、SK431よりも古く、SI121・172よりも新しい。

[規模・平面形] 南・西側周溝が残存しないため詳細は不明であるが、残存する主柱穴と周溝との距離から東西約6.0m×南北約12.5mの長方形、あるいは隅丸長方形を呈すると推定される。

[堆積土・壁] 残存していない。

[床] 大部分がSI170と重複するため、詳細は不明であるが、住居内で検出した焼け面は非常に硬化しており、長期間同一面が使用されたと考えられることから、概ねSI170と同じく地山を床面とし



図版90 SI120・170・171住居跡出土遺物—石器—

ていたものと考えられる。

〔炉〕 本住居内にあり、SI120貼床より古い、あるいは貼床との重複がない焼け面としてはY9～16・19が相当し、本住居機能時に形成された焼け面の可能性が考えられる。但し、これらはSI170のものとした焼け面と重複しており、これらを、新旧関係や確認面等からSI170機能時に使用されていた焼け面と本住居跡のものとを判別することはできなかった。

〔主柱穴〕 10個検出した。掘り方は径約38～55cmの不整円形で、深さは36～100cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは5個、柱の抜き取り痕跡が認められたものは1個あり、柱痕跡の平面形は径25cm前後の円形である。柱間寸法は、北側柱列で約4.1m、西側柱列で北から約3.0m・2.8m・3.1m・2.3mである。堆積土は柱痕跡や抜き取り痕跡が暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックをやや多く含む暗褐色シルトである

〔周溝〕 上幅12～24cm、深さ5～14cmで、断面は「U」字状を呈する。堆積土は主に焼土や地山粒を微量含む暗褐色シルトである。

〔壁柱穴〕 北東隅と北側周溝上面で、壁柱穴と考えられる径20～30cmのやや不整な円形を呈するピット3個を検出している。深さは北辺西側ピットで約43cmである。

〔方向〕 西側柱列でみると、北で東に約25°偏している。

〔出土遺物〕 周溝、主柱穴から地文のみの繩文土器副部破片等が極少量出土している。

〔SI172住居跡〕(図版81～84)

〔位置〕 N-0-S・W-87〔確認面〕 地山およびSI121堆積土上面で、南・北周溝と東側周溝の一部、主柱穴、壁柱穴を確認した。

〔重複〕 SI100・120・121・142・170・171・430住居跡、SK127・431土壤と重複している。SI100・120・142・170・171・430、SK127・431よりも古く、その他の住居よりも新しい。

〔規模・平面形〕 東側周溝が残存しないため短軸の詳細は不明であるが、残存する主柱穴と周溝との距離から、東西約5.5m×南北約8.6mの偶丸長方形を呈すると推定される。

〔堆積土・壁〕 残存しない。

〔床〕 本住居跡も大部分がSI170と重複するため、詳細は不明であるが、SI171と同様、概ねSI170と同じく地山を床面としていたものと考えられる。

〔炉〕 本住居内にあるY9～16が本住居跡に伴う可能性を有するが、これもSI171と同様、SI170のものとした焼け面と重複しており、これらを、新旧関係や確認面等からSI170・171機能時に使用されていた焼け面と本住居跡のものを判別することはできなかった。

〔主柱穴〕 4個検出した。掘り方は径約35～64cmの不整円形で、深さは26～66cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは2個、柱の抜き取り痕跡が認められたものは2個あり、柱痕跡の平面形は径25～33cmの円形である。柱間寸法は、北側柱列で約3.8m、西側柱列で約6.2m(2間)である。また、SI120に埋されており詳細は不明だが、北側柱列と同様に、周溝にとりつくようなかたちで南側柱列もあると仮定すれば、更に1間分南に延びる可能性も考えられる。堆積土は柱痕跡が暗褐色シルト、抜き取り痕跡は焼土や炭化物、地山ブロックを含む暗褐色シルト、掘り方埋

土が地山ブロックを含む暗褐色シルトである

【周溝】上幅8~30cm、深さ13~30cmで、断面は「U」字状を呈する。堆積土は主に焼土や褐色シルト、炭化物を少量含む暗褐色シルトである。

【壁柱穴】北東隅と南・東側周溝上面で、壁柱穴と考えられる径20~30cmのやや不整な円形を呈するピット3個を検出している。深さは北東隅で約58cmである。

【方向】西側柱列でみると、北で東に約23°偏している。

【出土遺物】主柱穴から繩文土器深鉢の破片(図版89-13)が出土している。

【SI173住居跡】(図版81・82)

【位置】N-12・W-68 [確認面] 地山面で、南辺周溝と東辺壁柱穴および炉跡を確認した。

【重複】SI100住居跡、SK87・109土壤と重複し、これらよりも古い。

【規模・平面形】南辺以外残存しないため詳細は不明である。

【堆積土・壁】残存しない。

【床】削平により、殆ど残存していないが、焼け面の周囲に炭の痕跡が認められ、この周辺にのみ微かに残存する。地山を床面としている。

【炉】1個所検出した(Y21)。約10cm×20cmの不整形を呈している。

【主柱穴】確認されなかった。

【周溝】周溝は上幅15~30cm、深さ5~38cmで、断面は「U」字状を呈する。堆積土は主に地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。

【壁柱穴】東辺南端で、壁柱穴と考えられる径20cm前後の円形を呈するピット3個を検出した。深さは約15~57cmである。

【方向】南辺でみると、東で南に約13°偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SI174住居跡】(図版81・82)

【位置】N-10・W-69 [確認面] 地山面で、北側周溝と炉跡を確認した。

【重複】SI100・170・173住居跡、SK109土壤と重複している。SI100・170より古く、SI173、SK109よりも新しい。平面形・規模は不明である。

【堆積土・壁・床】残存しない。

【主柱穴】検出されなかった。

【炉】1個所検出した(Y20)。約104cm×約144cmの不整形である。

【周溝・壁柱穴】上幅18~25cmで、深さは約25cmである。断面形は「U」字状で、堆積土は地山粒や炭化物を少量含む暗褐色シルトを主体としている。更に、周溝上面で壁柱穴と考えられる直径24~28cm、深さ33~37cmのピットを2個検出している。

【方向】北側周溝でみると、西で北に約18°偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SI121住居跡】(図版91)

[位置] N - 0 - S - W - 72 [確認面] 地山
[重複] SI120住居跡と重複し、これより古
い。

[規模・平面形] 東西約2.5m×南北約2.8m
の隅丸方形である。

[堆積土] 1層認められる。地山粒を含む暗
褐色シルトが堆積している。

[壁] 最も残りの良い南東隅で高さ23cm程
が残存し、やや斜めに立ち上がっている。

[床] 地山を床面としている。

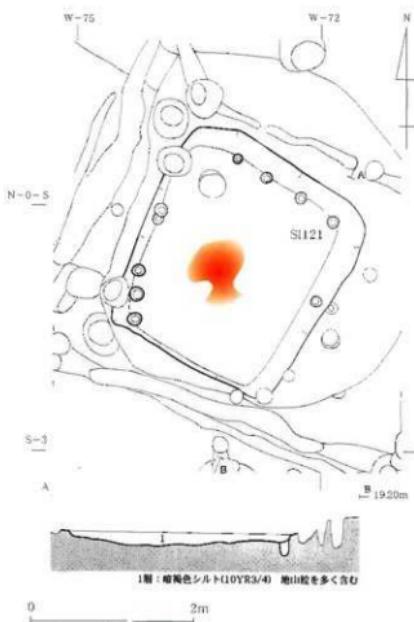
[炉] 住居中央で1ヶ所検出した。地床炉で
ある。平面形は約80cm×約60cmの不整
形を呈し、焼け面は赤変し、硬化している。

[主柱穴・周溝] 検出されなかった。

[壁柱穴] 17個検出した。直径10~20cm、
深さ14~43cmの円形で、堆積土は地山砂
を多く含む暗褐色シルトである。

[方向] 東辺でみると、北で約25° 東に偏し
ている。

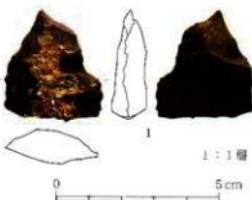
[出土遺物] 堆積土や確認面から縄文土器深
鉢の破片や不定形石器(図版92・93)等が出土してい
る。



図版91 SI121住居跡出土遺物—縄文土器—



図版92 SI121住居跡出土遺物—縄文土器—



図版93 SI121住居跡出土遺物—石器—



SI320住居跡(北から)



1層遺物出土状況(西から)



1層遺物出土状況(拡大)

図版94 SI320住居跡(1)

【SI320住居跡】(図版94～105)

【位置】 N-3・W-111 [確認面] 地山で、東側へ緩やかに傾斜している。

【重複】 SK365・366土壙と重複しており、これらよりも新しい。また、SI368住居跡との重複も予想されるがその前後関係は不明である。

【規模・平面形】 住居南側が調査区外に及ぶことから全体の規模は不明であるが、東西3.5m×南北4.8m以上で、方形を基調とする。なお、東辺で溝を2条確認しており、住居が拡張改築されている可能性がある。この場合、改築前は東西約3.3mの規模となる。

【堆積土】 6層認められ、第2～6層は自然流入土である。なお、断面には掛からないものの住居北西隅の第2層上部には土器・石器・獸骨を多く含む黒褐色シルト層(第1層)が分布しており、廃絶後の住居内に捨てられた遺物の集中層と考えられる。

【壁】 地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りの良い西壁北部で床面から30cmある。

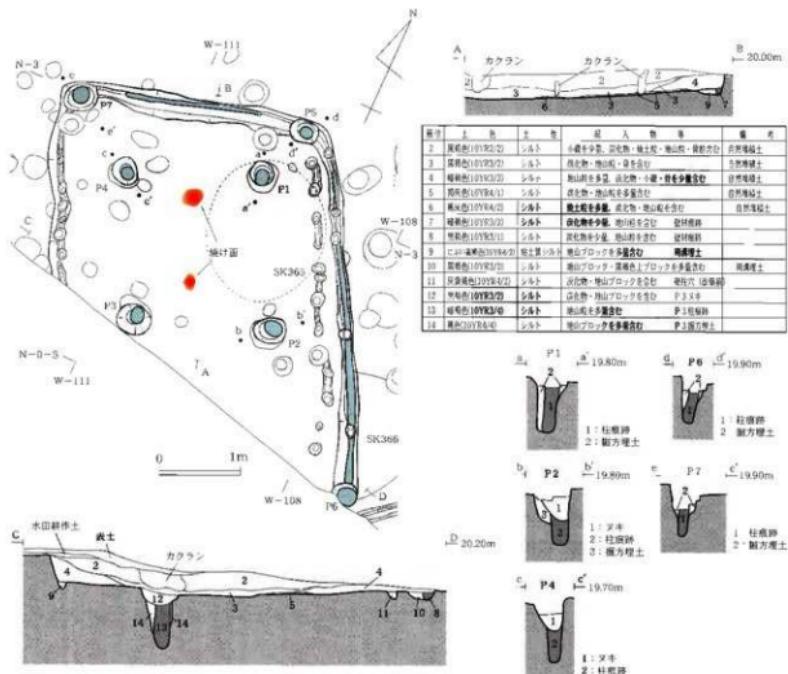
【床】 基本的には地山を床としており、SK365・366土壙の上部には薄い貼床が認められる。横断面

をみると、床面は東西の壁際から中央に向かって浅く窪む皿状で、全体的に南東方向へ緩やかに傾斜している。また、長軸線に沿って中央部が硬化している。

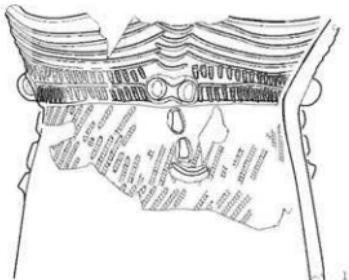
〔炉〕長軸線上に小さな焼け面が2ヶ所認められる。平面形は30cm×20cm・20cm×15cmの不整形で、地床炉と考えられる。

〔主柱穴〕住居内には壁柱穴の他に大小20個程のビットがある。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP1・2、P3・4がこの住居の主柱穴と考えられる。P1～4には柱抜き取り痕が認められ、柱穴下部には柱痕跡が残る。掘方の平面形は長軸が30～45cmの不整な円形もしくは梢円形を呈し、深さは65～80cmで、底面に向かって窄まる。柱痕跡は直径15～22cmの不整な円形を呈する。柱間寸法は長辺で1.7～1.9m、短辺で1.7mある。また、北東・北西隅に位置するP5・7も住居に伴う柱穴と推定され、P6についても同様の可能性がある。いずれの柱穴も長軸30～45cmの不整な梢円形を呈し、深さは約50cmで、直径15cm前後の不整な円形を呈する柱痕跡が残る。

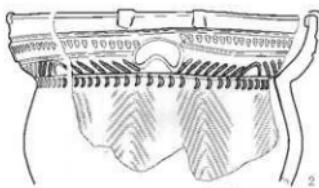
〔周溝〕調査区内に掛かる壁の直下を巡る周溝と東辺に沿って断続的に延びる溝1条が検出されている。周溝は上幅8～25cm、深さ5～10cmで、西辺が浅い。断面形は北・東辺が内側へ大きく開いて



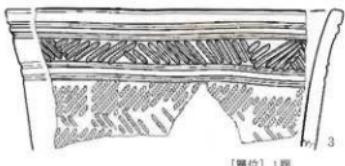
図版95 SI320住居跡(2)



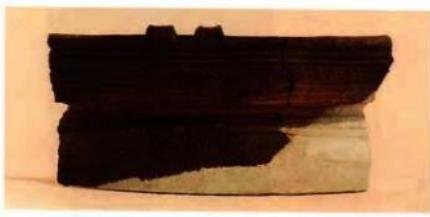
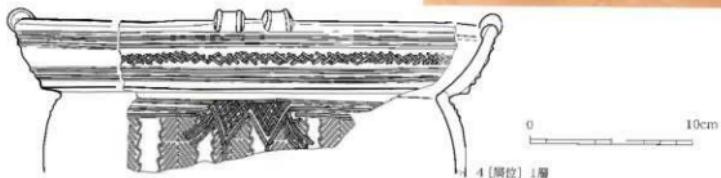
【層位】1層
【備考】SK330-1層と接合



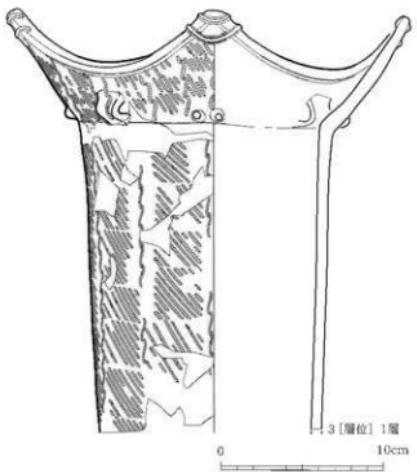
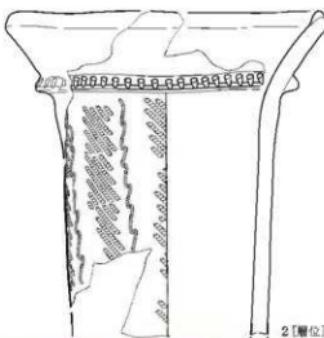
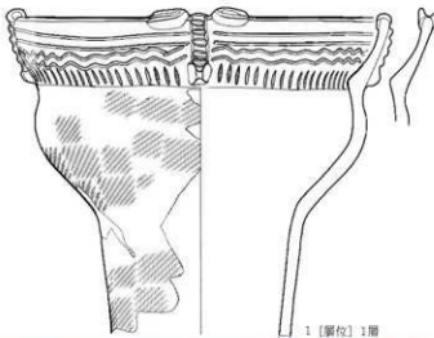
【層位】1層



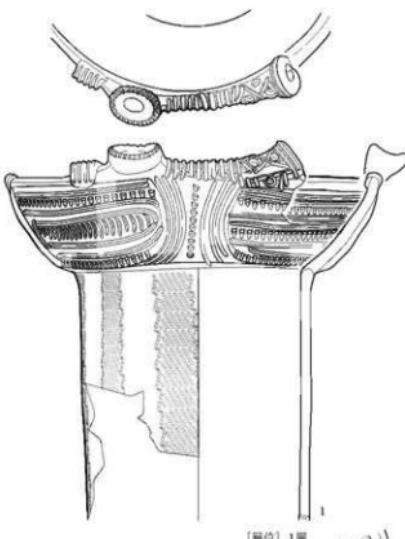
【層位】1層



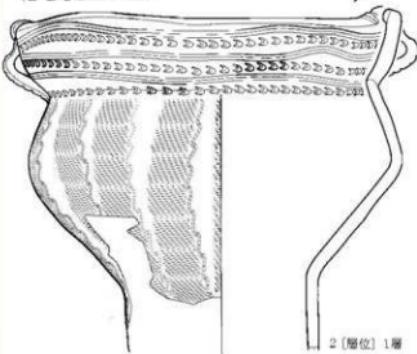
図版96 SI320住居跡出土遺物－繩文土器(1)－



図版97 SI320住居跡出土遺物－縄文土器(2)－



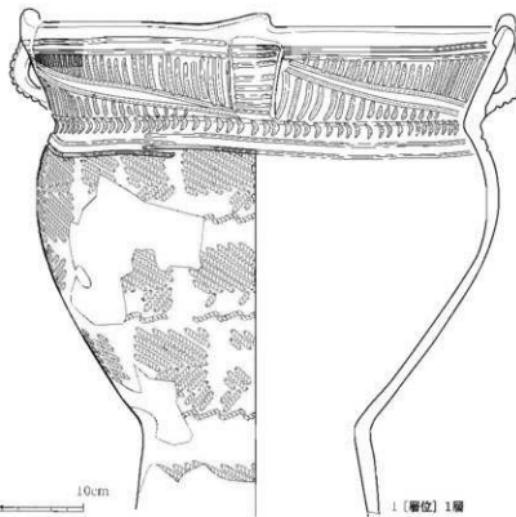
【層位】1層



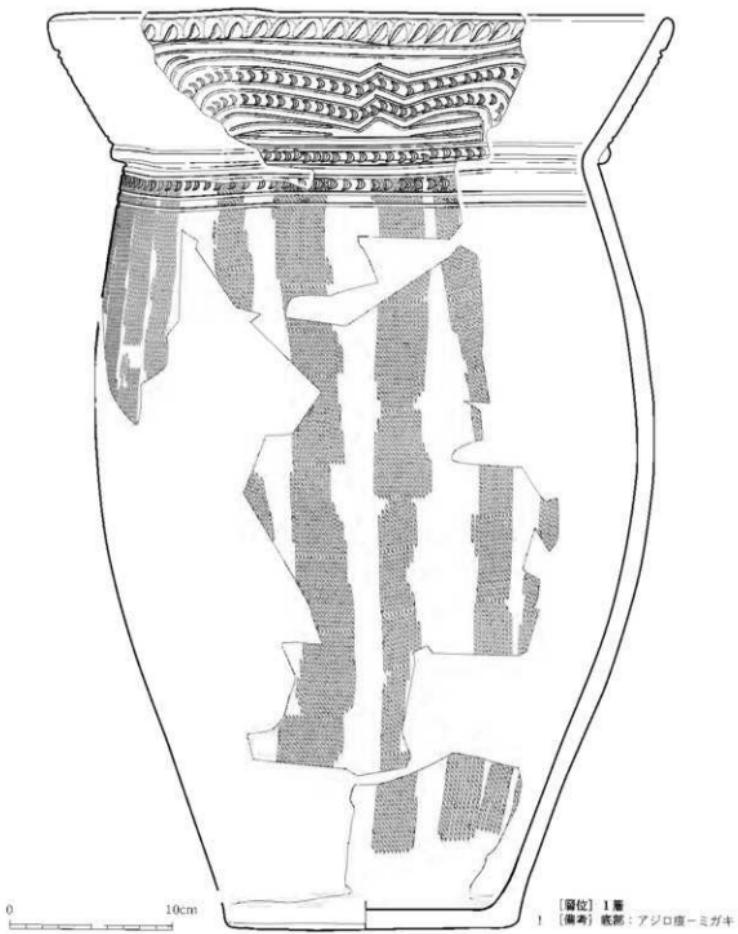
2【層位】1層

0 10cm

図版98 SI320住居跡出土遺物－縄文土器(3)－



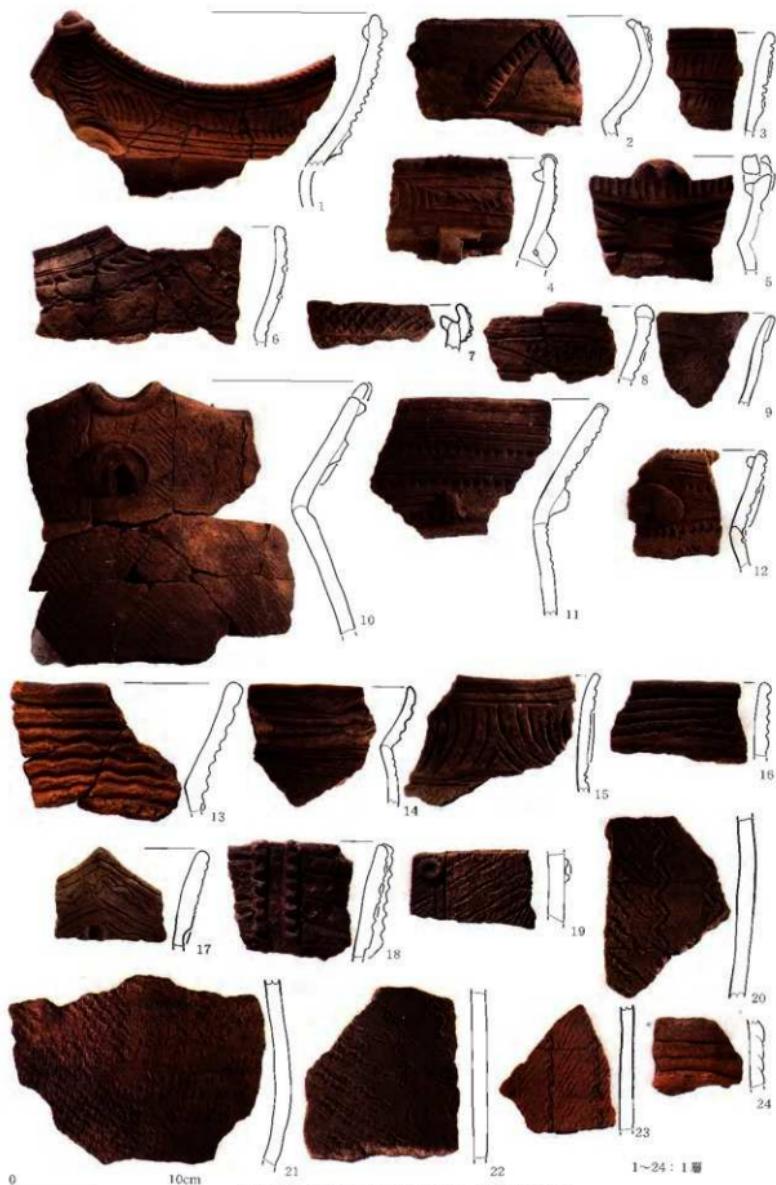
図版99 SI320住居跡出土遺物－縄文土器(4)－



図版100 SI320住居跡出土遺物－縄文土器(5)－



图版 101 SI320住居跡出土遺物—縄文土器(6)—

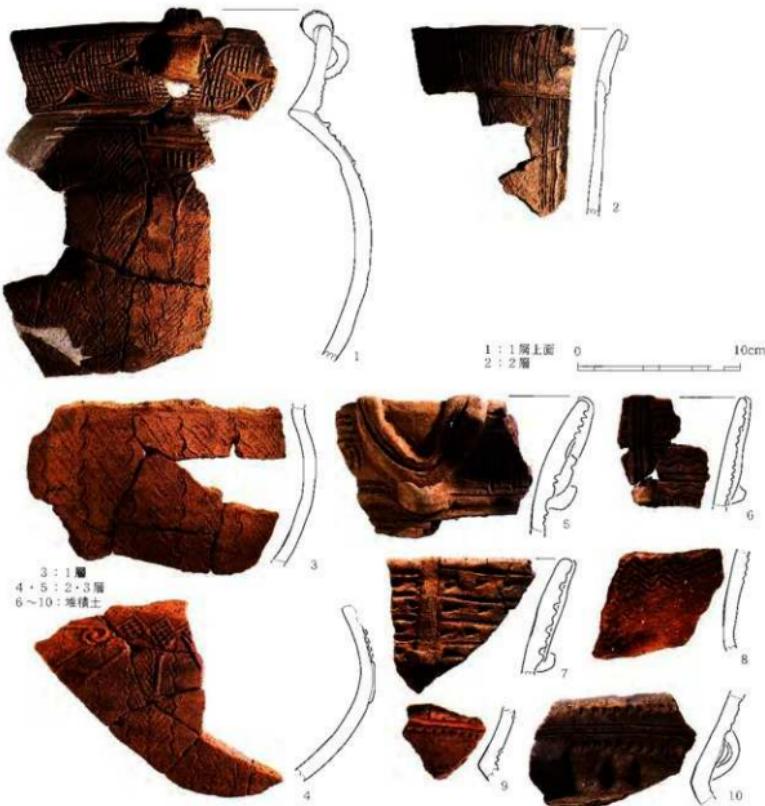


图版 102 S320住居跡出土遺物—繩文土器(7)—

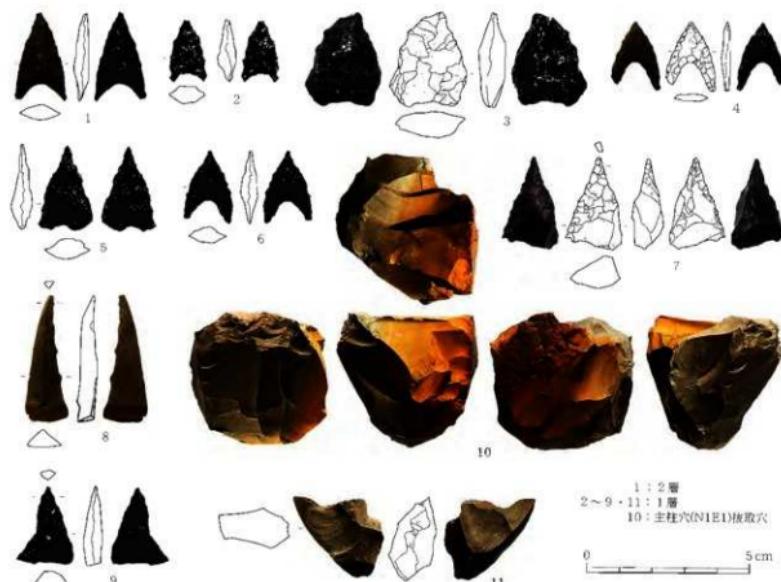
た変形「V」字状、西辺が「U」字状を呈する。堆積土は地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐色または黒褐色のシルトで、縮まりもあることから埋め戻されていたとみられる。

【壁柱穴】東・西辺の周溝上面では壁柱穴と考えられる直径10~15cmの不整な円形を呈するビット12個を確認している。深さは10~30cmで、周溝底面よりも下がる。ビットは東辺では1.2m前後の間隔、西辺では20cm前後の間隔で配されるものが多い。壁材の痕跡は北・東辺で検出されており、上幅約5cmで、周溝内の壁側に添って延びる。また、東壁際の溝は壁から20cm程離れて周溝と平行して断続的に延び、上幅5~10cm、深さ5

cm程度で、断面は「U」字状を呈する。堆積土は地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで、縮まりもあることから埋め戻されていたとみられる。溝上面もしくはその延長上では直径10~20cmの不整な円形を呈するビット11個が検出されている。ビット間隔は30cm前後のものが多く、深さは10~



図版103 SI320住居跡出土遺物－縄文土器(7)－



図版104 SI320住居跡出土遺物—石器(1)～

20cmで、いずれも溝底面より下がる。この溝とピットは検出状況からみて改築前の周溝と壁柱穴と考えられる。

【方向】東辺でみると、北で西に約28° 傾している。

【出土遺物】主に住居北西隅の1層から多量の縄文土器(図版96～103)や石鏃(図版104-1～7)、石錐(8・9)、石核(10・11)、磨石(図版105-1)、石皿(2・3)、獸骨が一括廃棄された状態で出土している。

【SI350a・b住居跡】(図版106・107)

【位置】N-6・W-11? [確認面] 地山

【重複】SK335・357土壤などと重複し、SK335より古く、SK357より新しい。また、本住居跡は一度建て替えられており、南辺が約70cm拡張されている。古いものからSI350 a・bとする。

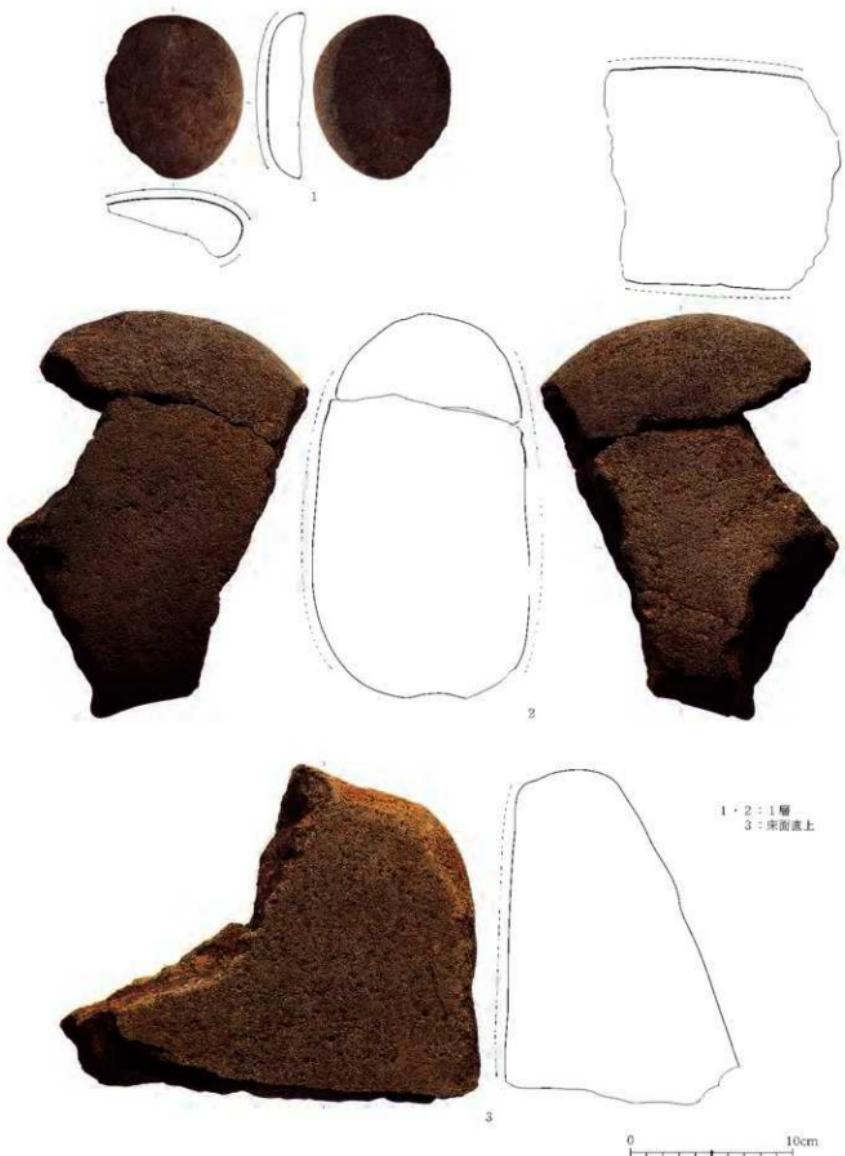
《SI350 a》

【規模・平面形】東西約3.1m×南北約5.7mの隅丸長方形を呈すると考えられる。

【床面・壁】残存していない。

【炉・主柱穴】検出されなかった。

【周溝】南・西辺と北東隅で検出した。上幅10～18cm、下幅5～10cm、深さ15cm前後で、南辺の一部では幅5cm前後の壁材痕跡が認められた。堆積土は壁材痕跡が暗褐色シルト、周溝埋土が地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。



图版 105 SI320住居跡出土遺物—石器(2)—



SI350(北東から)



貼床(北から)



a南側周溝(北西から)

図版 106 SI350住居跡

【壁柱穴】 南辺で3個検出した(P1～3)。平面形は直径15～25cmの円形や不整円形で、深さは25～49cmである。堆積土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

【方向】 南辺でみると、西で北に約35°偏している。

【出土遺物】 周溝埋土から地文のみの縄文土器胸部破片等が極少量出土している。

〔SI350 b〕

【規模・平面形】 東西約5.7m×南北約3.8mの隅丸長方形を呈すると考えられる。

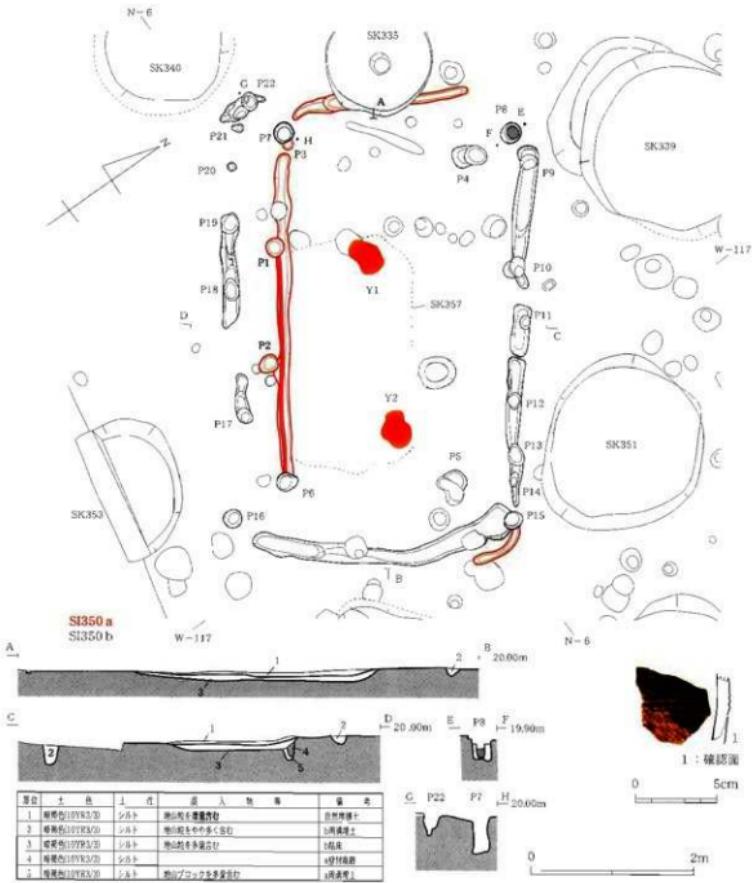
【堆積土】 SK357上面のみに残存しており、地山粒を微量含む暗褐色シルトである。

【床】 SK357上面のみ床面が残存しており、SK357が窪んだ部分に地山粒を多量含む暗褐色シルトを貼って床としている。

【壁】 残存していない。

【炉】 ほぼ長軸線上で焼け面を2ヶ所検出した(Y1・2)。地床炉と考えられ、焼け面は硬く締まっている。平面形はY1が60cm×35cm、Y2が60cm×45cmの不整形である。

【主柱穴】 4個確認されている(P4～7)。掘り方は径25cm前後の円形や不整円形で、深さは41～



図版107 SI350住居跡および出土遺物

58cmである。埋土は主に地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。また、2個の柱穴で柱の抜き取り穴が認められた(P 4・5)。柱間寸法は、南桁で4.2 m、西梁で2.4 mである。

【周溝】部分的に途切れるが、西辺を除く3辺で検出した。上幅7~40cm、下幅5~35cmで、深さは北辺が12~32cm、南辺が5~12cm、東辺が20cm前後で、壁柱穴と同様に南辺が浅くなっている。堆積土は地山粒を多く含む暗褐色シルトである。

【壁柱穴】北辺で8個(P 8~15)、南辺で7個検出した(P 16~22)。平面形は直径10~25cmの円形や不整円形で、深さは北辺側が周溝上面から13~32cm、南辺側が4~23cmで、拡張側の南辺の

壁柱の方が浅くなっている。この中で、柱痕跡が認められるものは1個あり(P 8)、直径16cmの円形である。堆積土は柱痕跡が地山や炭化物粒を含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。

[方向] 北辺でみると、西で北に約38° 傾している。

[出土遺物] 周溝埋土や堆積土、確認面から縄文土器深鉢の破片が極少量出土している(図版107)。

[SI360住居跡] (図版108・109)

[位置・確認面] 調査区中央部の西寄りに位置する。確認面は地山面で、北側へ傾斜している。

[重複] SI361・364住居跡、SK381～387土壤、SD478溝跡と重複しており、SI361よりも古く、その他の造構よりも新しい。

[規模・平面形] SI361住居跡によって西半が壊されているものの、残存する周溝をみる限り、東西3.4m×南北7.0mの隅丸長方形を呈する。

[堆積土] 5層認められる。1・2・5層は自然流入土、3層は土壤と重複する部分で確認された東壁の崩落土である。4層は住居南東部に分布し、焼土ブロックを多量に含む。層中には薄い炭化物層も数枚認められることから、廃絶後の住居内に捨てられた土と考えられる。なお、住居北部は擾乱を受けて堆積土が残存しない。

[壁] 基本的に地山を壁とするが、土壤と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は残りの良い東壁中央で床面から30cm程ある。

[床] 基本的に地山を床とするが、SK382・383土壤の上部ではその埋土を床としている。横断面をみると、床面は東壁際から中央に向かって緩やかに傾斜しており、やや凹凸がある。

[炉] 住居南部やや東寄りの床面に長軸線と平行して並ぶ焼け面が2ヶ所残る。住居に伴う地床炉と考えられるが、SI361住居跡に壊されて詳細は不明である。

[主柱穴] 住居内には壁柱穴の他に大小100個以上の柱穴・ピットがある。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP 1～4、P 5～8がこの住居の主柱穴と考えられる。P 1・8は地山面、それ以外は床面またはSI361住居跡を掘り上げた段階で確認した。P 1・2・5・7では柱が抜き取られ、その他には柱痕跡が残る。掘方の平面形は長軸が20～40cmの不整な円形もしくは橢円形を呈し、深さは30～75cmで、底面に向かって窄まるものが多い。柱痕跡は直径15～20cmの不整な円形を呈する。柱間寸法は長辺で1.6～1.8m、短辺で約1.9mあり、南端とそこから1間目の柱の間隔がやや狭い。また、北東・北西隅に位置するP 9・10も住居に伴う可能性がある。いずれの柱穴も長軸35～40cmの不整形を呈し、深さは35cmで、長軸20cm前後の円形もしくは橢円形を呈する柱痕跡が残る。

[周溝] 残存する壁の直下を巡り、そのまま全周する。一部はSI361住居跡の周溝埋土もしくは貼床除去後に確認している。上幅8～22cm、深さ5～25cmで、断面は「U」字状を呈する。溝の底面にはやや凹凸があり、北・東辺が深くなる傾向にある。堆積土は地山ブロックを多量に含む灰黄褐色シルトで、締まりがある。

[壁柱穴] 周溝を掘り上げた段階で、壁柱穴と考えられる長軸8～28cmの不整な円形もしくは橢円



図版108 SI360住居跡および出土遺物



SI360・361・364住居跡(北から)



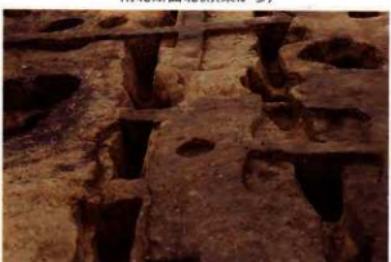
南北断面南側(東から)



南北断面北側(東から)

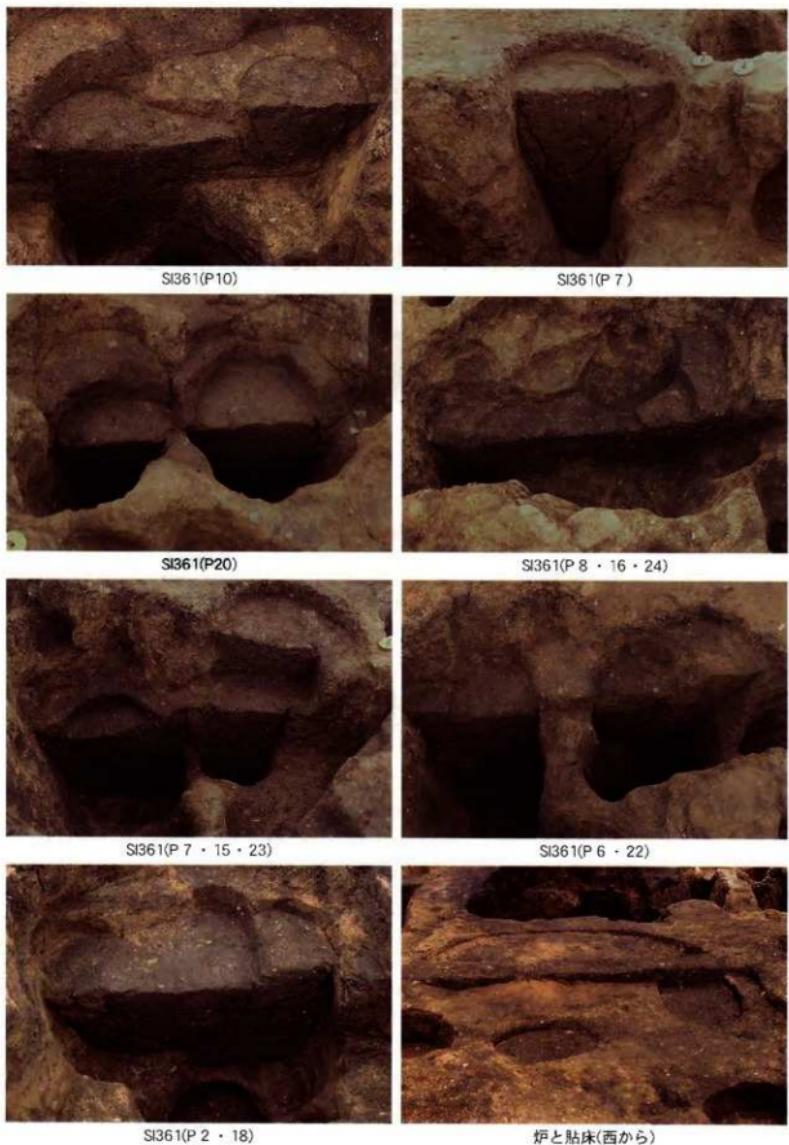


東西断面東側(南から)



西周溝(北から)

図版109 SI360・361・364住居跡(1)



図版110 SI360・361・364住居跡(2)

形を呈するピット23個を確認している。深さは周溝底面から5～45cmあり、間隔は不規則である。ピットは北・東辺に少なく、南辺に多い。

【方向】長軸線でみると北で東に7°偏している。

【出土遺物】炉の直上層やその他の堆積土から、縄文土器深鉢の破片が少量出土している(図版108)。

【SI361a～c住居跡】(図版109～112)

【位置】N-15・W-105 【確認面】地山面もしくはSI360住居跡の堆積土上面で、北側へ傾斜している。

【重複】SI360・364住居跡、SK382・384～387土壤、SD478・479溝跡と重複しており、これらよりも新しい。精査の結果、建て替えが行われていることがわかった。改築は住居を拡張していくかたちで2回行われており、古いものから順にa～cとする。

《SI361a》

【規模・平面形】周溝・主柱穴の配置から東西3.0m以上×南北約5.6mで、やや歪んだ隅丸長方形を呈するものと思われる。なお、西辺の位置は不明で、壁・堆積土は残存しない。

【床】この時期に伴う床面が認識できなかったため、詳細は不明である。但し、SI360住居跡、SK384・387土壤と重複する部分に認められる貼床は、基本的に住居を構築したこの段階で行われたと考えられる。

【主柱穴】SI361a内には壁柱穴の他に大小150個以上のピットがある。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP1～4、P5～8がこの住居の主柱穴と考えられる。いずれの柱穴も柱抜き取り後に埋め戻されているが、P2～4以外の柱穴下部には直径約15cmの円形の柱痕跡が残る。掘方の平面形は長軸が25～40cmの不整な円形もしくは楕円形を呈し、深さは35～75cmで、底面に向かって窄まるものもある。柱間寸法は長辺で1.9～2.1m、短辺で約2.1mあるが、南東・南西隅の柱間寸法は2.6mとやや開き、逆にそこから北へ1間目の柱との間隔が狭くなっている。

【周溝】北・東・南辺を断続的に巡る周溝が確認されている。西辺の周溝はSI361bの周溝に廻されている可能性がある。上幅10～20cm、深さ10～20cmで、断面は「U」字状を呈する。堆積土は地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐色シルトで、縮まりもあることから埋め戻されていたとみられる。

【壁柱穴】周溝上面もしくはその延長上では壁柱穴と考えられる長軸10～30cmの不整な円形・楕円形を呈するピット25個が検出されている。深さは12～36cmで、いずれも周溝底面より下がる。ピットの配置に規則性は認められない。なお、壁柱穴は柱抜き取り後に埋め戻されていることが断面観察から読み取れる。

【方向】長軸線でみると北で東に約9°偏している。

【出土遺物】主柱穴や壁柱穴から、地文のみの縄文土器の口縁部や胴部破片等が少量出土している。

《SI361b》

【規模・平面形】少なくともSI361aの北辺を30～40cm、南辺を60～100cm外側へ拡張しており、周溝・主柱穴の配置から東西約4.0m以上×南北約6.8mで、やや歪んだ隅丸長方形を呈するものと

思われる。なお、東辺の位置は不明で、壁・堆積土は残存しない。

〔床〕 この時期に伴う床面が認識できなかったため、詳細は不明である。

〔主柱穴〕 SI361b内には壁柱穴の他に大小150個以上のビットがある。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP 9～12、P 13～16がこの住居の主柱穴と考えられる。いずれの柱穴も柱抜き取り後に埋め戻されているが、P13・14・16以外の柱穴下部には直径15～20cmの円形の柱痕跡が残る。掘方の平面形は長軸が30～45cmの不整な円形もしくは梢円形を呈し、深さは40～74cmで、底面に向かって窄まるものが多い。柱間寸法は長辺で1.8～2.4m、短辺で2.5～2.8mあり、南端とそこから1間目の柱の間隔がやや狭い。

〔周溝〕 北・西・南辺を断続的に巡る周溝が確認されている。東辺の周溝はSI361cの周溝に壊されている可能性がある。上幅12～25cm、深さ5～25cmで、断面は「U」字状を呈する。北辺の南半を除き、深さ5cm前後の浅い部分が多い。堆積土は地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐色シルトで、結まりもあることから埋め戻されていたとみられる。

〔壁柱穴〕 周溝上面もしくはその延長上では壁柱穴と考えられる長軸15～30cmの不整な円形・梢円形を呈するビット34個が検出されている。深さは10～47cmで、いずれも周溝底面より下がる。ビットは西辺に集中する傾向があり、北辺の南半では検出されていない。なお、壁柱穴は柱抜き取り後に埋め戻されていることが断面観察から読み取れる。〔方向〕 長軸線でみると北で東に約9°偏している。

〔出土遺物〕 主柱穴や周溝、壁柱穴から地文のみの網文土器胴部破片等が少量出土している。

《SI361c》

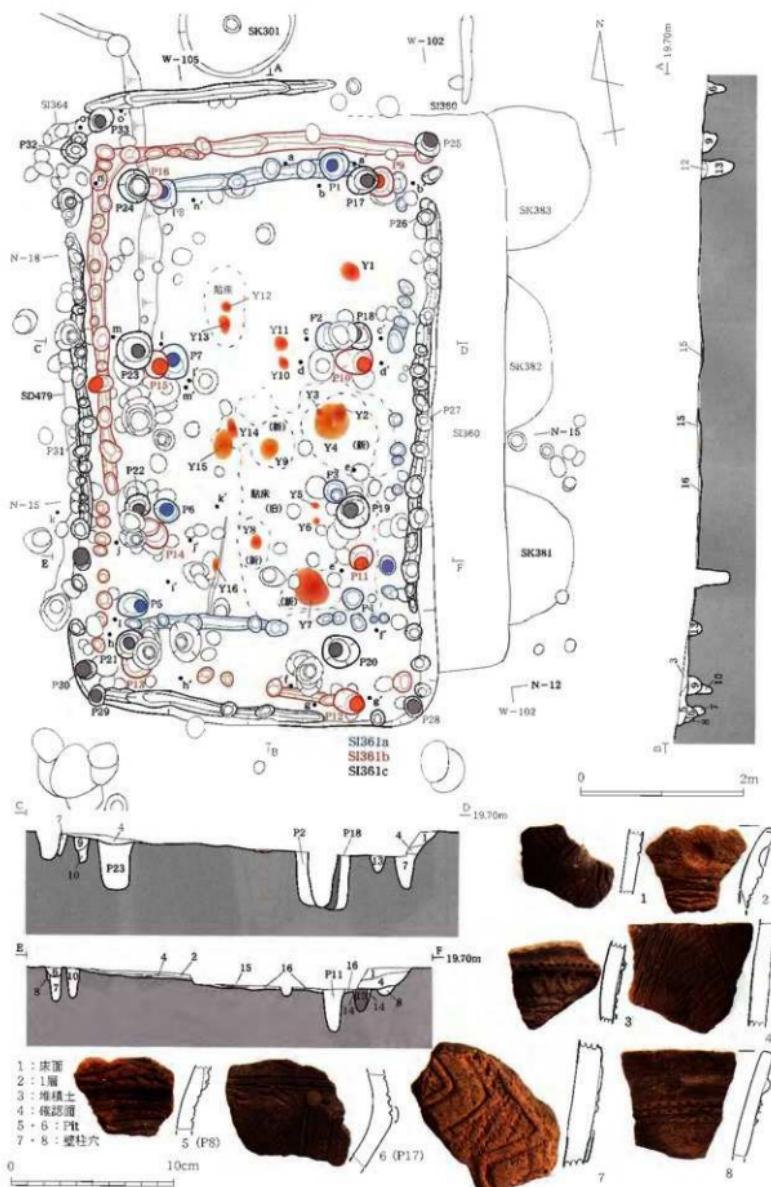
〔規模・平面形〕 SI361bの北・西・南辺を20～70cm外側へ拡張しており、東西4.4m×南北7.8mで、やや歪んだ隅丸長方形を呈する。

〔堆積土〕 堆積土の多くは擾乱によって失われているものの、南・東壁際周辺に5層残る。そのうち2層は住居南西部に分布し、焼土・炭化物・焼けた骨粒を多量に含むことから、廃絶後の住居内に捨てられた土と考えられる。これ以外の層は自然流入土である。

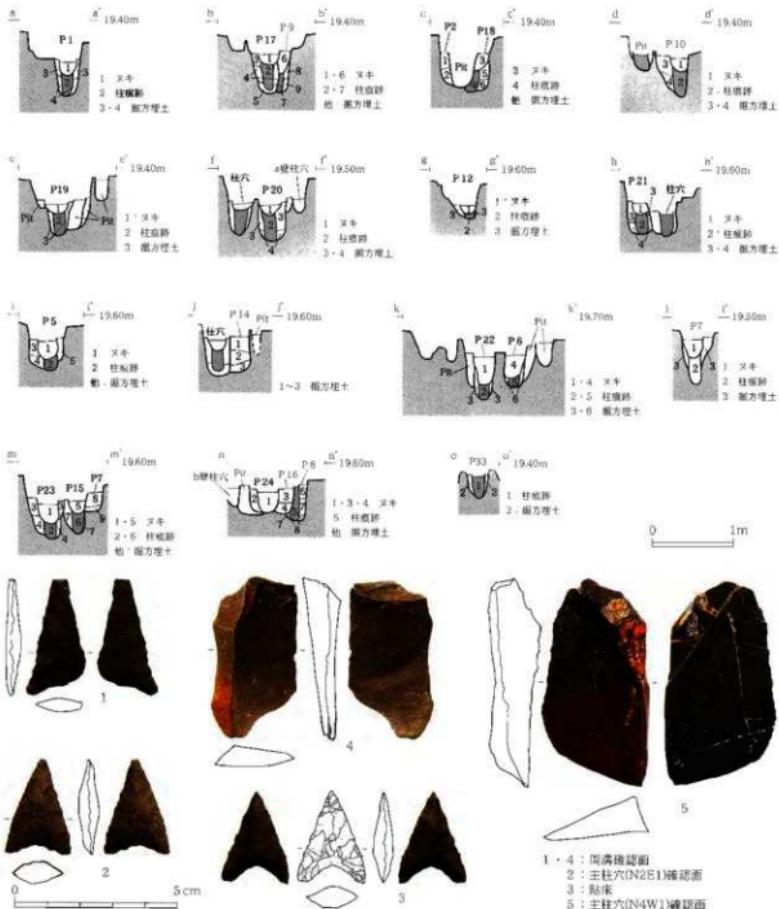
〔壁〕 基本的に地山を壁とするが、SI360住居跡やSK382・385土壤と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は床面から開き気味に立ち上がり、壁高は残りの良い東壁南部で床面から25cmある。

〔床〕 SI360住居跡や土壤と重複する部分には貼床が認められ、その他では地山を床としている。土壤上面やSI360と重なる部分の南半に残る貼床は、主にSI361a構築時に行われたと考えられる。また、炉跡付近を中心に部分的な貼床も確認されており、随時床面が補修されていたことが窺われる。横断面をみると、床面は壁際から中央に向かって皿状に窪む。全体としては北側へ緩やかに傾斜しており、やや凹凸がある。なお、北半の床面は擾乱により失われている。

〔主柱穴〕 SI361c内には壁柱穴の他に大小150個以上のビットがある。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP 17～20、P 21～24がこの住居の主柱穴と考えられる。いずれの柱穴でも柱が抜き取られており、P24以外の柱穴下部には直径15～20cmの円形の柱痕跡が



層位	土色	土性	底入	地質	名前	層位	土色	土性	底入	地質	名前	層位
1 中段切(194.0m)	シルト	泥炭質・灰土質・少量・無機鉄・小量を含む	自然堆積土	9 中段切(194.0m)	シルト	泥炭ブロック・多量・無機鉄・少量・腐泥・少部分	人為的堆土					
2 中段切(194.0m)	シルト	泥炭質・無機鉄ブロックを多量・無機物を少なむ	自然堆積土	10 中段切(194.0m)	シルト	泥炭ブロック・少量・無機物	人為的堆土					
3 中段切(194.0m)	シルト	泥炭質・無機鉄ブロックを多量・無機物を少なむ	自然堆積土	11 中段切(194.0m)	シルト	泥炭ブロックを多量・小量を含む	人為的堆土					
4 中段切(194.0m)	シルト	泥炭質・少量・無機物・鉄物・少部分・小量を含む	自然堆積土	12 中段切(194.0m)	シルト	泥炭ブロックを多量・無機物を含む・少部分	人為的堆土					
5 中段切(194.0m)	シルト	泥炭質・少量・無機物・鉄物・少部分・小量を含む	自然堆積土	13 中段切(194.0m)	シルト	泥炭・少量を含む	人為的堆土					
6 中段切(194.0m)	シルト	泥炭質・少量・無機物・鉄物・少部分・小量を含む	自然堆積土	14 中段切(194.0m)	シルト	泥炭ブロックを多量・小量を含む	人為的堆土					
7 中段切(194.0m)	シルト	泥炭質・少量・無機物・鉄物・少部分・小量を含む	自然堆積土	15 中段切(194.0m)	シルト	泥炭ブロックを多量・少部分・無機物	人為的堆土					
8 中段切(194.0m)	シルト	泥炭ブロックを多量・小量を含む	自然堆積土									



図版112 SI361住居跡および出土遺物(2)-石器-

残る。掘方の平面形は長軸が30~45cmの不整な円形もしくは楕円形を呈し、深さは40~74cmである。柱間寸法は長辺で1.7~2.1m、短辺で2.6~2.8mあり、南端とそこから1間目の柱の間隔がやや狭い。

【炉】住居内では合計16個の焼け面(Y1~16)を検出しており、Y4・9・15は部分的な貼床を除去した段階で検出した。平面形は長軸10~50cmの不整な円形もしくは楕円形を呈し、大小の差があるものの、全て地床炉と考えられる。大きくみると、焼け面はP17・18・23・24、P18・19・22・23、P19・20・21・22に囲まれた3ブロックのいずれかに属し、長軸線と平行して並ぶ3グループ・P(Y1-Y2~4-Y7、Y8-Y9-Y10・11、Y12・13-Y14・15-Y16)に分けられる。各グループの焼け面は同時期に機能していたと考えられ、住居の改築回数と呼応することからその各期に対応する可能性がある。この場合、貼床との前後関係からY1/Y2~4/Y7がSI361c、Y8/Y9/Y10~11がSI361b、Y12・13/Y14・15/Y16がSI361cに伴うと推測される。

【周溝】周溝は残存する壁の直下を巡り、そのまま全周するが、四隅で途切れる。上幅10~20cm、深さ3~20cmで、断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する。溝は全体的に浅いが、北・南辺がやや深く、北辺には深さ20cmで一段深くなる部分もある。堆積土は地山ブロックを多量に含む暗褐色のシルトで、縮まりもあることから埋め戻されていたとみられる。

【壁柱穴】周溝上面もしくはその延長上では壁柱穴と考えられる長軸12~30cmの不整な円形・楕円形を呈するビット54個が確認されている。深さは10~50cmで、20~30cmのものが多く、いずれも周溝底面より下がる。ビットは東・西辺に集中し、南・北辺では殆ど検出されなかった。四隅附近に深さ40cm以上の深いビット(P25・26・28~30・32・33)が配されており、直径15cm前後の円形の柱痕跡が認識できるものもある。東西辺ほぼ中央に位置するビット(P27・31)も深さ50cmで他より深い。

【方向】長軸線でみると北で東に約9°偏している。

【出土遺物】床面や貼床、主柱穴や周溝、確認面等から縄文土器深鉢の破片(図版111)や石鏃(図版112-1~3)、不定形石器(4・5)等が出土している。

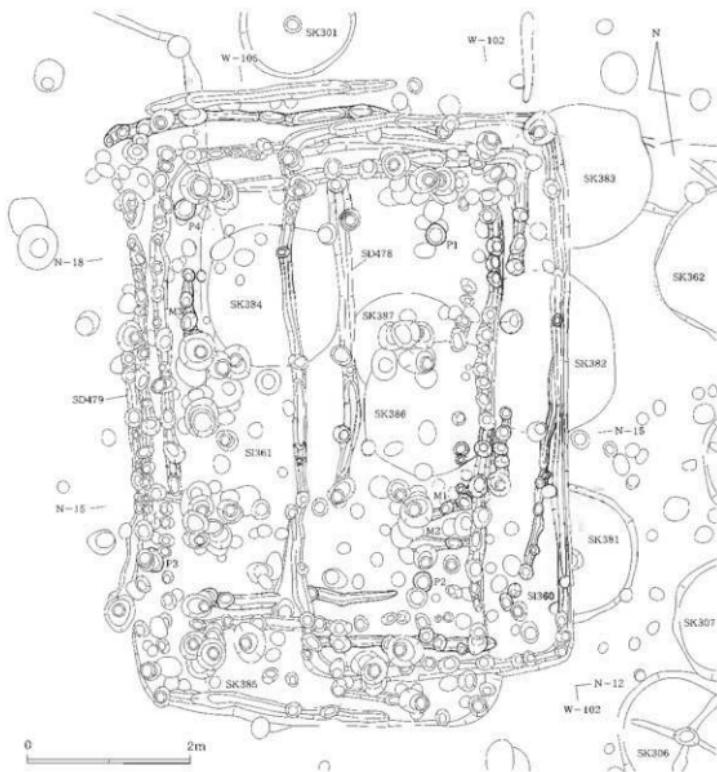
【SI364住居跡】(図版113)

【位置】N-15・W-105【確認面】SI360住居跡の床面もしくはSI361住居跡を掘り上げた段階で確認している。

【重複】SI360・361住居跡、SK382~387土壌、SD478・479溝跡と重複している。前後関係が判るものでは、SI360・361よりも古く、SK382・383・385~387土壌より新しい。他の新旧関係は不明である。

【規模・平面形】SI360・361住居跡によって殆ど壊されているが、残存する周溝・主柱穴の配置から東西4.8m以上×南北6.6mで、方形を基調とする。西辺の位置は不明で、壁・堆積土は失われている。床面も認識できないが、北・東・南の各辺では平行して延びる溝2条が確認されていることから拡張改築されている可能性がある。この場合、壁を50cm程外側へ造り替えたことになる。

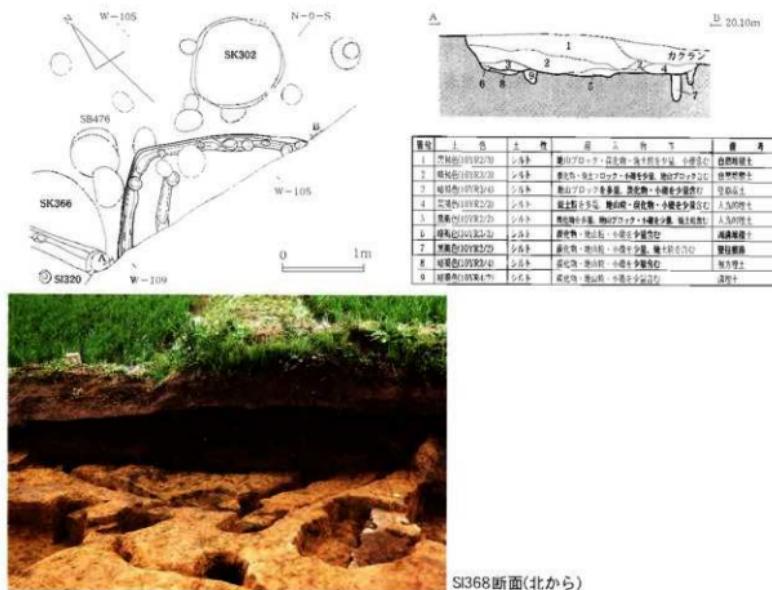
【主柱穴】住居内には壁柱穴の他に大小150個以上の柱穴・ビットがある。この内、住居のはば対角



図版113 SI364住居跡

線上に位置するP 1～4は、この住居の主柱穴と考えられる。全ての柱穴で柱が抜き取られており、柱痕跡は確認できない。ピットの平面形は直径25～30cmの不整な円形を呈し、深さは25～55cmである。

【周溝・溝・壁柱穴】平行して北・東・南辺を断続的に巡る周溝2条が検出されている。上幅8～18cm、深さ5～12cmで、断面は「U」字状を呈する。周溝は全体に浅く、北辺外側では底面に凹凸が認められる。堆積土は地山ブロックを多量に含む褐色シルトで、縮まりもあることから埋め戻されていたとみられる。また、内・外の周溝上面もしくはその延長上では壁柱穴と考えられる長軸12～35cmの不整な円形・楕円形を呈するピットを11・19個確認している。深さは8～28cmで、いずれも周溝底面より下がり、間隔は不規則である。この他、M 1～3の短い溝をSI361住居跡掘り上げ後に確認したが、本住居に伴うものは不明である。M 1～3の底面ではピットも検出されている。



図版114 SI368住居跡

【方向】長軸線でみると北で東に約12° 傾いている。

【出土遺物】周溝から地文のみの縄文土器胴部破片が極少量出土している。

【SI368住居跡】(図版114)

【位置】N-0-S・W-105 [確認面] 地山で、東側へ緩やかに傾斜している。

【重複】SI320住居跡、SB476掘立柱建物跡と重複すると考えられるが、その前後関係は不明である。

【規模・平面形】調査区に掛かるのは住居北東隅のみで、全体の規模は不明であるが、東西1.3m以上×南北2.2m以上で、方形を基調とする。なお、北辺で溝が2条確認されていることから、拡張改築されている可能性がある。

【堆積土】5層認められ、1・2層は自然流入土である。3層は地山ブロックを多量に含み、西壁際のみに分布することから壁崩落土の可能性がある。4・5層は焼土粒・炭化物を多量に含む層で、廃絶後の住居内に捨てられた土と考えられる。

【壁】地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りの良い北壁で床面から35cmある。

【床】基本的に地山を床としているが、北側周溝とその内側を平行して延びる溝の間には貼床が認められる。貼床は、その分布範囲から住居拡張改築時に行われた可能性がある。床面には凹凸がある。

【周溝】調査区内に掛かる壁の直下を巡る周溝と北辺に沿って延びる溝1条が確認されている。周溝

は上幅10～20cm、深さ5～15cmで、断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈する。

【壁柱穴】周溝を掘り上げた段階で、壁柱穴の残痕と考えられる直径8～18cmの円形を基調とする小ピット8個を確認している。深さは周溝底面から3～30cmあり、間隔は不規則である。北壁際の溝は壁から40cm程離れて周溝と平行して延び、上幅10～15cm、深さ10～20cmで、断面は「U」字状を呈する。堆積土は縮りのある暗褐色シルトで、埋め戻されていたとみられる。溝掘り上げ時に、東端で直径15cmの円形を呈し、深さ32cmのピット1個を検出した。この溝とピットは改築前の周溝と壁柱穴の可能性がある。

【ピット】住居内では壁柱穴の他に2個のピットを検出しているが、住居との共伴関係は不明である。

【方向】長軸線でみると北で東に約47°偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SI372a・b住居跡】(図版115)

【位置】N-12・W-93【確認面】地山およびSI388堆積土上面

【重複】SB450掘立柱建物跡、SI370・375・388・400住居跡などと重複し、SI370より古く、その他のより新しい。また、本住居跡はほぼ同位置で一度建て替えられており、古いものからSI372a・bとする。

《SI372a》

【規模・平面形】東西約4.8m×南北約5.1mの隅丸正方形を呈する。

【堆積土・床面・壁】残存していない。

【炉】検出されなかった。

【主柱穴】4個確認されている(P5～8)。掘り方は長軸30～40cm、短軸20～30cmの楕円形や不整円形で、深さは17～68cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは2個あり、平面形は長軸22cm、短軸14cmの楕円形や直径約22cmの円形である。柱間寸法は、北側柱列で約2.6m、西側柱列で2.4mである。堆積土は柱痕跡が主に地山や炭化物を含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックや炭化物を含む暗褐色シルト等である。

【周溝】部分的に途切れるが、南辺を除く各辺で検出した。上幅12～35cm、下幅8～12cmで、深さは15～35cmである。西辺では壁材を抜き取ったと考えられる溝状の痕跡が認められた。堆積土は抜き取り痕跡が地山粒を含む暗褐色シルト、周溝埋土が地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

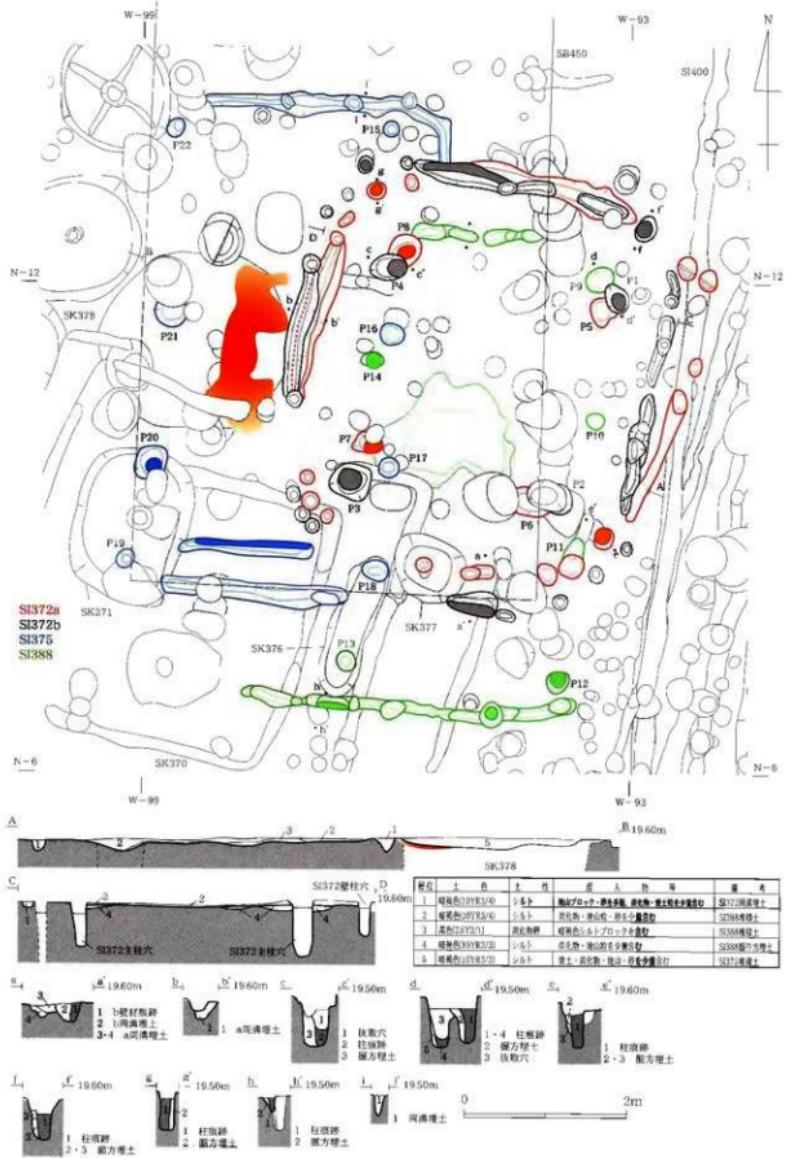
【壁柱穴】住居の四隅と、各辺で計15個検出した。平面形は直径18～24cmの円形や不整円形で、深さは12～49cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは2個あり、平面形は直径16～20cmの円形である。堆積土は柱痕跡が地山ブロックを含む暗褐色シルト、掘り方埋土が暗褐色シルトブロックを含む褐色シルトである。

【方向】北辺でみると、北で東に約10°偏している。

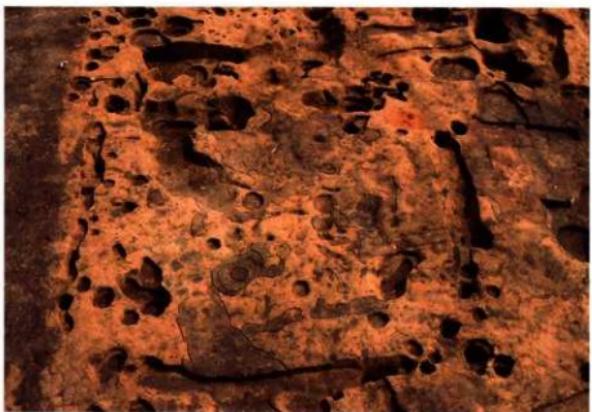
【出土遺物】出土していない。

《SI372b》

【規模・平面形】南北約5.1m×東西約5.3mの隅丸正方形を呈する。



図版115 SI372・375・388住居跡(1)



SI372住居跡(北から)



SI372西辺周溝



SI372南辺周溝



SI372・375・388住居跡(空撮)



SI372・375・388住居跡(北から)



図版116 SI372・375・388住居跡(2)およびSI372出土物—縄文土器—



図版117 SI372住居跡出土遺物—石器—

[堆積土・床面・壁] 残存していない。

[炉] 検出されなかった。

[主柱穴] 4個確認されている(P 1～4)。掘り方は長軸35～50cm、短軸30～40cm前後の楕円形や不整円形で、深さは60～74cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは3個あり、平面形は径20～30cmのやや不整円形である。また、残りの1個では柱の抜き取り穴が認められた(P 2)。柱間寸法は、北・西側柱列でともに2.7 mである。堆積土は柱痕跡が主に地山粒や炭化物を含む暗・黒褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックや炭化物を含む暗褐色シルト等である。

[周溝] 部分的に途切れるが、各辺で検出した。上幅12～30cm、下幅8～12cmで、深さは8～20cmで、南・北辺の一部では幅10～12cmの壁材痕跡が認められた。堆積土は壁材痕跡が地山・炭化物を少量含む暗褐色シルト、周溝埋土が地山ブロックや炭化物、焼土粒を含む暗褐色シルトである。

[壁柱穴] 住居の四隅と、各辺で計17個検出した。平面形は直径12～33cmの円形や不整円形等で、深さは11～61cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは2個あり、平面形は径14～20cmの円形である。堆積土は柱痕跡が主に地山粒や炭化物を含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックや炭化物を含む褐・暗褐色シルト等である。

[方向] 東辺でみると、北東に約12° 偏している。

[出土遺物] 周溝埋土や堆積土等から土器(図版116)、石匙(図版117-1)や石核(2)が出土している。

【SI375住居跡】(図版115・116)

[位置] N-12・W-99 [確認面] 地山

[重複] SB450掘立柱建物跡、SI370・372・388住居跡、SK371・378土壤などと重複し、SI370・372、SK371より古く、SI388、SB450、SK378より新しい。

[規模・平面形] 東西各辺の残存状況が悪く、短軸長は明瞭ではないが、一部残存する東辺周溝と西側主柱穴との間隔から東西幅は約4.0m前後と推定され、南北は約6.2mで、平面形は長方形を呈すと考えられる。

[堆積土・壁] 残存していない。

[床] 刈平により殆ど残存しないが、SK378上面が窪んでおり、この部分のみ残存する。

[炉] 住居のはば長軸線上で焼け面が1ヶ所確認されている。地床炉と考えられ、焼け面は硬く縮まっている。平面形は210cm×90cmの不整形である。

〔主柱穴〕8個確認されている(P 15~22)。掘り方は直径20~45cmの円形や不整円形で、深さは26~50cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは1個あり、平面形は直径約20cmの円形である。柱間寸法は、北側柱列で2.6m、西側柱列で北から約2.5m・1.6m・1.2mである。堆積土は柱痕跡が地山粒を含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックや砂を多く含む暗褐色シルトである。

〔周溝〕残りが悪く南・北辺と北東隅で検出したのみである。上幅14~30cm、下幅6~20cmで、深さは北辺25cm、南辺35cmである。堆積土は地山粒を少量含む暗褐色シルトである。

〔壁柱穴〕北辺で2個検出した。平面形は直径12~23cmの不整円形で、深さは19~41cmである。堆積土は地山粒を含む暗褐色シルトである。

〔その他の溝跡〕南辺周溝の約50cm内側に周溝と同一方向の溝跡が確認されている。上幅12~20cm、下幅7~12cm、深さは36cmで南辺周溝とほぼ同様である。また、この溝跡には幅5cm前後の板状の材痕跡が認められた。堆積土は材痕跡が地山・炭化物を極少量含む褐色シルト、周溝埋土が地山や炭化物ブロックを少量含む暗褐色シルトである。住居拡張による古い段階の周溝とも考えられたが、材の痕跡を住居に対し、溝の内側に残すなど不自然な点も多く、住居に伴う溝であるか明確にはできなかった。

〔方向〕東側柱列でみると、北で東に約1°偏している。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SI388住居跡〕(図版115・116)

〔位置〕N-10・W-95〔確認面〕地山

〔重複〕SB450掘立柱建物跡、SI370・372・375住居跡、SK371・376・377土壤などと重複し、SI370・372・375、SK371・376・377より古い。SB450との新旧関係は不明である。

〔規模・平面形〕東西各辺の残存状況が悪く、短軸長は明瞭ではないが、南辺周溝の長さから推定すると東西幅は約4.5m前後と推定され、南北は約6.0mで、平面形は長方形あるいは隅丸長方形と考えられる。

〔堆積土〕2層認められ、第1層は地山・炭・砂粒を少量含む自然堆積の暗褐色シルト、第2層は炭化物主体層である。

〔壁〕残存していない。

〔床〕住居北側の一部では地山や炭化物粒を少量含む暗褐色シルトの掘り方埋土、その他では地山を床としており、中央部を中心に若干の凹凸が認められる。

〔炉〕確認されていないが、住居ほぼ中央部に1.7m×1.4m、深さ5~10cmの不整形の土壤が確認されている(K 1)。この土壤は焼土や地山粒を多量含む褐色土で埋め戻されている。焼け面が残存しておらず、明確ではないが、この土壤部分に炉が存在した可能性が考えられる。

〔主柱穴〕6個確認されている(P 9~14)。掘り方は直径20~35cmの不整円形で、深さは27~84cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは2個あり、平面形は直径約20cmのやや不整の円形である。柱間寸法は、南側柱列で約2.6m、東側柱列で北から約1.7m・1.6m・1.6mで

ある。堆積土は柱痕跡が地山粒を含む褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色シルトである。

【周溝】残りが悪く南・北辺を検出したのみである。上幅8~20cm、下幅5~16cmで、深さは3~29cmで、南辺の一部では幅5cm前後の壁材痕跡が認められた。堆積土は柱痕跡が地山や炭化物粒を少量含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色シルトである。

【壁柱穴】北辺で2個、南辺で5個の計7個検出した。平面形は径10~30cmの不整円形で、深さは6~39cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは1個あり、平面形は直径約16cmの円形である。堆積土は柱痕跡が地山や炭化物粒を少量含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色シルトである。

【方向】東側柱列でみると、北で東に約6°偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SI391a~c住居跡】(図版118~120)

【位置】N-12・W-120 [確認面] 地山

【重複】SK342・343・468・469土壤などと重複し、これらより古い。また、本住居跡は二度建て替えられており、古いものからSI391a~cとする。

《SI391a》

【規模・平面形】長軸約6.2m、短軸約2.1mで、北辺に角がつく長楕円形を呈している。

【堆積土】2層確認された。炭化物を多含む黒褐色シルト等で、いずれも住居機能時に堆積したものと考えられる。

【床】地山を床としており、長軸線上を中心に若干の凹凸が認められる。

【壁】東辺が最も残りがよく、15cm程残存し、地山を壁としている。

【炉】住居のほぼ中央を搅乱によって壊されているが、北半部で長軸5~70cmの大小の不整形の焼け面を8ヶ所確認している。いずれも地床炉と考えられ、焼け面は硬く縮まっている。

【主柱穴】検出されておらず、主に壁柱穴によって上屋を支持していたものと考えられる。

【周溝】東・西辺の北半部のみで検出されている。上幅8~15cm、下幅4~12cm、深さ9~15cmで、堆積土は暗褐色シルトである。

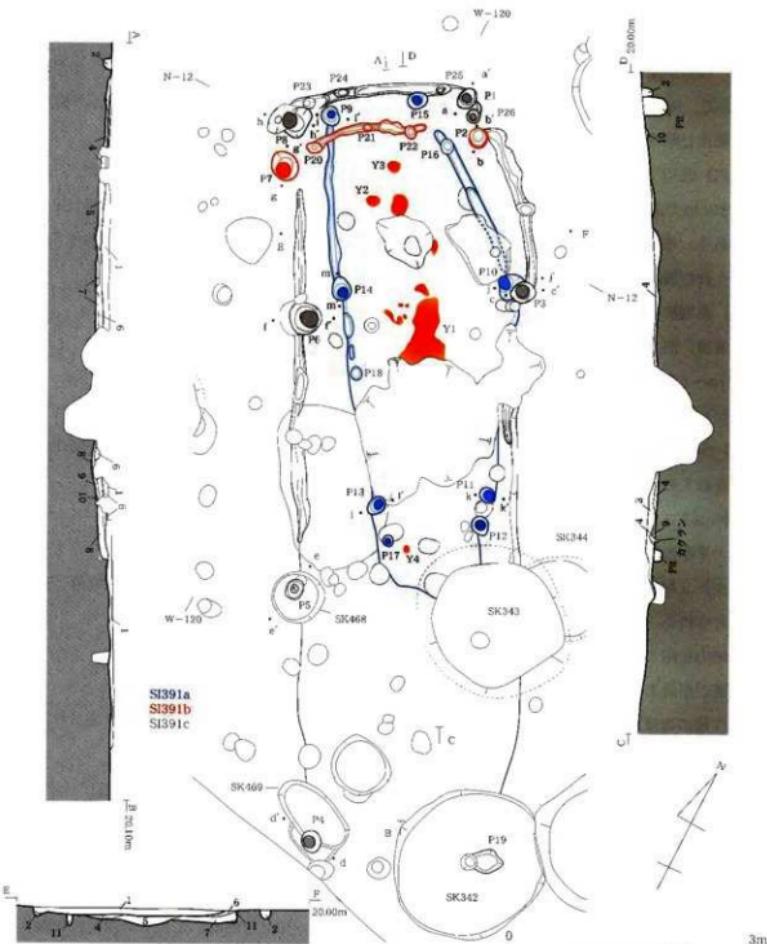
【壁柱穴】東辺で5個(P10~12・15・16)、西辺で5個(P9・13・14・17・18)の計10個検出した。平面形は直径15~35cmの円形や不整円形で、深さは9~62cmである。これらの中で柱痕跡が認められるものは8個あり、直径8~16cmの円形や楕円形である。堆積土は柱痕跡が炭化物や地山、焼土粒を含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

【方向】南辺でみると、北で東に約35°偏している。

【出土遺物】出土していない。

《SI391b》

【規模・平面形】住居南半は残存不良のため長辺規模は明確でないが、長軸約8.7m以上、短軸約3.0mで、北辺に角がつく長楕円形を呈している。



番号	土 質	性 質	采 入 部	層 号
1	黄褐色(山)砂質土	砂質土	地表面・小槽を含む部分	1
2	緑褐色(山)砂質土	砂質土	地表面	2
3	黄褐色(山)粘土質土	砂土プロックを含む	地表面	3
4	黄褐色(山)泥質土	小槽を少量、老山ブロックを含む	地表面	4
5	黄褐色(山)泥炭質土	泥炭質・地表面・樹木を含む	地表面	5
6	黄褐色(山)砂質土	砂質土	地表面	6
7	黄褐色(山)砂質土	砂質土・老山根を少許、樹木・小槽を含む部分	地表面	7
8	黄褐色(山)砂質土	砂質土	地表面	8
9	黄褐色(山)砂質土	砂質土を少量含む	地表面	9
10	黄褐色(山)砂質土	砂質土プロックを含む	地表面	10
11	黄褐色(山)砂質土	砂質土	地表面	11

図版118 SI391住居跡(1)



SI391住居跡(北西から)



堆積土断面(南東から)



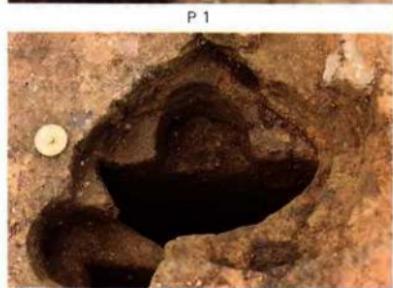
P 4



P 1



P 7

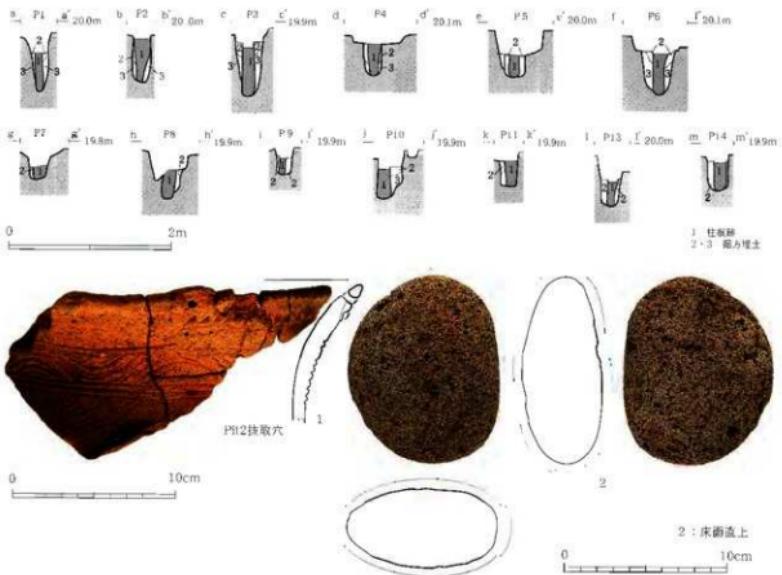


P 3



P10

図版119 SI391住居跡(2)



図版120 SI391住居跡(3)

【堆積土】残存していない。

【床】SI391 aと重複する部分では、これを地山ブロックや炭化物、小礫、焼土などを含む暗・黒褐色シルト等で埋め戻して床としており、他の部分では地山を床としている。

【壁】西辺が最も残りがよく、15cm程が残存している。

【炉】住居北半で、直径10cm前後の不整形の小さな焼け面を3ヶ所検出した(Y 2~4)。いずれも地床炉と考えられる。

【主柱穴】検出されておらず、主に壁柱穴によって上屋を支持していたものと考えられる。

【周溝】部分的に途切れるが、南辺を除く住居北半の3辺で検出した。上幅8~23cm、下幅3~10cmで、深さは10~21cmである。堆積土は暗褐色シルトである。

【壁柱穴】東辺で4個(P3・19・23・24)、西辺で4個(P4~7)、北辺で3個(P20~22)計11個検出した。平面形は直径10~40cmの円形や不整円形で、深さは19~79cmである。北辺のP20~22は直径10~20cmと他と比べて小さめである。この中で、柱痕跡が認められるものは5個あり、直径8~24cmの円形で、堆積土は柱痕跡が地山粒を少量含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

【方向】北辺でみると、北で東に約30°偏している。

【出土遺物】P2の柱抜き取り穴から、縄文土器深鉢の破片が出土している(図版120-1)。

《SI391 c》

SI391 b の北辺を約45cm拡張したもので、平面形態や床、壁、住居方向等の特徴はSI391 b と同様である。

【堆積土】 1層確認されており、地山粒や小礫を少量含む暗褐色シルトの自然堆積土である。

【炉】 住居北半で、直径10cm前後の不整形の小さな焼け面を3ヶ所検出した(Y2~4)。いずれも地床炉と考えられる。

【周溝】 拡張部の周溝は上幅12cm前後、下幅10cm前後で、深さは5~15cmである。堆積土は暗褐色シルトである。

【壁柱穴】 拡張部で6個(P8・23~26)検出した。平面形は直径10~25cmの円形や不整円形で、深さは15~76cmである。この中で、柱痕跡が認められるものは3個あり、直径8~18cmの円形で、堆積土は柱痕跡が地山粒を少量含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

【出土遺物】 床面直上や堆積土から磨・凹・敲石(図版120-2)や地文のみの繩文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI390住居跡】(図版121~123)

【位置】 N-9・W-87【確認面】 地山もしくはSI400住居跡の堆積土上面で、北側へ緩やかに傾斜している。なお、住居内部には長軸に沿って大きくトレンチ状の擾乱が入る。

【重複】 SI389・400・403~405・458・480住居跡と重複している。SI389よりも古く、その他の住居よりも新しい。

【規模・平面形】 東西6.0m×南北9.5mで、長方形を呈する。

【堆積土】 堆積土の多くは擾乱によって失われているものの、北・東・西壁際周辺と中央部の床面直上に12層残る。そのうち7層は住居北壁際に認められる地山・暗褐色土・黒褐色土ブロック混じりの層で、北壁の崩落土と考えられる。10~12層は焼土・炭化物を主体とする層で、焼け面上を中心分布しており、炉機能時に堆積したものと思われる。これ以外の層は自然流入土である。

【壁】 SI400住居跡と重複する部分ではその埋土、それ以外では地山を壁としている。壁は床面からやや開き気味に立ち上がり、壁高は残りの良い西壁南部で床面から40cmある。

【床】 残存する部分では地山を床としており、炉跡付近には部分的な貼床も認められる。擾乱により失われている部分も多いが、縦・横断面をみると、床面は壁際から中央に向かって皿状に窪むと推測される。特に中央部は長軸線に沿って瓢箪状に一段深くなっている。床面にはやや凹凸があり、一段深い中央部では、地山が黄褐色ローム下の砂層となっている。

【炉】 明らかに古い住居に伴うものを除くと住居内では合計20個の焼け面(Y1~20)が検出されており、Y1・10は部分的な貼床の下で確認されている。平面形は長軸10~140cmの不整形を呈し、中央部が強く焼けて硬化しているもの(Y2・8・20)や肩状に盛り上がるるもの(Y20)もある。これらは大小の差があるものの、全て地床炉と考えられる。多くの焼け面は長軸線に沿って瓢箪状に一段窪んだ範囲内に分布しており、同時に機能していたかどうかは別として基本的にこの住居に伴うものと思われる。焼け面の位置を細かくみると、P1・2・7・8(aブロック)、P2・3・6・7



SI390住居跡(南から)



炉跡



北辺周溝



西辺周溝

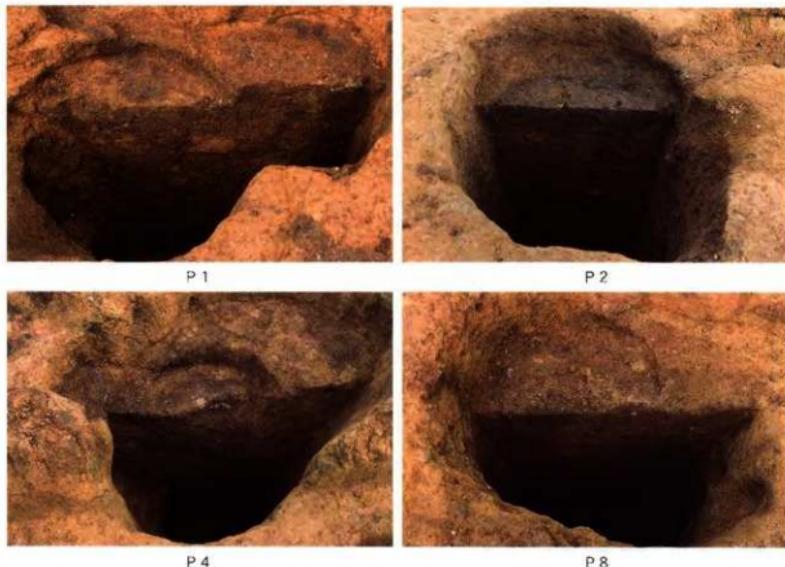


東辺周溝

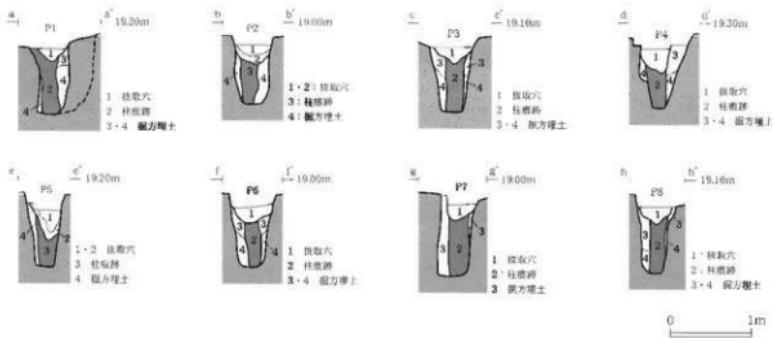
図版 121 SI390住居跡(3)



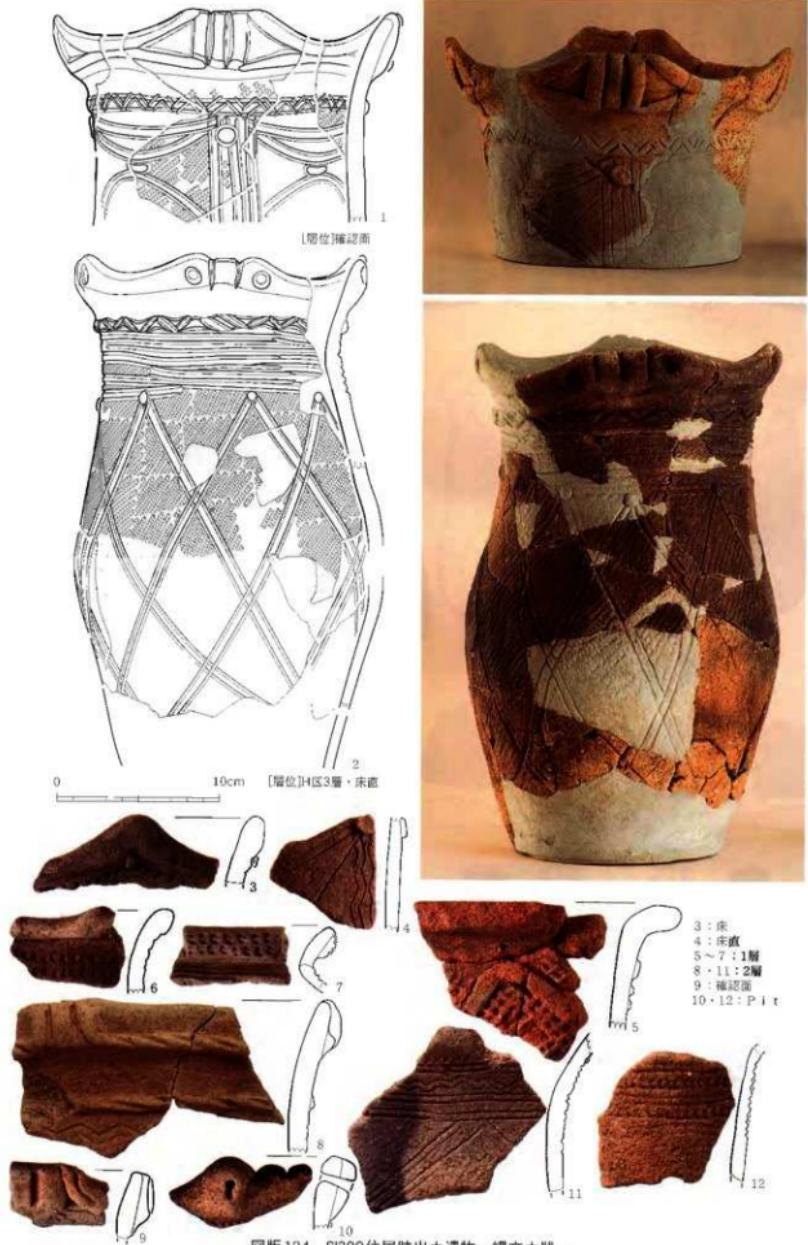
図版 122 SI390住居跡(1)



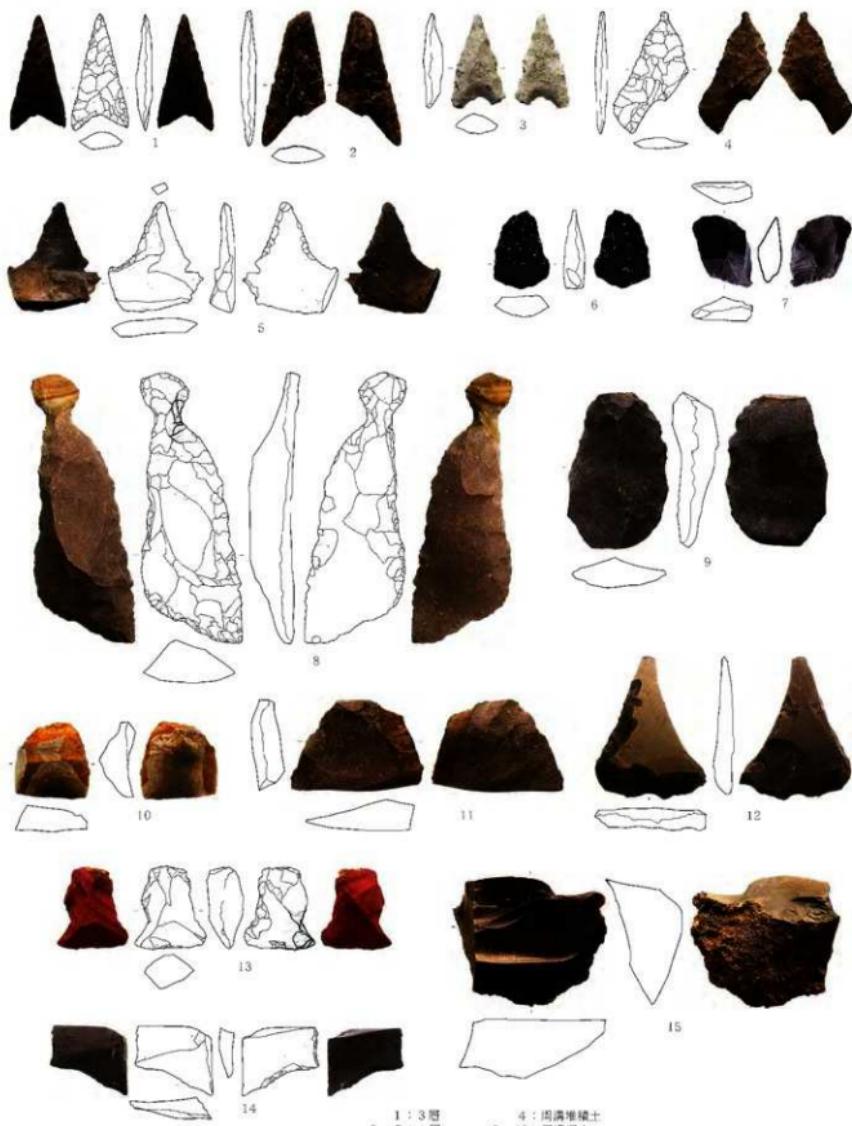
組合	土 型	土 性	盛 入 物 等	備 考
1 滅菌窓(1YVR1/1)	シルト	泥化物・塊状物・小礫を含む	自然堆積土	
2 滅菌窓(1YVR4/2)	シルト	塊状ブロックを多量、炭化物・骨片が少量	自然堆積土	
3 滅菌窓(1YVR2/2)	シルト	炭化物・塊状物・小礫を含む	自然堆積土	
4 滅菌窓(1YVR3/3)	シルト	炭化物を多量、炭化物・塊状物・小礫を含む	自然堆積土	
5 滅菌窓(1YVR4/4)	シルト	炭化物・塊状物・小礫を含む	自然堆積土	
6 滅菌窓(1YVR4/5)	シルト	炭化物・塊状物・小礫を含む	自然堆積土	
7 滅菌窓(1YVR4/6)	シルト	塊状ブロックを多量、炭化物・骨片と少量	自然堆積土	
8 滅菌窓(1YVR2/2)	シルト	炭化物を多量、炭化物・塊状物・小礫を含む	自然堆積土	
9 滅菌窓(1YVR2/2)	シルト	炭化物・塊状物・小礫を含む	自然堆積土	
10 滅菌窓(1YVR2/2)	シルト	泥化物・塊状物を含む	堆積物の堆積	
11 滅菌窓(1YVR2/2)	シルト	炭化物を多量、块状物を少量含む	堆積物の堆積	
12 滅菌窓(1YVR3/3)	シルト	炭化物を多量、炭化物を少量含む	堆積物の堆積	
13 滅菌窓(1YVR4/2)	シルト	炭化物・小礫を多量、炭化物を含む	建材堆积	
14 滅菌窓(1YVR3/2)	シルト	炭化物・塊状物・小礫を含む、塊状ブロックを含む	建材堆积	
15 滅菌窓(1YVR4/2)	シルト	塊状ブロックを多量、小礫を含む	堆積土	
16 2-3-滅菌窓(1YVR4/2)	シルト	塊状ブロックを多量、炭化物・小礫を少量含む	堆積土	
17 2-4-滅菌窓(1YVR4/2)	シルト	塊状・堆積土上ブロックの辺り	道-7m壁線上	



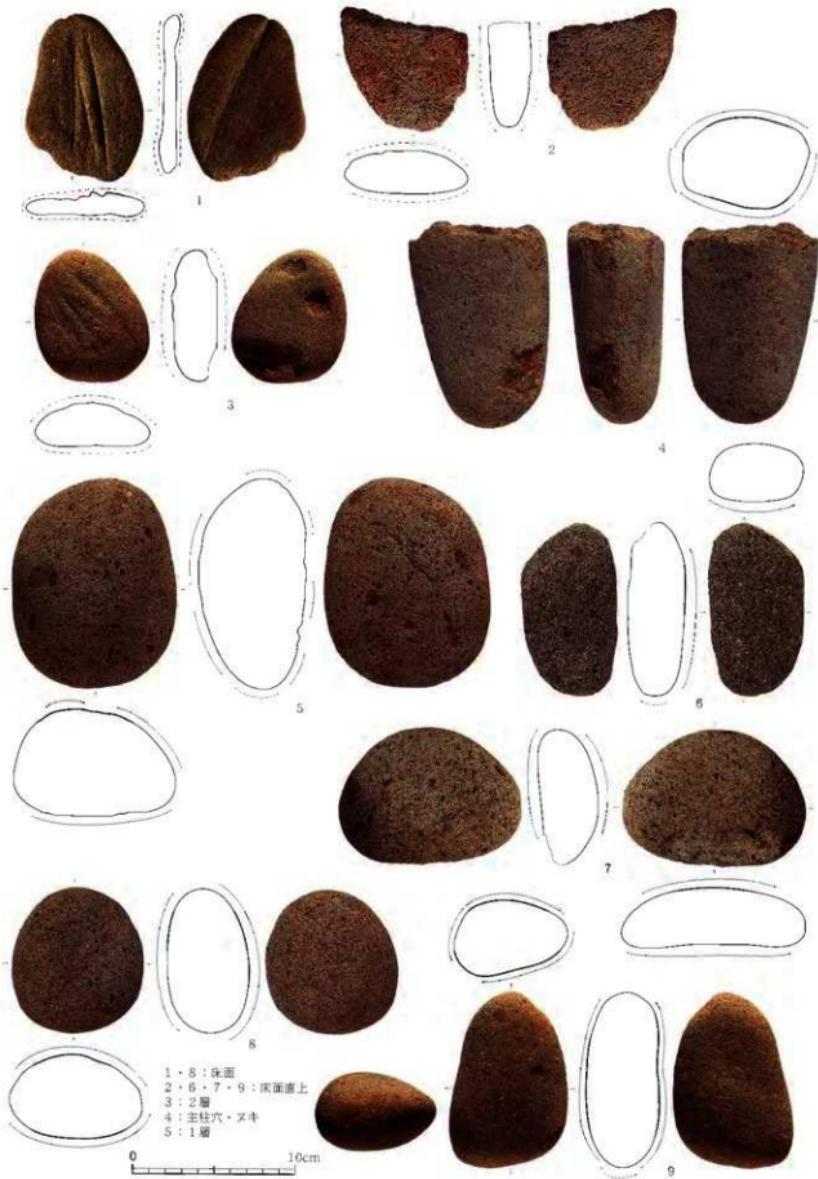
図版123 SI390住居跡(2)



图版124 SI390住居跡出土遺物—縄文土器—



图版 125 SI390 住居跡出土遺物—石器(1)—



圖版 126 S1390住居跡出土遺物—石器(2)—

(bブロック)、P 3・4・5・6(cブロック)に囲まれた3ブロックのいずれかに属する。a・cブロックの焼け面は大きく、aブロックでは貼床による炉の補修も認められる。bブロックには比較的小さな焼け面が配されている。

[主柱穴] 住居内には壁柱穴の他に大小80個程のピットがある。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP 1～4、P 5～8がこの住居の主柱穴と考えられる。いずれの柱穴でも柱が抜き取られており、柱穴下部には直径25～30cmの不整な円形の柱痕跡が残る。掘方の平面形は長軸が50～70cmの不整な椭円形もしくは調丸方形を呈し、底面に向かって窄まる傾向にある。深さは85～100cmである。柱間寸法は長辺で2.4～3.0m、短辺で3.8～4.1mある。

[周溝・溝・壁柱穴] 周溝は残存する壁の直下を巡り、そのまま全周するが、北東・北西・南西隅で短く途切れる。上幅10～30cm、深さ10～50cmで、断面は基本的に「U」字状を呈する。北辺の溝は深さ40cm以上と他辺の約2倍深く、断面形も内側へやや開いた変形「U」字状である。堆積土は主に地山ブロックを多量に含む黄褐色シルトで、縮まりもあることから埋め戻されてきたとみられる。また、周溝上面では壁柱穴と考えられる長軸18～28cmの不整な円形・椭円形を呈するピット22個と壁材の痕跡と考えられる幅8～20cmの暗褐色の堆積土が確認されている。壁材の痕跡は周溝内を壁側に添って断続的に延び、その途切れた部分に壁柱穴が分布している。壁柱穴は深さ30cm前後のものが多いが、東・西辺の相対する位置に深さ50cm程の深いピット(P 9～16)が配されている。その他、P 2・3、P 3・4間に東壁に平行して延びる溝を検出している。上幅10～15cm、深さ5～10cmで、断面は「U」字状を呈する。この溝の底面では長軸10～35cmの不整な円形・椭円形を呈するピット7個も確認されており、深さは30～55cmある。

[方向] 長軸線でみると、北で東に約6°偏している。

[出土遺物] 床面や周溝、主柱穴等から繩文土器深鉢(図版124)や石錐(図版125-1～4)、石錐(5)、尖頭器(6)、楔形石器(7)、石匙(8)、不定形石器(9～14)、砥石(図版126-1～3)、磨・凹・敲石(4～8)、土偶(図版423・428)等が出土している。

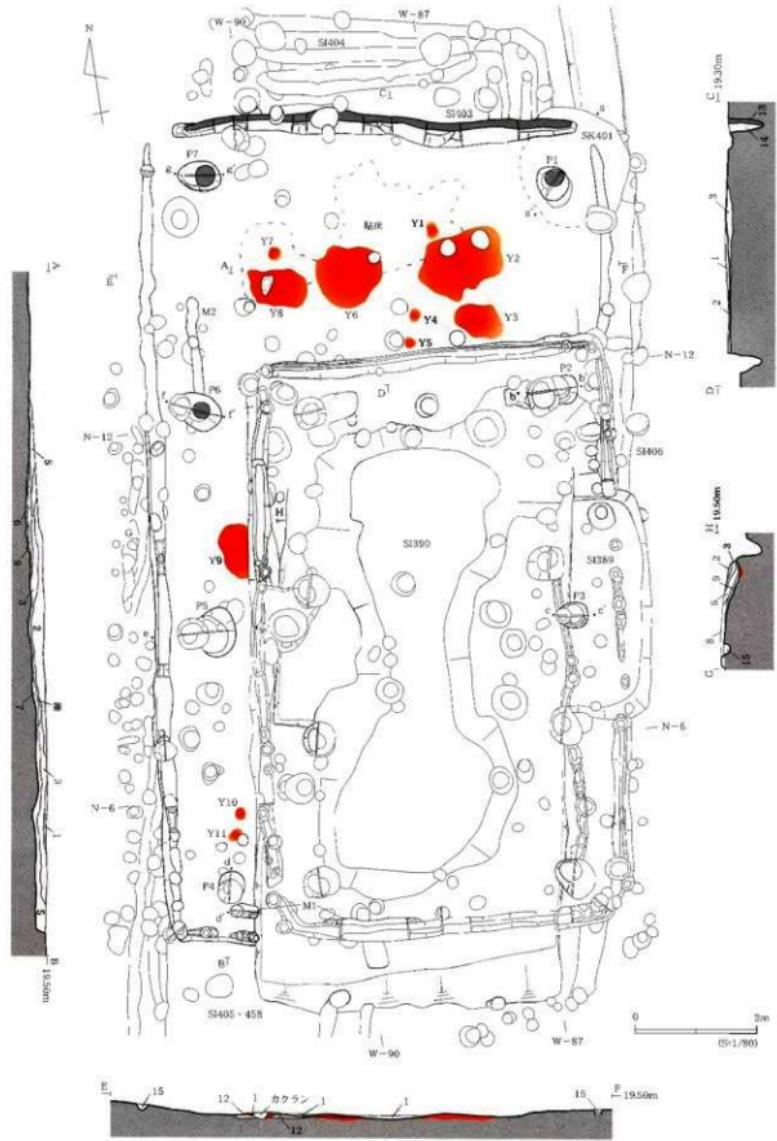
[SI400住居跡] (図版127～129)

[位置] N-9・W-87 [確認面] 地山もしくはSI405住居跡の堆積土上面で、北側へ緩やかに傾斜している。

[重複] SI372・389・390・403～405・458住居跡、SK401土壙と重複している。SI372・389・390よりも古く、その他の遺構よりも新しい。なお、SI405との前後関係は堆積土をある程度掘り下げた時点で認識した。

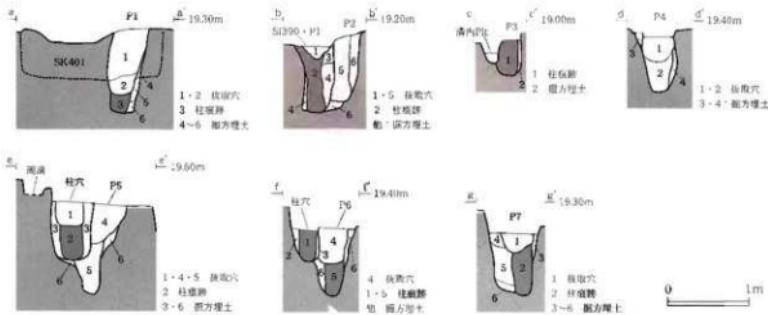
[規模・平面形] 南側の大部分をSI390住居跡によって壊され、北部も削平を受けているものの、残存する周溝をみる限り東西7.6m×南北13.5mで、長方形を呈する。

[堆積土] 南西部と北部中央の床面上に合計11層残り、1・5・8～10層は自然流入土である。2・3・4層はそれぞれ地山・黒色土・暗褐色土のブロックを主体とした層で、人为的な埋め戻しの可能性がある。6・7層は狭い範囲に分布し、焼土ブロック・炭化物を多量に含むことから廃絶後の住居内に捨てられた土と考えられる。11層は焼け面上に堆積した焼土・炭化物混じりの層で、



図版 127 SI400住居跡(1)

層位	土色	土性	盛入物等	目年
1. 塗刷色25YR 3/1	シルト	褐色・赤土色・褐色を含む 自然堆積土		
2. Cの堆積物(19.40m)	シルト	褐色・暗褐色のブロック状に	人為堆積土	
3. 塗刷色のP2(2)	シルト	褐色・黑色・暗褐色のブロック状に	人為堆積土	
4. 塗刷色のP2(2)	シルト	褐色・黑色・暗褐色土とブロック状に複数に	人為堆積土	
5. 塗刷色のP2(2)	シルト	褐色・黒色・暗褐色土とブロック状に複数に	人為堆積土	
6. 塗刷色のP2(2)	シルト	褐色・黒色・暗褐色土とブロック状に複数に	黒土	
7. 塗刷色のP2(2)	シルト	褐色・黒色・暗褐色土と 褐色・黒色・暗褐色を含む	黒土	
8. 塗刷色のP2(2)	シルト	褐色・黒色・暗褐色・褐色土と含む	自然堆積土	



図版128 SI400住居跡(2)



SI400・403・404住居跡(北から)



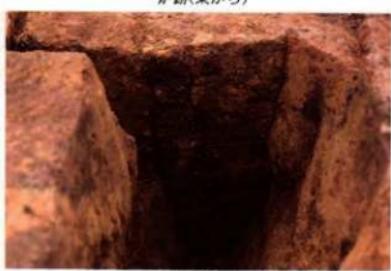
炉跡(南から)



炉跡(東から)



西辺周溝



北辺周溝

图版 129 SI400住居跡(3)



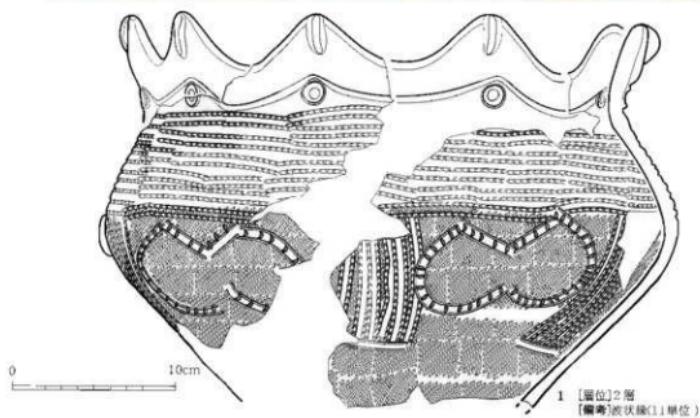
【附图】主柱(N1W1)抜取六
【参考】上半完形



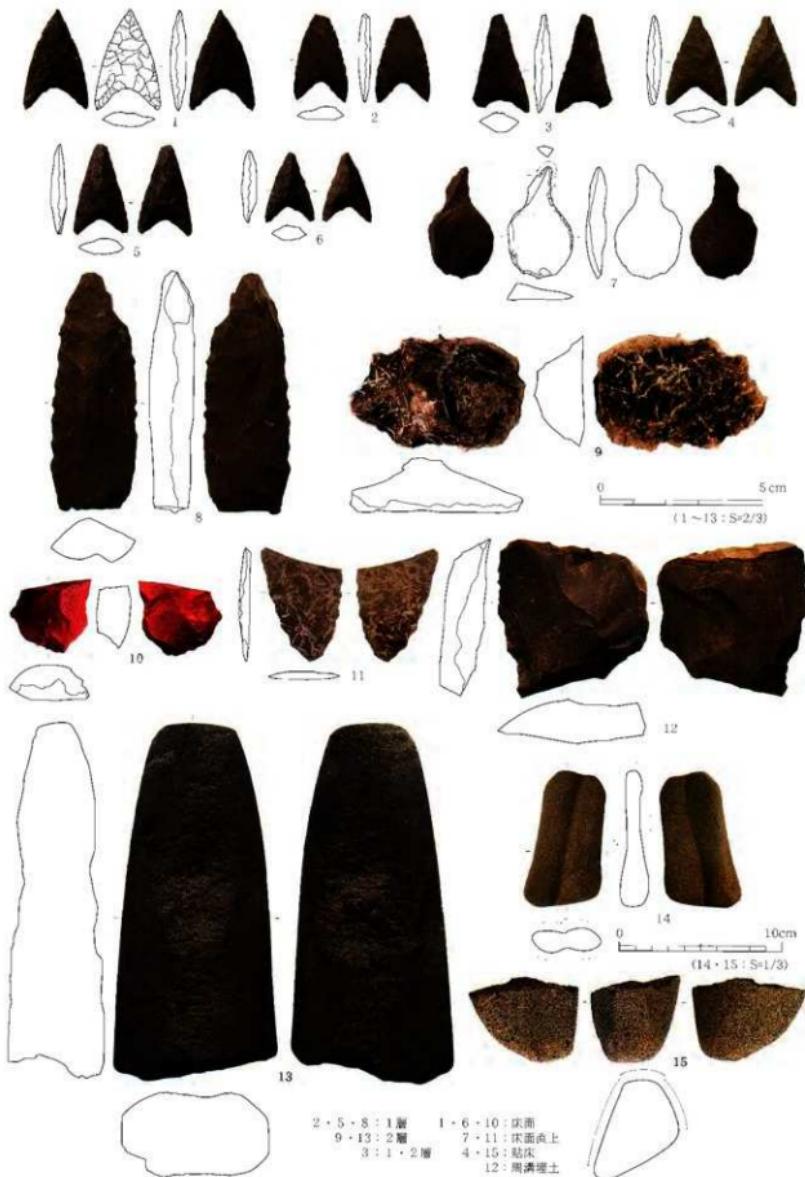
遺物出土状況



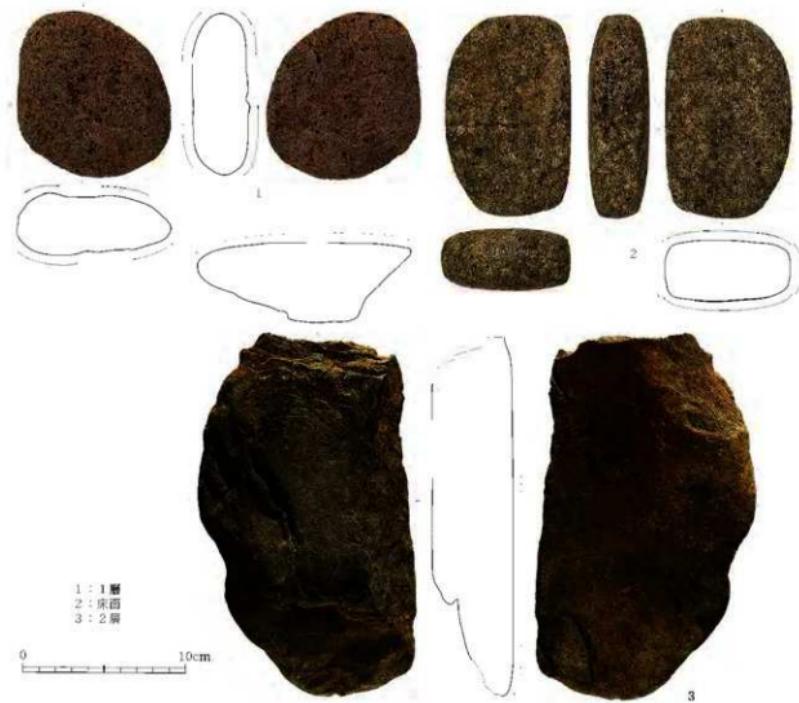
図版130 SI400住居跡出土遺物(1)-縄文土器-



図版131 SI400住居跡出土遺物(2)－縄文土器－



图版132 SI400住居跡出土物(3)-石器-



図版133 SI400住居跡出土遺物(4)-石器-

炉機能時の堆積と思われる。

[壁] 西辺の南半に高さ5~10cmの壁が残る。基本的に地山を壁としており、床面からやや開き気味に立ち上がる。

[床] 残存する部分ではSI402・403住居跡の埋土もしくは地山を床としており、炉周辺には貼床が施されている。横断面をみると、床面は壁際から中央に向かって皿状に窪むと推測される。全体としては北側へ緩やかに傾斜しており、凹凸がある。

[炉] 床面で検出した11個の焼け面(Y1~11)は、同時に機能していたかどうかは別として基本的にこの住居に伴うものと考えられる。平面形は長軸18~150cmの不整形を呈し、中央部が強く焼けて硬化しているもの(Y2・3・6・8・9)が多い。これらは大小の差があるものの、全て地床炉と考えられる。失われた床面が多く詳細については不明であるが、炉は主柱に囲まれた3ブロックに大きく分かれて配置されていることが窺われる。状況のわかるP1・2・6・7に囲まれた部分では大形で強く焼けた焼け面3個が横並びに検出されており、かなり大規模な炉が住居内に設けられていたことがわかる。

【主柱穴】 住居内には大小150個以上のピットがある。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP 1～3、P 4～7がこの住居の主柱穴と考えられる。なお、P 4と対になる南東隅柱はSI390住居跡の南東隅柱によって壊されていると推定される。いずれの柱穴でも柱が抜き取られており、P 1・6・7の柱穴下部には直径約30cmの不整な円形の柱痕跡が残る。掘方の平面形は長軸が40～70cmの不整な円形もしくは横円形を呈し、底面に向かって窄まる傾向にある。深さは60～110cmで、底面レベルがほぼ同じ値を示すことから、本来は全て100cm前後の深さと思われる。柱間寸法は長辺(3間)で3.5～4.2m、短辺(1間)で5.8～6.0mあり、南端とそこから1間目の柱の間隔がやや広い。

【周溝・溝・壁柱穴】 四辺を巡る周溝が確認されているが、東・南辺の大半はSI390住居跡に壊されて残存しない。北東・北西隅でも短く途切れている。上幅は10～40cmで、北辺が他辺より幅広になっている。断ち割った部分で見ると北辺以外の深さは20cm前後で、断面は基本的に「U」字状を呈する。北辺の溝は深さ約60cmと深く、断面形も内側へやや開いた変形「U」字状である。堆積土は主に暗褐色シルトで、北辺では地山ブロックが多量に含まれる。また、北辺の周溝上面では壁材の痕跡と考えられる幅8～15cmの黒褐色の堆積土も確認されている。更に、周溝上面や部分的に掘り上げた南・西辺の周溝底面で壁柱穴と考えられるピットを検出している。この他、南・西辺の周溝と平行してその40cm・80cm内側を延びる溝(M 1・2)が一部に認められる。M 2はP 6からP 7へ向かって延びている。

【方向】 長軸線でみると、北で東に約8°偏している。

【出土遺物】 床面や貼床、周溝・主柱穴、堆積土等から繩文土器深鉢やミニチュア土器(図版130・131)、石鏃(図版132-1～6)、石錐(7)、尖頭器(8)、不定形石器(9～12)、磨製石斧(13)、砥石(14)、磨・凹・敲石(図版132-15・133-1・3)、砥石(3)、土製品(図版438-9)等が出土している。

【SI403住居跡】(図版134～136)

【位置】 N-12・W-87 [確認面] SI390・400住居跡の床面もしくはSI404住居跡の堆積土上面で確認している。

【重複】 SI389・390・400・404・405・458住居跡と重複している。SI389・390・400よりも古く、その他の住居跡よりは新しい。

【規模・平面形】 南側の大部分をSI390住居跡によって壊され、北部も削平を受けているものの、残存する周溝・柱穴の配置をみる限り、東西4.6m×南北12.0m以上で、長方形を呈すると思われる。

【堆積土】 北部に3層残り、2・3層は自然流入土である。1層は地山ブロックを多量に含む灰黄褐色シルトで、人為的な埋め戻しの可能性がある。

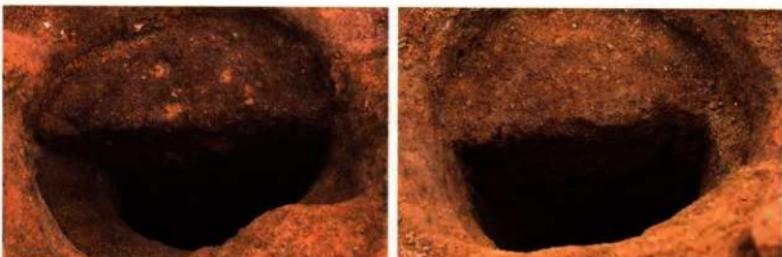
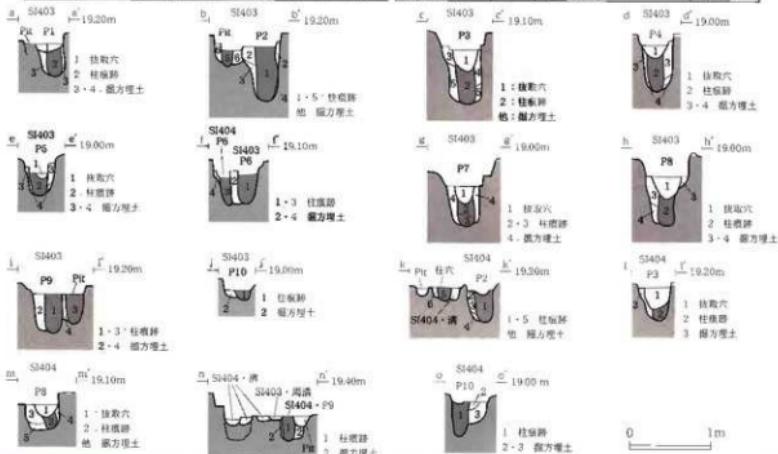
【壁】 東・西辺の北部に高さ5～10cmの壁が残る。主にSI403住居跡の埋土を壁としており、床面からやや開き気味に立ち上がる。

【床】 残存する部分では地山を床としている。縦・横断面をみると、床面は周辺から中央に向かって皿状に窪み、特に中央部は長軸線に沿って一段深くなっている。

【炉】 床面には10個の焼け面(Y 1～10)が残り、Y10はSI390住居跡の床面まで及ぶ。平面形は長軸



図版134 SI403・404住居跡(1)



SI403(P 8)



SI404(P 8)

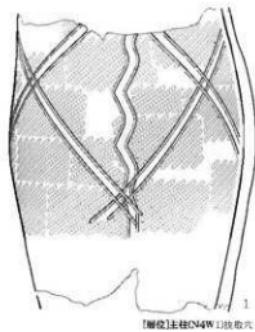
図版 135 SI403・404 住居跡(2)



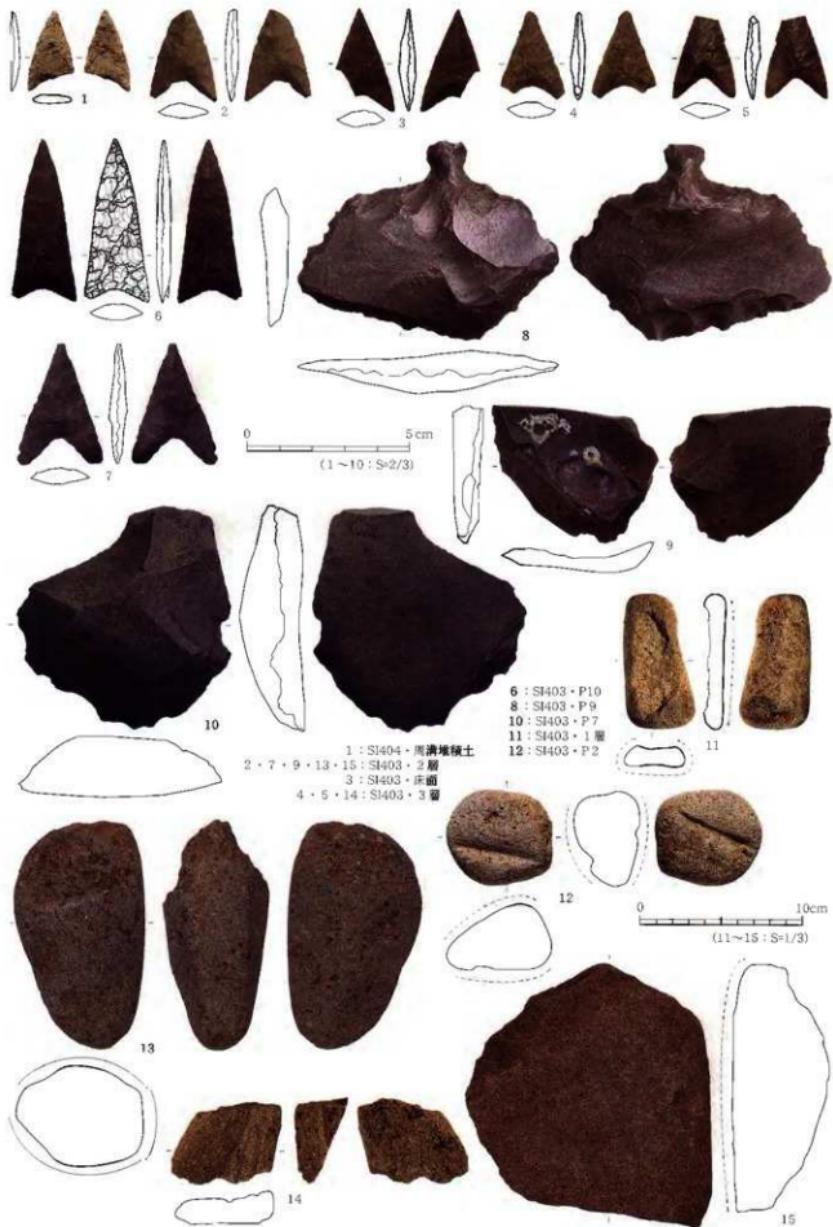
SI400・403・404堆積土断面(南から)



SI403・404北辺周溝



図版136 SI403・404住居跡(3)および出土遺物－縄文土器－



図版137 SI403・404住居跡出土遺物－石器－

20~190cmの不整形を呈し、中央部が強く焼けて硬化しているもの(Y4)もある。これらは大小の差があるものの、全て地床炉と考えられる。本住居ではSI404住居跡の床面をそのまま床として利用した可能性があることから、焼け面がいずれの住居に伴うか判別することは難しい。但し、長軸線に沿って床面中央の一段深い部分に並ぶY3・4・6・8・10は本住居に伴う可能性が高い。焼け面には大形のものが多く、かなり大規模な炉が住居内に設けられていたことが窺われる。

【主柱穴】住居内には大小150個以上のピットがある。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP1~5、P6~10がこの住居の主柱穴と考えられる。いずれの柱穴でも柱は抜き取られているとみられるが、直径20~25cmの不整な円形の柱痕跡を残す。掘方の平面形は長軸が40~60cmの不整な円形もしくは隅丸方形を呈し、底面に向かって窄まる傾向にある。深さは45~88cmと幅があるが、底面レベルの示す値から本来は80cm前後の深さと思われる。ただし、北東・北西隅柱にあたるP1・10は深さ50cm前後とやや浅い。柱間寸法は長辺(4間)で2.5~3.1m、短辺(1間)で3.2~3.8mある。主柱穴は周溝と重なる位置で検出されており、かなり壁際に寄せて主柱が設けられていたことが窺われる。

【馬溝・溝・壁柱穴】住居北半では壁の直下を巡る周溝が確認されており、北東・北西隅で短く途切れる。南半ではSI390住居跡に壊されて残存しないが、基本的に全周していたと考えられる。上幅は14~45cmで、北辺が他辺より幅広になっている。断ち割った部分で見ると深さは10~15cmで、断面は基本的に「U」字状である。北辺では溝の断面形が内側へ開いた変形「U」字状を呈している。堆積土は主に灰褐色シルトで、地山小ブロックが多量に含まれる。また、部分的に掘り上げた周溝の底面では壁柱穴と考えられるピットを検出しており、北辺の周溝内には比較的密にピットが並ぶようである。

【方向】長軸線でみると、北で東に約4° 傾いている。

【出土遺物】床面や主柱穴、堆積土から繩文土器深鉢の破片(図版136)や、石鏃(図版137-2~7)、石匙(8)、不定形石器(9・10)、磨石(13)、砥石(11・12・14)、石皿(15)、イチジク形土製品(図版436)が出土している。

【SI404住居跡】(図版134~136)

【位置】N-12・W-87【確認面】SI390・400・403住居跡の床面もしくは地山面で確認している。

【重複】SI389・390・400・403・405・458住居跡と重複している。SI405・458よりも新しく、その他の住居跡よりは古い。

【規模・平面形】南側の大部分をSI390住居跡によって壊され、北部も削平を受けているものの、残存する溝・柱穴の配置をみると、東西5.6m×南北12.8m以上で、長方形を呈すると思われる。なお、住居内では壁と平行して延びる溝を北辺で4条、東・西辺で3条確認しており、壁との位置や重複関係から基本的に外側のものが新しい。住居が数回拡張改築されていると考えられるが、詳細については不明である。

【堆積土】北部に4層残り、3・4層は自然流入土である。1・2層は地山ブロックを多量に含む灰褐色・暗褐色シルトで、人為的な埋め戻しの可能性がある。

【壁】地山を壁としており、東・西辺に高さ5～15cm残る。床面からほぼ垂直に立ち上がるが、壁が崩落して開き気味となる部分もある。

【床】失われた部分が多く詳細については不明であるが、基本的に地山を床としていたと考えられる。横断面をみると、床面は壁から中央に向かって緩やかに傾斜しており、皿状に窪むことが予想される。また、本住居とSI403住居跡の床面には殆どレベル差が認められないことから、同一面を床としていた可能性が強い。

【主柱穴】住居内には大小150個以上のビットがある。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP1～5、P6～11がこの住居の主柱穴と考えられる。P8と対になる柱穴は、位置がSI390住居跡の貼床下にあたるため未検出である。いずれの柱穴でも柱は抜き取られているとみられるが、P1・7・11以外には直径17～25cmの不整な円形の柱痕跡が残る。掘方の平面形は長軸が38～55cmの不整な円形もしくは楕円形を呈し、底面に向かって窄まるものが多い。深さは10～56cmと幅があるが、底面レベルの示す値から本来は40cm以上あったと思われる。柱間寸法は長辺(5間)で2.1～2.6m、短辺(1間)で3.6～4.2mある。北東・北西隅にあたるP1・11が北辺周溝と重なる位置で確認されていることから、P1～11を一番新しい時期の主柱穴と判断した。これ以前の主柱穴については精査を行っていないため不明である。

【周溝・溝・壁柱穴】東・北・西辺では壁の直下を巡る周溝が確認されており、北西隅で途切れる。南東部ではSI390住居跡に壊されて残存しないが、基本的に全周していたと考えられる。また、住居内の壁際には周溝と平行して延びる溝が北辺で3条、東・西辺で2条認められ、住居改築に伴う周溝の造り替えがあったことが窺われる。精査をSI403住居跡の床面検出段階に止めたため、溝の組合せや改築回数については不明瞭である。これらの溝は上幅8～32cmで、断ち割った部分で見ると深さは7～25cmある。断面は「U」字状で、堆積土は地山小ブロックを含む褐灰色シルトを主体としている。更に、部分的に掘り上げた周溝の底面では壁柱穴と考えられるビットも検出されている。

【方向】長軸線でみると、北で東に約5°偏している。

【出土遺物】周溝から石巒(図版137-1)、P1から土製耳飾り(図版438-4)が出土している。

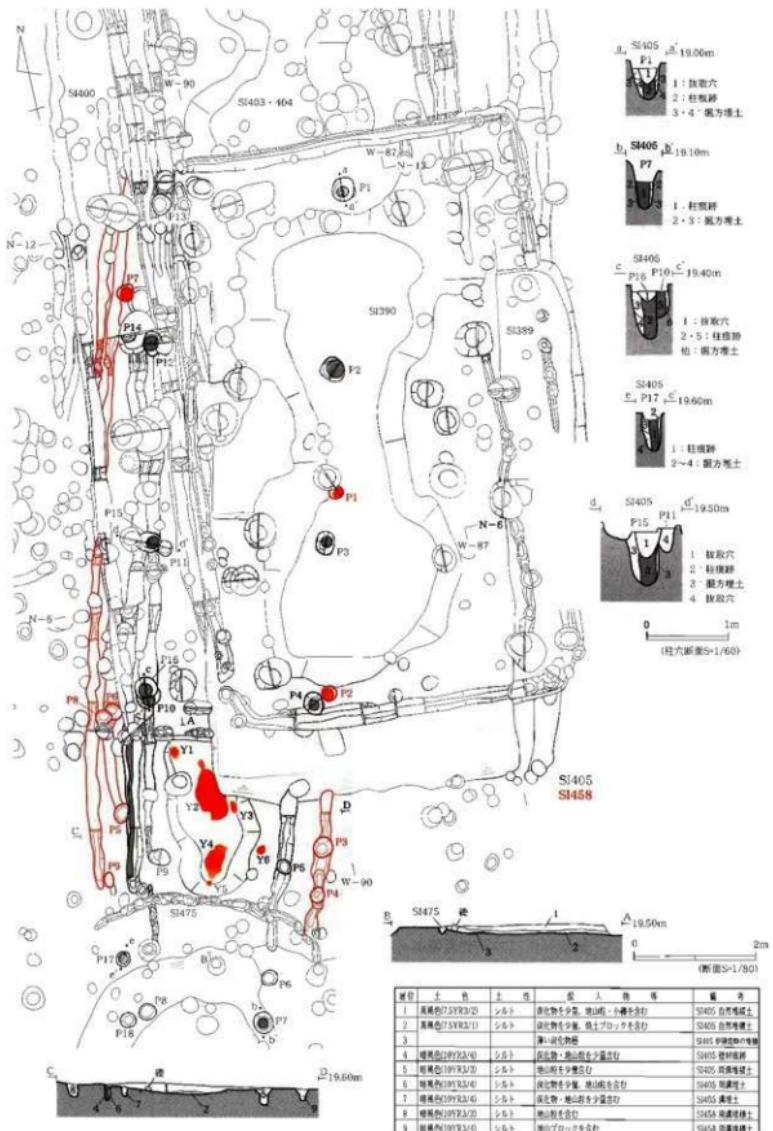
【SI405住居跡】(図版138・139)

【位置】N-6・W-90【確認面】地山もしくはSI400住居跡の床面である。

【重複】SI390・400・403・404・475・458住居跡と重複している。少なくともSI390・400よりは古い。更に周溝・柱穴の前後関係から、SI403・404、475よりも古く、SI458よりは新しいと判断した。なお、住居の南部は倒木痕によって壊されている。

【規模・平面形】新しい住居と倒木痕によって壊されているが、残存する周溝・柱穴の配置から東西約3.2m×南北14.0m以上で、長楕円形を呈すると考えられる。なお、西辺では平行して延びる溝2条を確認しており、住居が拡張改築されている可能性もある。この場合、改築前は東西約3.0mの規模となる。

【堆積土】住居南部に3層認められ、1・2層は自然流入土である。3層は焼け面上に堆積した薄い

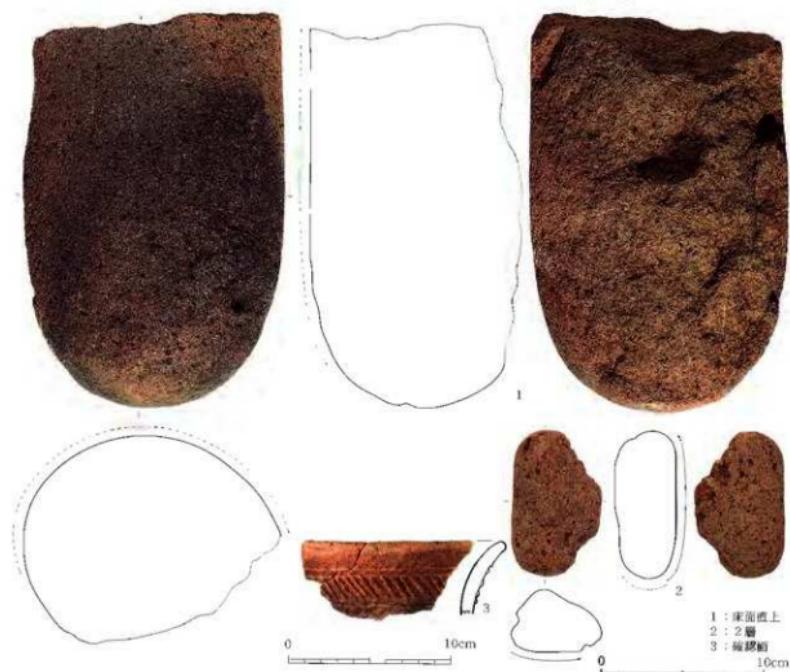


図版138 SI405・458住居跡



SI405堆積土断面(南から)

P10・16



図版139 SI405住居跡および出土遺物—縄文土器・石器—

炭化物層で、炉機能時の堆積と思われる。

〔壁〕西辺の南部に高さ5cm程残る部分があり、地山を壁としている。

〔床〕残存する部分では地山を床としている。横断面をみると、床面は壁際から中央に向かって壇状に窪み、特に中央部は長軸線に沿って一段深くなっている。床面にはやや凹凸があり、中央部の硬化が著しい。

〔炉〕住居内の床面には長軸10~100cmの不整形を呈する焼け面が6個(Y1~6)残る。この内、一

段窓んだ範囲内で長軸線上に並ぶY 2～5は、少なくとも本住居に伴う地床炉と考えられる。

【周溝・柱穴・壁柱穴】東辺で1条、西辺で2条、壁に沿って延びる溝が検出されており、住居の周溝と考えられる。上幅6～32cmで、断ち割った部分で見ると深さは5～25cmある。断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈し、堆積土は主に暗褐色シルトである。西辺の2条の溝は接する状態で南北へ延び、外側のものが壁の直下に位置することから、改築に伴った内から外への造り替えが予想される。また、溝上面やその延長上では住居長軸線を挟んで対称の位置に配された直径20～40cmの不整な円形を呈する柱穴18個(P 1～18)を確認している。深さは30～113cmと幅があるが、その底面レベルは近似した値を示すものが多く、本来は100cm前後の深さであったと思われる。柱穴には柱抜き取り痕や柱痕跡を残すものがあり、柱痕跡は直径15～25cmの円形を呈する。柱穴は2.4～3.2mの間隔で東・西辺に配置されており、西辺では周溝と同様に改築に伴う2時期の変遷が認められる。その役割は主柱的なものであったと推測され、P 1～5・7～12が改築前、P 1～4・6・13～18が改築後のものとなる。なお、改築後に伴うP 6・17の配置は極端に南寄りで、現状で南東・南西隅柱にあたるP 7・18との距離が短い。このことからP 7・18の位置がほぼ住居南辺となることが窺われる。更に、西辺外側の溝には壁材の痕跡と考えられる幅5～10cmの暗褐色の堆積土が部分的に残り、掘り上げた周溝底面では壁柱穴と思われるピットも確認されている。

【方向】長軸線でみると、北で東に約15° 偏している。

【出土遺物】堆積土から繩文土器深鉢の破片(図版139-3)や石皿(1・2)等が出土している。

【SI458住居跡】(図版138・139)

【位置】N-6・W-90 [確認面] 地山もしくはSI400住居跡の床面である。

【重複】SI390・400・403～405・475住居跡と重複している。少なくともSI390・400よりは古い。更に周溝の前後関係から、重複する全ての遺構よりも古いと判断した。

【規模・平面形】残存する東・西辺の周溝の状況から東西約4.0m×南北12.0m以上で、長楕円形を呈すると考えられる。西辺では平行して延びる溝2条を確認しており、住居が拡張改築されている可能性もある。この場合、改築前は東西約3.8mの規模となる。なお、削平と新しい住居に壊されて周溝以外の施設は認識できない。

【周溝】東辺で1条、西辺で2条、平行して南北に延びる溝を検出しており、住居の周溝と考えられる。上幅8～26cmで、断ち割った部分で見ると深さは5～20cmある。断面は両側へやや開いた変形「U」字状を呈し、堆積土は主に暗褐色シルトである。西辺の2条の溝は近接して南北へ延びることから、拡張改築が予想される。

【壁柱穴】溝上面や部分的に掘り上げた底面では主柱もしくは壁柱穴の可能性があるピットも確認されている。この内、P 1～9は住居長軸線を挟んで対称の位置に配された直径20～30cmの不整な円形を呈するピットで、柱痕跡を残すものもあることから主柱的な役割が推定される。深さは10～40cmで、柱痕跡は直径15～20cmの円形を呈する。柱穴は1.8～3.2mの間隔で東・西辺に配置されおり、西辺では周溝と同様に改築に伴う2時期の変遷が認められる。この場合、P 1～3・5～7が改築前、P 1・2・4・8・9が改築後のものとなる。



図版140 SI406・444・480住居跡(1)(北から)

【方向】長軸線でみると、北で東に約14° 傾している。

【出土遺物】地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI406住居跡】(図版140・143)

【位置】N-12・W-82【確認面】地山もしくはSI444住居跡の堆積土上面で、北側へ傾斜している。

【重複】SI389・444・446・480住居跡、SK445・481土壤と重複しており、SI389・446よりも古く、その他の造構よりは新しい。なお、SI444住居跡との前後関係は堆積土を床面近くまで掘り下げた時点で認識した。

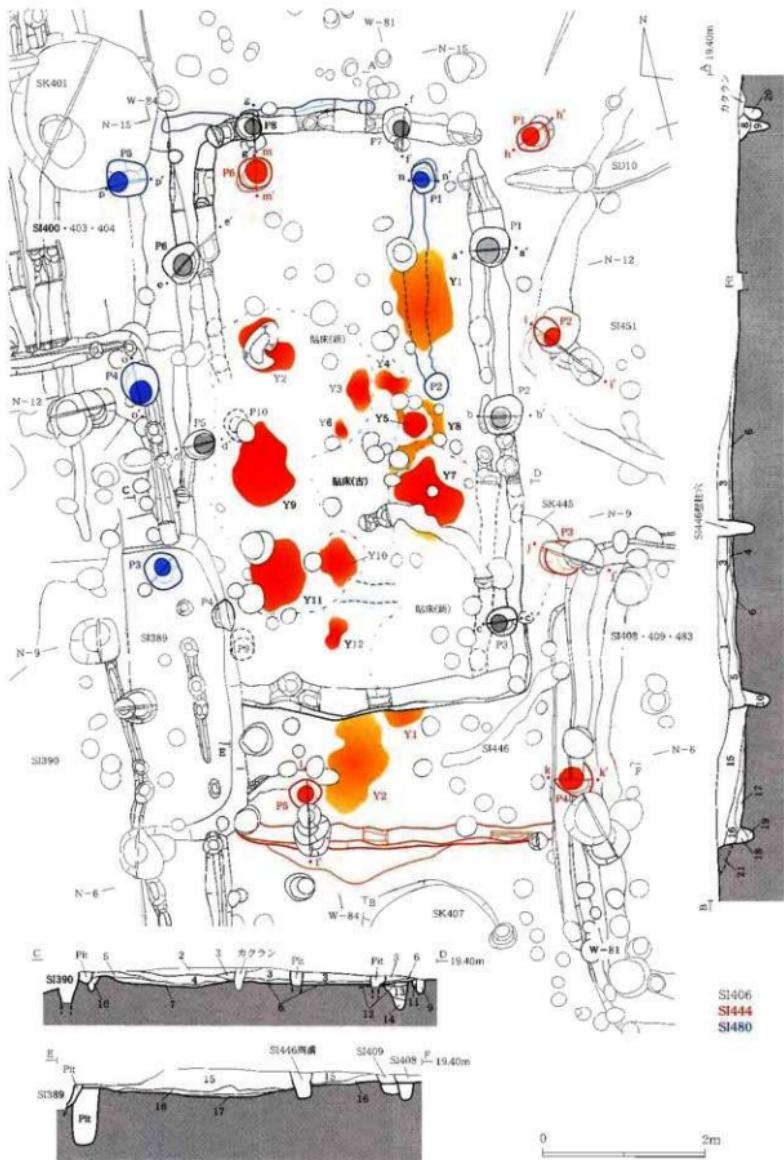
【規模・平面形】北半以上が削平を受けているものの、残存する周溝・柱穴の配置をみる限り、東西4.0m×南北7.2mで、隅丸長方形を呈する。なお、住居内では東・西の周溝と平行して延びる溝を各1条確認しており、住居が改築されている可能性がある。この場合、東西辺を外側へ30cm程度拡張したことになり、改築前の規模は東西約3.4mである。

【堆積土】南半に7層残り、4層以外は自然流入土である。4層は住居中央やや西寄りに分布する焼土ブロック主体の層で、廃絶後の住居内に捨てられた土と考えられる。

【壁】南東部に高さ10~20cmの壁が残る。残存する部分ではSI444住居跡の埋土を壁としており、床面からやや開き気味に立ち上がる。

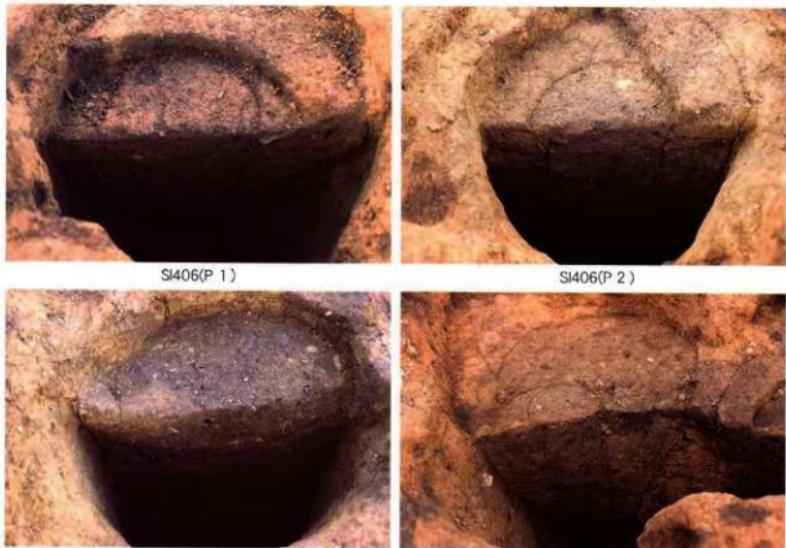
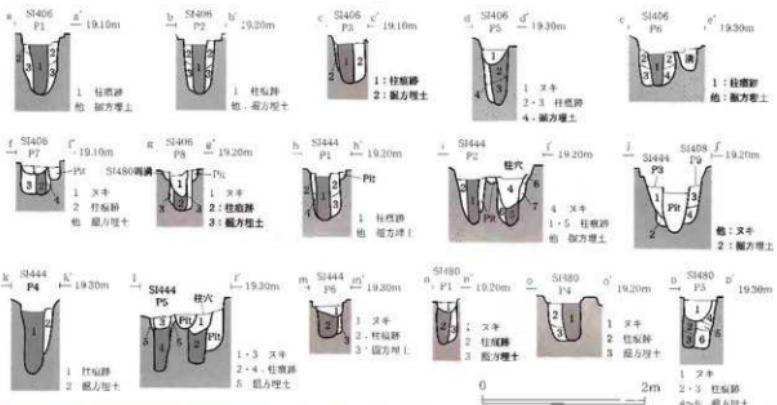
【床】北半が失われているものの、基本的に貼床を施して床としており、壁際には地山を床とする部分もある。また、炉及びその周辺には部分的な貼床が数枚認められ、随時、床面の補修が行なわれていたことが窺われる。床面には凹凸があり、特に古い土壤の上部に当たる中央やや西寄りの窪みが著しい。

【炉】住居内では合計12個の焼け面(Y1~12)が検出されている。平面形は長軸25~130cmの不整形を呈し、中央部が強く焼けてやや硬化しているもの(Y1・5・7・9・11)が多い。これらは大小の差があるものの、全て地床炉と考えられる。この内、Y1は削平面、Y8は貼床下の地山面で



図版 141 S406・444・480住居跡(2)

單位	土 庫	土 性	用 入 物 等	備 考	單位	土 庫	土 性	用 入 物 等	備 考
1 住居跡SI403.2	シルト	田代糞・鐵矢・鳥糞・小礫少含む	SI406 住居跡土		12 二重構造SI404.1	シルト	鐵矢・竹筒多量、瓦片等・瓦含む	SI405 住居	
2 住居跡SI403.3	シルト	田代糞・鐵矢・鐵片・小礫少含む	SI406 住居跡土		13 鐵矢型SI404.1	シルト	鐵矢多量、鐵矢等・小礫少含む	SI405 住居跡土	
3 住居跡SI404.2	シルト	田代糞・鐵矢・小礫少含む	SI406 住居跡土		14 二重構造SI404.2	シルト	鐵矢多量・鐵矢等・小礫少含む	SI405 住居跡土	
4 住居跡SI404.3	シルト	田代糞・鐵矢・鐵片・小礫少含む	SI406 住居跡土		15 鐵矢型SI405.2	シルト	鐵矢・鐵矢・鐵片・小礫少含む	SI404 住居跡土	
5 住居跡SI405.2	シルト	田代糞・小礫少含む、鐵矢等少含む	SI406 住居跡土		16 鐵矢型SI405.2	シルト	鐵矢・鐵矢・鐵片等少含む	SI404 住居跡土	
6 住居跡SI405.2	シルト	田代糞・小礫少含む、鐵矢等少含む	SI406 住居跡土		17 鐵矢型SI405.2	シルト	鐵矢・鐵矢・鐵片等少含む	SI404 住居跡土	
7 住居跡SI406.1	シルト	田代糞多量・鐵矢等少含む	SI406 住居跡土		18 鐵矢型SI405.2	シルト	鐵矢・鐵矢・鐵片等少含む	SI404 住居跡土	
8 住居跡SI406.2	シルト	田代糞・鐵矢少含む、小礫少含む	SI406 住居跡土		19 住居跡SI405.4	シルト	鐵矢・鐵矢多量・鐵矢等・鐵片等少含む	SI404 住居跡土	
9 住居跡SI407.1	シルト	田代糞・鐵矢多量、瓦片等・鐵矢少含む	SI406 住居跡土		20 住居跡SI405.4	シルト	鐵矢多量、瓦片等・鐵矢少含む	SI404 住居跡土	
10 住居跡SI407.1	シルト	田代糞多量、瓦片等・小礫少含む	SI406 住居跡土		21 住居跡SI405.3	シルト	鐵矢・鐵矢・鐵片等少含む	SI404 住居跡土	
11 二重構造SI404.0	シルト	鐵矢多量・鐵片等少含む	SI406 住居跡土						



図版142 SI406・444・480住居跡(3)



SI444(P 4)



SI444(P 5)



SI444(P 6)



SI480(P 1)



SI480(P 4)

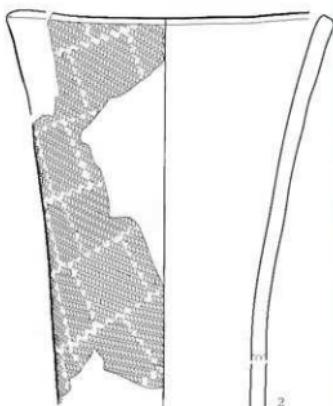


SI480(P 5)

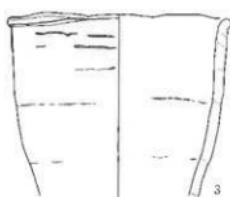


SI406遺物出土狀況

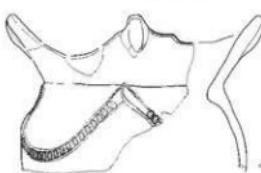
图版 143 SI406 · 444 · 480住居跡(4)



[層位] 主柱穴(N3E1)掘方埋土



[層位] 1～3層



[層位] 1層

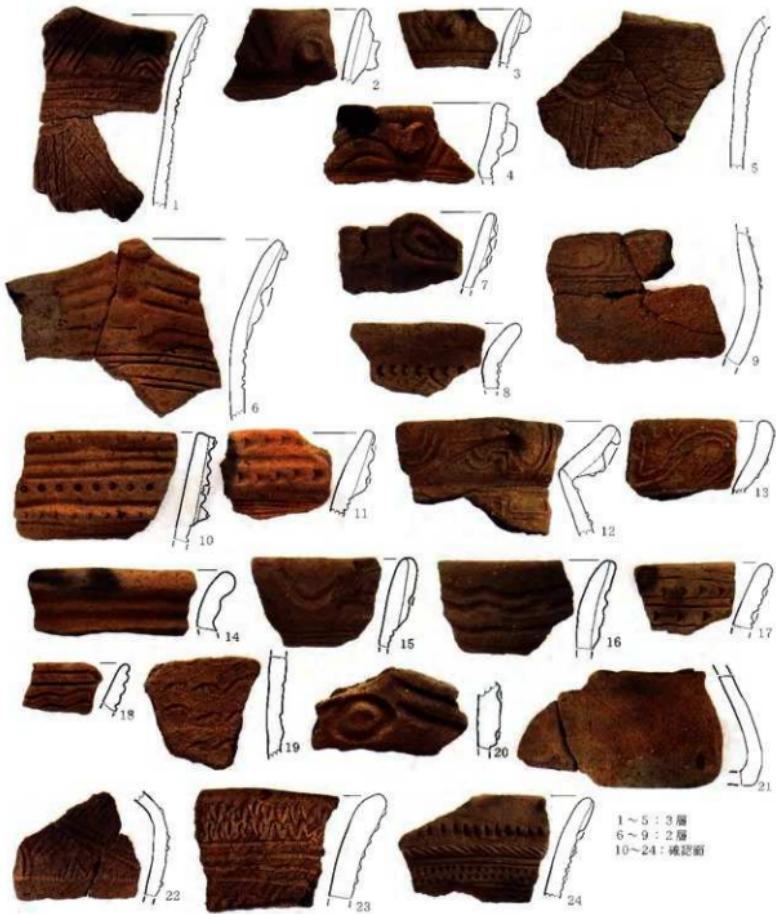


図版144 SI406住居跡出土遺物—縄文土器(1)—

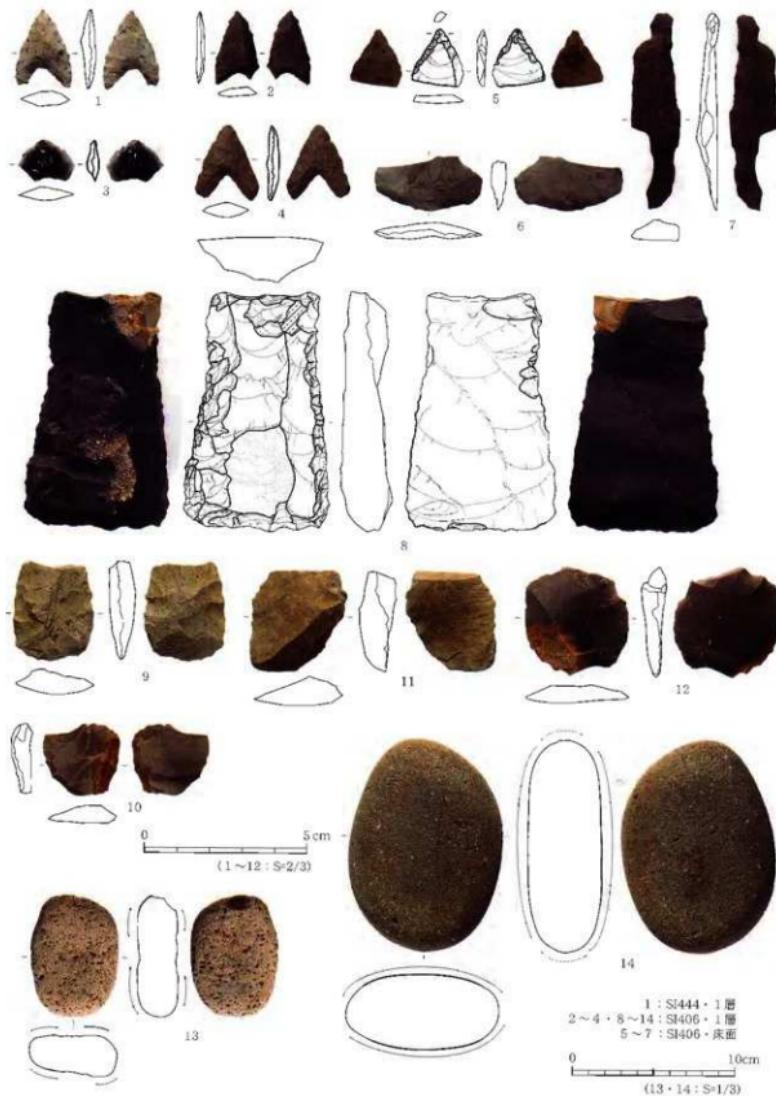


1~6: 床
7~9: 床直
10~26: 1層
27: P5

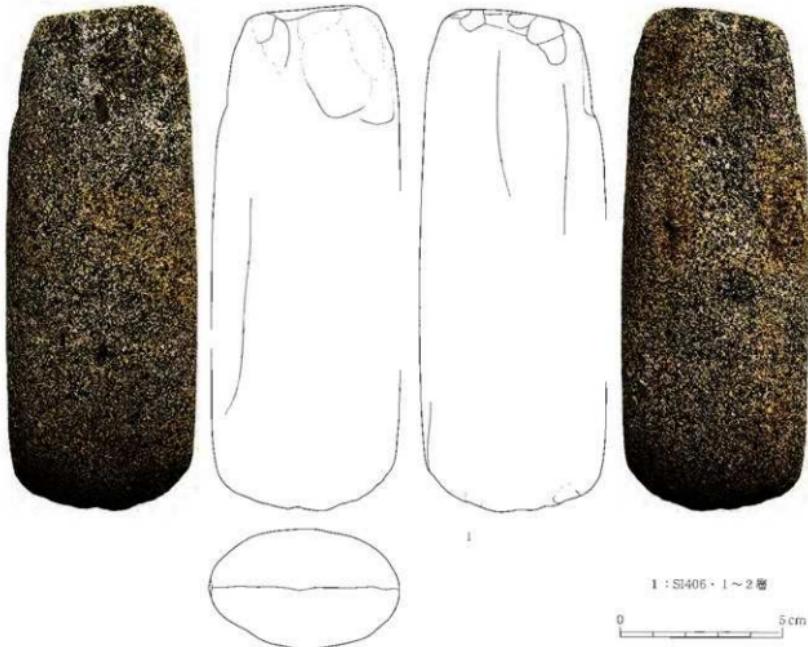
図版145 SII406住居跡出土遺物—縄文土器(2)—



図版 146 Si406 住居跡出土遺物－縄文土器(3)－



图版 147 Si406・444住居跡出土遺物－石器(1)－



図版148 SI406・444住居跡出土遺物－石器(2)－

確認されており、古い住居に伴う炉の可能性がある。他は、同時に機能していたかどうかは別としてこの住居に伴うものと思われる。

【主柱穴】住居内では大小80個以上のピットが確認されている。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP1～3、P4～6がこの住居の主柱穴と考えられる。P4では柱が抜き取られているが、それ以外の柱穴には直径20～25cmの円形の柱痕跡が残る。樋方の平面形は長軸が35～50cmの不整な楕円形もしくは隅丸方形を呈し、深さは70cm前後ある。柱間寸法は長辺(2間)で2.1～2.5m、短辺(1間)で3.3～3.7mある。主柱穴は東・西周溝と重なる位置で検出しており、かなり壁際に寄せて主柱が設けられていたことが窺われる。また、北側周溝上面で長軸線を挟んで対象に位置するP7・8も住居に伴う柱穴と推定され、主柱的な役割が予想される。P7・8は長軸45・30cmの不整な楕円・円形を呈し、深さは約50cmで、柱抜き取り痕が認められる。柱穴下部には直径20cmの円形を呈する柱痕跡が残る。更に、部分的に除去した貼床の下で検出したP9・10はP4・5の直ぐ内側で、M2の延長線上に位置しており、改築前の主柱穴となる可能性がある。

【周溝・壁柱穴】壁の直下を巡り、そのまま全周すると考えられる周溝を検出した。北東・北西隅で短く途切れ、南西部はSI389住居跡に接される。また、東・西辺の壁際では周溝と平行して延びる

溝が各1条(M 1・2)確認されており、その一部は貼床に覆われて未検出である。両辺では住居拡張改築に伴う周溝の造り替えがあったと推定される。これらの溝は上幅10~30cmで、断ち割った部分で見ると深さは20cm前後ある。断面は内側へ開いた変形「U」字状を呈し、堆積土は地山ブロックを多量に含む褐灰色シルトを主体とする。更に、周溝上面や部分的に掘り上げた周溝底面では壁柱穴と考えられるピットも検出されている。

[方向] 長軸線でみると、北で東に約11° 傾いている。

[出土遺物] 床面や周溝、主柱穴、堆積土等から縄文土器深鉢(図版144~146)や石鍬(図版147-2~4)、石錐(5)、石匙(6・7)、櫻形石器(7)、笠状石器(8・9)、不定形石器(10~12)、磨・凹・敲石(13・14)、磨製石斧(図版148)、土偶(図版424・428・430)等が出土している。

[SI444住居跡] (図版140~142)

[位置] N-12・W-82 [確認面] 地山面で、住居南部の平面プランを確認している。

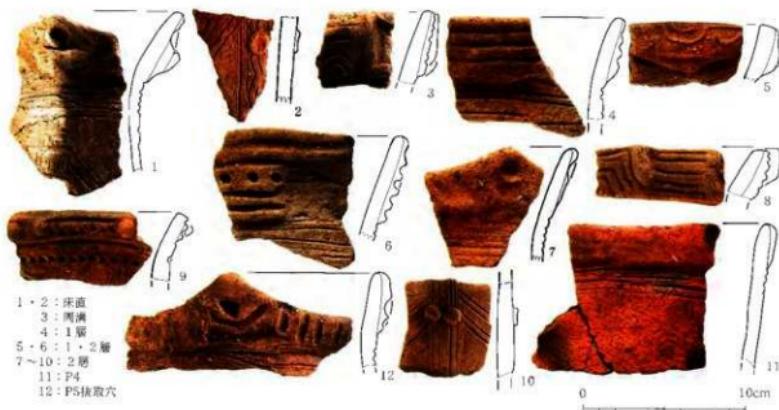
[重複] SI389・406・408・409・446・451・480住居跡、SK445・481土壠と重複している。前後関係がわかるものでは、SI389・406・408・409・446よりも古く、SI451・SK445よりは新しい。他の新旧関係は不明である。

[規模・平面形] 新しい住居と削平に壊されているものの、残存する周溝・柱穴の配置をみる限り、東西4.6m以上×南北8.8m以上で、長方形を基調とする。

[堆積土] 南部に3層残り、全て自然流入土である。但し、3層中には地山大ブロックが部分的に認められ、南壁の崩落土が含まれると考えられる。

[壁] 残存するのは南壁のみで、中央の残りが良く、床面から高さ20cm程ある。基本的に地山を壁とするが、中央やや西寄りでは埋土を壁としており、その状況から機能時に壁が一度崩れていたことが窺われる。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 残存する南部では地山を床としている。縦・横断面をみると、床面は周辺から中央に向かって



図版149 SI444住居跡出土遺物—縄文土器—

皿状に窪み、特に中央部は長軸線に沿って一段深くなる。この一段下がった中央部では、地山が黄褐色ローム下の砂層となっている。

〔炉〕 床面には2個の焼け面(Y1・2)が残る。平面形は長軸50~130cmの不整形を呈し、Y1は中央部が強く焼けてやや硬化している。いずれも住居に伴う地床炉と考えられるが、SI406住居跡床面のダメ押しを行っていないため、炉の詳細は不明である。

〔主柱穴〕 住居内では大小100個以上のピットが確認されている。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP1~4、P5・6がこの住居の主柱穴と考えられる。なお、P2・3と対になる柱穴は、位置がSI406住居跡の貼床下にあたるため未検出である。P3~6には柱抜き取り痕が認められ、P3以外の柱穴には長軸20~30cmの不整な円形・楕円形の柱痕跡も残る。掘方の平面形は長軸が35~50cmの不整な楕円形もしくは開丸方形を呈し、深さは45~80cmで、底面に向かって窄まるものが多い。柱間寸法は長辺で2.5~2.7m、短辺で約3.3mある。

〔周溝〕 南壁の直下で検出されているが、その後の延びは不明である。溝は上幅15~25cmで、断ち割った部分で見ると深さは20cm前後ある。断面は「U」字状を呈し、堆積土は地山ブロックを含む暗褐色シルトを主体とする。

〔方向〕 東側柱列でみると、北で東に約9°偏している。

〔出土遺物〕 床面直上や周溝、堆積土等から縄文土器深鉢の破片(図版149)や石器(図版147-1)等が出土している。

【SI480住居跡】(図版140~142)

〔位置〕 N-12・W-82 [確認面] 地山面で、周溝と柱穴の一部を確認している。

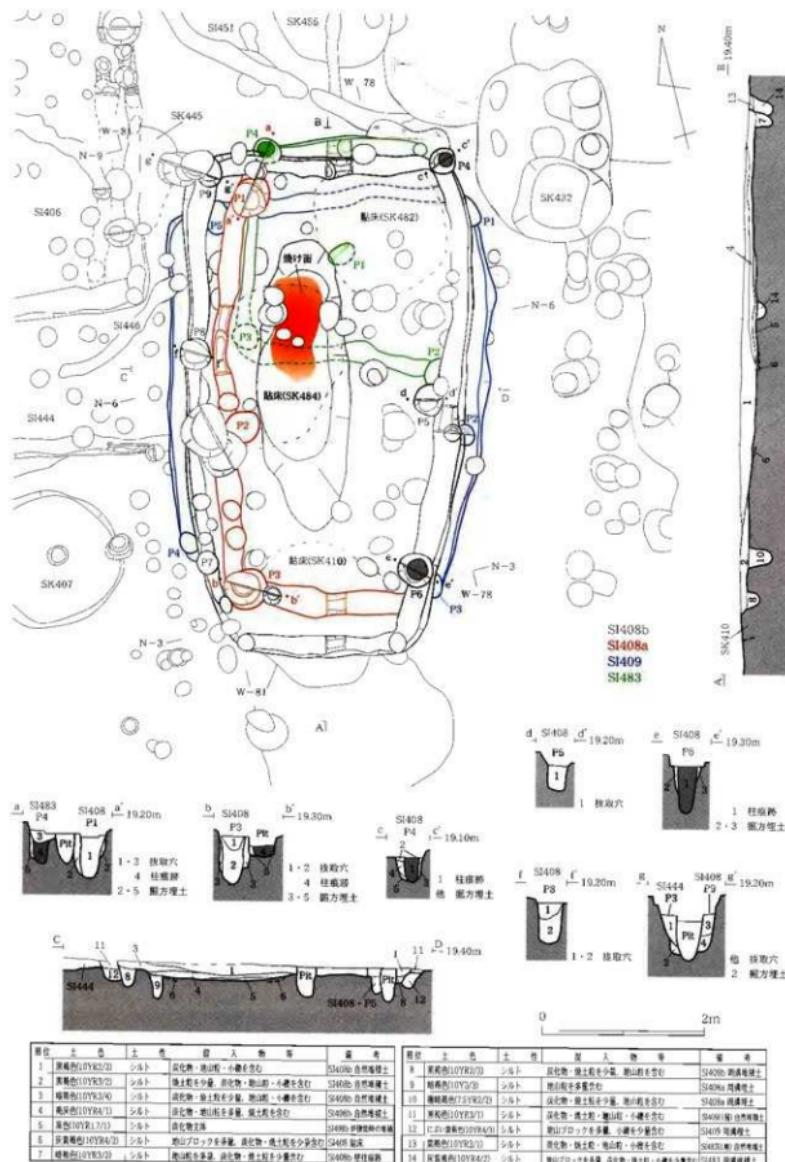
〔重複〕 SI389・390・400・406・444・446住居跡、SK401・445・481土壤と重複している。前後関係がわかるものでは、SI389・406・446よりも古く、SI400、SK401よりは新しい。他の新旧関係は不明である。

〔規模・平面形〕 検出した周溝・柱穴の配置をみると、東西約3.6m×南北5.8m以上で、長方形を基調とする。

〔堆積土・壁・床〕 残存していない。

〔主柱穴〕 住居内では大小50個以上のピットが確認されている。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んでほぼ対称に位置するP1・2、P3~5がこの住居の主柱穴と考えられる。なお、P3と対になる柱穴は、位置がSI406住居跡の貼床下にあたるため未検出である。半截したP1・3~5では長軸20~25cmの不整な円形・楕円形の柱痕跡が検出されており、P1・5には柱抜き取り痕も残る。掘方の平面形は長軸が30~53cmの不整な円形もしくは楕円形を呈し、深さは50~60cmである。柱間寸法は長辺で2.2~2.5m、短辺で約3.7mある。東辺をみると、主柱穴は周溝と重なる位置に配され、その上面で確認されている。

〔周溝〕 北・東辺を断続的に巡る溝を検出しており、住居の周溝と考えられる。上幅12~20cmで、断ち割った部分で見ると深さは5cm程ある。断面は「U」字状を呈し、堆積土は地山小ブロック多量に含む灰黄褐色シルトである。



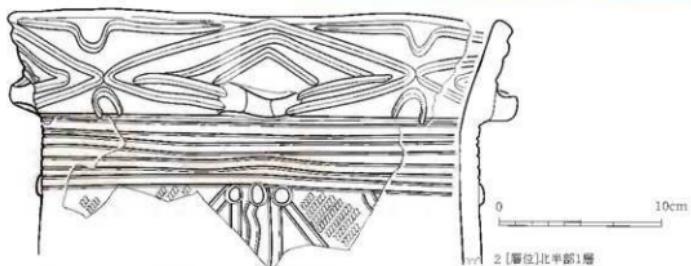
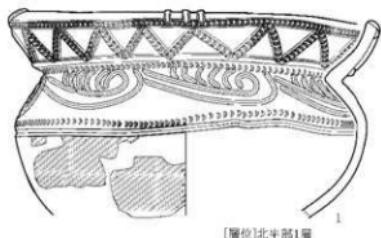
图版 150 SI408·409·483住居跡



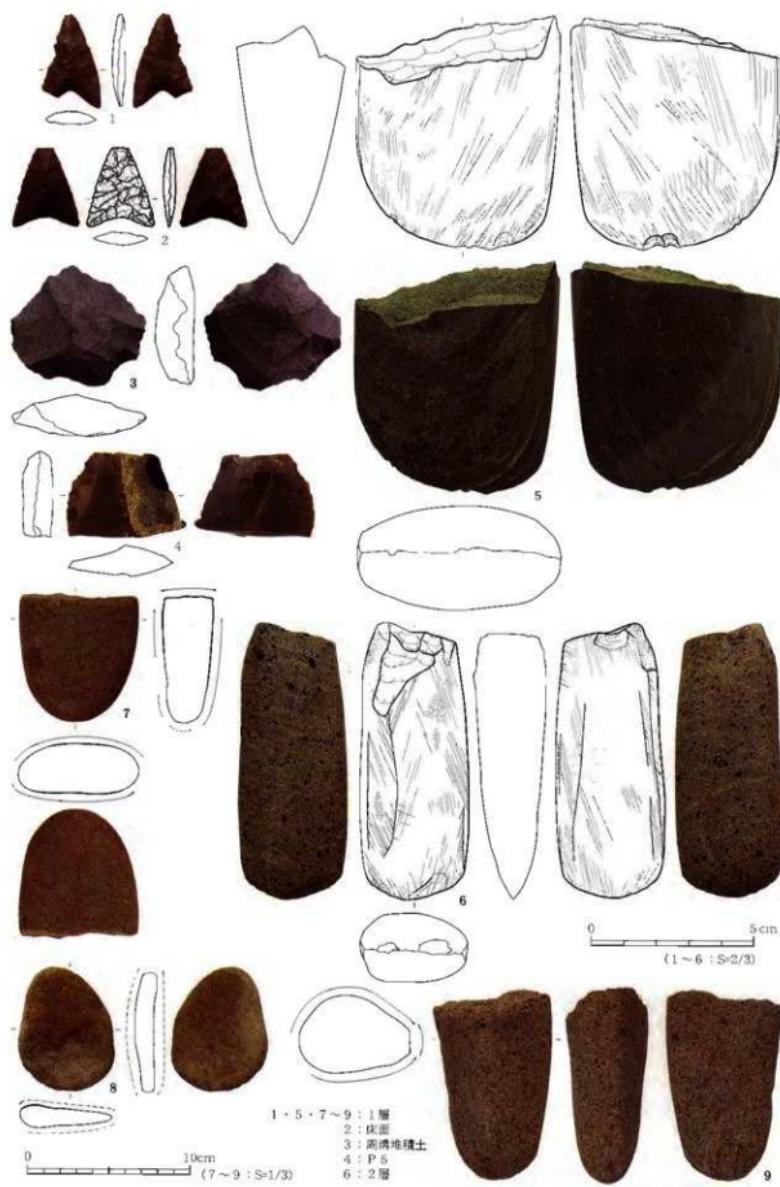
SI408・409・483住居跡(北から)



图版151 SI408・409・483住居跡



図版152 SI408住居跡出土遺物－縄文土器－



圖版 153 SI408住居跡出土遺物—石器—

【壁柱穴】部分的に掘り上げた溝の底面には壁柱穴と考えられるピットも認められる。なお、SI406住居跡の貼床を一部除去した段階で、南辺の周溝を確認している。

【方向】住居の方向は、西側柱列でみると北で東に約8°偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SI408a・b住居跡】(図版150・151)

【位置】N-12・W-82【確認面】地山面もしくはSI409・483住居跡の堆積土上面である。

【重複】SI409・444・483住居跡、SK410・482・484土壙と重複しており、全ての遺構よりも新しい。なお、SI409・444との前後関係は堆積土を床面近くまで掘り下げた時点で認識した。精査の結果、建て替えが行われていることが判明し、改築によって住居の南・西辺がそれぞれ外側へ50cm・30cm程拡張されている。古い方からSI408a・bとする。

《SI408a》

【規模・平面形】周溝の形状から東西約3.1m×南北約5.6mで、不整な隅丸長方形を呈すると推定される。詳細にみると、北辺に比べて南辺が短く、全体に南側へ向かってやや窄まる形状を示す。なお、北・東辺は改築前後を通じてほぼ同位置と考えられ、壁・堆積土は残存しない。

【床】この時期に伴う床面が認識できなかったため、詳細は不明である。但し、SK482・484土壙と重複する部分に認められる貼床は、基本的に住居を構築したこの段階で行われたと考えられる。

【主柱穴】西辺の周溝と重なり、2.7m・1.8mの間隔で直線上に並ぶピット3個(P1~3)が確認されており、その配置からみて主柱穴の可能性がある。P1~3と長軸線を挟んで対となる柱穴は、SI408bの主柱穴もしくは周溝下部に位置するため未確認である。平面形は直径32~45cmの不整な円形を呈し、半載したP1・3は深さ約60cmであった。なお、柱は抜き取りられている。

【周溝・壁柱穴】西・南辺を巡る周溝が検出されている。北・東辺の周溝は未確認で、SI408bの周溝に壊されている可能性もある。上幅1.5~35cmで、断ち割った部分で見ると深さは約30cmある。断面は「U」字状を呈し、堆積土は地山ブロックを含む暗褐色または黒褐色のシルトで、締まりがある。また、周溝上面や部分的に掘り上げた周溝底面では壁柱穴と考えられるピットも確認されている。

【方向】長軸線でみると北で東に約14°偏している。

【出土遺物】周溝から縄文土器片が少量出土したのみである。

《SI408b》

【規模・平面形】東西3.4m×南北6.1mで、不整な隅丸長方形を呈する。詳細にみると、北辺に比べて南辺が短く、全体に南側へ向かってやや窄まる形状を示す。

【堆積土】5層認められ、1~4層は自然流入土である。5層は焼け面上に分布する炭化物主体の層で、炉機能時の堆積と考えられる。

【壁】地山もしくはSI409・483住居跡の埋土を壁としており、高さ10cm程残る。

【床】基本的に地山を床としているが、SK410・482・484土壙と重複する部分には貼床が施されている。縦・横断面をみると、床面は長軸線に沿って中央やや西寄りが不整な稍円状に一段産み、全

体にやや凹凸がある。

【炉】住居中央やや北西寄りの床で焼け面が検出されている。平面形は長軸130cm×短軸55cmの不整な隅丸長方形を呈する。焼け面は住居中央に認められる窪みの内部に位置しており、地床炉と考えられる。

【主柱穴】住居内では大小60個程のビットが確認されている。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んではほぼ対称に位置するP 4～6、P 7～9がこの住居の主柱穴と考えられる。半截した柱穴には柱抜き取り痕が認められ、P 5は柱抜き取り穴である。また、柱穴下部には直径18～25cmの円形の柱痕跡が残る。掘方の平面形は直径28～45cmの不整な円形を呈し、深さは40～75cmで、60cm前後のものが多い。柱間寸法は長辺(2間)で2.1～3.0m、短辺(1間)で2.6～2.9mある。主柱穴は東・西周溝と重なる位置で検出されており、かなり壁際に寄せて主柱が設けられていたことが窺われる。

【周溝・壁柱穴】壁の直下を全周し、南西隅で短く途切れる。溝は上幅12～35cmで、断ち割った部分で見ると深さは15～20cmある。断面は「U」字状を呈し、堆積土は地山小ブロックを多量に含む暗褐色シルトを主体とする。更に、周溝上面や部分的に掘り上げた周溝底面では壁柱穴と考えられるビットも検出されている。

【方向】長軸線でみると北で東に約14° 傾している。

【出土遺物】床面や周溝、主柱穴等から縄文土器深鉢(図版152)の他、石錐(図版153-1・2)、不定形石器(3・4)、磨製石斧(5・6)、砥石(8)、磨・凹・敲石(7・9)が出土している。

【SI409住居跡】(図版150・151)

【位置】N-12・W-82【確認面】地山もしくはSI444住居跡の堆積土上面である。

【重複】SI408・444・446・483住居跡、SK410・482・484土壤と重複しており、SI408・446よりも古く、SI444・483、SK482・484よりは新しい。SK410との前後関係は不明である。

【規模・平面形】大部分がSI408住居跡に壊されているものの、残存する周溝の形状をみると、東西3.8m×南北約4.8mで、不整な隅丸長方形を呈すると推定される。詳細にみると、北辺に比べて南辺が短く、全体に南側へ向かってやや窄まる形状を示す。

【堆積土】東・西の壁際に1層残り、自然流入土である。

【壁】東・西辺に残り、主に地山を壁としているが、SI444住居跡と重複する部分ではその埋土を壁とする。壁は床面からやや開き気味に立ち上がり、壁高は残りの良い西壁で10cm程ある。

【床】SI408住居跡に壊されて、残存しない。

【主柱穴】住居内では大小50個程のビットが確認されている。この内、長軸線と平行して並び、軸線を挟んではほぼ対称に位置するP 1～3、P 4・5がこの住居の主柱穴と考えられる。しかし、いずれのビットでも柱痕跡は確認されておらず、全て抜き取り穴の可能性がある。なお、P 2と対になるビットは未検出である。平面形は長軸が28～42cmの不整な楕円形を呈し、半截したP 2は深さ30cmであった。ビットの間隔は長辺で1.9～2.8m、短辺で約3.0mある。主柱穴は周溝と重なる位置で検出されており、かなり壁際に寄せて主柱が設けられていたことが窺われる。

【周溝】南辺以外の3辺を巡る周溝が確認されており、南辺溝はSI408a住居跡の周溝に壊されている可能性がある。上幅は15~20cmで、断ち割った部分で見ると深さは15~25cmある。断面は「U」字状を呈し、堆積土は地山ブロックを多量に含む黄褐色シルトを主体とする。

【方向】長軸線でみると、北で東に約16° 傾いている。

【出土遺物】堆積土や周溝から、地文のみの縄文土器口縁部や胴部破片等が少量出土している。

【SI483住居跡】(図版150・151)

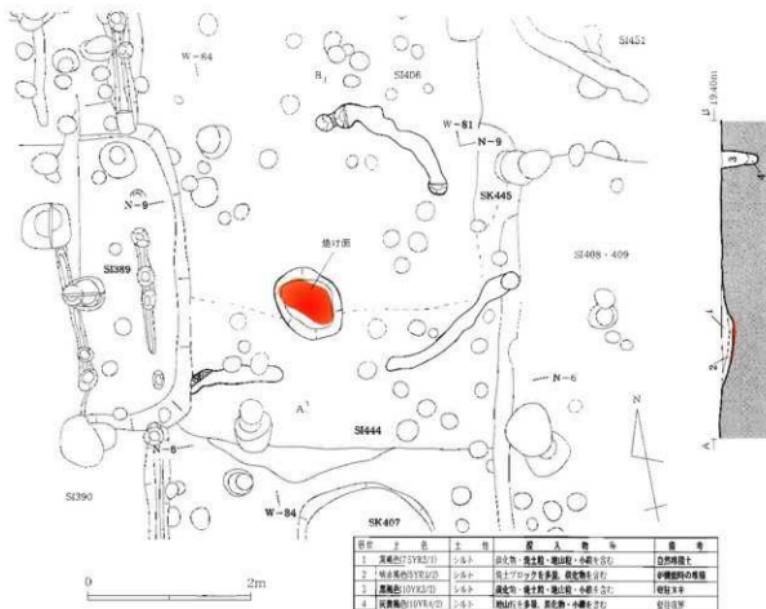
【位置】N-12・W-82 [確認面] 地面で住居北辺を確認した。平面プランを明確に捉えたのは、SI408住居跡の床面精査時である。

【重複】SI408・409住居跡、SK482・484土壇と重複しており、SI408・409よりも古く、SK482・484よりは新しい。

【規模・平面形】大部分がSI408住居跡に壊されているものの、残存する周溝の形状をみると、東西2.4m以上×南北約2.8mで、方形



SI446住居跡・炉



図版154 SI446住居跡

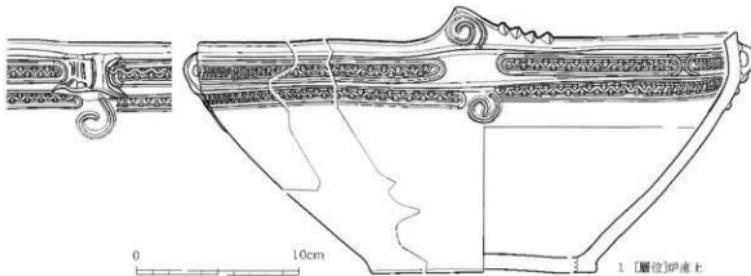
を基調としており、隅丸正方形であることが予想される。

【堆積土】 北壁際に1層残り、自然流入土である。

【壁】 北辺に高さ3cm程残り、地山を壁としている。

【床】 SI408住居跡に壊されて、残存しない。

【主柱穴】 住居のほぼ中央に位置するP1は主柱の抜き取り穴と考えられる。長軸35cmの楕円形を



1-1



1-2

図版155 SI446住居跡出土遺物

呈し、深さ32cmで、柱痕跡は確認されていない。また、住居隅の周溝上面で検出されているP 2 ~ 4も住居に伴う可能性がある。平面形は長軸が35cm前後の不整な円形を呈し、半截したP 4は深さ50cmで、柱抜き取り痕が認められる。なお、柱穴下部には直径20cmの円形の柱痕跡も残る。

【周溝】東辺以外の3辺を巡る周溝が確認されており、東辺溝はSI408もしくはSI409住居跡の周溝に壊されている可能性がある。また、南・西辺の一部はSI408住居跡の貼床に覆われている。上幅は13~22cmで、断ち割った部分で見ると深さは15~25cmある。断面は両側にやや開いた変形「U」字状を呈し、堆積土は地山小ブロックを多量に含む灰黄褐色または暗褐色シルトで、縮まりがある。

【方向】西側周溝でみると、北で東に約20° 傾している。

【出土遺物】出土していない。

【SI446住居跡】(図版154)

【位置】N-9・W-83 [確認面] SI406・444住居跡の堆積土上面で焼け面を確認していた。その後、これらの住居を床面まで掘り下げた段階で、焼け面の周囲を巡る溝を検出した。溝は断面観察からSI406・444住居跡堆積土上面から掘り込まれていることが明らかで、焼け面・溝の位置関係により、それぞれを住居に伴う炉・周溝と判断した。

【重複】SI389・406・409・444・480住居跡、SK445土壌と重複している。SI389よりも古く、その他の遺構よりは新しい。

【規模・平面形】残存する周溝の形状から東西4.0m以上×南北約3.4mで、不整な円形を呈することが予測される。なお、壁は残存しない。

【堆積土】炉の上部に2層残り、1層は自然流入土である。2層は焼け面上に堆積した焼土・炭化物混じりの層で、炉機能時の堆積と思われる。

【床】詳細については不明であるが、炉周辺はSI406・444住居跡の埋土を床とし、皿状に窪んでいる。

【炉】中央やや南寄りで長軸80cm×短軸40cmの不整な楕円形を呈する焼け面を検出した。焼け面は周辺から中央に向かって皿状に窪み、強く焼けて硬化している。住居に伴う地床炉と考えられる。

【周溝】住居東半では断続して弧状に巡る周溝が確認されている。上幅は10~32cmで、断ち割った部分で見ると深さは25cm前後ある。断面は「U」字状を呈し、堆積土は黒褐色シルトである。

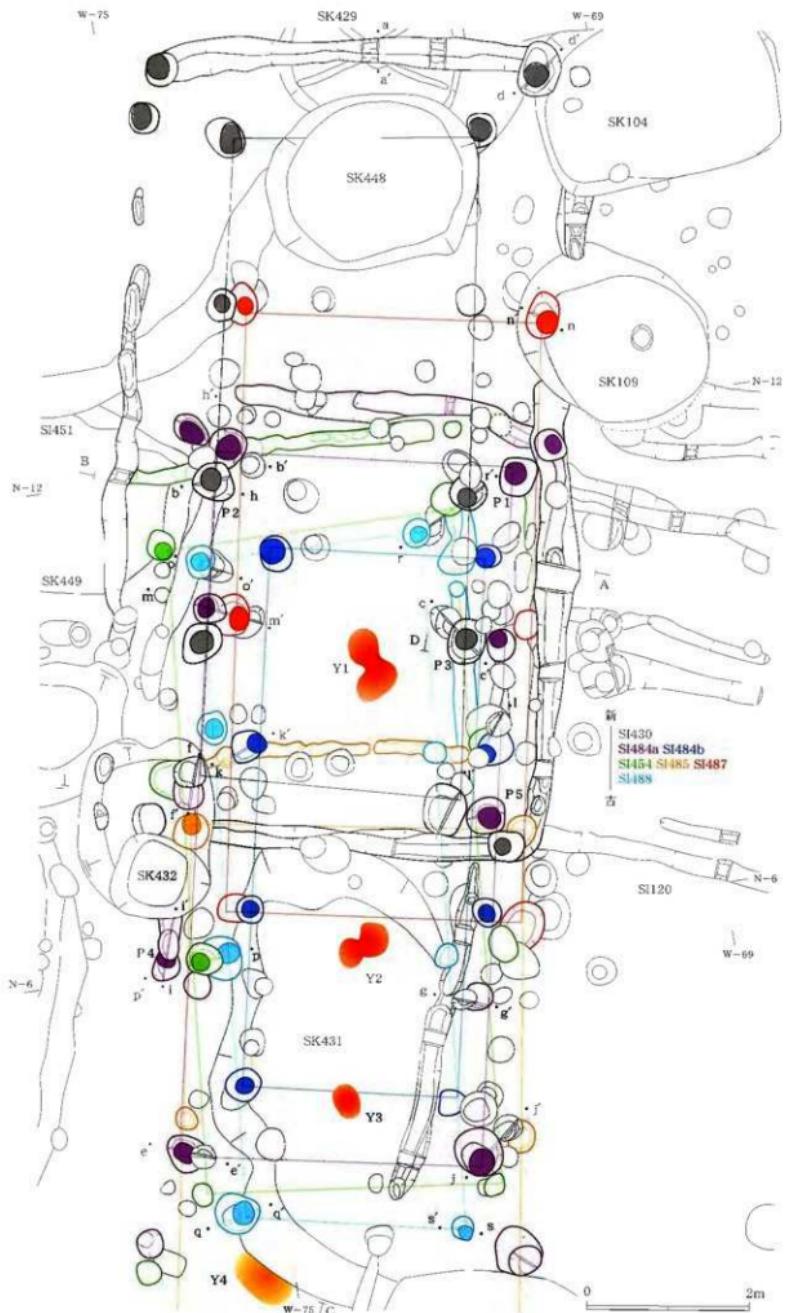
【壁柱穴】部分的に掘り上げた周溝の底面で壁柱穴と考えられるピットを検出している。ピットは底面から15cm程の深さで、周溝内に密に並んでいる。

【出土遺物】炉の直上から縄文土器浅鉢(図版155)が出土している。

【SI430住居跡】(図版156~159)

【位置】N-12・W-72 [確認面] 地山およびSI120堆積土上面で確認した。北側へ緩やかに傾斜している。

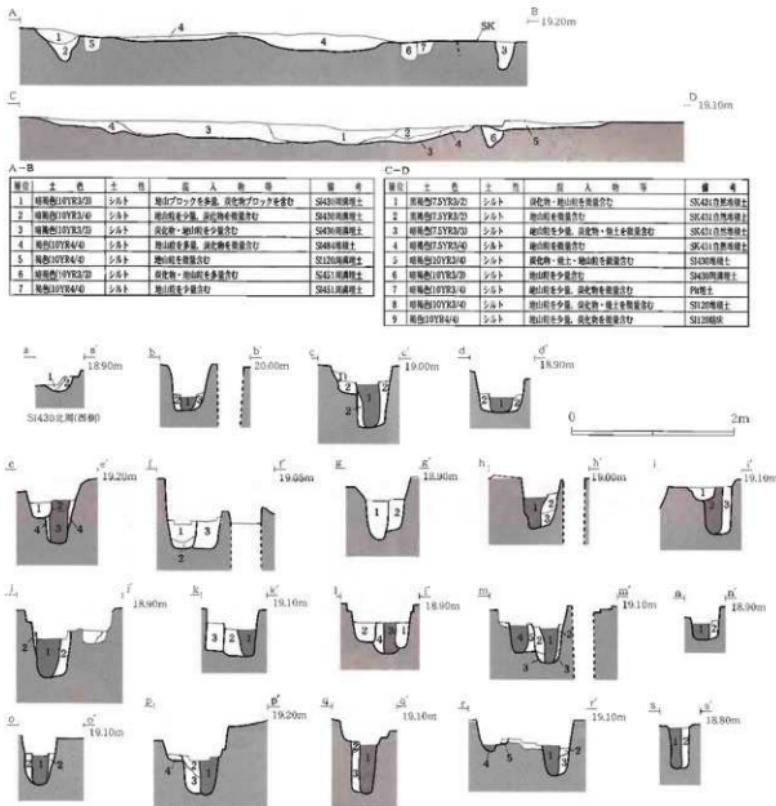
【重複】SI120・451・454・484・485・487・488住居跡やSK104・109・429・431・448・449土壌等と重複し、SK104・109・431より古く、SI120・451・454・484・485・487・488やSK429・449より新しい。SK448との新旧関係は不明である。



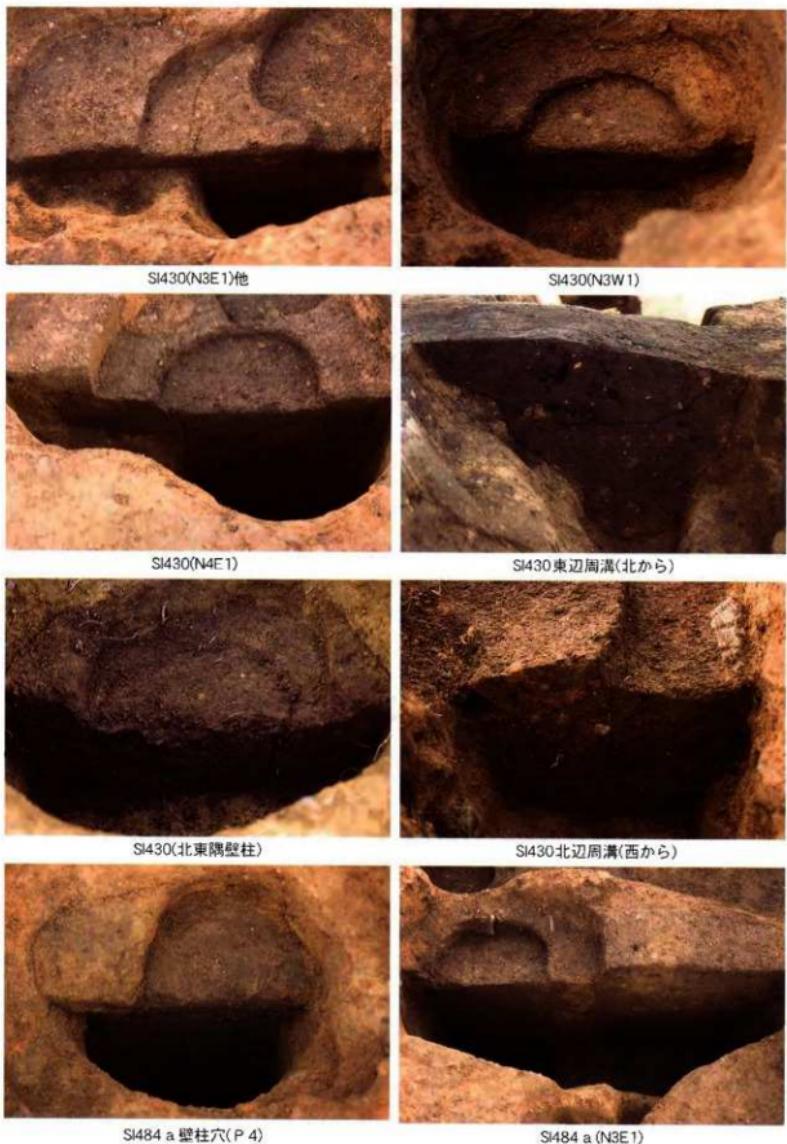
図版 156 SI430・454・484・485・487・488住居跡(1)



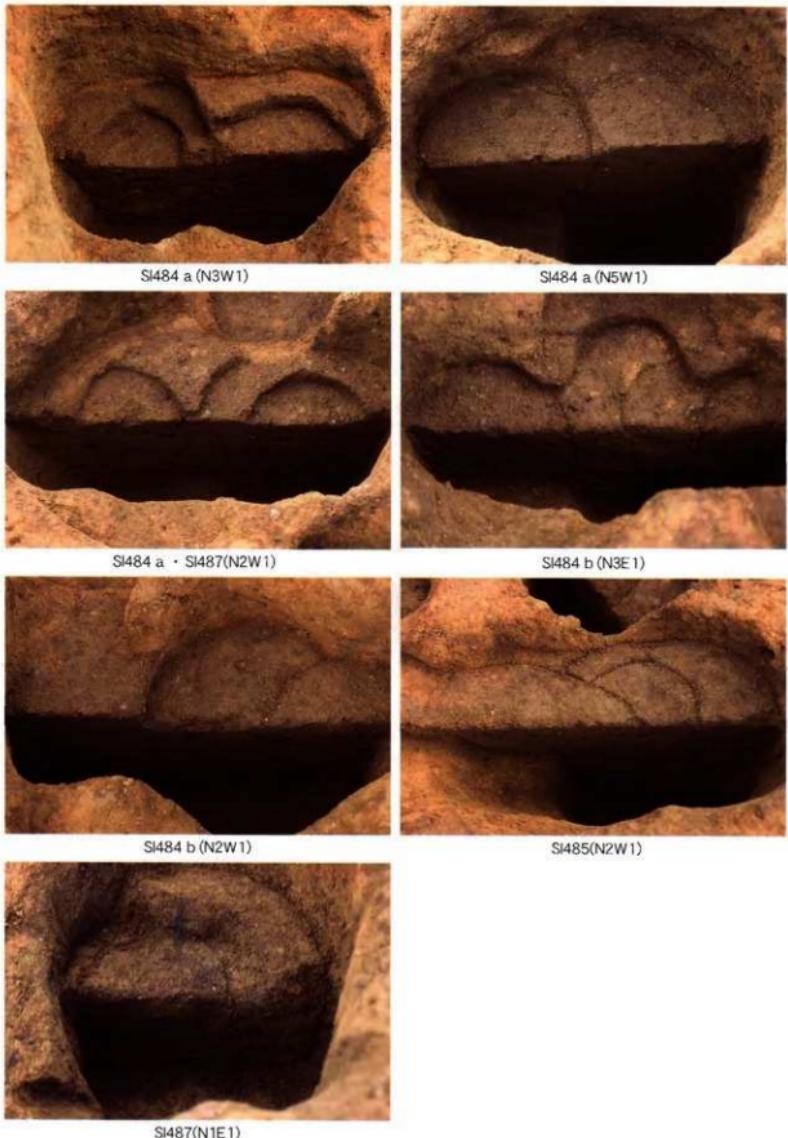
(北から)



図版157 SI430・454・484・485・487・488住居跡(2)



図版 158 SI430・484住居跡



图版 159 SI484 · 485 · 487住居跡

〔規模・平面形〕東西5.7m×南北約9.9mの隅丸長方形である。

〔堆積土〕1層確認された。地山粒や炭化物、焼土粒を含む暗褐色シルトである。

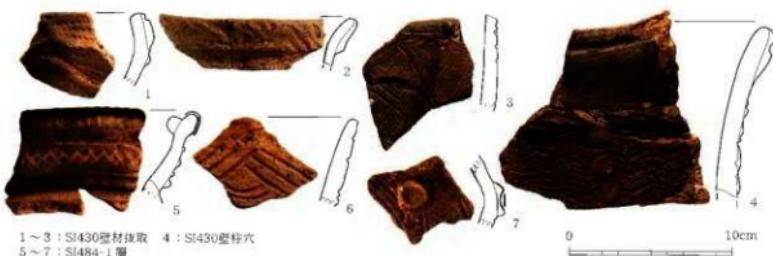
〔床〕住居南辺付近のみに残存する。地山を床としており、若干の凹凸が認められる。

〔壁〕残存していない。

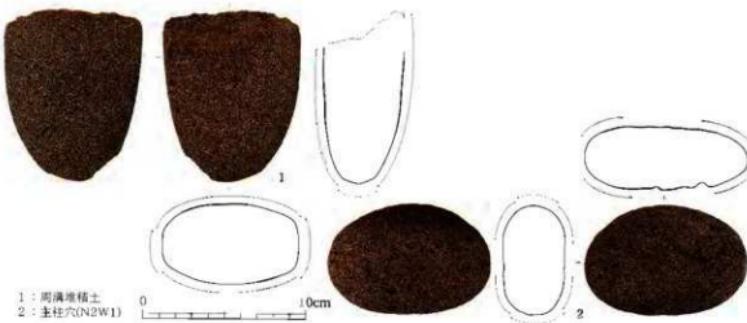
〔主柱穴〕10個検出した。掘り方は長軸30~60cm、短軸25~45cmの不整橿円形や径約40cm前後の不整円形で、深さは39~75cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは7個、柱の抜き取り穴を検出したものは1個あり、柱痕跡の平面形は直径20~30cmの円形である。柱間寸法は、北側柱列で約3.1m、西側柱列で北から2.0m・2.1m・2.0m・約1.6mである。堆積土は柱痕跡が地山粒や炭化物粒を含む褐・暗褐色シルト、掘り方埋土が地山や炭化物、焼土粒を含む褐・暗褐色シルトである。

〔周溝〕部分的に途切れるが、全辺で検出した。上幅15~55cm、下幅6~24cmで、深さは5~40cmである。西辺を除く各辺では幅10cm~35cmの壁材を抜き取った溝状の痕跡が認められた。堆積土は壁材抜き取り痕跡が地山粒や炭化物粒を含む暗褐色シルト、周溝埋土が地山や炭化物、焼土粒を少量含む暗褐色シルトである。

〔壁柱穴〕住居の四隅と、各辺で計10個検出した。平面形は攢乱や土壤に壊されているものを除き、



図版160 SI430・484出土遺物—縄文土器—



図版161 SI430出土遺物—石器—

直径40～45cmの不整円形や長軸約70cm、短軸約50cmの不整楕円形で、深さは50cm前後である。これらの中で、柱痕跡が認められたものは4個、柱の抜き取り穴を検出したものは1個あり、柱痕跡は直径約20～30cmの円形である。堆積土は柱痕跡が地山、炭化物粒を含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山粒を含む暗褐色シルトや褐色砂質シルトである。

【方向】西側主柱列でみると、北で東に約13°偏している。

【出土遺物】壁柱抜き取り溝や壁柱穴、主柱穴等から縄文土器深鉢の破片(図版160-1～7)や磨・凹・敲石(図版161-1・2)が出土している。

【SI454住居跡】(図版156・157)

【位置】N-9・W-72 [確認面] 地山およびSI120堆積土上面で確認した。

【重複】SI120・430・451・484・485・487・488住居跡やSK449土壌等と重複し、SI120・451・488、SK449より新しく、SI430・484より古い。SI485・487との新旧関係は不明である。

【規模・平面形】北辺と西辺の一部、主柱穴、壁柱穴のみが残存するもので、詳細は不明であるが周溝や四隅に残る壁柱穴から推定し、東西5.0m前後×南北11.0m前後の長方形あるいは隅丸長方形を呈するものと考えられる。

【堆積土・床面】残存していない。

【主柱穴】8個検出した。掘り方は径30～55cmの不整円形で、深さは52～92cmである。これらのうち、2個で柱痕跡が確認されており、柱痕跡の平面形は直径20～24cmの円形である。柱間寸法は、北側柱列で約3.0m、西側柱列で北から約2.8m・2.3m・2.3mである。堆積土は柱痕跡がプロックを含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山粒を少量含む暗褐色シルトである。

【周溝】削平により、残存するのは北辺のみである上幅12～30cmで、深さは確認のため3cm程掘り下げたのみだが既に底面に達している部分もあり、残存状況は不良である。堆積土は地山粒や炭化物粒を含む暗褐色シルトである。

【壁柱穴】北東・南西隅と、北辺で1個の計3個検出した。平面形は直径18～30cmのやや不整な円形である。深さは南西隅柱で26cmである。堆積土は地山を含む暗褐色シルトである。

【方向】西側主柱列でみると、北で東に約6°偏している。

【出土遺物】柱穴から縄文土器深鉢(図版162-1)や磨石(2)が出土している。

【SI484住居跡】(図版156～159)

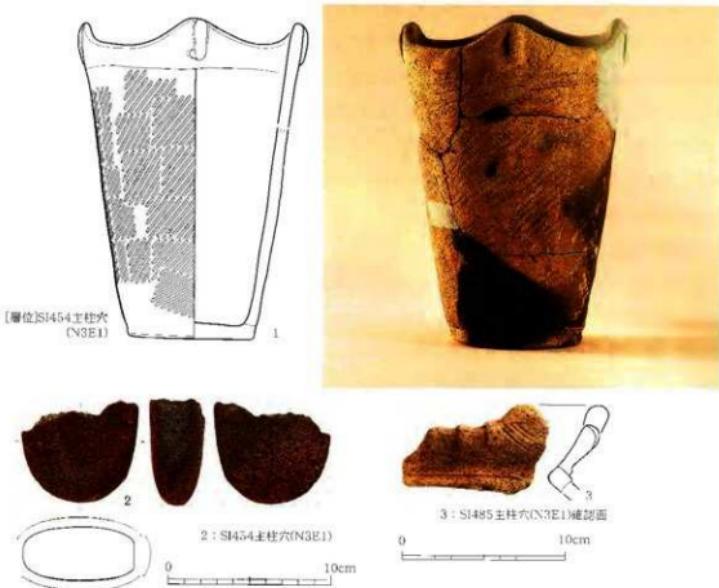
【位置】N-9・W-72 [確認面] 地山およびSI120堆積土上面で確認した。

【重複】SI120・430・451・454・485・487・488住居跡、SK431・432土壌等と重複し、SI430より古く、その他より新しい。

【規模・平面形】北辺と西辺の一部、主柱穴、壁柱穴のみが残存するもので、詳細は不明であるが周溝や四隅に残る壁柱穴から推定し、長軸11.0m前後、短軸5.0m前後の長方形あるいは隅丸長方形を呈するものと考えられる。主柱穴には造り替えが認められるが、その前後関係は不明である。

【堆積土】1層検出した。地山粒や炭化物を含む褐色シルトである。

【床】住居北半部に残存する。地山を床としており、若干の凹凸が認められる。

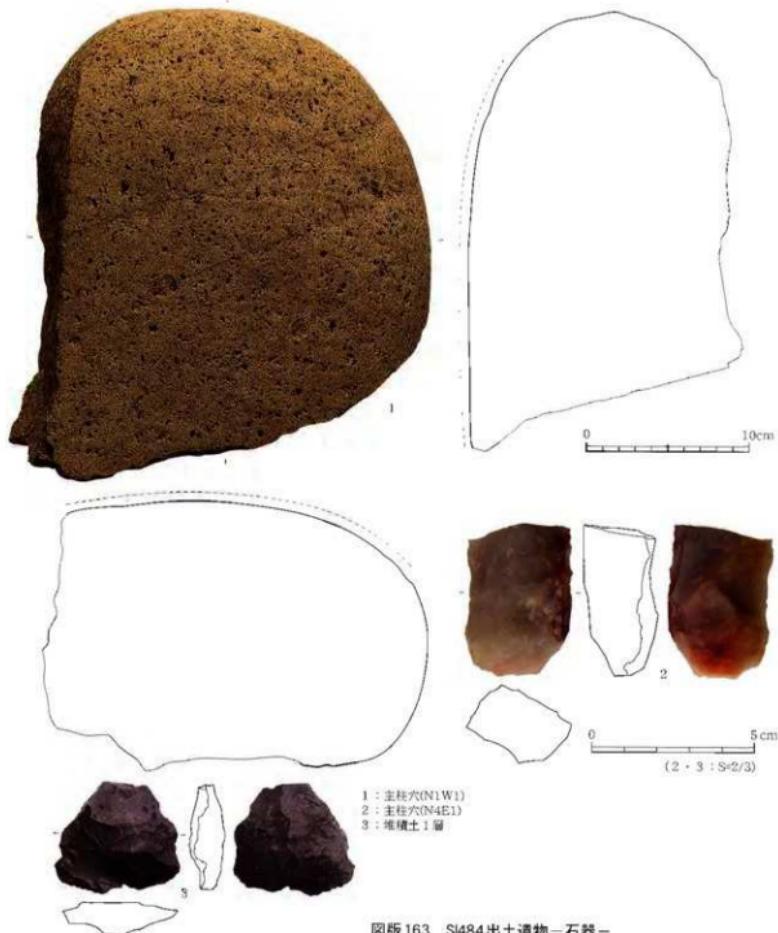


図版162 SI454・485土壤出土遺物－縄文土器・石器－

[炉] 住居のほぼ長軸線上で焼け面が3ヶ所確認されている(Y1~3)。平面形はY1が約90cm×約40cm、Y2が約70cm×約45cmの不整形、Y3が長径約44cm×短径約32cmの楕円形である。地床炉と考えられ、Y1は硬く締まっているが、Y2・3はSK431によって上面を壊されており、受熱の痕跡が残したものである。

[主柱穴a] 10個検出した。掘り方は径35~65cmの不整円形で、深さは68~85cmである。これらの中では、柱痕跡が認められたものは6個、柱の抜き取り穴を検出したものは1個あり、柱痕跡の平面形は直径約20~28cmの円形である。柱間寸法は、北側柱列で約3.6m、東側柱列で北から約2.0m・2.2m・2.2m・2.0mである。堆積土は柱痕跡が地山粒を含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックや黒褐色シルトを含む暗褐色シルト等である。

[主柱穴b] 主柱穴aの内側で8個検出した。これらについても周溝や主柱穴aとほぼ軸線をあわせることから住居の主柱と考えられ、SI486の主柱は一度造り替えられたものと推定される。但し、直接の重複が無い為、新旧関係は不明である。掘り方は径28~45cmの不整円形で、深さは56~60cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは7個あり、平面形は径22~30cmの円形である。柱間寸法は、北側柱列で約2.6m、東側柱列で北から約2.4m・2.0m・2.3mである。堆積土は柱痕跡が地山粒を微量含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山、炭化物、焼土粒を含む暗褐色シルトである。



図版163 SI484出土遺物—石器—

【周溝】削平により、北辺のみ残存する。上幅25~38cmで、深さは8~26cmである。堆積土は地山粒や炭化物粒を含む暗褐色シルトである。

【壁柱穴】住居各隅と西辺で1個の計5個を検出した。掘り方は直徑35~65cmのやや不整な円形や、長径約40~50cm、短径約25~30cmの不整楕円形で、深さは18~83cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは3個、柱の抜き取り穴が認められたものは2個あり、柱痕跡の平面形は長径約24~33cm、短径約20cm前後の楕円形である。堆積土は柱痕跡が地山や炭化物粒を少量含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックを少量含む暗褐色シルトである。

〔方向〕西側主柱列でみると、北で東に約13° 傾している。

〔出土遺物〕主柱穴や堆積土から石皿(図版163-1)、笠状石器(2)、不定形石器(3)が出土している。

【SI485住居跡】

〔位置〕N-6・W-72 [確認面] 地山およびSI120堆積土上面で確認した。

〔重複〕SI120・430・454・484・487・488住居跡やSK431・432土壙等と重複し、SI430・484より古く、SI120より新しい。その他との新旧関係は不明である。

〔規模・平面形〕住居南半は削平により残存しておらず、詳細は不明であるが残存する北辺周溝や主柱穴から推定し、短軸5m前後で、長軸も重複する他の住居跡の規模と同様10m前後の長方形あるいは隅丸長方形を呈するものと考えられる。

〔堆積土・床面・壁〕残存していない。

〔炉〕住居の長軸線からやや西の南側で、最大長約48cmの焼け面が1ヶ所確認されている(Y4)。平面形や炉の形態については北側をSK431に壊され、上面は削平されているため詳細は不明である。

〔主柱穴〕4個検出した。掘り方は径30~47cmのやや不整な円形で、深さは12~24cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは1個、柱の抜き取り穴が認められたものは1個あり、平面形は径約24cmの円形である。柱間寸法は、北側柱列で約4.1m、東側柱列で約3.8mである。堆積土は柱痕跡が地山粒を含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山粒や焼土粒を微量含む暗褐色シルト等である。

〔周溝〕削平により、北辺のみ残存する。上幅10~20cmで、深さは確認のため5cm程掘り下げたのみだが既に底面に達している部分もあり、残存状況は不良である。堆積土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

〔壁柱穴〕検出されなかった。

〔方向〕西側主柱列でみると、北で東に約11° 傾している。

〔出土遺物〕主柱穴から縄文土器深鉢の破片(図版162-3)等が極少量出土したのみである。

【SI487住居跡】(図版156・157・159)

〔位置〕N-9・W-72 [確認面] 地山。

〔重複〕SI120・430・454・485・488住居跡、SK431土壙等と重複し、SI430・484より古く、SI120より新しい。その他との新旧関係は不明である。

〔規模・平面形〕主柱穴のみ残存する。東西1間、南北2間で、柱間寸法は北側柱列で約3.8m、西側柱列で北から約3.8m・約3.6mである。

〔主柱穴〕6個検出した。柱穴の平面形は、長径55cm前後、短径40cm前後の楕円形や径約35cmの円形で、深さは40~50cmである。これらの内3個で柱痕跡が認められており、平面形は主に径約20~26cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む暗褐色シルト、柱痕跡は地山粒を少量含む暗褐色シルトである。

〔方向〕東桁でみると、北で東に約11° 傾している。

〔出土遺物〕出土していない。

【SI488住居跡】(図版156・157)

【位置】N-6・W-72 [確認面] 地山

[重複] SI430・454・484・485・487住居跡、SK431土壌等と重複し、SI430・454・484、SK431より古い。その他の新旧関係は不明である。

[規模・平面形] 主柱穴と東辺周溝の一部のみ残存する。その為、規模等の詳細は不明であるが、主柱穴のみでは長軸約8m、短軸約3mを測り、平面形は長方形あるいは隅丸長方形を呈するものと推定される。また、残存不良の為、明確にはできないが住居方向や軸線はSI454とはほぼ同じであり、SI454は本住居跡を拡張して建て替えたものである可能性も考えられる。

[主柱穴] 8個検出した。掘り方は径25~57cmの不整円形で、深さは38~92cmである。これらの中で、柱痕跡が認められたものは6個あり、平面形は径16~28cmの円形である。柱間寸法は、北側柱列で約2.7m、西側柱列で北から約2.0m・2.8m・3.2mである。堆積土は柱痕跡が地山粒を含む暗褐色シルト、掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

[周溝] 東辺の一部のみ残存する。上幅20~35cmで、深さは確認のため5cm程掘り下げたのみだが、既に底面に達している部分もあり、浅く残存状況は不良である。堆積土は地山粒や炭化物粒を含む暗褐色シルトである。

[方向] 東桁でみると、北で東に約6°偏している。

[出土遺物] 主柱穴から縄文土器の破片(図版164-1~4)や石器(5)、不定形石器(6)が出土している(図版164)。

【SI451住居跡】(図版165・166)

【位置】N-12・W-78 [確認面] 地山で、北側へ傾斜している。

[重複] SI430・444・454住居跡、SK449・455土壌、SD10溝跡と重複しており、SI430・444、SD10よりも古く、SK449よりは新しい。SI454、SK455との前後関係は不明である。

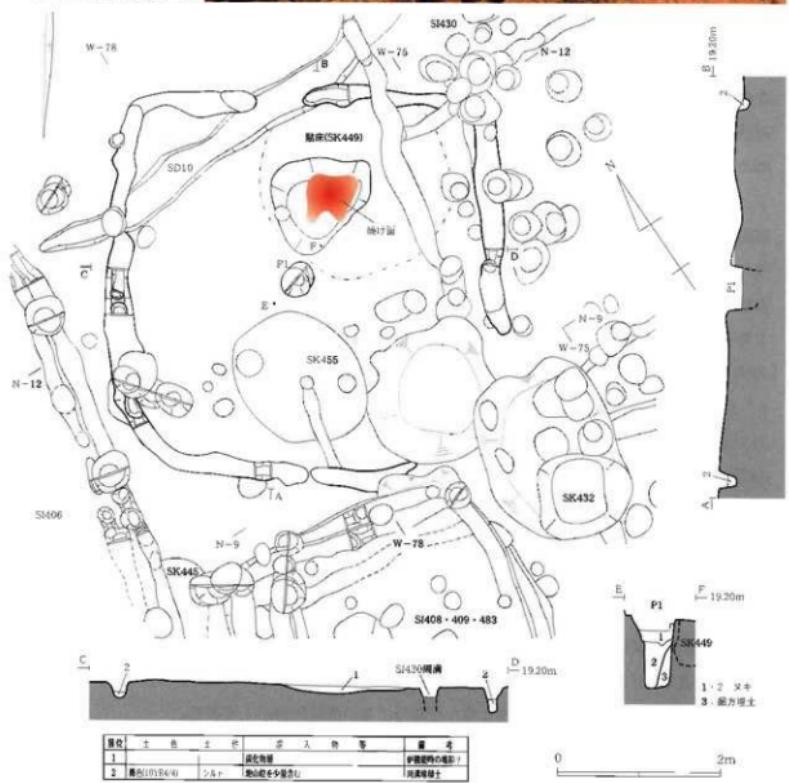
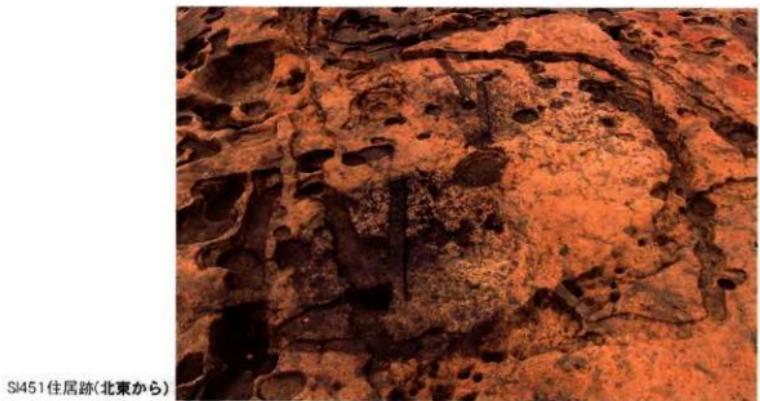
[規模・平面形] 新しい造構や削平により壊されて住居壁が残存しないものの、周溝の形状から東西4.9m×南北4.7mで、隅丸正方形を呈すると推定される。

[堆積土] 中央やや北寄りの床面が浅く窪んだ部分に薄い炭化物層が1層残る。

[床] SK449土壌と重複する部分には貼床が残る。この内、住居中央やや北寄りでは床面が浅く皿状に窪む。他は削平により不明である。



図版164 SI488出土遺物—縄文土器・石器—



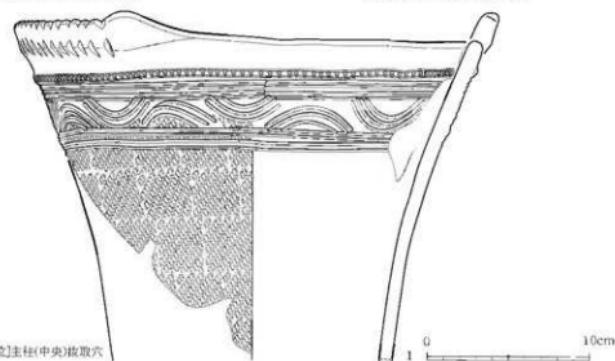
図版165 SI451住居跡(1)



S451貼床断面(SK455上面)



S451貼床(SK449上面)



図版 166 S451住居跡(2)および出土遺物—縄文土器—

【炉】住居中央やや北寄りの床で焼け面が検出されている。平面形は長軸80cm程の不整形を呈し、焼けが弱く、あまり赤変していない。焼け面は住居中央に認められる窪みの内部に位置しており、地床炉と考えられる。

【主柱穴】住居内では大小30個程のビットが確認されている。この内、住居のほぼ中央に位置するP1は主柱穴と考えられる。P1には柱抜き取り痕が認められ、底面に直径20cmの円形の柱押圧痕が残る。掘方の平面形は長軸50cmの楕円形を呈し、深さは85cmである。

【周溝・壁柱穴】4辺を断続的に巡る周溝が検出されている。上幅は15～35cmで、断ち割った部分で見ると深さは10～30cmある。断面は「U」字状を呈し、堆積土は褐色シルトである。また、部分的に掘り上げた溝の底面では壁柱穴と考えられるビットが確認されている。

【方向】南北の軸線でみると、北で東に約38° 傾している。

【出土遺物】主柱穴抜き取り穴から縄文土器深鉢(図版166)が出土している。

【その他の住居跡】

上記の住居跡の他に、SI100の南西からSI78周辺にかけて、ビットが特に集中する地点がある。この周辺を中心に、ビットが楕円形や隅丸方形に連なって確認されているものや、底面に数個の小ビットを有し、円弧状に巡る溝跡、あるいは焼け面のみ検出され、周辺のビットとの関連が捉えられなかつたものなどが確認されている。これらについては、残存状況が悪く、床面や主柱穴等が判明せず不明な点が多いものの、住居跡の壁柱穴や周溝、炉跡である可能性が高いものと判断した。以下では、それらの遺構について述べることとする。

【SI81住居跡】(図版167)

【位置】S-6・W-51【確認面】地山面で壁柱穴のみ確認された。

【重複】SI60・82住居跡、SB58掘立柱建物跡、SK68土壤などと重複し、SI60・82、SK68より新しい。SB58との新旧関係は不明である。

【規模・平面形】長軸約3.8m×短軸約3.3mの楕円形あるいは隅丸長方形を呈すると考えられる。

【壁・床面】残存していない。【主柱穴・炉・周溝】検出されなかった。

【壁柱穴】10個検出した。長径30～45cm、短径20～30楕円形や、直径21～40cmの円形である。深さは16～74cmで南西隅と北東隅の各々3個ずつが特に深くなっている。掘り方と柱痕跡が明確なものは8個有り、柱痕跡は直径10～17cmの円形である。堆積土は掘り方が地山ブロックを多く含む暗褐色シルトやにぶい黄褐色粘質シルト、柱痕跡が地山粒を含む暗褐色シルトやにぶい黄褐色シルトである。

【方向】長軸方向でみると、西で北に約30° 傾している。

【出土遺物】柱穴から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI82住居跡】(図版167)

【位置】S-5・W-50【確認面】地山面で壁柱穴のみ確認された。

【重複】SI60・81住居跡、SB58・149掘立柱建物跡、SK68・71土壤などと重複し、SI60、SK68・71より新しく、SI81より古い。その他の新旧関係は不明である。

【規模・平面形】長軸約5.0m×短軸約3.4mの隅丸長方形と考えられる。

【壁・床面】残存していない。【主柱穴・炉・周溝】検出されなかった。

【壁柱穴】12個検出した。直径24～33cmの円形や、長径32～38cm、短径26～29cmの楕円形である。深さは11～66cmで東西両辺の壁柱が深くなっている。すべての柱穴で柱痕跡が確認されており、直径11～17cmの円形である。堆積土は掘り方が地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色粘質シルト、柱痕跡が地山粒を含むにぶい黄褐色シルトである。

【方向】南東部の壁柱列でみると、西で北に約35° 傾している。

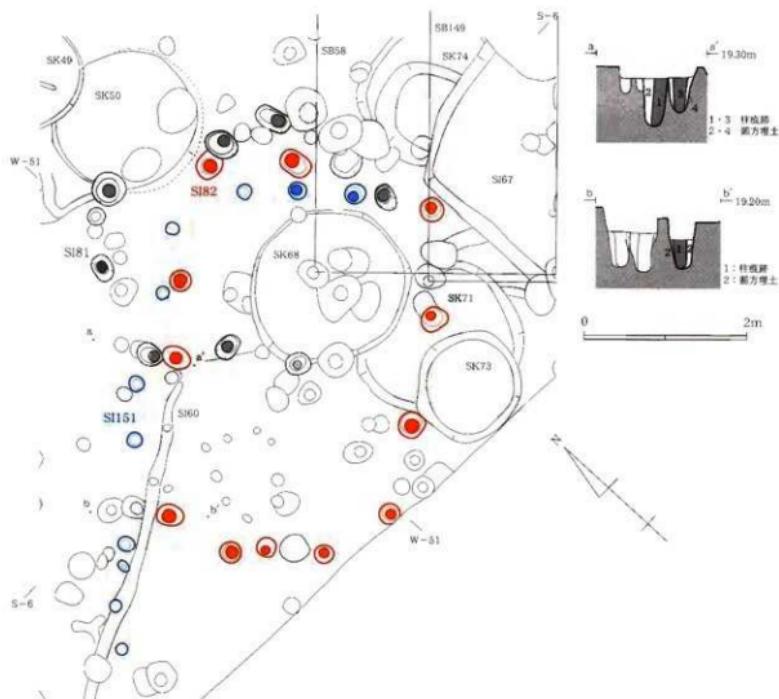
【出土遺物】柱穴から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI151住居跡】(図版167)

【位置】S-5・W-51 [確認面] 地山面で壁柱穴のみ確認された。

【重複】SI60・81・82住居跡、SB58・149掘立柱建物跡、SK68土壤などと重複し、SI60より古い。他の新旧関係は不明である。

【規模・平面形】長軸6.0m以上×短軸2.5m以上の隅丸長方形と考えられる。



図版167 SI81・82・151住居跡

【壁・床面】残存していない。[主柱穴・炉・周溝] 検出されなかった。

【壁柱穴】14個検出した。直径14~25cmの円形で、深さは4~53cmである。この内、2個で柱痕跡が確認されており、直径13cm前後の円形である。堆積土は掘り方が地山ブロックを含む暗褐色シルト、柱痕跡が地山粒を含む暗褐色シルトである。

【方向】北辺の壁柱列でみると、北で東に約56° 傾している。

【出土遺物】柱穴から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI144住居跡】(図版169)

【位置】N-3・W-63 [確認面] 地山面で壁柱穴のみ確認された。

【重複】SI100・142・143・146・147住居跡などと重複するが、新旧関係は不明である。

【規模・平面形】東西約3.0m×南北約6.4mの隅丸長方形である。

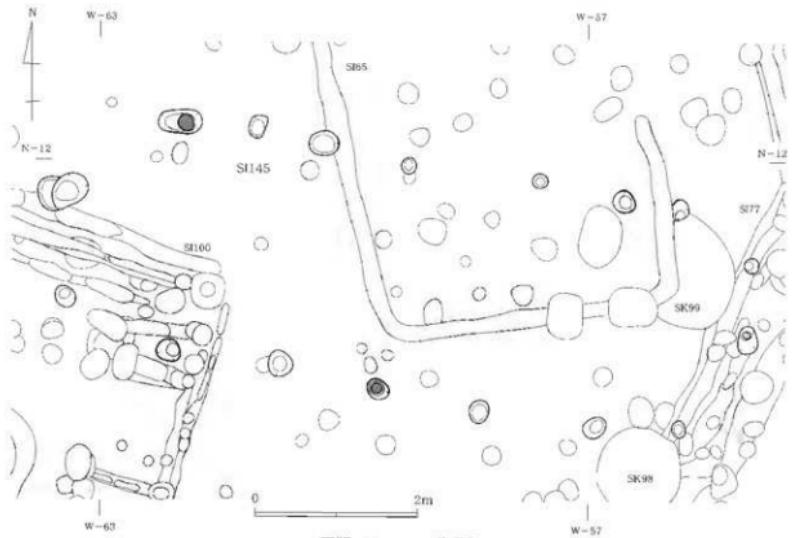
【壁・床面】残存していない。[主柱穴・炉・周溝] 検出されなかった。

【壁柱穴】24個検出した。平面形は直径20cm前後の円形や、1辺約30cm前後の隅丸方形あるいは不整形等である。深さは15~56cmである。掘り方と柱痕跡が明確なものは3個有り、柱痕跡は直径12~16cmの円形である。また、1個で柱を抜き取った痕跡が認められた。堆積土は掘り方が地山ブロックを含む褐色砂質シルト、柱痕跡が地山粒を含む黒褐色砂質シルトである。

【方向】東辺でみると、北で約10° 東に偏している。

【出土遺物】柱穴から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI145住居跡】(図版168)



図版168 SI145住居跡

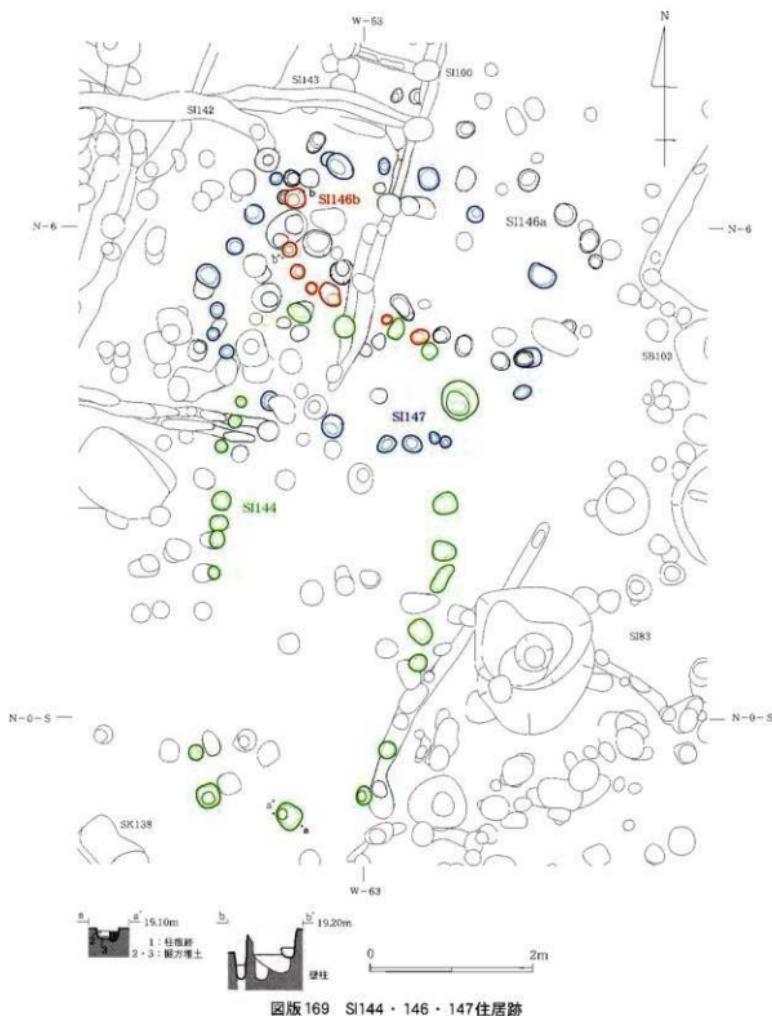
〔位置〕 N-10・W-60 〔確認面〕 地山面で壁柱穴のみ確認された。

[重複] SI65・77・100住居跡などと重複し、SI65より古く、SI77・100より新しい。

〔規模・平面形〕長軸約9.0m×短軸約3.0mの隅丸長方形あるいは橢円形を呈していたと考えられる。

「壁・床面」残存していない、「主柱穴・炬・周溝」検出されなかつた。

〔壁柱穴〕 18個検出した。平面形は直径20cm前後の円形や、1辺約25~40cmの開丸方形あるいは



図版169 SI144・146・147住居跡

不整形等である。深さは20～66cmで、棟持柱に相当する東西各辺中央の柱穴が特に深く、また柱を抜き取った痕跡が認められる。掘り方と柱痕跡が明確なものは4個有り、柱痕跡は直径152cm前後の円形や楕円形である。堆積土は掘り方が地山ブロックを含む暗褐色やにぶい黄褐色シルト、柱痕跡が地山粒を含む暗褐色砂質シルトである。

【方向】北辺でみると、東で南に約11° 傾している。

【出土遺物】柱穴から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI146 a・b住居跡】(図版169)

【位置】N-6・W-62【確認面】地山面で壁柱穴のみ確認した。

【重複】SI100・144・147住居跡などと重複し、SI147より新しい。その他との新旧関係は不明である。また、本住居跡は一度壁の改修がなされており、南辺の西側が約30cm拡張されている。古いものからSI146 a・bとする。

《SI146a》

【規模・平面形】長軸約4.0m×短軸約2.5mの隅丸長方形あるいは楕円形を呈していたと考えられる。

【壁・床面】残存していない。【主柱穴・炉・周溝】検出されなかった。

【壁柱穴】18個検出した。平面形は直径10～35cmの円形あるいは不整円形が多く、他に長軸30cm前後、短軸20cm前後の不整楕円形等である。深さは16～66cmで、特に南辺の東西各隅にあたる柱穴が深い。堆積土は地山粒やブロックを含む暗褐色シルトである。

【方向】南辺でみると、東で南に約36° 傾している。

【出土遺物】柱穴から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

《SI146 b》

【規模・平面形】長軸約4.0m×短軸約2.8mの西側がやや幅広となる不整隅丸長方形あるいは不整楕円形を呈していたと考えられる。SI146 a 南辺西側を拡張したものであり、他は同様である。

【壁柱穴】20個検出した。その内、拡張後のものは7個である。これらは直径12～18cmの円形や、長径24～30cm、短径18～20cm、深さ19～60cmで、拡張前のものよりもやや小さい。掘り方と柱痕跡が明確なものは1個有り、柱痕跡は直径約20cmの円形である。堆積土は掘り方が地山粒を多く含む暗褐色シルト、柱痕跡が地山粒、炭化物粒を少量含む暗褐色シルトである。

【方向】北辺でみると、東で約36° 南に偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SI147住居跡】(図版169)

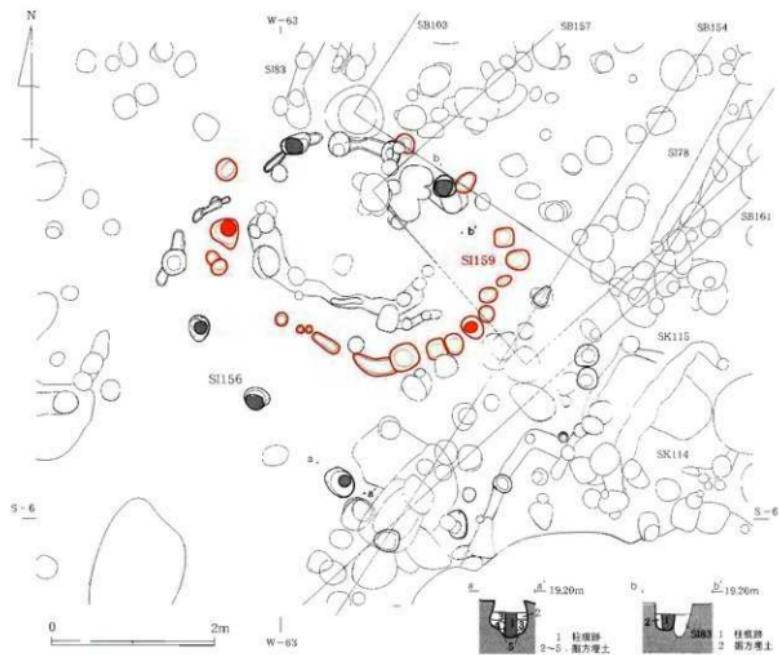
【位置】N-5・W-62【確認面】地山面で壁柱穴のみ確認した。

【重複】SI100・142・143・146などと重複し、SI146より古い。その他との新旧関係は不明である。

【規模・平面形】長軸約4.2m、短軸約3.5mの楕円形を呈すると考えられる。

【壁・床面】残存していない。【主柱穴・炉・周溝】検出されなかった。

【壁柱穴】20個検出した。平面形は直径14～28cmの円形あるいは不整円形である。深さは10～51cmで、特に西辺の壁柱穴が他と比べて深くなっている。堆積土は地山粒やブロックを含む暗



図版170 SI156・159住居跡

褐色シルトである。

【方向】長軸方向でみると、概ね東で南に約30° 前後偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SI156住居跡】(図版170)

【位置】S-6・W-63【確認面】地山面で壁柱穴と西辺の周溝が確認された。

【重複】SI78・83・159住居跡、SB103・154・157・161掘立柱建物跡などと重複し、SI78・83より新しい。その他の新旧関係は不明である。

【規模・平面形】長軸約5.0m×短軸約3.7mの隅丸方形を呈すると考えられる。

【壁・床面】残存していない。【主柱穴・炉】検出されなかった。

【壁柱穴】15個検出した。平面形は直径、1辺各30cm前後の円形や隅丸方形、あるいは不整円形などである。深さは18~64cmで、この内、掘り方埋土と柱痕跡が明確なものは4個有り、柱痕跡は直径14~20cmの円形や長径約24cm、短径約14cmの不整梢円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックや砂を多く含む褐色や黄褐色の砂質シルトや砂、柱痕跡は地山粒や砂を含む褐色砂質シルトである。

【周溝】西辺で検出した。上幅5~18cm、下幅約3~15cm、深さ5cm前後で、溝には地山ブロック

クを含む褐色砂質シルトが堆積している。

【方向】 南辺の壁柱列でみると、概ね東で南に約48° 傾している。

【出土遺物】 出土していない。

【SI159住居跡】(図版170)

【位置】 S-3・W-63 [確認面] 地山面で壁柱穴と南東隅の周溝が確認された。

【重複】 SI83・156、SB103・157などと重複するが新旧関係は不明である。

【規模・平面形】 長軸約3.8m×短軸約2.8mの楕円形あるいは卵円形を呈すると考えられる。

【壁・床面】 残存していない。[主柱穴・炉] 検出されなかった。

【壁柱穴】 19個検出した。平面形は直径9~25cmの円形や不整円形、1辺20~35cmの隅丸方形などである。深さは4~41cmで、この内、掘り方埋土と柱痕跡が明確なものは2個有り、堆積土は掘り方埋土が地山粒やブロックを含む暗褐色シルト、柱痕跡は地山粒を含む暗褐色シルトである。

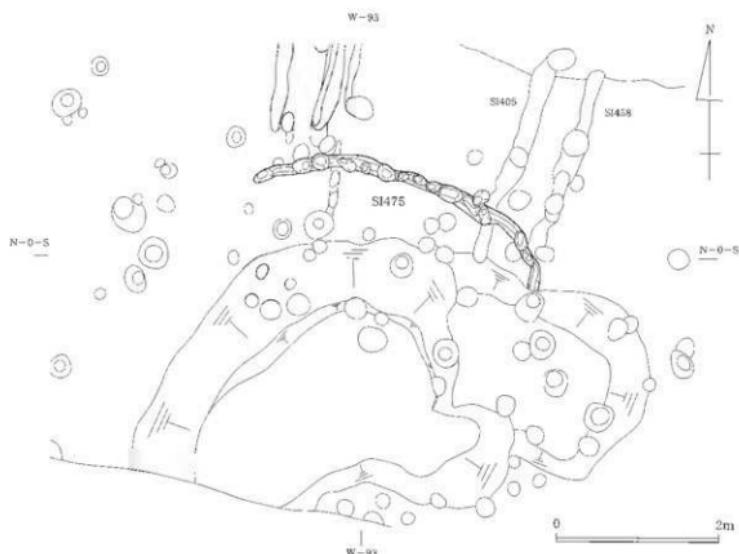
【周溝】 南東隅で検出した。上幅約15cm、下幅約12、深さ5cm前後で、溝には地山ブロックを含む暗褐色シルトが堆積している。

【方向】 長軸方向でみると、概ね東で南に約30° 前後偏している。

【出土遺物】 柱穴から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SI178炉跡】(図版174)

【位置】 S-2・W-46 [確認面] SK74土壤堆積土上面



図版171 SI475住居跡

【重複】 SI29住居跡、SB58・150・149掘立柱建物跡、SK74土壙などと重複し、SI29より古く、SK74より新しい。この他の新旧関係は不明である。

【炉】 地床炉と考えられる。平面形は東西軸0.2~0.5m、南北軸2.0m以上の南北に細長い不整形を呈し、南側はSI29によって覆されている。焼け面は赤変し、やや硬化している。

【出土遺物】 出土していない。

【SI475住居跡】(図版171)

【位置】 N-0-S-W-93 [確認面] 地山面で北辺の周溝と壁柱穴のみが確認された。

【重複】 SI405・458住居跡と重複し、いずれよりも新しい。

【規模・平面形】 東西方向に弧を描きながら延びる小溝で、長さ3.6m程残存しており、南側はSX374倒木痕に接される。

【壁・床面】 残存していない。【主柱穴・炉】 検出されなかった。

【周溝・壁柱穴】 上幅10~20cm、深さ5cm前後で、断面は「U」字状を呈する。溝は全体的に浅く、堆積土は黒褐色シルトである。また、溝の底面では長軸12~30cmの不整な楕円形を呈し、深さ8~35cmのビット14個が確認されている。ビットは溝内で比較的密に連続して並んでいる。

【出土遺物】 出土していない。

2 積穴状遺構

1軒確認された。方形の掘り込みを有し、床面が堅くしまっている。周溝や柱穴、炉は持たない。

【SX69積穴状遺構】(図版49)

【位置】 N-4-W-54 [確認面] 地山面およびSI77住居跡、SK97土壙堆積土上面

【位置・確認面】 調査区中央やや東寄りに位置する。確認面は地山面である。

【重複】 SI77住居跡、SB103掘立柱建物跡、SK64・97土壙と重複しており、SI77、SB103、SK97よりも新しく、SK64よりも古い。

【平面形・規模】 東西2.1m×南北2.6mの不整な長方形(台形状)を呈する。

【堆積土】 3層認められ、いずれも自然流入土である。この内、2層は極薄い層で炭化物が主体となる。

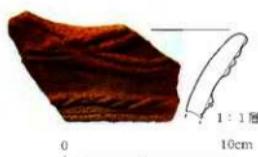
【壁】 地山もしくは古い遺構の埋土を壁としている。壁は外側へやや開き気味に立ち上がり、床面から高さ10cm前後残る。

【床】 地山または古い遺構の埋土を床としており、SK97土壙上部では部分的に厚さ2cm程の貼床が認められる。床面は貼床の範囲を中心に硬く締まっており、

中央部に向かって若干皿状に窪む。

【方向】 住居の方向は、南北の軸線でみると北で西に約40°偏している。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版172)



図版172 SX69出土縄文土器

3 挖立柱建物跡

【SB58a～d掘立柱建物跡】(図版173・174)

【位置】 S-5・W-45 [確認面] 地山およびSK68土壤堆積土上面

【構造】 東西1間、南北3間の南北棟である。



SB58 挖立柱建物跡(西から)



SB58・148～150・166
掘立柱建物跡



c柱穴断面(N1E1)



c柱穴断面(N2W1)

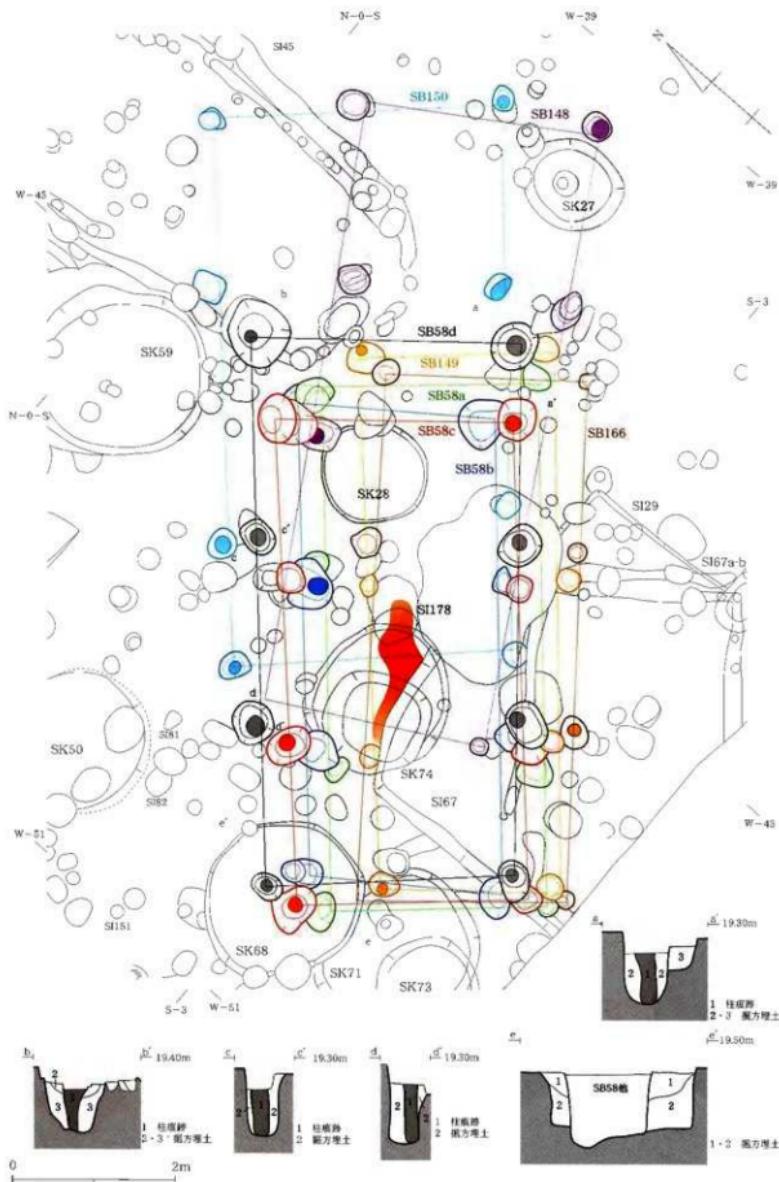


d柱穴断面(N1E1)



d柱穴断面(N1W1)

図版173 SB58・148～150・166掘立柱建物跡(1)

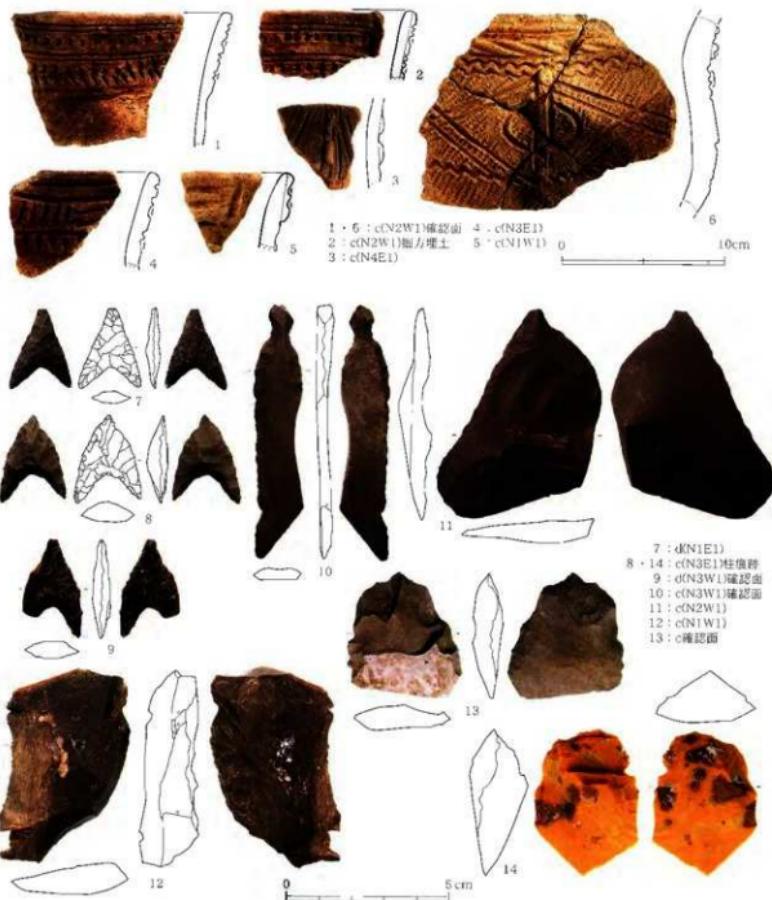


図版174 SB58・148～150・166掘立柱建物跡(2)

〔重複〕 SI29・45・67・81・82・151住居跡、SB148～150掘立柱建物跡、SK68・74土壤などと重複し、SI29より古く、SI45・67・151、SB148～150、SK68・74より新しい。SI81・82との新旧関係は不明である。また、本建物跡はほぼ同位置で、3度建て替えられており、古いものから順にSB58 a～dとする。

《SB58 a》

〔規模・柱穴・柱痕跡〕 SB58 b・c・dに埋されているため詳細は不明だが、規模は桁行が西桁で約6.3m、柱間寸法は北から約2.0m・約2.5m・約1.8m、梁行が北梁で約2.7mと推定される。柱穴は



図版175 SB58掘立柱建物跡出土遺物—縄文土器・石器—

7個検出した。平面形は直径25～45cmの不整円形で、深さは35～67cmである。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。柱痕跡は検出されなかった。

【方向】柱痕跡が明確でないため詳細は不明であるが、東桁の柱穴底面中心を結ぶと、北で東に49°偏している。

【出土遺物】地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

《SB58 b》

【規模・柱穴・柱痕跡】SB58 c・dに壊されているため、詳細は不明だが、規模は桁行が西桁で約5.4m、柱間寸法は北から約1.9m・約2.0m・約1.5m、梁行が北梁で約2.5mと推定される。柱穴は8個検出し、この内、柱痕跡が認められるものは1個ある。平面形は長径50cm前後、短径30～40cmの楕円形や、直径50～60cmの不整円形で、深さは51～81cmである。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む暗褐色シルト、柱痕跡はしまりのない暗褐色シルトである。

【方向】柱痕跡が明確でないため詳細は不明であるが、SB58 cとほぼ同様、北で東に46°前後偏していると考えられる。

【出土遺物】地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

《SB58 c》

【規模】桁行は西桁で約5.9m、柱間寸法は北から推定約1.9m・約2.0m・約2.0mである。梁行は南梁で推定約3.0mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は8個検出し、この内、3個で柱痕跡、1個で柱を抜き取った痕跡が認められた。平面形は長径55～63cm、短径33～45cmの楕円形や、直径約50cmのやや不整の円形で、深さは58～88cmである。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色シルト、柱痕跡が地山粒を含むしまりのない黒褐色シルトである。

【方向】西桁でみると、北で東に約46°偏している。

【出土遺物】縄文土器深鉢(図版175-1～6)の他、石鏃(8)、石匙(10・11)、不定形石器(12～14)、土製耳飾り(図版438-2)が出土している。

《SB58 d》

【規模】桁行は東桁で6.5m、柱間寸法は北から2.4m・2.1m・2.0mである。梁行は南梁で3.0mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は8個検出し、すべての柱穴で柱痕跡が認められた。平面形は長径40～54cm、短径30～45cmの楕円形や、直径50～75cmのやや不整の円形で、深さは39～108cmである。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む暗褐色シルト、柱痕跡が炭化物粒を含む暗褐色シルトである。

【方向】東桁でみると、北で東に約50°偏している。

【出土遺物】柱穴埋土や確認面から石鏃(図版175-7・9)や地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SB148掘立柱建物跡】(図版173・174)

【位置】 S-3・W-42 [確認面] 地山

【重複】 SI45住居跡、SB58・149・150掘立柱建物跡などと重複し、SB58より古い。その他の新旧関係は不明である。

【構造】 東西1間、南北3間の南北棟である。

【規模】 构行は東桁で約7.7m、柱間寸法は北から約2.2m・約5.6m(2間)である。梁行は南梁で約3.0mである。

【柱穴・柱痕跡】 柱穴は6個検出し、この内、2個で柱痕跡、2個で柱を抜き取った痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径35cm前後の円形や、長径50cm前後、短径30cm前後の楕円形で、深さは39~67cmである。柱痕跡は直径約25cmの円形や、長径約35cm、短径約18cmの楕円形である。堆積土は掘り方理土が地山ブロックを含む黒褐色砂質シルト、柱痕跡がしまりのない暗褐色シルトである。

【方向】 西桁でみると、北で東に約55° 傾している。

【出土遺物】 地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SB149掘立柱建物跡】(図版173・174)

【位置】 S-5・W-45 [確認面] 地山およびSI67、SK71・74堆積土上面

【重複】 SI29・67住居跡、SB58・148・150・166掘立柱建物跡、SK71・74土壌などと重複し、SI29、SB58・166より古く、SI67、SK71・74より新しい。その他の新旧関係は不明である。

【構造】 東西1間、南北3間の南北棟である。

【規模】 构行は西桁で6.5m、柱間寸法は北から約2.8m・約2.1m・約1.6mである。梁行は南梁で約2.0mである。

【柱穴・柱痕跡】 柱穴は8個検出し、この内、2個で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径30cm前後の円形や、長径約40cm、短径約30cmの楕円形で、深さは42~70cmである。柱痕跡は直径約15cmの円形である。堆積土は掘り方理土が地山ブロックを含む暗褐色シルト、柱痕跡がしまりのない暗褐色シルトである。

【方向】 西桁でみると、北で東に約48° 傾している。

【出土遺物】 地文のみの縄文土器胴部破片が極少量出土している。

【SB150掘立柱建物跡】(図版173・174)

【位置】 S-3・W-44 [確認面] 地山

【重複】 SI29・45住居跡、SB58・148・149掘立柱建物跡、SK74土壌などと重複し、SI29より古い。その他の新旧関係は不明である。

【構造】 東西1間、南北3間の南北棟である。

【規模】 构行は西桁で約6.6m、柱間寸法は北から約2.0m・約3.1m・約1.5mである。梁行は北梁で約3.6mである。

【柱穴・柱痕跡】 柱穴は8個検出し、この内、4個で柱痕跡、1個で柱を抜き取った痕跡が認められた。柱穴の平面形は長径32~37cm、短径24~30cmの楕円形や、直径30~40cmの不整円形な

どで、深さは21～54cmである。柱痕跡は直径15～18cmの円形や、長径約33cm、短径約16cmの楕円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色砂質シルト、柱痕跡が地山を含む暗～黒褐色砂質シルトである。

【方向】西折でみると、北で東に約47° 傾している。

【出土遺物】出土していない。

【SB166掘立柱建物跡】(図版173・174)

【位置】S-5・W-45 [確認面] 地山およびSI67、SK71・74堆積土上面

【重複】SI29・67住居跡、SB58・148・149・150掘立柱建物跡、SK71・74土壌などと重複し、SI29、SB58より古く、SI67、SB149、SK71・74より新しい。その他の新旧関係は不明である。

【構造】東西1間、南北3間の南北棟である。

【規模】桁行は東桁で約6.3m、柱間寸法は北から約2.1m・約2.2m・約2.0mである。梁行は北梁で約2.5mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は6個検出し、この内、1個で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径24～40cmの円形や不整円形、長径約30cm、短径約22cmの楕円形で、深さは12～19cmである。柱痕跡は直径約16cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色シルト、柱痕跡がしまりのない暗褐色シルトである。

【方向】西折でみると、北で東に約53° 傾している。

【出土遺物】出土していない。

【SB103掘立柱建物跡】(図版176～178)

【位置】N-0・S・W-57 [確認面] 地山面およびSI70住居跡の堆積土上面

【重複】SI70・77・78・83住居跡、SI69竪穴状遺構、SB154・155・157掘立柱建物跡、SK64・66・97・101土壌等と重複している。新旧関係がわかるものでは、SI70・77・78・83、SB155・157、SK97よりも新しく、SI69、SK64・101よりも古い。

【構造】桁行4間、梁行1間の南北棟の建物である。

【規模】桁行は東桁で約9.0m、柱間寸法は北から北から2.4m・2.2m・約2.2m・約2.2mである。梁行は北梁で推定4.1mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は10個検出し、この内、5個で柱痕跡が認められた。それ以外では柱が抜き取られている。平面形は長軸が50～80cmの不整な隅丸正方形もしくは長方形を呈し、西側柱列に長軸70cm以上の大きな柱穴が並ぶ。深さは45～68cmで、60cm前後のものが多い。柱痕跡は30cm×20cmの不整な隅丸長方形を呈する。堆積土は掘り方埋土が暗褐色や黄褐色のシルトで、互層状に埋め戻されている。柱痕跡は地山粒を含む暗～黒褐色シルトである。

【方向】西折でみると、北で東に約30° 傾している。

【出土遺物】縄文土器深鉢の破片(図版176-1～3)や、不定形石器(4)等が出土している。

【SB155掘立柱建物跡】(図版176～178)

【位置】N-1・W-57 [確認面] 地山面およびSI77・78住居跡、SK97土壌堆積土上面



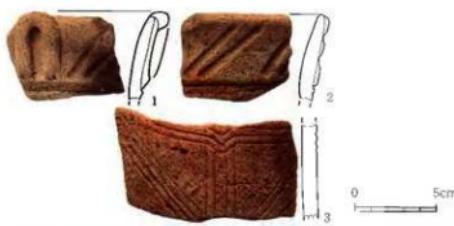
SB103掘立柱建物跡(西から)



SB103柱穴断面(N1W1)



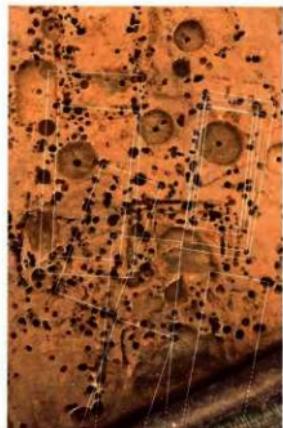
SB103柱穴断面(N2W1)



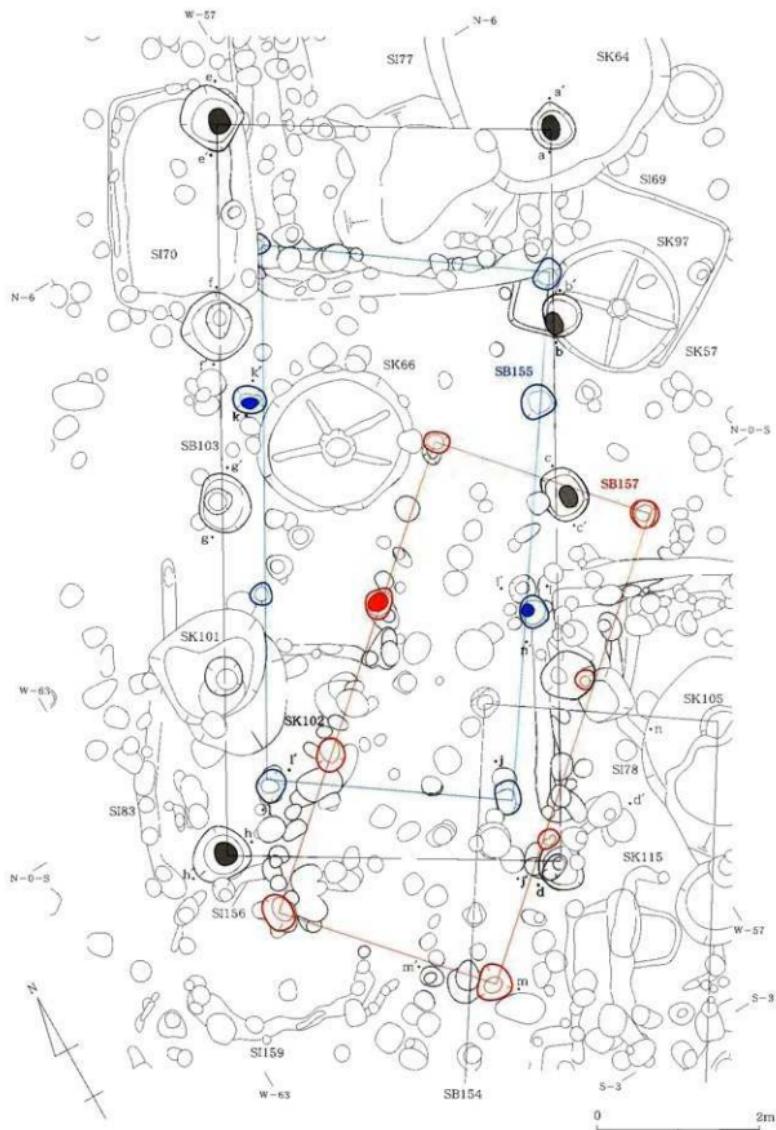
1・2 : SB103(N1W1)

3 : SB103(N1E 2)泥力埋土

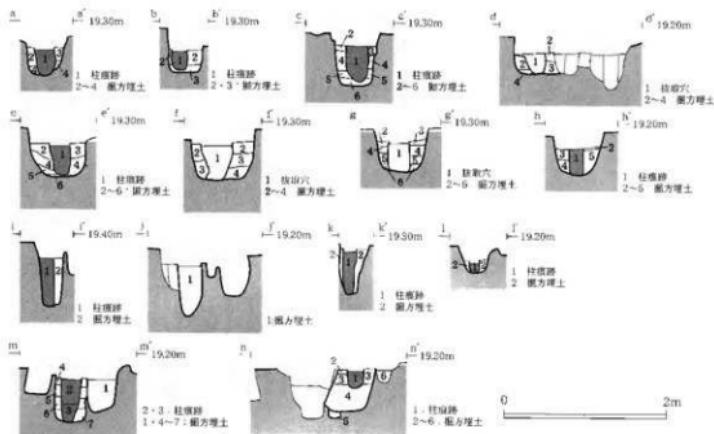
4 : SB103(N1W1)泥力埋土



図版176 SB103・153・157～160・162～164・166掘立柱建物跡および出土遺物



図版177 SB103・155・157掘立柱建物跡(1)



図版178 SB103・155・157掘立柱建物跡(2)

〔重複〕SI70・77・78・83住居跡、SI69竪穴状遺構、SB103・154・157掘立柱建物跡、SK66・97・101土壤等と重複している。新旧関係がわかるものでは、SI77・78、SK97よりも新しく、SI69・70よりも古い。

〔構造〕東西1間、南北3間の南北棟である。

〔規模〕桁行は西桁で約6.6m、柱間寸法は北から約2.0m・約2.3m・約2.3mである。梁行は北梁で約3.6m、南梁で約3.0mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は8個検出し、この内、2個で柱痕跡が認められた。それ以外は不明で、柱が抜き取られているものと考えられる。柱穴の平面形は長軸が35～45cmの不整な隅丸長方形もしくは楕円形を呈するものが殆どで、一辺約30cmの不整な隅丸正方形のものも1個検出している。深度は35～77cmで、40cm前後のものが多い。柱痕跡は直徑20cmの円形や長軸20cmの不整な楕円形を呈する。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色の砂質シルト、柱痕跡が暗褐色砂質シルトである。

〔方向〕西桁でみると、北で東に約33° 傾いている。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SB157掘立柱建物跡〕(図版176～178)

〔位置〕S-1・W-58 [確認面] 地山

〔重複〕SI78・156・159住居跡、SB103・154・155掘立柱建物跡、SK66・101・102土壤などと重複し、SB103より古い。その他の新旧関係は不明である。

〔構造〕東西1間、南北3間の南北棟である。

〔規模〕桁行は西桁で約6.1m、柱間寸法は北から約2.1m・約2.0m・約2.0mである。梁行は北梁で約2.8mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は8個検出し、この内、各々1個で柱痕跡と柱の抜き取り穴が認められた。柱穴の平面形は直径25~40cmの円形や、長軸37~46cm、短軸30~35cmの橢円形などで、深さは31~68cmである。柱痕跡は径20cm前後のやや不整円形である。堆積土は、掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色の砂質シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

【方向】西桁でみると、北で東に約49° 傾している。

【出土遺物】地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SB154掘立柱建物跡】(図版176・179)

【位置】S-5・W-59 [確認面] 地山およびSK106堆積土上面

【重複】SI78・156住居跡、SB103・155掘立柱建物跡、SK105・106・114・115土壤などと重複し、SK105・106より新しい。その他の新旧関係は不明である。

【構造】東西1間、南北4間以上の南北棟で、南側は調査区外に延びている。

【規模】桁行は西桁で7.5m以上、柱間寸法は北から約1.7m・約1.8m・約2.0m・約2.0mである。梁行は北梁で約3.0mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は8個検出し、この内、各々1個で柱痕跡と柱の抜き取り穴が認められた。

柱穴の平面形は直径45cm前後のやや不整の円形や、長軸40cm前後、短軸30cm前後の隅丸長方形などで、深さは7~83cmである。柱痕跡は直径約20cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む褐色や暗褐色の砂質シルト、柱痕跡が暗褐色砂質シルトである。

【方向】西桁でみると、北で東に約33° 傾している。

【出土遺物】地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SB158 a・b掘立柱建物跡】(図版176・179)

【位置】S-7・W-56 [確認面] 地山

【構造】東西1間、南北1間以上の建物跡で、南側は調査区外に延びている。

【重複】SI60・78・151住居跡などと重複するが、新旧関係は不明である。また、本建物跡はほぼ同位置で、1度建て替えられており、古いものからSB158 a~bとする。

《SB158 a》

【規模】柱間寸法は東桁で2.1m以上、梁行は北から2番目の柱間で推定約2.6mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は3個検出し、この内、1個で柱痕跡が認められた。平面形は長径約35cm、短径約28cm、深さ42~74cmの橢円形などで、柱痕跡は直径約15cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルト、柱痕跡が地山粒を含むしまりのない褐色シルトである。

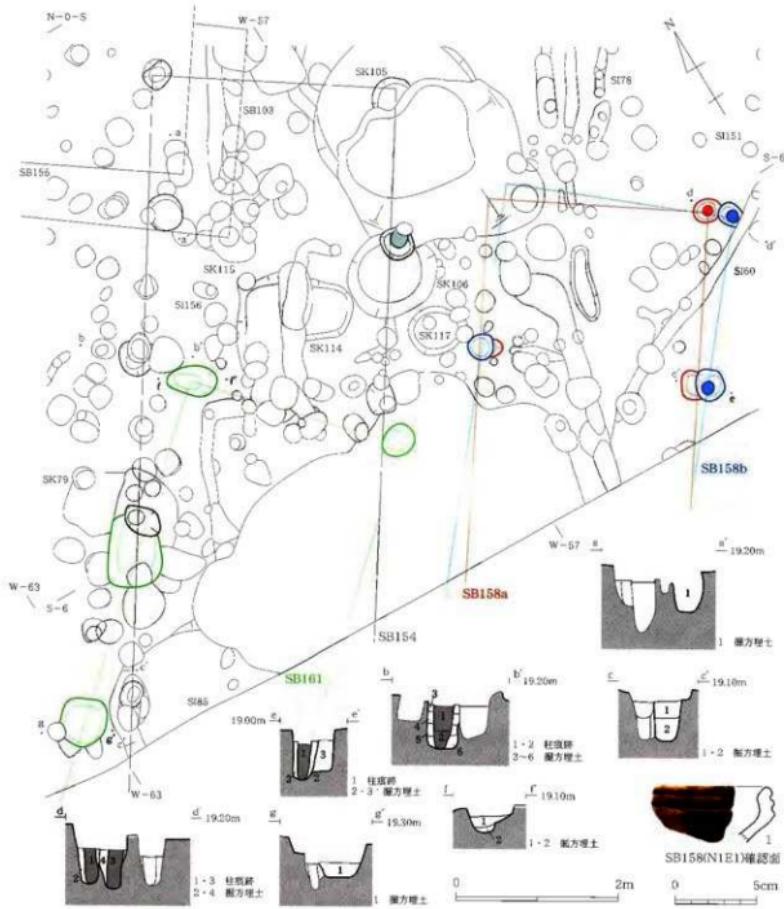
【方向】東桁でみると、北で東に約35° 傾している。

【出土遺物】出土していない。

《SB158 b》

【規模】柱間寸法は東桁で2.1m以上、梁行は北から2番目の柱間で推定2.8mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は3個検出し、この内、2個で柱痕跡が認められた。平面形は長径約32cm、



図版179 SB154・158・161掘立柱建物跡

短径約25cmの楕円形や1辺約35cmの不整方形で、深さは58~80cmである。柱痕跡は直径約16cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含む褐色シルト、柱痕跡が地山粒を含むしまりのない褐色シルトである。

【方向】東桁でみると、北で東に約39° 傾している。

【出土遺物】柱穴確認面から繩文土器浅鉢の破片が出土している(図版179-1)。

【SB161掘立柱建物跡】(図版176・179)

【位置】S-7・W-61 [確認面] 地山

【重複】 SI78・156住居跡、SB154掘立柱建物跡、SK79土壙などと重複し、SK79より古い。その他の新旧関係は不明である。

【構造】 東西1間以上、南北2間以上の建物跡で、南側は調査区外に延びている。

【規模】 柱間寸法は西桁で北から約2.2m・約2.1m、北梁で約2.7mである。

【柱穴・柱痕跡】 柱穴は3個検出し、柱はすべて抜き取られている。柱穴の平面形は不明であり、抜き取り穴は1辺65cm前後の不整方形や、長径42～65cm、短径約35cmの不整楕円形などである。深さは34～48cmで堆積土は地山ブロックを多く含む褐色砂質シルトや黄褐色砂である。

【方向】 西側柱列でみると、北で東に約48° 傾している。

【出土遺物】 出土していない。

【SB153掘立柱建物跡】(図版180)

【位置】 S-1・W-53【確認面】 地山およびSK57堆積土上面

【重複】 SI48・78住居跡、SB162・163・164掘立柱建物跡、SK56・57土壙などと重複し、SI48より古く、SB162・163、SK57より新しい。他の新旧関係は不明である。

【構造】 東西1間、南北3間の南北棟である。

【規模】 桁行は西桁で約5.4m、柱間寸法は約1.8m等間である。梁行は北梁で約2.3mである。

【柱穴・柱痕跡】 柱穴は8個検出し、この内、2個で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長径25～38cm、短径20～27cmの楕円形や、直径24～35cmの円形などで、深さは14～55cmである。柱痕跡は直径15cm前後の円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色や褐色の砂質シルト、柱痕跡が地山を含むにぶい黄褐色砂質シルトである。

【方向】 東桁でみると、北で東に約36° 傾している。

【出土遺物】 地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SB162掘立柱建物跡】(図版180)

【位置】 N-1・W-53【確認面】 地山

【重複】 SI48・78住居跡、SB153・163・164掘立柱建物跡、SK56・57・105土壙などと重複し、SI48、SB153、SK105より古い。他の新旧関係は不明である。

【構造】 東西1間、南北3間の南北棟である。

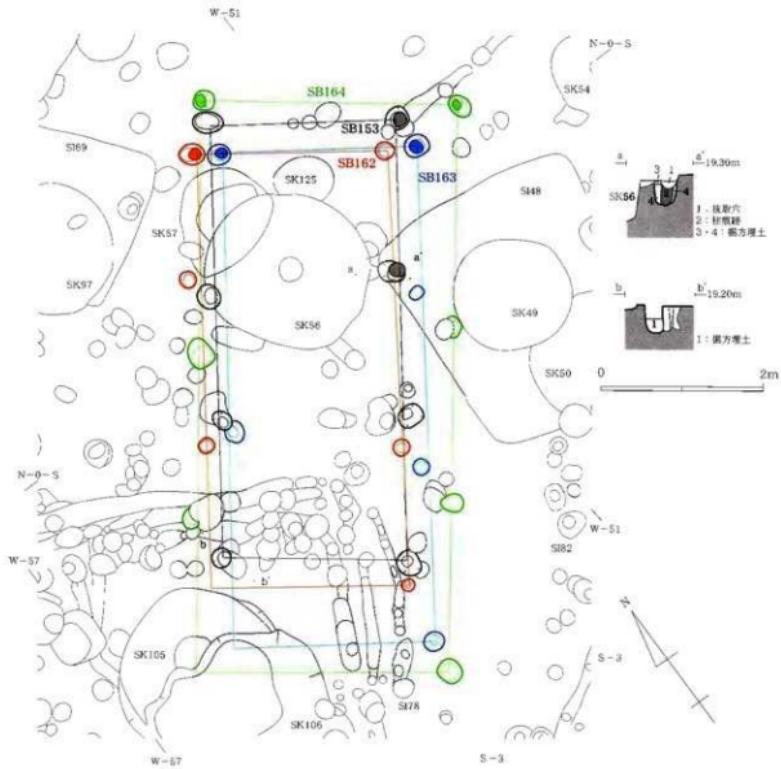
【規模】 桁行は東桁で約5.4m、柱間寸法は北から約1.5m・約2.2m・約1.7mである。梁行は北梁で約2.4mである。

【柱穴・柱痕跡】 柱穴は6個検出し、この内、1個で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径15～23cmの円形や、長径約31cm、短径約26cmの楕円形などで、深さは10～42cmである。柱痕跡は直径約16cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色砂質シルト、柱痕跡が黒褐色シルトである。

【方向】 東桁でみると、北で東に約35° 傾している。

【出土遺物】 出土していない。

【SB163掘立柱建物跡】(図版180)



図版180 SB153・162~164掘立柱建物跡

[位置] N-1・W-53 [確認面] 地山

[重複] SI48・78住居跡、SB153・162・164掘立柱建物跡、SK56・57・105土壙などと重複し、SI48、SB153、SK105より古い。その他の新旧関係は不明である。

[構造] 東西1間、南北3間の南北棟である。

[規模] 柱行は東桁で約6.1m、柱間寸法は北から約1.8m・約2.1m・約2.2mである。梁行は北梁で2.4mである。

[柱穴・柱痕跡] 柱穴は6個検出し、この内、2個で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径20～25cmの円形や、長径約30cm、短径約26cmの隅丸長方形、長径約31cm、短径約26cmのやや不整の梢円形などで、深さは5～47cmである。柱痕跡は直径12～15cmの円形である。堆積土は掘り方盤土と地山ブロックを含む暗褐色砂質シルト、柱痕跡が黒褐色シルトである。

[方向] 東軒でみると、北で東に約35° 偏している。



SB131掘立柱建物跡(南から)



SB131
掘立柱建物跡



柱穴断面(N2W1)



柱穴断面(N3E1)

図版181 SB131掘立柱建物跡(1)

[出土遺物] 出土していない。

[SB164掘立柱建物跡] (図版180)

[位置] N-1・W-53 [確認面] 地山

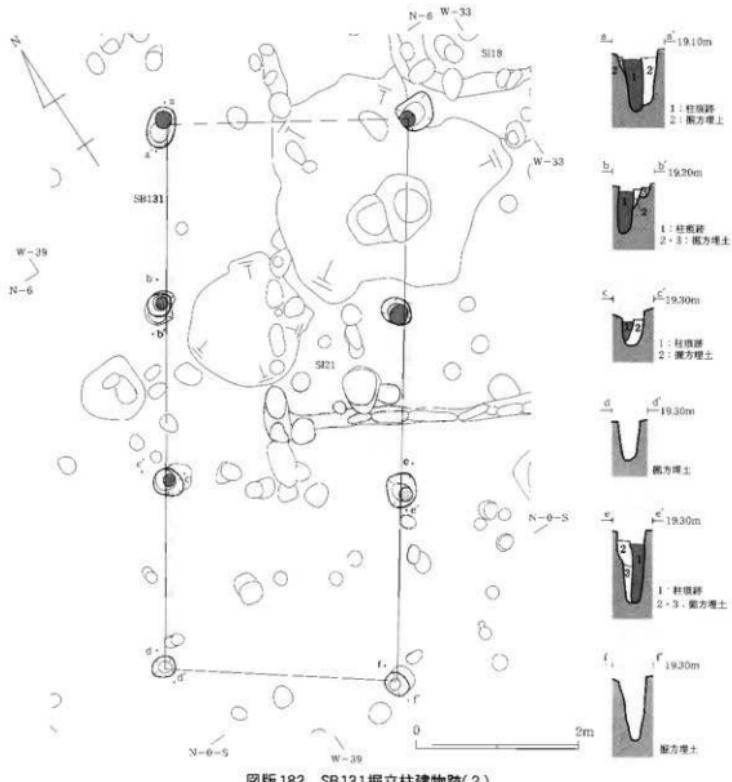
[重複] SI48・78住居跡、SB153・162・163掘立柱建物跡、SK56・57・105土壙などと重複し、SI48、SK105より古い。その他の新旧関係は不明である。

[構造] 東西1間、南北3間の南北棟である。

[規模] 桁行は東桁で約7.0m、柱間寸法は北から約2.7m・約2.2m・約2.1mである。梁行は北梁で3.1mである。

[柱穴・柱痕跡] 柱穴は7個検出し、この内、2個で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は一辺25～30cmの隅丸方形、長軸約35cm、短径約28cmの隅丸長方形、長径約30cm、短径約22cmの楕円形などで、深さは12～59cmである。柱痕跡は直径15cm前後の不整円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色砂質シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

[方向] 東桁でみると、北で東に約38° 傾している。



図版182 SB131掘立柱建物跡(2)

【出土遺物】出土していない。

【SB131掘立柱建物跡】(図版181・182)

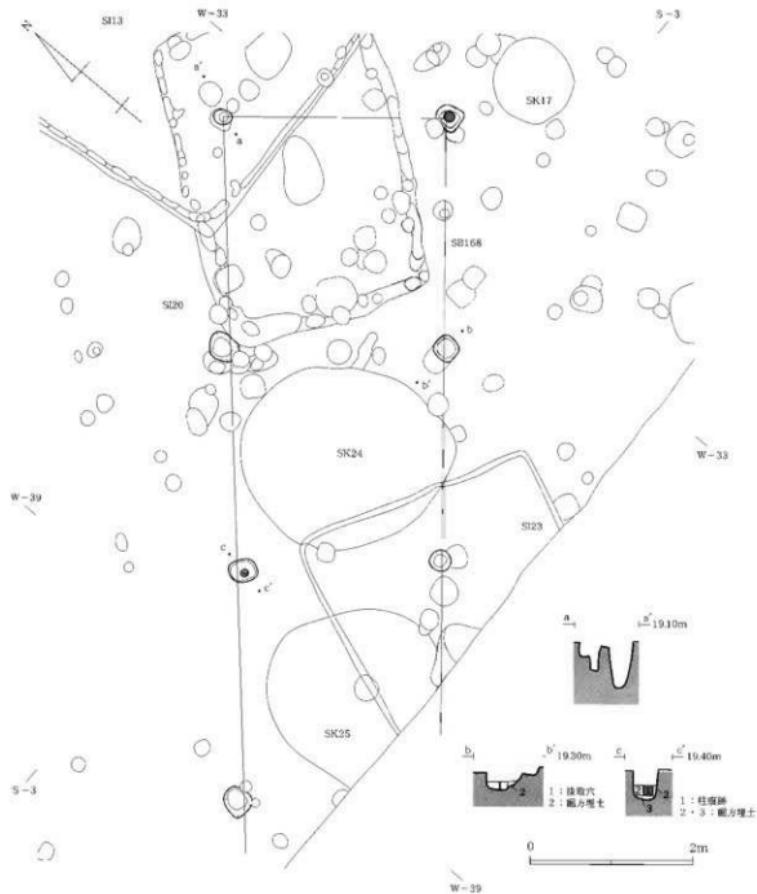
【位置】N-5・W-37【確認面】地山で北側へ緩やかに傾斜している。

【重複】SI21住居跡、倒木痕と重複しており、これらよりも古い。

【構造】東西1間、南北3間の南北棟である。

【平面形・規模】桁行は東桁で約6.9m、柱間寸法は北から2.4m・2.2m・約2.3mである。梁行は北梁で3.0mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は8個検出し、この内、6個で柱穴で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は長軸が30~50cmの不整な隅丸長方形もしくは楕円形を呈し、深さは45~90cmで、底面に向かって窄まる傾向にある。深さ70cm前後のものが多い。柱痕跡は直軸15~20cmの円形もしくは楕円形を呈する。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含む黒褐色または褐灰色の粘土質シルト、柱痕跡



図版183 SB168掘立柱建物跡

が地山粒を含む暗褐色シルトである。

【方向】 東柵でみると、北で東に約33° 傾している。

【出土遺物】 地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SB168掘立柱建物跡】(図版183)

【位置】 S-6・W-35【確認面】 地山で南側は調査区外に延びる。

【重複】 SI13・20・23住居跡、SK23・25土壤と重複しており、SI13・20・23よりも古い。SK23・25との新旧関係は不明である。

〔構造〕東西1間、南北3間以上の南北棟である。

〔規模〕桁行は西桁で約8.4m以上、柱間寸法は約2.8m等間である。梁行は北梁で約2.7mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は7個検出し、この内、2個で柱痕跡が認められた。それ以外では柱が抜き取られているとみられる。

柱穴の平面形は一辺もしくは長辺が25~35cmの不整な隅丸正方形または隅丸長方形を呈し、深さは22~41cmである。

柱痕跡は直径10~15cmの円形を呈する。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含む褐色シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

〔方向〕西桁でみると、北で東に約48° 傾している。

〔出土遺物〕出土していない。

〔SB450 a ~ d 挖立柱建物跡〕(図版184~188)

〔位置〕N-13・W-96 [確認面] 地山およびSK314・378

土壤堆積土上面

〔重複〕SI370・372・375・388住居跡、SK314・362・363・371・378土壤などと重複し、SI370・372・375、SK371より古く、SK314・362・363・378より新しい。SI388との新旧関係は不明である。また、本建物跡はほぼ同位置で、3度建て替えられており、古い方からSB450 a ~ dとする。

〔構造〕SB450 a・bが東西1間、南北3間、SB450 c・dが東西1間、南北4間の南北棟である。

〔SB450 a〕

〔規模〕桁行は西桁が約9.7mで柱間寸法は北から約3.0m・約3.5m・約3.2m、梁行は北梁で約4.2mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は8個検出し、この内、4個で柱の抜き取り痕跡が認められた。平面形は主に直径約40~60cm、深さ42~66cmのやや不整円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色シルト、抜き取り穴は地山・炭化物粒を含む、しまりのない暗褐色シルトである。

〔方向〕東桁でみると、北で西に約1° 傾している。

〔出土遺物〕北東隅の柱抜き取り穴から石核が出土している(図版188)。

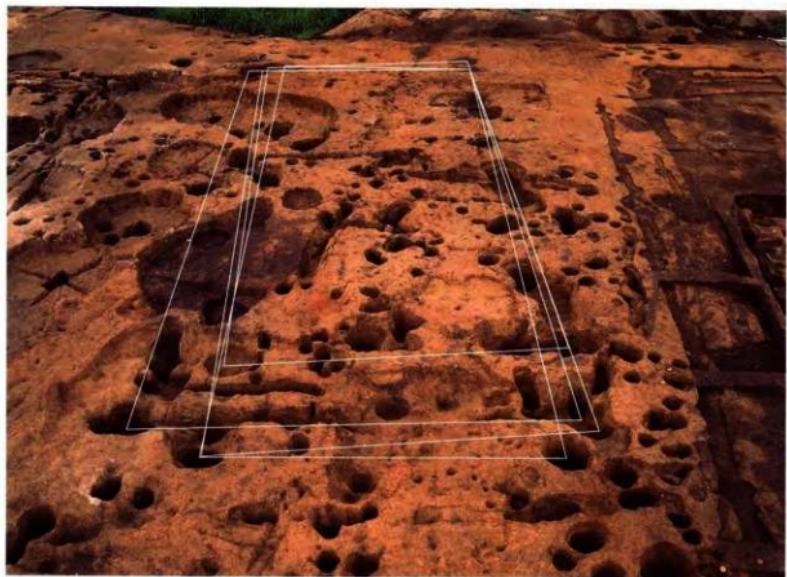
〔SB450 b〕

〔規模〕桁行は東桁が約10.8mで柱間寸法は北から約4.2m・約4.1m・約2.5(推定)m、梁行は南梁で約4.2(推定)mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は4個検出し、この内、1個で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は主に直径45cm前後、深さ51~83cmのやや不整円形である。柱痕跡は直径約23cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山や炭化物粒を少量含む暗褐色シルト、柱痕跡が炭化物粒を微量含む、しまりのない暗褐色シルトである。



図版184 SB450掘立柱建物跡(1)



SB450掘立柱建物跡(南から)



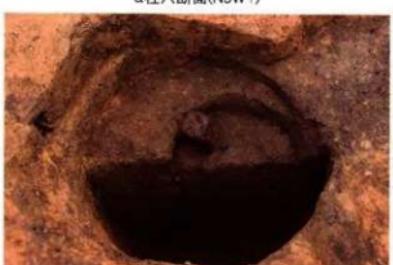
a柱穴断面(N1E1)



a柱穴断面(N3W1)

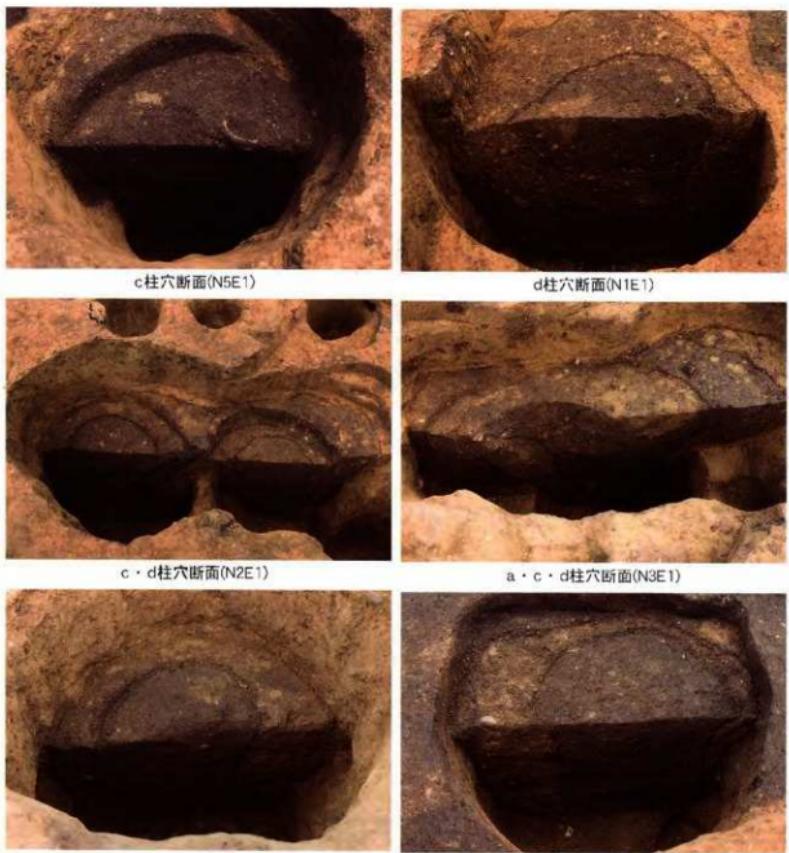


d柱穴断面(N3E1)

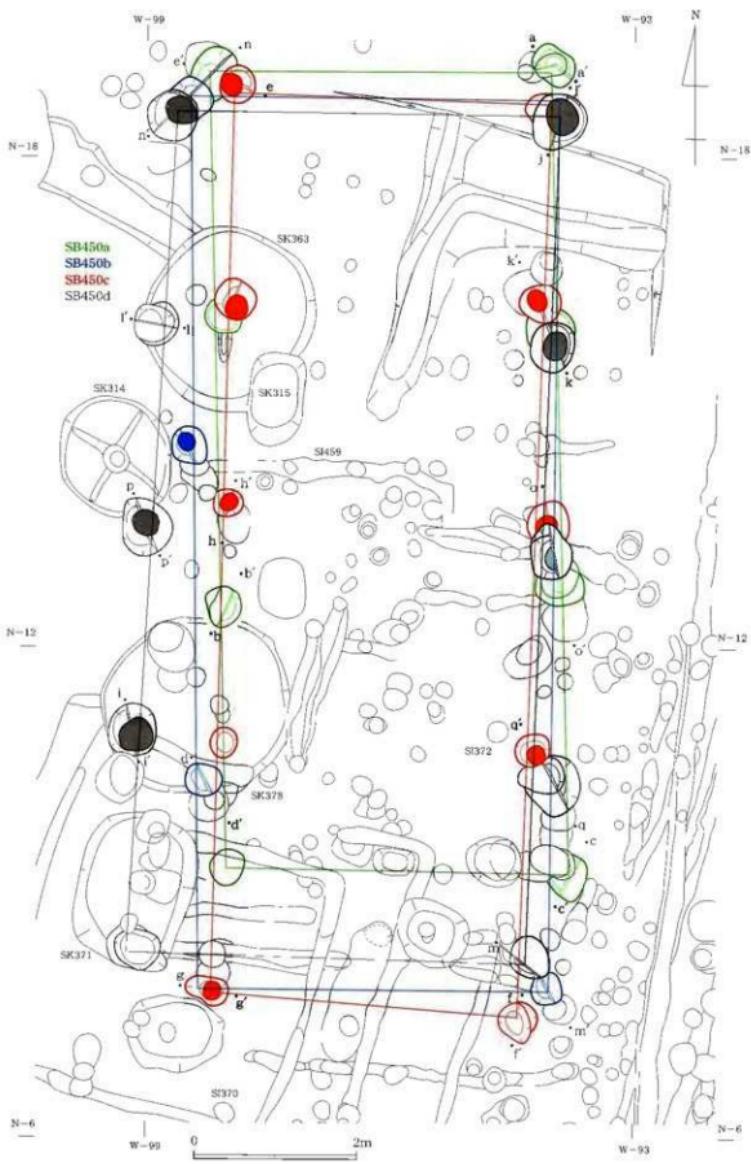


c柱穴断面(N4E1)

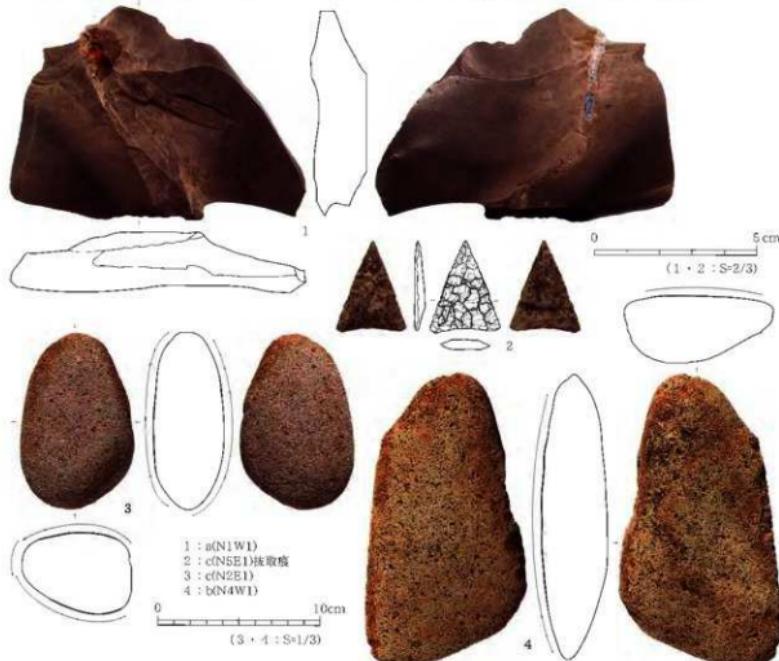
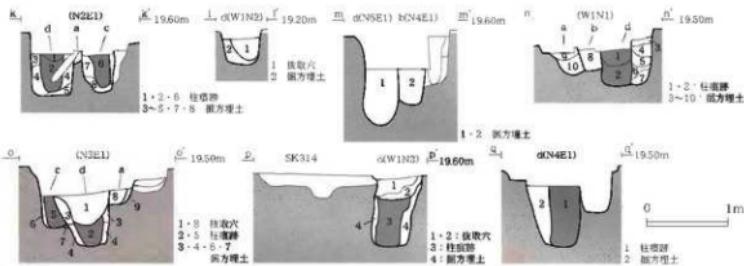
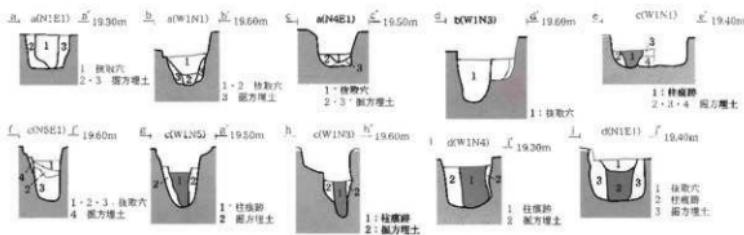
図版 185 SB450掘立柱建物跡(2)



図版186 SB450振立柱建物跡(3)および出土遺物—縄文土器—



図版187 SB450柱立柱建物跡(4)



図版188 SB450掘立柱建物跡(5)および出土遺物・石器-

〔方向〕西桁でみると、北で西に約1° 傾している。

〔出土遺物〕西桁の北から4番目の柱穴から、磨・敲石が出土している。(図版188)

《SB450 c》

〔規模〕桁行は西桁で11.1mである。柱間寸法は北から2.7m・2.4m・約2.9m・約3.1m、梁行は北梁で約3.8mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は10個検出し、この内、7個で柱痕跡、1個で柱の抜き取り痕跡が認められた。

柱穴の平面形は主に直径50cm前後のやや不整な円形や、長径約55cm、短径約30cmの不整橢円形で、深さは39~84cmである。柱痕跡は直径約16~28cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多く含む暗褐色シルト、柱痕跡が地山・炭化物粒を微量含むしまりのない、暗褐色シルトである。

〔方向〕東桁でみると、北で東に約1° 傾している。

〔出土遺物〕東桁の北から2番目の柱穴から磨・敲石、5番目の柱穴から石器(図版188)、袖珍土器(図版439-2)が出土している。

《SB450 d》

〔規模〕桁行は西桁で約10.3mである。柱間寸法は北から約2.6m・約2.5m・2.6m・約2.6m、梁行は北梁で4.7mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は10個検出し、この内、6個で柱痕跡、3個で柱の抜き取り痕跡が認められた。

平面形は直径45~72cm、の円形や不整円形で、深さは42~114cmである。柱痕跡は直径約30~40cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山や炭化物を含む褐・暗褐色シルト、柱痕跡が地山や炭化物を含む、しまりのない暗褐色シルトなどである。

〔方向〕西桁でみると、北で東に約3° 傾している。

〔出土遺物〕北東隅柱や東桁の北から3番目の柱抜き取り穴から、縄文土器深鉢の破片が出土している。(図版186)

【SB472掘立柱建物跡】(図版189)

〔位置〕N-18・W-115 [確認面] 地山

〔構造〕東西1間、南北3間の南北棟である。

〔重複〕SI474住居跡、SK317土壤などと重複し、SI474より古い。SK317との新旧関係は不明である。

〔規模〕桁行は西桁で6.4m、柱間寸法は北から2.1m・2.1m・2.2mである。梁行は北梁で1.8mである。

〔柱穴・柱痕跡〕柱穴は8個検出し、この内、7個で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は一辺25~45cmのやや不整な円形と、長径45cm前後、短径35cm前後の楕円形などで、深さは20~48cmである。柱痕跡は直径14~21cm前後の円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含む褐~暗褐色砂質シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

〔方向〕西桁でみると、北で西に約42° 傾している。

〔出土遺物〕 繩文土器片が極少量出土したのみである。

〔SB476掘立柱建物跡〕(図版190)

〔位置〕 N-0-S・W-105 〔確認面〕 地山

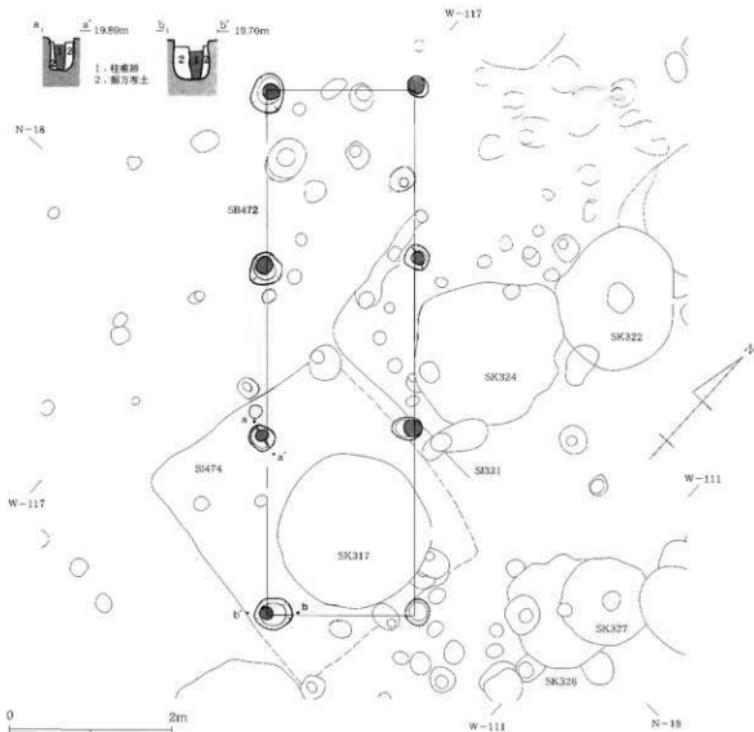
〔構造〕 東西1間、南北2間以上の南北棟で、南側は調査区外へ延びている。

〔重複〕 SI368住居跡、SK302・311・312土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。

〔規模〕 枠行は東桁で5.8m以上、柱間寸法は北から約2.6m・約3.2mである。梁行は北梁で2.7mである。

〔柱穴・柱痕跡〕 柱穴は5個検出し、この内、各々2個で柱痕跡、柱の抜き取り痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径50～70cmの不整な円形を呈し、深さは25～45cmである。柱痕跡は直径25cm前後の円形を呈する。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを含む暗褐色砂質シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

〔方向〕 西桁でみると、北で西に約42° 傾している。

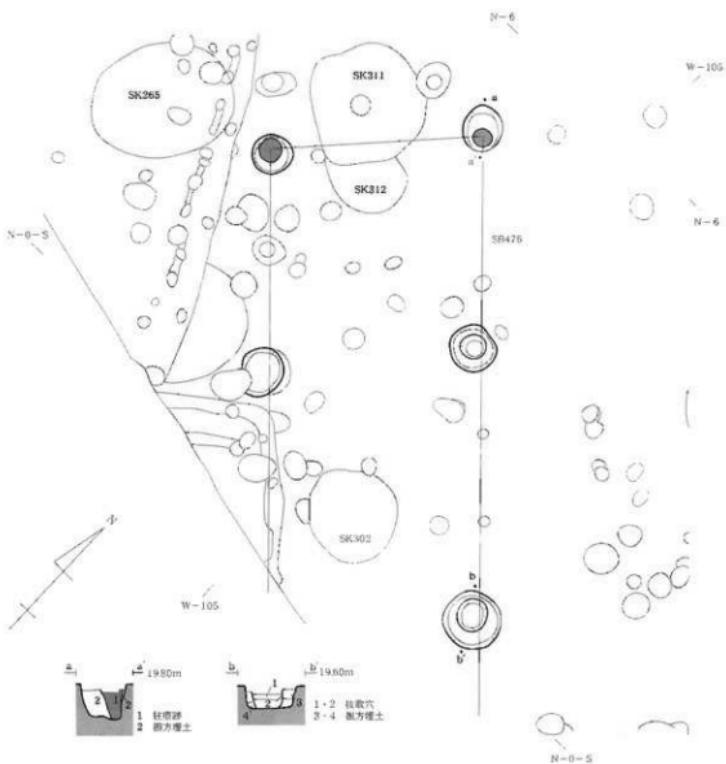


図版189 SB476掘立柱建物跡



柱穴断面(N1E 1)

柱穴断面(N3E 1)



図版190 SB476掘立柱建物跡

4 土壌

【SK 6 土壌】(図版191)

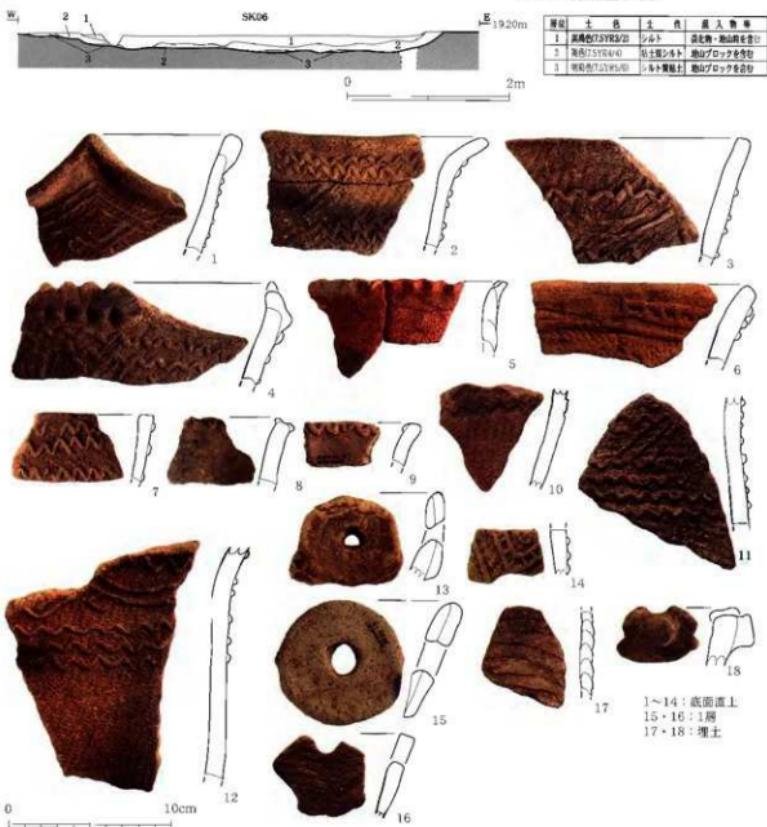
【位置】 S-4・W-21 [確認面] 地山

【重複】 SI12・113・129住居跡と重複し、これらより新しい。

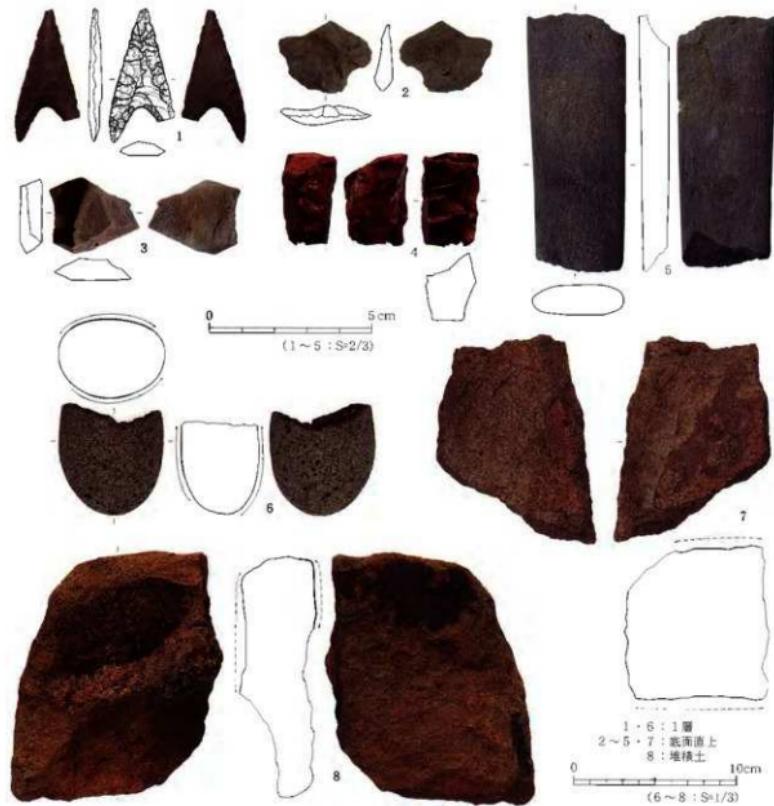
【規模・平面形・断面形】 上面が長径約4.8m、底面が長径約4.3m、深さ約30cmの楕円形と考えられる土壌である。西半を擾乱により壊されているため短径の詳細は不明である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がって



SK 6 土壌(北西から)



図版191 SK 6 土壌および出土遺物—縄文土器—



図版192 SK 6 土壌出土遺物—石器

いる。

【堆積土】地山ブロックを含む黒褐～褐色シルト等で埋め戻されている。

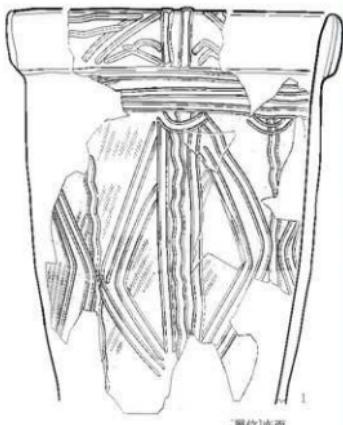
【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版191)や石鏃(図版192-1), 不定形石器(2・3), 石核(4), 磨石(6), 石皿(7・8), 石剣(5)が出土している他, 堆積土や底面等から土偶が3点出土している(図版428-3・432-6・434-4)。

【SK14土壤】(図版194)

【位置】N-6・W-19【確認面】地山

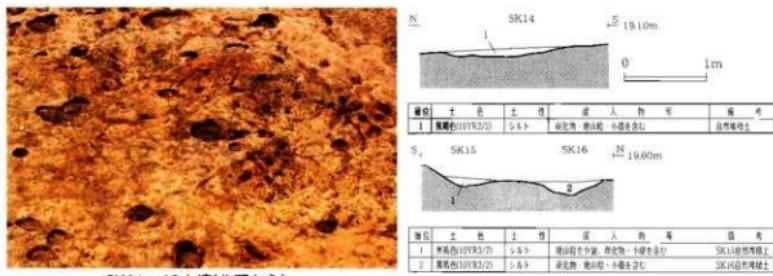
【重複】SI 5住居跡と重複し, これより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面が長径約2.1m, 短径1.2m, 底面が長径約1.5m, 短径0.8m, 深さ約



2～4 底面面上

図版193 SK14土壤および出土遺物



SK14～16 土壤(北西から)

図版194 SK14～16 土壤

17cmの不整梢円形の土壙である。断面形は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】炭化物、地山粒、小礫を含む黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】底面から縄文土器深鉢が出土している(図版193-1)他、底面直上からは縄文土器深鉢の破片(図版193-2～4)や、石鏸(図版195-1)、楔形石器(2)、石錐(3)が出土している。

【SK15 土壙】(図版194)

【位置】N-7・W-20 [確認面] 地山

【重複】SI 5 住居跡と重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面が長径約1.4m、短径0.8m、底面が長径約0.7m、短径0.5m、深さ約25cmの不整梢円形の土壙である。断面形は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】炭化物、地山粒、小礫を少量含む黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土や確認面から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK16 土壙】(図版194)

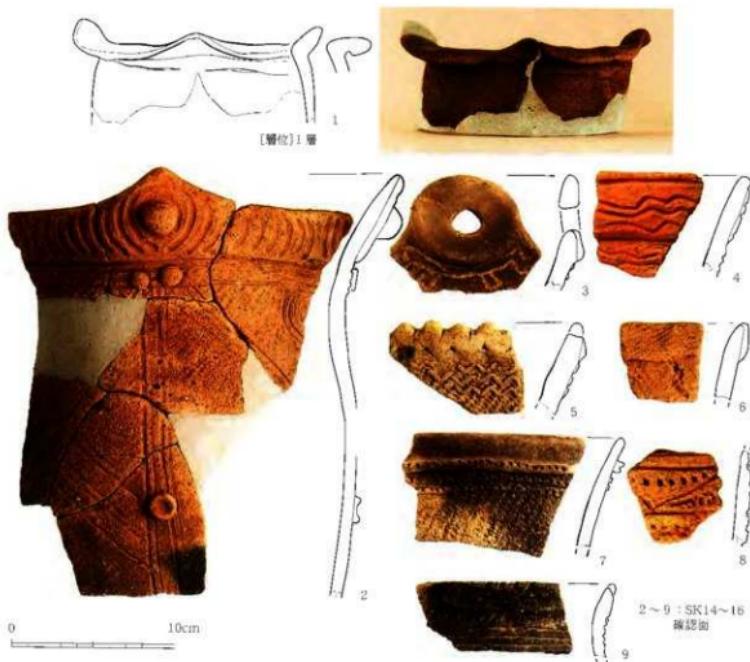
【位置】N-7・W-20 [確認面] 地山



図版195 SK14出土遺物－石器－



図版196 SK16出土遺物－石器－



図版197 SK16土壤出土遺物－縄文土器－

【重複】 SI 5 住居跡と重複するが新旧関係は不明である。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.1m、底面径約0.6m、深さ約18cmの不整円形の土壌である。断面形は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】 炭化物、地山粒、小礫を含む黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版197-1)や磨石(図版196-1)が出土している。

【SK17土壤】(図版11)

【位置】 S-6・W-31 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.0m、底面径約0.7m、深さ約60cmの円形の土壌である。断面形は「U」字状を呈し、壁はやや急に立ち上がっている。

【堆積土】 地山ブロックを多く含む褐色の粘質シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】 出土していない。

【SK19土壤】(図版11)

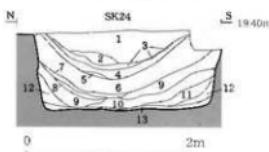
【位置】 S-4・W-30 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められない。

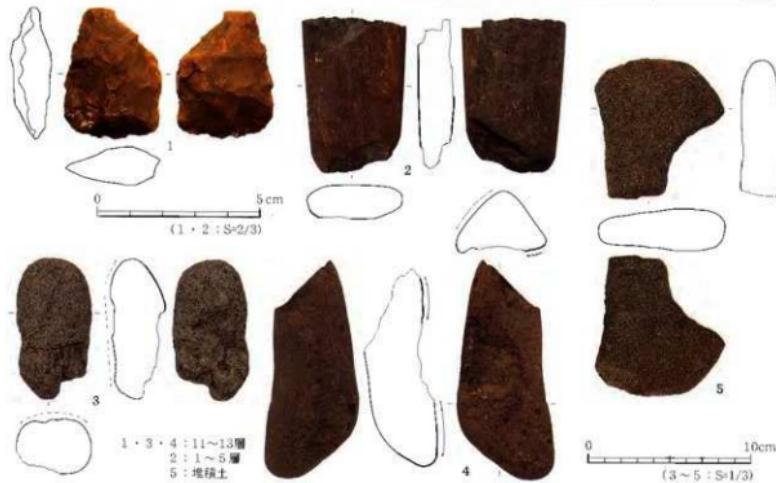


SK24 土壤(西から)

SK25 土壤(北から)



層位	土色	土性	盛入材等	備考
1 棕褐色(7.5YR2/6)	粘土シルト	泥炭質・地山のモザイク、粘土ブロックを盛り立てる	自然堆土	
2 棕褐色(7.5YR2/6)	粘土シルト	地山ブロックを多量含む	自然堆土	
3 棕褐色(5YR2/2)	シルト質粘土	地山ブロックを多量含む	自然堆土	
4 棕褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	子透に泥炭地帯土層、地山石を含む	自然堆土	
5 棕褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土		自然堆土	
6 C(?) 黄褐色(10YR4/4)	シルト質粘土	地山石を多量含む	人為的堆土	
7 黄褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	地山石・粘土ブロック・二段・地盤板柱とブロック含む	人為的堆土	
8 黄褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	地山石・粘土ブロックを多量含む	人為的堆土	
9 黄褐色(10YR4/4)	シルト質粘土	地山ブロックを多量含む	人為的堆土	
10 黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土	地山石・地盤板柱を多量含む	人為的堆土	
11 黄褐色(5YR2/2)	シルト質粘土	地山石・地盤板柱を少量含む	自然堆土	
12 黄褐色(7.5YR4/4)	シルト質粘土	地山ブロックを多量含む	自然堆土	
13 黄褐色(7.5YR4/4)	粘土		自然堆土	



図版198 SK24・25土壤およびSK24出土遺物—石器—

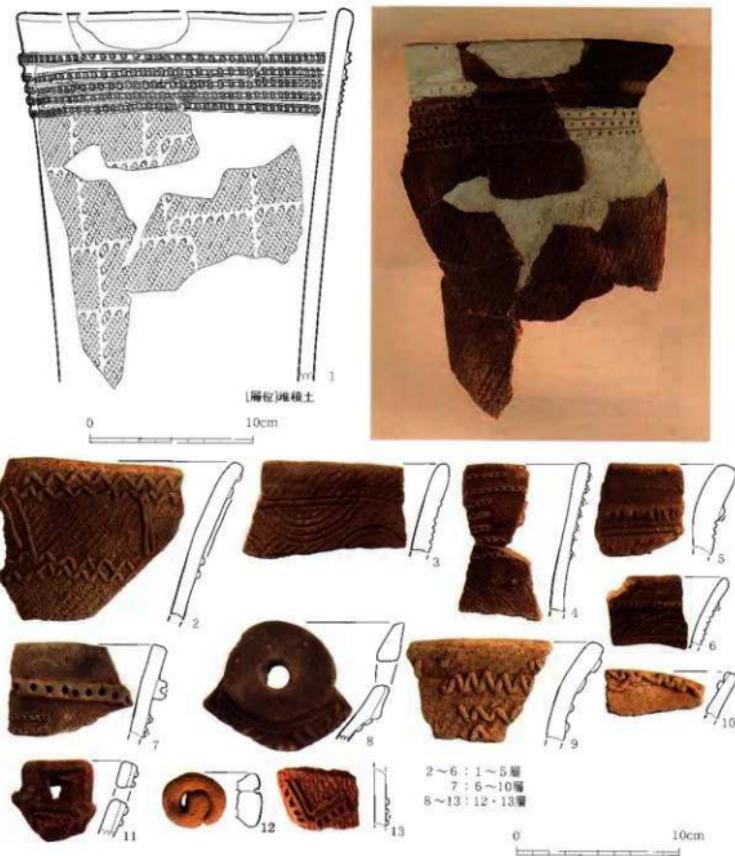
〔規模・平面形・断面形〕上面径約0.6m、底面径約0.5m、深さ約7cmの不整円形の土壤である。

断面形は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕焼土・地山粒を含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

〔出土遺物〕底面や堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

〔SK24土壤〕(図版198)



図版 199 SK24 土壙出土遺物－縄文土器－

【位置】 S-6・W-36 [確認面] 地山

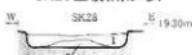
【重複】 SI23 住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面が長径約2.7m、短径約2.2m、底面が長径約2.6m、短径約2.1m、深さ約1.0mの楕円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。壁は急で、一部オーバーハング気味に立ち上がっている。

【堆積土】 底面直上に褐・暗赤褐色の粘土やシルト質粘土が薄く堆積した後、地山ブロックを多く含むにぶい黄褐～褐色のシルト質粘土で埋め戻されおり、その上面の空みには、焼土や炭を薄い層状に含む暗～黒褐色のシルト質粘土や、地山や炭化物を粒状に多く含む暗褐色粘質シルトが堆積している。



SK26土壤(南から)



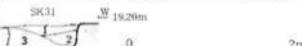
番号	土色	土性	底入	地名	層名
1	黒褐色(1783-3)	シルト	無地性・小量砂質物	自然地盤	
2	暗褐色(1783-3)	シルト	無地性・無砂粒・少量砂質物	自然地盤	



番号	土色	土性	底入	地名	層名
1	黒褐色(1783-3)	シルト	無地性・無砂粒・少量砂質物	自然地盤	



番号	土色	土性	底入	地名	層名
1	黒褐色(1783-3)	シルト	無地性・無砂粒・少量砂質物	自然地盤	



番号	土色	土性	底入	地名	層名
1	暗褐色(1783-3)	シルト	無地性・無砂粒・少量砂質物	自然地盤	
2	暗褐色(1783-3)	粘土	無地性・無砂粒	人為地盤	
3	暗褐色(1783-3)	シルト	無地性・無砂粒	人為地盤	

図版200 SK26・27・28・31・32土壤

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢(図版199)や石匙(図版198-1)、砥石(3)、磨石(4)、石劍(2)、土偶(図版430-8)、イチジク形土製品(図版436-4)が出土している。

【SK25土壤】(図版198)

【位置】S-8・W-38 [確認面] 地山

【重複】SI23住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約2.3m、底面径約2.1m、深さ約88cmの円形と考えられる土壤で、南端は調査区外である。地山3c層まで掘り込まれており、底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には径約30cm、深さ約40cmの円形のピットが認められる。

【堆積土】地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK26土壤】(図版200)

【位置】N-2・W-33 [確認面] 地山

【重複】SI21住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

【規模・平面形・断面形】上面が長径約1.2m、短径0.9m、底面が長径約0.8m、短径0.6m、深さ約20cmの不整橢円形の土壤である。底面にはやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】地山粒、炭化物、小礫を少量含む暗・黒褐色シルトが堆積している。

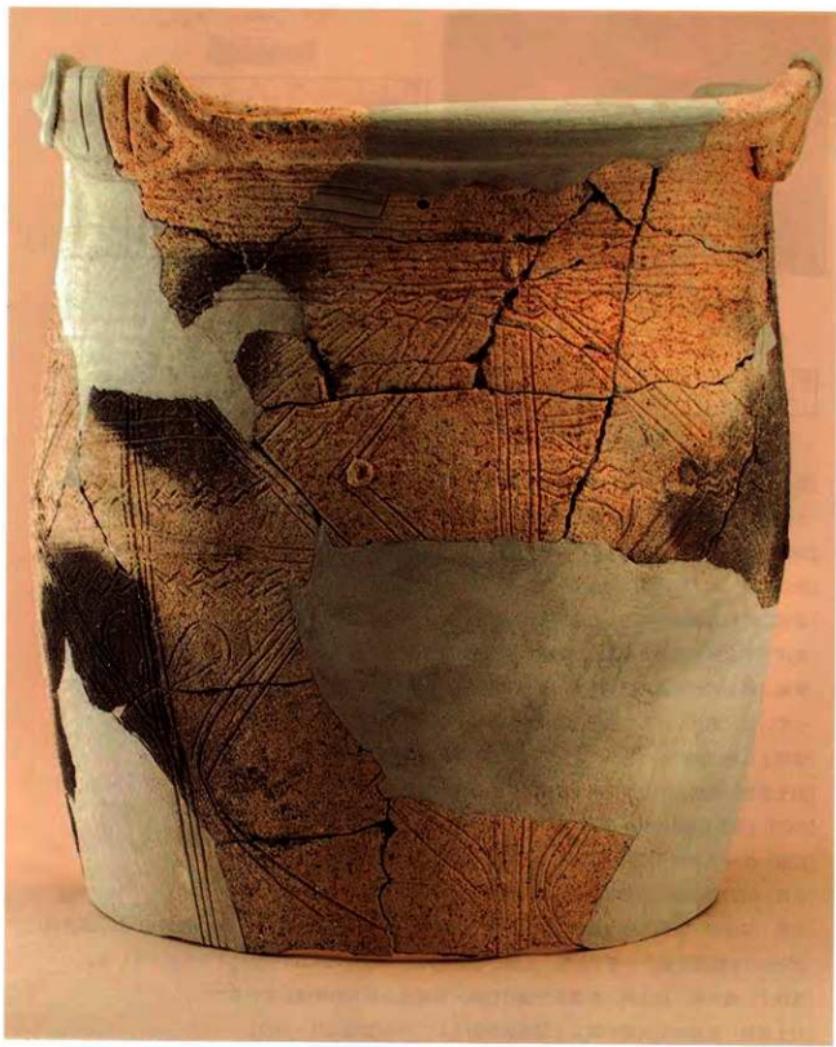
【出土遺物】底面から大型の縄文土器深鉢が出土している(図版201・202)。

【SK27土壤】(図版11)

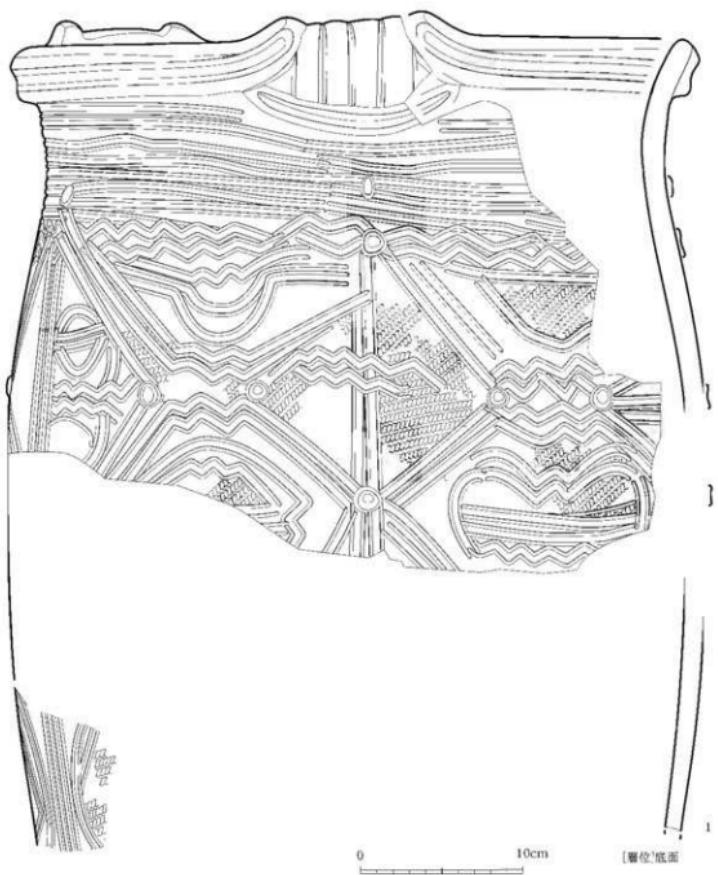
【位置】S-3・W-41 [確認面] 地山

【重複】Pit2308・2310と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.2m、底面径約1.0m、深さ約48cmの円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。



图版201 SK26土壤出土遗物(1)



図版202 SK26土壤出土遺物(2)

【堆積土】 地山ブロックを多く含む褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器片が数片出土したのみである。

【SK28土壤】(図版200)

【位置】 S - 4 • W - 45 [確認面] 地山

【重複】 Pit2306と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.3m、底面径約1.2m、深さ約27cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【底面】 ローム層

【堆積土】 地山ブロックを多く含む黒褐・褐色シルトで埋め戻されている。

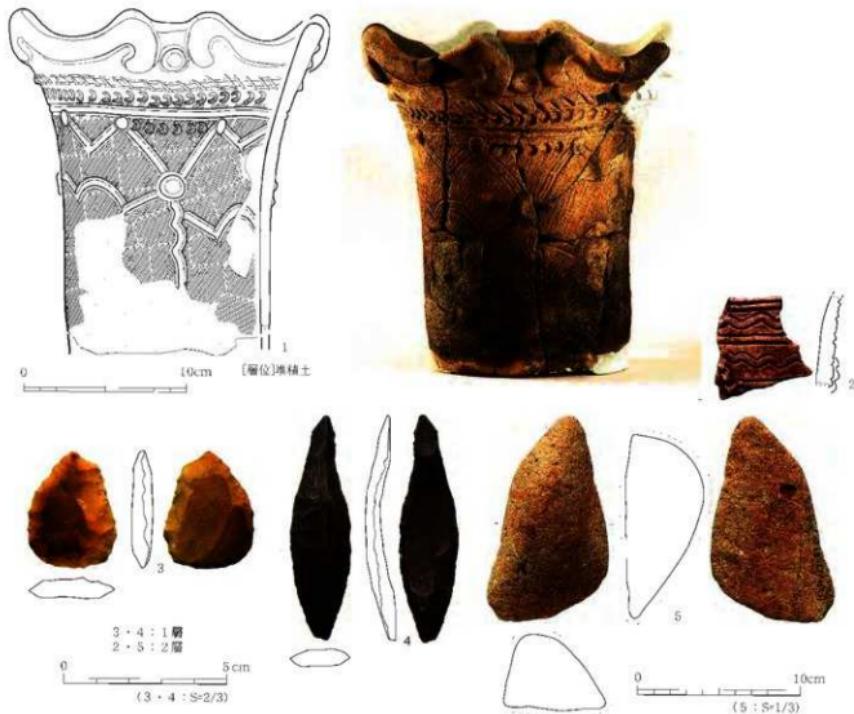
【出土遺物】 出土していない。

【SK30土壤】(図版11)

【位置】 N - 12 • W - 45 [確認面] 地山およびSI45堆積土上面

【重複】 SI45住居跡と重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】 上面が長径約2.9m、短径約1.3m、底面が長径約2.5m、短径約1.1m、深



図版203 SK30土壤出土遺物－縄文土器・石器－

さ5~30cmの不整楕円形の土壙である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】地山や炭化物粒を含む暗褐色シルトが自然堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢(図版203-1・2)や尖頭器(3)、石匙(4)、砥石(5)、土製品(図版438-15)が出土している。

【SK31土壙】(図版200)

【位置】N-13・W-51【確認面】地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】上面径約0.9m、底面径約0.7m、深さ約34cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山ブロックを多く含む暗褐・黄褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

【SK32土壙】(図版204)

【位置】N-12・W-49【確認面】地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】上・底面ともに径約1.6m、深さ約47cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。中央部には直径約20cm、深さ約27cmの円形のピットがあり、それを中心に放射状に延びる長さ25~50cm、上幅4~10cm、下幅2~5cm、深さ2~8cmの溝状の掘り込みが6条認められた。壁は急に立ち上がっており、東半部はオーバーハングしている。

【堆積土】地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで埋め戻されており、その上面の産みには炭や焼土を粒状に多く含む暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK33土壙】(図版204)

【位置】N-15・W-49【確認面】地山

【重複】SD10溝跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.4m、底面径約1.2m、深さ約37cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には直径約25cm、深さ約28cmの円形のピットが認められる。

【堆積土】地山ブロックや黒褐色シルトブロック、炭化物等を含む暗褐色シルトやにぶい黄褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK34土壙】(図版204)

【位置】N-18・W-48【確認面】地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】上・底面ともに径約2.1m、深さ約97cmの円形の土壙である。地山3c層

N SK32 S 10.25m



層位	土色	土性	組入物	備考
1. 塗刷色10YR2/3	シルト	炭化物を多量含む	自然堆積土	
2. 塗刷色10YR2/3	シルト	地山ブロック・瓦シレム・シートロックを含む	人為堆積土	
3. 塗刷色10YR2/4	シルト	地山ブロック・瓦シレム・シートロックを含む	人為堆積土	
4. 塗刷色10YR2/4	シルト	地山ブロックを含む	人為堆積土	
5. 塗刷色10YR2/4	シルト	地山ブロックを多量含む	人為堆積土	
6. 塗刷色10YR2/3	シルト	地山ブロックを多量含む	人為堆積土	
7. 塗刷色10YR2/3	シルト	地山物を多量含む	人為堆積土	
8. 塗刷色10YR2/4	シルト	地山物を少量含む	人為堆積土	
9. 塗刷色10YR2/4	シルト	地山物を多量含む	人為堆積土	



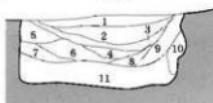
SK32土壤(西から)

W SK33 E 10.10m



層位	土色	土性	組入物	備考
1. 塗刷色10YR2/4	シルト	地山物・炭化物を少量含む	自然堆積土	
2. 塗刷色10YR2/4	シルト	炭化物を少量含む	自然堆積土	
3. こげ色10YR2/4	シルト	地山ブロックを多量含む	自然堆積土	

N SK34 S 19.00m



層位	土色	土性	組入物	備考
1. 塗刷色10YR2/3	シルト	地土灰・炭化物を含む	自然堆積土	
2. 塗刷色10YR2/3	シルト	炭化物を少量含む	自然堆積土	
3. 塗刷色10YR2/3	シルト	炭化物を多量含む	自然堆積土	
4. こげ色10YR2/4	シルト	地山物・炭化物を少量含む	自然堆積土	
5. 塗刷色10YR2/4	シルト	小礫を含む	自然堆積土	
6. 塗刷色10YR2/4	シルト	地山物・炭化物を少量含む	自然堆積土	
7. 塗刷色10YR2/4	シルト	地山物を多量含む	自然堆積土	
8. 塗刷色10YR2/4	シルト	地山物を少量含む	自然堆積土	
9. 塗刷色10YR2/4	シルト	地山物を多量含む	自然堆積土	
10. 塗刷色10YR2/4	シルト	炭化物を多量含む	自然堆積土	
11. 塗刷色10YR2/4	シルト	地山物を多量含む	自然堆積土	



SK32土壤Pt拡大(東から)



SK33土壤(南から)

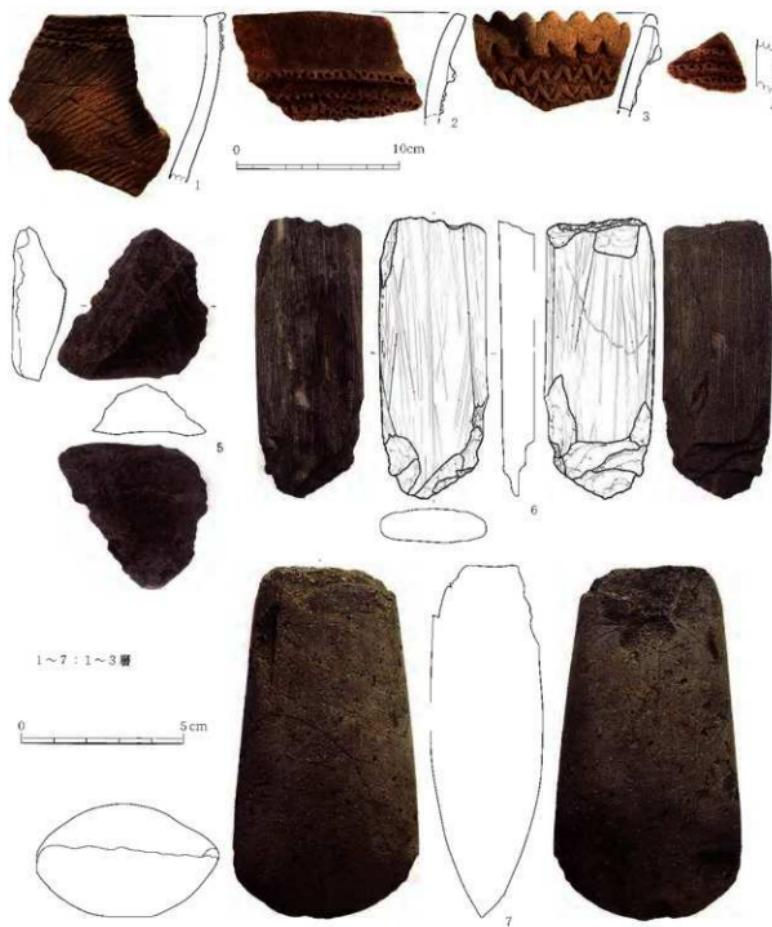


SK34土壤(北から)



SK34土壤断面(西から)

図版204 SK32～34土壤



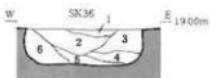
図版205 SK34土壤出土遺物—縄文土器・石器—

まで掘り込まれており、底面はほぼ平坦で、壁は南側の一部を除きオーバーハング気味に立ち上がっている。

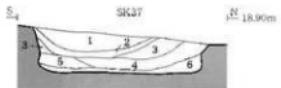
【堆積土】壁の崩落土とともに、地山粒や炭化物等を含む暗・黒褐色シルトやにぶい黄褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器(図版205-1～4)や不定形石器(5)、磨製石斧(7)、鏡状石製品(6)が出土している。

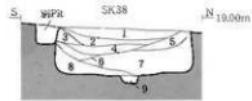
【SK36土壤】(図版206)



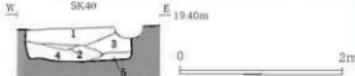
層位	土色	土性	侵入物等	層名
1	黒褐色(0.17m)/2	シルト	瓦礫塊・骨・瓦片多量含む	自然地盤
2	暗褐色(0.17m)/3	シルト	地山ブロックを多量含む	人為的堆土
3	暗褐色(0.17m)/3	シルト	地山ブロック・瓦片を多量含む	人為的堆土
4	灰褐色(0.17m)/4	シルト	地山ブロックを多量含む	人為的堆土
5	深褐色(0.17m)/2	シルト	地山ブロックを多量含む、瓦片を少量含む	人為的堆土
6	暗褐色(0.17m)/2	シルト	地山ブロックを多量含む	人為的堆土



層位	土色	土性	侵入物等	層名
1	黒褐色(0.17m)/2	シルト		自然地盤
2	暗褐色(0.17m)/2	シルト	瓦片ブロックを多量含む	人為的堆土
3	暗褐色(0.17m)/2	シルト	瓦片を少量含む	自然地盤
4	暗褐色(0.17m)/2	シルト	瓦片ブロックを多量含む	人為的堆土
5	暗褐色(0.17m)/2	シルト	瓦片を少量含む	人為的堆土
6	暗褐色(0.17m)/2	シルト		自然地盤



層位	土色	土性	侵入物等	層名
1	黒褐色(0.17m)/2	シルト	地山塊・骨を多量含む	自然地盤
2	暗褐色(0.17m)/2	シルト	骨を多量含む	自然地盤
3	灰褐色(0.17m)/4	シルト	地山塊を多量含む	自然地盤
4	暗褐色(0.17m)/2	シルト	地山塊・炭化物を多量含む	自然地盤
5	暗褐色(0.17m)/4	シルト	地山塊・炭化物を多量含む	自然地盤
6	暗褐色(0.17m)/4	シルト	地山塊を少量含む	人為的堆土
7	暗褐色(0.17m)/4	粘土	地山塊シート・ブロックを多量含む	人為的堆土
8	灰褐色(0.17m)/4	シルト	骨を多量含む	人為的堆土
9	灰褐色(0.17m)/4	シルト	骨を多量含む	人為的堆土



層位	土色	土性	侵入物等	層名
1	暗褐色(0.17m)/4	シルト	地山塊・瓦片を多量含む	自然地盤
2	暗褐色(0.17m)/2	シルト		自然地盤
3	暗褐色(0.17m)/4	シルト	地山ブロックを多量含む	自然地盤
4	暗褐色(0.17m)/4	シルト	地山ブロックを多量含む	自然地盤
5	暗褐色(0.17m)/4	シルト	地山ブロックを多量含む	自然地盤



SK36 土壤(南から)



SK37 土壤(東から)

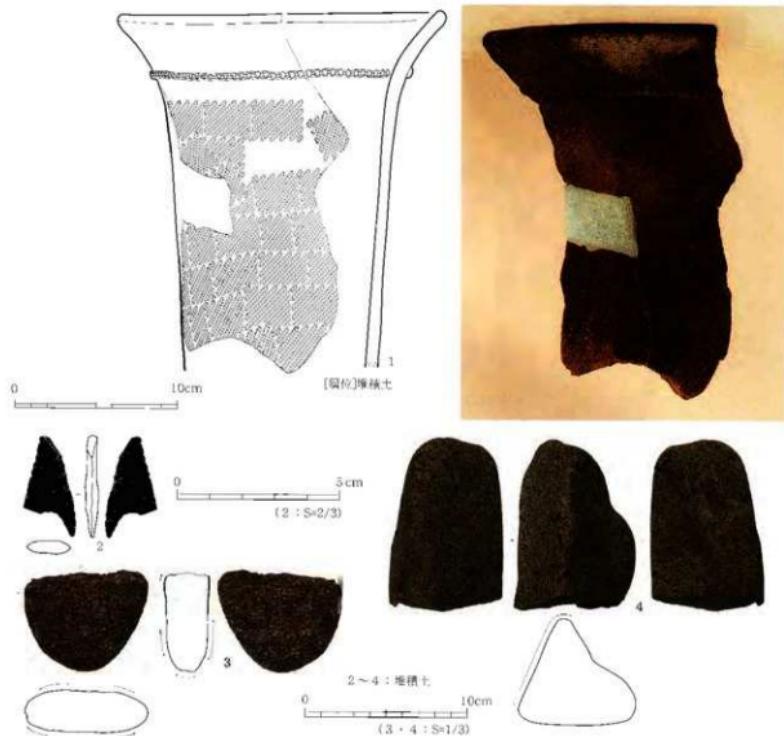


SK39 土壤(南から)



SK40 土壤断面(南から)

図版206 SK36～40土壤



図版207 SK36土壤出土遺物－縄文土器・石器－

[位置] N-16・W-52 [確認面] 地山

[重複] SD10溝跡と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.5m、底面径約1.3m、深さ約45cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

[堆積土] 地山ブロックを多く含むにぶい褐・暗褐色等のシルトで埋め戻されており、その上面の産みには炭や焼土を粒状に多く含む黒褐色シルトが堆積している。

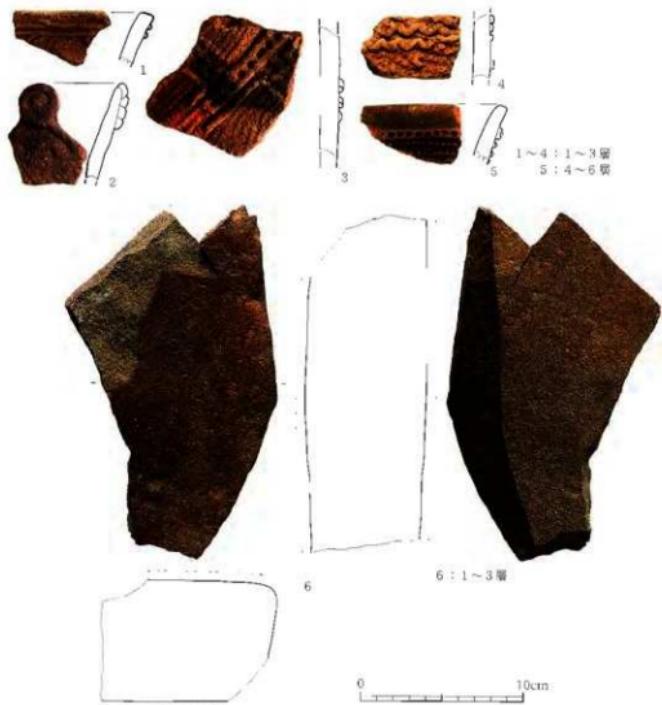
[出土遺物] 堆積土から縄文土器深鉢(図版207-1)や石器(2)、磨石(2・3)が出土している。

[SK37土壤] (図版206)

[位置] N-18・W-54 [確認面] 地山

[重複] SD10溝跡と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 直径2.1m前後、深さ約59cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。



図版208 SK37土壤出土遺物－縄文土器・石器－

【堆積土】底面直上に暗褐色シルトが薄く堆積した後、地山ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されており、その上面の窪みには焼土を含む黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版208-1～5)や石皿(6)が出土している。

【SK38土壤】(図版206)

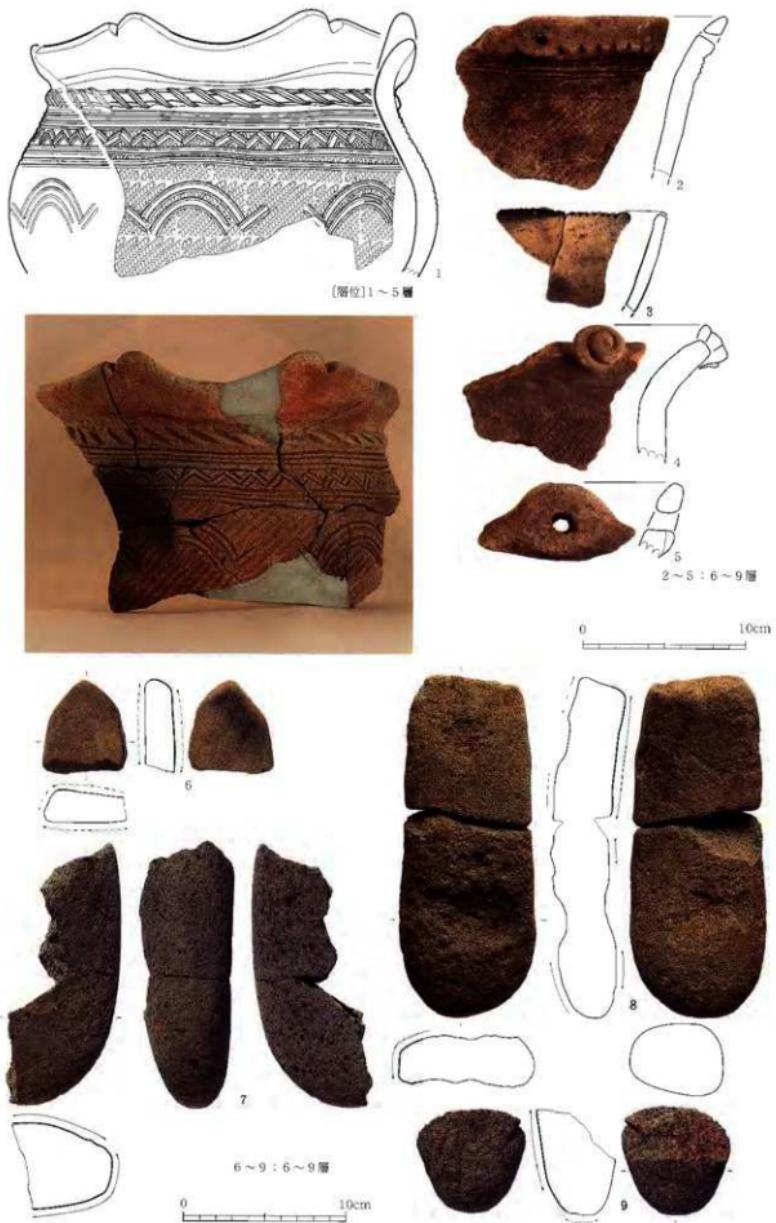
【位置】N-17・W-55 [確認面] 地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】上・底面ともに径約1.7m、深さ約62cmの円形の土壇である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急に立ち上がっており、北西側の一部はオーバーハンギングしている。また、底面中央部には直径約25cm、深さ約8cmの円形のピットが認められる。

【堆積土】地山ブロックを多く含むにぶい黄褐～褐色シルトで埋め戻されており、その上面の窪みには炭や焼土を粒状に含む暗・黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器(図版209-1～5)や砥石(6)、磨石(7)、磨・凹石(8)、磨・敲石(9)が出土している。



図版209 SK38土壤出土遺物－繩文土器・石器－

【SK40土壙】(図版206)

【位置】 N-10・W-49 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.4m、底面径約1.1m、深さ約45cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】 地山粒や炭化物等を含む暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 出土していない。

【SK41土壙】(図版212)

【位置】 N-16・W-54 [確認面] 地山

【重複】 SD10溝跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.3m、底面径約1.1m、深さ約51cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】 底面直上に黒褐色シルトが薄く堆積した後、焼土ブロックや炭化物を多く含む暗褐色シルトで埋め戻されており、その上面の窪みには炭や地山を粒状に少量含む暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK42土壙】(図版212)

【位置】 N-15・W-56 [確認面] 地山

【重複】 SD10溝跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.3m、底面径約1.2m、深さ約73cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁はオーバーハング気味に立ち上がっている。

【堆積土】 焼土粒や炭化物、地山粒を含む暗・灰褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から石皿(図版210-1)や地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK43土壙】(図版212)

【位置】 N-15・W-57 [確認面] 地山

【重複】 SD10溝跡と重複し、これより古い。

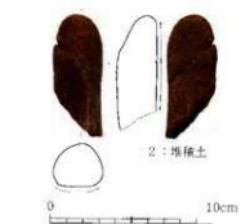
【規模・平面形・断面形】 上面径約2.0m、底面径約1.9m、深

さ約86cmで北東側に膨らむ、やや不整円形の土壙である。

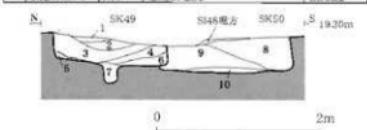
地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁はオーバーハング気味に立ち上がっている。また、底面中央部には直徑約35cm、深さ約35cmの円形のピットが認められる。



図版210 SK40土壙出土遺物－石器－



図版211 SK43土壙出土遺物－石器－



SK49・50土壤(南東から)



図版212 SK41～43・49・50土壤

【堆積土】 底面直上に暗褐色シルトが薄く堆積した後、地山や灰黃褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】 堆積土から磨石(図版211-1)や地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK49土壤-貯蔵穴】(図版212)

【位置】 S-2・W-50 [確認面] 地山

【重複】 SI48住居跡、SK50土壤と重複し、SK50より新しく、SI48より古い。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.4m、底面径約1.3m、深さ約40cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には直径約20cm、深さ約22cmの円形のピットが認められる。それを中心に放射状に延びる長さ10~35cm、上幅約4cm、下幅約2cm、深さ2~3cmの溝状の掘り込みが4条認められた。

【堆積七】 地山の小ブロックを含む暗・黒褐色シルト等で埋め戻されている。

【出土遺物】 地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK50土壤】(図版212)

【位置】 S-3・W-50 [確認面] 地山

【重複】 SI48住居跡、SK49土壤と重複し、これらより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.7m、底面径約1.8m、深さ約45cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急に立ち上がっており、南東部はオーバーハンギングしている。

【堆積土】 底面直上に黒褐色シルトが薄く堆積し、地山ブロックを多く含むにぶい褐・暗褐色粘質シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】 出土していない。

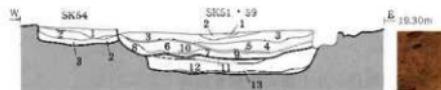
【SK51土壤】(図版214)

【位置】 N-0-S・W-46 [確認面] 地山

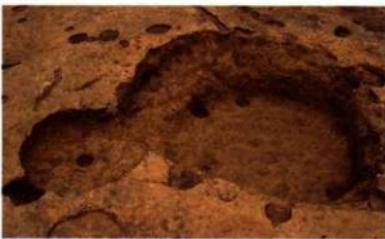
【重複】 SI45住居跡、SK54・59土壤と重複し、これらより新しい。



図版213 SK51土壤出土遺物-縄文土器・石器-



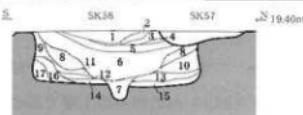
部位	土色	土性	盛入物	年季	備考
1 残堀DTR4:0	シルト	崩山ブロックを多量、廃文化・他土柱を少量含む	SK51人跡埋土		
2 破壊面DTR4:0	シルト質粘土	崩山地盤と合む	SK54人跡埋土		
3 崩壊面DTR3:0	シルト質粘土	崩山ブロックを含む	SK54人跡埋土		
4 崩壊面DTR3:0	シルト質粘土	崩山ブロックを多量、廃文化を含む	SK51自然埋土		
5 崩壊面DTR3:0	シルト質粘土	崩山ブロックを多量、廃文化を含む	SK51自然埋土		
6 明礬面DTR3:0	粘土	廃文化を多量含む	SK51自然埋土		
7 崩壊面DTR3:0	粘土	崩山ブロックを多量含む	SK51人跡埋土		
8 崩壊面DTR4:0	シルト質粘土	崩山ブロックを多量含む	SK51人跡埋土		
9				SK51自然埋土	
10 崩壊面DTR3:0	シルト質粘土	崩山ブロックを多量含む	SK51人跡埋土		
11 崩壊面DTR5:0	シルト質粘土	崩山地盤	SK51人跡埋土		
12 明礬面DTR5:0	粘土	崩壊地を含む	SK50人跡埋土		
13 崩壊面DTR4:0	シルト質粘土	崩山を含む	SK50自然埋土		



SK51・54・59土壤(南から)



部位	土色	土性	盛入物	年季	備考
1 明礬面DTR4:0	シルト	こぼれ岩褐色土柱、崩山ブロック・ト壁を含む	人跡埋土		



部位	土色	土性	盛入物	年季	備考
1 可溶面DTR3:0	シルト	崩山・白泥質・土柱を含む	自然埋土		
2 破壊面DTR3:0	シルト	崩山ブロックを多量、崩壊地を少量含む	自然埋土		
3 破壊面DTR3:0	シルト	崩山・白泥質・土柱を含む	自然埋土		
4 破壊面DTR3:0	シルト	崩山ブロックを多量、崩壊地を少量含む	自然埋土		
5 破壊面DTR3:0	シルト	上部に崩壊地を多量含む	自然埋土		
6 破壊面DTR3:0	シルト質粘土	崩山ブロックを多量含む	人跡埋土		
7 破壊面DTR3:0	シルト質粘土	崩山ブロックを少量化	人跡埋土		
8 こぼれ岩DTR3:0	崩壊シルト	崩山ブロックを多量含む	人跡埋土		
9 異形DTR4:0	崩壊シルト	崩山ブロックを多量含む	人跡埋土		
10 異形DTR4:0	シルト	崩山ブロックを含む	自然埋土		
11 黑褐色DTR4:0	シルト		自然埋土		
12 破壊面DTR3:0	シルト	邊山ブロックを多量含む	自然埋土		
13 異形DTR4:0	シルト	崩山ブロックを多量含む	自然埋土		
14 こぼれ岩DTR3:0	シルト	崩山ブロックを少量化	自然埋土		
15 異形DTR3:0	シルト	崩山ブロックを含む	自然埋土		
16 異形DTR3:0	シルト		崩壊土		



SK54土壤(南から)



SK56・57土壤(東から)



SK56土壤(東から)

図版214 SK51・54・56・57・59土壤

【規模・平面形・断面形】上面径約2.4m、底面径約2.1m、深さ約35cmの円形の土壙である。底面は平坦であり、壁はやや緩やかに立ち上がっている。

【底面】礫混じりのローム層とSK59上面に貼った明褐色シルト質の砂層を底面としている。

【堆積土】底面直上に炭化物が薄く堆積し、その後、自然堆積の暗褐色粘土層を間に挟みながら地山ブロックや炭化物を含むにぶい明褐色～暗褐色の粘土で埋め戻されている。また、その上面の窪みには焼土や炭化物、地山を粒状に多く含む自然堆積の暗褐色粘土層が認められる。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版213-1・2)や石匙(3)、不定形石器(4)、石核(5・6)等が出土している。

【SK52土壙】(図版214)

【位置】N-18・W-39【確認面】地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.3m、底面径約1.1m、深さ約47cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山ブロックを含む褐色のシルトで埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

【SK54土壙】(図版214)

【位置】N-0-S・W-48【確認面】地山

【重複】SI45住居跡、SK51・59土壙と重複し、SI51より古い。その他の新旧関係は不明である。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.1m、底面径約1.0m、深さ約24cmの円形の土壙である。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には直径約16cm、深さ約17cmの円形のピットがある。

【堆積土】地山ブロックを多く含む褐・暗褐色シルト質粘土で埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土や底面から縄文土器深鉢の破片(図版215)が出土している。

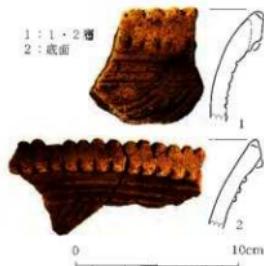
【SK56土壙】(図版214)

【位置】N-0-S・W-52【確認面】地山

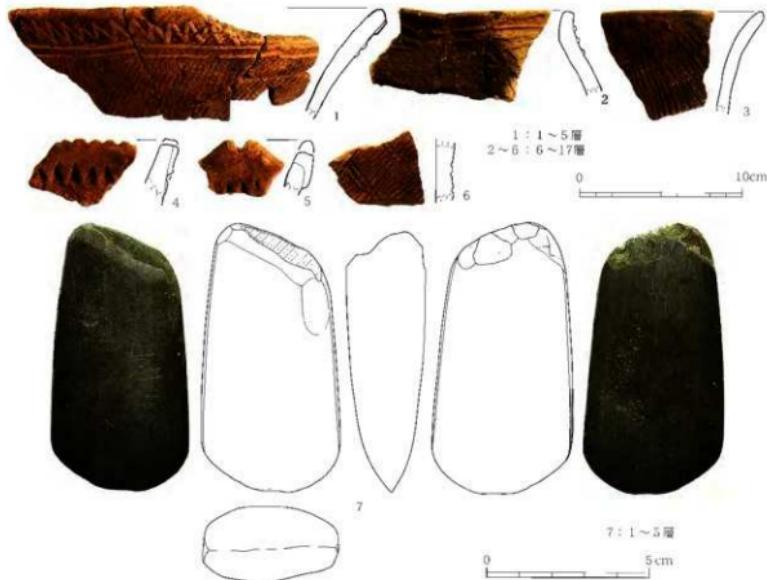
【重複】SK57土壙と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.9m、底面径約1.8m、深さ約70cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。壁は急に立ち上がっており、西側はオーバーハングしている。また、底面中央部には直径約30cm、深さ約17cmの円形のピットが認められた。

【堆積土】底面直上に褐～黒褐色のシルトが自然堆積した後、地山ブロックを含む暗褐色やにぶい黄褐色粘土層で埋め戻されている。また、その上面の窪みには焼土や炭化物、地山を粒状に含む暗褐色シルトが堆積している。



図版215 SK54土壙出土遺物



図版216 SK56土壤出土遺物－縄文土器・石器－

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版216-1～6)や磨製石斧(7)が出土している。

【SK57土壤】(図版214)

【位置】N-1・W-52 [確認面] 地山

【重複】SK56土壤と重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径1.1～1.4m、底面径0.7～0.8m、深さ約20cmの不整円形の土壤である。断面形は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】地山粒を含む暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版217)が出土している。

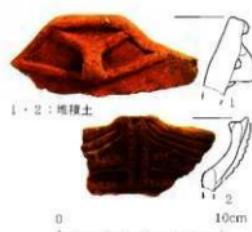
【SK59土壤】(図版214)

【位置】N-0-S-W-46 [確認面] 地山

【重複】SI45住居跡、SK51・54土壤と重複し、SI45より新しく、SK51より古い。SK51との新旧関係は不明である。

【規模・平面形・断面形】上面径約2.1m、底面径約1.9m、深さ約53cmの円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれておらず、底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がっている。

【堆積土】底面直上に褐色の砂質シルトが薄く堆積した後、地山ブロックを多く含む暗褐色粘土で埋



図版217 SK57土壤出土縄文土器

め戻されている。

【出土遺物】底面や堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK61土壙】(図版220)

【位置】N-16・W-61【確認面】地山

【重複】SD10溝跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面が長径約2.5m、短径約1.6m、底面が長径約2.3m、短径約1.5m、深さ約66cmの楕円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面の南北両端には直径約20cm、深さ約15cmの円形のピットが2個認められた。

【堆積土】底面直上に黒～暗褐色のシルトが堆積した後、地山や褐色シルトのブロックを多く含む暗・黒褐色シルト等で埋め戻されている。また、その上面の産みには炭化物を少量含む黒褐色シルトが堆積している。

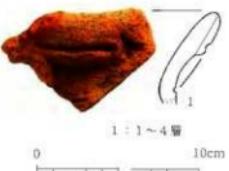
【出土遺物】堆積土中から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版218)。

【SK62土壙】(図版220)

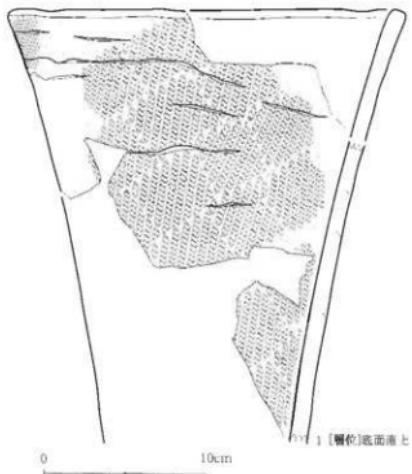
【位置】N-17・W-63【確認面】地山

【重複】SK75土壙、SD10溝跡と重複し、これより古い。

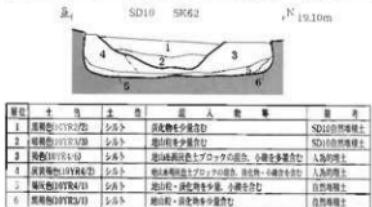
【規模・平面形・断面形】上面径約2.6m、底面径約2.4m、深さ約55cmの円形の土壙である。地山



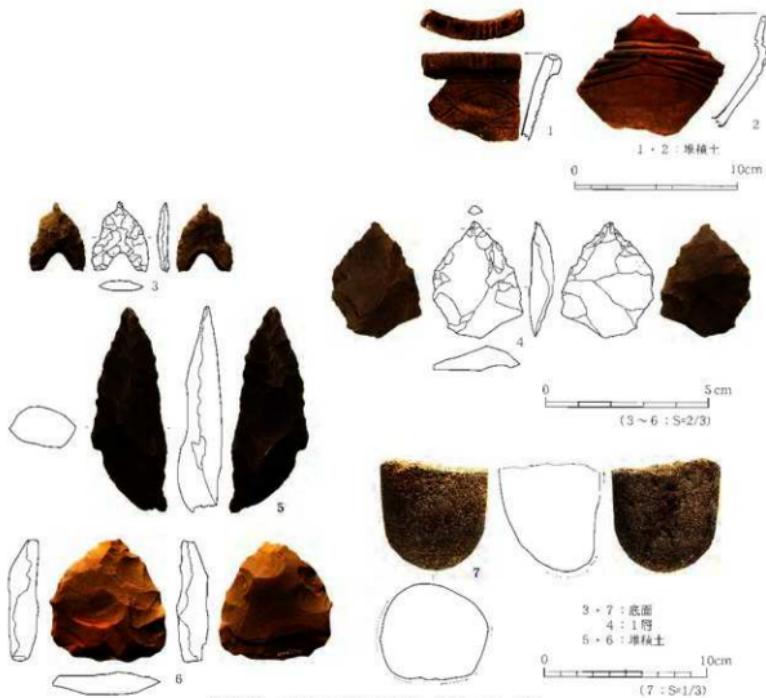
図版218 SK61土壙出土縄文土器



図版219 SK62土壙出土遺物—縄文土器—



図版220 61・62・66土壤



図版221 SK64土壤出土遺物－縄文土器・石器－

3c層まで掘り込まれており、底面はほぼ平坦で、壁はややオーバーハング気味に立ち上がっている。

【堆積土】底面直上に黒褐・褐灰色のシルトが堆積した後、地山や褐灰色シルトのブロックを多く含む褐・灰黄褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】底面直上から縄文土器深鉢が出土している(図版219)。

【SK64土壤】(図版10)

【位置】N-5・W-53【確認面】地山面およびSI77住居跡堆積土上面

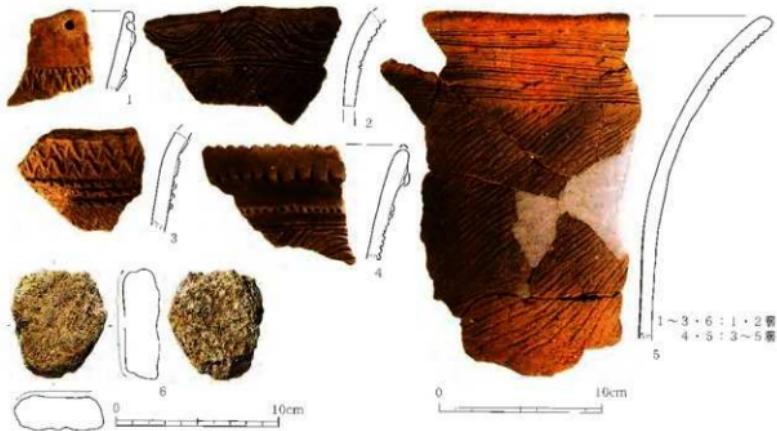
【重複】SI77住居跡、SI69竪穴状遺構、SB103建物跡、SK124土壤と重複しており、いずれよりも新しい。

【規模・平面形・断面形】長軸3.0m×短軸2.7m、深さ約20cmの不整な隅丸長方形の土壤である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】3層認められる。1・2層は自然流入土で、3層は北壁の崩落土とみられる。

【出土遺物】堆積土中から縄文土器深鉢や浅鉢、石器(図版221)、土偶(図版424-4)が出土している

【SK66土壤】(図版220)



図版222 SK66土壤出土遺物－縄文土器・石器－

[位置] N-3・W-58 [確認面] 地山

[重複] Pit3411と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.8m、底面径約1.6m、深さ約61cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には直径約45cm、深さ約17cmの円形のピットがあり、それを中心に放射状に延びる長さ45~60cm、上幅6~10cm、下幅2~5cm、深さ3~6cmの溝状の掘り込みが4条認められた。

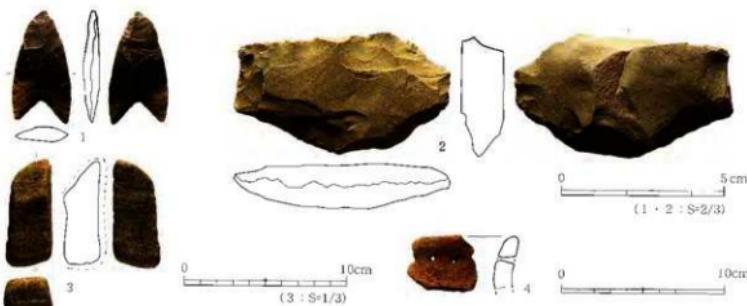
[堆積上] 炭化物や地山を粒状に含む褐灰色や暗褐色、黒褐色等のシルトが堆積している。

[出土遺物] 堆積土から縄文土器深鉢(図版222-1~5)や磨石(6)等が出土している。

【SK68土壤】(図版228)

[位置] S-6・W-49 [確認面] 地山

[重複] SI60・81住居跡、SB58掘立柱建物跡、SK71土壤と重複し、SI60、SK71より新しく、



図版223 SK68土壤出土遺物－縄文土器・石器－

SI81、SB58より古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.9m、底面径約1.8m、深さ約76cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山ブロックを多く含む褐色の砂質シルトで埋め戻されており、その上面の窪みには炭化物や地山粒を少量含む暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版223-4)や石鎌(1)、不定形石器(2)、延石(3)が出土している。

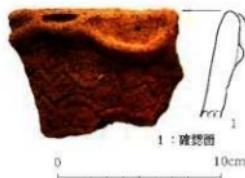
【SK71土壙】(図版228)

【位置】S-7・W-49【確認面】地山

【重複】SI60住居跡、SK68・72・73土壙と重複し、SK72より新しく、SK68・73より古い。SI60との新旧関係は不明である。

【規模・平面形・断面形】上面径約2.0m、底面径約1.8m、深さ約41cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山ブロックや小礫を多く含む暗褐色シルトで埋め戻されている。



図版224 SK71土壙出土縄文土器

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版224)。

【SK72土壙】(図版228)

【位置】S-8・W-49【確認面】地山

【重複】SI29・60住居跡、SB58掘立柱建物跡、SK68・71・73土壙と重複し、これより古い。但し、SI60との新旧関係は不明である。

【規模・平面形・断面形】上面径1.8m前後、深さ約50cmの円形の土壙と考えられるが他の遺構に壊されており、詳細は不明である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。



図版225 SK72土壙出土縄文土器

【堆積土】地山や焼土ブロックを多く含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版225)。

【SK73土壙】(図版228)

【位置】S-8・W-49【確認面】地山

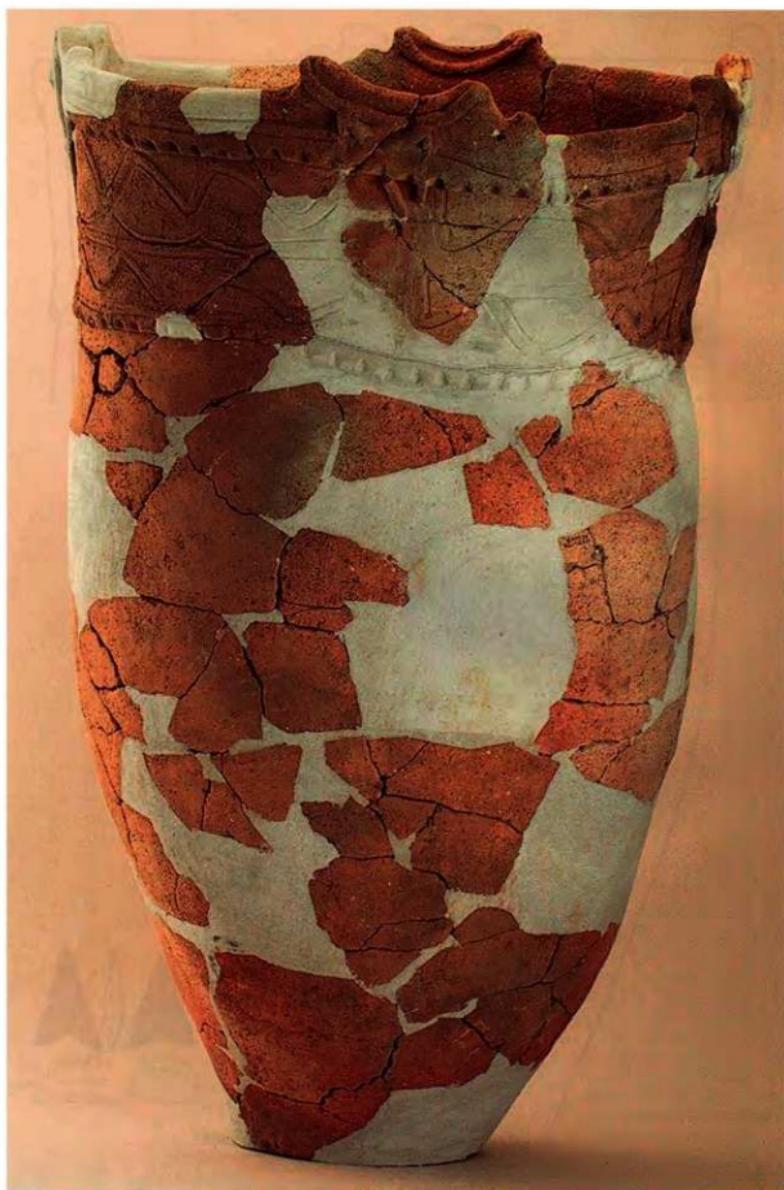
【重複】SI60、SK71・72土壙と重複し、SK71・72より新しい。SI60との新旧関係は不明である。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.3m、底面径約1.1m、深さ約55cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

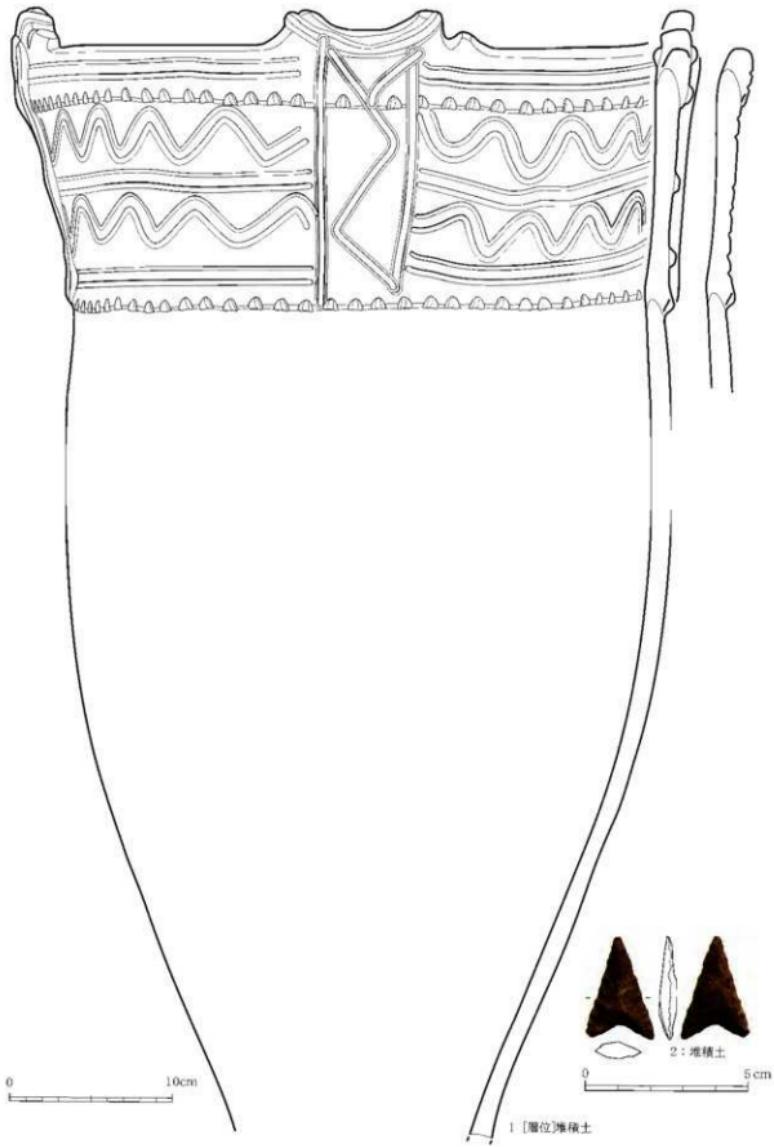
【堆積土】地山ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土から大型の縄文土器深鉢(図版226・227-1)や石鎌(2)が出土している。

【SK74土壙】(図版11)

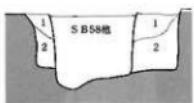


图版226 SK73土壤出土遗物(1)－绳文土器－

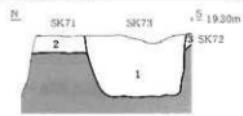


图版227 SK73土壤出土遗物(2)——绳文土器·石器—

S SK68 N 19.50m



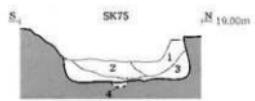
層位	土色	土性	混入物等	層名
1 塗褐色(10YR7/3)	シルト	炭化物、鉄の沈殿を少しある		自然腐植土
2 黄褐色(10YR4/4)	砂質シルト	火山灰漂土		人為的堆土



層位	土色	土性	混入物等	層名
1 深褐色(10YR4/4)	シルト	焼土ブロック含む		人為的堆土
2 黄褐色(10YR3/3)	シルト	焼土ブロック・土塊・泥土ブロック含む		人為的堆土
3 黄褐色(10YR3/3)	シルト	焼土ブロック・セメントブロック多く含む		人為的堆土



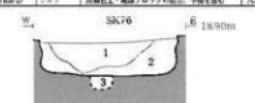
SK75土壤(東から)



層位	土色	土性	混入物等	層名
1 深褐色(10YR4/4)	シルト	焼土ブロック含む		人為的堆土
2 黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土ブロック・土塊・泥土ブロック含む		人為的堆土
3 黄褐色(10YR3/3)	シルト	焼土ブロック・土塊・泥土ブロック含む		人為的堆土



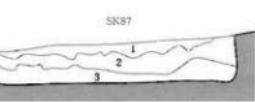
SK75土壤(南から)



層位	土色	土性	混入物等	層名
1 深褐色(10YR4/4)	シルト	焼土色・焼土ブロックの塊含む、岩屑含む		人為的堆土
2 黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土色・焼土ブロックの塊含む、小礫を含む		人為的堆土
3 黄褐色(10YR3/3)	シルト	焼土色・焼土ブロックの塊含む、小礫を含む		人為的堆土



SK76・110土壤(西から)



層位	土色	土性	混入物等	名
1 塗褐色(10YR4/4)	シルト	砂山灰を多量、炭化物、鉄の沈殿を含む		自然腐植土
2 黄褐色(10YR4/3)	シルト	砂山灰を多量含む		人為的堆土
3 黄褐色(10YR4/3)	粘重シルト	焼土ブロックを多量含む		人為的堆土



層位	土色	土性	混入物等	層名
1 塗褐色(10YR4/3)	シルト	焼土ブロック・焼土色シルトブロックを含む		人為的堆土
2 黄褐色(10YR3/3)	シルト	焼土ブロックを含む		人為的堆土
3 塗褐色(10YR4/3)	シルト	焼土ブロックを大量含む		人為的堆土
4 黄褐色(10YR4/3)	粘重シルト	焼土ブロックを多量含む		人為的堆土
5 黄褐色(10YR4/3)	粘重シルト	しまなし		自然土

図版228 68・71・72・75・76・79・87・110土壤

【位置】 S-5・W-47 [確認面] 地山

[重複] SI29住居跡、SB58掘立柱建物跡と重複し、これらより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.8m、底面径約1.7m、深さ約53cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は南西側が直径約1.3mの円形の土壙状に20cmほど深くなっている、段が付く。壁は急に立ち上がりつている。

[堆積土] 地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

[出土遺物] 堆積土から磨・敲石が出土している(図版229)。

【SK75土壙】(図版228)

【位置】 N-17・W-66 [確認面] 地山

[重複] SK62土壙、SD10溝跡と重複し、SD10より古く、SK62より新しい。

[規模・平面形・断面形] 上面が長径約2.7m、短径約1.7m、底面が長径約2.5m、短径約1.5m、深さ約52cmの楕円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急に立ち上がっており、一部オーバーハングしている。また、底面中央部には長径約30cm、短径約20cm、深さ約7cmの楕円形のピットが認められた。

[堆積土] 地山ブロックを含むにぶい黄褐～黒褐色シルト等で埋め戻されている。

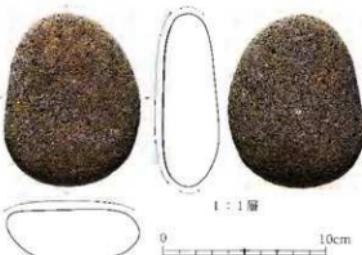
[出土遺物] 出土していない。

【SK76土壙】(図版228)

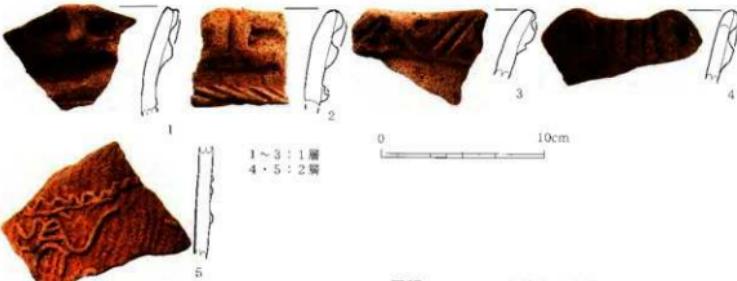
【位置】 N-18・W-69 [確認面] 地山

[重複] SD10溝跡と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.8m、底面径約1.6m、深さ約46cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっていている。また、底面中央部には直径約30cm前後、深さ約16cmの不整円形のピットが認められた。



図版229 SK74土壙出土遺物－石器－



図版230 SK87土壙出土遺物

[堆積土] 暗褐色シルトや地山のブロックを含む灰黄褐・黒褐色シルトで埋め戻されている。

[出土遺物] 出土していない。

【SK87土壤】(図版228)

[位置] N-13・W-65 [確認面] 地山

[重複] SI100住居跡、SK110土壤と重複し、これらより新しい。

[規模・平面形・断面形] 上・底面ともに長径約3.3m、短径約2.3m、深さ約60cmの楕円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁はオーバーハング気味に立ち上がっている。

[堆積土] 地山ブロックを含む褐色の粘質シルトで埋め戻されており、その上面の窪みには焼土、炭化物や地山粒、小礫を含む暗褐色シルトが堆積している。

[出土遺物] 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版230)。

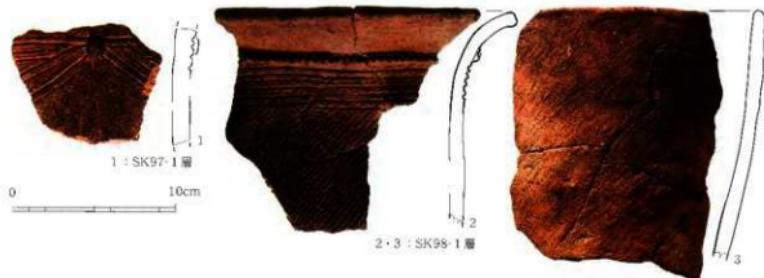
【SK97土壤】(図版236)

[位置] N-2・W-54 [確認面] 地山

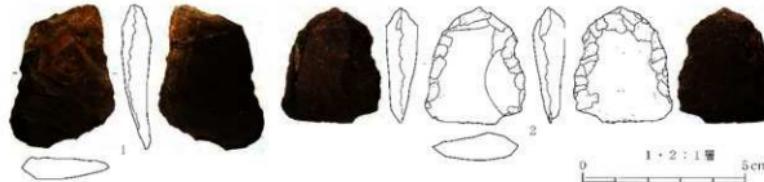
[重複] SI69竪穴状造構、SB103掘立柱建物跡と重複し、これらより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.6m、底面径約1.4m、深さ約55cmの円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には直径約28cm、深さ約52cmの円形のピットがあり、それを中心に放射状に延びる長さ56~62cm、上幅5~12cm、下幅2~5cm、深さ2~3cmの溝状の掘り込みが4条認められた。

[堆積土] 底面直上に地山、炭化物を粒状に少量含む暗褐色シルトが薄く堆積した後、薄い炭化物層



図版231 SK97・98土壤出土遺物－縄文土器－



図版232 SK98土壤出土遺物－石器－

を間に挟んで地山ブロック、炭化物、焼土、骨を多く含む灰黄褐・黒褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(第231図1)。

【SK98土壤】(図版236)

【位置】N-8・W-56 [確認面] 地山

【重複】SI77住居跡と重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.1m、底面径約1.0m、深さ約45cmの円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急に立ち上がっており、一部オーバーハンギングしている。

【堆積土】地山、炭化物を粒状に含む黒褐色シルトが堆積している。

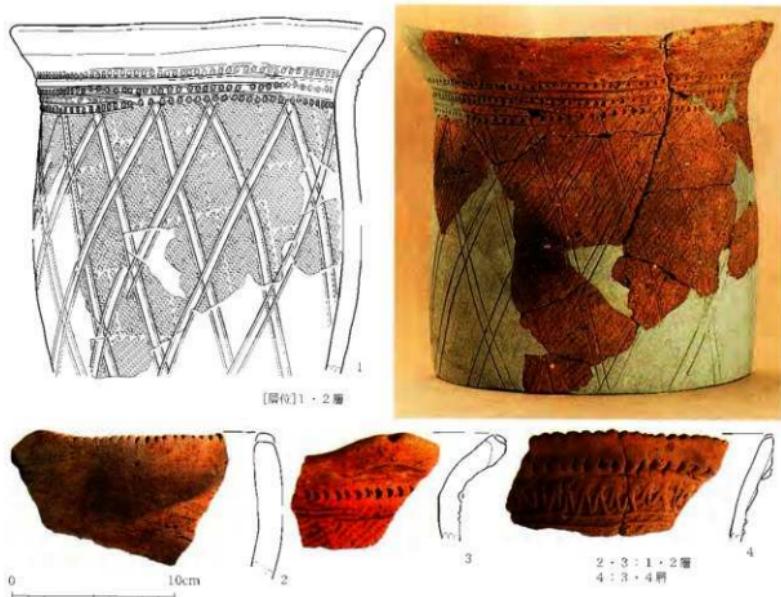
【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版231-2・3)や不定形石器(図版232)が出土している。

【SK99土壤】(図版236)

【位置】N-11・W-56 [確認面] 地山

【重複】SI65・77住居跡、Pit3301と重複し、SI65、Pit3301より古く、SI77より新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.3m、底面径約1.1m、深さ約70cmの円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には



図版233 SK99土壤出土遺物(1)-縄文土器-

長径約26cm、短径約20cm、深さ約31cmの楕円形のピットが認められた。

【堆積土】底面直上に地山、炭化物を粒状に含む灰黄褐色シルトが堆積した後、地山ブロック、炭化物、焼土、焼骨を含む暗褐・暗赤褐色シルトで埋め戻されている。また、その上面の産みには炭化物や地山粒、焼骨片を含む黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢(図版233)や磨・凹・敲石(図版234-1)や磨石(2)が出土した他、土偶が1点出土している(図版430-4)。

【SK101土壤】(図版236)

【位置】N-1・W-61 [確認面] 地山

【重複】SI83・84住居跡、SB103掘立柱建物跡、SK102土壤と重複し、これらより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面が長軸約1.5m、短軸約1.2m、底面が長軸約1.1m、短軸約0.9m、深さ約70cmの不整形の土壤である。底面には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。また、底面からはSB103N4W1の柱穴が検出されており本土壤がこれの抜き取り穴の可能性も考えられる。

【堆積土】地山、炭化物を少量含む黒褐・褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から工字文の施された縄文土器浅鉢が出土している(図版235)。

【SK102土壤】(図版236)

【位置】N-0-S・W-61 [確認面] 地山

【重複】SI83・84住居跡、SB103掘立柱建物跡、SK101土壤と重複し、SB103、SK101より古く、SI84より新しい。SI83との新旧関係は不明である。

【規模・平面形・断面形】上面が長軸約1.5m、短軸約1.1m、底面が長軸約0.6m、短軸約0.5m、深さ約58cmの不整形の土壤である。底面には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】地山ブロック、炭化物を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

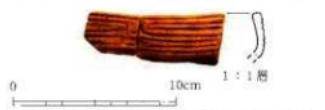
【SK104土壤】(図版236)

【位置】N-15・W-68 [確認面] 地山

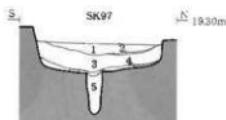
【重複】SD10と重複し、これより古い。



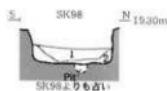
図版234 SK99土壤出土遺物(2)-石器-



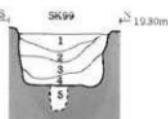
図版235 SK101土壤出土遺物-縄文土器-



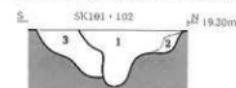
層位	土色	土性	腐入物等	性名
1 黄褐色(17YR2/3)	シルト	風化物を多量、塊土塊・塊のブロック・砂岩含む	人為的土	
2 褐化層				
3 黄褐色(17YR2/3)	シルト	風化のリカク風化層、風化物・塊土塊・風化物を少量含む	人為的土	
4 黄褐色(17YR2/3)	シルト	風化・風化物を少量含む	自然母質	
5 黄褐色(17YR2/3)	シルト	風化・風化物を少量含む	人為的土	



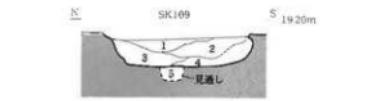
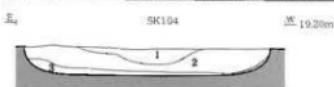
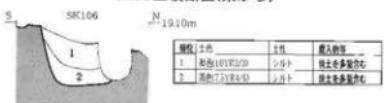
層位	土色	土性	腐入物等	性名
1 黄褐色(17YR3/3)	シルト	風化物を多量、塊のブロックを含む	自然母質	
2 黄褐色(17YR3/3)	シルト	風化物・塊土塊を含む	自然母質	



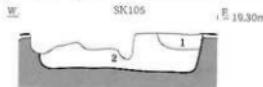
層位	土色	土性	腐入物等	性名
1 黄褐色(17YR2/3)	シルト	風化物・塊土・塊のブロックを含む	自然母質	
2 黄褐色(17YR3/3)	シルト	風化物・塊土塊を含む	自然母質	
3 黄褐色(17YR3/3)	シルト	風化物・風化のブロックを多量、風化・結晶化含む	人為的土	
4 風化層(17YR4/4)	シルト	風化物・風化のブロック・砂のブロックを含む	人為的土	
5 黄褐色(17YR2/3)	シルト	風化物・風化物を少量、風化ブロックを含む	人為的土	



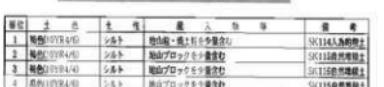
層位	土色	土性	腐入物等	性名
1 黄褐色(17YR2/3)	シルト	風化物を少量含む	SK101母質土	
2 黄褐色(17YR4/4)	0	塊山ブロックを多量含む	SK101母質土	
3 黄褐色(17YR2/3)	シルト	塊山ブロック・砂のブロックを含む	SK101母質土	



層位	土色	土性	腐入物等	性名
1 黄褐色(17YR2/3)	シルト	風化物を多量、風化物を少量含む	自然母質	
2 CDF-黄褐色(17YR2/3)	粘土	塊山ブロックを多量含む	人為的土	
3 CDF-黄褐色(17YR2/3)	粘土	塊山ブロックを多量含む	自然母質	



層位	土色	土性	腐入物等
1 黄褐色(17YR2/3)	シルト	砂の塊・塊土・塊のブロック・砂岩含む	SK114A堆積物
2 黄褐色(17YR2/3)	シルト	塊山ブロックを多量含む	SK114B堆積物



層位	土色	土性	腐入物等
1 黄褐色(17YR2/3)	シルト	塊山・塊土・塊のブロック・砂岩含む	SK115A堆積物

層位	土色	土性	腐入物等
1 黄褐色(17YR2/3)	シルト	塊山・塊のブロック・砂岩含む	SK115B堆積物

図版236 97・98・99・101・102・104~106・109・114・115土壤

【規模・平面形・断面形】上面が長軸約3.0m、短軸は推定2.1m前後、底面が長軸約2.9m、短軸推定2.0m前後と考えられるが、北辺をSD10に壊されているため詳細は不明である。深さは約49cmで、平面形は隅丸長方形である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がっている。

【堆積土】底面直上ににぶい黄褐色の粘質シルトが薄く堆積した後、地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色の粘質シルトで埋め戻されている。また、その上面の窪みには炭化物や地山粒を含む暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK105土壙】(図版236)

【位置】S-3・W-56 [確認面] 地山

【重複】SI78住居跡、SB154掘立柱建物跡と重複し、これらより新しい。

【規模・平面形・断面形】上・底面ともに径約2.1m、深さ約51cmの円形を呈する土壙と考えられるが、南半を攪乱により壊されているため詳細は不明である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山ブロック、焼土、炭化物を多く含む暗褐～褐色の砂質シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

【SK106土壙】(図版236)

【位置】S-5・W-57 [確認面] 地山

【重複】SI78住居跡、SB154掘立柱建物跡と重複し、これらより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.1m、底面径約0.8m、深さ約67cmの円形の土壙である。断面形は「U」字状を呈し、壁はやや急に立ち上がっている。

【堆積土】焼土、炭化物を多く含む褐色の砂やシルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から石核が出土している(図版237)。

【SK108土壙】(図版10)

【位置】S-7・W-65 [確認面] 地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】長軸約1.8m、短軸径約1.1m、深さ約8cmの不整円形の土壙である。断面形は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

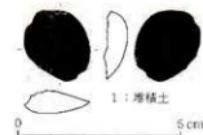
【出土遺物】出土していない。

【SK109土壙】(図版236)

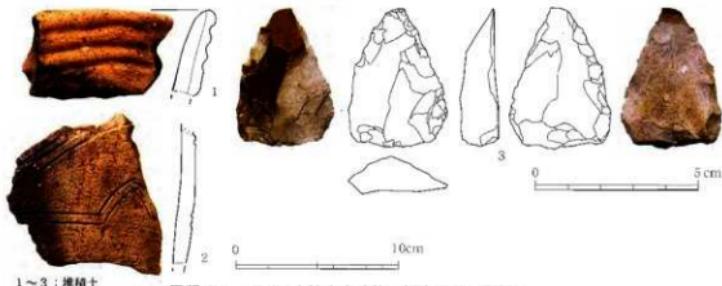
【位置】N-13・W-69 [確認面] 地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】上面が長径約2.5m、短径約2.0m、底面が長径約2.0m、短径約1.8m、深



図版237 SK106土壙出土石器



図版238 SK109土壤出土遺物—縄文土器・石器—

さ約53cmの楕円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急に立ち上がっており、一部オーバーハンプしている。また、底面中央部には直径約27cm、深さ約18cmの円形のビットが認められた。

【堆積土】地山ブロックを含む暗褐～褐色シルトで埋め戻されており、その上面の産みには暗褐色シルトが堆積している。

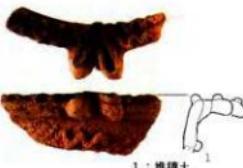
【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版238-1・2)と尖頭器(3)が出土している。

【SK110土壤】(図版228)

【位置】N-14・W-64【確認面】地山

【重複】SK87土壤と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.7m、底面径約1.6m、深さ約72cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急に立ち上がっており、一部オーバーハンプしている。また、底面中央部には長径約30cm、短径25cm、深さ約21cmの楕円形のビットが認められた。



図版239 SK110土壤出土縄文土器

【堆積土】地山ブロックを含む黒褐・暗褐シルトや褐色粘質シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版239)。

【SK114土壤】(図版236)

【位置】S-5・W-58【確認面】地山

【重複】SI78住居跡、SK115土壤等と重複し、SI78より古く、SK115より新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径約0.7m、底面径約0.6m、深さ約30cmの不整円形の土壙である。断面形は「U」字状を呈し、壁はやや急に立ち上がっている。

【堆積土】焼土ブロックを少量含む、褐色の砂質シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

【SK115土壤】(図版236)

【位置】S-5・W-59【確認面】地山

【重複】SI78住居跡、SB154掘立柱建物跡、SK114土壤等と重複し、これらより古い。

【規模・平面形・断面形】上面が長径約1.9m、短径約0.9m、底面が長径約1.8m、短径約0.8m、深さ約26cmの不整椭円形の土壙である。断面形は「U」字状を呈し、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】褐色砂質シルトが堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK116土壙】(図版10)

【位置】N-11・W-54 [確認面] 地山

【重複】SI77住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面が長軸約1.8m、短軸約0.7m、底面が長軸約1.6m、短軸約0.5m、深さ約44cmの隅丸長方形の土壙である。断面形は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山粒を少量含む暗褐色シルトなどが堆積している。

【出土遺物】堆積土から石器が出土している(図版240)。

【SK117土壙】(図版10)

【位置】S-6・W-57 [確認面] 地山

【重複】SI78住居跡等と重複するが、新旧関係は不明である。

【規模・平面形・断面形】直径約0.6m、深さ約20cmの円形の土壙である。断面形は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK118土壙】(図版44)

【位置】N-6・W-58 [確認面] 地山

【重複】SI77住居跡と重複し、これより新しい。また、SI70は本土壙を埋め戻して床面としたものである。

【規模・平面形・断面形】上面が長軸約2.8m、短軸約1.7m、底面が長軸約2.6m、短軸約1.5m、深さ約46cmの隅丸方形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には直径約24cm、深さ約12cmの円形のピットが認められた。

【堆積土】底面直上に炭化物や地山粒を含む褐灰色シルトが薄く堆積した後、地山ブロックや焼土等を含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻して、SI70の床面としている。

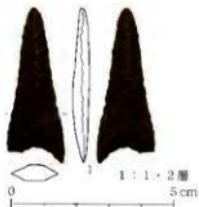
【出土遺物】出土していない。

【SK119土壙】(図版50)

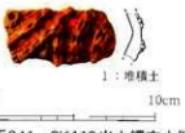
【位置】N-14・W-54 [確認面] 地山

【重複】SI80住居跡、SD10溝跡と重複し、これより古い。

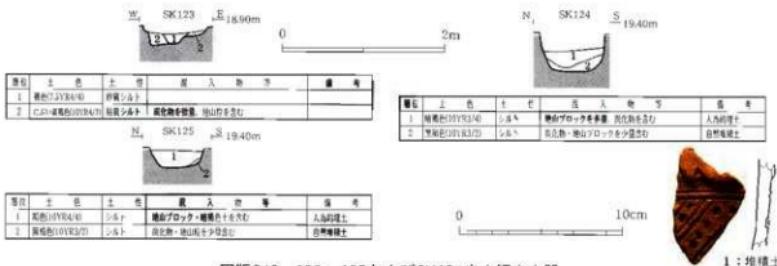
【規模・平面形・断面形】上面径約1.4m、底面径約1.3m、深さ約24cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっており。また、底面中央部には直径約40cm、深さ約36cmの不整円形



図版240 SK116出土石器



図版241 SK119出土縄文土器



図版242 123～125およびSK124出土繩文土器

のピットが認められた。

【堆積土】底面直上に炭化物や地山粒を含む黒褐色シルトが堆積した後、地山ブロックや炭化物を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】確認面から繩文土器深鉢の破片が出土している(図版241)。

【SK123土壤】(図版242)

【位置】N-5・W-21【確認面】地山

【重複】SI 5住居跡と重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面が長径約0.8m、短径0.5m、底面が長径約0.7m、短径0.4m、深さ約24cmの不整梢円形の土壙である。底面には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】褐色やにぶい黄褐色の粘質シルトである。

【出土遺物】出土していない。

【SK124土壤】(図版242)

【位置】N-4・W-52【確認面】地山

【重複】SK64土壤と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約0.8m、底面径約0.6m、深さ約48cmの円形の土壙である。断面形は「U」字状を呈し、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】底面直上に炭化物や地山粒を含む黒褐色シルトが堆積した後、地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土から繩文土器片が少量出土している(図版242)。

【SK125土壤】(図版242)

【位置】N-1・W-51【確認面】地山

【重複】SK56土壤と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】直径約0.7m、深さ約28cmのやや不整円形の土壙である。断面形は「U」字状を呈し、壁はやや急に立ち上がっている。

【堆積土】地山粒を含む黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK126土壤】(図版243)



図版243 SK126土壤および出土遺物(南西から)

【位置】 N-5・W-51 [確認面] 地山

【重複】 SI80住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上・底面ともに径約1.5m、深さ約47cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には長径約27cm、短径21cm、深さ約17cmの楕円形のピットが認められた。

【堆積土】 底面直上に地山粒、炭化物を含む暗褐色シルトが堆積した後、地山ブロックを含む黒褐色やにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版243)。

【SK127土壤】(図版244)

【位置】 N-9・W-65 [確認面] 地山

【重複】 SI100・170住居跡と重複し、SI100より古く、SI170より新しい。

【規模・平面形・断面形】 上面が長径約2.0m、短径約1.5m、底面が長径約1.7m、短径約1.1m、深さ約22cmの楕円形の土壙である。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。

【底面】 積混じりのローム層

【堆積土】 地山粒や炭化物を含む暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 底面や堆積土から縄文土器深鉢が出土している(図版244)。

【SK128土壤】(図版10)

【位置】 N-19・W-56 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】 上面径約0.9m、底面径約0.7m、深さ約18cmの円形の上壙である。断面形は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。

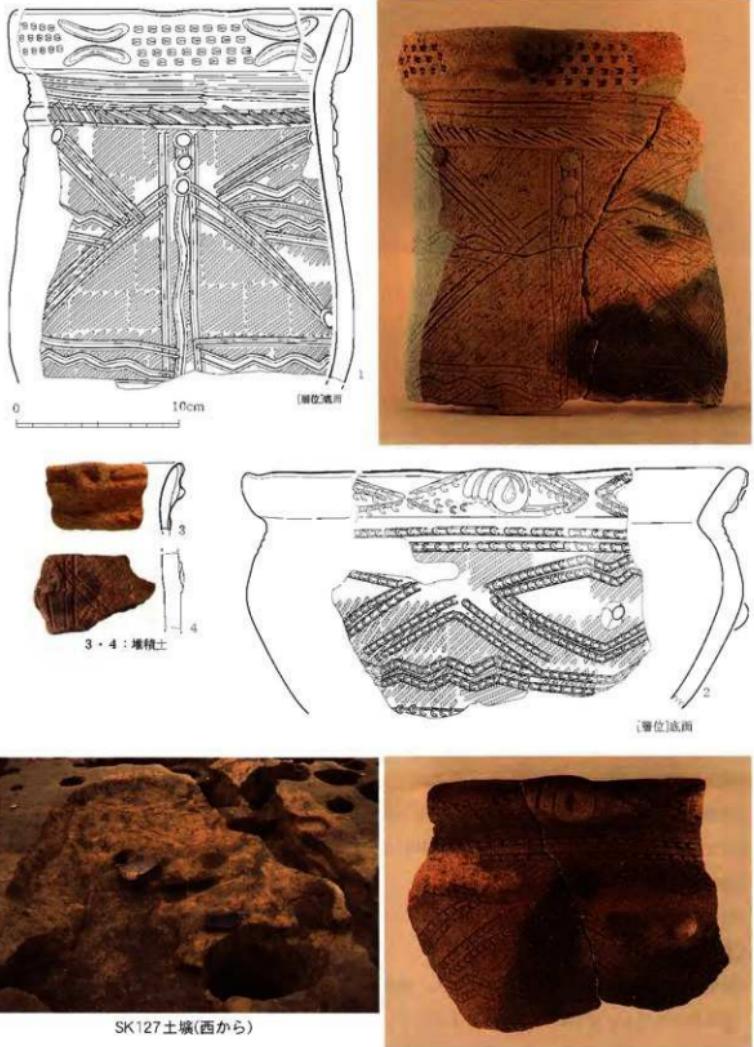
【堆積土】 地山や焼土ブロック、炭化物を含む黒褐色シルトである。

【出土遺物】 出土していない。

【SK130土壤】(図版12)

【位置】 N-0-S・W-17 [確認面] 地山

【重複】 SI129住居跡と重複し、これより新しい。



図版244 SK127 土壌および出土遺物－縄文土器－



図版245 SK134・136 土壌

【規模・平面形・断面形】上面が長径約0.8m、短径約0.6m、底面が長径約0.6m、短径約0.4m、深さ約40cmの不整楕円形の土壌である。壁は急で、北辺はオーバーハンプで立ち上がっている。

【堆積土】炭化物粒、小礫を含む黒褐色粘質シルトである。

【出土遺物】出土していない。

【SK134土壌】(図版245)

【位置】N-8・W-24【確認面】地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】長径約0.7m、短径約0.5m、深さ約35cmの不整楕円形の土壌である。断面形は「U」字状を呈し、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山、炭化物を含む暗褐・褐色粘質シルトが堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK136土壌】(図版245)

【位置】N-10・W-28【確認面】地山

【重複】SI21住居跡、SD10溝跡と重複し、SD10より古い。SI21との新旧関係は不明である。

【規模・平面形・断面形】上面が長径約1.0m、短径約0.8m、底面が長径約0.8m、短径約0.6m、深さ約53cmの楕円形の土壌である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山を含む黒褐・暗褐色粘質シルト等が堆積した後、地山ブロックを含む黒褐・暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

【SK138土壌】(図版10)

【位置】S-2・W-66【確認面】地山

【重複】重複は認められない。

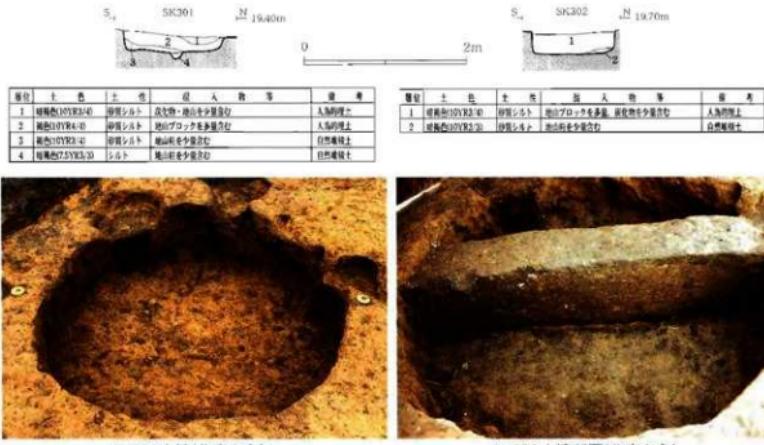
【規模・平面形・断面形】上面が長軸約1.0m、短軸約0.5m、底面が長軸約0.9m、短軸約0.4m、深さ約34cmの不整長方形の土壌である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山ブロックや炭化物を含む褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

【SK139土壌】(図版11)

【位置】N-7・W-51【確認面】地山



図版246 SK301・302土壌

【重複】 SI80住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面が長軸約1.3m、短軸約0.8m、底面が長軸約1.1m、短軸約0.7m、深さ約10cmの楕円形の土壌である。断面形は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】 地山や炭化物を含む暗褐～にぶい黄褐色砂質シルトが堆積している。

【出土遺物】 出土していない。

【SK301土壌】(図版246)

【位置】 N-21・W-104 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.4m、底面径約1.3m、深さ約25cmの円形の土壌である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には径約20cm、深さ約10cmの円形のビットが認められた。

【堆積土】 底面直上に地山粒を少量含む暗褐色シルトが堆積した後、地山ブロックや炭粒を含む褐色や暗褐色のシルトで埋め戻されている。

【出土遺物】 出土していない。

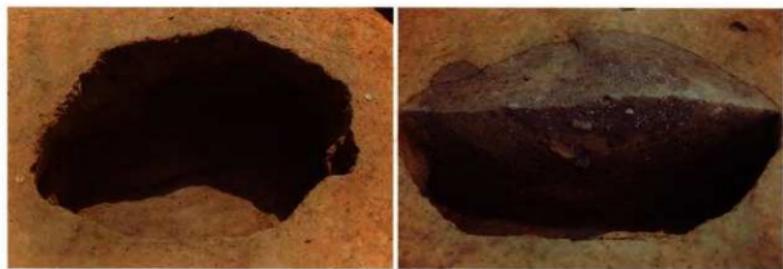
【SK302土壌】(図版246)

【位置】 N-0-S・W-104 [確認面] 地山

【重複】 小ビットと重複し、これより新しい。

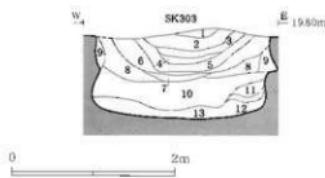
【規模・平面形・断面形】 上面径約1.1m、底面径約1.0m、深さ約30cmの円形の土壌である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】 底面直上に地山粒を少量含む暗褐色シルトが薄く堆積した後、地山ブロックや炭粒を含む

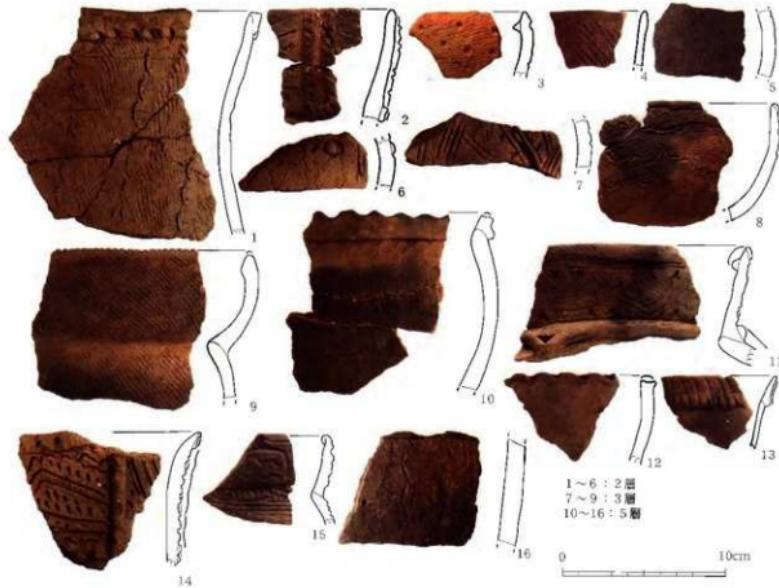


SK303 土壌(北東から)

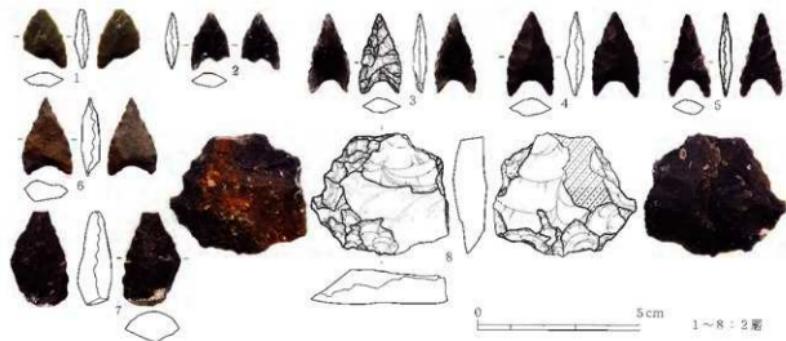
SK303 土壌断面(南西から)



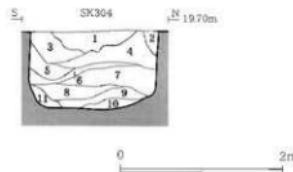
層位	土色	土性	剖面人	鉢等	質
1	赤褐色(10YR4/3)	シルト	褐色を少呈、塊状構造・小礫を含む	一	粘重土
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	褐色を多呈、小礫の少呈、既乾燥・堆土層を含む	一	粘重土
3	褐色(10YR4/4)	シルト	下部を少呈	一	粘重土
4	赤褐色(10YR4/3)	砂質シルト	塊状構造を多呈、小礫を少呈含む	一	粘重土
5	褐褐色(10YR4/2)	シルト	下部を少呈	一	粘重土
6	褐褐色(10YR4/4)	シルト	褐色を多呈、塊状を含む	一	粘重堆積土
7	褐褐色(10YR4/4)	シルト	褐色の・小礫を少呈含む	一	粘重堆積土
8	黒褐色(10YR4/3)	シルト	褐色を多呈、小礫を少呈含む	一	粘重堆積土
9	黒褐色(10YR4/0)	シルト	褐褐色土ブロックを含む	一	堅硬层上
10	褐褐色(10YR4/4)	砂質シルト	褐色を多呈含む	一	人為的土
11	黒褐色(10YR4/2)	シルト	塊状構造を含む	一	人為的土
12	黒褐色(10YR4/0)	シルト	高粘土土ブロックを少量含む	一	人為的土
13	褐褐色(10YR4/3)	シルト	塊状構造を含む	一	人為的土



図版247 SK303土壤および出土遺物



図版248 SK303土壤出土遺物 - 石器 -



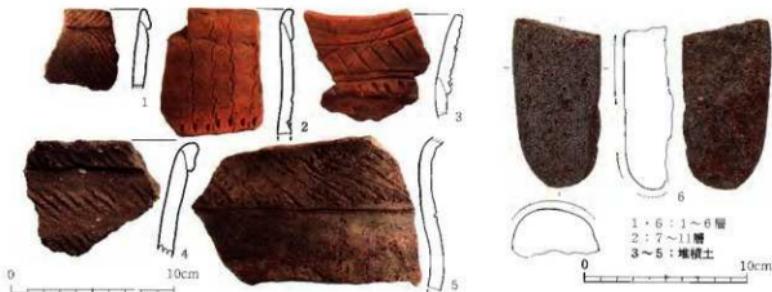
基盤	土色	土型	層入物等	層号
1	褐色斑(19YR3/4)	シルト	珪化木多量、炭素を少量、小種を含む	Ⅰ
2	褐色(19YR4/4)	シルト		Ⅱ
3	褐色斑(19YR3/4)	シルト	珪化木多量含む	Ⅲ
4	褐色斑(19YR3/4)	シルト	地山・礫石少量、珪化木・他骨を含む	Ⅳ
5	褐色斑(19YR4/4)	砂質シルト	地山を含む	Ⅴ
6	褐色斑(19YR3/4)	シルト	珪化木多量含む	Ⅵ
7	褐色(19YR4/4)	砂質シルト	地山を含む	Ⅶ
8	褐色斑(19YR3/4)	シルト	地山を含む	Ⅷ
9	褐色斑(19YR3/4)	シルト	地山を含む	Ⅸ
10	褐色(19YR4/4)	砂質シルト	地山のコラムを含む	Ⅹ
11	褐色(19YR4/4)	砂質シルト		Ⅺ



SK304土壤(南東から)



SK304土壤断面(南東から)



図版249 SK304土壤および出土遺物 - 繩文土器・石器 -

暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土中から縄文土器片が1片出土したのみである。

【SK303土壤】(図版247)

【位置】N-9・W-105【確認面】地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】上底面とも長径約2.1m、短径約1.5m、深さ約110cmの楕円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急で、北半部がオーバーハング気味に立ち上がっている。

【堆積土】地山や小礫を含む暗・黒褐色シルト等が堆積した後、焼骨や炭が窪みの中に廃棄されている。

【出土遺物】堆積土から縄文土器(図版247)や石鎌(図版248-1~6)、尖頭器(7)、不定形石器(8)等が出土している。

【SK304土壤】(図版249)

【位置】N-8・W-103【確認面】地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】上底面とも長径約1.6m、短径約1.3m、深さ約95cmの不整楕円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急で、西半部がオーバーハング気味に立ち上がっている。

【堆積土】地山や小礫を含む暗褐~黒褐色シルト等で人為的に埋め戻された後、焼骨や炭が窪みの中に廃棄されている。

【出土遺物】堆積土から縄文土器(図版249-1~5)や磨・凹・敲石(6)が出土している。

【SK305土壤】(図版250)

【位置】N-10・W-102【確認面】地山

【重複】SI370住居跡、SK306土壤と重複し、SK306より新しく、SI370より古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.8m、底面径約1.7m、深さ約30cmの円形の土壤である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には径25~30cm、深さ約15cmの円形のピットが認められた。

【堆積土】地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで埋め戻された後、窪みには炭粒を少量含む黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土中から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK306土壤】(図版250)

【位置】N-11・W-101【確認面】地山

【重複】SI370住居跡、SK305・307土壤と重複し、SK307より新しく、SI370、SI305より古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.6m、底面径約1.5m、深さ約36cmの円形の土壤である。底面は平坦で、中央部には径約20cm、深さ約10cmの円形のピットがあり、それを中心に放射状に延び



番号	土 士	一 次	底 人 地 面	二 次
1	塊状(10V2E2D)	シルト	鉄物を少観む	自然地盤上
2	塊状(10V3E4D)	砂質シルト	塊状ブロックを多観む	人為堆土
3	塊状(10V3E3)	砂質シルト		人為堆土
4	塊状(10V3E3)	砂質シルト	塊状面を含む	人為堆土
5	碎粒状(10V3E4)	砂質シルト	塊状・鉄物を少観む	人為堆土
6	砂質(10V3E4)	砂質シルト	塊状面を少観む	人為堆土
7	塊状(10V3E3)	シルト	鉄物を少観む	自然地盤上
8	塊状(10V3E3)	「砂質」シルト	塊状ブロック・鉄物を含む	人為堆土
9	塊状(10V3E4)	砂質シルト	塊状を多観む	人為堆土
10	塊状(10V3E4)	砂質シルト	鉄物・粘土結晶を少観む	人為堆土
11	塊状(10V3E3)	シルト	鉄物を少観む	自然地盤上
12	塊状(10V3E3)	砂質シルト	鉄物を含む	自然地盤上
13	塊状(10V3E4)	砂質シルト	鉄物を少観む	人為堆土



SK305 土壌断面(西から)



SK305 土壌(西から)



SK306 土壌(西から)



SK306 土壌断面(西から)



SK307 土壌(西から)



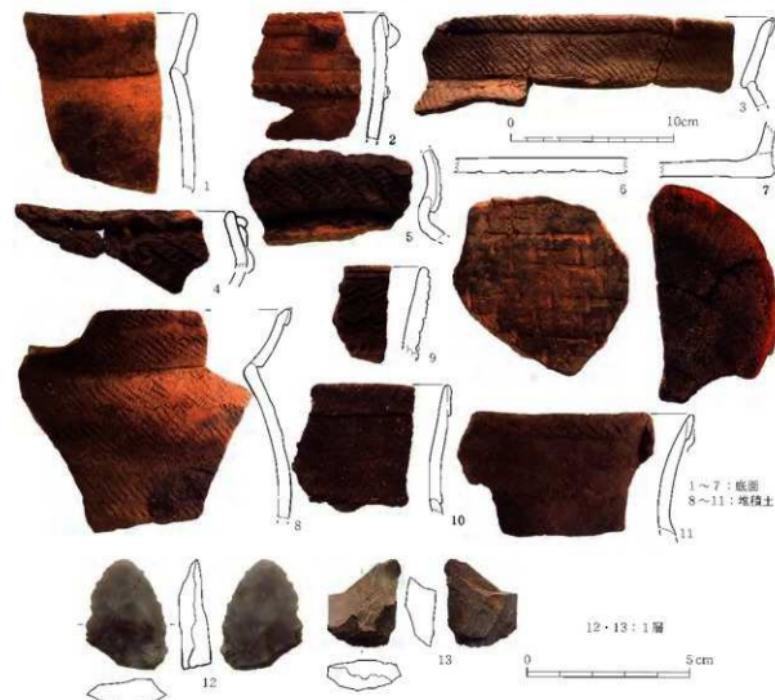
SK307 土壌・P6184断面(西から)

図版250 SK305～307 土壌・P6184



SK308 土壤(南から)

SK308 土壌断面(南から)



図版251 SK308土壤および出土遺物—縄文土器・石器—

る長さ45～60cm、上幅4～15cm、下幅2～6cm、深さ4～8cmの溝状の掘り込みが4条認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】底面直上に炭粒を少量含む暗褐色シルトが堆積した後、地山ブロック等を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土中から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK307土壙】(図版250)

【位置】N-12・W-100 [確認面] 地山

【重複】SK305・306土壙、Pit6184と重複し、SK305・306より古く、Pit6184より新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.6m、底面径約1.5m、深さ約35cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。また、底面中央部には径約18cm、深さ約17cmの円形のピットが認められた。

【堆積土】底面直上に壁の崩落土や炭粒を少量含む黒褐色シルトが堆積した後、地山ブロックや炭粒を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土から土偶が1点出土している(図版423-6)。

【SK308土壙】(図版251)

【位置】調査区の西側に位置する。[確認面] 地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.5m、底面径約1.4m、深さ約90cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁はオーバーハング気味に立ち上がっており、断面形は(図版251)フラスコ状となっている。

【底面】砂礫層

【堆積土】壁の崩落土とともに地山粒や炭粒を含む暗褐色シルトが堆積した後、上面の窪みに焼骨や炭が廃棄されている。

【出土遺物】底面や堆積土から縄文土器(図版251-1～11)、尖頭器(12)、不定形石器(13)が出土している。

【SK309土壙】(図版253)

【位置】N-4・W-99 [確認面] 地山

【重複】SI370住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.1m、底面径約1.3m、深さ約112cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁はオーバーハングして立ち上がっており、断面形はフラスコ状となっている。

【堆積土】壁の崩落土とともに地山粒や炭粒を含む褐・黒褐色シルトが堆積しており、間層には土器や焼骨が廃棄されている。

【出土遺物】堆積土第6層底面から、縄文土器深鉢や浅鉢が廃棄された状態で出土している(図版253・252-1～5)他、各層から少量の縄文土器片が出土している(6～8)。

【SK311土壙】(図版254)



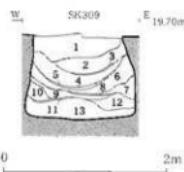
SK309土壤(東から)



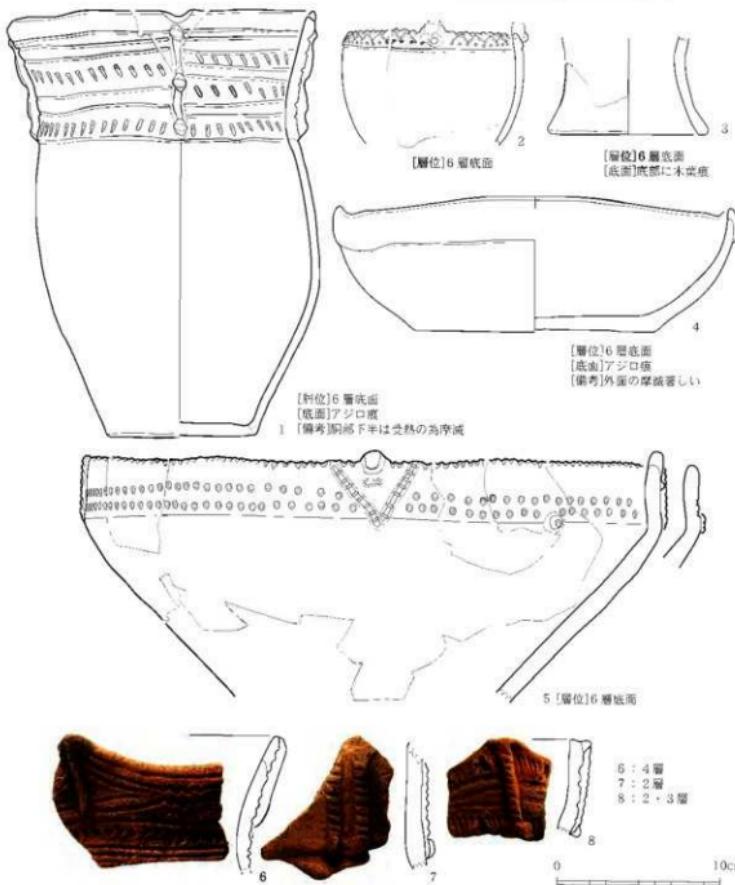
6層底面遺物出土状況(東から)



図版252 SK309土壤および出土遺物－縄文土器－(1)



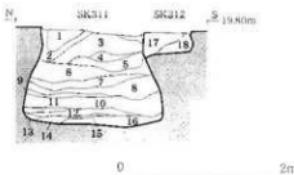
層位	土 性	土 性	含 有 物	特 性
1. 黄褐色(10YR3/7)	砂質土	少量の多孔性、無機性・非燃物、骨灰を少額含む	生糞堆積土	
2. 黄褐色(10YR3/7)	シルト	無機性・7層、無機性・非燃物を少量含む	生糞堆積土	
3. 黄褐色(10YR2/7)	シルト	無機性・7層、骨灰を含む	泥炭土	
4. 黄褐色(10YR2/7)	シルト	無機性・7層、骨灰を含む	泥炭土	
5. 黄褐色(10YR2/7)	シルト	無機性・7層、骨灰を含む	泥炭土	
6. 黄褐色(10YR2/7)	砂質土	無機性・7層、骨灰を含む	生糞堆積土	
7. 黄褐色(10YR2/7)	砂質土	無機性・7層	生糞堆積土	
8. 黄褐色(10YR2/7)	シルト	無機性・7層、骨灰を含む	泥炭土	
9. 黄褐色(10YR2/7)	シルト	無機性・7層、骨灰を含む	泥炭土	
10. 黄褐色(10YR2/7)	シルト	無機性・7層	泥炭土	
11. 黄褐色(10YR2/7)	シルト	无机质		
12. 黄褐色(10YR4/7)	砂質土	骨灰	骨灰土	
13. 黄褐色(10YR4/7)	砂質土	無機物を少量含む	生糞堆積土	



図版253 SK309土壤および出土遺物(2)-縄文土器-



SK311・312 土壌(東から)



SK311・312 土壌断面(西から)

層位	土 壊	性 質	基 本 食 素	備 考
1 黒褐色の砂質	シルト	地山グリーンを多量含む	人為的肥土	
2 黒褐色の砂質	シルト	地山グリーンを含む	人為的肥土	
3 黒褐色の砂質	シルト	地山グリーンを含む	人為的肥土	
4 黒褐色の砂質	シルト		人為的肥土	
5 黑褐色の砂質	シルト		人為的肥土	
6 黒褐色の砂質	シルト		人為的肥土	
7 黒褐色の砂質	シルト		人為的肥土	
8 黑褐色の砂質	シルト		自然堆土	
9 黑褐色の砂質	シルト	腐植物を含む	自然堆土	
10 黑褐色の砂質	シルト	腐植物を含む、地山を含む	自然堆土	
11 黑褐色の砂質	シルト		自然堆土	
12 黑褐色の砂質	シルト	腐植物を含む	自然堆土	
13 黑褐色の砂質	シルト		自然堆土	
14 黑褐色の砂質	シルト		自然堆土	
15 二重構造の砂質	シルト	腐植物を多量含む	自然堆土	
16 黑褐色の砂質	シルト		自然堆土	
17 こじく黒褐色の砂質	シルト	地山グリーンを多量含む	人為的肥土	
18 黑褐色の砂質	シルト	地山を多量含む	人為的肥土	

図版254 SK311・312 土壌

[位置] N-4・W-108 [確認面] 地山

[重複] SK312 土壌と重複し、これより新しい。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.4m、底面径約1.7m、深さ約121cmの円形の土壌である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、中央部には径約24cm、深さ約19cmの円形のピットが認められた。壁はオーバーハングして立ち上がっており、断面形はフラスコ状となっている。

[堆積土] 地山粒、炭粒を少量含む褐・暗褐色シルトが堆積した後、地山を多量に含む褐・黒褐色シルト等で埋め戻されている。

[出土遺物] 堆積土第1層から縄文土器深鉢が出土している(図版255-1)。

【SK312 土壌】(図版254)

[位置] N-3・W-107 [確認面] 地山

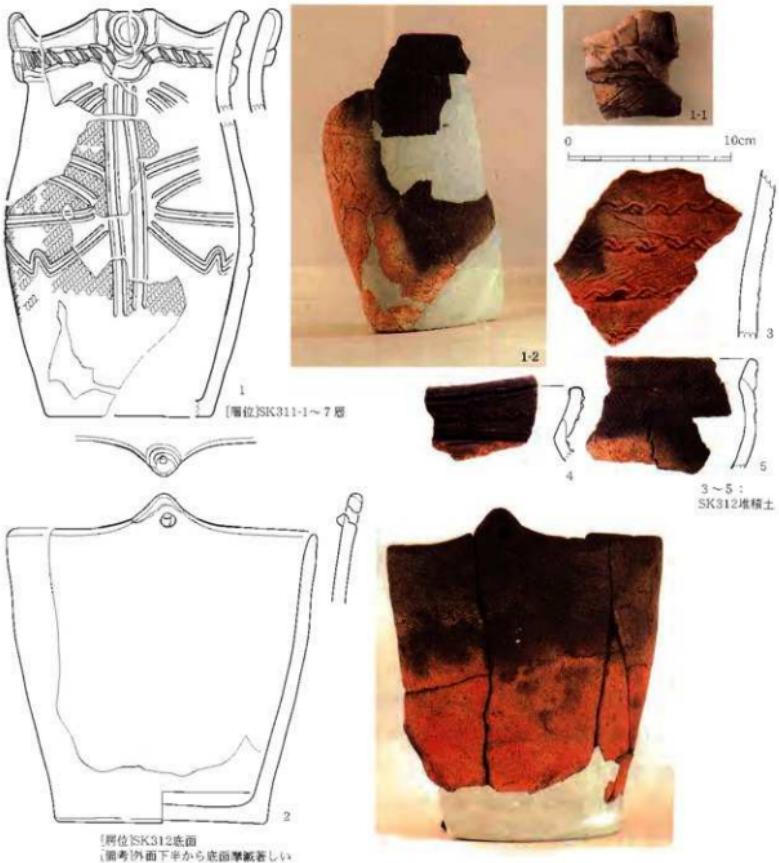
[重複] SK311 土壌と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.0m、底面径約0.9m、深さ約32cmの円形の土壌と考えられるが、北西部はSK311に壊されている。底面は平坦である。壁は急で、一部オーバーハング気味に立ち上がっている。

[底面] 構成じりのローム層

[堆積土] 地山ブロックを多量に含む褐・にぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

[出土遺物] 底面から縄文土器鉢(図版255-2)が出土している他、堆積土から少量の縄文土器片が出



図版255 SK311・312土壤出土遺物—縄文土器—

土している(図版255-2～5)。

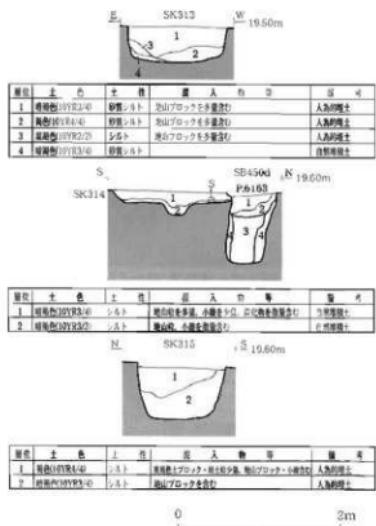
【SK313土壤】(図版256)

【位置】N-18・W-109 [確認面] 地山

【重複】小ピットと重複するのみで、これらより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面が長径約1.5m、短径約1.2m、底面が長径約1.4m、短径約1.1m、深さ約44cmの楕円形の土壤である。底面は平坦である。壁は急で、一部やオーバーハング気味に立ち上がっている。

【堆積土】底面直上に暗褐色シルトが堆積した後、地山ブロックを多量に含む褐・暗褐色シルト等で埋め戻されている。



図版256 SK313～315土壇

【出土遺物】出土していない。

【SK314土壇】(図版256)

【位置】N-14・W-99 [確認面] 地山

【重複】SB450掘立柱建物跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径1.4～1.5m、底面径1.3～1.4m、深さ約16cmの円形の土壇である。底面は平坦で、中央部には径約33cm、深さ約14cmの円形のピットがあり、それをを中心に放射状に延びる長さ46～52cm、上幅4～12cm、下幅2～4cm、深さ4～6cmの溝状の掘り込みが4条認められた。壁はやや急に立ち上がっている。

【堆積土】底面直上に小礫や地山粒をわずかに含む暗褐色シルトが堆積した後、地山ブロックを多量



に含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】 堆積土中から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK315土壤】(図版256)

【位置】 N-15・W-97 [確認面] 地山

【重複】 SK363土壤と重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】 上面が長軸約1.2m、短軸約0.7m、底面が長軸約0.7m、短軸約0.5m、深さ約70cmのやや楕円に近い、隅丸長方形の土壌である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がってい る。

【堆積土】 地山、黒褐色シルト、焼土をブロック状に含む褐・暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】 堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK316土壤】(図版257)

【位置】 N-14・W-113 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められなかった。

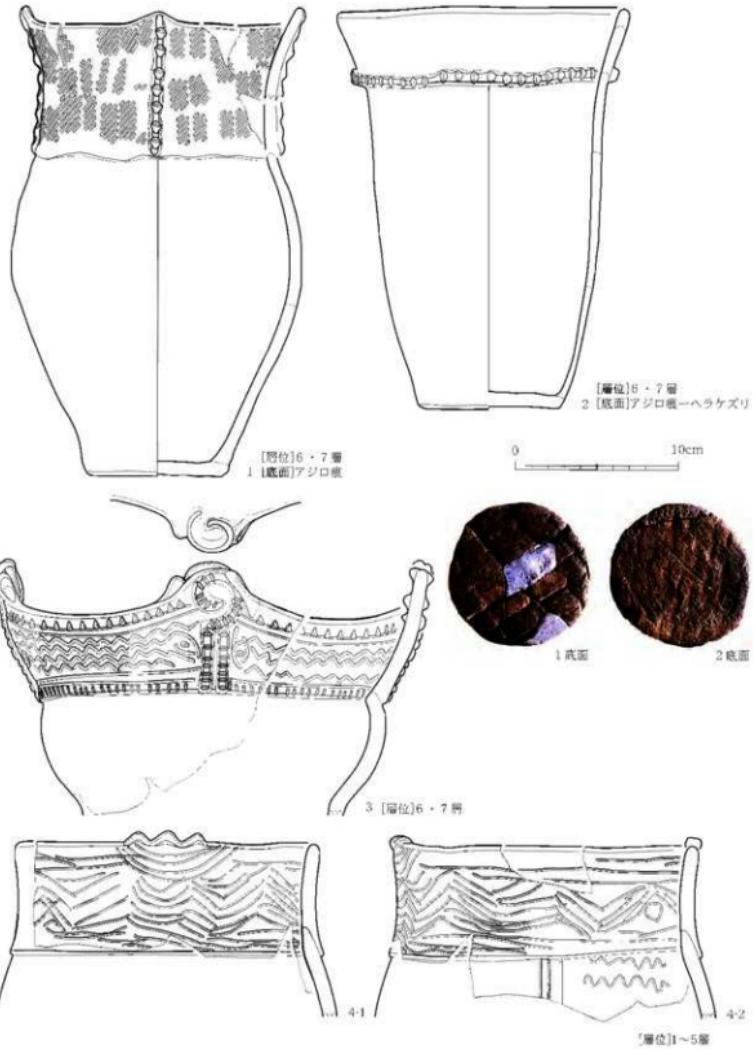
【規模・平面形・断面形】 上面径約1.7m、底面径約1.9m、深さ約88cmの円形の土壌である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は東南部を除きオーバーハングして立ち上がっており、断面形はフラスコ状となっている。

【堆積土】 壁の崩落土とともに、地山粒、炭粒、小礫を含むにぶい黄褐色～暗褐色シルト等が堆積した後、土壌内を掘り直して土器等が廃棄されている。

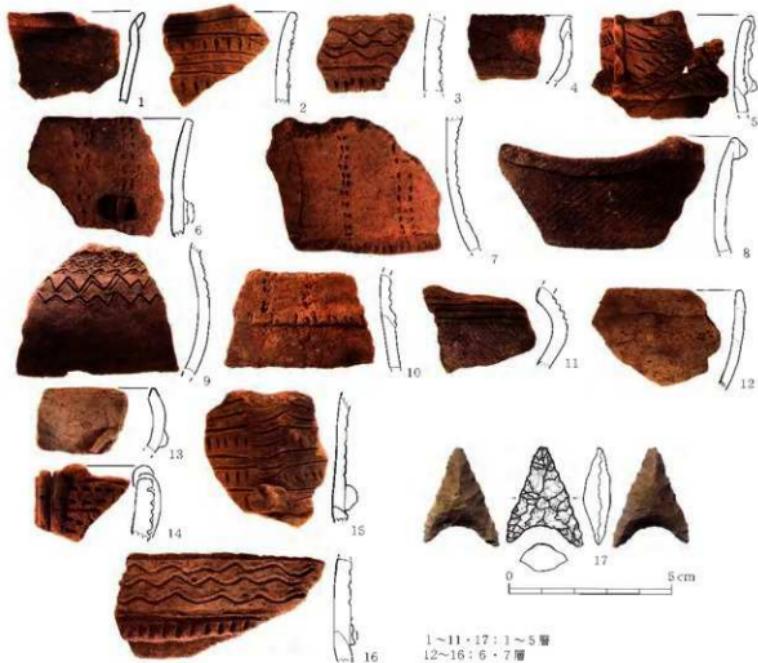
【出土遺物】 堆積土から縄文土器(図版258～260)や石鏃(図版260-17)が出土している。



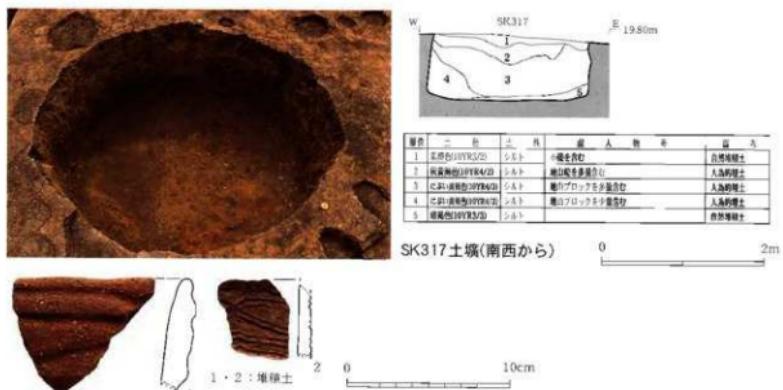
図版258 SK316土壤出土遺物(1)- 縄文土器--



図版259 SK316土壤出土遺物(2)-縄文土器-



図版260 SK316土壤出土遺物(3)－縄文土器・石器－



図版261 SK317土壤および出土遺物

【SK317土壙】(図版261)

【位置】 N-17・W-112 [確認面] 地山

【重複】 SI474住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

【規模・平面形・断面形】 上底面ともに径約1.9m、深さ約81cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急で、東半部はオーバーハングして立ち上がっている。

【堆積土】 底面直上に暗褐色シルトが堆積した後、上面付近まで地山ブロックを含む灰黄褐～ぶい黄褐色シルトで埋め戻されており、その後、黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土中から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版261)。

【SK319土壙】(図版262)

【位置】 N-7・W-113 [確認面] 地山

【重複】 SI310住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面径約2.1m、底面径1.9m、深さ約114cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれている。底面は平坦で、中央やや北東寄りには径約25cm、深さ約50cmの円形のビットがあり、径約15cmの柱痕跡が認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】 壁の崩落土とともに地山や炭粒を含む褐～黒褐色シルトが堆積しており、上面の窪みには土器や焼骨が炭や焼土とともに廃棄されている。

【出土遺物】 主に堆積土1～7層から、廃棄された状態で縄文土器深鉢や浅鉢(図版263～267)、石鏃(図版268-1・3)、不定形石器(2)、磨・凹石(4)がまとまって出土している。

【SK322土壙】(図版269)

【位置】 N-21・W-113 [確認面] 地山

【重複】 SI321住居跡、SK323・324土壙と重複し、SI321、SK324より古く、SK323より新しい。

【規模・平面形・断面形】 上面が長径1.8m、短径1.5m、底面が長径1.5m、短径1.2m、深さ約36cmの楕円形の土壙である。底面は平坦で、中央部には径32～38cm、深さ約30cmの不整円形のビットがあり、径約15cmの柱痕跡が認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】 地山や炭粒を含むにぶい黄褐～黒褐色シルトなどが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器片(図版269-1)や土製品(図版438-18)が出土している。

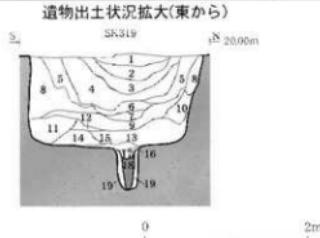
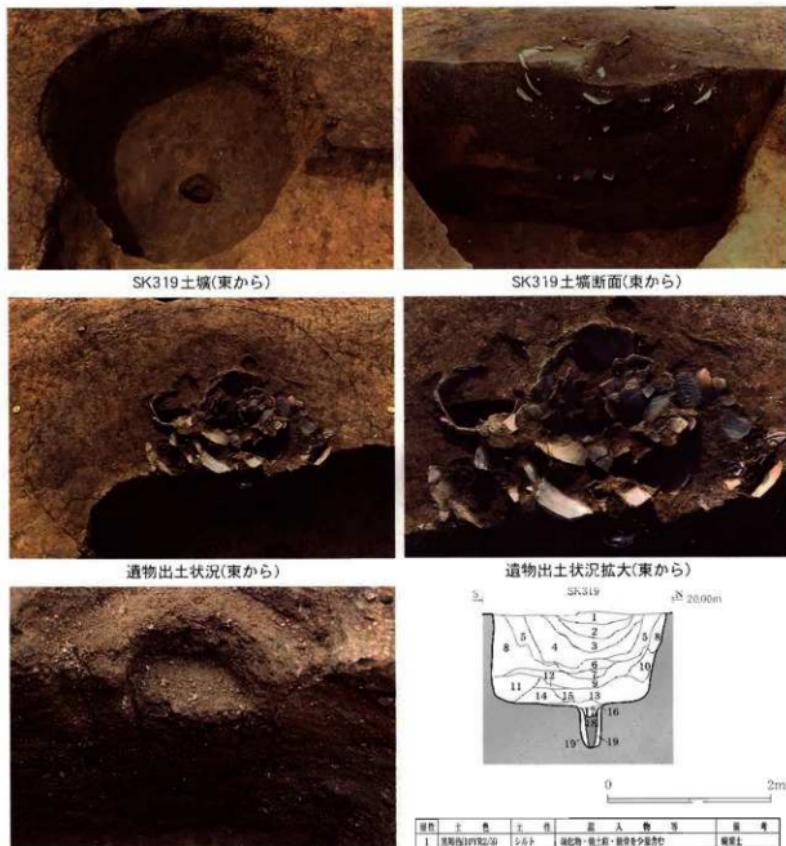
【SK323土壙】(図版269)

【位置】 N-23・W-113 [確認面] 地山

【重複】 SI321住居跡、SK322・324土壙と重複し、これらより古い。

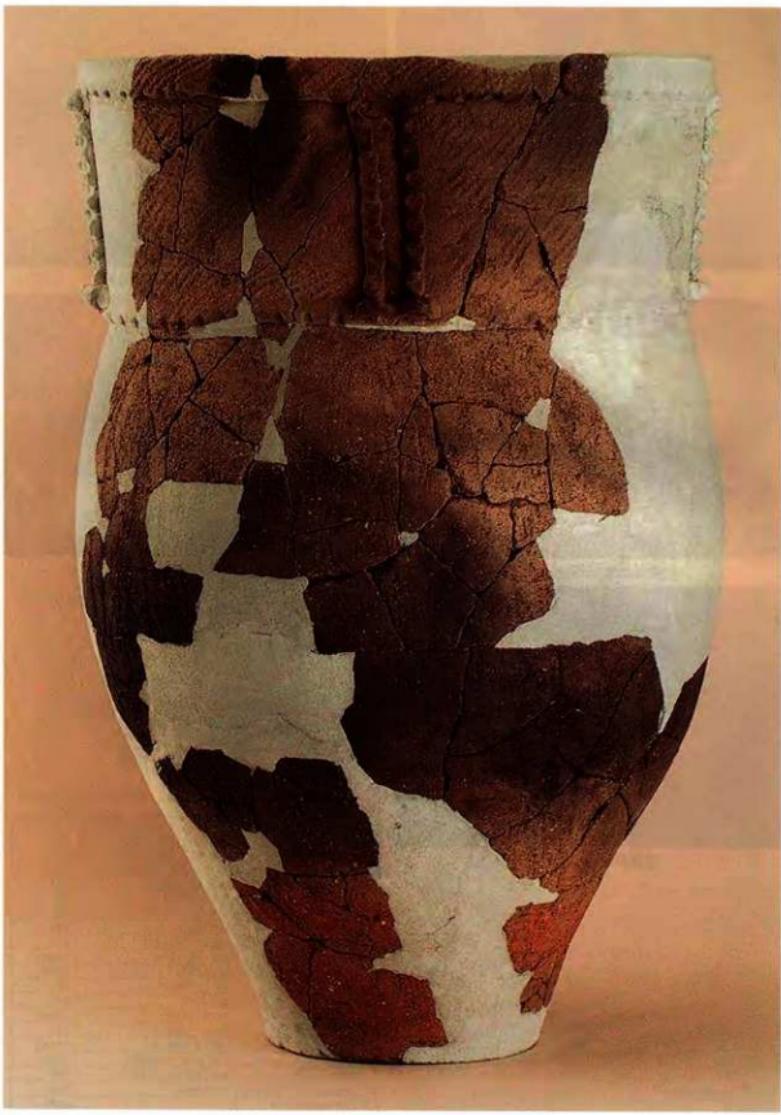
【規模・平面形・断面形】 上面が長径1.8m、短径1.5m、底面が長径1.5m、短径1.2m、深さ約60cmの楕円形の土壙である。底面は平坦で、中央部には径約22cm、深さ約22cmの円形のビットが認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】 底面直上に灰黄褐色シルトが堆積した後、地山ブロックを含むにぶい黄褐～褐灰色シルトで埋め戻されている。

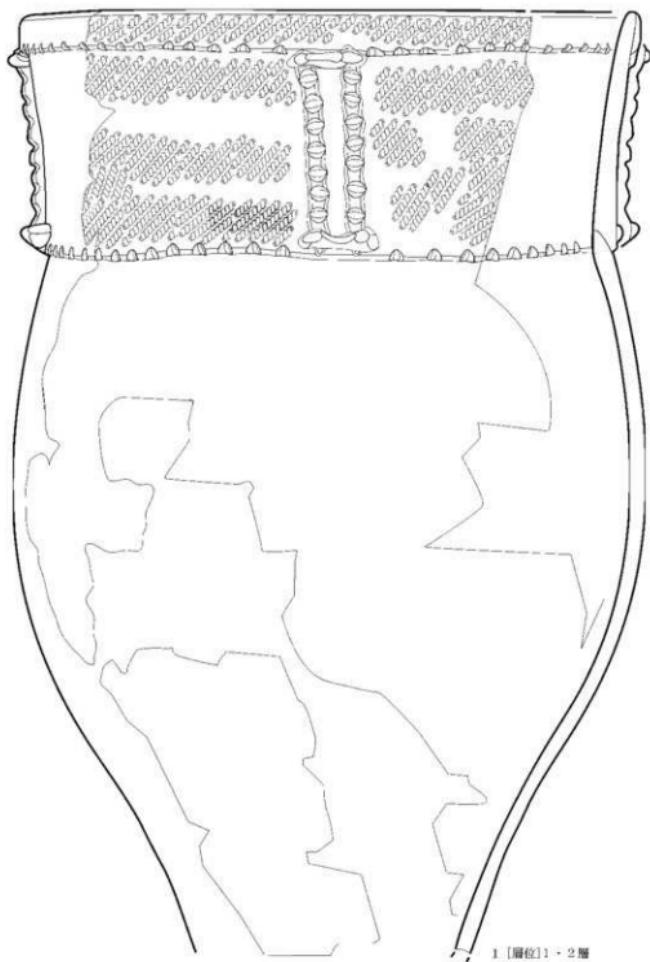


番号	土 質	工 作	記 入 物 等	備 考
1	黒褐色(17YR2/3)	シルト	泥炭地・堆土地・赤土色少々混合地	褐鐵土
2	黒褐色(17YR2/2)	シルト	泥炭地・堆土地・褐色多少混合地	褐鐵土
3	黒褐色(17YR2/0)	シルト	褐色地少許・泥炭地・堆土地を含む	褐鐵土
4	褐褐色(17YR3/0)	砂質シルト	泥炭地を形成・小礫を含む	褐鐵土
5	黒褐色(17YR3/0)	シルト	泥炭地・堆土を少々含む	褐鐵土
6	黒褐色(17YR2/2)	シルト	泥炭地を含む	褐鐵土
7	黒褐色(17YR2/0)	シルト	泥炭地を含む	褐鐵土
8	褐色(17YR4/0)	シルト	褐色地七フックモチ麦混合地	褐赤土
9	褐褐色(17YR3/0)	シルト	泥炭地・堆土を少々含む	自然褐鐵土
10	褐褐色(17YR3/0)	シルト	泥炭地を含む	自然褐鐵土
11	褐褐色(17YR3/0)	シルト	泥炭地フックモチ麦混合地	褐赤土
12	褐色(17YR4/0)	シルト	泥炭地フックモチ	褐赤土
13	褐褐色(17YR3/0)	シルト	泥炭地フックモチ混合地	自然褐鐵土
14	黒褐色(17YR3/0)	シルト	泥炭地フックモチ混合地	褐鐵土
15	褐褐色(17YR3/0)	シルト	中褐色少々混、山廻地を含む	自然褐鐵土
16	黒褐色(17YR3/0)	シルト	泥炭地・堆土地・泥炭地複合混合地	自然褐鐵土
17	黒褐色(17YR3/0)	シルト	泥炭地を含む、堆土地を含む	泥炭地
18	褐褐色(17YR3/0)	砂質シルト	泥炭地を含む	褐鐵土
19	上部黒褐色(17YR3/0)	粘土		褐鐵土

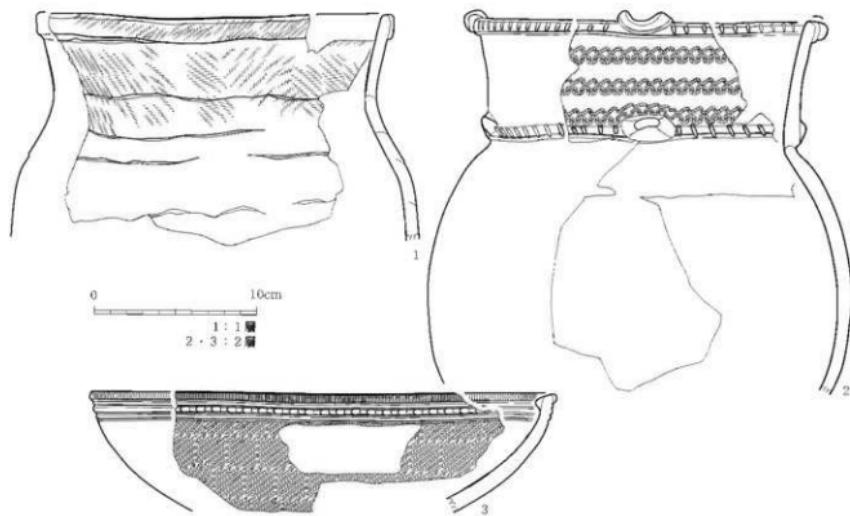
図版262 SK319土壤



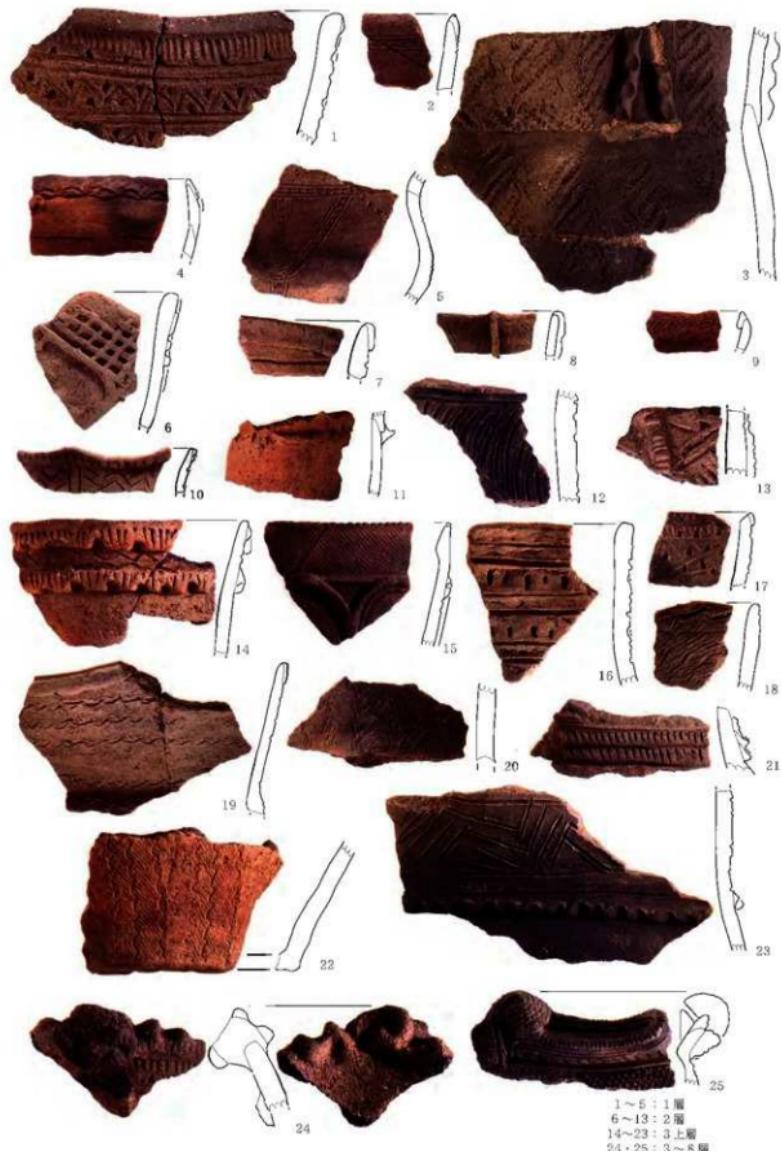
図版263 SK319土壤および出土遺物(1)-縄文土器-



図版264 SK319土壤および出土遺物(2)－縄文土器－

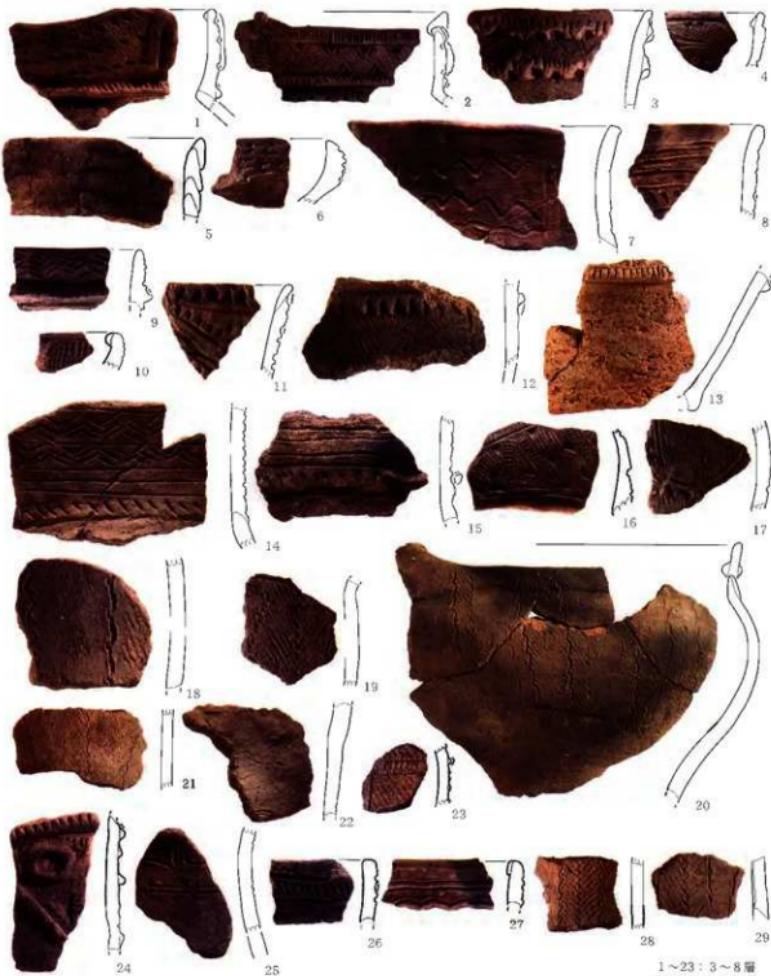


図版265 SK319土壤および出土遺物(3)－縄文土器－



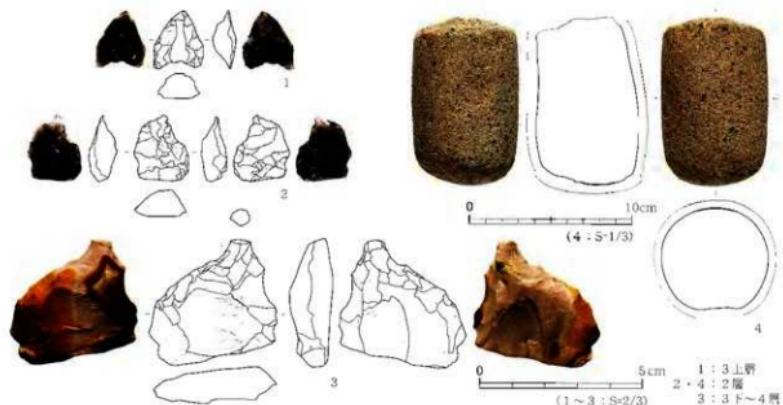
図版266 SK319土壤および出土遺物(4)－縄文土器－

1~5 : 1層
6~13 : 2層
14~23 : 3上層
24~25 : 3~5層



1~23: 3~8層
24・25: 4~15層
26~29: 9~15層

図版267 SK319土壤および出土遺物(5)－縄文土器－



図版268 SK319土壤出土遺物(6)-石器-

[出土遺物] 堆積上から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版269-2)。

[SK324土壤] (図版269)

[位置] N-20・W-114 [確認面] 地山

[重複] SI321住居跡、SK322・323土壤と重複し、SI321より古く、SK322・323より新しい。

[規模・平面形・断面形] 上面径1.5m、底面径1.3m、深さ約44cmの円形の土壤である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっており、上部はSI321構築の際に壊されている。

[底面] 磨混じりのローム層

[堆積土] 地山ブロックを含む褐・暗褐色シルトで埋め戻されている。

[出土遺物] 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版269-3)。

[SK326土壤] (図版270)

[位置] N-18・W-111 [確認面] 地山

[重複] SB471掘立柱建物跡、SK327土壤と重複し、これらより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面径1.3m、底面径1.2m、深さ約40cmの円形の土壤である。底面は平坦で、中央部には径約18cm、深さ約10cmの円形のピットが認められた。壁は急に立ち上がってい る。

[堆積土] 地山粒を含む黒褐色シルトが堆積している。

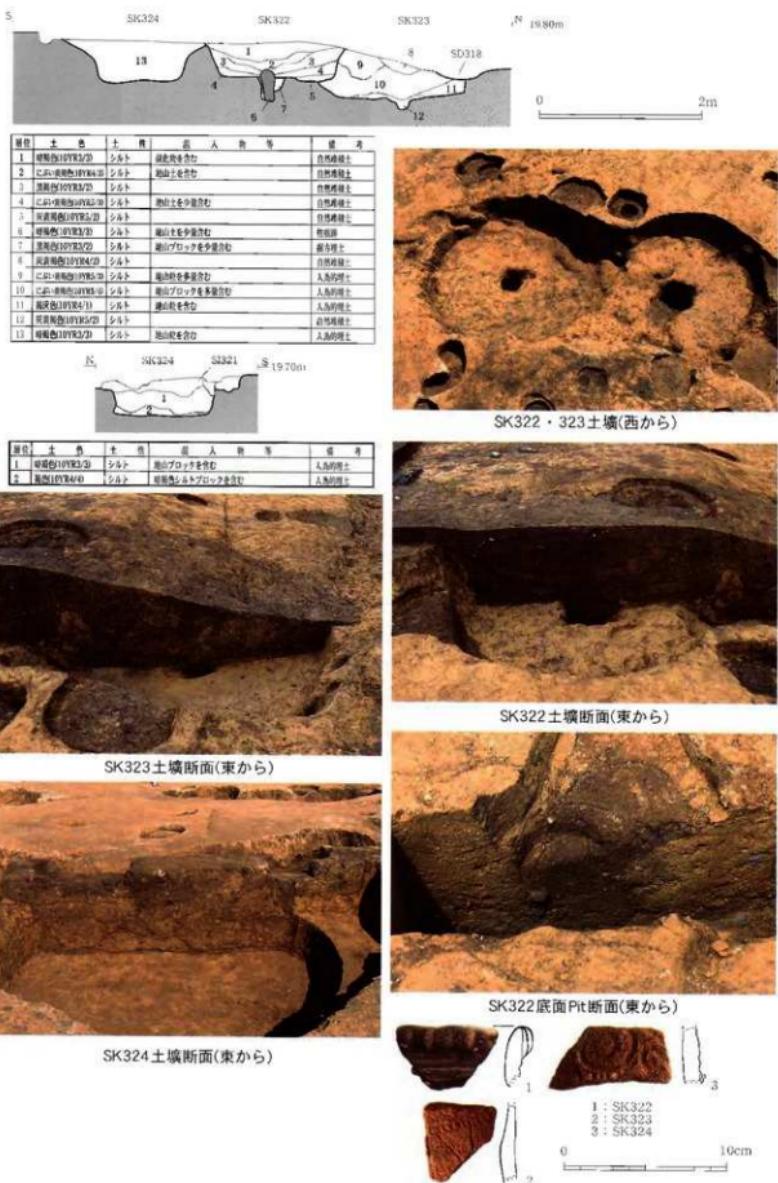
[出土遺物] 堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

[SK327土壤] (図版270)

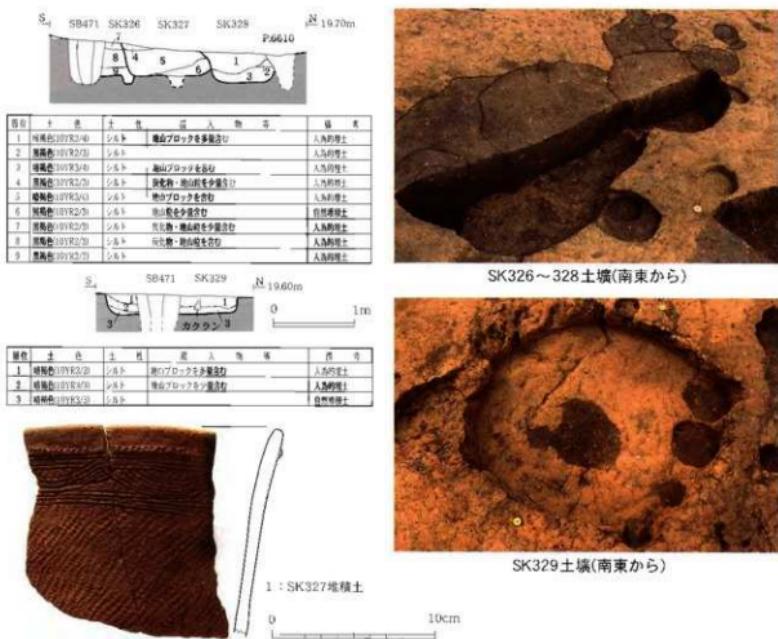
[位置] N-18・W-110 [確認面] 地山

[重複] SK326・328土壤と重複し、SK328より古く、SK326より新しい。

[規模・平面形・断面形] 上面径1.1m、底面径0.9m、深さ約40cmの円形の土壤である。底面は平坦で、中央部には径約18cm、深さ約22cmの円形のピットが認められた。壁は急に立ち上がってい



図版269 SK322～324土壤



図版270 SK326～329土壤およびSK327出土遺物—縄文土器—

る。

【堆積上】底面直上に黒褐色シルトが堆積した後、地山ブロックを含む暗褐色シルトなどで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版270)。

【SK328土壤】(図版270)

【位置】N-19・W-110 [確認面] 地山

【重複】SB471掘立柱建物跡、SK326、327土壤と重複し、これらより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径0.9m、底面径0.7m、深さ約40cmの円形の土壤である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山ブロックを含む暗・黒褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SK329土壤】(図版270)

【位置】N-22・W-109 [確認面] 地山

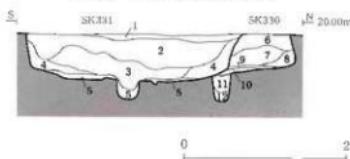
【重複】SB471掘立柱建物跡などと重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径1.6m、底面径1.5m、深さ約25cmの円形の土壤である。底面は平

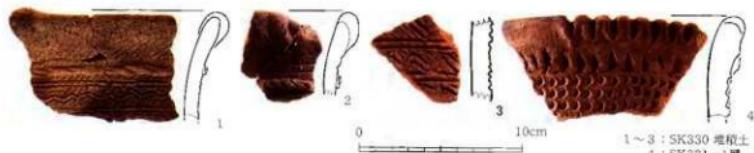


SK330・331土壤(北東から)

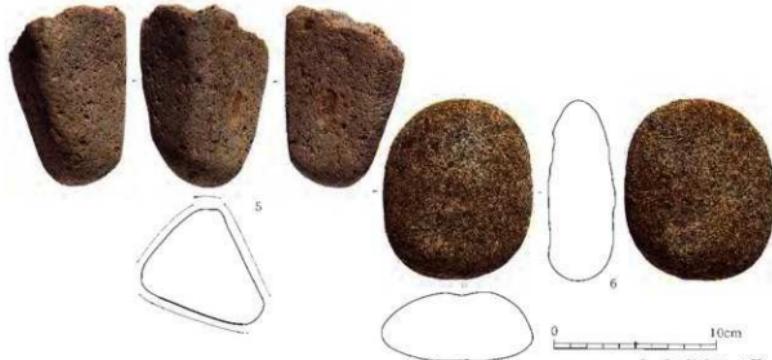
SK330・331土壤断面(北東から)



層位	土色	土性	底質	特徴	層号
1 黄褐色(3YY9/2)	シルト	炭化物・漂白物・粘土質・根茎を含む			自然堆積土
2 黄褐色(3YY9/2)	シルト	地山ブロックを多量、小礫を含む			人為的堆積土
3 暗褐色(5Y6/2)	シルト	地山ブロックを多量、小礫を含む			人為的堆積土
4 黄褐色(3YY9/2)	シルト	炭化物・地山ブロックを含む			人為的堆積土
5 黄褐色(3YY9/2)	シルト	炭化物・地山ブロックを含む			人為的堆積土
6 黄褐色(3YY9/2)	シルト	地山ブロックを多量、小礫を含む			人為的堆積土
7 黄褐色(3YY9/2)	シルト	地山ブロックを多量、小礫を含む			人為的堆積土
8 黄褐色(3YY9/2)	シルト	地山ブロックを多量、小礫を含む			人為的堆積土
9 黄褐色(3YY9/2)	シルト	地山ブロックを多量、小礫を含む			人為的堆積土
10 黄褐色(3YY9/2)	シルト	地山ブロックを多量			自然堆積土
11 黄褐色(3YY9/2)	シルト	地山ブロックを多量、小礫を含む			人為的堆積土
12 黄褐色(3YY9/2)	シルト	地山ブロックを多量、炭化物を少量、小礫を含む			Pd堆積土



1~3 : SK330 墓棺土
4 : SK331-1層

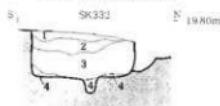


5・6 : SK331-1層

図版271 SK330・331土壤および出土遺物—縄文土器・石器—



SK332土壤(東から)



SK335土壤(西から)



図版272 SK332・335土壤

坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】底面直上に暗褐色シルトが堆積した後、地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SK330土壤】(図版271)

【位置】N-4・W-116 [確認面] 地山

【重複】SK331土壤と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.9m、底面径約1.7m、深さ約51cmの円形の土壤と考えられるが、南東部をSK331に壊されているため詳細は不明である。底面は平坦で、中央部には長径約27cm、短径約20cm、深さ約32cmの楕円形のピットが認められた。壁は急で一部オーバーハングして立ち上がっている。

【堆積土】床面直上に地山を含む褐灰・褐色シルト等が堆積した後、地山ブロックや小礫を含む暗・黒褐色シルトで埋め戻されている。

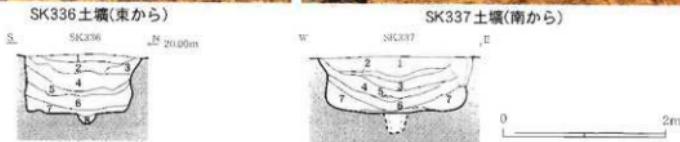
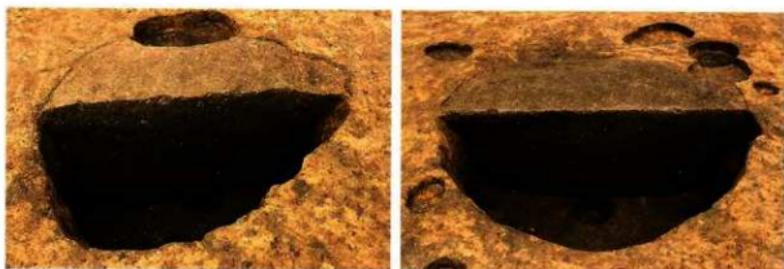
【出土遺物】堆積土や確認面から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版271-1～3)。

【SK331土壤】(図版271)

【位置】N-3・W-114 [確認面] 地山

【重複】SK330土壤と重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面が長径2.7m、短径1.8m、底面が長径2.2m、短径1.7m、深さ約55cmの楕円形の土壤である。底面は平坦で、中央部には径約40cm、深さ約25cmの円形のピットがあり、それを中心に放射状に延びる長さ65～90cm、上幅4～7cm、下幅2～5cm、深さ4～



層位	土色	土性	底入骨等	備考
1 塗覆色10YR3/4	シルト	地山を含む	自然地盤	
2 塗覆色10YR3/0	シルト	地山・炭粒を含む	自然地盤	
3 塗覆色10YR3/0	シルト	地山を含む	自然地盤	
4 黒褐色10YR3/0	シルト	地山を含む	自然地盤	
5 塗覆色10YR4/4	シルト	地山・コブ合む	自然地盤	
6 褐色10YR4/4	シルト	地山・コブを含む	自然地盤	
7 塗覆色10YR3/0	シルト	地山	自然地盤	
8 塗覆色10YR3/0	シルト	地山	自然地盤	

層位	土色	土性	底入骨等	備考
1 塗覆色10YR3/0	シルト	地山を含む、小礫を含む	自然地盤	
2 塗覆色10YR3/0	シルト	小礫を含む	自然地盤上	
3 黒褐色10YR3/0	シルト		自然地盤	
4 塗覆色10YR3/0	シルト		自然地盤	
5 こじらかし色10YR4/4	シルト	地山ブロックを含む	自然地盤	
6 白褐色10YR2/0	シルト	地山を軽微に含む	自然地盤	
7 塗覆色10YR3/0	シルト	地山を含む	自然地盤	
8 塗覆色10YR3/0	シルト	地山	自然地盤	

図版273 SK336・337土壤

5 cmの溝状の掘り込みが6条認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】床面直上に地山や炭粒を含む褐灰色シルトが堆積した後、地山ブロックや小礫を含む暗・黒褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版271-4)や磨石(5)、凹石(6)が出土している。

【SK332土壤】(図版272)

【位置】N-23・W-116 [確認面] 地山

【重複】小ビットと重複するのみでこれより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径1.3m、底面径1.2m、深さ約58cmの円形の土壤である。底面は平坦で、中央部には径約18cm、深さ約18cmの円形のビットが認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山粒を含む暗褐～黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK335土壤】(図版272)

【位置】N-8・W-121 [確認面] 地山

【重複】SI350住居跡と重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径1.3m、底面径1.2m、深さ約46cmの円形の土壤である。底面は平坦で、中央部には径約25cm、深さ約15cmの円形のビットが認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山粒や小礫を含む黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器片が数片出土したのみである。

【SK336土壤】(図版273)

【位置】N-14・W-127 [確認面] 地山

【重複】小ピットと重複するのみで、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径1.3~1.5m、底面径1.1~1.3m、深さ約74cmの不整円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、中央部には径約22cm、深さ約12cmの円形のビットが認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山、炭粒を含む暗・黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版274)。

【SK337土壤】(図版273)

【位置】N-13・W-125 [確認面] 地山

【重複】小ピットと重複するのみで、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.8m、底面径約1.6m、深さ約70cmの円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、中央部には径約30cm、深さ約19cmの円形のビットがあり、径約13cmの柱痕跡が認められた。壁はオーバーハング気味に立ち上がっている。

【堆積土】地山、小礫を含む暗・黒褐色シルト等が堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版275)。

【SK339土壤】(図版277)

【位置】N-11・W-119 [確認面] 地山

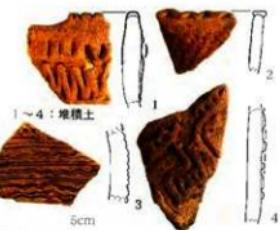
【重複】SK347土壤と重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径約2.1m、底面径約2.0m、深さ約120cmの円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は南西部を除き、オーバーハングして立ち上がっており、断面形はフラスコ状となっている。

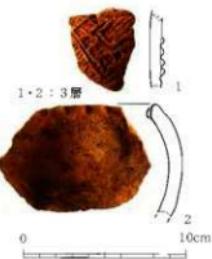
【堆積土】地山や炭粒、小礫を含む褐・暗褐色シルトなどが堆積した後、上面の窪みに焼骨が廃棄されている。

【出土遺物】堆積土から縄文土器(図版278-1~9)や石器(10~18)、不定形石器(19)、石核(20)、磨石(21)、磨・凹・敲石(22)が出土している。

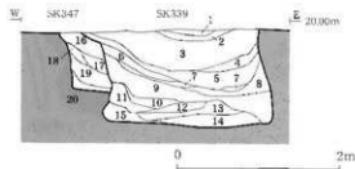
【SK347土壤】(図版277)



図版275 SK337出土遺物-縄文土器-



図版276 SK347土壤出土縄文土器



層位	土 士	サ 堆	底 層	性 質	基 本
1	褐色色(0YR3/4)	シルト	地盤を構成する	褐色土	
2	褐色色(0YR3/4)	シルト	地盤を構成する	褐色土	
3	褐色色(0YR3/4)	シルト	地盤を構成する	自然堆积土	
4	褐色色(0YR3/4)	シルト	地盤を構成する	自然堆积土	
5	褐色色(0YR3/4)	シルト	地盤を構成する	自然堆积土	
6	褐色色(0YR3/4)	日	褐色土を含む	自然堆积土	
7	褐色色(0YR3/4)	シルト		自然堆积土	
8	褐色色(0YR4/4)	シルト		自然堆积土	
9	褐色色(0YR4/4)	シルト		自然堆积土	
10	褐色色(0YR3/4)	シルト	地山ブロックを含む	自然堆积土	
11	褐色色(0YR3/4)	シルト		自然堆积土	
12	褐色色(0YR3/4)	シルト	褐色土を含む	自然堆积土	
13	褐色色(0YR3/4)	シルト		自然堆积土	
14	褐色色(0YR4/4)	シルト	褐色土を含む	自然堆积土	
15	褐色色(0YR3/4)	シルト	褐色土・地山土・小石を含む	自然堆积土	
16	褐色色(0YR3/4)	シルト	地盤を構成する	自然堆积土	
17	褐色色(0YR3/4)	シルト	地盤を構成する	自然堆积土	
18	褐色色(0YR3/4)	シルト		自然堆积土	
19	褐色色(0YR3/4)	シルト	地山ブロックを含む	自然堆积土	
20	褐色色(0YR4/4)	シルト		自然堆积土	



SK339断面拡大(南から)



SK339・347土壤(北西から)



SK339・347土壤断面(南から)

図版277 SK339・347土壤

[位置] N-10・W-120 [確認面] 地山

[重複] SK339土壤と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.9m、底面径約1.5m、深さ約73cmの円形と考えられる土壤であるが多くのSK339によって壊されており、詳細は不明である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

[堆積土] 地山粒や小礫を含む褐・暗褐色シルトやにぶい黄褐色シルトなどが堆積している。

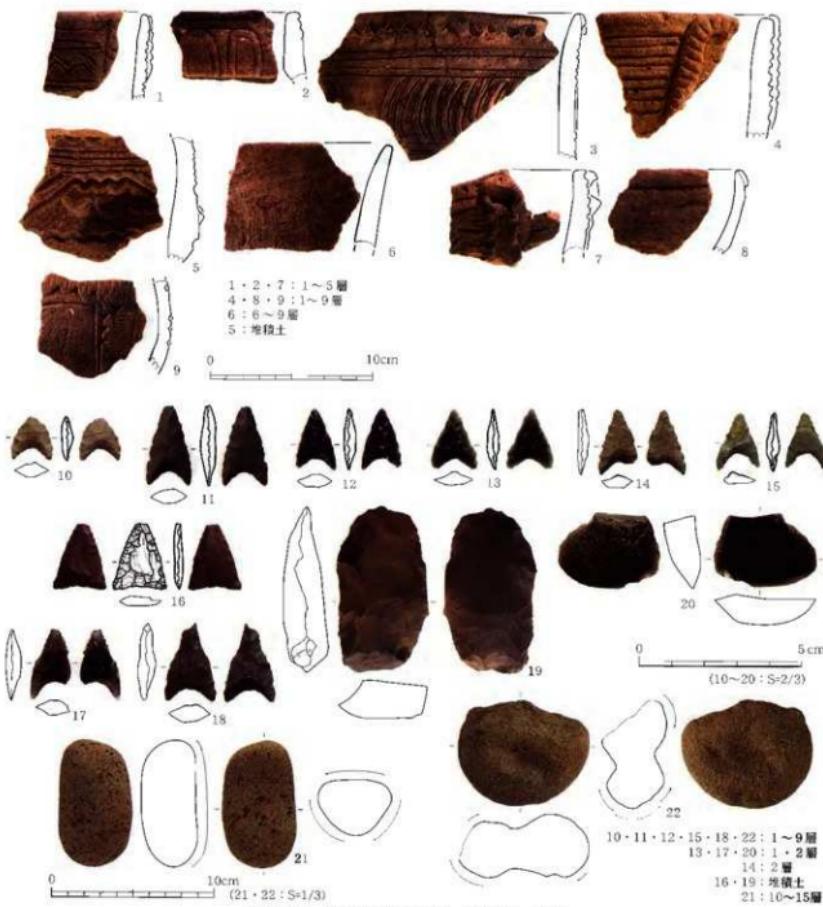
[出土遺物] 堆積土から縄文土器深鉢や浅鉢の破片(図版276)と土偶(図版426-2)が1点出土している。

【SK340土壤】(図版279)

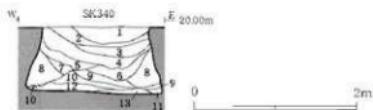
[位置] N-6・W-123 [確認面] 地山

[重複] SK342土壤と重複し、これより新しい。

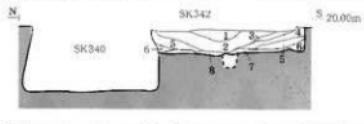
[規模・平面形・断面形] 上面径約1.5m、底面径約1.8m、深さ約80cmの円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁はオーバーハングして立ち上がっており、断面形



図版278 SK339土壤出土遺物－撲文土器・石器－



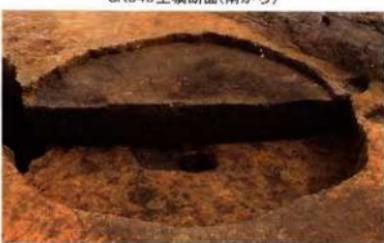
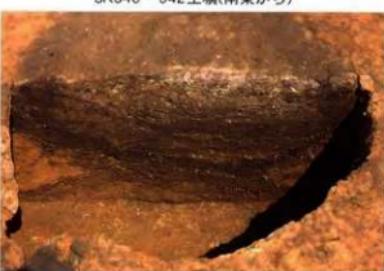
層位	土色	土 型	目 入 貨 物	備 注
1	褐色(10YR5/4)	シルト	小礫を多量、鉄鉱物・加熱変形骨質化	自然堆積土
2	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物を多量、小礫を含む	自然堆積土
3	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物を微量含む	自然堆積土
4	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物を微量、海貝・小礫を含む	自然堆積土
5	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物を微量含む	自然堆積土
6	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物を少量含む	自然堆積土
7	褐色(10YR5/4)	シルト	砂の塊やコケを含む	自然堆積土
8	赤褐色(10YR5/3)	シルト	周辺地を少量含む	砂層
9	赤褐色(10YR5/3)	シルト	灰鉄鉱・赤玉介を含む	自然堆積土
10	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物を微量含む	自然堆積土
11	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物を少量含む	自然堆積土
12	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物を微量含む	自然堆積土
13	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物を含む	自然堆積土

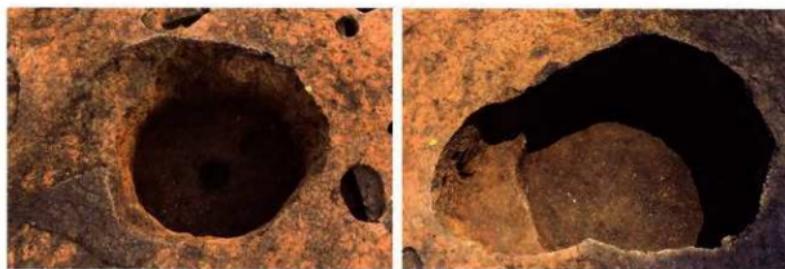


層位	土色	土 型	目 入 貨 物	備 注
1	褐色(10YR5/4)	シルト	赤玉介ブロックを含む	自然堆積土
2	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物を含む	自然堆積土
3	褐色(10YR5/3)	シルト	赤玉介ブロックを含む	自然堆積土
4	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物を少量含む	自然堆積土
5	褐色(10YR5/4)	シルト	鉄鉱物ブロックを含む	自然堆積土
6	褐色(10YR5/4)	シルト		自然堆積土
7	褐色(10YR5/4)	シルト		自然堆積土
8	褐色(10YR5/4)	シルト		自然堆積土



図版279 SK340・342土壤およびSK340出土遺物－撻文土器・石器－





SK341 土壤(北から)

SK343・344 土壤(北西から)



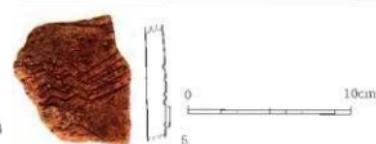
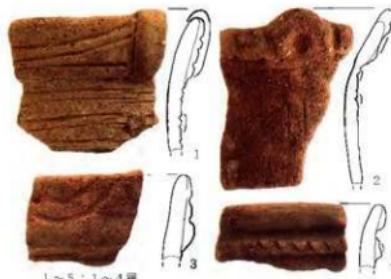
SK341 土壤断面(南から)

SK343・344 土壤断面(北西から)



層位	土色	性質	侵入物等	層名
1	褐色(10YR4/4)	シルト	小礫を含む	自然堆積土
2	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを含む	自然堆積土
3	褐色(10YR4/4)	シルト		自然堆積土
4	褐色(10YR3/3)	シルト	地山モサ集合	自然堆積土
5	褐色(10YR3/3)	シルト	地山を解説に多量含む	自然堆積土
6	こぶたの褐色(10YR3/3)	シルト		自然堆積土
7	褐色(10YR3/3)	シルト	地山モサに少量含む	自然堆積土
8	褐色(10YR3/3)	シルト		自然堆積土
9	褐色(10YR4/4)	シルト		自然堆積土
10	褐色(10YR4/4)	シルト		自然堆積土

層位	土色	性質	侵入物等	層名
1	黄褐色(10YR5/6)	シルト	褐色色ブロックを含む	人為堆土
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	褐色色モサブロックを少量含む	人為堆土
3	褐色(10YR4/4)	シルト		自然堆積土
4	褐色(10YR3/3)	シルト		自然堆積土
5	褐色(10YR3/3)	シルト	地山モサ集合	自然堆積土
6	褐色(10YR3/2)	砂混シルト	地山モサ・小礫を少量含む	自然堆積土
7	褐色(10YR3/2)	シルト		自然堆積土
8	褐色(10YR3/2)	シルト		自然堆積土
9	褐色(10YR5/6)	シルト	褐色モサブロックを少量含む	人為堆土
10	褐色(10YR3/2)	シルト		自然堆積土
11	褐色(10YR3/2)	シルト		自然堆積土
12	褐色(10YR3/2)	シルト		自然堆積土
13	褐色(10YR3/2)	シルト		自然堆積土
14	褐色(10YR3/2)	シルト	地山モサ集合	自然堆積土
15	褐色(10YR3/2)	シルト		自然堆積土
16	褐色(10YR3/2)	シルト		自然堆積土
17	褐色(10YR3/2)	シルト	地山モサ少量含む	自然堆積土
18	褐色(10YR3/2)	シルト	地山モサ少量含む	自然堆積土
19	褐色(10YR3/2)	シルト	地山モサ含む	自然堆積土
20	褐色(10YR4/4)	シルト		自然堆積土



図版280 SK341・343・344土壤およびSK343出土遺物－縄文土器－

はフラスコ状となっている。

【堆積土】地山崩落土とともに地山、炭粒、小礫を含む褐～黒褐色のシルト等が堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢(図版279-1・2)や石鏃(3)が出土している。

【SK341土壤】(図版280)

【位置】N-13・W-125 【確認面】地山

【重複】重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.5m、底面径約1.3m、深さ約82cmの円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、中央部には径約22cm、深さ約18cmの円形のピットが認められた。壁は急に立ち上がっており、一部オーバーハング気味に立ち上がっている。

【堆積土】地山、小礫を含む褐・暗褐色シルト等が堆積している。

【出土遺物】地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK342土壤】(図版279)

【位置】N-5・W-125 【確認面】地山

【重複】SI391住居跡、SK340土壤と重複し、SK340より古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.9m、底面径約2.1m、深さ約30cmの円形の土壤である。底面は平坦で、中央部には径約20cm、深さ約15cmの円形のピットが認められた。壁は急に立ち上がってている。

【堆積土】地山を含む褐・暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から不定形石器が出土している(図版281)。

【SK343土壤】(図版280)

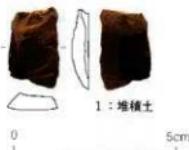
【位置】N-8・W-126 【確認面】地山

【重複】SI391住居跡、SK344土壤と重複し、これより新しい。

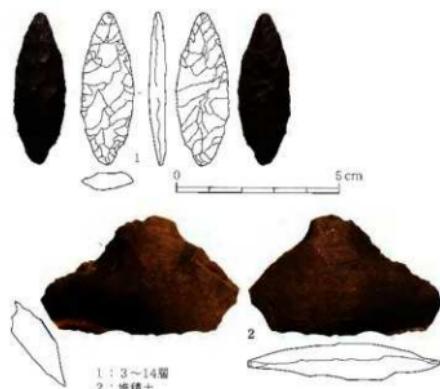
【規模・平面形・断面形】上面が長径約1.7m、短径1.5m、底面が長径約2.1m、短径1.8m、深さ約97cmの楕円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁はオーバーハングして立ち上がっており、断面形はフラスコ状となっている。

【堆積土】地山崩落土とともに地山粒、小礫を含む暗・黒褐色シルト等が堆積している。

【出土遺物】堆積土から尖頭器や不定形



図版281 SK342出土遺物－石器－



図版282 SK343土壤出土遺物－石器－



SK345土壤(北から)

W₁

SK345

E 20.20m



層位	土色	土性	盛入物等	備考
1	暗褐色(IVY3-7)	シルト	地山石を複数含む	自然堆積土
2	暗褐色(IVY3-7)	シルト		自然堆積土
3	暗褐色(IVY3-7)	シルト	地山ブロックを含む	自然堆積土
4	褐色(IVY4-6)	シルト	褐色土ブロックを含む	糊土
5	暗褐色(IVY3-7)	シルト	地山ブロックを多量含む	糊土
6	褐色(IVY4-6)	シルト	地山石を複数含む	自然堆積土
7	褐色(IVY4-6)	砂質シルト		自然堆積土

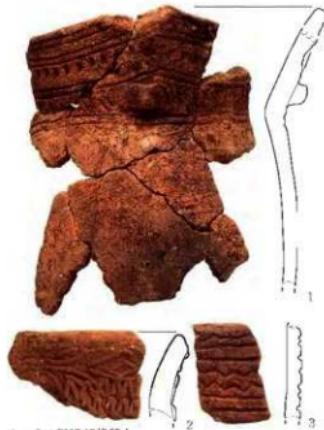
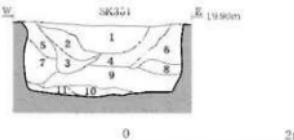


SK351土壤(北から)

W

SK351

E 19.90m



1 - 3 : SK345堆積土

0

10cm



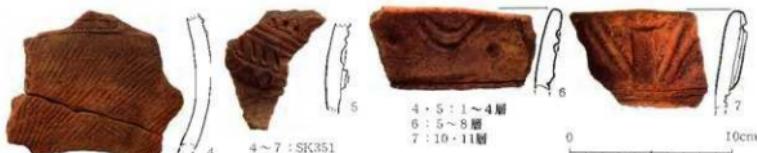
SK351土壤断面(南から)

W

SK351

E 19.90m

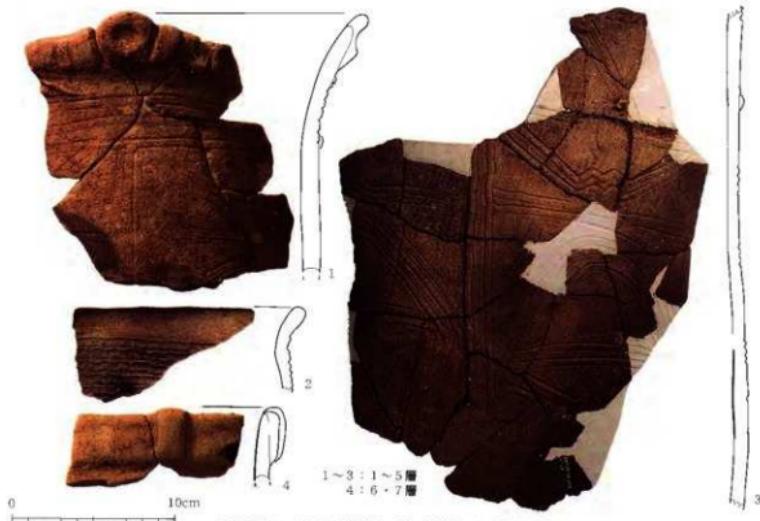
層位	土色	土性	盛入物等	備考
1	褐色(IVY3-7)	砂質シルト	地山ブロックを多量含む	自然堆積土
2	褐色(IVY3-7)	シルト	地山石を少量含む	自然堆積土
3	褐色(IVY3-7)	シルト	地山生土含む	自然堆積土
4	褐色(IVY3-7)	シルト	地山ブロック含む	自然堆積土
5	褐色(IVY3-7)	砂質シルト	地山石を少含む	糊土
6	褐色(IVY3-7)	砂質シルト	地山石を少含む	糊土
7	褐色(IVY3-7)	砂質シルト		糊土
8	褐色(IVY3-7)	砂質シルト		糊土
9	褐色(IVY3-7)	砂質シルト		糊土
10	褐色(IVY3-7)	シルト	地山石を複数含む	自然堆積土
11	褐色(IVY3-7)	シルト		自然堆積土



図版283 SK345・351土壤および出土遺物・縄文土器一



SK352土壤(西から)



図版284 SK352土壤および出土遺物(1)-縄文土器-

石器が出土している(図版282)。

【SK344土壤】(図版280)

【位置】N-9・W-125 [確認面] 地山

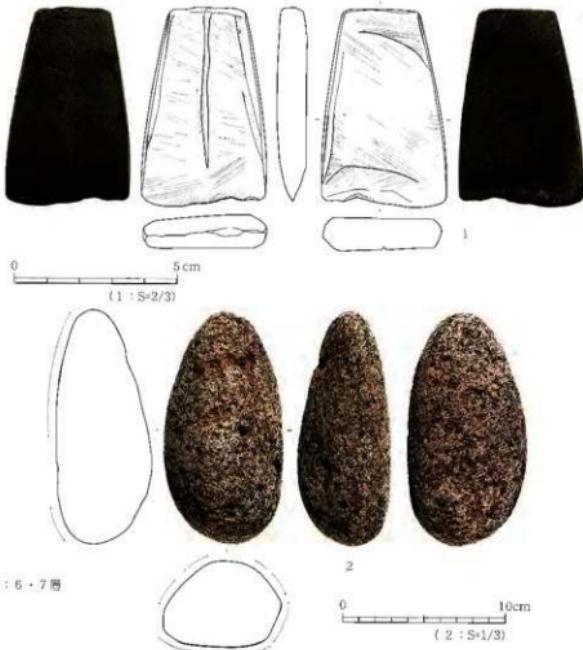
【重複】SK343土壤と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.0m、底面径約0.9m、深さ約50cmの円形と考えられるの土壤であるが南西半をSK343によって壊されており、詳細は不明である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【底面】礫混じりのローム層

【堆積土】地山粒を含む暗・黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。



図版285 SK352土壤出土遺物(2)-石器-

【SK345土壤】(図版283)

【位置】N-8・W-130【確認面】地山

【重複】小ピットと重複するのみで、これらより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.0m、底面径約1.1m、深さ約75cmの円形の土壌である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は一部を除き、オーバーハングして立ち上がっており、断面形はフラスコ状となっている。

【堆積土】地山崩落土とともに、地山粒を含む褐・暗褐色シルト等が堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版283-1～3)。

【SK351土壤】(図版283)

【位置】N-7・W-116【確認面】地山

【重複】重複は認められない。

【規模・平面形・断面形】上面径約2.0m、底面径約1.7m、深さ約91cmの円形の土壌である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急で、一部、オーバーハングして立ち上がっている。



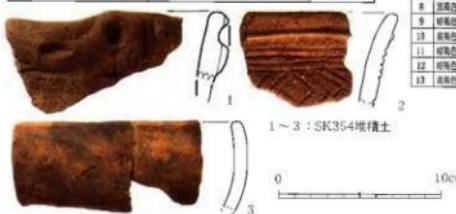
SK353土壤(北から)

SK354土壤(北から)



層位	土色	土性	組入物等	備考
1 黒褐色(10YR2/2)	シルト	自然堆積土		
2 黒褐色(10YR2/4)	シルト	地山ブロックを含む	自然堆積土	
3 黒褐色(10YR2/6)	シルト	地山岩を含む	自然堆積土	
4 こげ茶褐色(7YR3/4)	シルト	海砂ブロックを含む	自然堆積土	
5 黒褐色(10YR2/2)	シルト		自然堆積土	
6 黄褐色(10YR5/6)	シルト	人骨の骨	自然堆積土	
7 黑褐色(10YR3/3)	シルト		自然堆積土	

層位	土色	土性	組入物等	備考
1 黒褐色(10YR2/2)	シルト	小石・砂を含む。地山のモザイク。地山を複数含む	自然堆積土	
2 黄褐色(10YR2/2)	シルト	地山のモザイク。小石・砂を含む。化粧焼成土混じる	自然堆積土	
3 黑褐色(10YR2/4)	粘重シルト	地山のモザイク。瓦片・小石を含む	自然堆積土	
4 黑褐色(10YR2/4)	シルト	地山のモザイクとブリッケラ。セメント・木被覆を含む	自然堆積土	
5 黑褐色(10YR2/4)	シルト	地山のモザイク。瓦片の一部を含む。地山を含む	自然堆積土	
6 黑褐色(10YR2/2)	シルト	瓦片のモザイクと多量。瓦片を複数含む	自然堆積土	
7 黑褐色(10YR4/6)	粘重シルト	瓦片を多く含む。瓦片を複数含む	自然堆積土	
8 黑褐色(10YR2/2)	粘重シルト	瓦片を多く含む。瓦片を複数含む	自然堆積土	
9 黑褐色(10YR2/2)	粘重シルト	瓦片を含む。地山を複数含む	自然堆積土	
10 黑褐色(10YR4/6)	中質シルト	地山の土柱・小石を少額。瓦片を複数含む	自然堆積土	
11 黑褐色(10YR2/4)	中質シルト	地山のモザイク。小石を含む	自然堆積土	
12 黑褐色(10YR2/2)	中質シルト	瓦片を多く含む。瓦片を複数含む	自然堆積土	
13 黑褐色(10YR4/6)	粘重シルト	瓦片を多く含む。瓦片を複数含む	自然堆積土	



図版286 SK353・354土壤およびSK354出土遺物—縄文土器—

【堆積土】底面直上に暗褐色シルトが堆積した後、褐色砂質シルトで中位まで埋め戻されており、その後、再び地山粒を含むにぶい黄褐色砂質シルトや黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器片が少量出土している(図版283-4～7)。

【SK352土壤】(図版284)

【位置】N-8・W-132 [確認面] 地山

【重複】小ビットと重複するのみで、これらより新しい。

【規模・平面形・断面形】上底面とも長径約1.6m、短径1.2mで、深さ約52cmのやや不整楕円形の土壌である。底面は平坦である。壁は急で、西半部はオーバーハングして立ち上がっている。

【底面】砂混じりのローム層

【堆積土】地山崩落土とともに、地山や炭粒を含む褐～黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢(図版284)や磨製石斧(図版285-1)、磨石(2)が出土している。

【SK353土壤】(図版286)

【位置】 N-3・W-119 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.7m、底面径約1.4m、深さ約93cmの円形の土壙と考えられるが、南半は調査区外の為詳細は不明である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は一部オーバーハングして立ち上がってている。

【堆積土】 底面直上に暗褐色シルトが堆積した後、地山起源の黄褐色シルトで中位まで埋め戻されており、その後、再び地山粒を含む暗・黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器片が少量出土したのみである。

【SK354土壙】(図版286)

【位置】 N-4・W-123 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.7m、底面径約1.9m、深さ約94cmの円形の土壙と考えられるが、南半は調査区外の為詳細は不明である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は一部オーバーハングして立ち上がってている。

【堆積土】 地山崩落土とともに地山、炭粒、小礫を含む暗・黒褐色シルト等が堆積している。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版286)。

【SK355土壙】(図版287)

【位置】 N-10・W-108 [確認面] 地山

【重複】 SI310住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面が長径約1.8m、短径約1.6m、底面が長径約2.0m、短径約1.6m、深さ約120cmの楕円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は南西部を除き、オーバーハングして立ち上がっており、断面形はフラスコ状となっている。

【堆積土】 底面直上に暗褐色シルトが堆積した後、地山ブロックを多く含む褐色シルトで中位まで埋め戻されており、その後、再び地山粒を含む褐・暗褐色シルトが堆積している。また、上部には焼土や炭化物とともに廃棄された焼骨が少量みとめられる。

【出土遺物】 堆積土や底面から、縄文土器(図版287・288)や、不定形石器(図版289-1・2)、砾石(3)、磨石(5)、未製品と考えられる不明石製品(4)が出土している。

【SK357土壙】(図版290)

【位置】 N-6・W-119 [確認面] 地山

【重複】 SI350住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面が長径約2.8m、短径約1.6m、底面が長径約2.6m、短径約1.5m、深さ約55cmの団丸長方形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がってている。

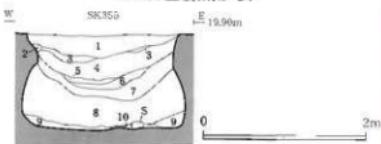
【堆積土】 地山ブロックや黒褐色シルトブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】 出土していない。

【SK362土壙】(図版290)



SK355土壤(南から)

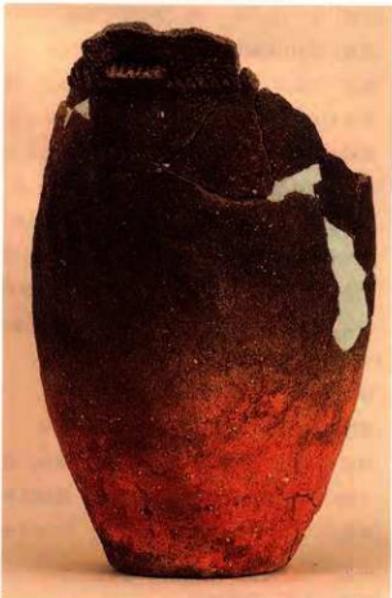
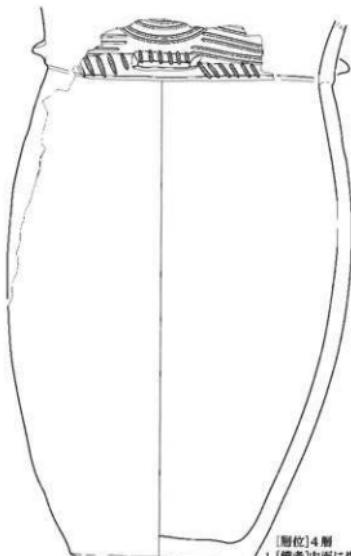


SK355層遺物出土状況

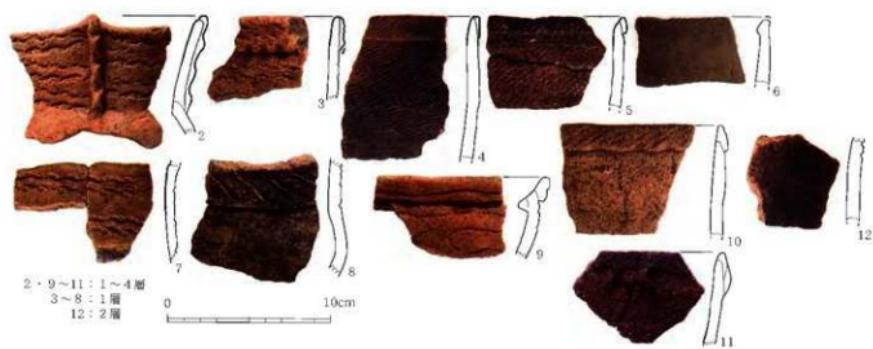
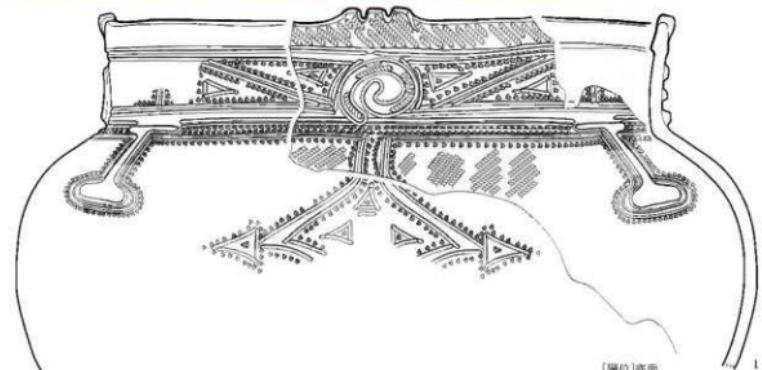
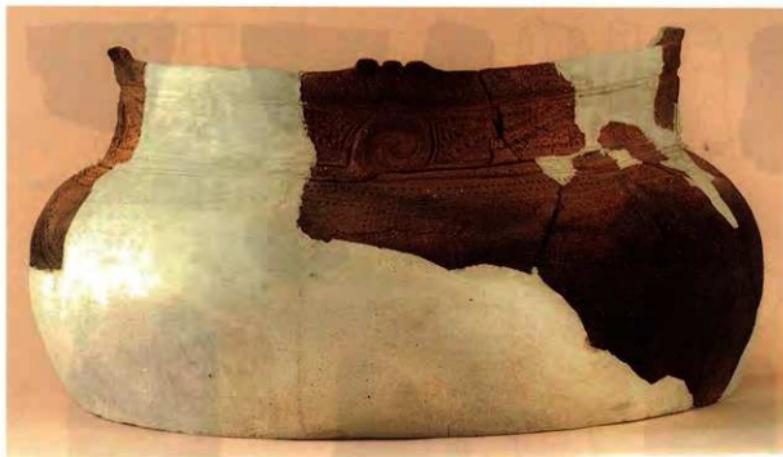


SK355底面遺物出土状況

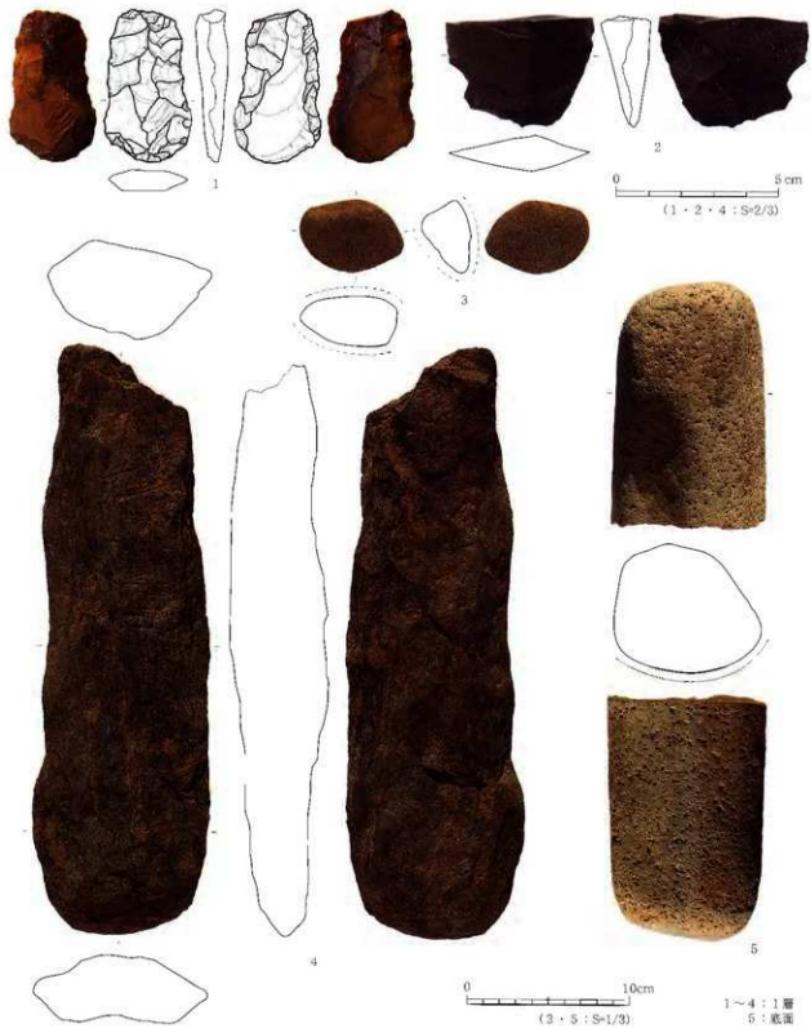
層位	上色	土作	底入	南北	質
1	褐色(0YR3/4)	シルト	褐褐色少量、褐色を含む		自然堆積土
2	褐色(0YR6/4)	シルト			自然堆積土
3	褐色(0YR3/4)	シルト	泥炭質・褐色を含む		自然堆積土
4	褐色(0YR4/4)	シルト	泥炭質・褐色・褐色を含む		自然堆積土
5	褐色(0YR3/4)	シルト	泥炭質・褐色を含む		自然堆積土
6	褐色(0YR4/4)	シルト	泥炭質・褐色・褐色を含む		自然堆積土
7	褐色(0YR4/0)	シルト	褐色質・褐色・褐色を含む		自然堆積土
8	褐色(0YR4/4)	シルト	褐色(?)・褐色を含む		人の手の土
9	褐色(0YR3/4)	シルト	褐色の骨粉を含む		自然堆積土
10	褐色(0YR3/2)	シルト			自然堆積土



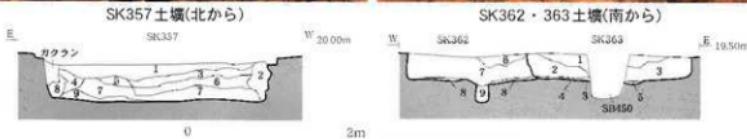
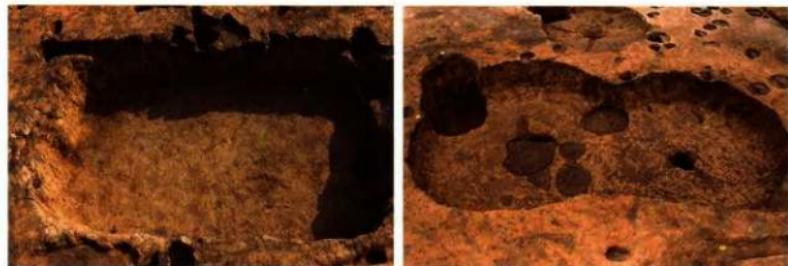
図版287 SK355土壤および出土遺物(1)-繩文土器-



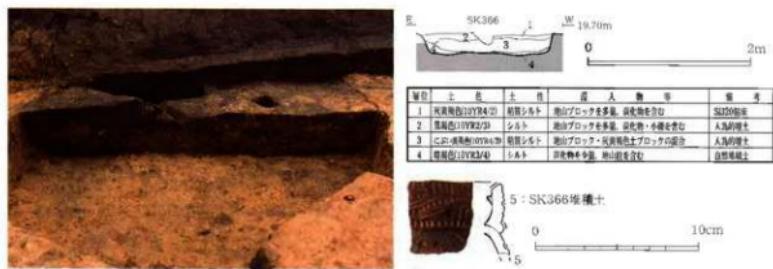
図版288 SK355土壤出土遺物(2)－繩文土器－



图版289 SK355土壤出土遗物(3)-石器-



層位	土 色	土 性	底 大 分 類	層 厚	層 期
1 残留地10Y3/4-0	シルト	深化帶・地盤・小塊を含む	Aの砂質土		Aの砂質土
2 残留地10Y3/4-0	シルト	地盤を含む・地盤・表面のシラップ状を含む	Aの砂質土		Aの砂質土
3 残留地10Y3/4-0	シルト	地盤を含む・地盤・表面のシラップ状を含む	Aの砂質土		Aの砂質土
4 残留地10Y3/2-0	シルト	地盤を含む・地盤・表面のシラップ状を含む	Aの砂質土		Aの砂質土
5 残留地10Y3/4-0	シルト	地盤を含む・地盤・表面のシラップ状を含む	Aの砂質土		Aの砂質土
6 残留地10Y3/4-0	シルト	地盤を含む・地盤・表面のシラップ状を含む	Aの砂質土		Aの砂質土
7 残留地10Y3/4-0	シルト	地盤を含む・地盤・表面のシラップ状を含む	Aの砂質土		Aの砂質土
8 残留地10Y4/0	シルト	地盤を含む・地盤・表面のシラップ状を含む	Aの砂質土		Aの砂質土
9 残留地10Y4/0	シルト	地盤を含む・地盤・表面のシラップ状を含む	Aの砂質土		Aの砂質土



SK366 土壌(北東から)

図版290 SK357 · 362 · 363 · 366土壌およびSK362 · 363 · 366出土遺物・縄文土器・石器 -

【位置】 N-17・W-99 [確認面] 地山

[重複] SK363土壙と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.7m、底面径約1.6m、深さ約35cmの円形の土壙である。底面は平坦で、中央部には径約20cm、深さ約22cmの円形のピットが認められた。壁は急で、一部オーバーハングして立ち上がっている。

[堆積土] 地山粒や小礫、炭化物を含む褐・暗褐色シルトが堆積している。

[出土遺物] 堆積土や確認面から縄文土器片が少量出土している(図版290)。

【SK363土壙】(図版290)

【位置】 N-16・W-98 [確認面] 地山

[重複] SB450掘立柱建跡・SK315・362土壙と重複し、SB450、SK315より古く、SK362より新しい。

[規模・平面形・断面形] 上面径約2.1m、底面径約1.9m、深さ約34cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

[堆積土] 地山ブロックや小礫、炭化物を含む褐色シルトやにぶい黄褐色シルトが堆積している。

[出土遺物] 堆積土から石鏃(図版290-1)、不定形石器(2)が出土している。

【SK365土壙】(図版8)

【位置】 N-2・W-110 [確認面] 地山

[重複] SI320住居跡と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面が長径約1.8m、短径約1.4m、底面が長径約1.7m、短径約1.3m、深さ約20cmの楕円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

[堆積土] 底面直上に地山粒を含む、褐灰色シルトが堆積した後、地山ブロック、小礫を含む黒褐色シルトで埋め戻されている。上面にはSI320床面構築の際、地山ブロックを含む灰黄褐色の粘質シルトが貼られている。

[出土遺物] 堆積土から石匙(図版291)が出土している。

【SK366土壙】(図版290)

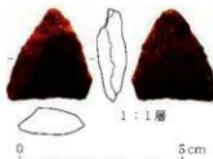
【位置】 N-1・W-107 [確認面] 地山

[重複] SI320住居跡と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面が長径1.8m以上、短径約1.6m、底面が長径1.8m以上、短径約1.5m、深さ約25cmの楕円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

[堆積土] 底面直上に地山粒を含む暗褐色シルトが堆積した後、地山ブロック、炭化物などを含む黒にぶい黄褐色・黒褐色シルトで埋め戻されている。上面にはSI320床面構築の際、地山ブロックや炭化物を含む灰黄褐色の粘質シルトが貼られている。

[出土遺物] 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版290-5)。



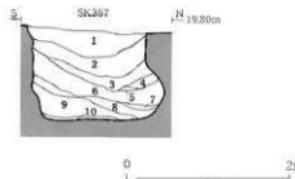
図版291 SK365土壙出土遺物-石器-



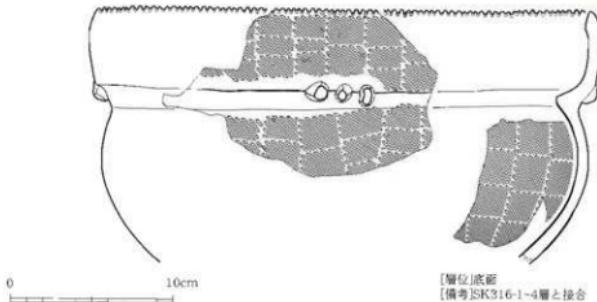
SK367土壤(南から)



SK367遺物出土状況(南東から)

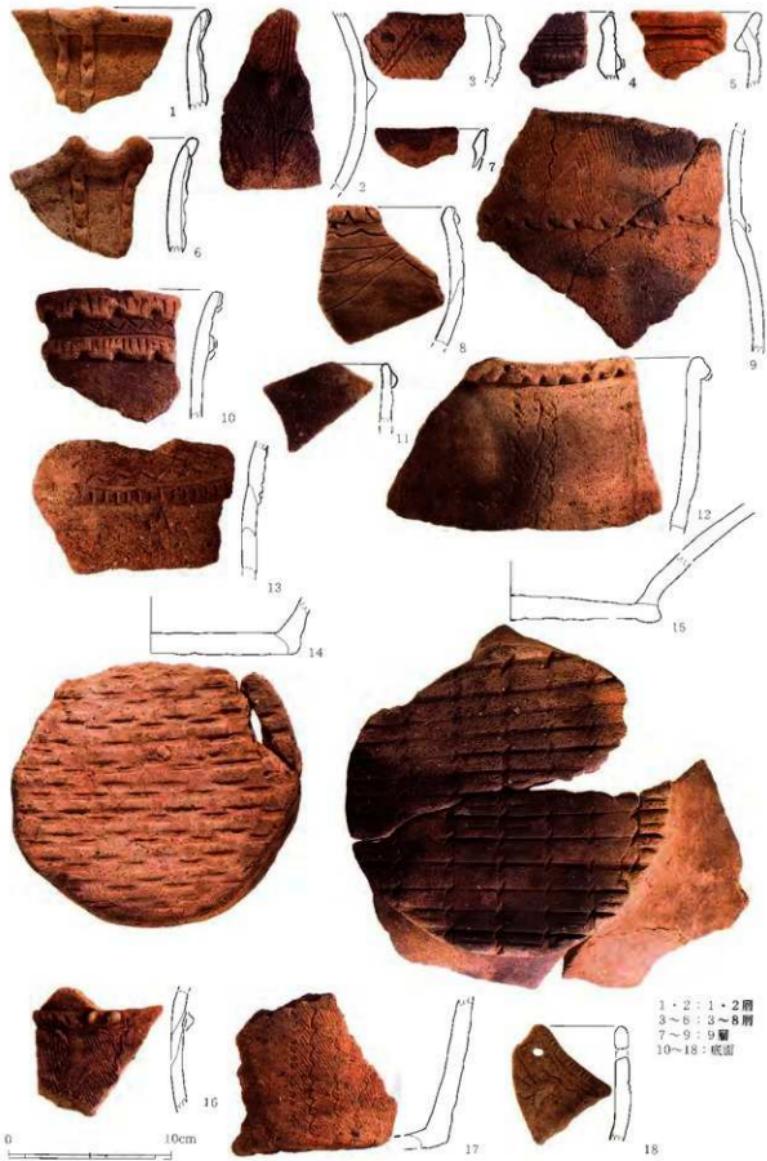


層位	土色	土性	盛入物	備考
1 布鳴色(?)の3/2	シルト	赤山砂・砂・小礫を少含。自然風化を基盤	自然堆積土	
2 布鳴色(?)の1/2	シルト	赤山砂ブロックを少含。自然砂・砂を多量含む	自然堆積土	
3 黄褐色(?)の2/2	シルト	赤山砂・赤山砂ブロックを多量含む	自然堆積土	
4 布鳴色(?)の3/2	シルト	赤山砂ブロックを多含。成層砂を量含む	自然堆積土	
5 上(?)赤褐色(?)の3/2	シルト	赤山砂ブロックを多量含む	自然堆積土	
6 布鳴色(?)の2/2	シルト	赤山砂・ブロックを少含。赤灰物・小礫を微量含む	自然堆積土	
7 赤褐色(?)の3/5	シルト	赤山砂・ブロックを多量含む	自然堆積土	
8 赤褐色(?)の2/2	シルト	赤山砂を多量。細い灰を少量含む	自然堆積土	
9 黄褐色(?)の4/4	シルト	赤山砂・ブロックを少含。黄灰物を微量含む	自然堆積土	
10 布鳴色(?)の2/2	シルト	赤山砂・赤山砂を微量含む	自然堆積土	

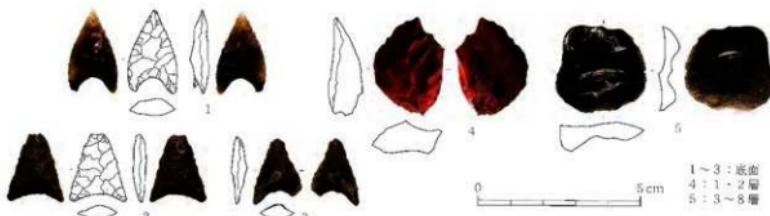


[層位]底面
[備考]SK367-1-4層と接合

図版292 SK367土壤および出土遺物(1)-縄文土器-



図版293 SK367土壤出土遺物(2)-縄文土器-



図版294 SK367土壤出土遺物(3)-石器-

【SK367土壤】(図版294)

【位置】N-13・W-111 [確認面] 地山

【重複】重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】上・底面ともに径約1.4m、深さ約116cmの円形の土壌である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急で、北半はオーバーハングして立ち上がっていている。

【堆積土】地山、炭粒、小礫を含む褐～黒褐色シルト等が堆積している。

【出土遺物】底面や堆積土から縄文土器(図版292・293)が出土している他、石核(図版294-1～3)、不定形石器(4)、石核(5)が出土している。

【SK378土壤】(図版9)

【位置】N-12・W-99 [確認面] 地山

【重複】SI370・375住居跡、SB450掘立柱建物跡と重複し、これらより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約2.2m、底面径約2.1m、深さ約34cmの円形の土壌である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がってている。

【堆積土】地山、炭粒を含む暗・黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版295)。

【SK379土壤】(図版9)

【位置】N-7・W-99 [確認面] 地山

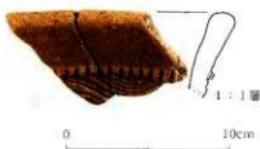
【重複】SI370住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面が長径約1.2m、短径約0.9m、底面が長径約0.9m、短径0.6m、深さ約18cmの楕円形の土壌である。壁はやや緩やかに立ち上がっており、断面形は皿状となっている。

【堆積土】地山、炭粒を含む暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK381土壤】(図版297)



図版295 SK378出土遺物-縄文土器-

【位置】 N-13・W-102 [確認面] 地山

【重複】 SI360住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.7m、底面径約1.6m、深さ約15cmの円形の土壙と考えられるが、西半をSI360bに壊されるため詳細は不明である。底面は平坦で、中央部には径約25cm、深さ約18cmの円形のピットがあり認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】 地山や小礫、炭化物を含む暗・黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK382土壙】 (図版297)

【位置】 N-16・W-102 [確認面] 地山

【重複】 SI360b・361c住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面径約2.0m、底面径約1.9m、深さ約40cmの円形の土壙と考えられるが、西側をSI361cに壊されるため詳細は不明である。底面は平坦で、中央部には径約20cm、深さ約35cmの円形のピットがあり、それを中心に放射状に延びる長さ65~80cm、上幅6~10cm、下幅2~5cm、深さ3~5cmの溝状の掘り込みが4条認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】 底面直上に地山、焼土、小礫を少量含む黒褐色シルトが堆積した後、地山ブロックを多く含む褐・暗褐色シルト等で中位まで埋め戻されており、その後、再び地山、焼土、小礫を少量含む黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK383土壙】 (図版297)

【位置】 N-18・W-101 [確認面] 地山

【重複】 SI360住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.8m、底面径約1.7m、深さ約44cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】 地山ブロック、炭化物、小礫、焼土を含む褐・暗褐色シルトなどで中位まで埋め戻されており、その後、再び地山、小礫を少量含む黒褐色シルトが堆積している。

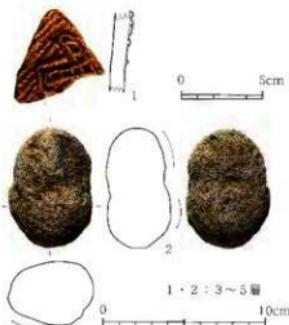
【出土遺物】 堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版296-1)や磨・凹石(2)が出土している。

【SK384土壙】 (図版297)

【位置】 N-17・W-105 [確認面] 地山

【重複】 SI360・361住居跡などと重複し、これより古い。

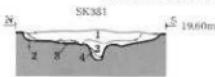
【規模・平面形・断面形】 上面径約1.7m、底面径約1.6m、深さ約15cmの円形の土壙である。底面は平坦で、中央部には径約30cm、深さ約16cmの円形のピットがあり、それを中心に放射状に延び



図版296 SK383出土遺物 - 縄文土器・石器 -



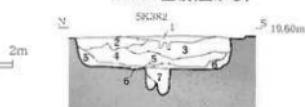
SK381 土壌(西から)



層位	土色	土性	盛入物	特徴	備考
1 暗褐色(10YR5/3) シルト	泥炭質・樹木由・小礫を多量含む	人為的擾土			
2 暗褐色(10YR5/3) シルト	暗褐色・コロナを多量含む	人為的擾土			
3 黄褐色(10YR5/2) シルト	泥炭質・樹木由・小礫を少量含む	自然擾亂土			
4 暗褐色(10YR5/3) シルト	泥炭質・コロナを多量含む・小礫を少量含む	人為的擾土			



SK382 土壌(西から)



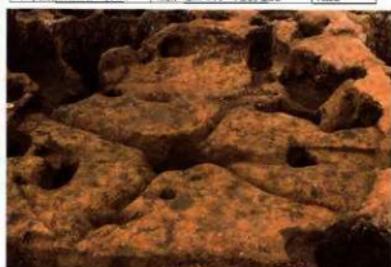
層位	土色	土性	盛入物	特徴	備考
1 暗褐色(10YR5/2) シルト	泥炭質・樹木由・粘土・小礫を多量含む	自然擾亂土			
2 暗褐色(10YR5/2) シルト	泥炭質・樹木由・粘土・小礫を多量含む	人為的擾土			
3 こげ茶褐色(10YR4/4) シルト	無機・無機ブロック・粘土・小礫を少量含む	人為的擾土			
4 黄褐色(10YR4/4) シルト	無機ブロックを多量・泥炭質・粘土・小礫を少量含む	人為的擾土			
5 暗褐色(10YR4/4) シルト	泥炭質・無機・粘土・小礫を少量含む	人為的擾土			
6 暗褐色(10YR3/2) シルト	泥炭質・樹木由・粘土・小礫を少量含む	自然擾亂土			
7 暗褐色(10YR3/2) シルト	泥炭質・樹木由・粘土・小礫を多量含む	人為的擾土			



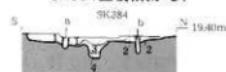
SK383 土壌(西から)



層位	土色	土性	盛入物	特徴	備考
1 黄褐色(10YR5/2) シルト	泥炭質・樹木由・小礫を多量含む	自然擾亂土			
2 黄褐色(10YR5/2) シルト	泥炭質・樹木由・樹木由・小礫を少量含む	人為的擾土			
3 こげ茶褐色(10YR4/4) シルト	泥炭質・樹木由・小礫を少量含む	人為的擾土			
4 黄褐色(10YR4/4) シルト	無機ブロックを多量・泥炭質・粘土・小礫を少量含む	人為的擾土			
5 暗褐色(10YR3/2) シルト	泥炭質・樹木由・粘土・小礫を少量含む	人為的擾土			



SK384 土壌(東から)



層位	土色	土性	盛入物	特徴	備考
1 暗褐色(10YR5/2) シルト	泥炭質・樹木由・小礫を多量含む	自然擾亂土			
2 暗褐色(10YR5/2) シルト	泥炭質・無機・粘土・小礫を少量含む	自然擾亂土			
3 黄褐色(10YR2/2) シルト	泥炭質・無機・粘土・小礫を少量含む	自然擾亂土			
4 暗褐色(10YR3/2) シルト	泥炭質・小礫を少量・樹木由・ブロックを含む	人為的擾土			



SK385 土壌(西から)



層位	土色	土性	盛入物	特徴	備考
1 暗褐色(10YR5/2) シルト	泥炭質・樹木由・小礫を少量・樹木由・ブロックを含む	人為的擾土			
2 暗褐色(10YR5/2) シルト	泥炭質・樹木由・小礫を少量・樹木由・ブロックを含む	人為的擾土			

図版297 SK381~385土壤およびSK383出土遺物

る長さ60～80cm、上幅5～10cm、下幅2～4cm、深さ2～5cmの溝状の掘り込みが4条認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山、炭化物、焼土、小礫を含む暗・黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK385土壙】(図版297)

【位置】N-13・W-105【確認面】地山

【重複】SI360・361住居跡などと重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面が長径約1.8m、短径約1.4m、底面が長径約1.4m、短径約1.3m、深さ約50cmのやや不整梢円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山、炭化物、焼土、小礫を含むにぶい黄褐色や暗褐色のシルトで埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

【SK386土壙】(図版299)

【位置】N-15・W-103【確認面】地山

【重複】SI360・361住居跡、SK387土壙などと重複し、SI360・361より古く、SK387より新しい。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.6m、底面径約1.5m、深さ約22cmの円形の土壙である。底面は平坦で、中央部には長径約60cm、短径30cm、深さ約18cmの梢円形のビットが認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山ブロック、炭化物、焼土、小礫を含む黒褐・暗褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】確認面から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SK387土壙】(図版299)

【位置】N-16・W-103【確認面】地山

【重複】SI360・361住居跡、SK386土壙などと重複し、これらより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約1.3m、底面径約1.2m、深さ約44cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山ブロック、炭化物、小礫を含む褐～黒褐色シルトで埋め戻されている。

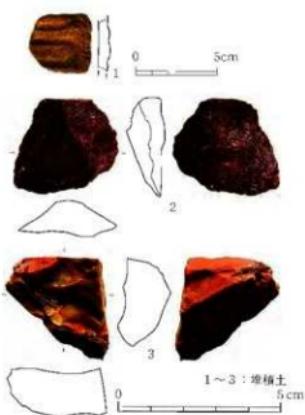
【出土遺物】出土していない。

【SK394土壙】(図版299)

【位置】N-18・W-133【確認面】地山

【重複】重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】上面径約0.9m、底面径約1.0m、深さ約67cmの円形の土壙である。底面は平坦で、ほぼ中央部には径約12cm、深さ約8cmの円形のビットが認められた。壁は一部を除き、オーバーハングして立ち上



図版298 SK394出土遺物-縄文土器・石器-



番号	土 色	土 性	深 入 部 分	層 号
1	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色ブロック多量、褐色土・褐色土ブロック含む	人為的土
2	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色ブロック・褐色土・小塊を少量含む	人為的土
3	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色土・褐色土・褐色土ブロック含む	Pt1層
4	褐色色(IVY3/4)	シルト	褐色ブロック多量、小塊を少量、褐色土ブロック含む	人為的土
5	褐色色(IVY3/4)	シルト	小塊を少量含む	人為的土
6	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色土・褐色土・褐色土ブロック含む	人為的土
7	褐色色(IVY3/4)	シルト	褐色ブロック多量、小塊を少量、褐色土ブロック含む	人為的土

番号	土 色	土 性	深 入 部 分	層 号
1	褐色色(IVY4/3)	シルト	褐色土・褐色土・褐色土	自然堆積土
2	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色土を少量含む	自然堆積土
3	褐色色(IVY4/3)	シルト	褐色土	褐色土
4	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色、褐色土・褐色土	自然堆積土
5	褐色色(IVY4/3)	シルト	褐色ブロック含む	自然堆積土
6	褐色色(IVY4/3)	シルト	褐色土を含む	自然堆積土



番号	土 色	土 性	深 入 部 分	層 号
1	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色土・褐色土・褐色土	自然堆積土
2	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色、褐色角を少量含む	自然堆積土
3	褐色色(IVY3/4)	シルト	褐色土ブロック含む	自然堆積土
4	褐色色(IVY3/4)	シルト	褐色土・褐色土・褐色土ブロック含む	自然堆積土
5	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色土・褐色土	自然堆積土

番号	土 色	土 性	深 入 部 分	層 号
1	褐色色(IVY4/3)	シルト	褐色土・褐色土・褐色土	自然堆積土
2	褐色色(IVY4/3)	シルト	褐色ブロック含む	自然堆積土
3	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色土・褐色土・褐色土	自然堆積土
4	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色土・褐色土	自然堆積土
5	褐色色(IVY3/3)	シルト	褐色土・褐色土	自然堆積土
6	褐色色(IVY4/3)	シルト	褐色土	自然堆積土
7	褐色色(IVY4/3)	シルト	褐色土・褐色土・褐色土ブロック	自然堆積土
8	褐色色(IVY4/3)	シルト	褐色土・褐色土	自然堆積土

図版299 SK386・387・394～396土壤および出土遺物

がっており、断面形はプラスコ状となっている。

【堆積土】地山崩落土とともに、地山や炭粒を含む褐～黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片(図版298-1)や石匙(2)、石核(3)が出土している。

【SK395土壌】(図版298)

【位置】N-17・W-133 [確認面] 地山

【重複】重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】上面径約0.8m、底面径約1.0m、深さ約70cmの円形の土壌である。底面は平坦で、壁はオーバーハングして立ち上がっており、断面形はプラスコ状となっている。

【堆積土】地山や炭粒を含む暗・黒褐色シルトやにぶい黄褐色シルトなどが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版299-1・2)。

【SK396土壌】(図版299)

【位置】N-12・W-137 [確認面] 地山

【重複】重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】上面径約0.9～1.0m、底面径約0.9m、深さ約83cmの円形の土壌である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山崩落土とともに、地山や炭粒を含む褐色シルトやにぶい黄褐色粘質シルト等が堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器片が少量出土している(図版299-3)。

【SK397土壌】(図版300)

【位置】N-11・W-140 [確認面] 地山

【重複】重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】上面径約0.9m、底面径約0.8m、深さ約58cmの円形の土壌である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山崩落土とともに、焼土粒を含む褐色シルトや地山ブロックを多く含む明黄褐色粘質シルト等が堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版300-1～3)。

【SK398土壌】(図版7)

【位置】N-12・W-140 [確認面] 地山

【重複】重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】上面径約0.8m、底面径約0.6m、深さ約18cmの円形の土壌である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】地山粒や細砂を含む褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器片が少量出土している(図版300-4)。

【SK401土壌】(図版301)

【位置】N-15・W-84 [確認面] 地山



図版300 SK397・398土壤および出土遺物

[重複] SI400・404住居跡と重複し、SI400より古い。SI404との新旧関係は明確に出来なかった。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.9m、底面径約1.6m、深さ約60cmの円形の土壤である。底面は平坦で、中央部には径約30cm、深さ約27cmの円形のビットが認められた。壁は急に立ち上がっている。

[堆積土] 地山や炭化物粒を褐～黒褐色シルトなどが堆積している。

[出土遺物] 堆積土から繩文土器深鉢の破片(図版301-1)や石鎌(2)、石匙(3)、磨石(4・5)、イチジク形土製品(図版436-3)が出土している。

【SK399土壤】(図版302)

[位置] N-4・W-83 [確認面] 地山

[重複] SK411・415土壤と重複し、これより新しい。

[規模・平面形・断面形] 上面が長軸約3.2m、短軸約2.8m、底面が長軸約2.8m、短軸約2.4m、深さ約22cmの隅丸方形の土壤である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

[堆積土] 暗褐色シルトや地山ブロックを多く含む黒褐色粘質シルトが堆積している。

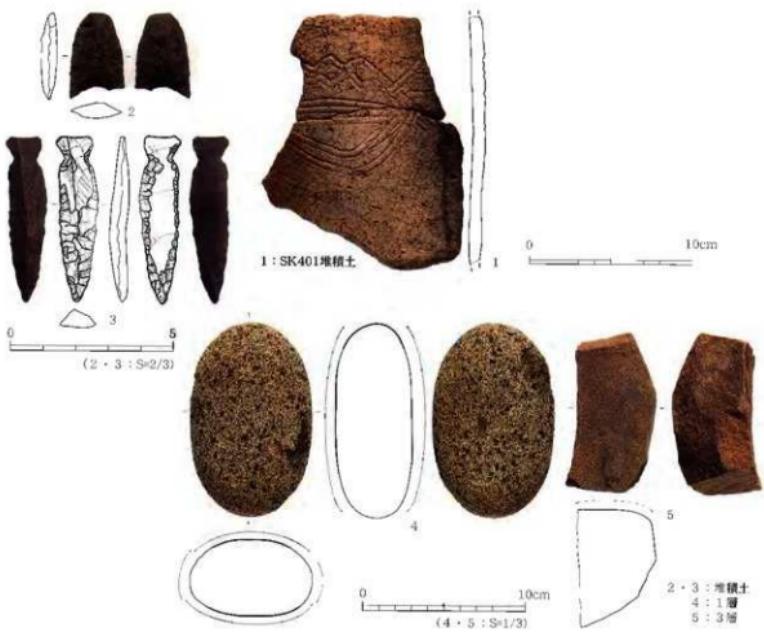
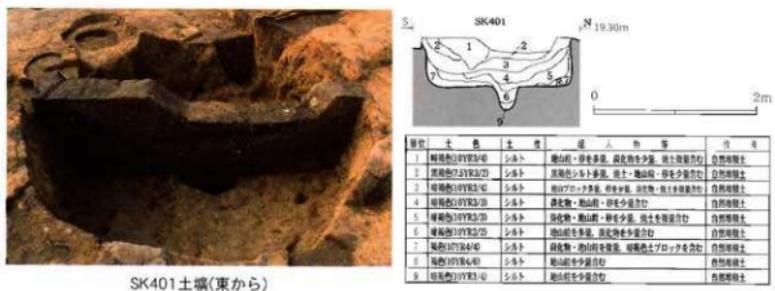
[出土遺物] 堆積土から台付浅鉢(図版302-1)や不定形石器(5・6)が出土している。

【SK411土壤】(図版302)

[位置] N-16・W-135 [確認面] 地山

[重複] SK399土壤と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.2～1.5m、底面径1.4～1.6m、深さ約66cmのやや不整円形の土壤である。底面は平坦で、中央部には径約35cm、深さ約14cmの円形のビットが認められた。壁



図版301 SK401土壤および出土遺物

はオーバーハングして立ち上がっており、断面形はフラスコ状となっている。

【堆積土】地山崩落土とともに、地山を含む暗褐色粘質シルトや黒褐色シルト等が堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢や浅鉢(図版302-2～4)や筐状石器(7)が出土している。

【SK415土壤】(図版302)

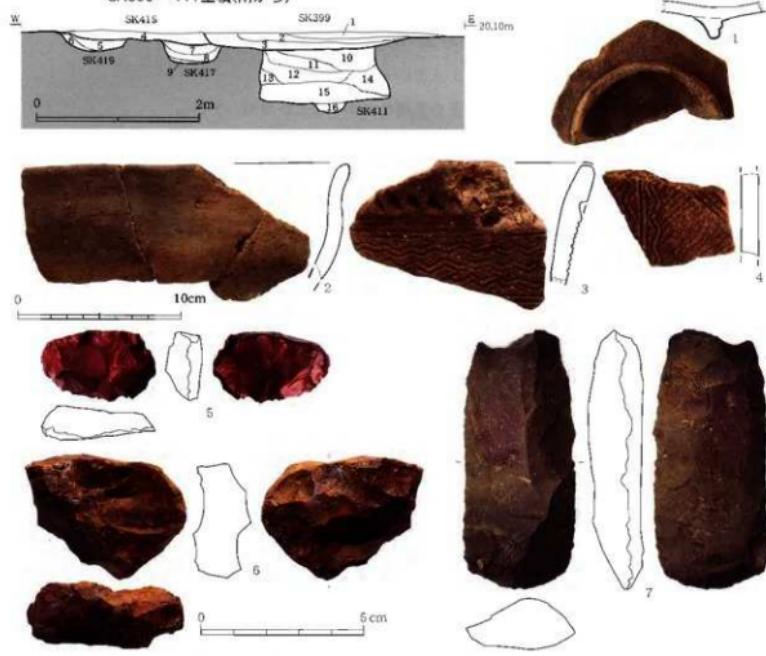
【位置】N-16・W-138 [確認面] 地山

【重複】SK399・417～419土壤と重複し、SK399より古く、SK417～419より新しい。

【規模・平面形・断面形】SK399とはほぼ同じ規模、形態の土壤と考えられるが、東半をSK399に壤

層序	土色	土性	遺 大 物 品	備考
1	褐色(0.1993/2)	シルト	赤土器・軽石含む	自然母土
2	褐色(0.1993/4)	シルト質粘土	焼けガラス・脱灰物・骨等含む	自然母土
3	褐色(0.1993/2)	シルト質粘土	焼けガラス・骨等含む	自然母土
4	褐色(0.1993/2)	シルト質粘土	東山プロック・軽石含む	人の跡の土
5	褐色(0.1993/4)	シルト質粘土	焼けガラス・骨等含む	人の跡の土
6	褐色(0.1993/3)	シルト質粘土	焼けガラス・骨等含む	人の跡の土
7	褐色(0.1993/1)	シルト	焼け土・鐵器・鹿骨等	自然母土
8	褐色(0.1993/2)	泥状・石英砂	焼けガラス・焼灰等含む	自然母土
9	褐色(0.1993/2)	シルト質粘土	焼け土・骨等含む	自然母土
10	褐色(0.1993/2)	シルト	焼け土・骨等含む	自然母土
11	褐色(0.1993/2)	泥状・石英砂	焼け土・骨等含む・骨等多量含む	自然母土
12	褐色(0.1993/2)	泥状・石英砂	焼け土・骨等含む	自然母土
13	褐色(0.1993/4)	シルト質粘土	焼け土・骨等含む	自然母土
14	褐色(0.1993/4)	シルト質粘土	焼けガラス・骨等含む	自然母土
15	褐色(0.1993/2)	シルト質粘土	焼けガラス	自然母土

SK399・411土壤(南から)



1 : SK399 - 1層

2 ~ 4 : SK411堆積土

5・6 : SK399 - 1層

7 : SK411堆積土

8 : SK415堆積土

図版302 SK399・411・415・417土壤およびSK399・411・415出土遺物—縄文土器・石器—

されるため詳細は不明である。

【堆積土】地山ブロックを多く含む黒褐色粘質シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から不定形石器(図版302-8)が出土している。

【SK417土壤】(図版302)

【位置】N-16・W-138 [確認面] 地山

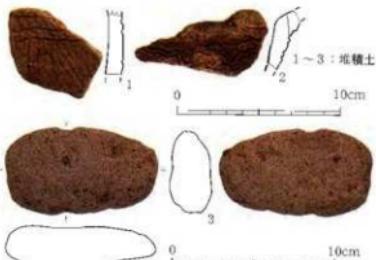
【重複】SK415土壤と重複し、これより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径約0.8m、底面径約0.6m、深さ約28cmの円形の土壤である。底面は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】地山や炭を含む暗褐色粘質シルトや黒褐色シルトなどが堆積している。

【出土遺物】堆積土から少量の縄文土器片(図版303-1・2)と石錐(3)が出土している。

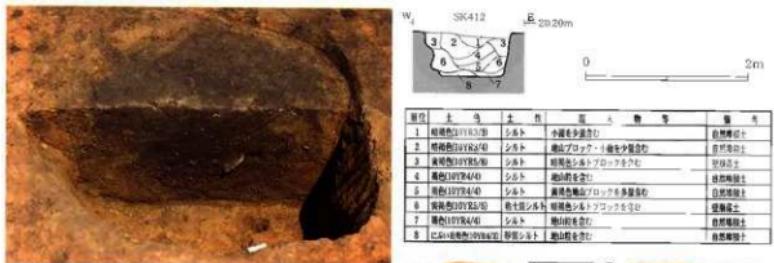
【SK407土壤】(図版304)



図版303 SK417土壤出土遺物-縄文土器・石器-



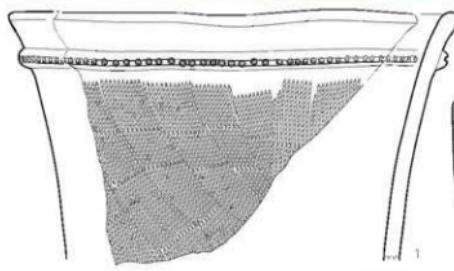
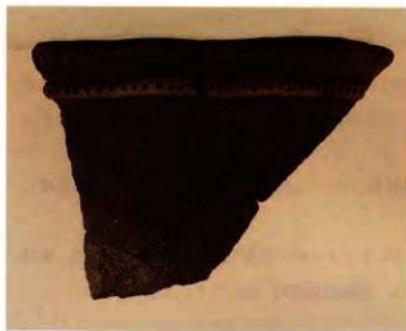
SK407土壤(東から)



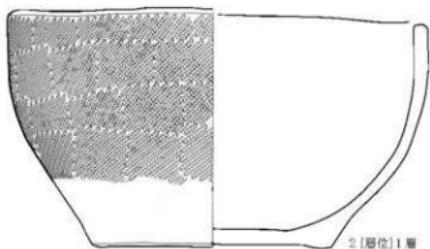
SK412土壤(南から)



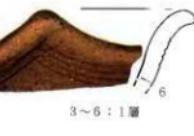
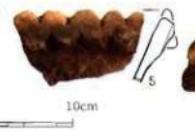
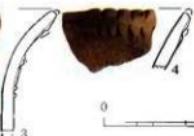
図版304 SK407・412土壤およびSK412出土遺物-縄文土器-



[層位]底面



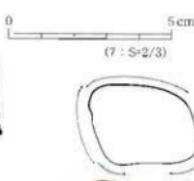
2 [層位]側



0

10cm

3~6:1層



0

5cm

(7:S=2/3)



9

8

7

6

5

4

3

2

1

0

10cm

(8~9:S=1/3)

図版305 SK407土塙出土遺物—縄文土器・石器—

【位置】 N-4・W-83 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められなかった。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.8m、底面径約1.6m、深さ約30cmの円形の土壙である。底面は平坦で、中央部には径約25cm、深さ約38cmの円形のビットが認められた。壁は急に立ち上がっている。

[堆積土] 焼土、炭化物、地山を粒状に微量含む暗褐色シルトや地山粒を含む褐色シルト等が堆積している。

[出土遺物] 底面や堆積土から縄文土器深鉢(図版305-1・3~6)・浅鉢(2)が出土している他、堆積土から楔形石器(7)、磨・凹・敲石(8)、磨・敲石(9)、土偶(図版430-9)が出土している。

【SK412土壙】(図版304)

【位置】 N-14・W-140 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められなかった。

[規模・平面形・断面形] 上面径約1.0m、底面径約0.8m、深さ約44cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

[堆積土] 地山崩落土とともに、焼土粒や灰を含む褐色粘質シルトや暗褐色粘質シルト等が堆積している。

[出土遺物] 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版304)。

【SK413土壙】(図版307)

【位置】 N-14・W-139 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められなかった。

[規模・平面形・断面形] 上面径約0.7m、底面径約0.6m、深さ約54cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

[堆積土] 地山を含む暗褐・褐色シルトが堆積しており、第2層には土器が一括廃棄されている。

[出土遺物] 堆積土から石鏃(図版306)と少量の縄文土器片が出土している。

【SK414土壙】(図版7)

【位置】 N-10・W-138 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められなかった。

[規模・平面形・断面形] 上面径約0.6m、底面径約0.5m、深さ約44cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

[堆積土] 焼土粒や灰を含む褐色粘質シルトや暗褐色粘質シルトが堆積している。

[出土遺物] 堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が少量出土している。

【SK416土壙】(図版307)



図版306 SK413土壙出土遺物-石器-

W SK413 E 20.20m



層位	土色	土性	盛入物等	備考
1	褐色(10YY4/4)	シルト	焼山青瓦多量含む	自然堆積土
2	褐色(10YY4/4)	シルト	焼山ブロック・土瓦含多量含む	堆积土
3	褐色(10YY4/4)	シルト	焼山ブロックを含む	自然堆積土
4	褐色(10YY4/4)	シルト	土瓦含多量	自然堆積土
5	褐褐色(10YY3/4)	シルト	角材	自然堆積土

E SK416 W 20.40m



層位	土色	土性	盛入物等	備考
1	褐色(10YY4/4)	シルト	焼山青瓦多量含む	自然堆積土
2	褐褐色(10YY3/4)	シルト	焼山ブロック多量含む	自然堆積土
3	褐褐色(10YY3/4)	シルト質粘土		自然堆積土
4	褐褐色(10YY3/4)	シルト質粘土		自然堆積土

W SK418 E 20.10m



層位	土色	土性	盛入物等	備考
1	褐色(10YY4/4)	シルト	焼山青瓦多量、瓦を含む	自然堆積土
2	黄褐色(10YY5/4)	シルト	褐褐色色土ブロックを含む	自然堆積土
3	褐褐色(10YY3/4)	シルト		自然堆積土
4	褐褐色(10YY3/4)	シルト		自然堆積土
5	褐褐色(10YY3/4)	シルト質粘土	焼山・褐褐色土ブロックの混合	堆积土
6	褐褐色(10YY4/4)	シルト質粘土	瓦	自然堆積土
7	褐褐色(10YY4/4)	シルト質粘土	瓦、焼山青瓦多量含む	自然堆積土

W SK424 E 20.40m



層位	土色	土性	盛入物等	備考
1	灰褐色(10YY4/4)	シルト	焼山青瓦多量含む	自然堆積土
2	褐褐色(10YY5/4)	シルト	焼山青瓦多量、燒瓦含むシルトブロックを含む	自然堆積土
3	褐褐色(10YY4/4)	シルト質粘土	焼山青瓦含む	自然堆積土
4	褐褐色(10YY3/4)	シルト質粘土	焼山ブロックを多量含む	堆积土
5	褐褐色(10YY3/4)	シルト質粘土	瓦	自然堆積土
6	褐褐色(10YY3/4)	シルト質粘土	焼山ブロックを多量含む	自然堆積土
7	褐褐色(10YY4/4)	シルト質粘土	瓦	自然堆積土
8	褐褐色(10YY4/4)	シルト質粘土	瓦含む	自然堆積土



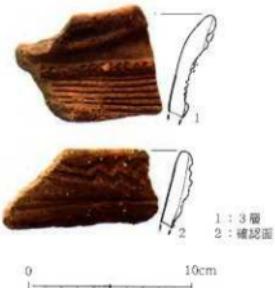
SK413土壤(南から)



SK416土壤(北から)



SK418土壤(南から)



SK424土壤(南から)

図版307 SK413・416・418・424土壤およびSK424出土遺物

【位置】 N-6・W-137 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】 上・底面ともに径約0.8mで深さ約30cmの円形の土壙である。底面は平坦である。壁は急で、一部オーバーハング気味に立ち上がっている。

【堆積土】 焼土粒や灰を含む暗褐色粘質シルトや地山を含む褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SK418土壙】(図版307)

【位置】 N-17・W-138 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】 上・底面ともに径約0.8mで、深さ約50cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっており、一部はオーバーハングしている。

【堆積土】 地山や炭を含む暗褐色粘質シルトや黒褐色シルトなどが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SK419土壙】(図版302)

【位置】 N-16・W-138 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】 上面径約0.8m、底面径約0.6m、深さ約23cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】 地山や炭を含む暗褐色粘質シルトや黒褐色シルトなどが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。

【SK423土壙】(図版7)

【位置】 N-12・W-142 [確認面] 地山

【重複】 重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】 上面径約0.3m、底面径約0.2m、深さ約15cmの円形の土壙である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】 地山、炭、焼土を含む褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 出土していない。

【SK424土壙】(図版307)

【位置】 N-8・W-140 [確認面] 地山

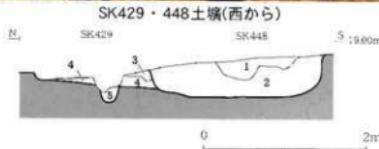
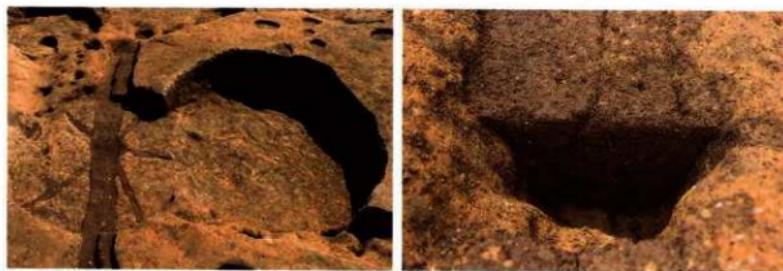
【重複】 重複は認められなかった。

【規模・平面形・断面形】 上面径約0.8m、底面径約0.6m、深さ約80cmの円形の土壙である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】 地山崩落土とともに、地山を含む黄褐色や褐色の粘質シルトなどが堆積している。

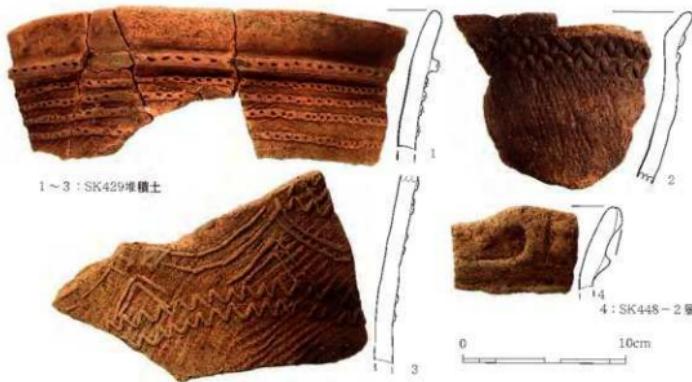
【出土遺物】 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版307)。

【SK429土壙】(図版308)



SK429底面Pit断面(西から)

層位	土色	土性	腐入深度	備考
1 堆積層(75YR3/2)	シルト	褐色土多量、赤色・褐色・褐色色ブロック状含む	表面土	
2 硬化層(75YR4/4)	シルト	褐色土多量、赤色・褐色色ブロック状含む	入泥的硬土	
3 剥離層(75YR4/2)	シルト	褐色土少量含む		
4 堆積層(75YR4/4)	シルト	変化無、褐色土を少量含む		
5 地面(75YR4/4)	シルト	褐色土少量、褐色土を少量含む		



層位	土色	土性	腐入深度	備考
1 堆積層(75YR3/2)	シルト	赤色土・褐色土を少量含む	自然硬土	
2 堆積層(75YR3/2)	シルト	褐色土を少量含む	自然硬土	
3 堆積層(75YR3/2)	シルト	褐色土を少量、赤色土・褐色土を少量含む	自然硬土	
4 堆積層(75YR3/4)	シルト	褐色土を少量含む	自然硬土	

図版308 SK429・431・448土壤およびSK429・448出土遺物

【位置】 N-17・W-72 [確認面] 地山

【重複】 SI430住居跡、SK448土壤と重複し、これらより古い。

【規模・平面形・断面形】 上面径約2.3m、底面径約2.0m、深さ約10cmの円形の土壤と考えられるが南側をSK448に壊されるため詳細は不明である。底面は平坦で、中央部には径約28cm、深さ約20cmの円形のピットがあり、それをを中心に放射状に延びる長さ80~90cm、上幅6~8cm、下幅2~4cm、深さ2~6cmの溝状の掘り込みが4条認められた。壁は急に立ち上がっている。

【堆積上】 地山、炭化物を少量含む暗・黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版308-1~3)。

【SK448土壤】 (図版308)

【位置】 N-15・W-72 [確認面] 地山

【重複】 SI430住居跡、SK429土壤と重複し、SI430より古く、SK429より新しい。

【規模・平面形・断面形】 上面が径約2.1~2.6m、底面径約2.1m、深さ約52cmの円形の土壤である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

【堆積土】 烧土、骨片を含む黒褐色シルトや地山、炭化物を含む褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版308-4)。

【SK431土壤】 (図版308)

【位置】 N-6・W-75 [確認面] 地山およびSI120堆積土上面

【重複】 SI430・454・484・485・488住居跡と重複し、これらより新しい。

【規模・平面形・断面形】 上面が長径約5.5m、短径約3.0m、底面が長径約4.5m、短径約2.6m、深さ約20cmの不整楕円形の土壤である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】 地山粒や炭化物、焼土粒を小量含む暗・黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器深鉢や浅鉢(図版309-1~10)、石鏃(11)、石錐(12・13・15)、石匙(14・16)、不定形石器(17)、石核(18)、楔形石器(19)、土偶(図版432-4)が出土している。

【SK432土壤】 (図版310)

【位置】 N-7・W-76 [確認面] 地山

【重複】 SI120住居跡と重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】 上面径約1.0~1.2m、底面径約0.6~0.8m、深さ約60cmの不整円形の土壤である。地山3c層まで掘り込まれており、底面は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】 地山を含む暗褐色シルトが堆積している。

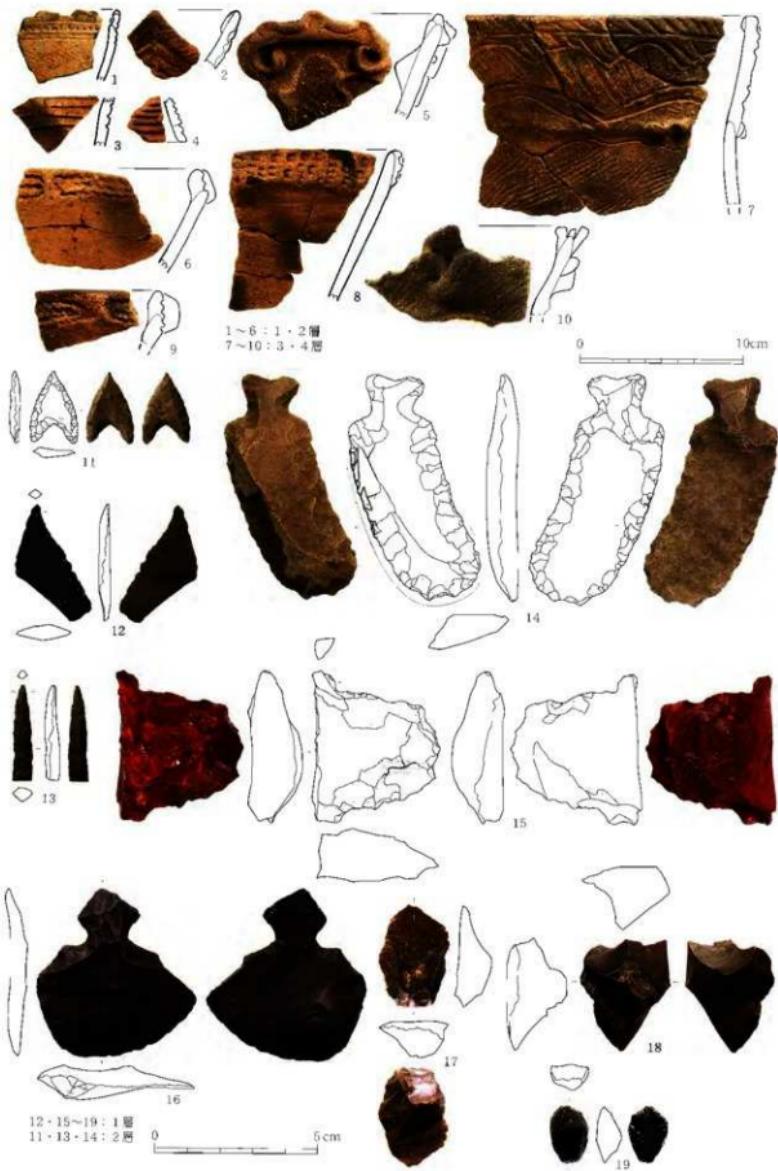
【出土遺物】 堆積土から縄文土器深鉢や浅鉢(図版310-1~3)、石匙(4)、不定形石器(5)、磨石(6)、磨・敲石(7)、磨・凹石(8)、石皿(9)が出土している。

【SK442土壤】 (図版311)

【位置】 S-3・W-83 [確認面] 地山

【重複】 SK443土壤と重複し、これより新しい。

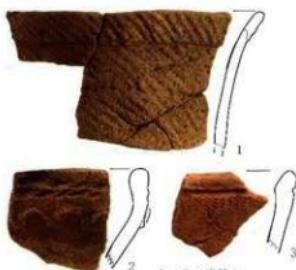
【規模・平面形・断面形】 上面が長径約0.7m、短径約0.4m、底面が長径約0.6m、短径約0.3m、深



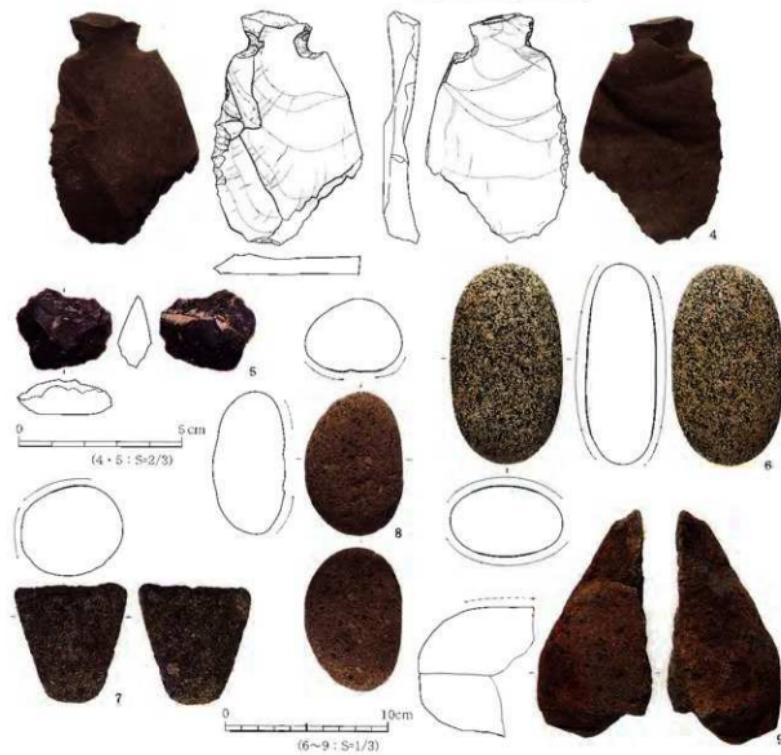
図版309 SK431土壤出土遺物－縄文土器・石器－



SK432土壤(東から)



0 10cm



図版310 SK432土壤および出土遺物－縄文土器・石器－



図版311 SK442土壤および出土遺物(1)

さ約18cmの楕円形の土壤である。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】地山、炭化物、焼土を含む褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】堆積土から縄文土器深鉢や浅鉢が出土している(図版311・312)。

【SK443土壤】(図版9)

【位置】S - 3・W - 83 [確認面] 地山

【重複】SK442土壤、Pit5329と重複し、これらより古い。

【規模・平面形・断面形】上面径0.6～0.7m、底面径約0.6m、深さ約26cmの不整円形の土壤である。
底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がっている。

【堆積土】地山、炭化物、小礫を含む褐色シルトや暗褐色砂質シルトが堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK445土壤】(図版9)未精査(平面確認のみ)

【位置】N - 9・W - 81 [確認面] 地山

【重複】SI406・444住居跡と重複し、これらより古い。

【規模・平面形・断面形】規模・平面形はSI406に壊されているため不明である。掘り下げは行っていない。

【SK449土壤】(図版313)未精査(トレンチによる土壤上部の断面観察のみ)

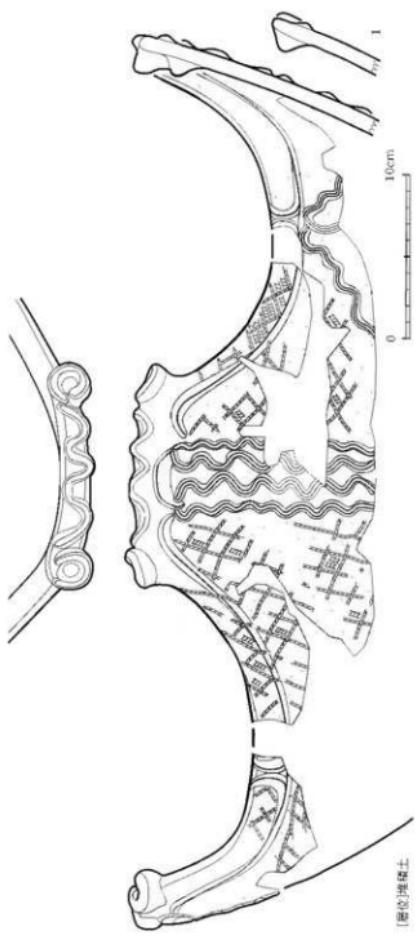
【位置】N - 15・W - 72 [確認面] 地山

【重複】SI430・451住居跡、Pit4512・4556と重複し、これらより古い。

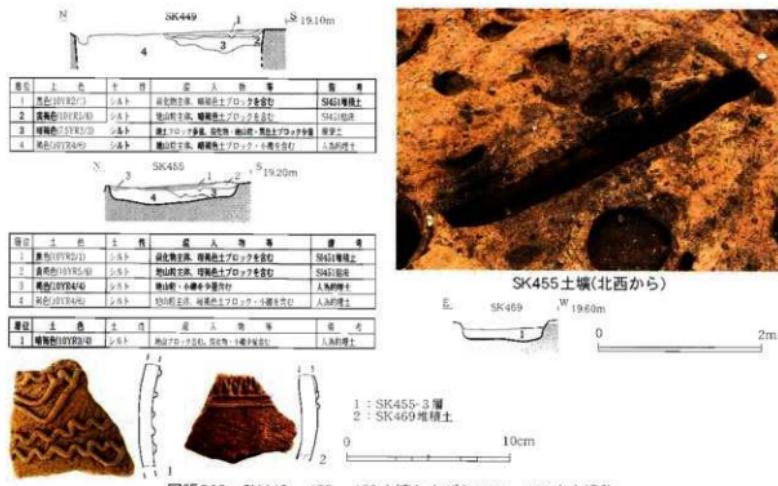
【規模・平面形・断面形】上面径約2.4mの円形の土壤である。未精査の為、底面径、深さ、断面形は不明である。

【堆積土】上部は地山を多量に含む褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】地文のみの縄文土器胴部破片等が極少量出土している。



图版312 SK442土壤出土遗物(2)



図版313 SK449・455・469土壤およびSK455・469出土遺物

【SK455土壤】(図版313)未精査(トレーナによる断面観察のみ)

[位置] N-10・W-78 [確認面] 地山

[重複] SI451住居跡等と重複し、これより古い。

[規模・平面形・断面形] 上面が長径約1.8m、短径約1.4m、深さ約25cmの楕円形の土壤である。

壁は急に立ち上がっている。未精査の為、底面径は不明である。

[堆積土] 地山を多量に含む褐色シルトで埋め戻されている。

[出土遺物] 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版313-1)。

【SK469土壤】(図版313)

[位置] N-5・W-126 [確認面] 地山

[重複] SI391住居跡と重複し、これより新しい。

[規模・平面形・断面形] 上面が長径約1.0m、短径約0.5m、底面は長径約0.9m、短径約0.4m、深さ約25cmの楕円形の土壤である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がっている。

[堆積土] 地山ブロック、炭粒、小礫を含む暗褐色シルトが堆積している。

[出土遺物] 堆積土から縄文土器深鉢の破片が出土している(図版313-2)。

表1 その他の土壤(未精査)

遺構No.	図版No.	平面形	規模(cm)	位置
SK410	9	円形	約178	N-3・W-80
SK481	9	円形	約193	N-12・W-83
SK482	9	円形	約172	N-7・W-78
SK484	9	円形	約195	N-6・W-80

5 柱列

【SA132柱列】(図版12)

【位置】 N-0-S・W-21 [確認面] 地山

【重複】 SD10溝跡と重複し、これより古い。

【方向】 北西から南東方向に円弧状に延びる柱列である。

【規模】 長さ約10mで、26個の柱穴を検出した。

【柱穴・間隔】 直径15cm前後、深さ9~25cmの円形の小ビットが、0~45cmの間隔で並んでおり、その間所々に直径20~30cm、深さ18~48cmで不整円形の掘り方を持ち、直径15cm前後で円形の柱痕跡が認められる、やや大きめのビットがみられる。

【堆積土】 柱痕跡は地山粒を含む暗褐色粘質シルト、掘り方埋土は地山ブロックを含む暗褐色粘質シルトである。

【出土遺物】 出土していない。

【SA133柱列】(図版12)

[[位置]] N-0-S・W-21 [確認面] 地山

【重複】 本来SA132柱列と重複し、造り替えである可能性も考えられるが、新旧関係は不明である。

【方向】 北西から南東方向に延びる柱列で、南東部は擾乱により壊されている。

【規模】 検出長約3.6mで、11個の柱穴を検出した。

【柱穴・間隔】 直径20cm前後、深さ6~23cmの円形の小ビットが、0~43cmの間隔で並んでいる。

【堆積土】 地山粒を含む暗褐色粘質シルトである。

【出土遺物】 出土していない。

6 遺物堆積層

【SX140遺物堆積層】(図版314)

【位置】 調査区北側に位置する沢の南側斜面に堆積したものである。

【層序】 1層-暗褐色粘質シルト 層厚100 cm前後

2層-暗褐色粘質シルト 層厚30~40 cm

3層-にぶい黄褐色粘土 層厚20cm前後

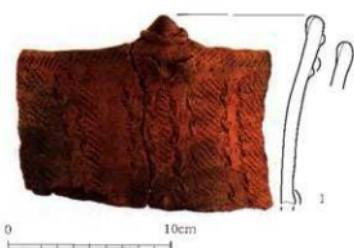
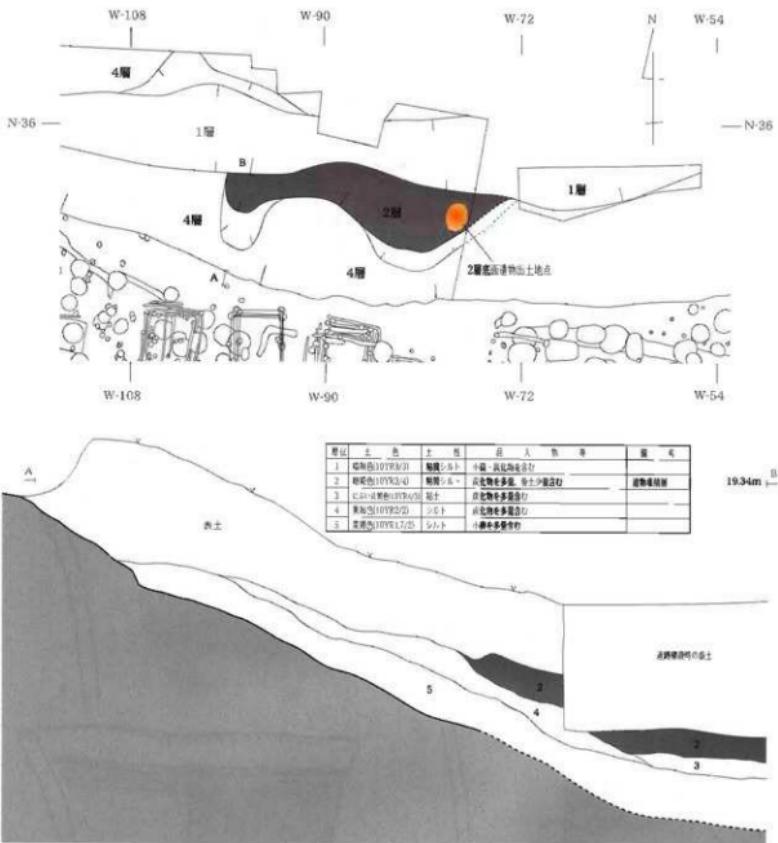
4層-黒褐色シルト 層厚15~35 cm

5層-黒色粘質シルト 層厚30~50 cm

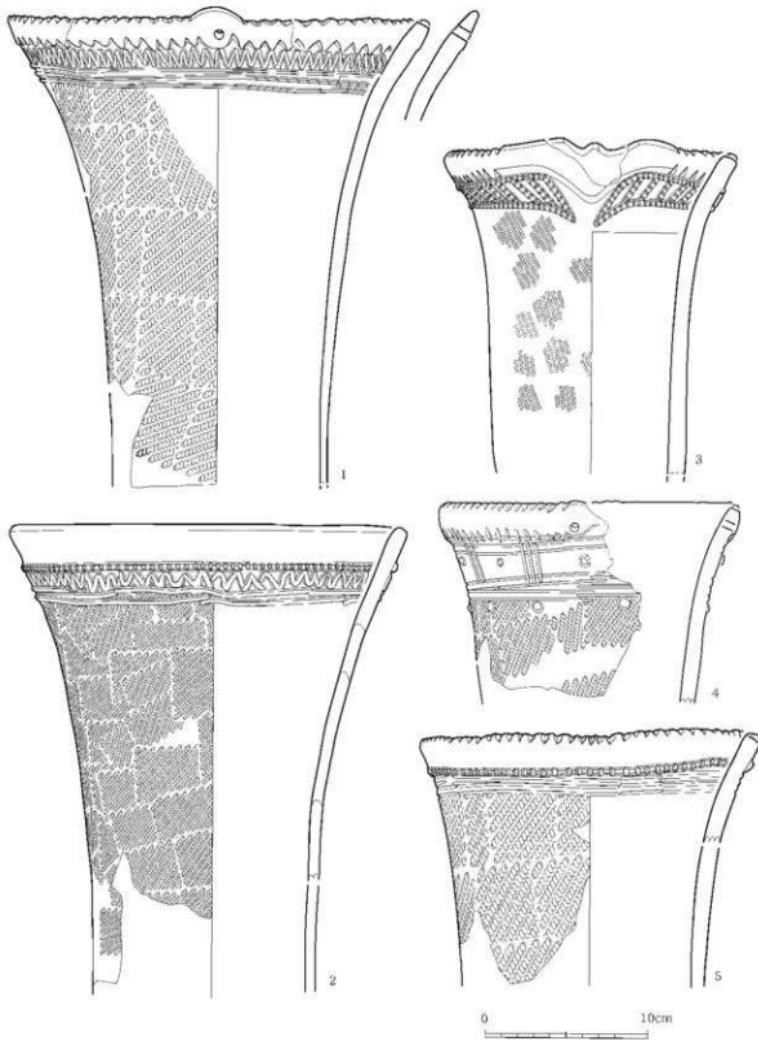
6層-黄褐色砂質シルト (地山) 層厚30~50 cm

【出土状況】 遺物は主に第1・2層から出土しているが、第1層は古代以降に堆積した層で、縄文時代の遺物堆積層は第2層である。但し、2層出土遺物についても、斜面東側で2層と4層との層離面に貼り付く状態で出土したもの(図版321-2・3)が一部認められる他は、殆ど層中に散在的に含まれるもので、廃棄された元位置を保った状況で出土したものは少ない。

【出土遺物】 多量の縄文土器と石器(図版314~334)、土偶(図版423・430・434)等が出土している。



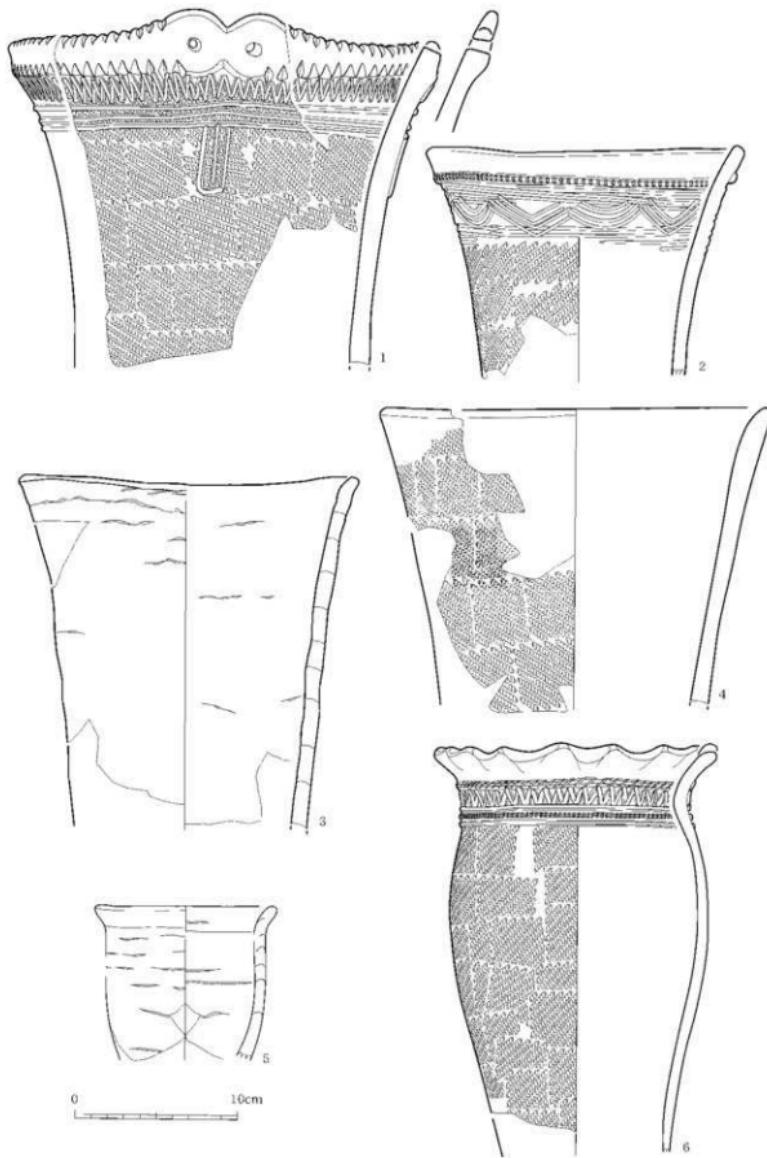
図版314 SX140遺物堆積層 および第1層出土遺物－縄文土器－



圖版315 SX140遺物堆積層第2層出土遺物－繩文土器(1)－



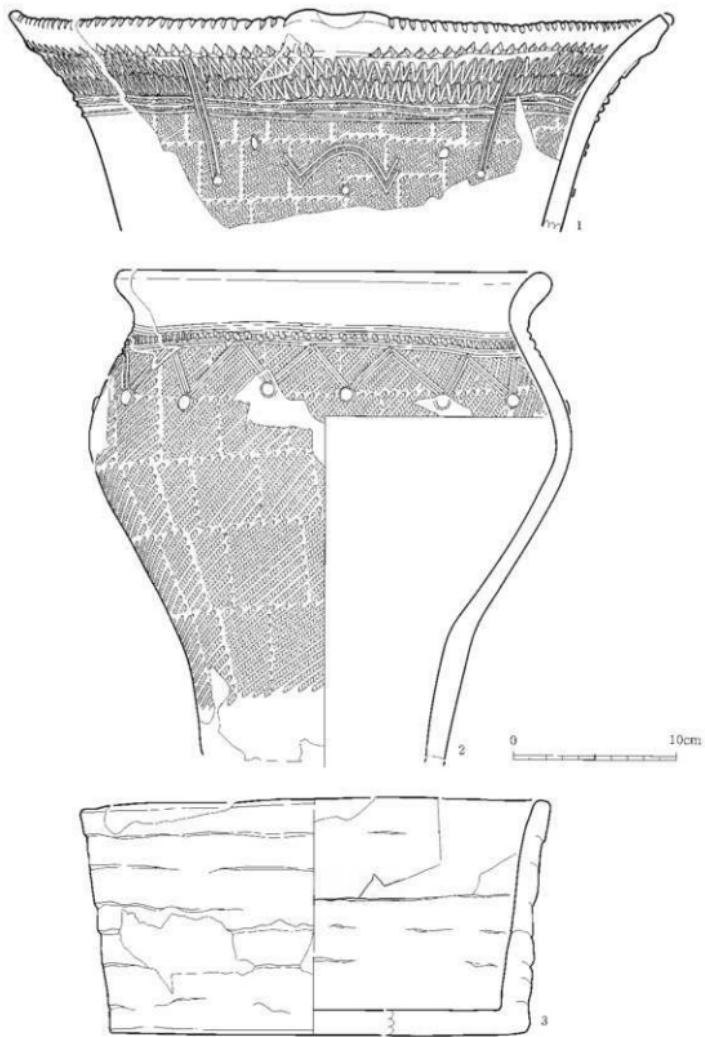
图版316 SX140遗物堆积层第2层出土遗物—绳文土器(2)—



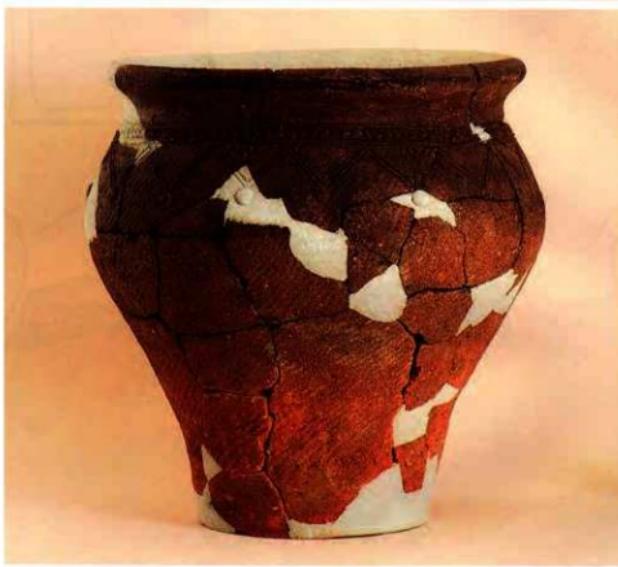
圖版317 SX140遺物堆積層第2層出土遺物—繩文土器(3)—



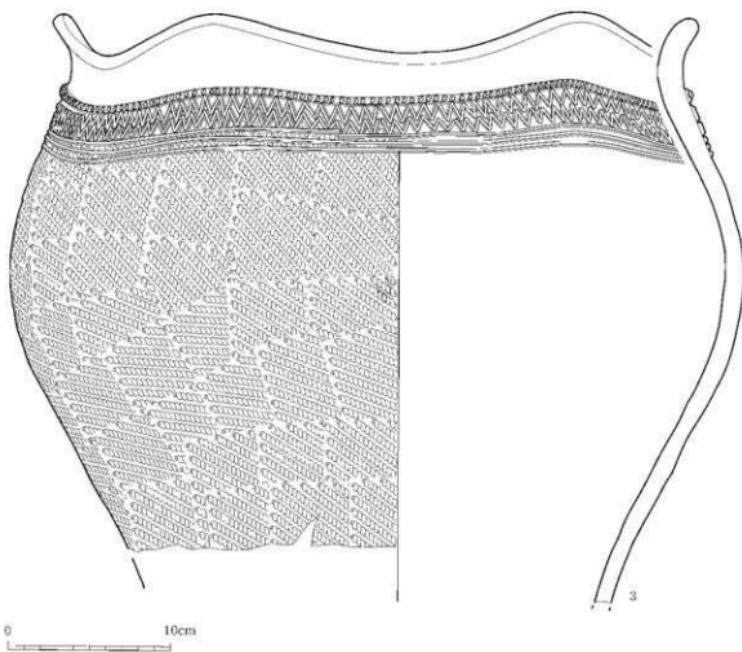
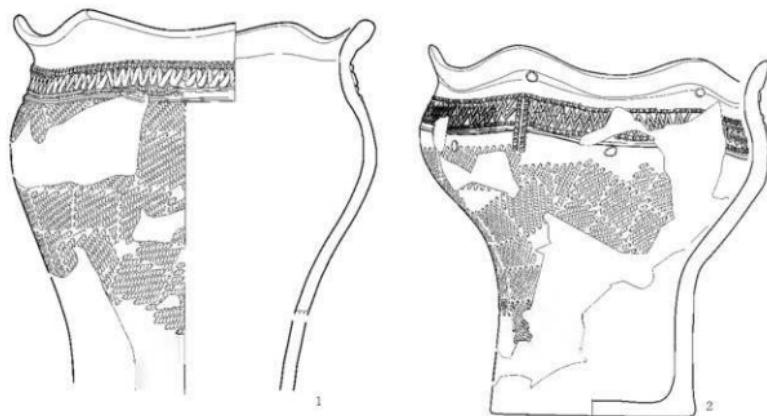
図版318 SX140遺物堆積層第2層出土遺物－縄文土器(4)－



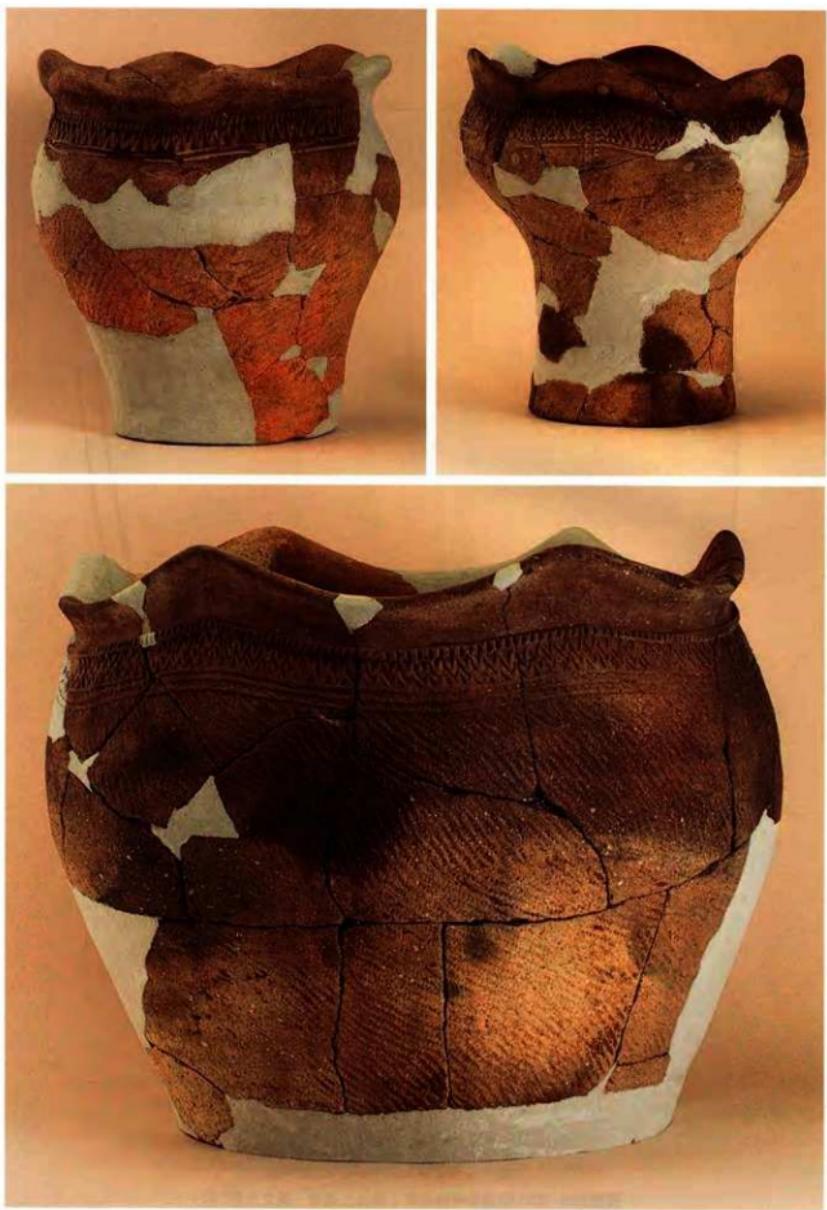
圖版319 SX140遺物堆積層第2層出土遺物—繩文土器(5)—



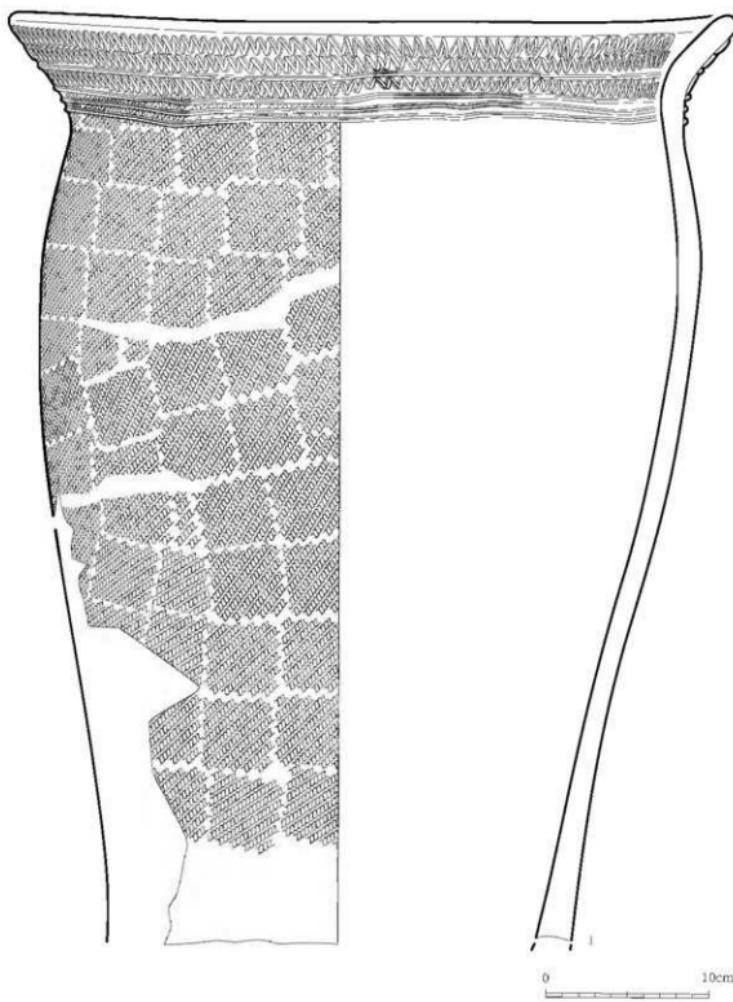
圖版 320 SX140 遺物堆積層第 2 層出土遺物—繩文土器(6)—



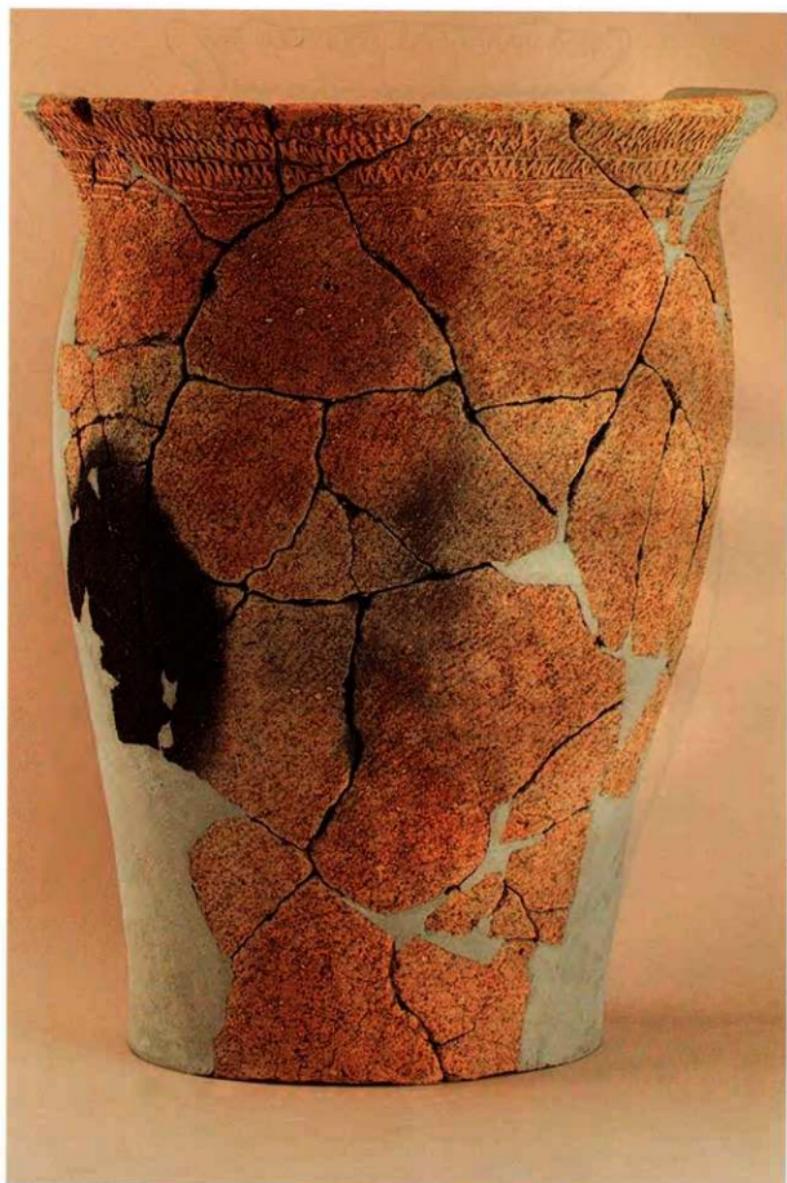
図版321 SX140遺物堆積層第2層出土遺物－縄文土器(7)－



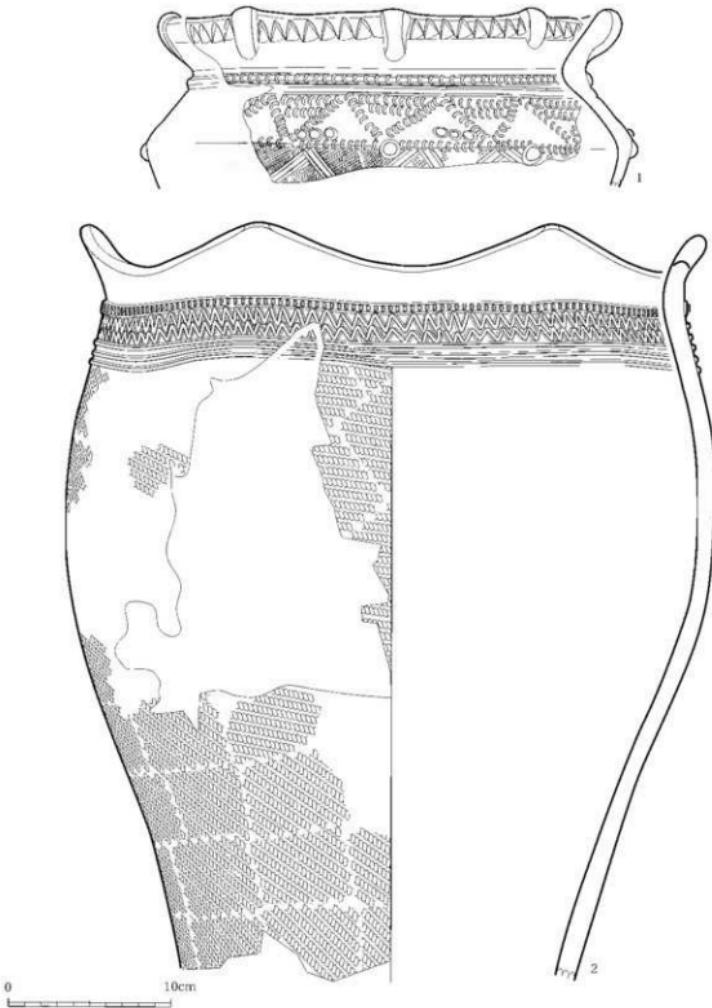
図版322 SX140遺物堆積層第2層出土遺物－縄文土器(8)－



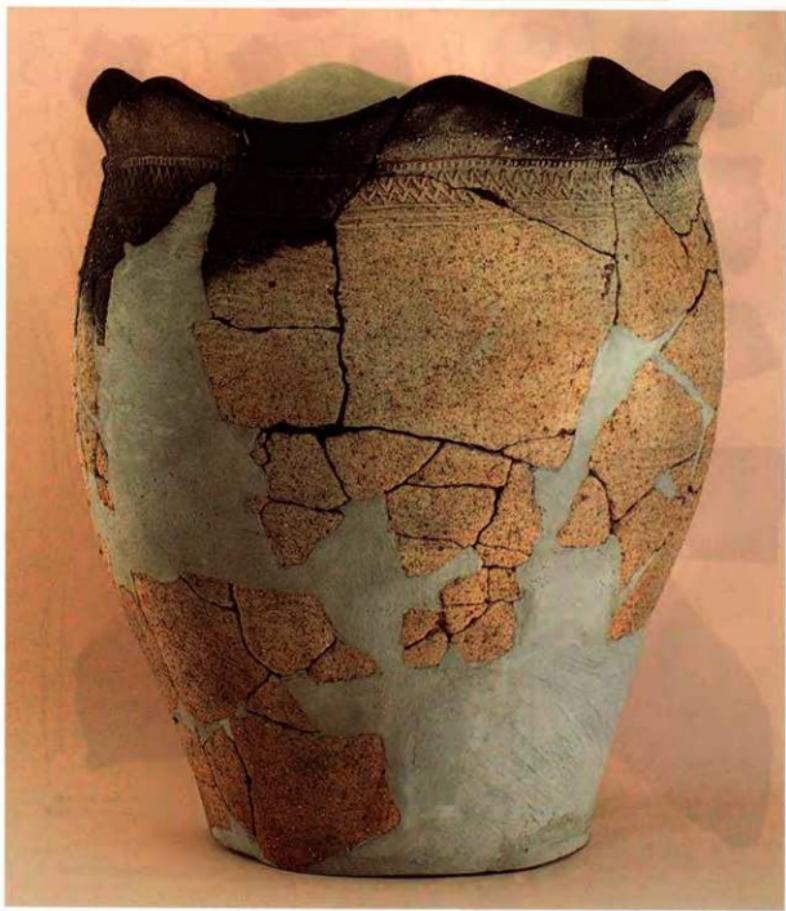
図版323 SX140遺物堆積層第2層出土遺物－縄文土器(9)－



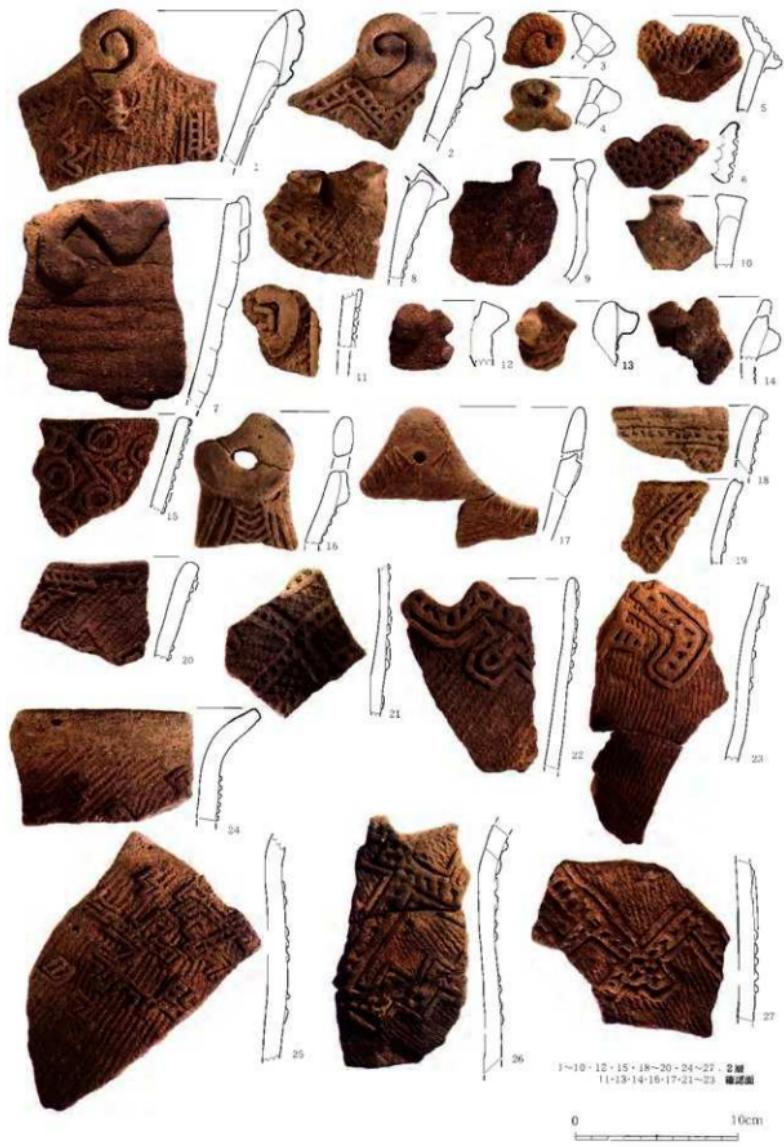
圖版324 SX140遺物堆積層第2層出土遺物－繩文土器(10)－



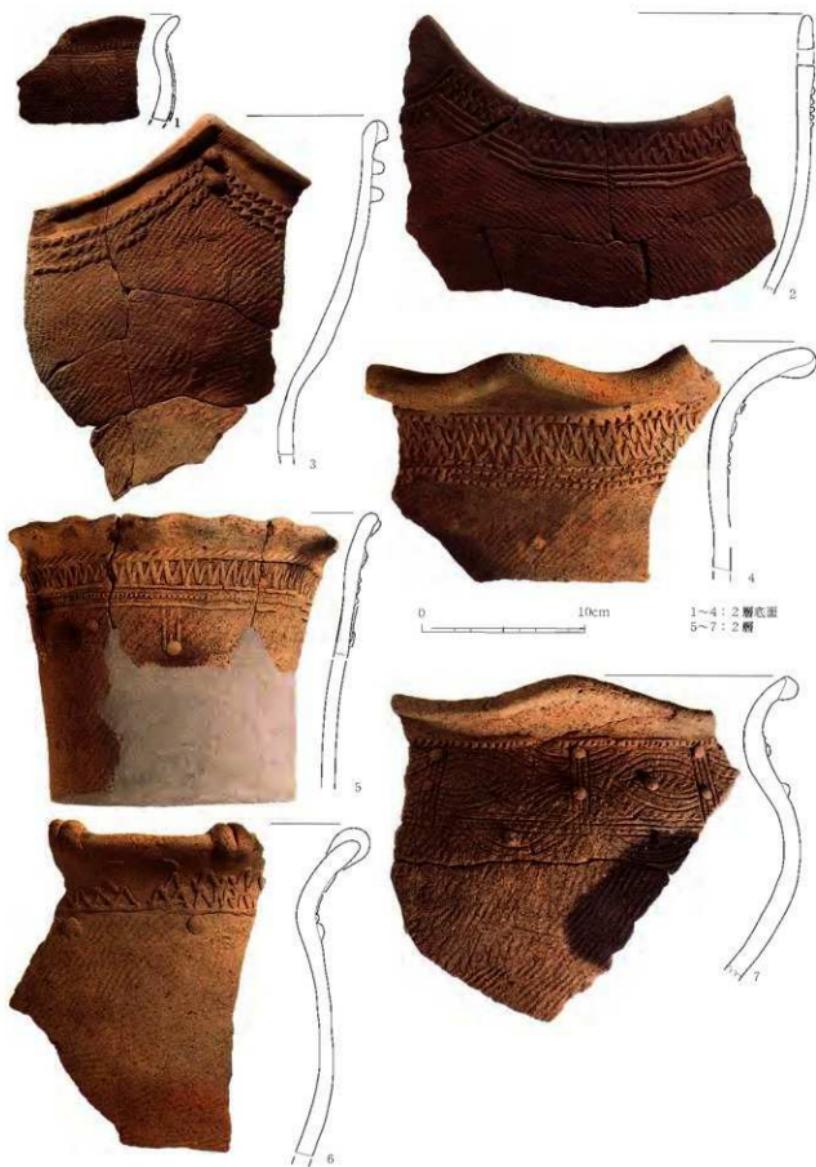
図版325 SX140遺物堆積層第2層出土遺物－縄文土器(11)－



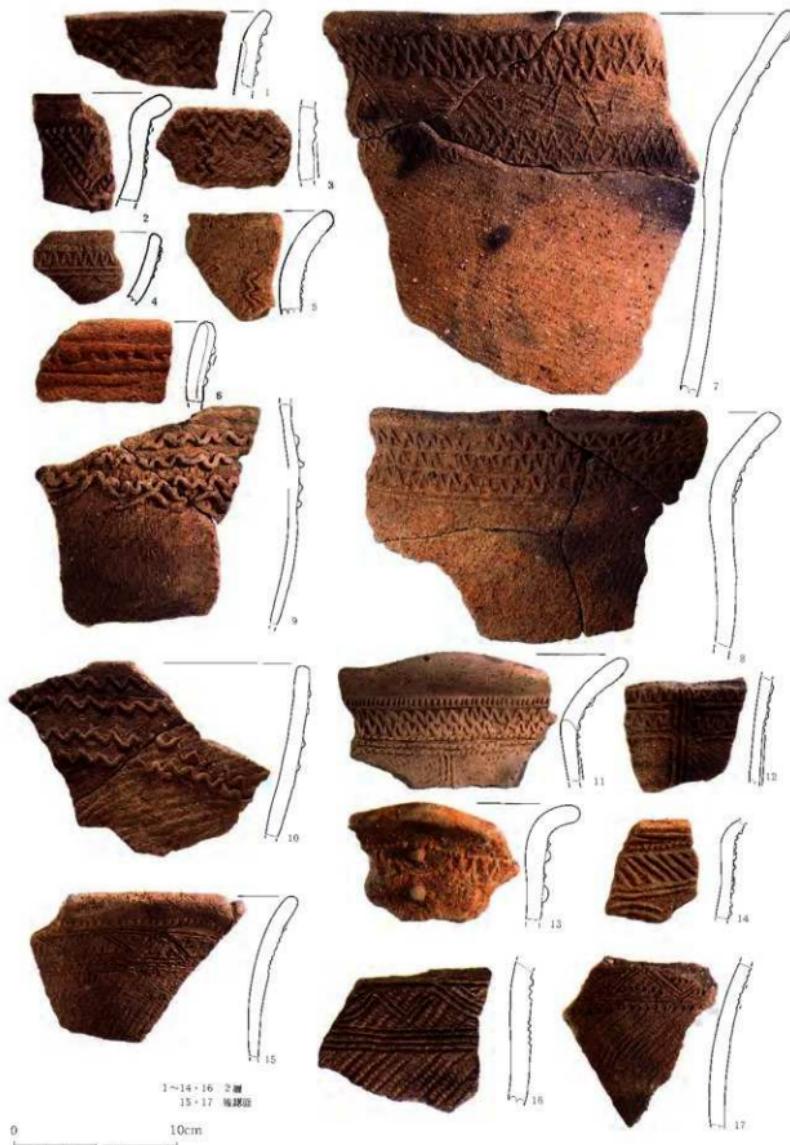
図版326 SX140遺物堆積層第2層出土遺物－縄文土器(12)－



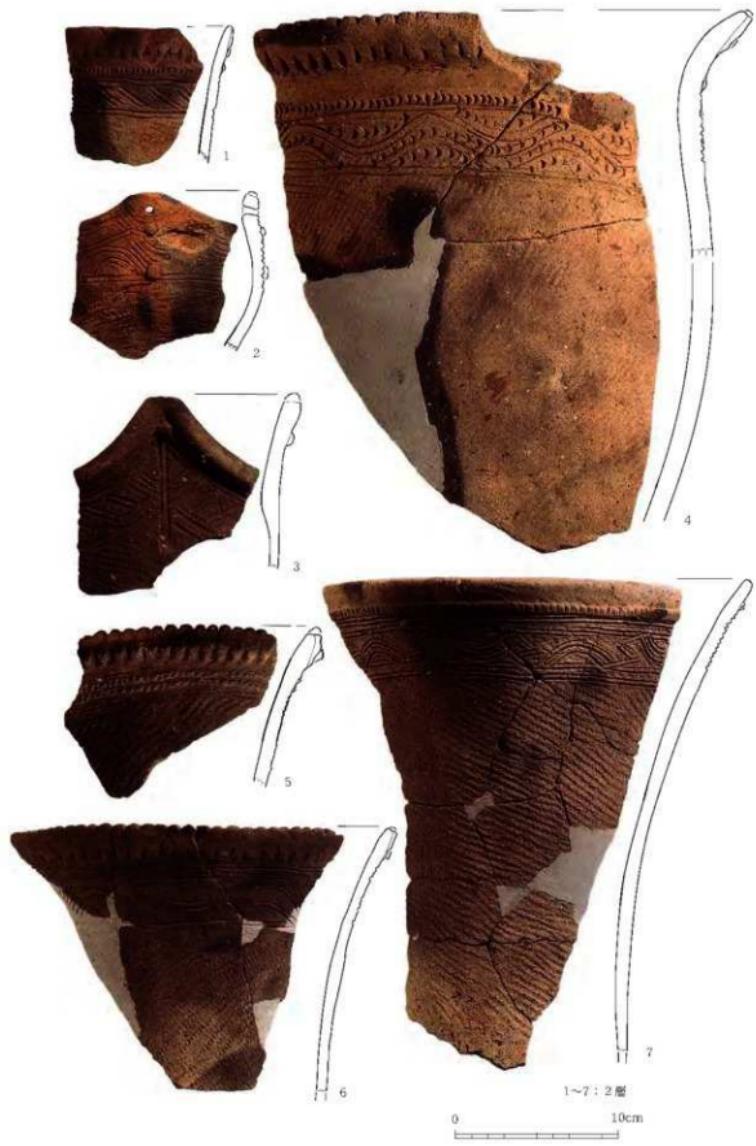
図版327 SX140遺物堆積層第2層および確認面出土遺物—縄文土器(13)一



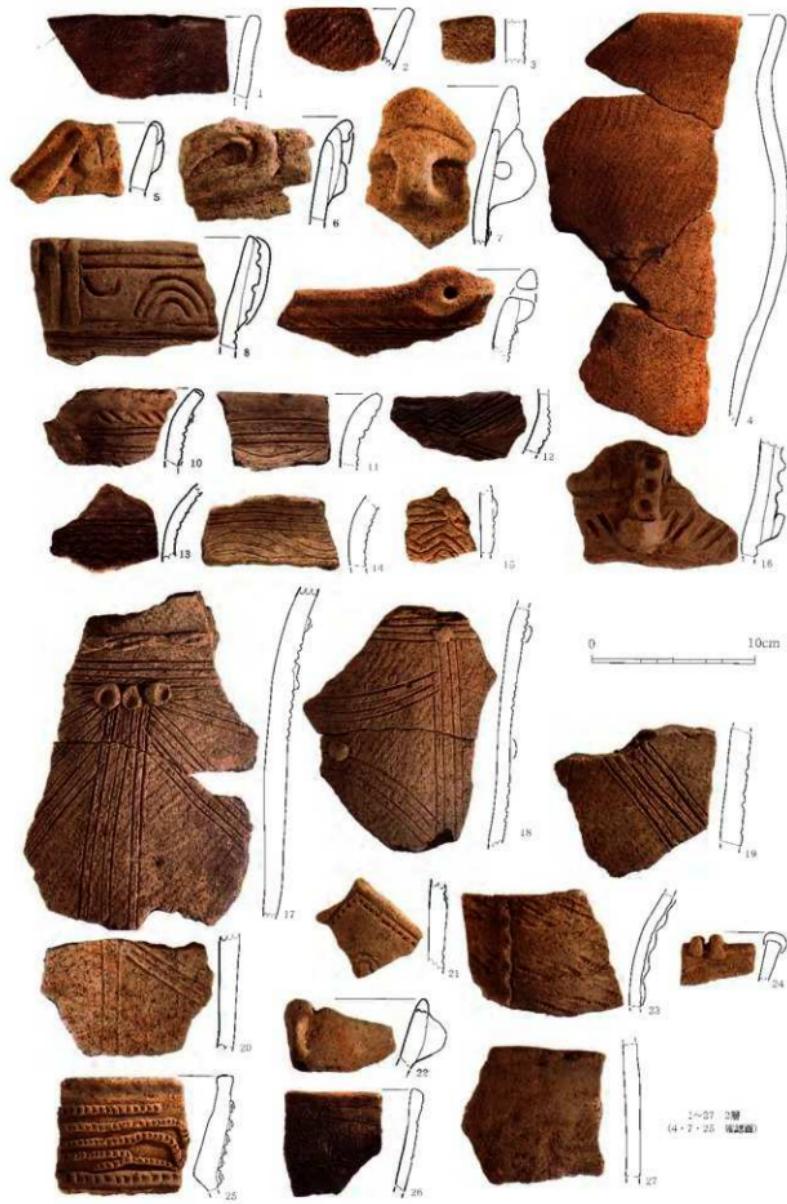
图版328 SX140遗物堆积层第2层出土遗物—繩文土器(14)—



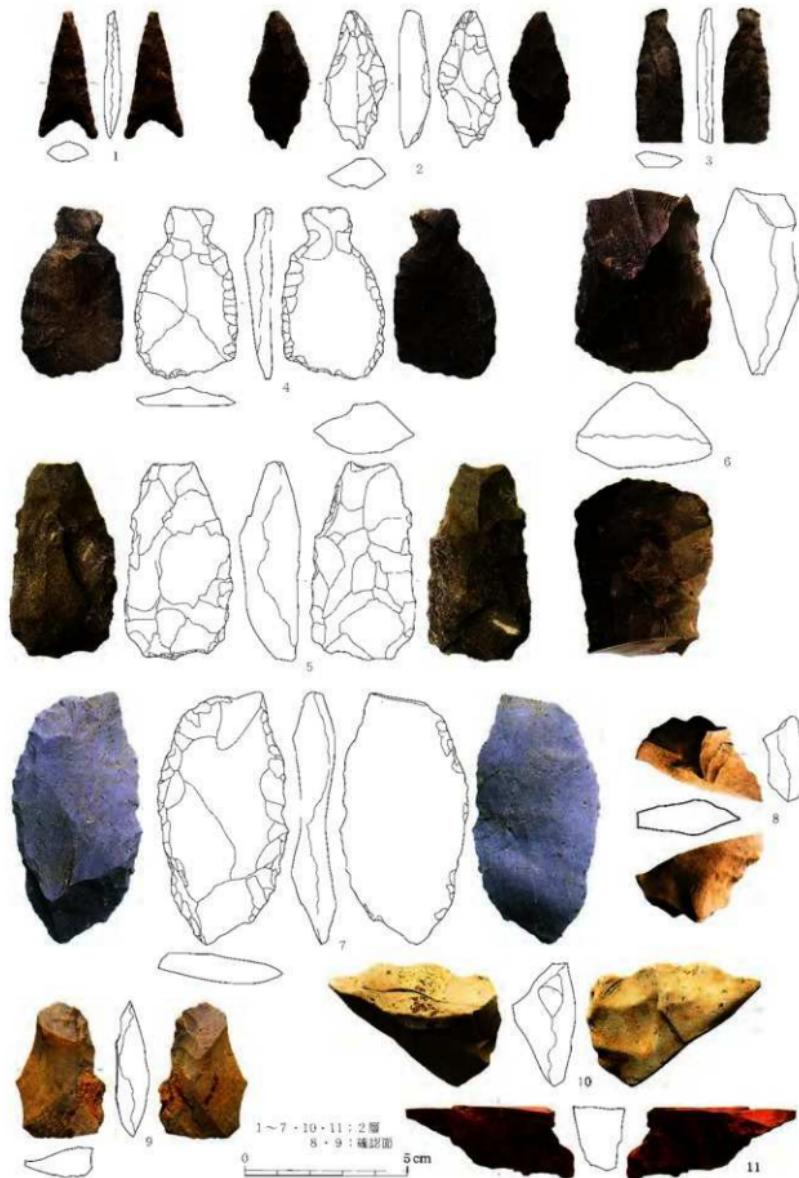
図版329 SX140遺物堆積層第2層および確認面出土遺物－縄文土器(15)－



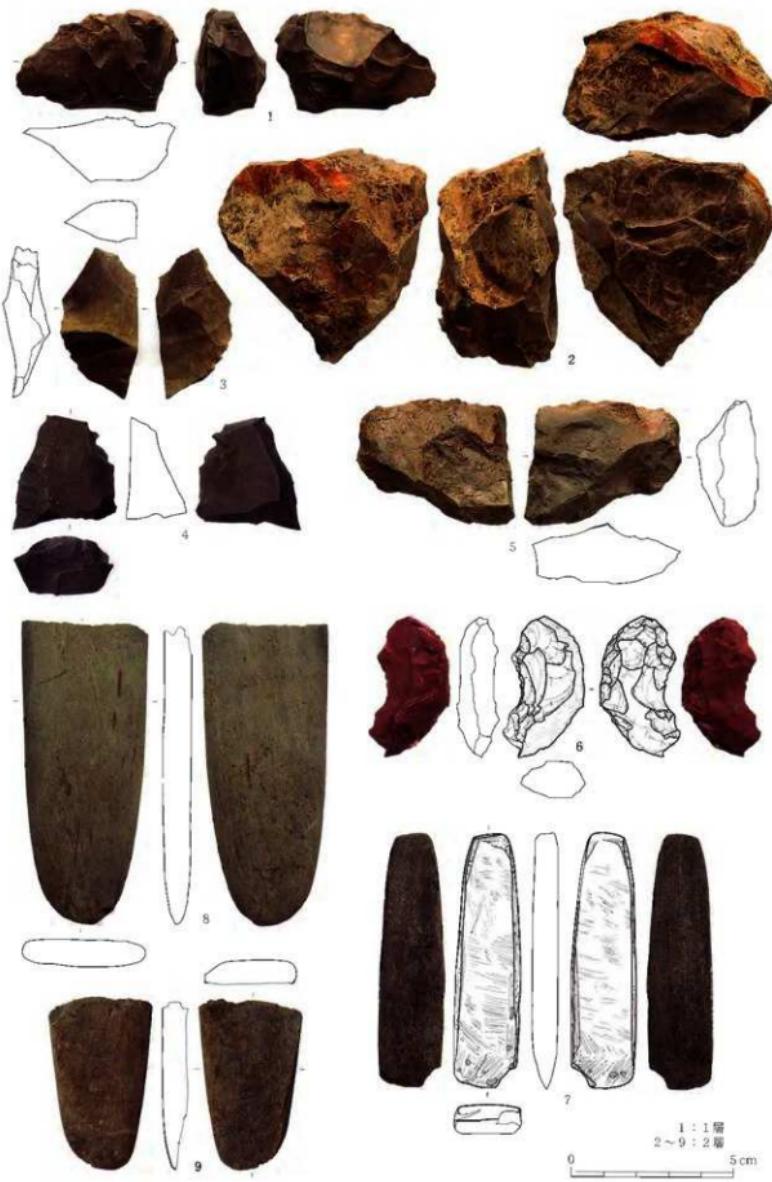
图版330 SX140遺物堆積層第2層出土遺物—繩文土器(16)—



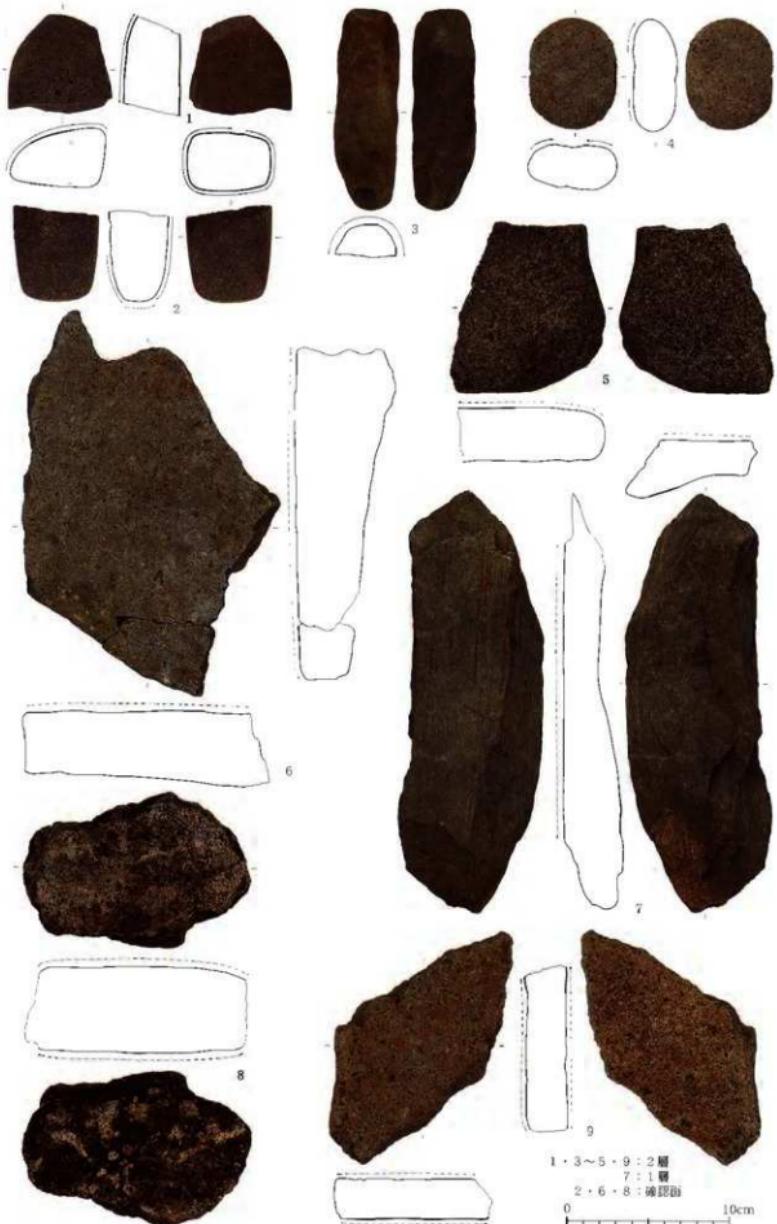
図版331 SX140遺物堆積層第2層および確認面出土遺物—縄文土器(17)—



図版332 SX140遺物堆積層第2層および確認面出土遺物—石器(1)—



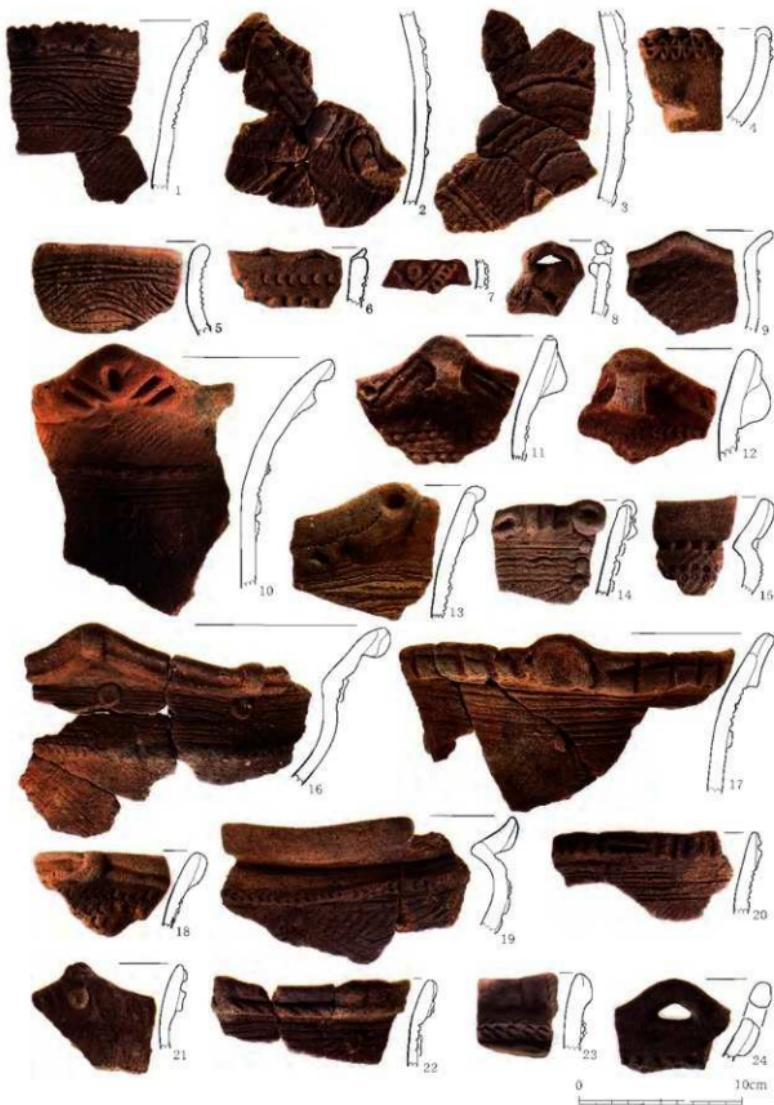
圖版333 SX140遺物堆積層第1・2層出土遺物—石器(2)—



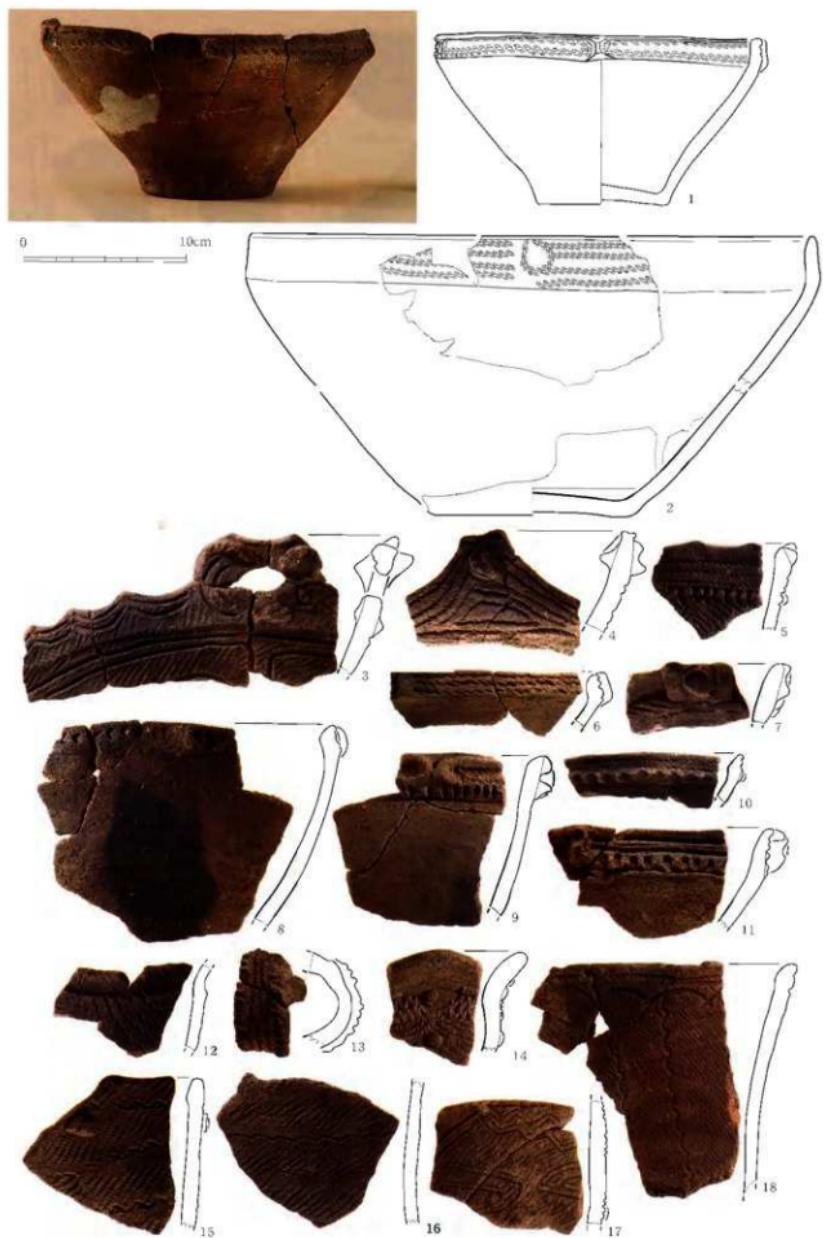
図版334 SX140遺物堆積層第1・2層出土遺物—石器(3)—

7 その他の出土遺物

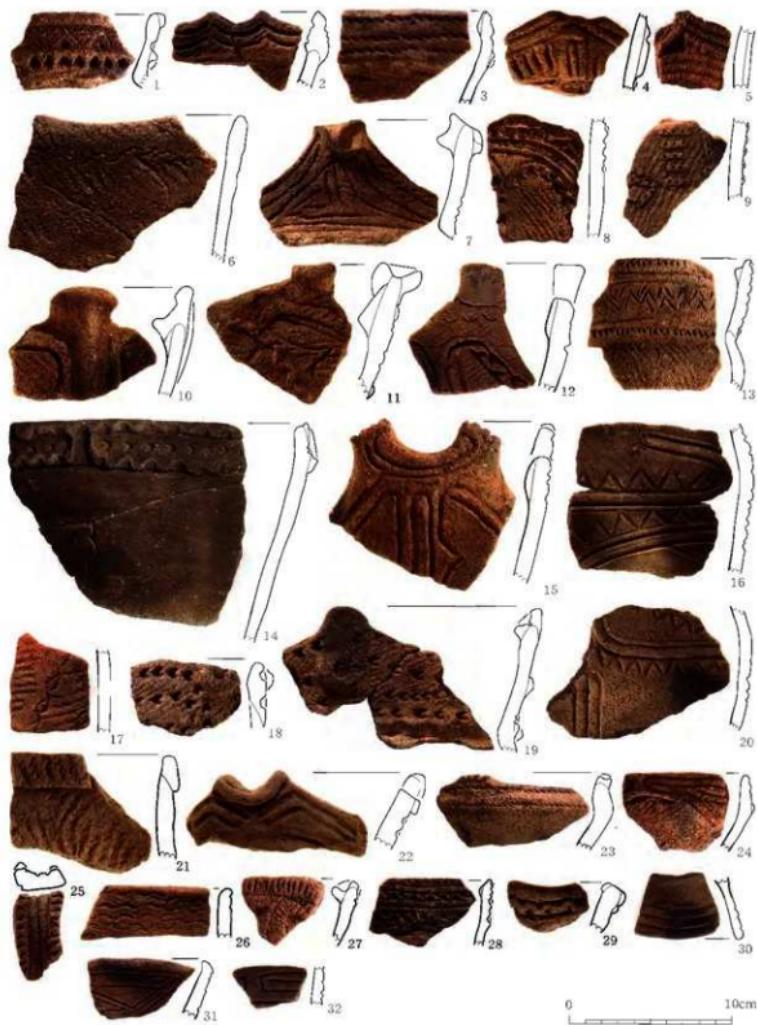
【基本層位 2 層出土遺物】



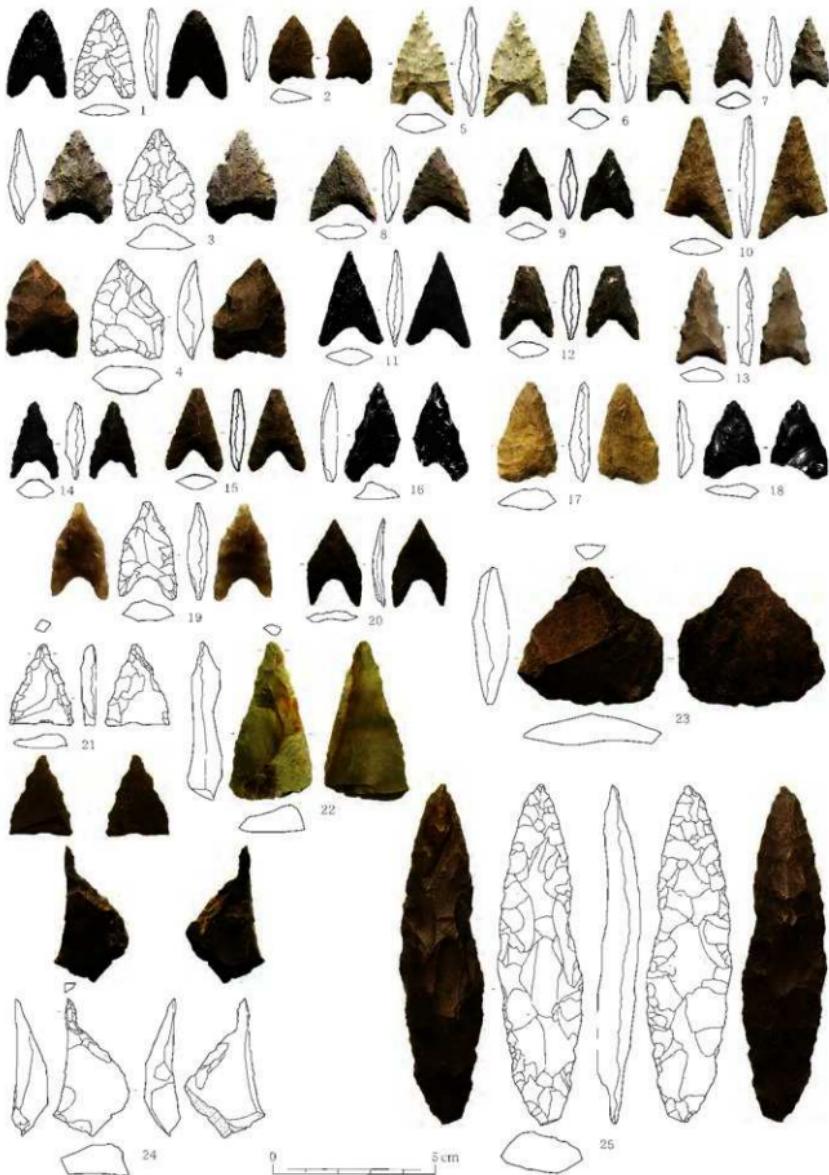
図版335 基本層位第2層出土遺物—縄文土器(1)—



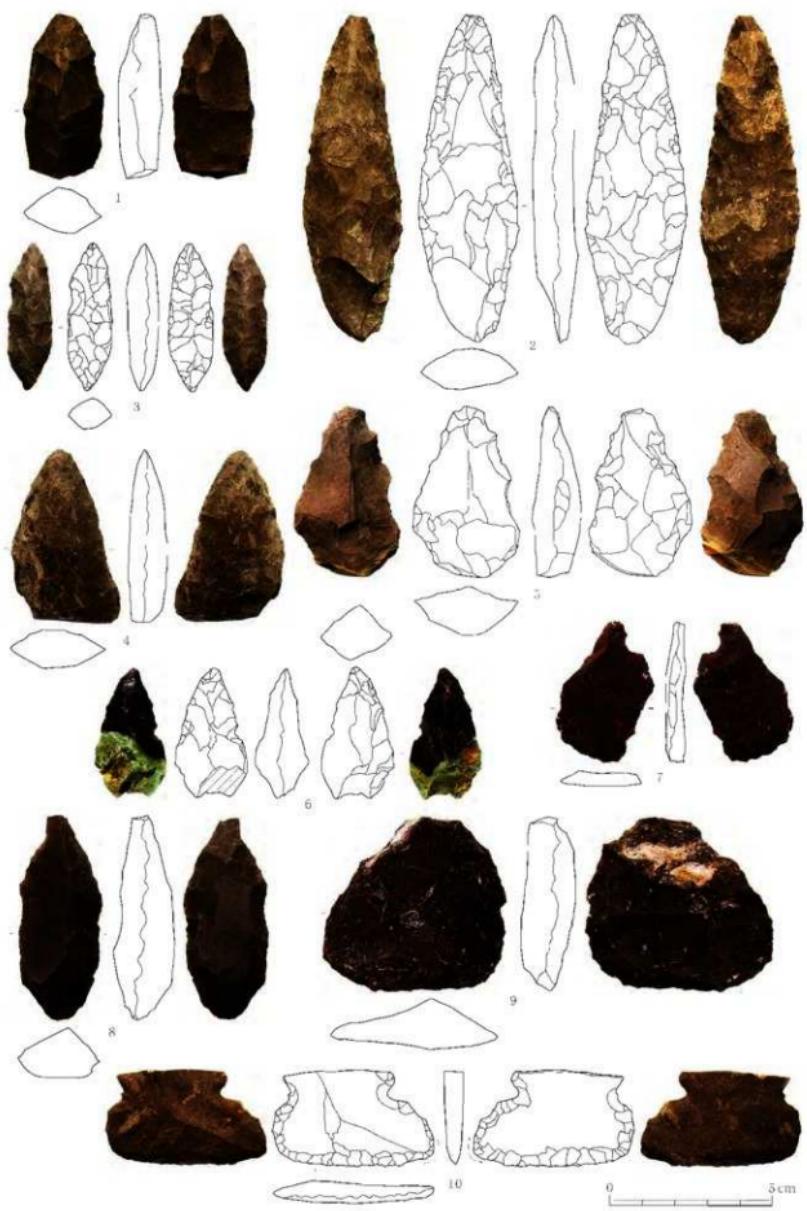
図版336 基本層位第2層出土遺物－繩文土器(2)－



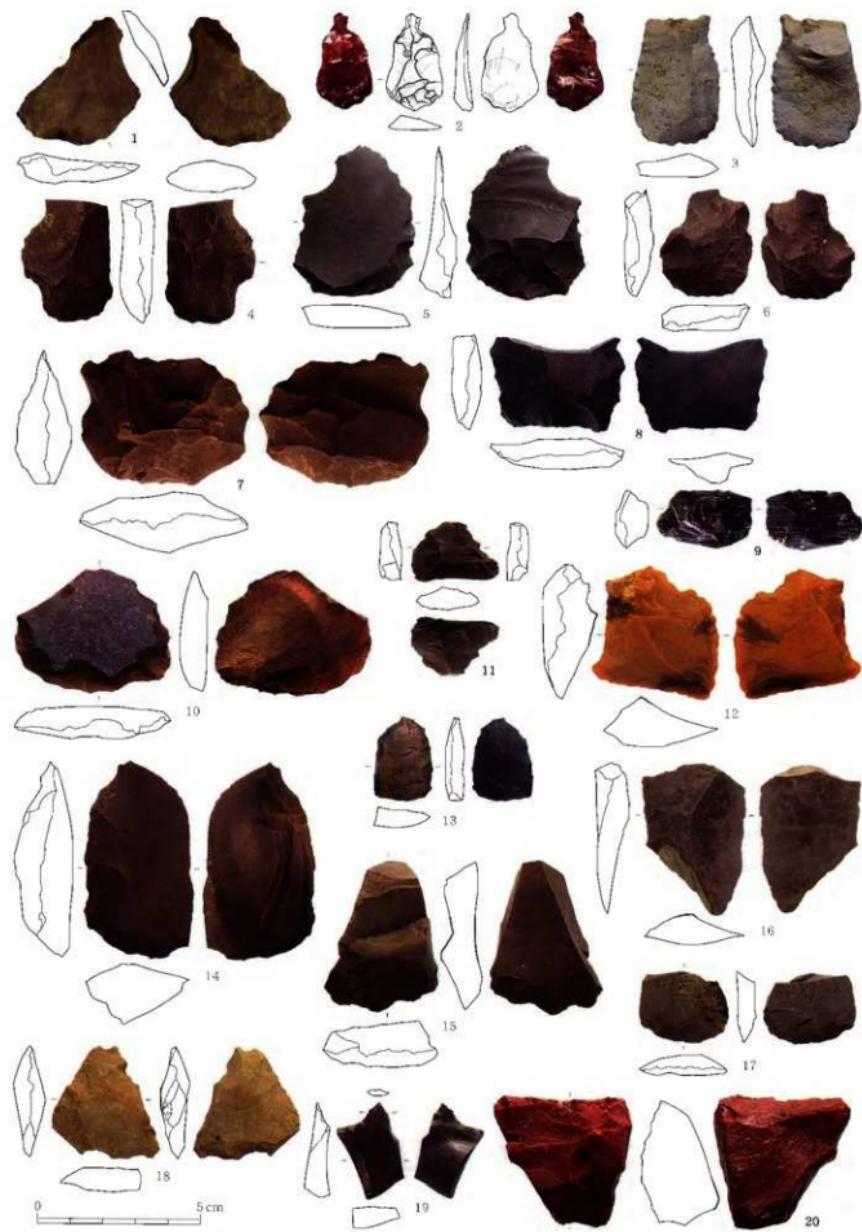
図版337 基本層位第2層出土遺物－縄文土器(3)－



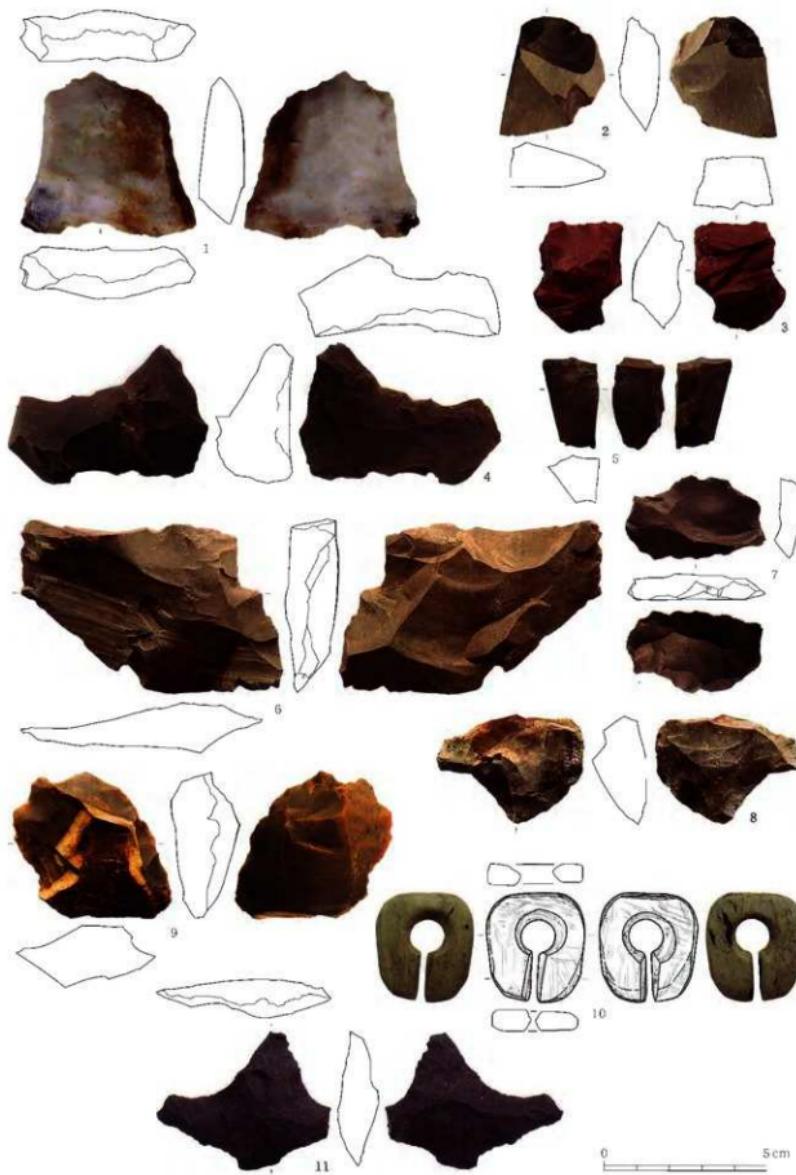
図版338 基本層位第2層出土石器－石錐・石錐・尖頭器－



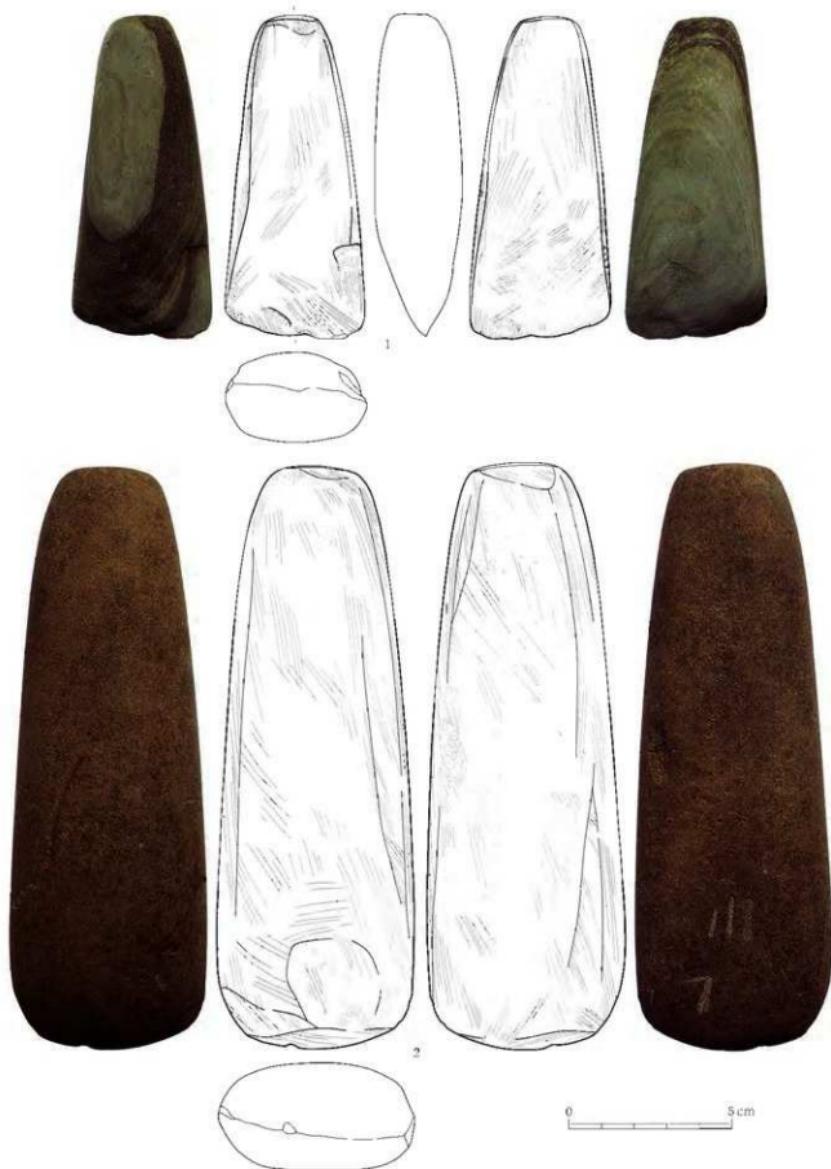
图版339 基本层位第2层出土石器—尖头器·石匙一



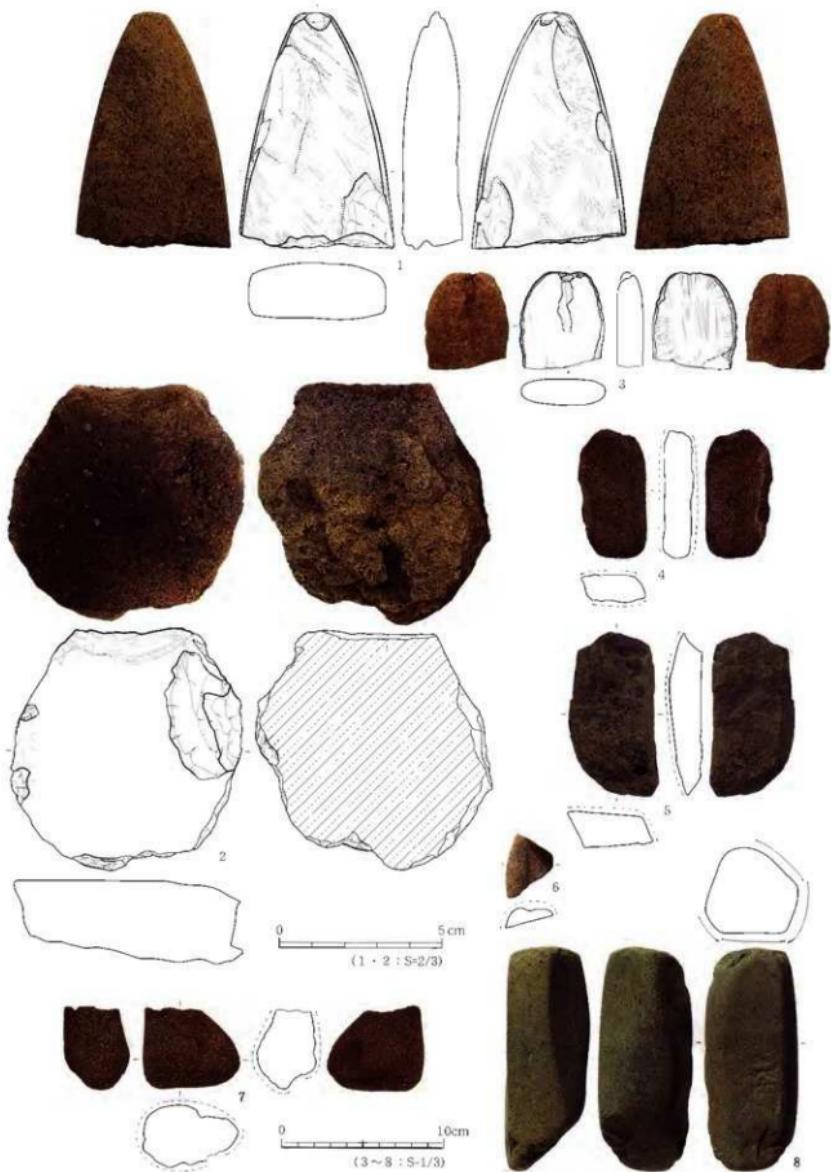
圖版340 基本層位第2層出土石器—石匙、不定形石器、石核—



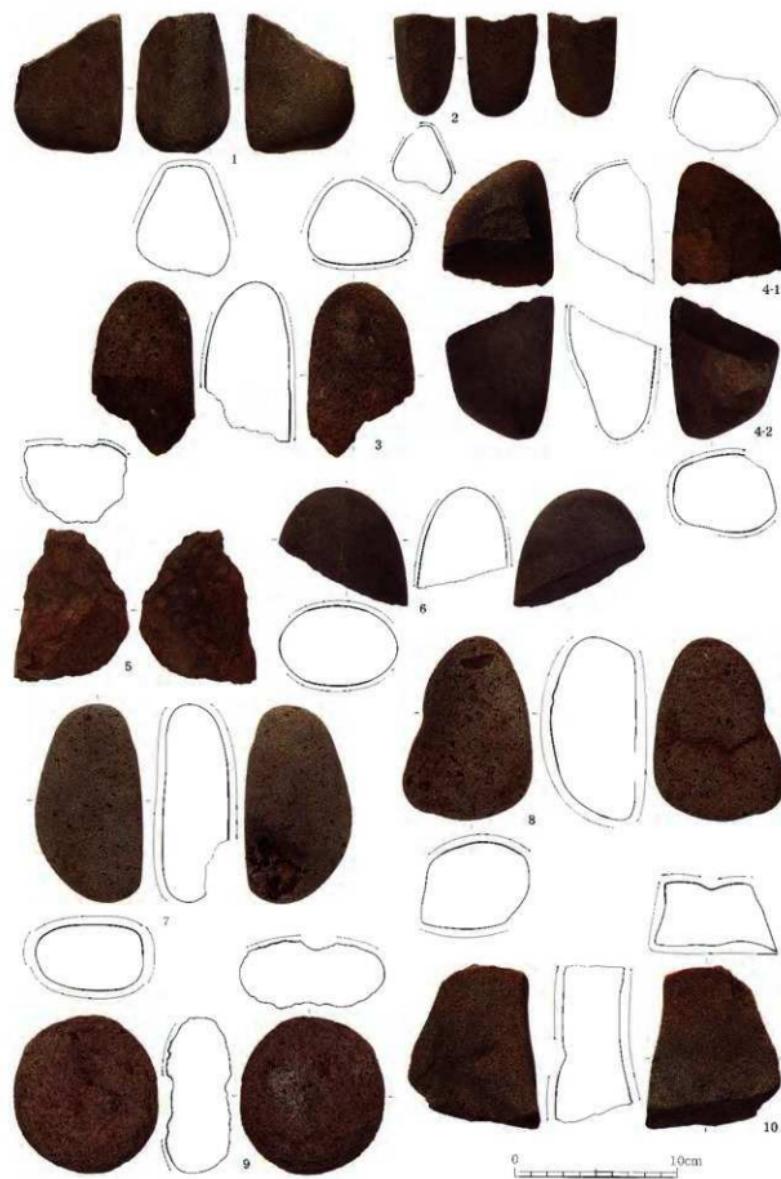
圖版341 基本層位第2層出土石器—石核・石製品・不定形石器—



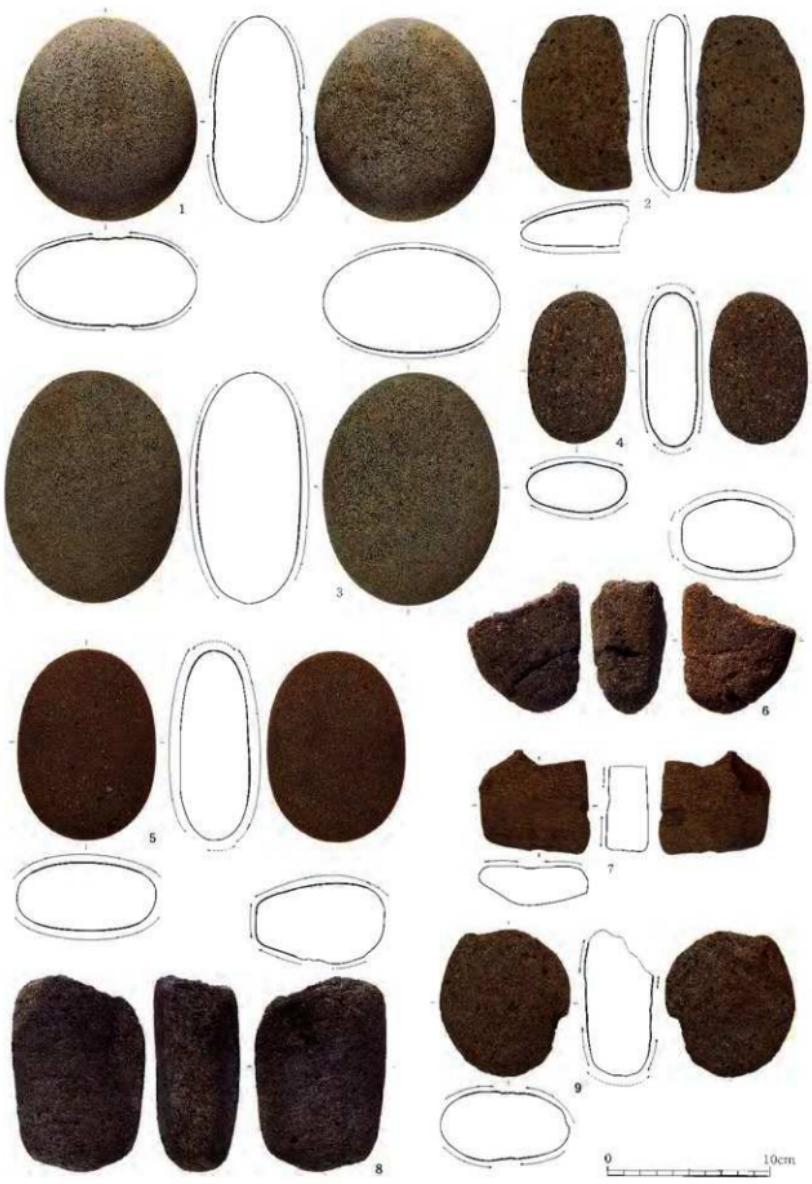
図版342 基本層位第2層出土石器—磨製石斧—



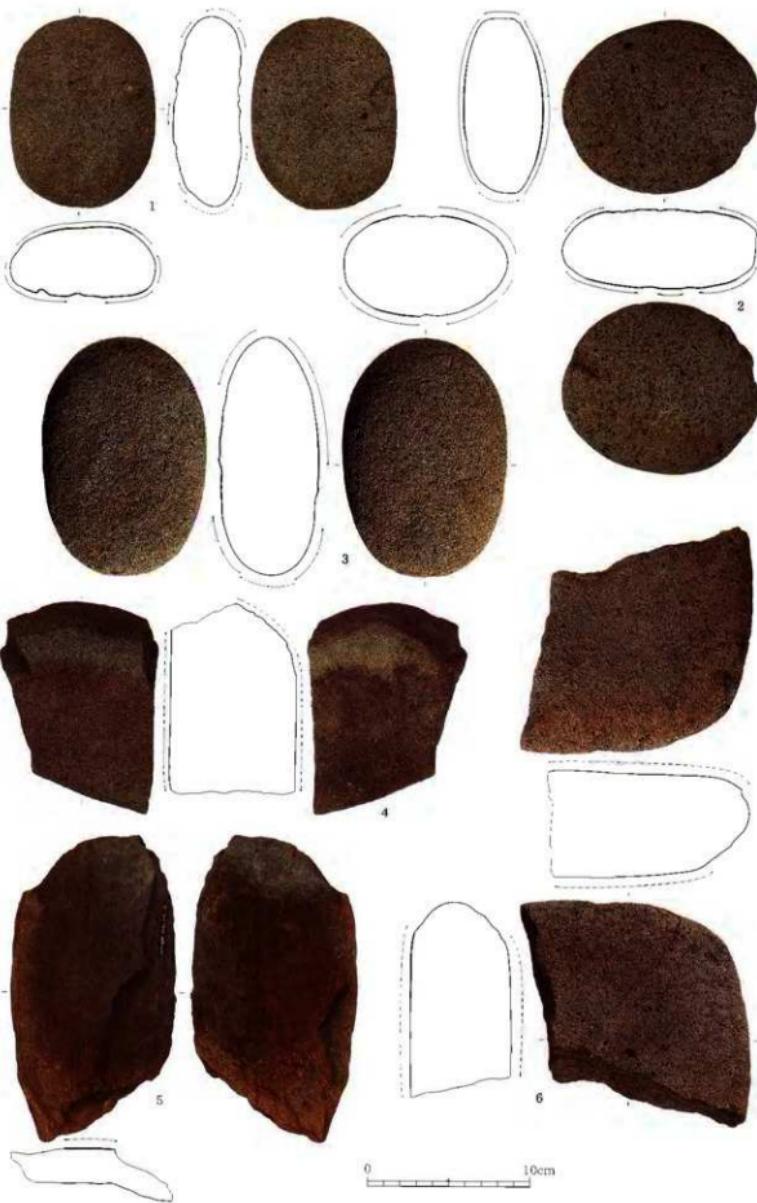
図版343 基本層位第2層出土石器—磨製石斧・石製品・砥石・磨凹石—



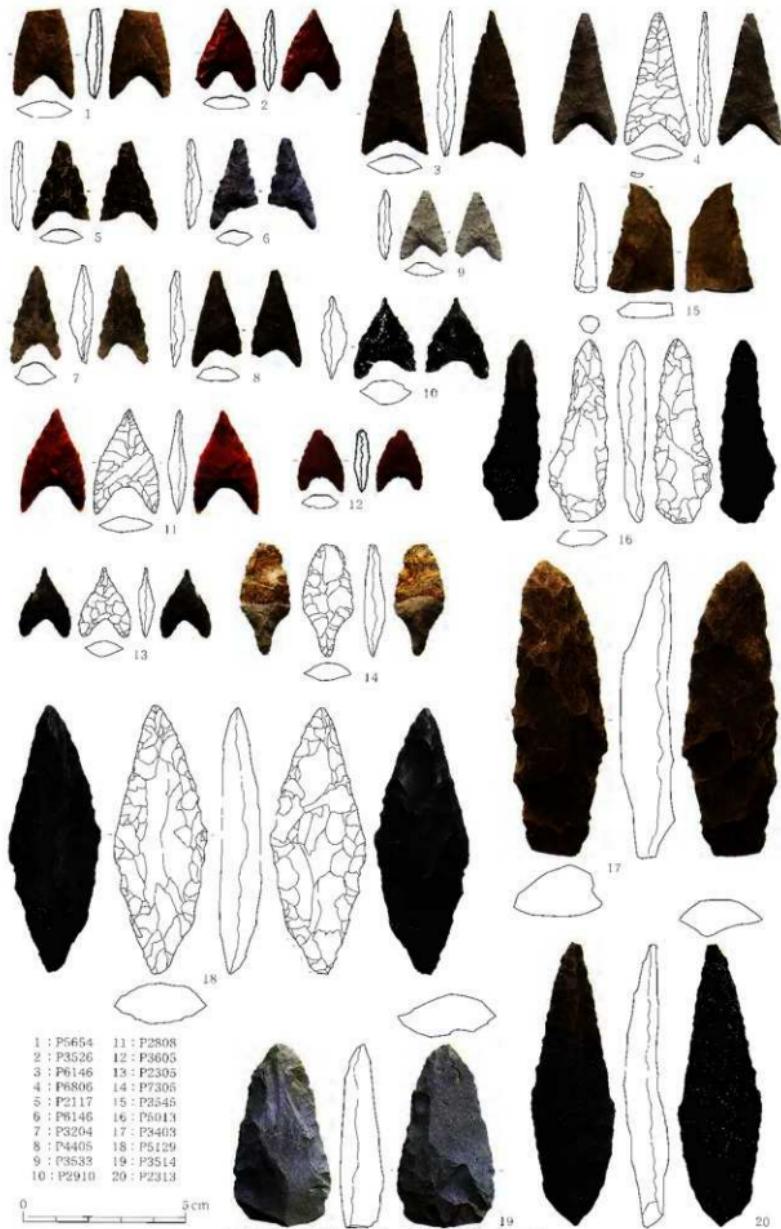
圖版344 基本層位第2層出土石器—磨凹敲石一



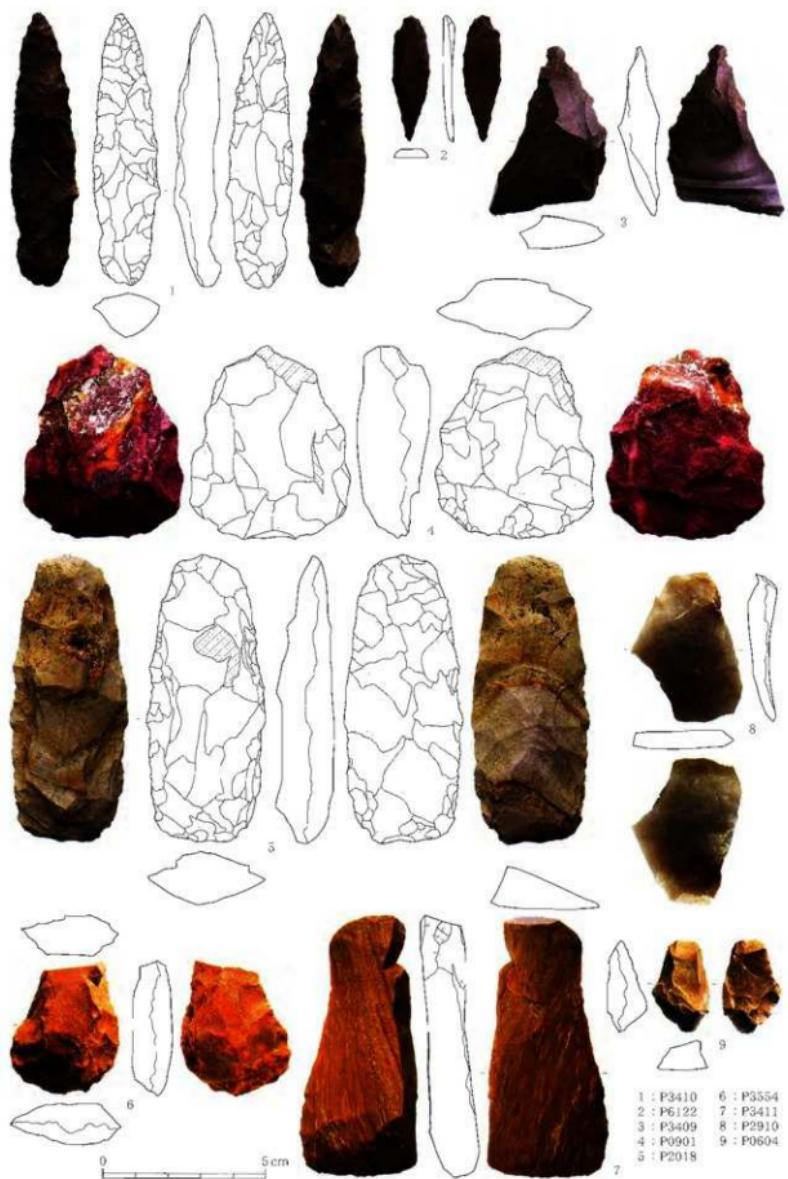
圖版345 基本層位第2層出土石器—磨凹敲石—



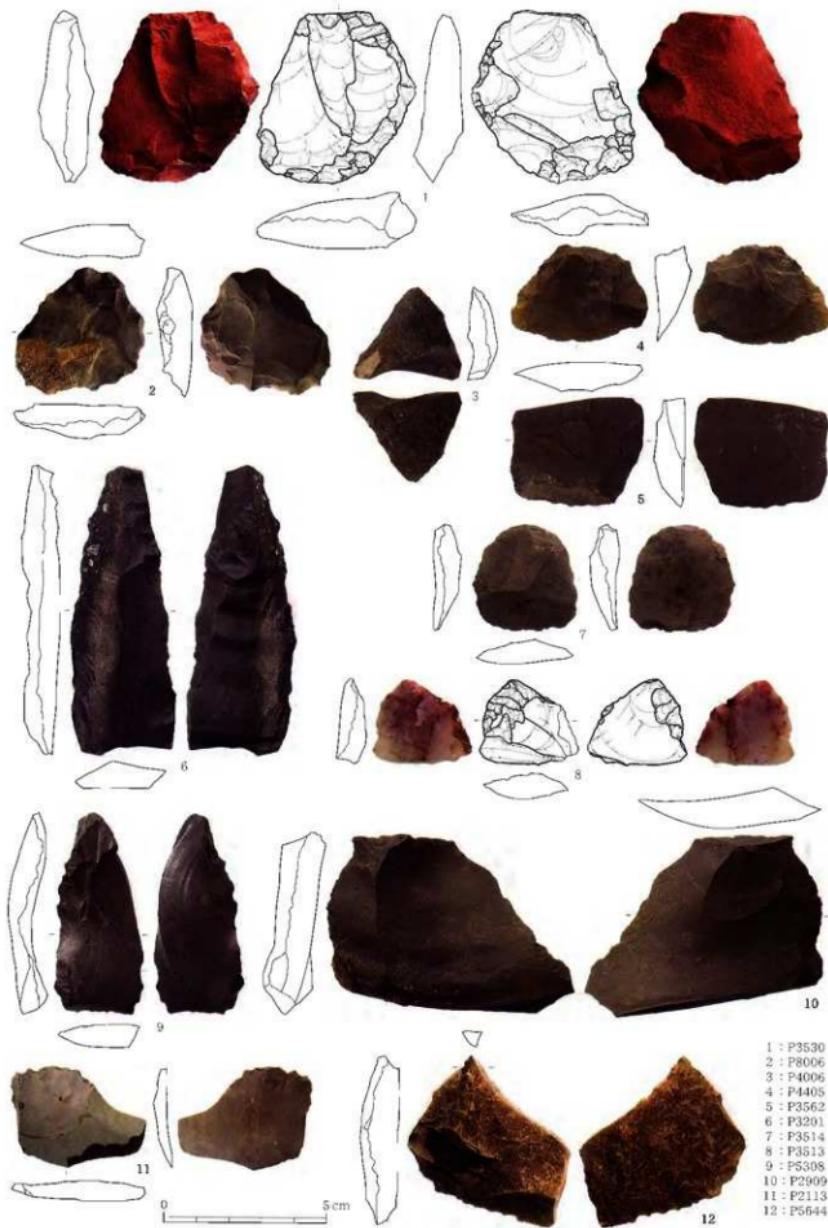
图版346 基本层位第2层出土石器—磨凹敲石·石皿—



圖版347 Pit出土石器—石鑽、石錐、尖頭器—

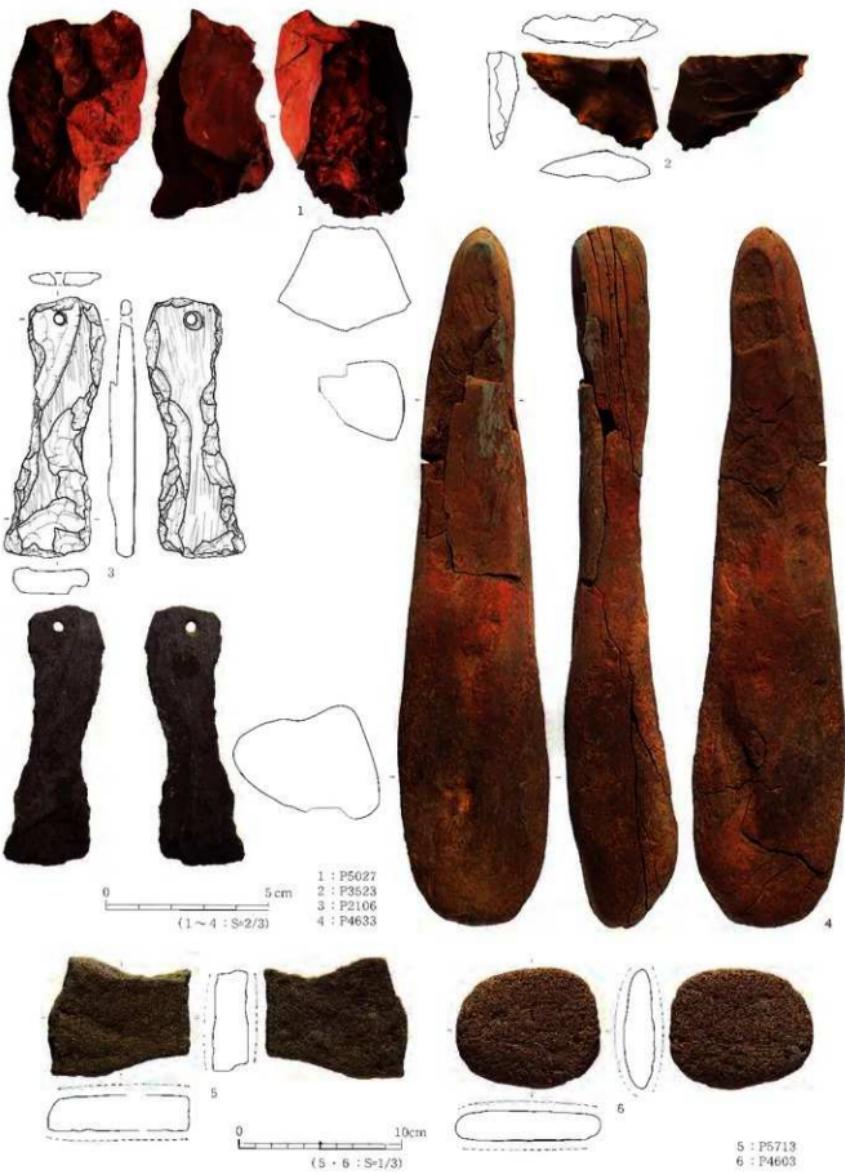


図版348 Pit出土石器－尖頭器・石匙・鏟状石器・不定形石器－

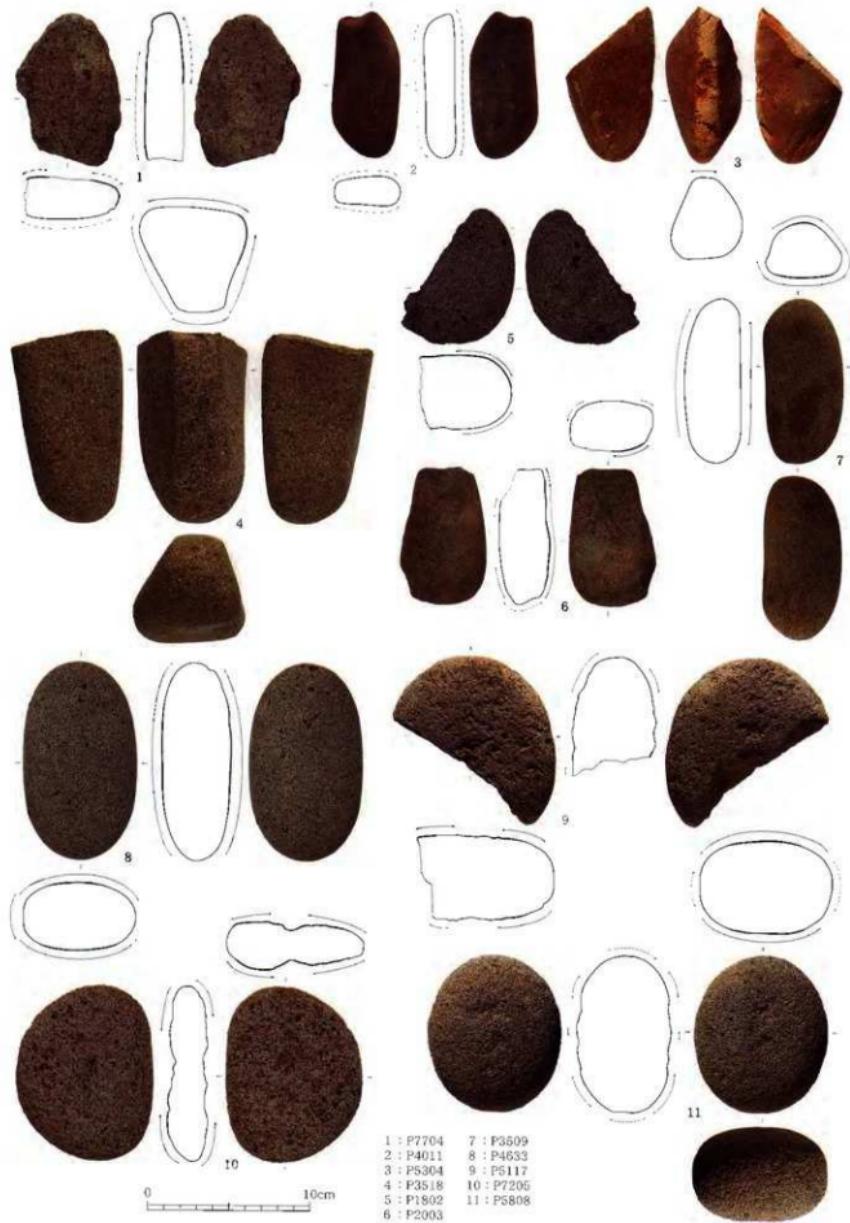


圖版349 Pit出土石器—不定形石器—

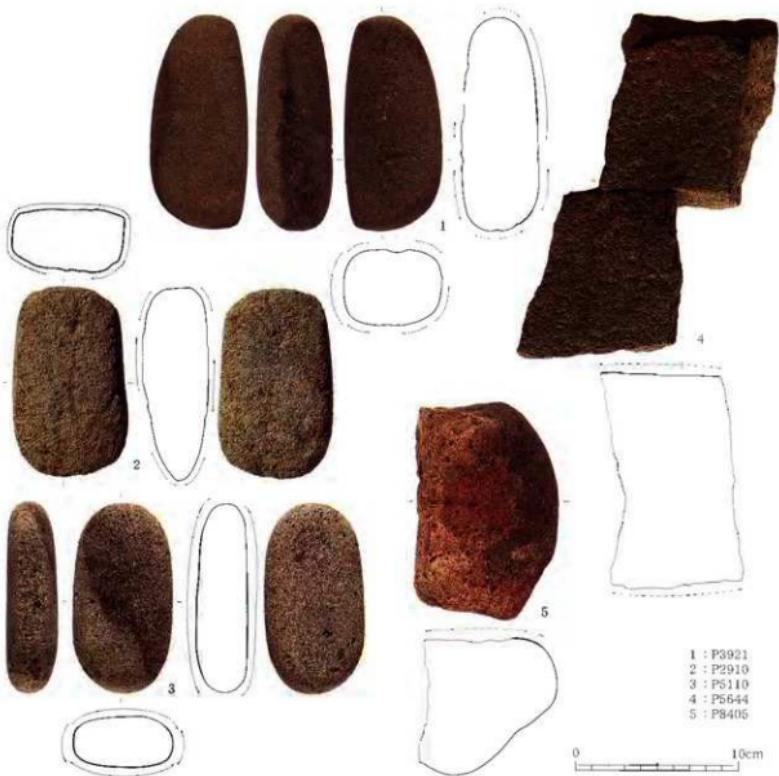
- 1 : P3530
- 2 : P8006
- 3 : P4006
- 4 : P4045
- 5 : P3562
- 6 : P3201
- 7 : P3514
- 8 : P3513
- 9 : P5308
- 10 : P2909
- 11 : P2113
- 12 : P5644



図版350 Pit出土石器－石核・石製品・礫石器－



图版351 Pit出土石器—砾石·磨凹敲石—



図版352 Pit出土石器—磨凹鼓石・石皿—

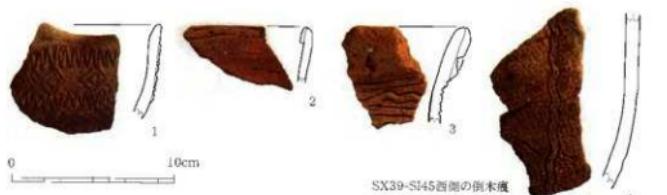
1 : P3921
 2 : P2910
 3 : P5110
 4 : P5644
 5 : P8405

【Pit出土遺物】

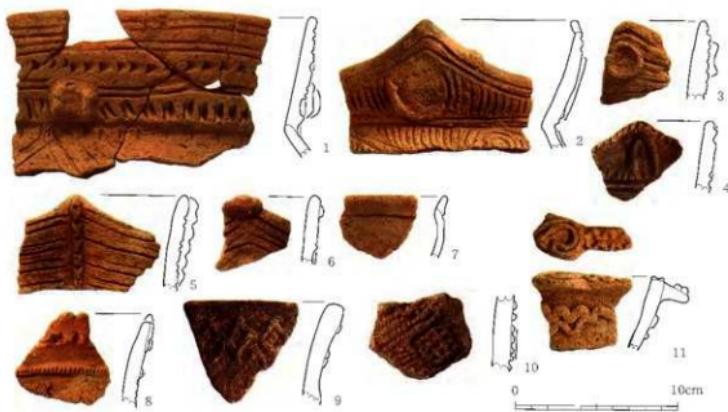


図版353 P6184出土遺物

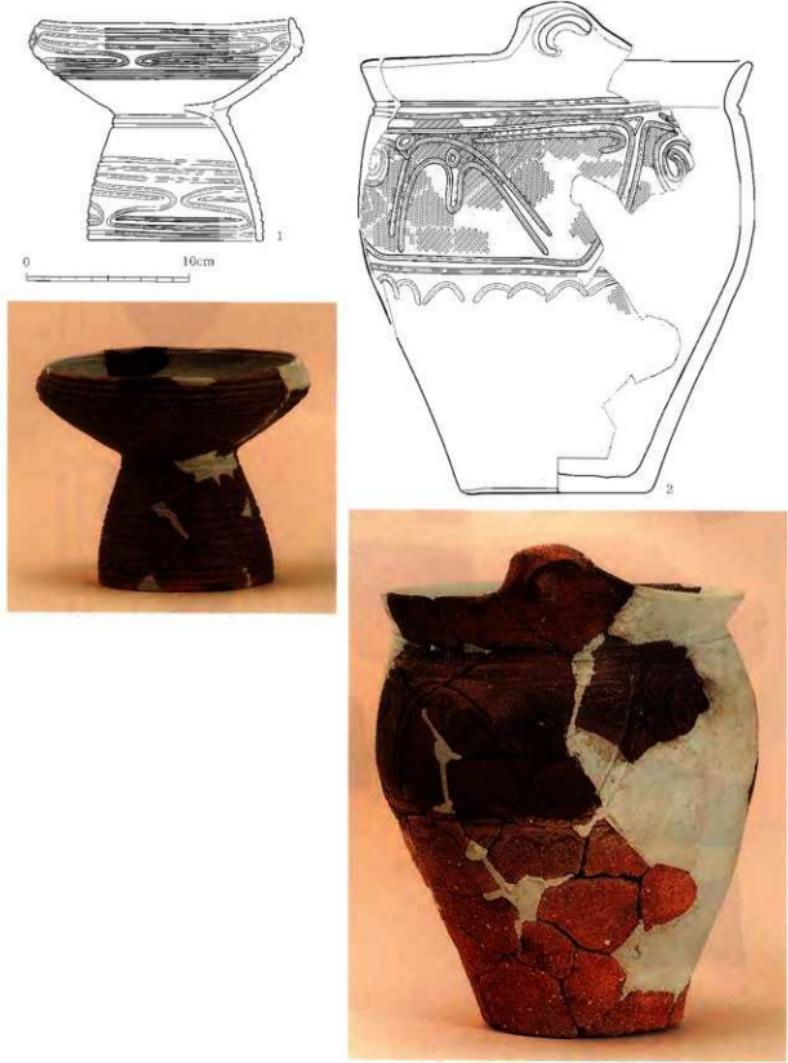
【倒木痕出土遺物】



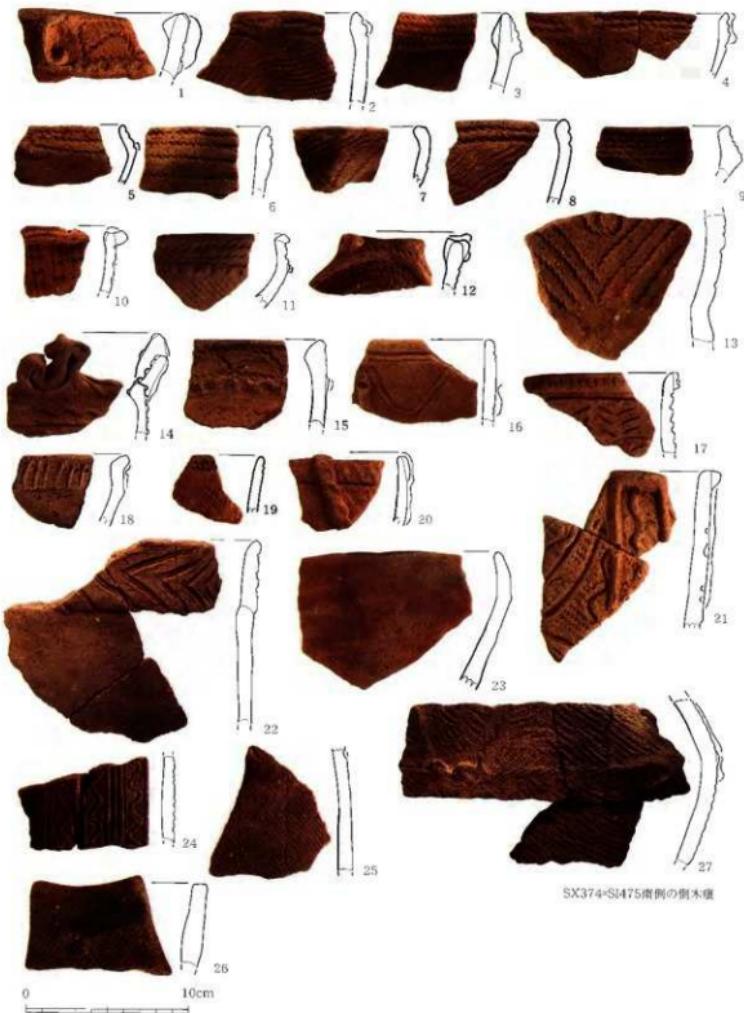
図版355 SX39倒木痕出土遺物—縄文土器—



図版354 SX88倒木痕出土遺物—縄文土器—



図版356 SX374風倒木痕出土遺物(1)-縄文土器-

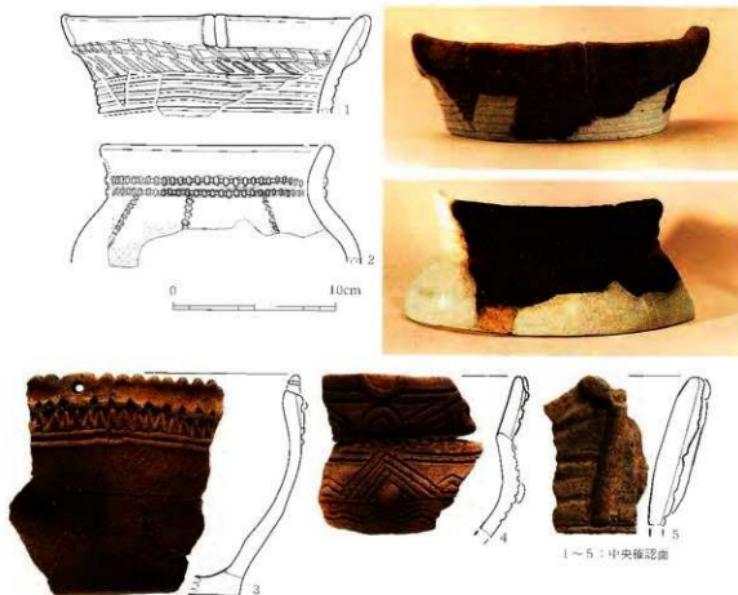


SX374-SI475南側の倒木痕

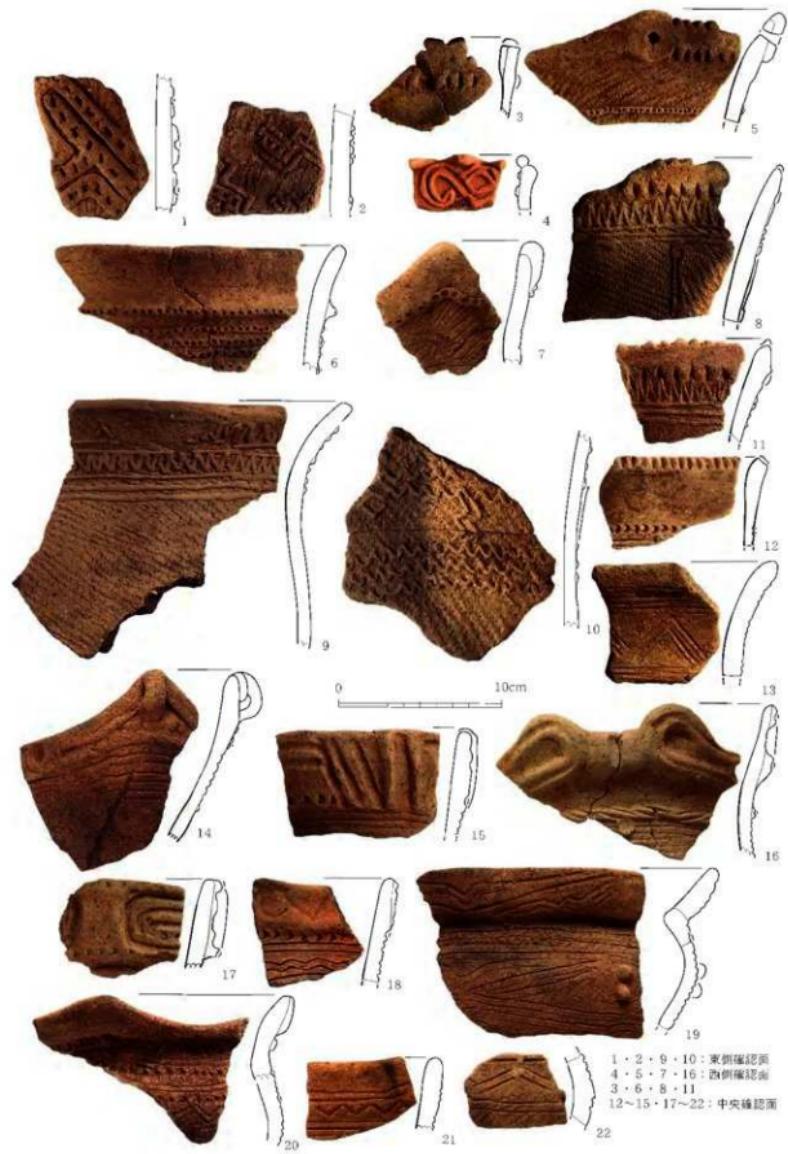
図版357 SX374倒木痕出土遺物－縄文土器・石器－

【造構確認面出土遺物】

造構確認時にも多数の遺物が出土している。特に石器類は造構内から出土したものは少なく、大半は造構確認時や古代住居跡の堆積土、風倒木痕から出土しており、この第一理由として丘陵面が浸食されて主な造構である竪穴住居跡の堆積土が殆ど残存しないことが挙げられる。しかし、これらの石器類の多くは造構から出土したものとほぼ同じ特徴をもち、一緒に出土した土器から検討しても縄文時代前期後葉から中期初頭頃のものと考えられる。そこで、残りが良いものを中心に調査区東側・中央・西側に大別して示すことにする。



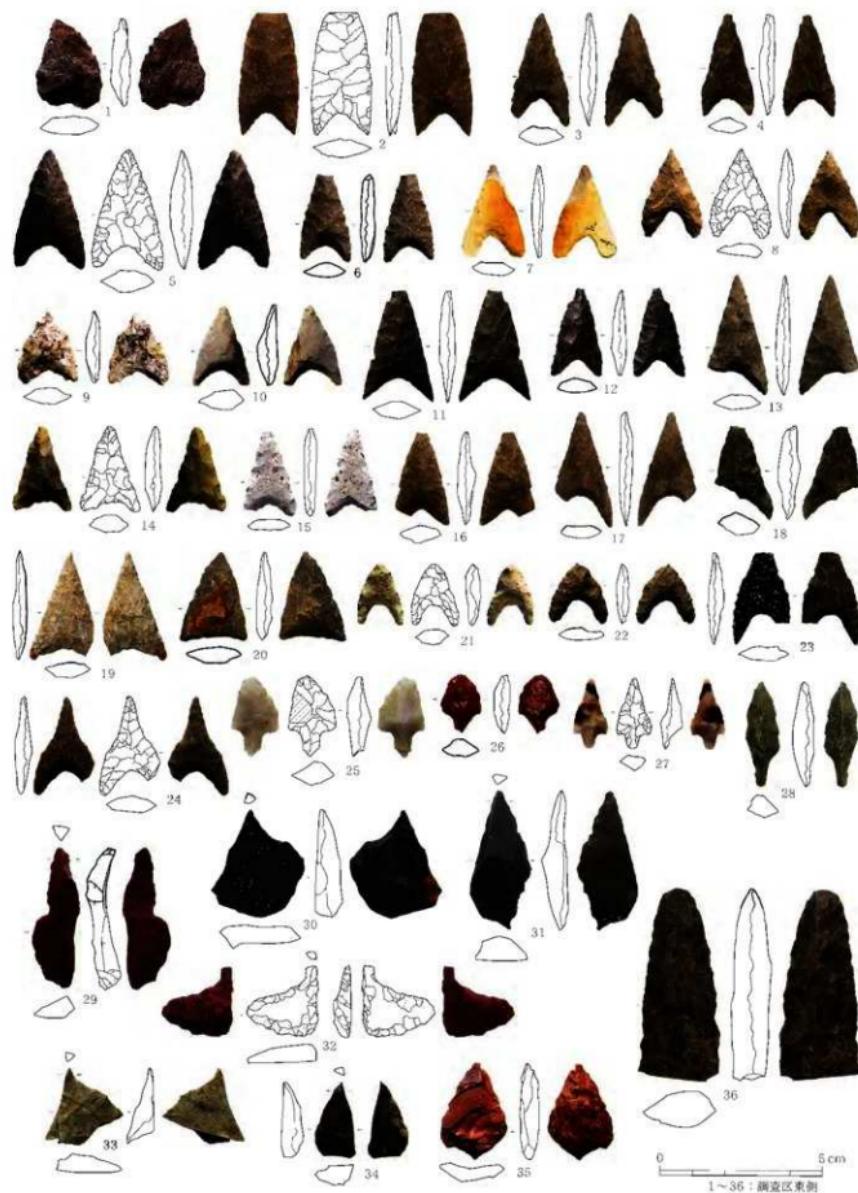
図版358 造構確認面出土遺物－縄文土器(1)－



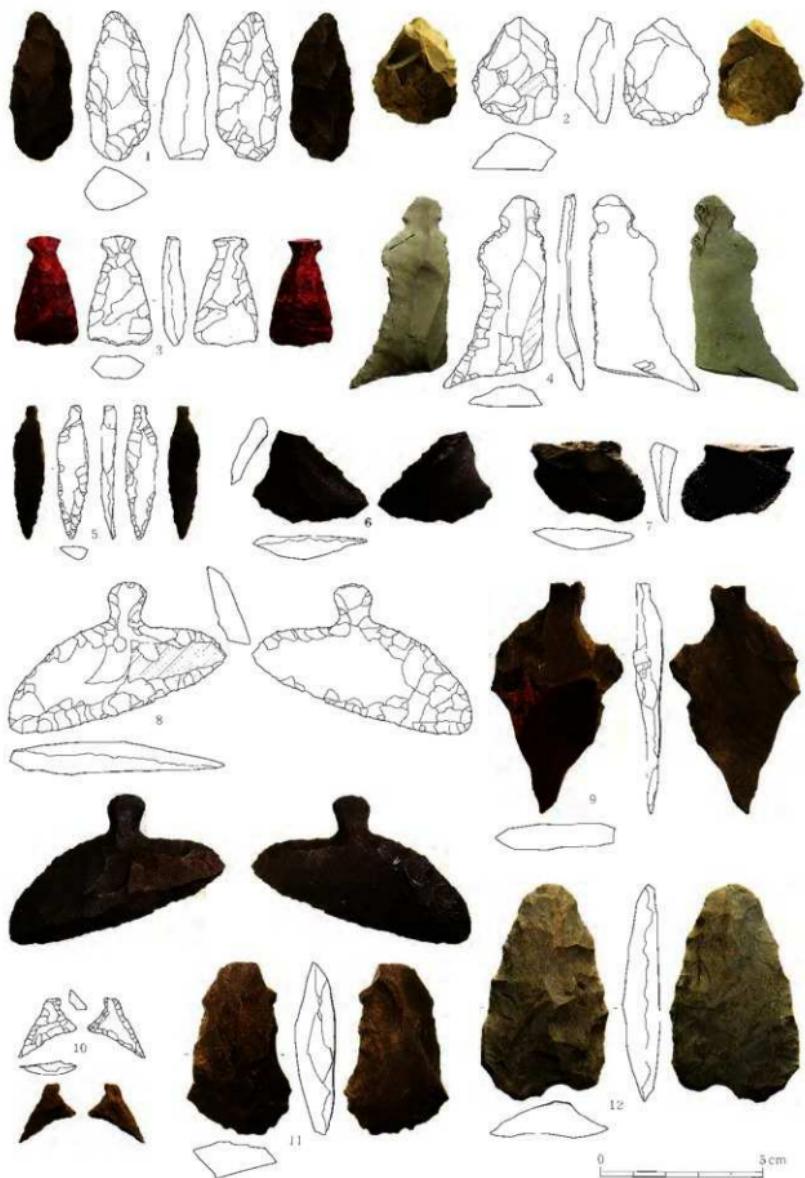
图版359 遗構確認面出土遺物 -縄文土器(2)-



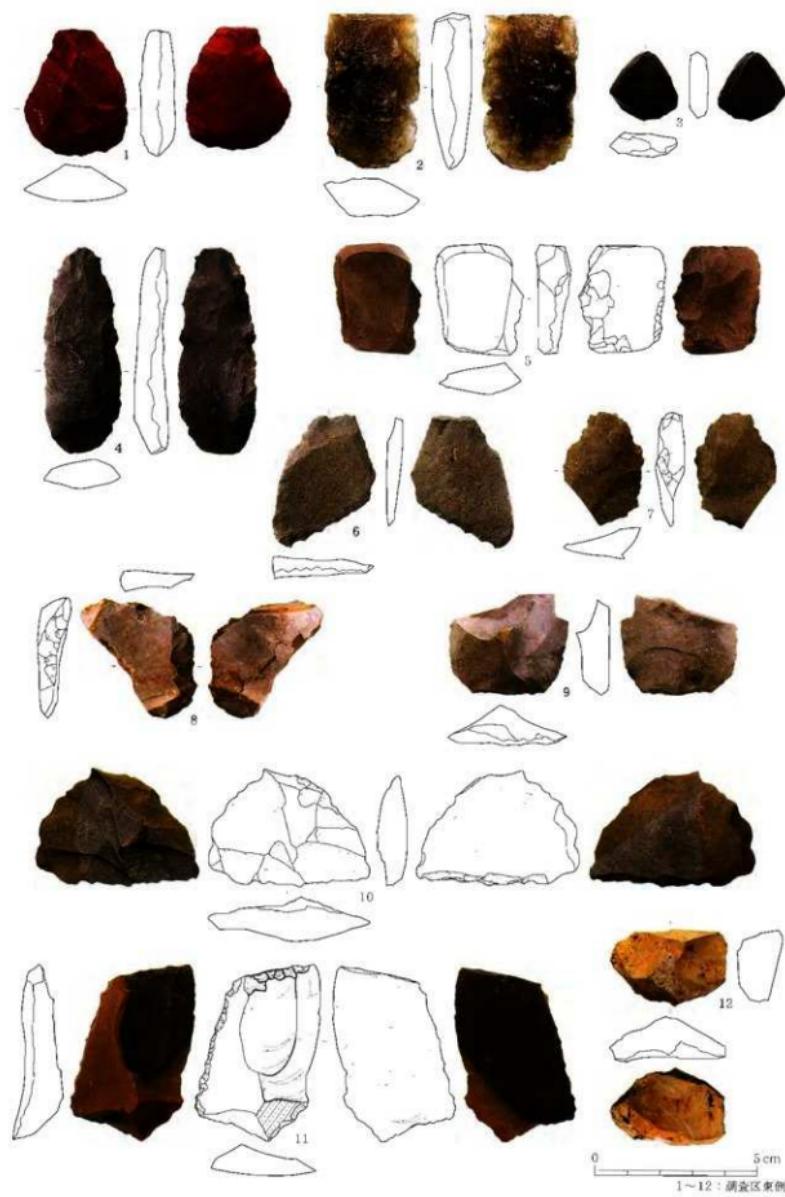
図版360 這構確認面出土遺物—縄文土器(3)—



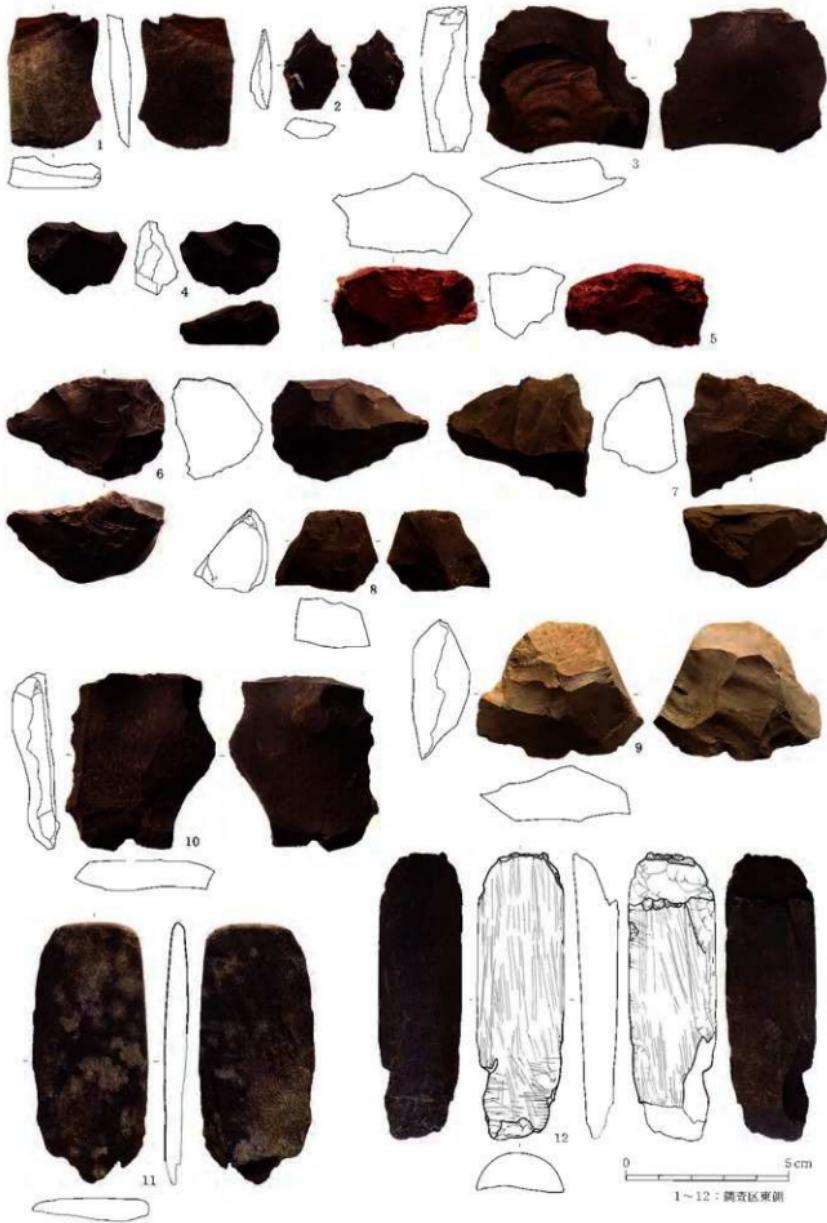
図版361 遺構確認面他出土石器－石鏃・石錐・尖頭器－



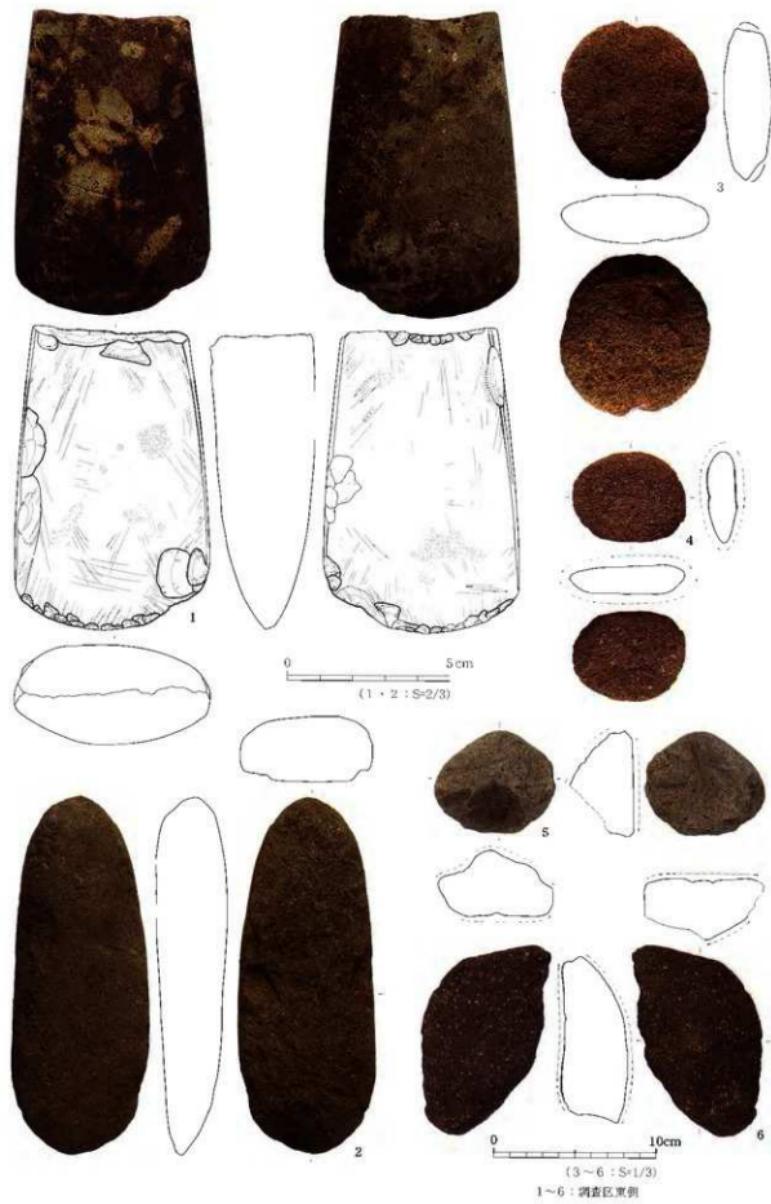
圖版362 造構確認面他出土石器—尖頭器・石匙・範狀石器—



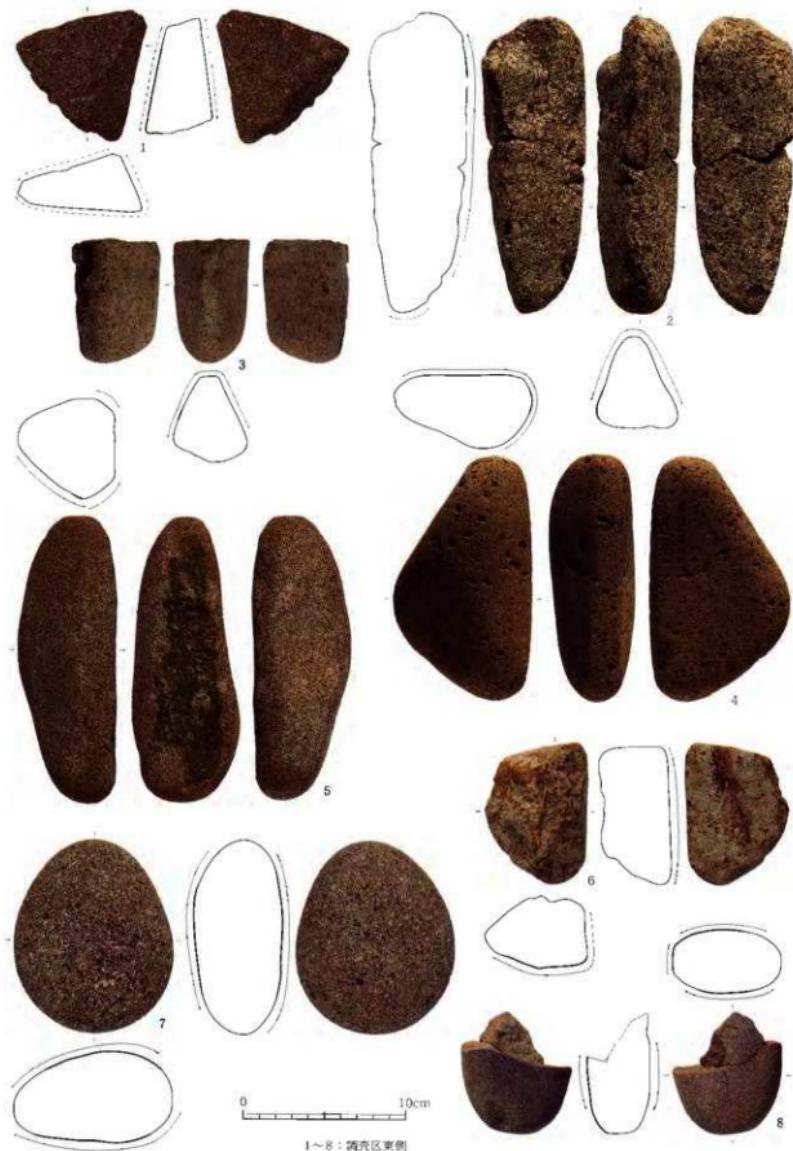
図版363 造構確認面他出土石器—箇状石器・模形石器・不定形石器—



図版364 遺構確認面他出土石器－不定形石器・石核・石製品－



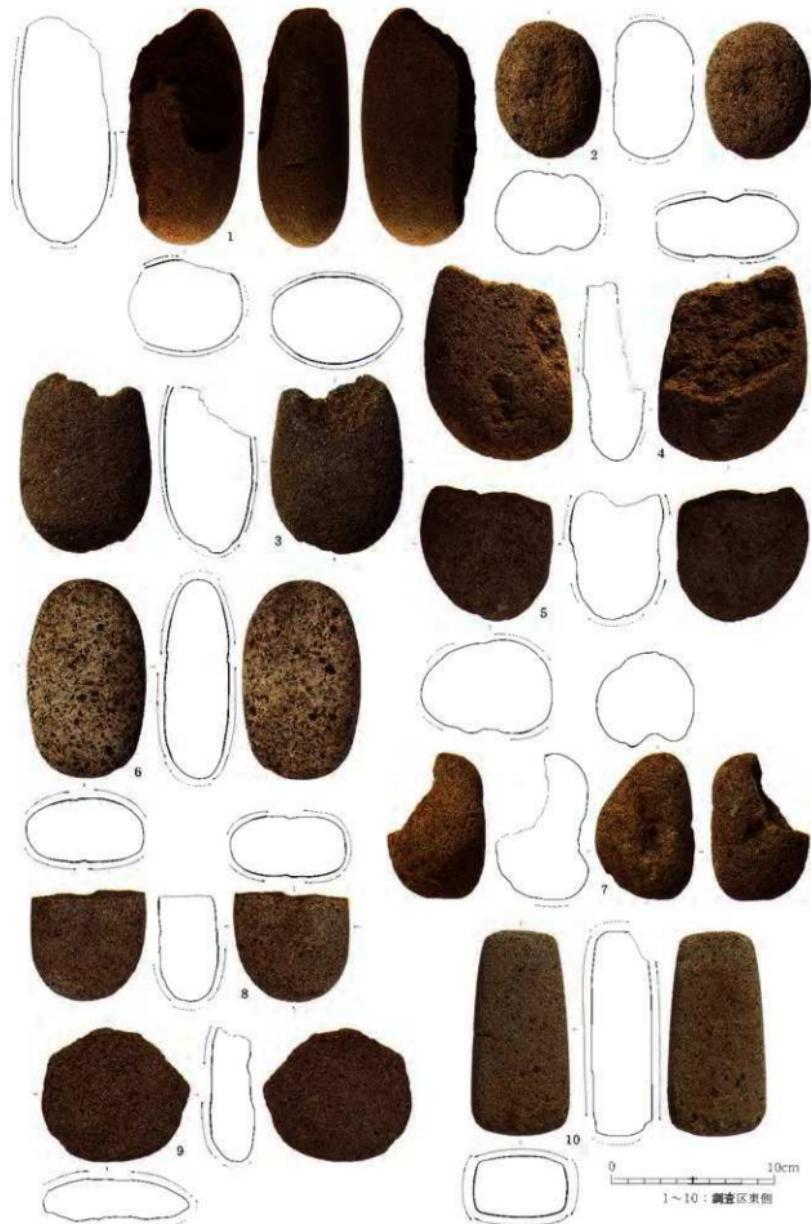
圖版365 遺構確認面他出土石器—磨製石斧・石製品・砾石—



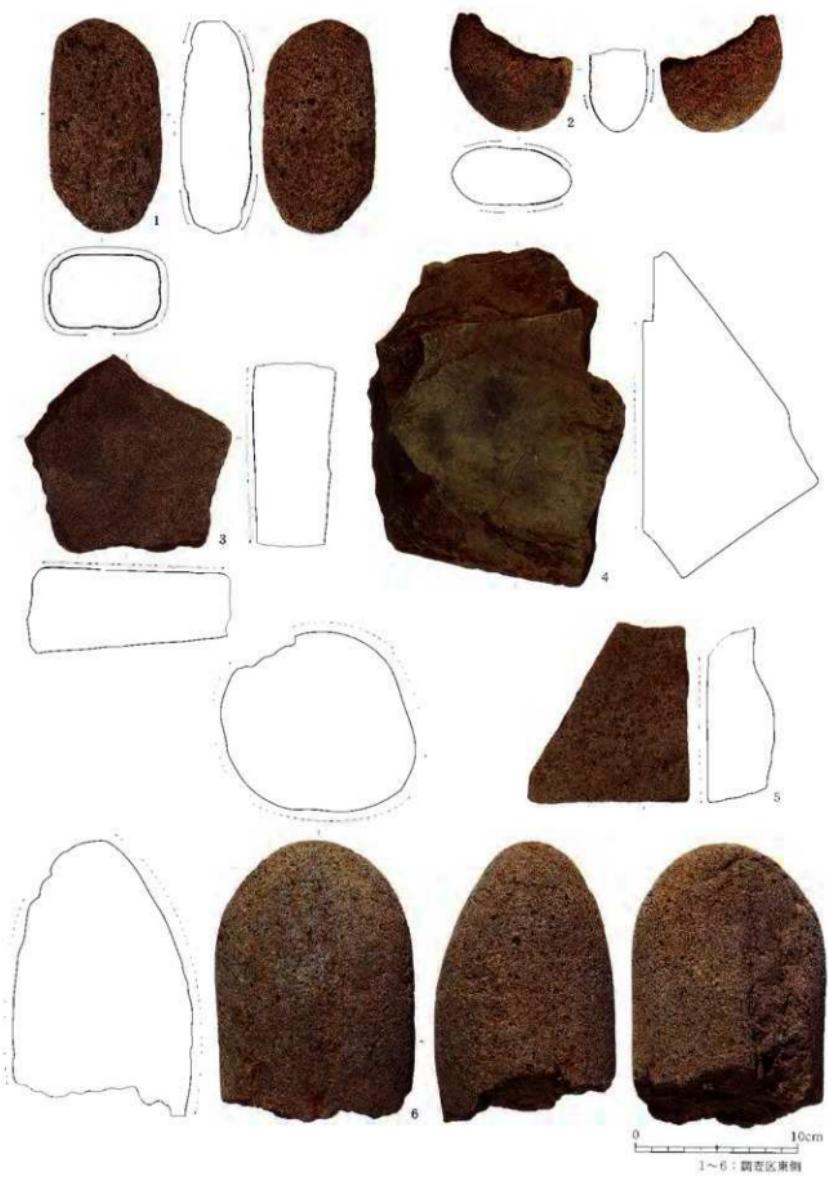
圖版366 造構確認面他出土石器—砥石・磨凹敲石—



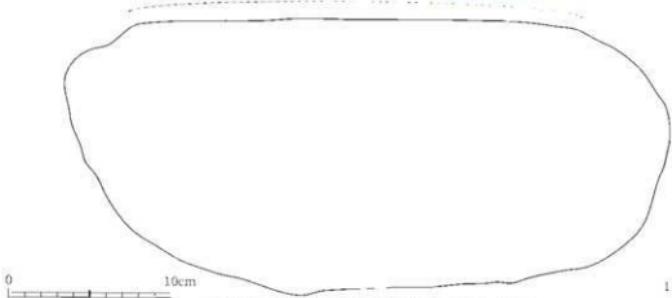
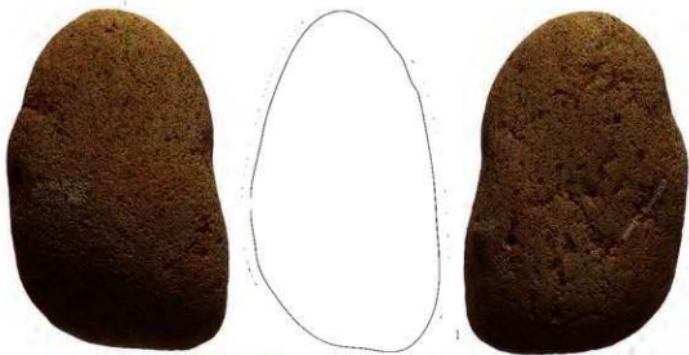
図版367 遺構確認面他出土石器—磨凹敲石—



圖版368 遺構確認面他出土石器—磨凹敲石—

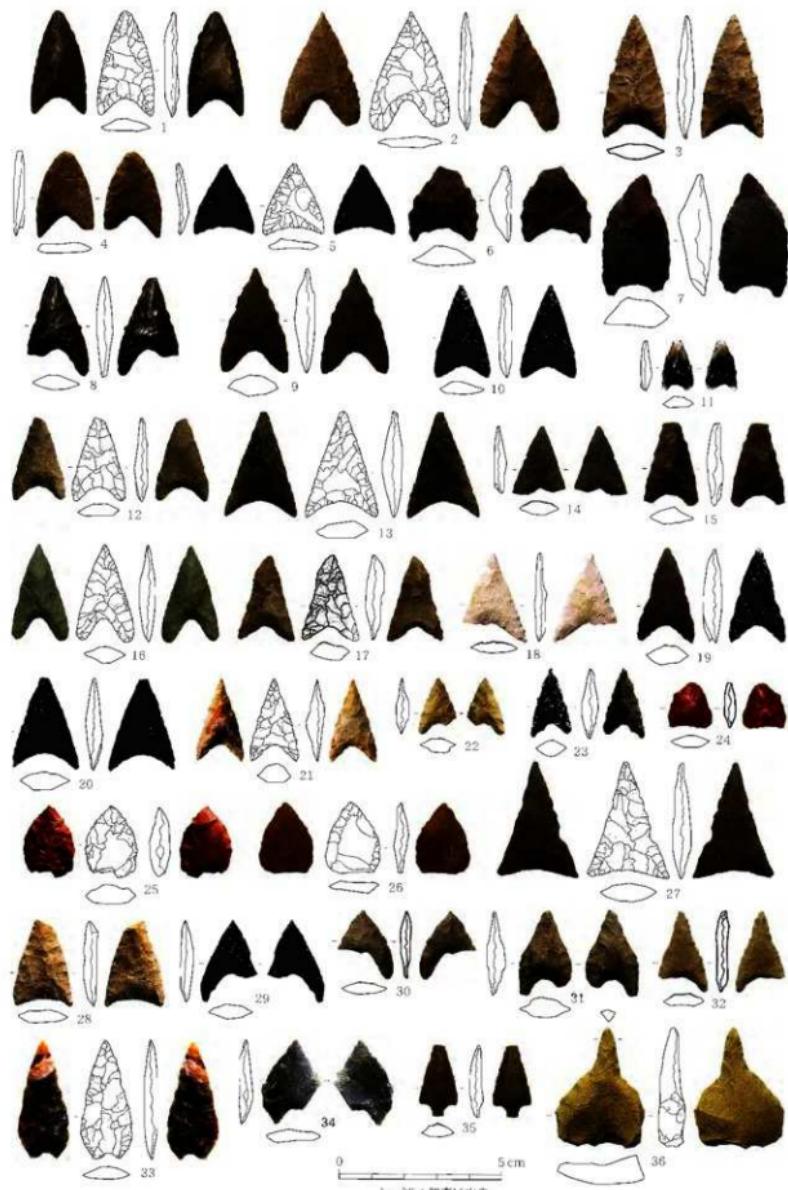


図版369 遺構確認面他出土石器－磨凹石・石皿－

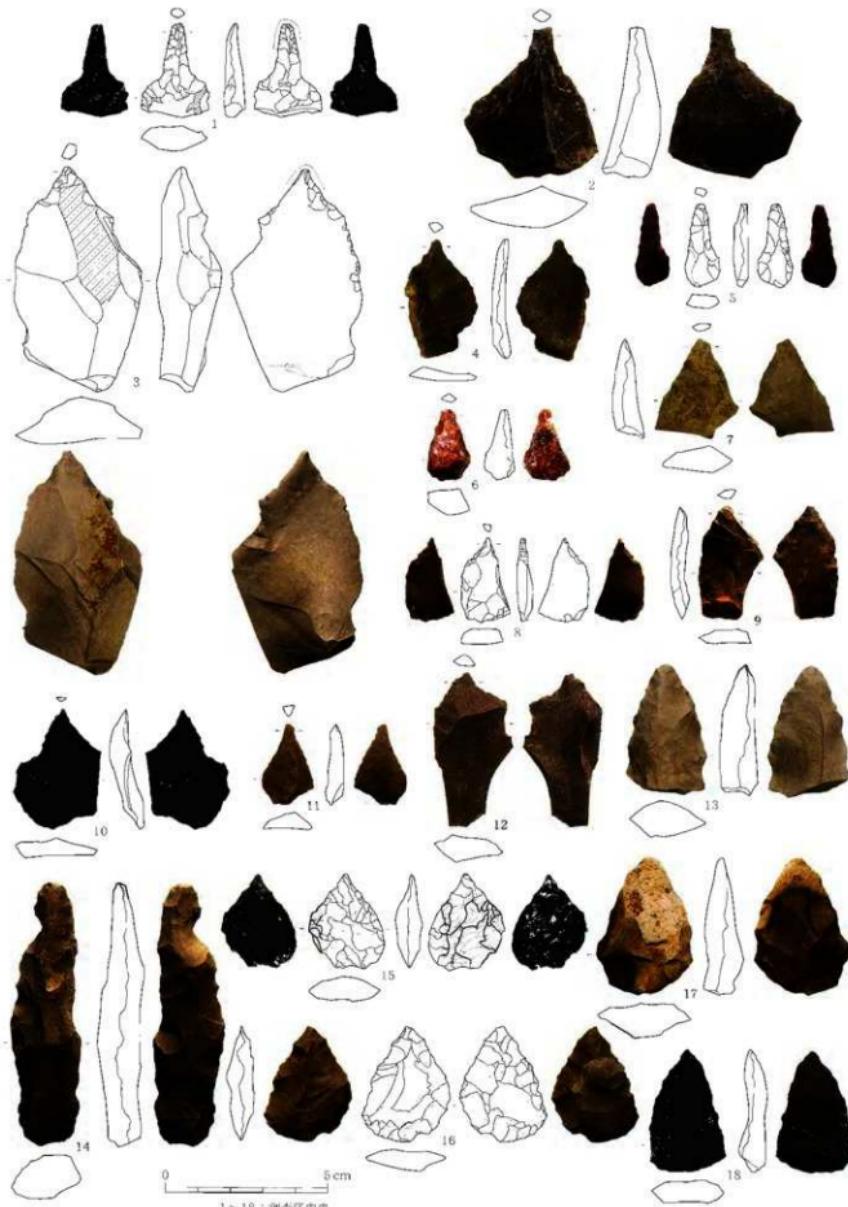


圖版370 遺構確認面他出土石器—磨石・石皿—

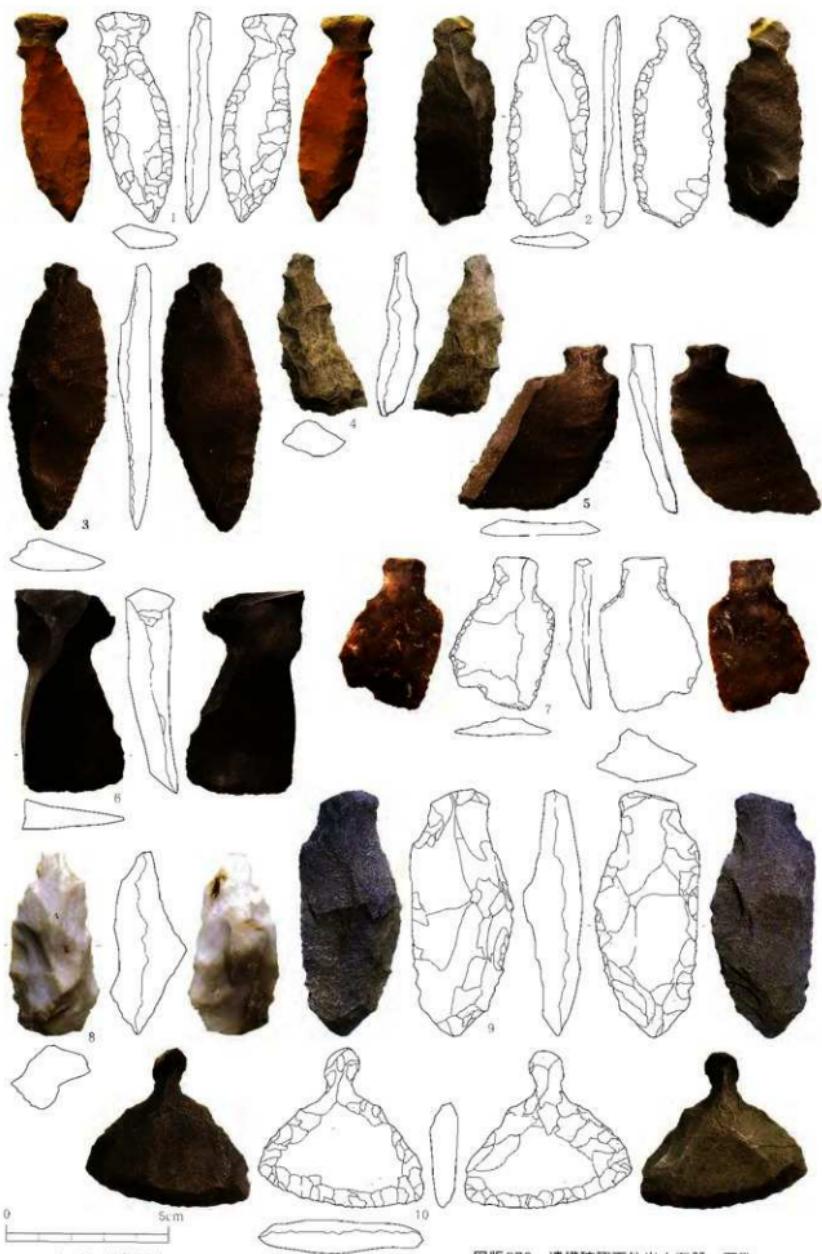
1・2：調查區東側



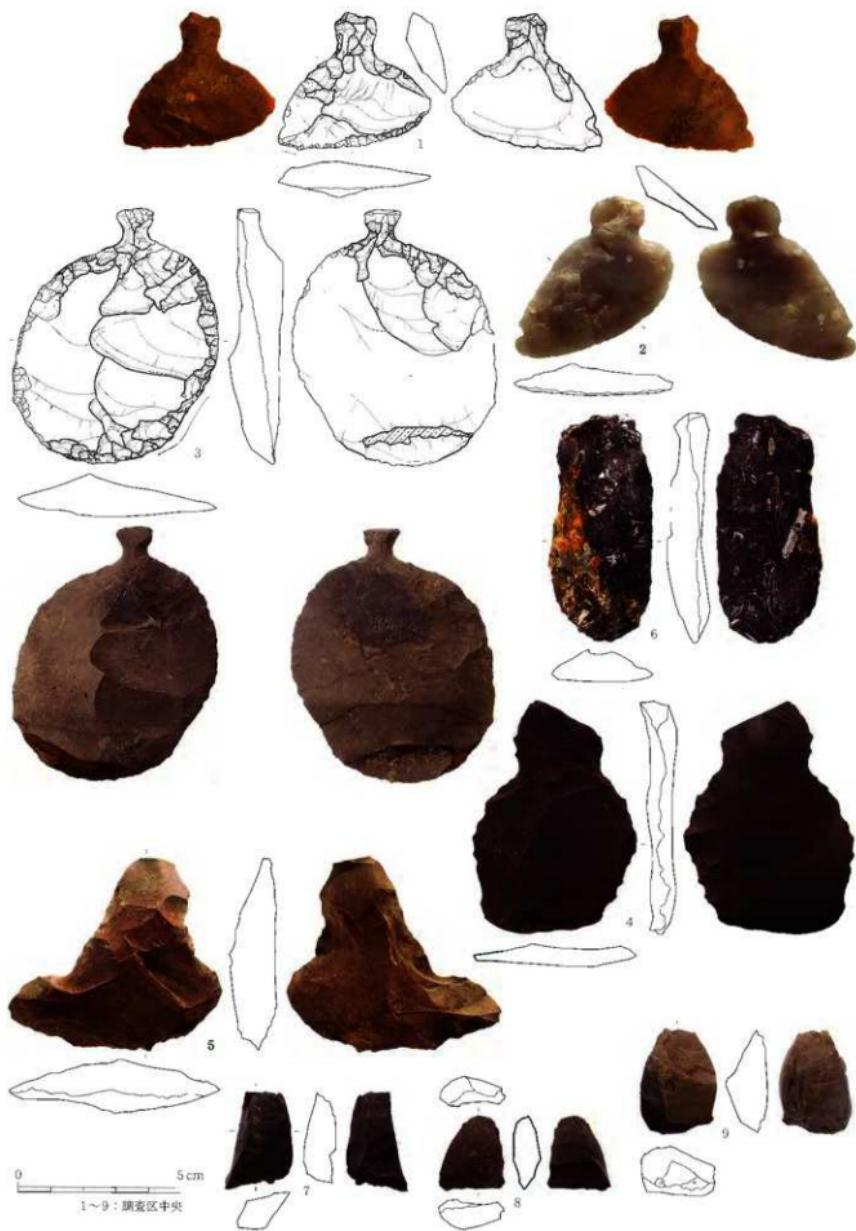
圖版371 遺構確認面他出土石器—石鏃・石錐—



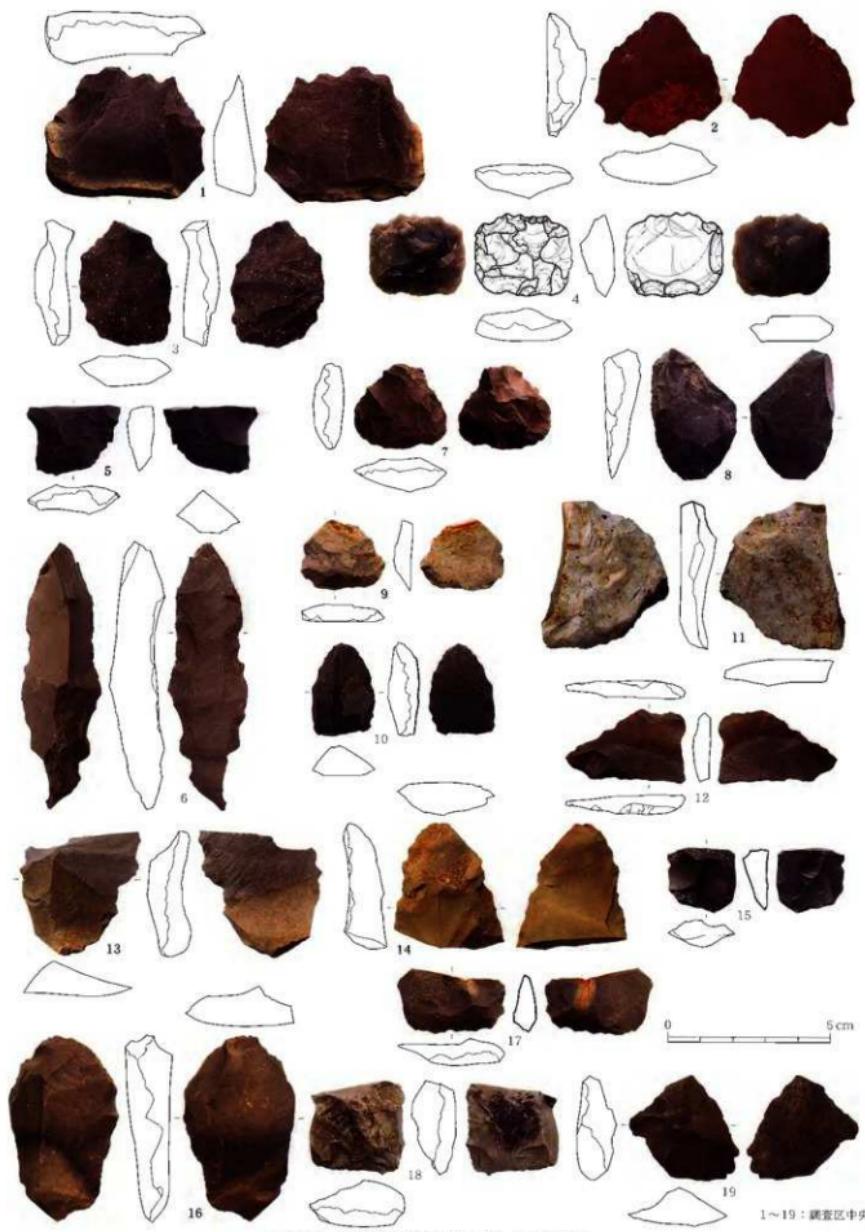
1~18: 調査区中央
図版372 遺構確認面他出土石器—石錐・尖頭器—



図版373 遺構確認面他出土石器－石匙－

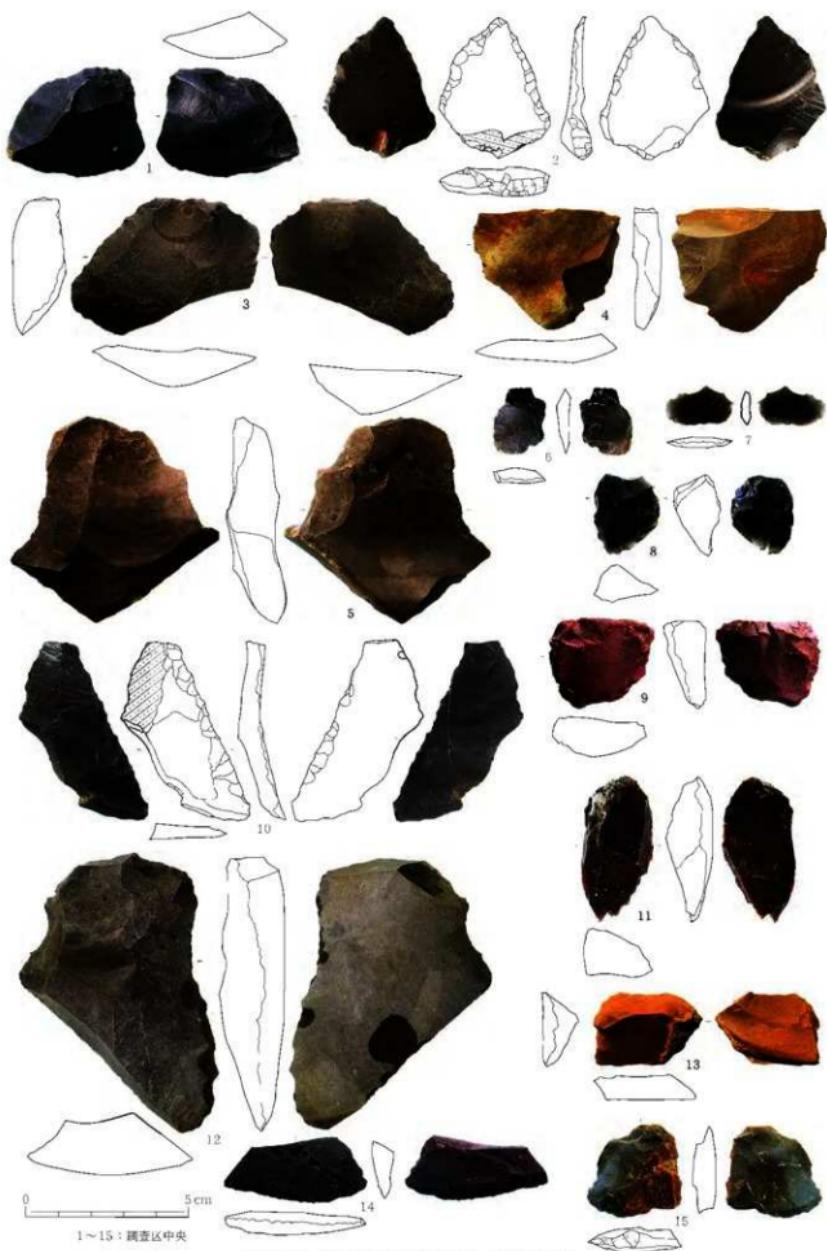


図版374 造構確認面他出土石器—石匙・箆状石器・楔形石器—

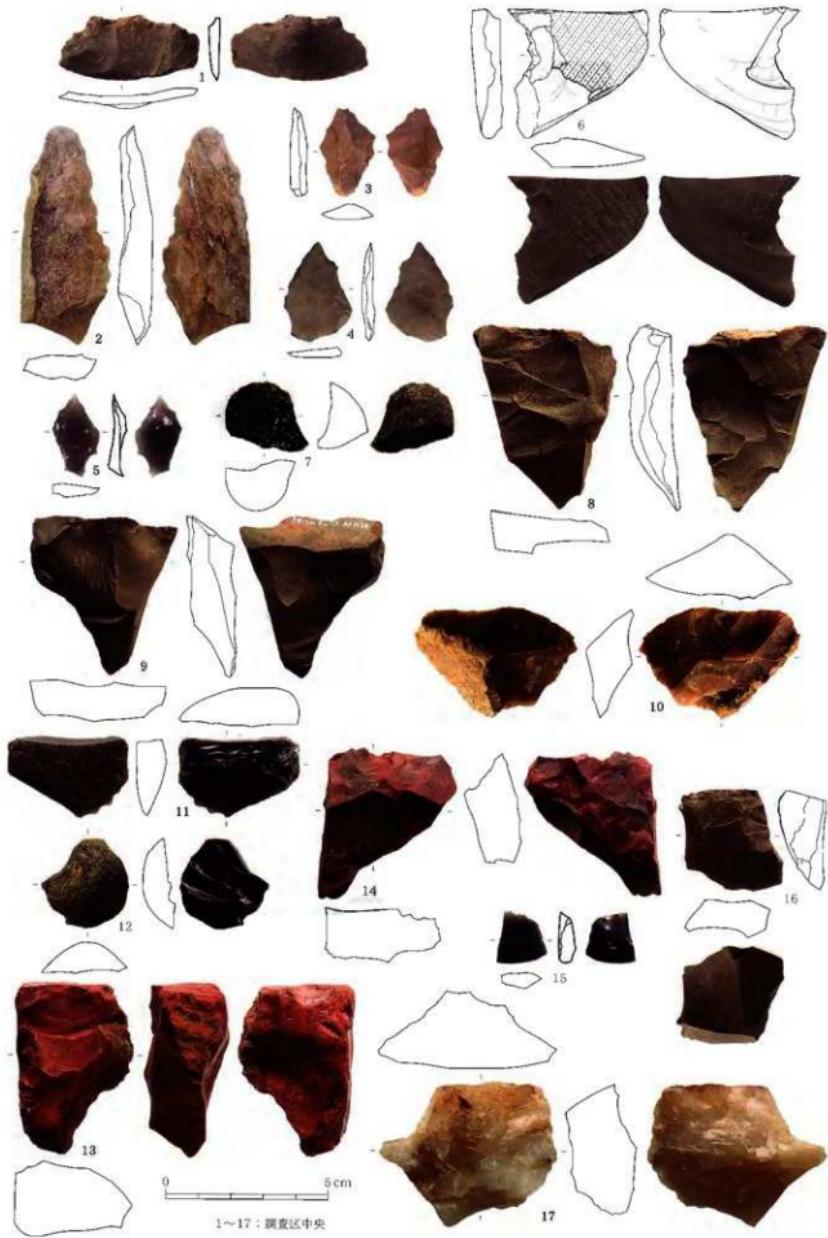


图版375 遗構確認面他出土石器—不定形石器—

1~19: 調査区中央

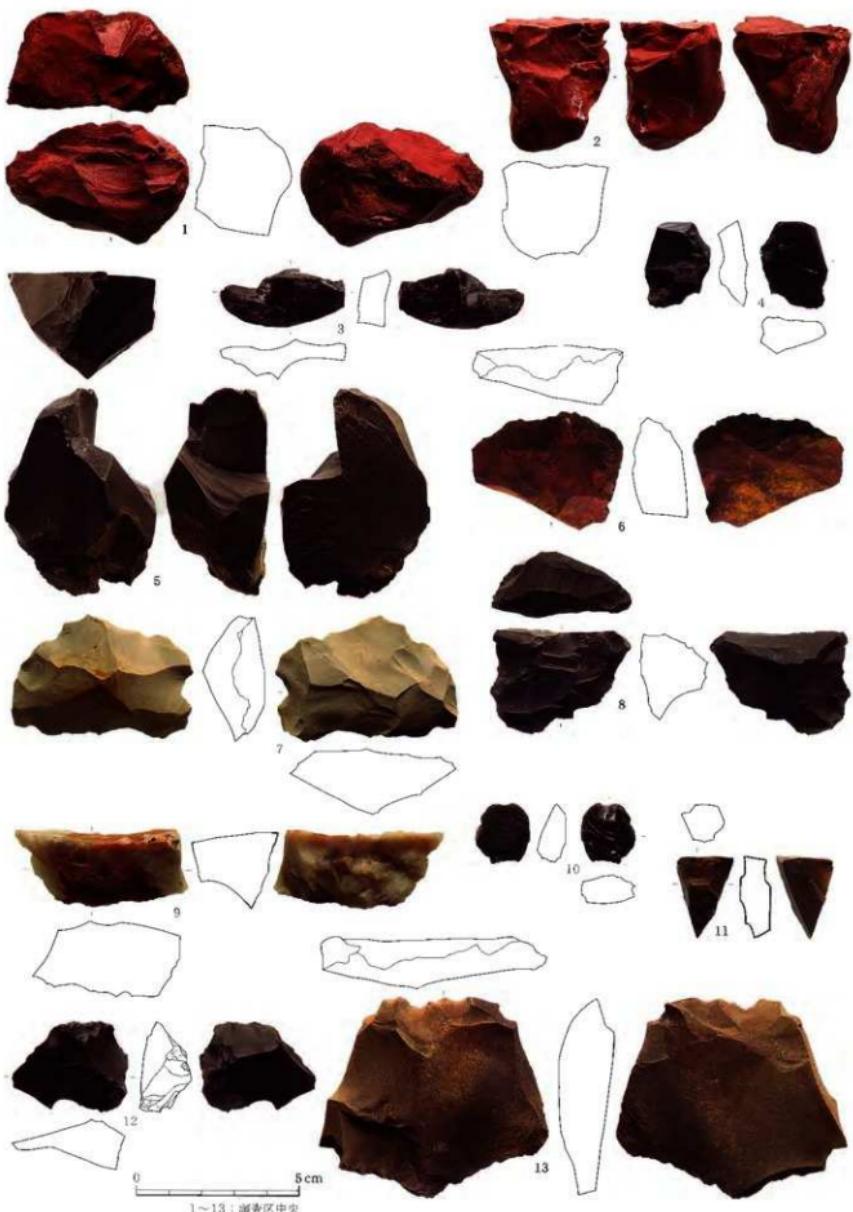


図版376 遺構確認面他出土石器－不定形石器－

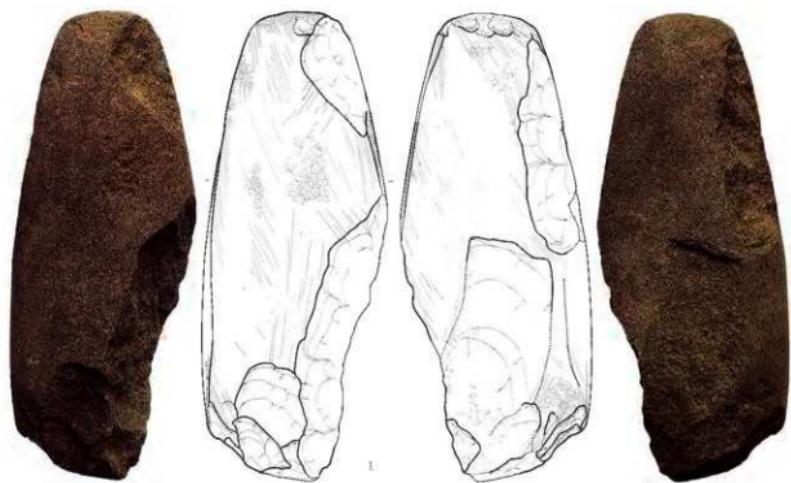


1~17：調査区中央

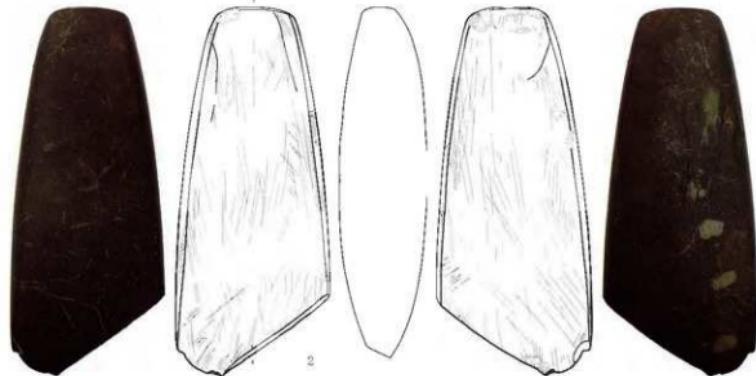
図版377 遺構確認面他出土石器－不定形石器・石核－



图版378 造构确认面他出土石器—石核·楔形石器—



1.

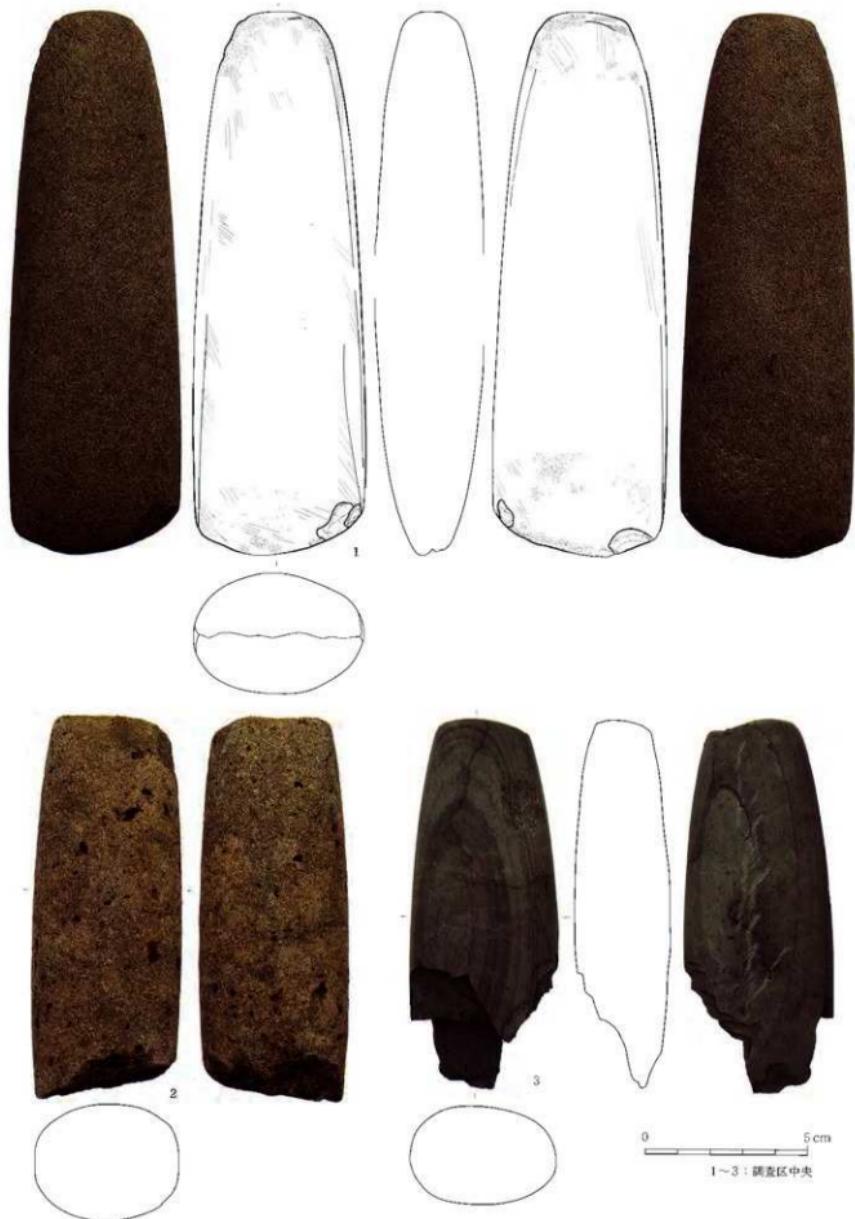


2.

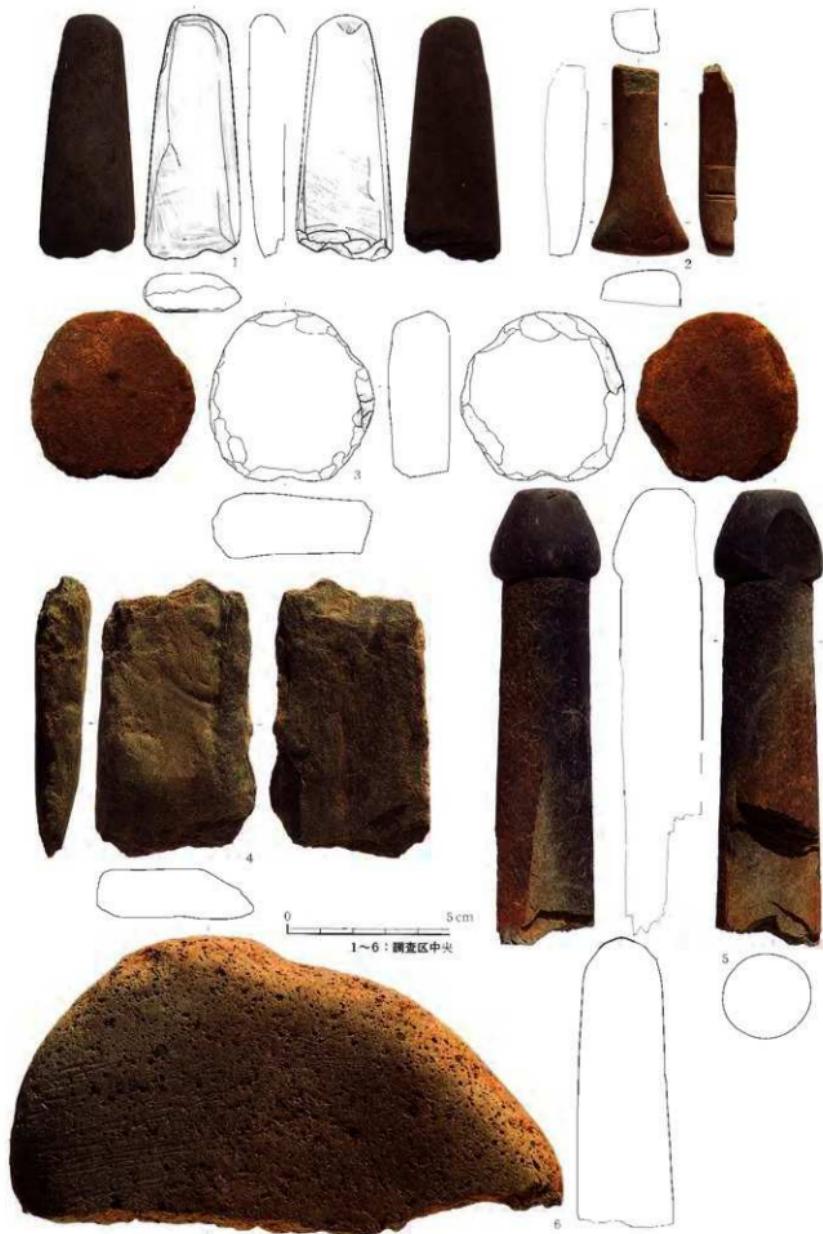


1・2：調査区中央

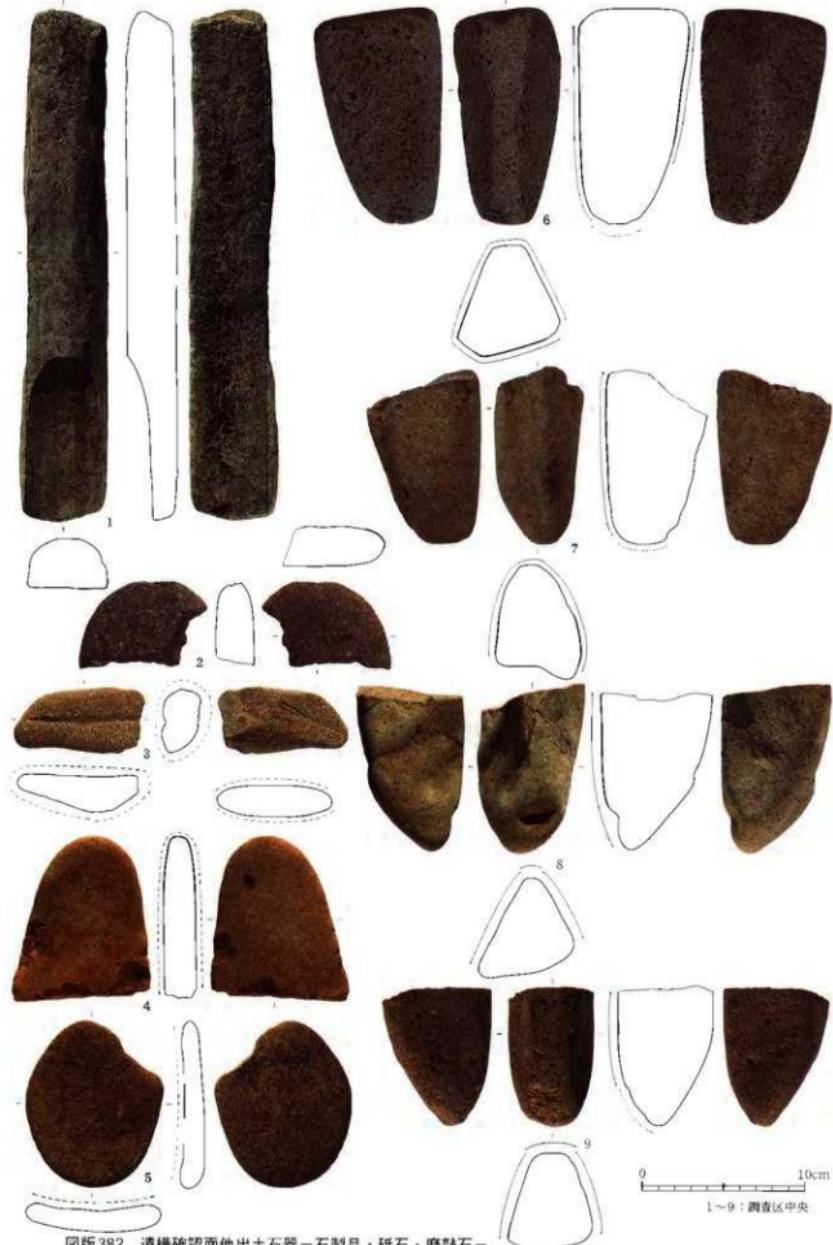
図版379 遺構確認面他出土石器－磨製石斧－



図版380 遺構確認面他出土石器－磨製石斧－

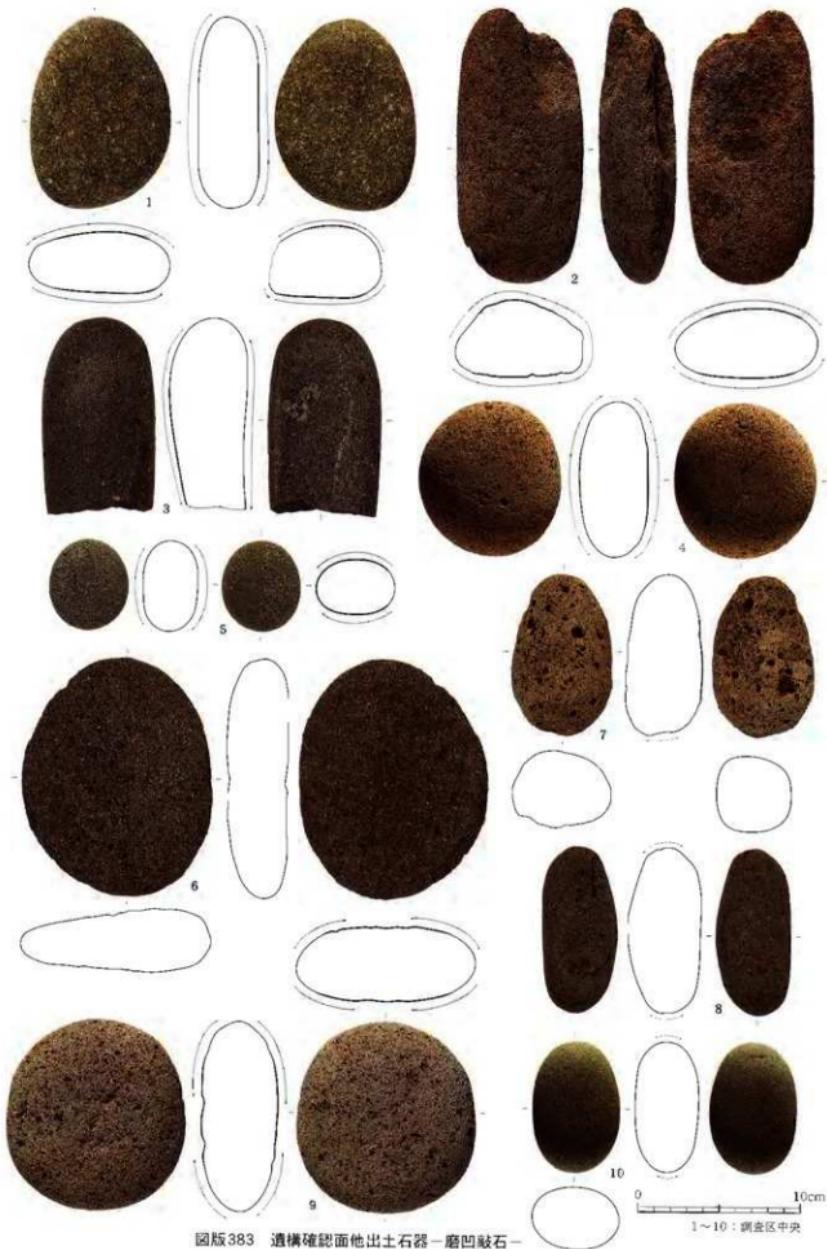


図版381 遺構確認面他出土石器—磨製石斧・石製品—

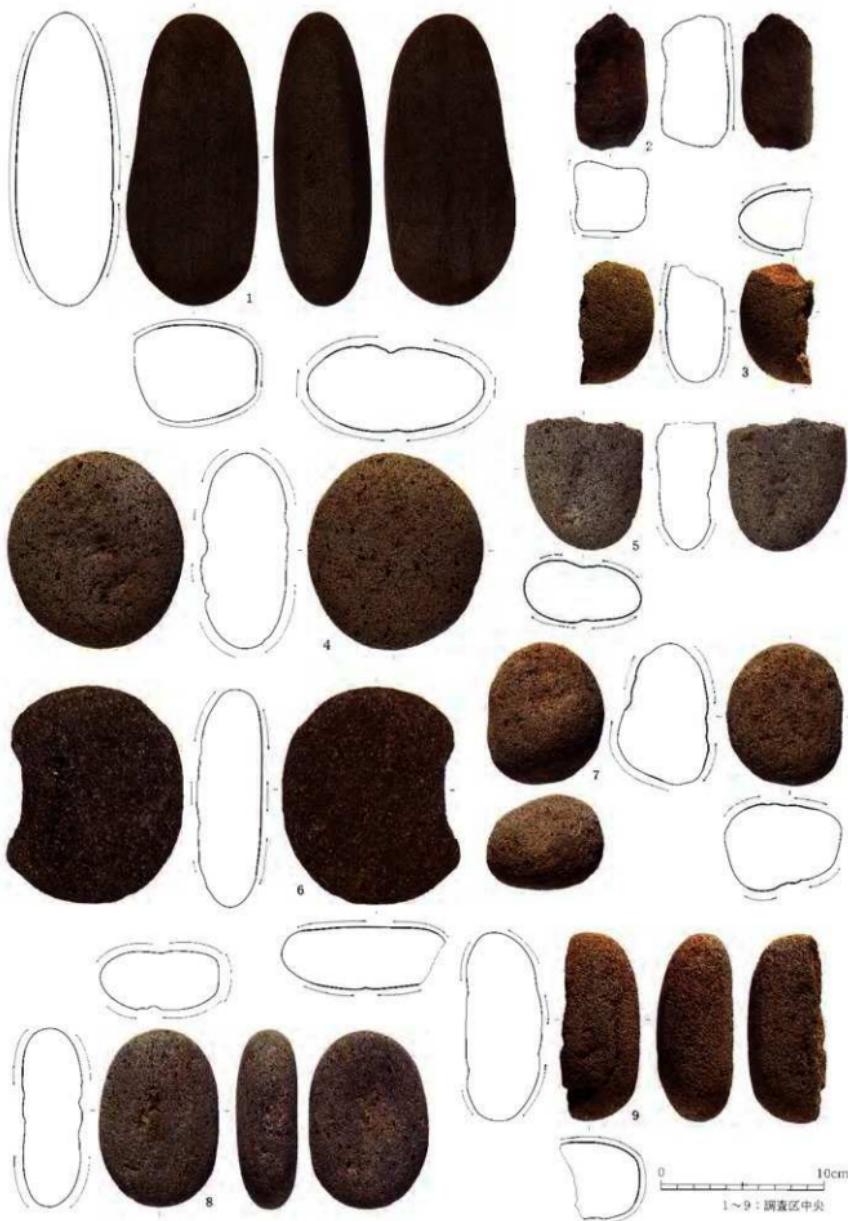


図版382 遺構確認面他出土石器—石製品・砥石・磨歯石—

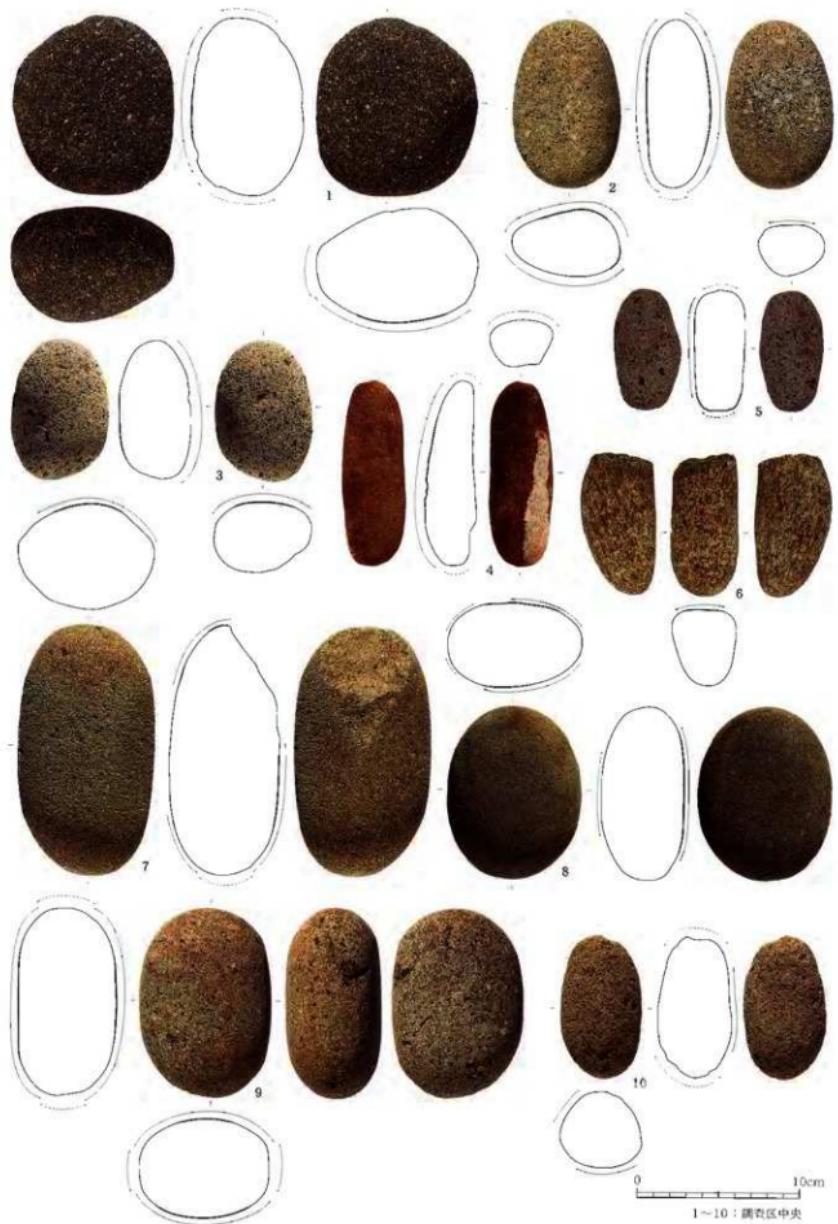
1~9: 調査区中央



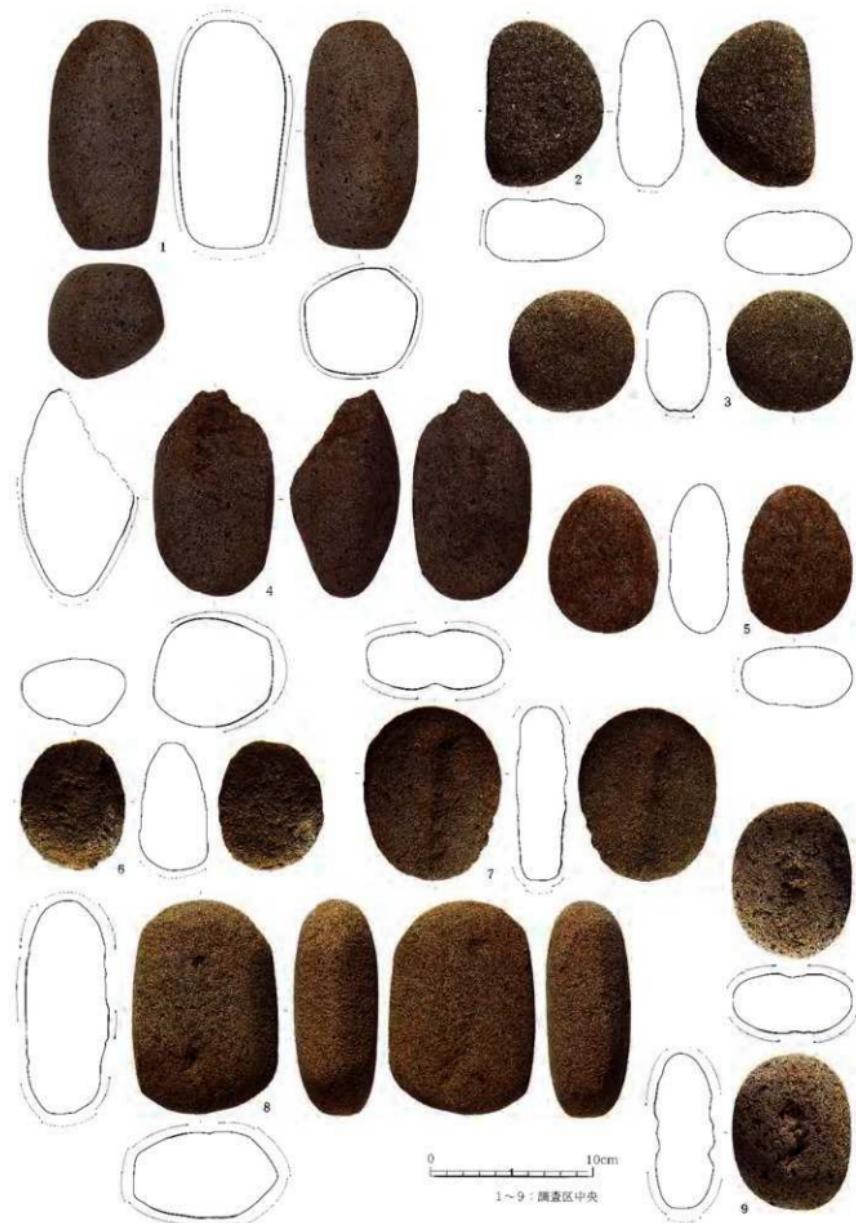
図版383 遺構確認面他出土石器—磨凹敲石—



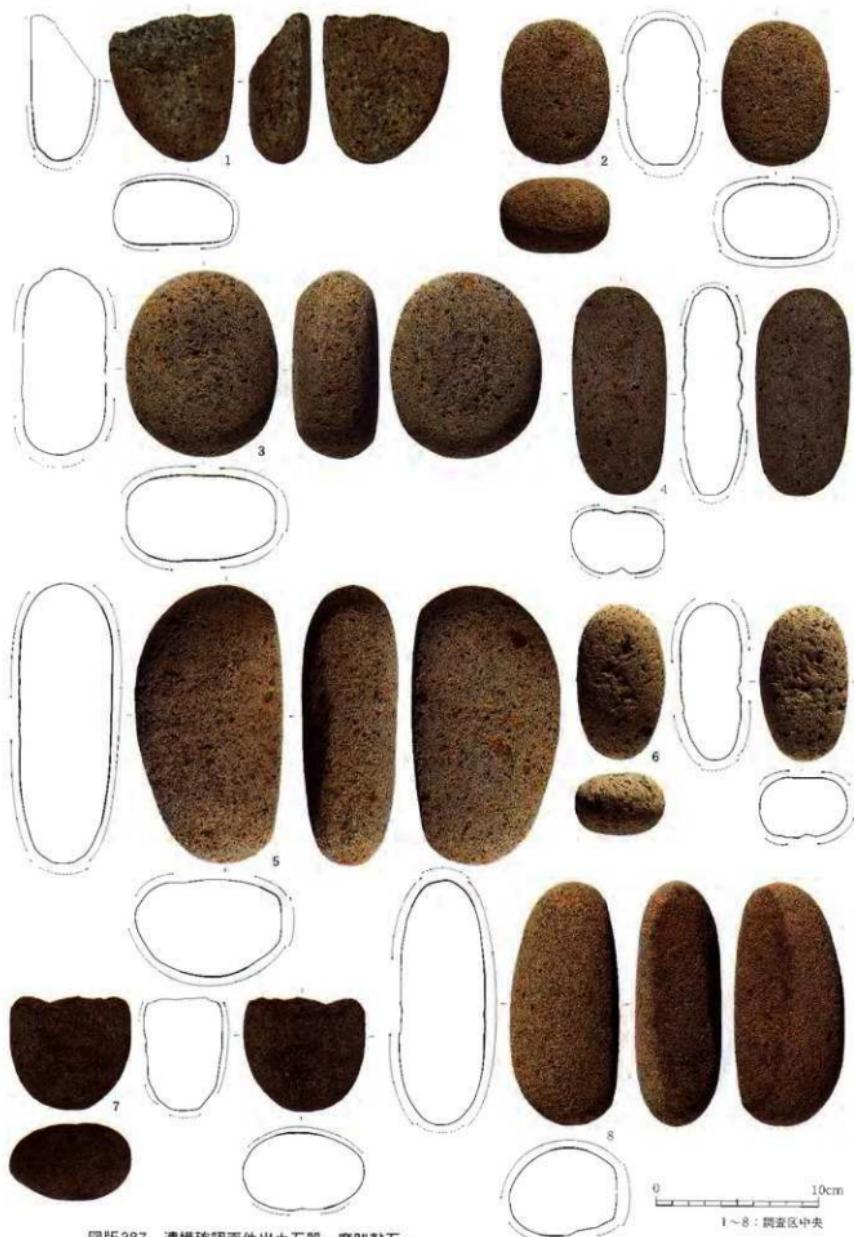
圖版384 這構確認面他出土石器—磨凹石—



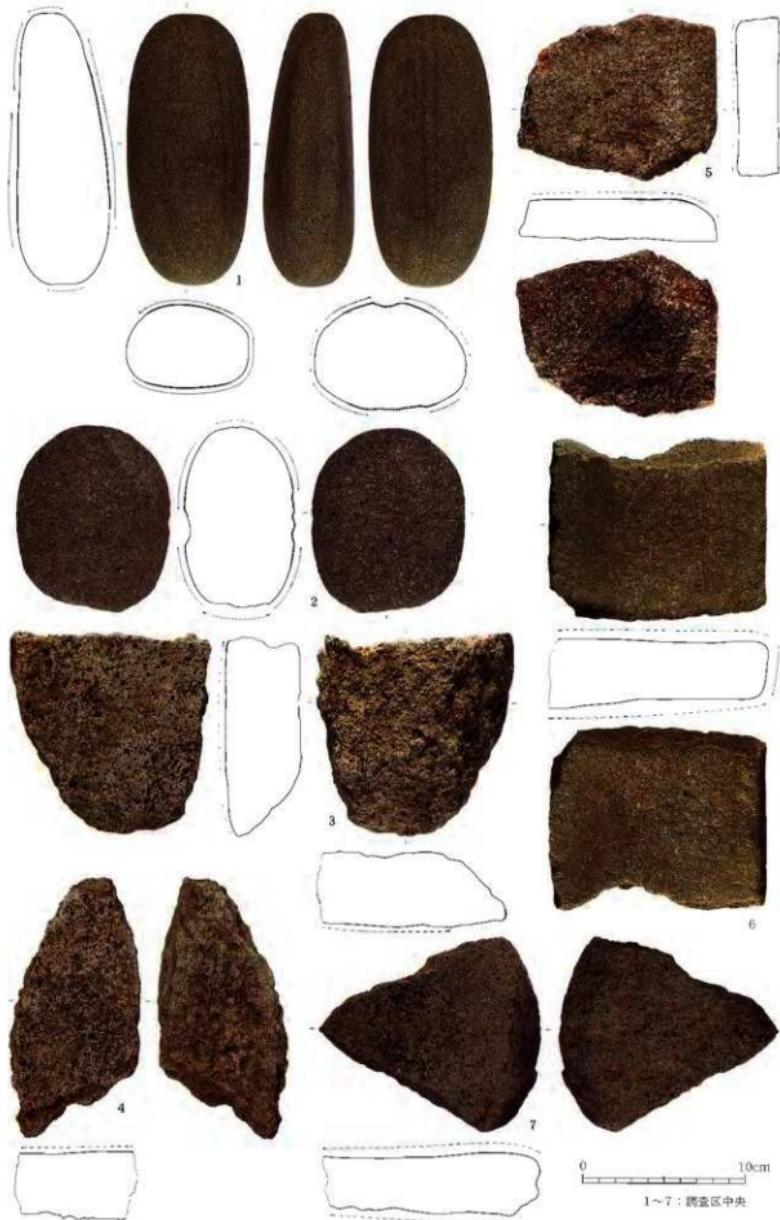
図版385 遺構確認面他出土石器－磨敲石－



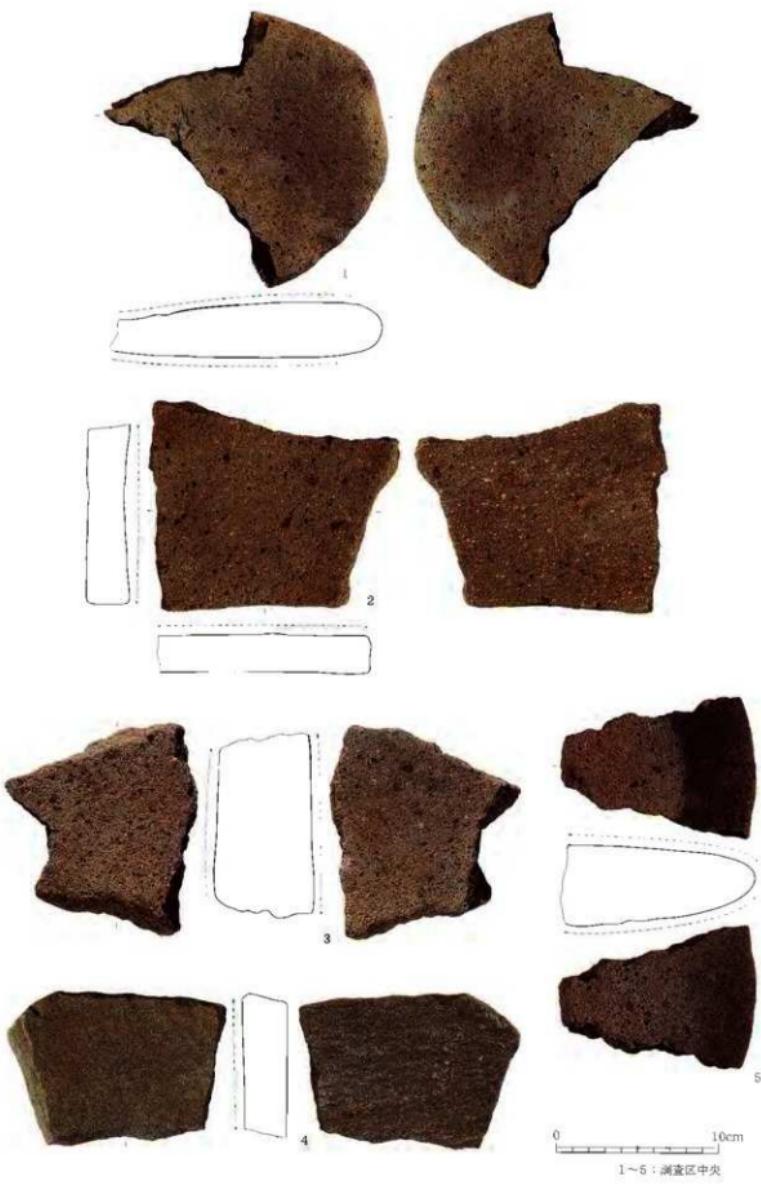
図版386 遺構確認面他出土石器－磨凹敲石－



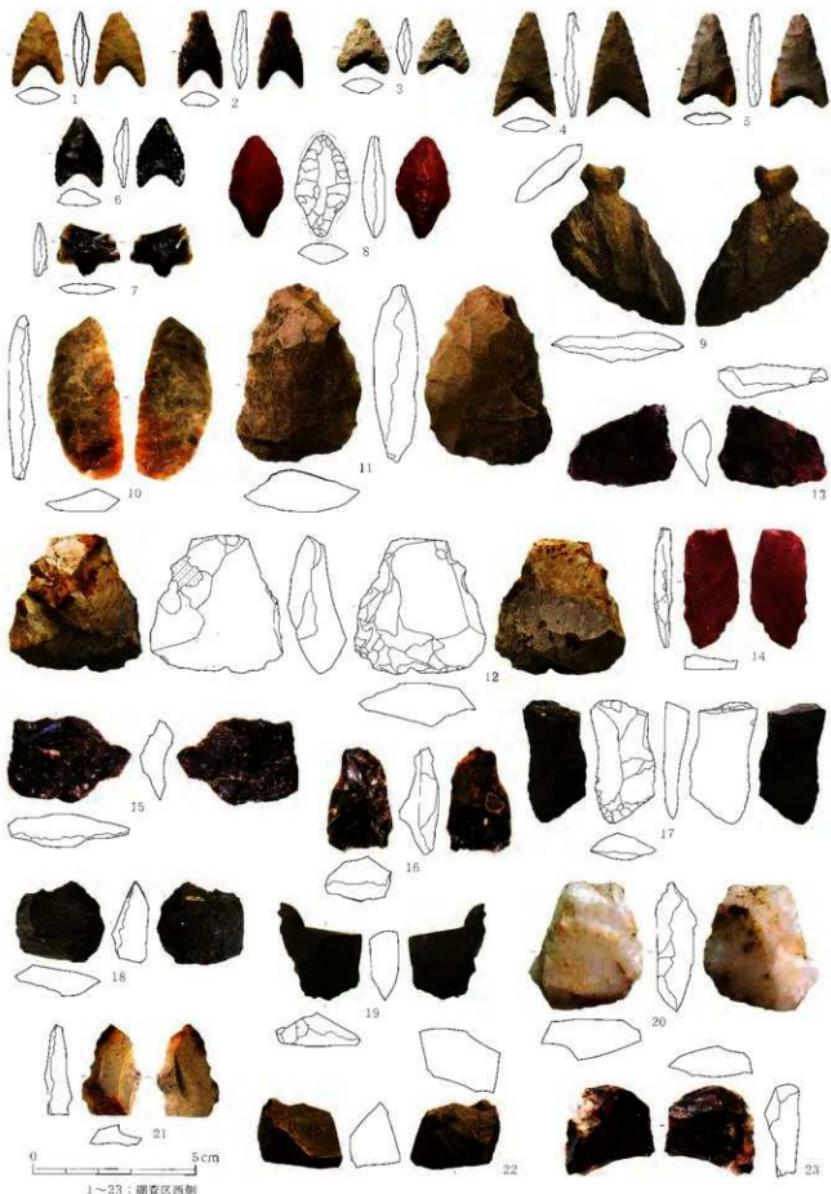
図版387 遺構確認面他出土石器—磨凹敲石—



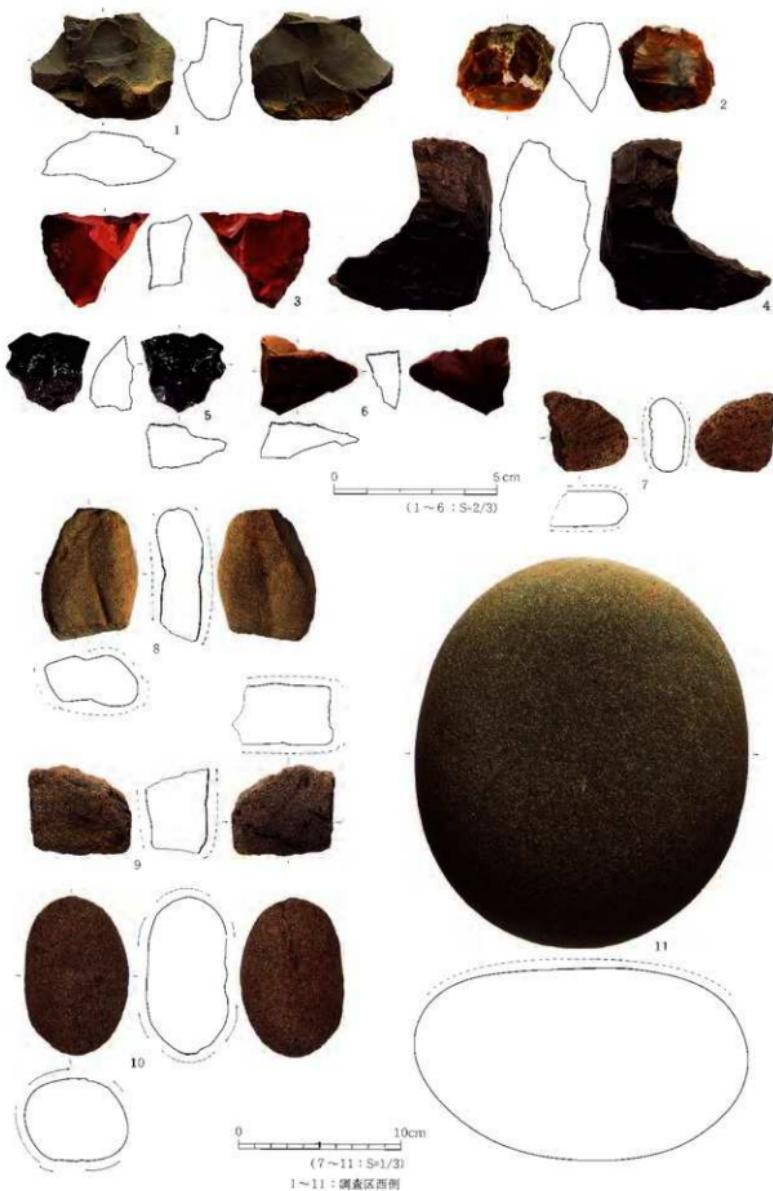
図版388 造構確認面他出土石器—磨凹敲石・石皿—



図版389 遺構確認面他出土石器－石皿－



図版390 遺構確認面他出土石器－石鏃・石匙・鏟状石器・不定形石器・石核－



図版391 造構確認面他出土石器—石核・砥石・磨凹敲石・石皿—

B 古代

堅穴住居跡は改築されたものを含めると14軒、工房跡1軒、土壙4基が確認されており、以下、それらについて説明する。

1 堅穴住居跡

【SI13住居跡】(図版392・393)

【位置】 N-0-S・W-33

【確認面】 地山およびSI20・21堆積土上面

【重複】 SI20・21と重複し、これより新しい。

【規模・平面形】 一辺4.4m前後の隅丸正方形である。

【堆積土】 2層認められ、第1層は炭粒を少量含む自然堆積の黒褐色シルト、第2層は地山ブロックや炭を多く含む黒褐色シルトで、埋め戻されている。また床面には炭化材が良好な遺存状態で残されており、これらの状況からこの住居は焼失したものと考えられる。

【床面】 中央部は地山を床面とし、東半の周辺部は黒褐色シルトブロックを多く含む黄褐色粘質シルトの掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

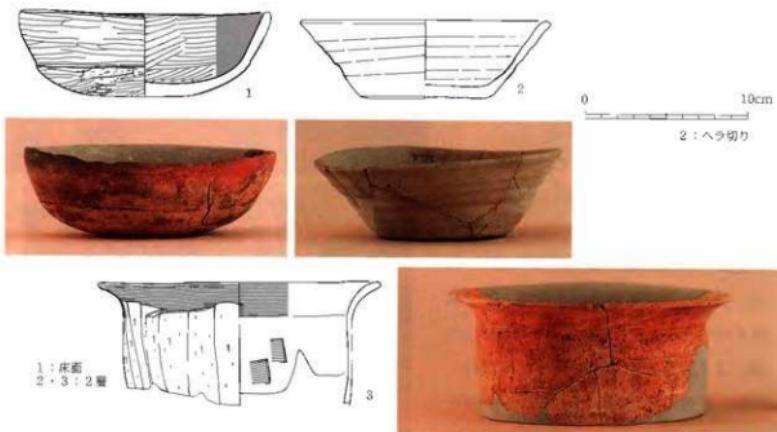
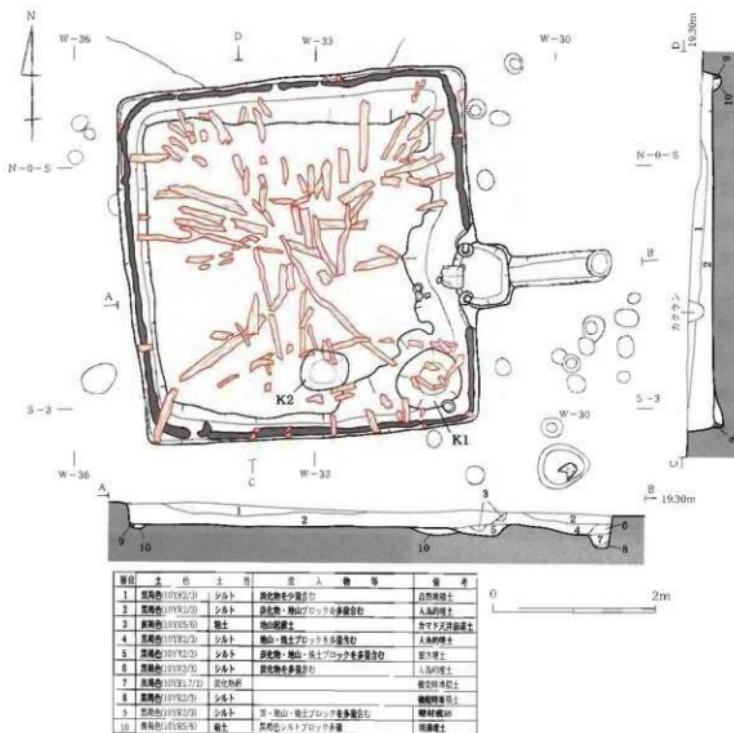
【壁】 最も残りの良い部分で高さ33cm程が残存し、ほぼ垂直に立ち上がっている。

【主柱穴】 検出されなかった。

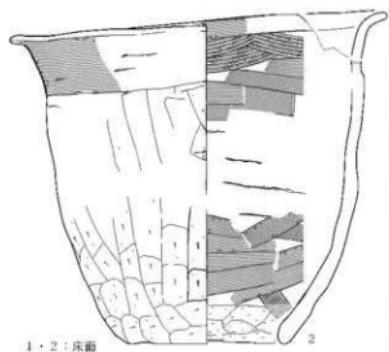
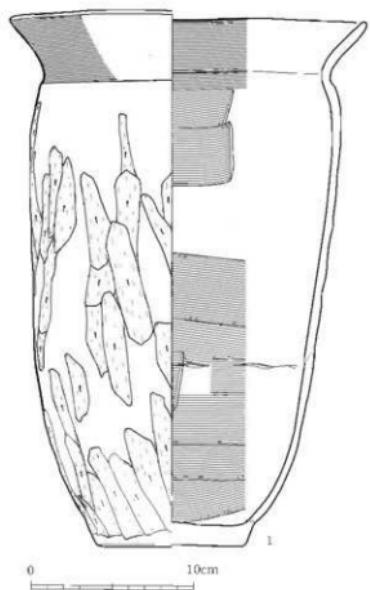
【カマド】 東辺のやや南よりに付設されている。カマド本体は幅約80cm、奥行き約60cmで、燃焼部は東壁から張り出すように地山を40cm程掘り込んでつくられている。焚き口は浅黄色粘土を積み上げて構築されており、側壁の長さ約20cmで、先端には土師器甕が補強のため転用されている。煙道は幅約35cm、深さは約15～24cmで、先端に向かって次第に深くな



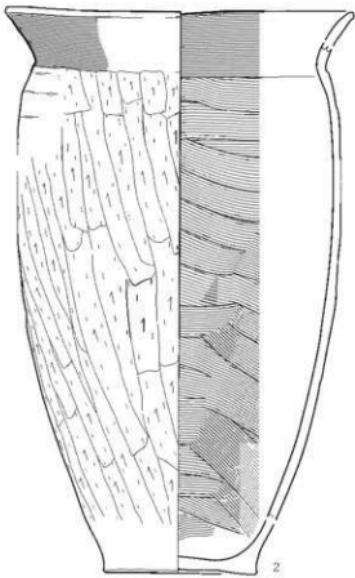
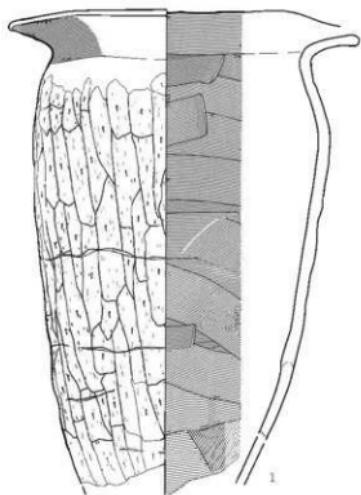
図版392 SI13住居跡



図版393 SI13住居跡および出土遺物(1)



図版394 SI13住居跡出土遺物(2)



1 · 2 : 床面

圖版395 SI13住居跡出土遺物(3)

っており、先端部は直径30cm程の円形のピット状を呈し、煙道底面よりも17cm程深くなっている。堆積土は人為的に埋め戻された、炭や焼土ブロックを含む黒褐色シルトや天井崩落土である黄褐色粘質シルトで、先端部には機能中に自然堆積した炭や黒褐色シルト層も認められる。

【周溝】全辺で検出した。掘り方埋土を埋め戻す際に同時に埋め戻されており、輪郭が明瞭なのは西半のみである。幅20~50cm、深さ5~10cmで、溝は埋め戻されており、壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅3~12cm、深さ約4~17cmの黒褐色シルトの堆積土が認められる。

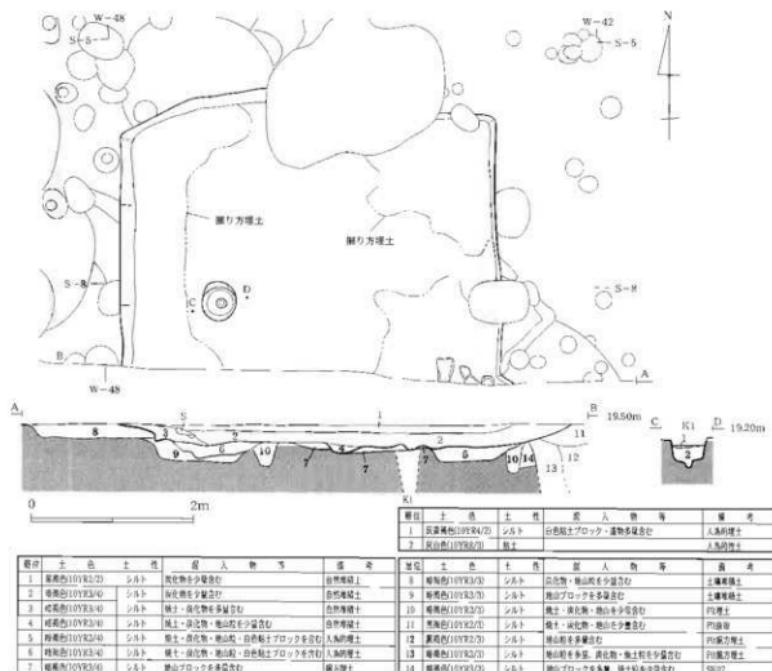
【貯藏穴】南東隅に2カ所確認された。K1は短径約70cm、長径約80cm、深さ約30cmの楕円形で、K2は長軸60cm、短軸45cm、深さ26cmの隅丸長方形である。堆積土は共に地山ブロックを含む暗褐色土で埋め戻されている。

【方向】カマドが付設された向きを中軸線としてみると、東で約4°北に偏している。

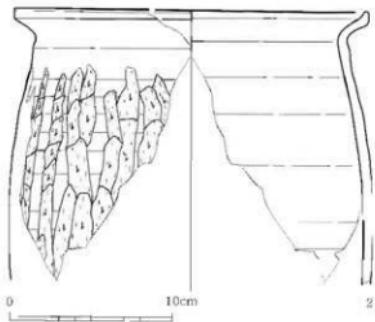
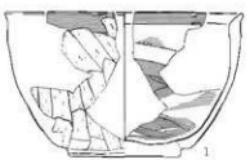
【出土遺物】床面や床面直上の堆積土第2層からロクロ不使用の土師器壺・甕・瓶、底部ヘラ切りの須恵器壺が出土している(図版393~395)。

【SI29住居跡】(図版396)

【位置】S-6・W-45 [確認面] 地山およびSI67、SK72・74堆積土上面



図版396 SI29住居跡



調整：(外方内圆)一沟(内方)

图版397 S129住居跡出土遺物

【重複】 SI67、SB58・63、SK72・74と重複し、これらより新しい。

【規模・平面形】 一辺4.6m前後の隅丸長方形と考えられるが、南半が調査区外のため、詳細は不明である。

【堆積土】 4層認められ、第1層は炭を少量含む自然堆積の黒褐色シルト、第2～4層は地山粒や焼土、炭を含む自然堆積の暗褐色シルトである。

【床面】 中央部は地山を床面とし、周辺部は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトの掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

【壁】 最も残りの良い部分で高さ14cm程が残存し、やや斜めに立ち上がっている。

【カマド】 東辺の調査区との境から、焼け面や側壁に使用されたと考えられる凝灰岩ブロックが確認されており、本来カマドはこの位置に付設されていたと考えられる。本体は壊されており、また、調査区外に延びることから構造等の詳細は不明である。

【主柱穴・周溝・貯蔵穴】 検出されなかった。

【方向】 カマドが付設された向きを中軸線としてみると、東で約1°北に偏している。

【出土遺物】 堆積土や確認面からロクロ使用の土師器甕、ロクロ不使用の土師器鉢、須恵器長頸甕、繩文土器が出土している(図版397)。

【SI48住居跡】(図版398)

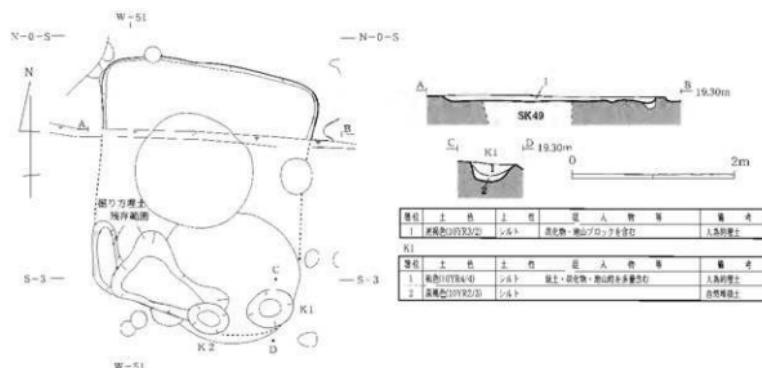
【位置】 S-1・W-51【確認面】 地山およびSK49・50堆積土上面

【重複】 SK49・50と重複し、これらより新しい。

【規模・平面形】 東西約2.6m×南北約3.0m前後の隅丸長方形を呈する。

【堆積土】 1層認められ、炭や地山ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

【床面】 削平により北壁周辺のみが残存する。地山を床面としており、他は南壁周辺に地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘り方埋土が認められる事から、この部分は掘り方埋土を床面としていたものと考えられる。



図版398 SI48住居跡

【壁】最も残りの良い部分で高さ9cm程が残存し、やや斜めに立ち上がっている。

【主柱穴・カマド・周溝】確認されなかった。

【貯蔵穴】南東隅に2ヵ所確認された。K1は長径約59cm、短径約47cmの楕円形で、深さは約24cmである。底面直上に黒褐色シルトが6cm程自然堆積した後、焼土、炭、地山粒を多く含む褐色シルトで埋め戻されている。K2は長径約53cm、短径約37cmの楕円形で、深さは約15cmである。焼土、炭、地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【方向】北辺でみると、東で約9°南に偏している。

【出土遺物】縄文土器深鉢の小破片が少量出土したのみである。

【SI65住居跡】(図版399)

【位置】N-12・W-58 [確認面] 地山およびSK43・99堆積土上面

【重複】SK43・99と重複し、これらより新しい。

【規模・平面形】東西約3.8m×南北約4.5mの隅丸長方形である。

【堆積土】1層認められた。炭化物、地山粒、小礫を含む自然堆積の黒褐色シルトである。

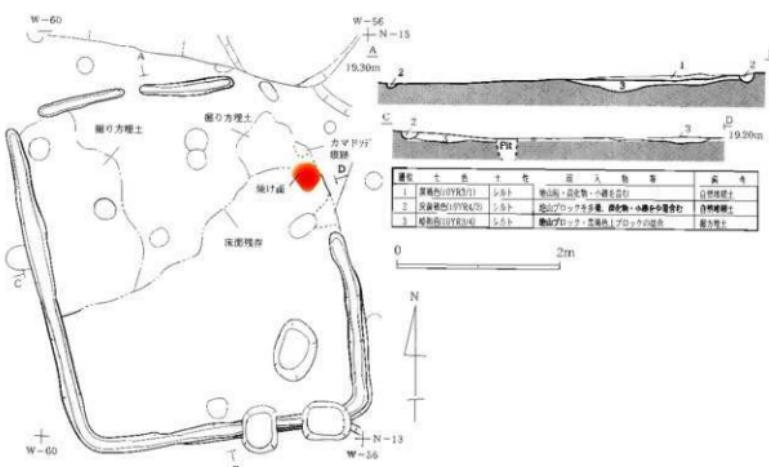
【床面】削平により南半部のみが残存する。地山や黒褐色シルトのブロックを多く含む暗褐色シルトの掘り方埋土を床面としている。

【壁】最も残りの良い南東隅で高さ6cm程が残存するのみである。

【主柱穴】検出されなかった。

【カマド】東辺のやや北寄りに付設されている。カマド本体や煙道は残存しておらず、燃焼部の焼け面と、熱変化による側壁の痕跡のみが確認された。

【周溝】全辺で検出した。幅10~30cm、深さ4~9cmで、溝は地山ブロック、炭化物、小礫を含



図版399 SI65住居跡

む灰黄褐色シルトで埋め戻されている。

【貯藏穴】 南東隅に1カ所確認された。短径約50cm、長径約75cmの楕円形で、深さは約20cmである。炭化物、焼土、白色粘土、地山をブロック状に含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

【方向】 カマドが付設された向きを中心線としてみると、東で約10°北に偏している。

【出土遺物】 床面などから土師器甕や須恵器壺の小破片が少量出土している。

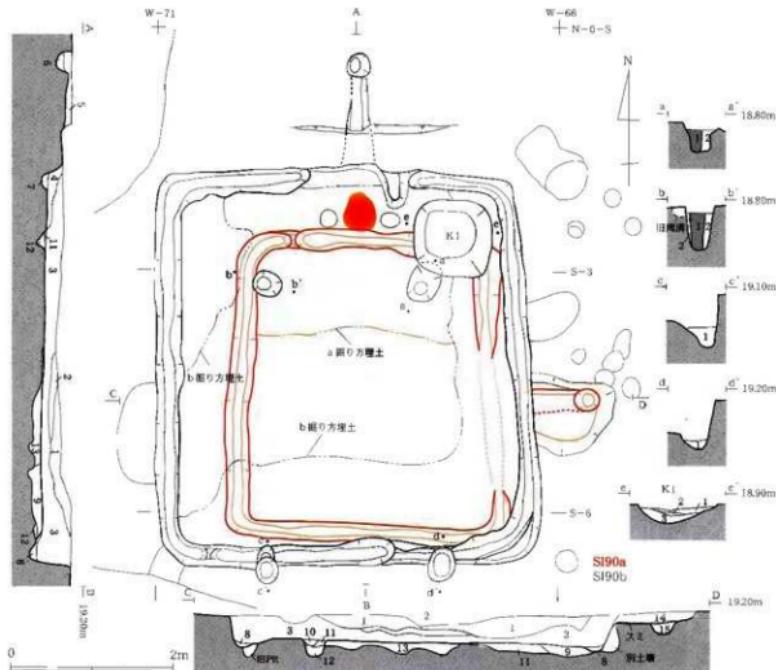
【SI90a・b住居跡】(図版400・401)

【位置】 S-3・W-69【確認面】 地山

【重複】 小ピットと重複する他は、重複は認められない。また、本住居跡は一度建て替えられており、各辺の壁が30~95cm程拡張されている。以下、改築前のものをSI90 a、改築後のものをSI90 b



図版400 SI90住居跡および土器出土状況



層名	土色	土性	層入物等	層号
1 残褐色(10YR6/4)	シルト	地山ブロック・焼け物を多量含む	自然堆積土	
2 残褐色(10YR6/4)	シルト	炭化物を多量含む	自然堆積土	
3 残褐色(10YR6/4)	シルト	地山ブロックを多量含む	自然堆積土	
4 残褐色(10YR6/4)	シルト	地山ブロックを多量含む	自然堆積土	
5 残褐色(10YR6/4)	シルト	自然堆積土	自然堆積土	
E 残褐色(10YR6/4)	シルト	炭化物を多量含む	自然堆積土	
F 残褐色(10YR6/4)	シルト	地山ブロックを多量含む	自然堆積土	
G 残褐色(10YR5/4)	砂		自然堆積土	

層名	土色	土性	層入物等	層号
9 地山色(10YR3/3)	シルト	地山・焦土ブロックを多量含む	黒褐色土	
10 地山色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを含む	a地山堆積土	
11 C(地山色)10YR4/2	シルト	地山色を多量含む	a地山堆積土	
12 黒褐色(10YR4/0)	粘		b地山堆積土	
13 C(地山色)10YR4/2	シルト	地山ブロックを多量含む	黒褐色土	
14 残褐色(10YR4/0)	シルト	地山・焦土・骨格物を多量含む	人骨堆積土	
15 残褐色(10YR4/0)	シルト	地山・焦土を多量含む	C地山堆積土	

層名	土色	土性	層入物等	層号
1 残褐色(10YR3/3)	シルト	地山の多量含む	人骨堆積土	
2 残褐色(10YR3/3)	シルト	地山灰を多量含む	人骨堆積土	
3 残褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多量含む	人骨堆積土	

図版401 SI90住居跡

とする。

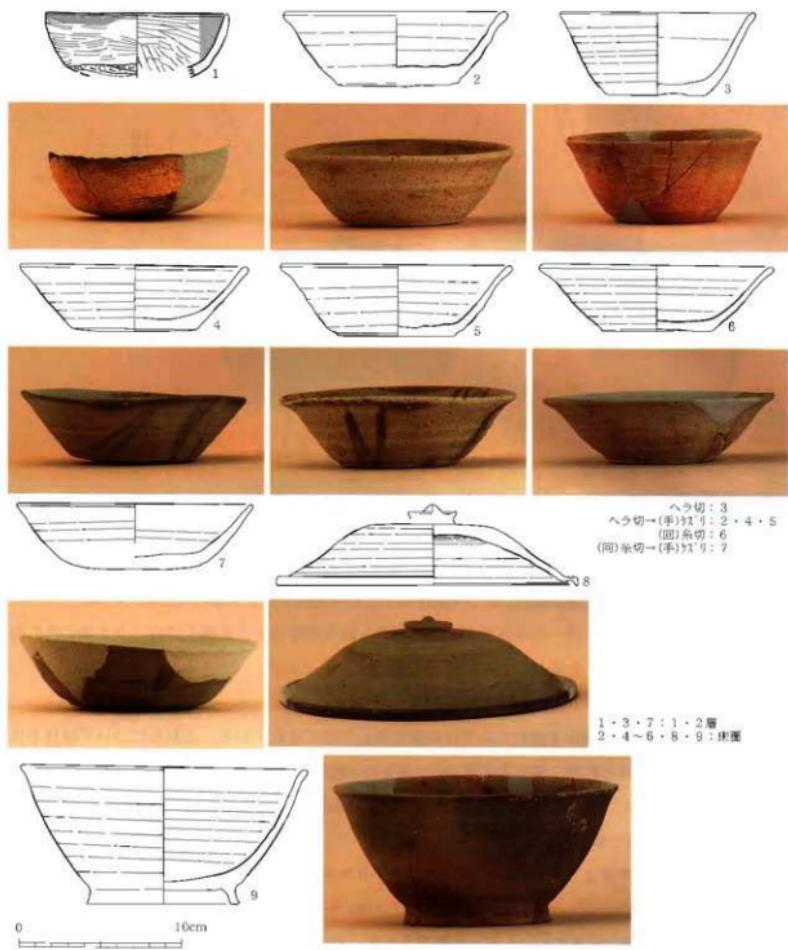
《SI90 a》

[規模・平面形] 南北約3.8m×東西約3.3mの隅丸方形である。

[床面] 北半は地山、南半は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

[主柱穴] 検出されなかった。

[カマド] 東辺ほぼ中央に付設されている。SI90bに壊されているため、焼け面と煙道の一部が残存するのみである。煙道は長さ推定約120cm、幅約30cm、深さは15cm前後で、先端部は直径30cm



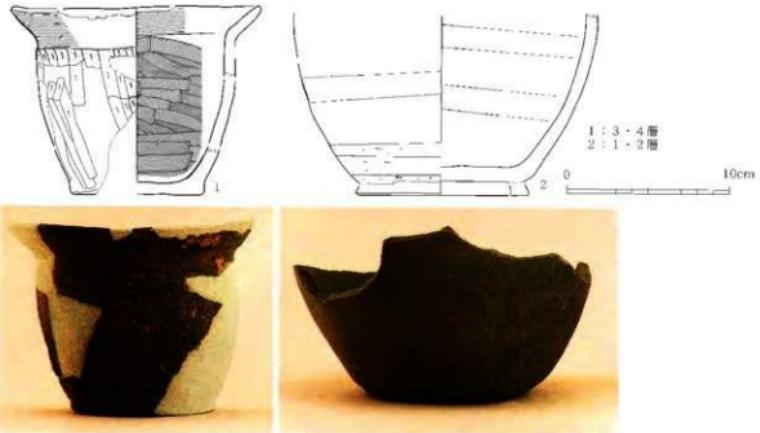
図版402 SI90住居跡出土遺物(1)

程の円形のピット状を呈し、煙道底面よりも12cm程深くなっている。地山、焼土、炭を多く含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

【周溝】全辺で確認された。幅20～35cm、深さは10～15cmで、溝は地山ブロックを含む暗褐色シルトや、砂を含む黄褐色粘質シルトによって埋め戻されている。

【貯蔵穴】検出されなかった。

【方向】カマドが付設された向きを中軸線としてみると、東で約1°南に偏している。



図版403 SI90住居跡出土遺物(2)

〔出土遺物〕出土していない。

《SI90 b》

〔規模・平面形〕東西約4.6m×南北約4.9mの隅丸方形である。

〔堆積土〕地山ブロックを含む褐色シルトや炭化物を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

〔床面〕中央部はSI90aと同一の床面を使用しており、拡張部分は地山や焼土ブロックを多く含む暗褐色シルトの掘り方埋土や地山を床面としている。

〔壁〕最も残りの良い部分で高さ38cm程が残存し、ほぼ直立する。

〔主柱穴〕4個あり、南側の2個については南壁に接して立てられている。これらについては柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方は径35cm前後の不整円形や長径約50cm、短径約37cmの不整橢円形で、深さは37～54cmである。柱痕跡は直径約17cmの円形である。柱間寸法は東西2.1m前後、南北3.5m前後である。

〔カマド〕北辺のやや東よりに付設されている。カマド本体は壊されており、東側壁が残存するのみである。側壁は長さ約45cmで、焚き口両側には側壁に転用された土器などを据えていたと考えられる。径20cm前後の円形のピットが2個確認された。深さは約10cmである。また、内側には燃焼室の焼面が残存する。煙道は長さ約137cm、幅約30cm、深さ4～9cm程度で、先端に向かって次第に浅くなっている。先端部は直径30cm程の円形のピット状を呈し、煙道底面よりも16cm程深くなっている。堆積土は自然堆積の暗褐～褐色シルトである。

〔周溝〕全辺で検出した。幅20～35cm、深さは7～15cm程度で、黄褐色の砂が堆積している。

〔貯蔵穴〕北東隅に1カ所確認された。1辺約95cmの隅丸方形で、深さは約23cmである。

〔方向〕カマドが付設された向きを中軸線としてみると、北で約1°西に偏している。

〔出土遺物〕床面から須恵器坏(図版402-2・4～6)・蓋(8)・高台付楕(9)が出土しており、堆積土

からも須恵器壺(3・7)の他、ロクロ不使用の土師器壺(1)・甕(図版403-1)、須恵器壺(2)が出土している。

【SI310住居跡】(図版404・405)

【位置・確認面】調査区中央やや西寄りに位置する。確認面は地山面で、北東方向へ緩やかに傾斜している。



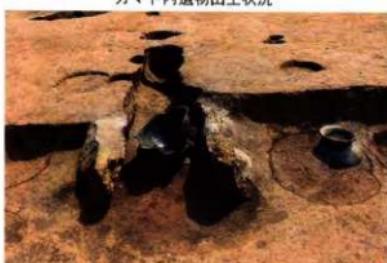
SI310住居跡(西から)



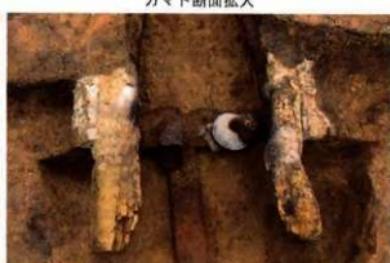
カマド内遺物出土状況



カマド断面拡大

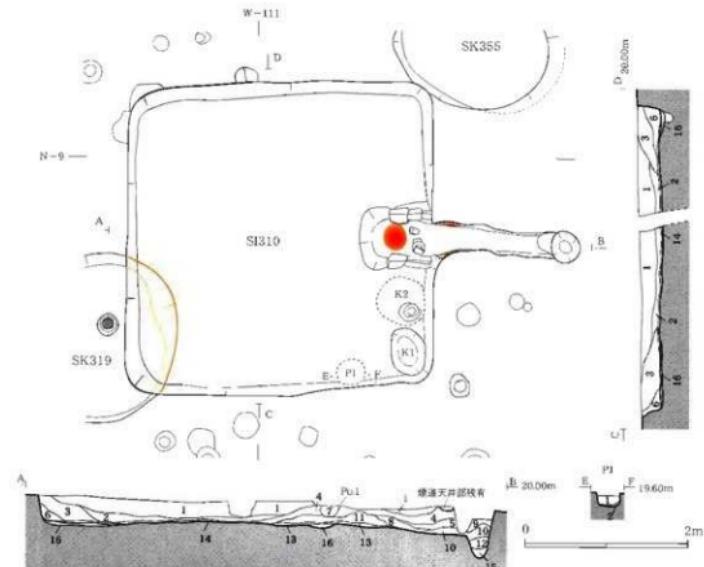


カマド周辺

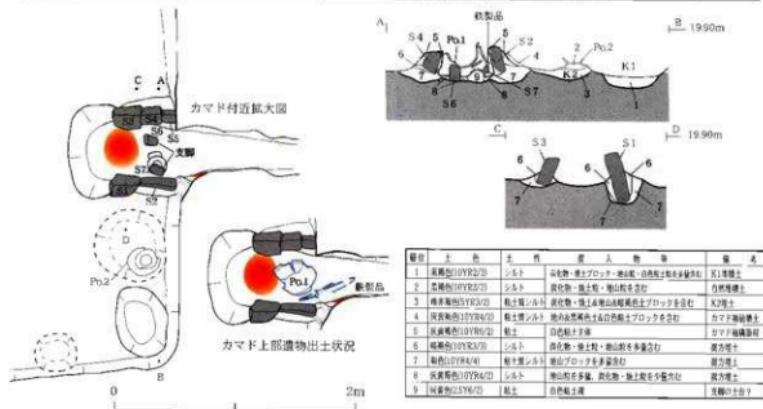


カマドソデ

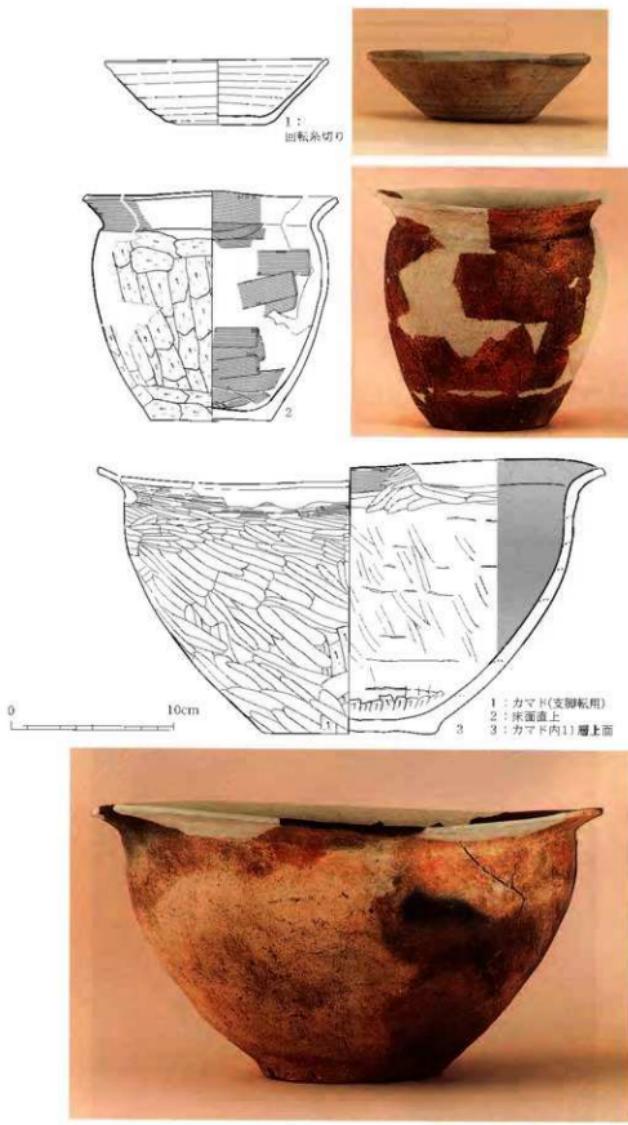
図版404 SI310住居跡(1)



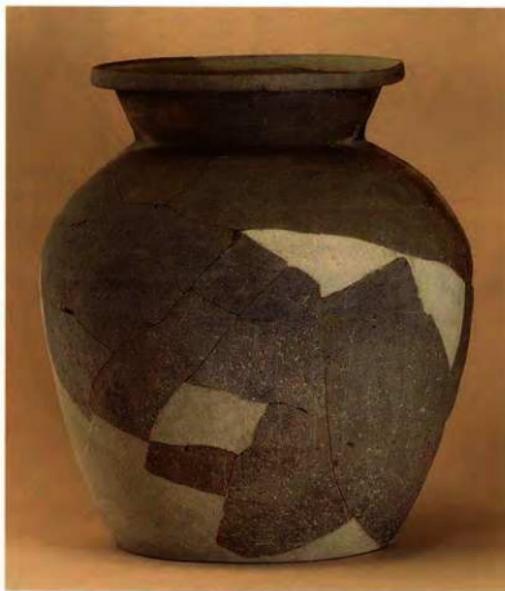
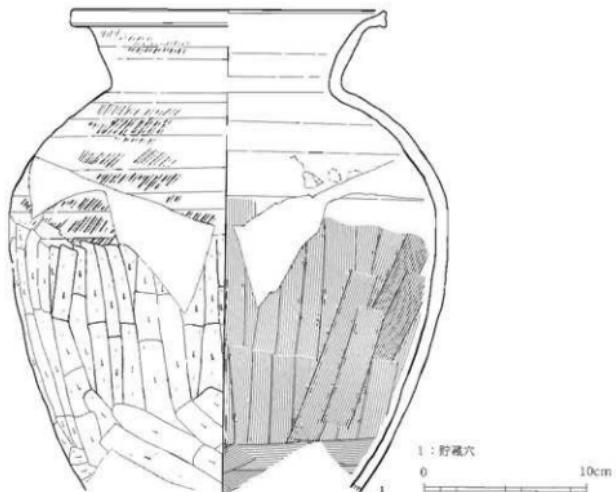
被選	土 色	土 性	垦 入 物 质	種 類
1. 鮮綠色(19R2/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石含む	自然砂土	
2. 深褐色(10YR4/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石含む	自然砂土	
3. 深褐色(10YR4/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石含む	自然砂土	
4. 暗褐色(10YR3/4)	シルト	泥炭化・酸性化・小石含む	自然砂土	
5. 暗褐色(10YR3/4)	シルト	泥炭化・酸性化・小石含む・小石多	自然砂土	
6. 黄褐色(10YR2/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石含む	自然砂土	
7. 淡褐色(10YR4/2)	粘土	泥炭化・酸性化・小石・粘土多	自然砂土	
8. 深褐色(10YR4/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石・粘土多	自然砂土	
9. 深褐色(10YR4/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石・粘土多	自然砂土	
10. 深褐色(10YR4/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石・粘土多	自然砂土	
11. 黄褐色(10YR4/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石・粘土多	自然砂土	
12. 深褐色(10YR4/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石・粘土多	自然砂土	
13. 黄褐色(10YR4/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石・粘土多	自然砂土	
14. 深褐色(10YR4/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石・粘土多	自然砂土	
15. 暗褐色(10YR3/4)	シルト	泥炭化・酸性化・小石・粘土多	自然砂土	
16. 深褐色(10YR4/2)	シルト	泥炭化・酸性化・小石・粘土多	自然砂土	
P1				
被選	土 色	土 性	垦 入 物 质	種 類
1. 暗褐色(10YR2/2)	シルト	酸性化・粘土多・カット・堆積土を含む	自然砂土	人為的砂土
2. 深褐色(10YR3/1)	シルト	酸性化・粘土多・カット	自然砂土	人為的砂土



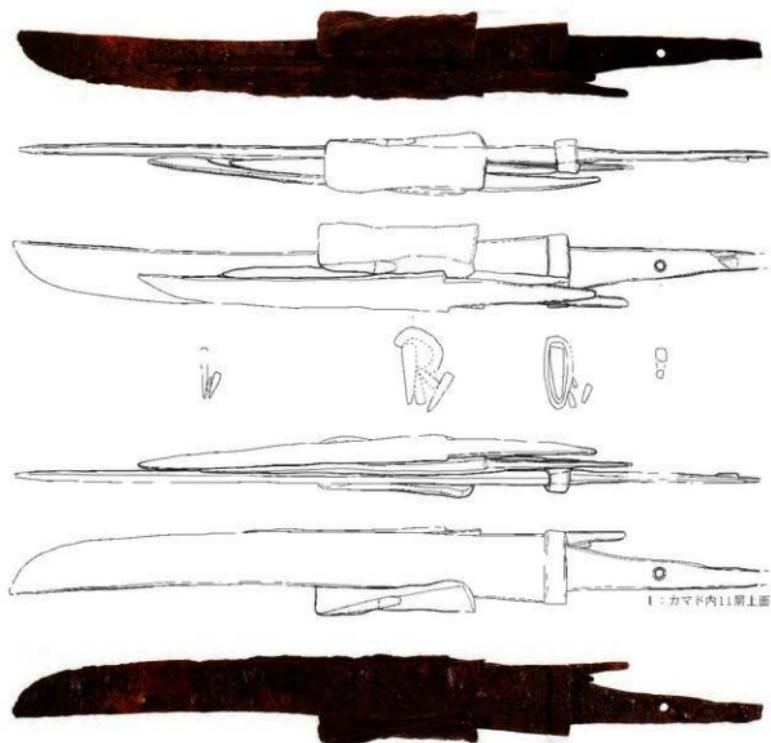
図版405 S1310住居跡(2)



図版406 S1310住居跡出土遺物(1)



图版407 SI310住居跡出土遺物(2)



図版408 S1310住居跡出土遺物(3)-金属製品-

【方向】カマドが付設された向きを中軸線としてみると東で約3°南に偏している。

【重複】SK391・355土壤と重複しており、いずれの土壤よりも新しい。なお、北側には本住居よりも古い倒木痕が認められる。

【規模・平面形】東西3.6m×南北3.6mの正方形を呈する。住居に伴うと考えられる周溝、柱穴は認められない。

【堆積土】15層認められ、1～6層は自然流入土である。7～11層は白色粘土・黄褐色粘土・焼土・炭化物の各ブロックを多量に含む点で共通しており、10・11層の下部では地山ブロックの下面も焼けて赤変している。いずれもカマド上部の崩壊土であるが、その堆積状況から廃絶時にカマドが破壊されていたと推定される。12・13層は炭化物主体の層で、カマド機能時の堆積と考えられる。14層は焼土・炭化物粒を含み、床面上に薄く堆積した跡まりのある粘土質シルト層で、住居機能時のいわゆる「生活層」である。15層は煙出しピットの最下部に認められる地山ブロック主体の層で、

煙道掘削時もしくは機能時初期の崩落土と考えられる。

【壁】 基本的に地山を壁としているが、SK391・355土壤と重複する部分ではその埋土を壁としている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最も残りの良い南西隅で床面から35cmある。

【床】 中央部では地山を、壁際の周辺部では掘り方埋土を床としている。床面には若干凹凸があり、中央の地山部分を中心に硬化範囲が認められる。

【カマド】 東辺ほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道から成る。燃焼部側壁は溝状に掘り窪めた左右の掘え方に軟質の凝灰岩切石を密に立て並べて心材とし(左側3個、右側2個)、その表面に白色粘土を貼り付けるかたちで構築されている。燃焼部底面は焚き口から中央にかけ皿状に窪み、中央部が強く焼けて赤変している。底面のやや奥壁寄りでは支脚が左右2個検出されている。左は凝灰岩の切石で、右は白色粘土塊の上に須恵器坏を伏せ、更に凝灰岩切石を載せて支脚をしている。長さ1.9mの煙道は先端に向かって下向きに傾斜しており、先端部は直径35cmのピット状で、深さが55cmある。

【貯蔵穴状ピット】 カマド右脇の床面で2個検出された(K1・2)。南東隅に位置するK1が新しく、平面形は60cm×40cmの不整な楕円形を呈し、深さは15cm程ある。堆積土は黒褐色シルト1層で、自然流入土と考えられる。カマド右脇に隣接するK2は直径60cmの不整な円形を呈し、深さが10cm程ある。堆積土は焼土・地山・暗褐色土のブロックが混じった粘土質シルト1層で、締まりも強く、住居機能時の途中で人為的に埋め戻されていたと推定される。また、K2を埋め戻す段階でその上部に胴部下半を欠く須恵器壺を口縁部を上にして据え付けている。この壺はカマドとK1の間に位置することになり、大形の甕・鉢などを据え置くための器台的な役割が想定される。

【その他のピット】 南辺東寄りの壁際で35cm×30cmの隅丸長方形を呈するピット(P1)を検出した。深さは15cm程で、堆積土は2層に分けられる。上層は白色粘土や焼土のブロックを多量に含むことから少なくとも人為堆積と考えられる。

【出土遺物】 カマド廃絶後の崩落土第11層上面から、完形に近いロクロ不使用の土師器鉢(図版406-2)や、刀、刀子、鉄斧(図版408)が据え置かれた状態で出土している。また、貯蔵穴からは胴部下半を欠く須恵器壺(図版407)が口縁部を上にした状態で出土している。図版406-1の須恵器坏はカマドから出土しており、支脚に転用されたものである。

【SI321住居跡】(図版409)

【位置】 N-21・W-114【確認面】 地山で、西辺と南辺のみが確認された。

【重複】 SK322・324と重複し、これらより新しい。

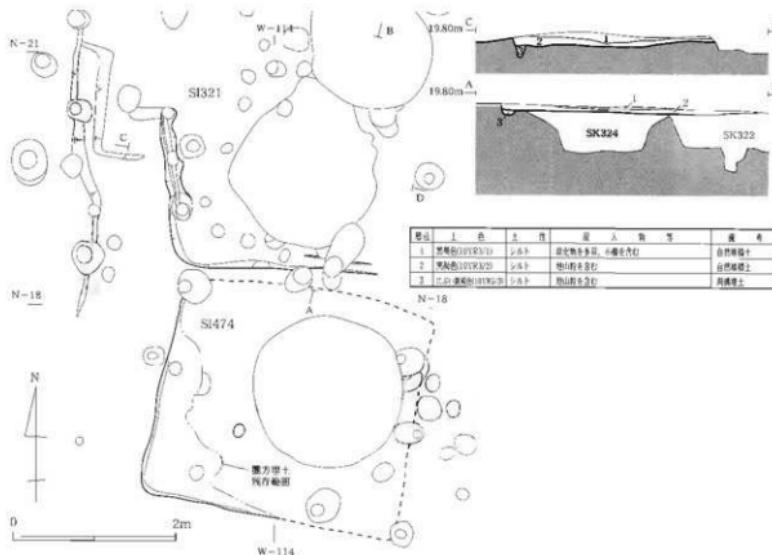
【規模・平面形】 北・東辺が残存しないため詳細は不明である。残存長は東西約2.5m×南北約1.5mで、南西隅は丸みを帯びていることから、平面形は隅丸方形を呈するものと推定される。

【堆積土】 2層認められ、炭化物や小礫、地山を含む黒褐色シルトの自然堆積土である。

【床面】 残存する範囲では、地山を床面としており、ほぼ平坦である。

【壁】 最も残りの良い部分で高さ10cm程が残存し、ほぼ垂直に立ち上がっている。

【主柱穴・カマド・貯蔵穴】 確認されなかった。



図版409 SI321・474住居跡

【周溝】部分的ではあるが南・西の各辺で検出した。幅12~22cm、深さ2~15cmで、地山粒を含むにぶい黄褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

【方向】西辺でみると、北で約9°西に偏している。

【出土遺物】繩文土器深鉢の小破片が少量出土したのみである。

【SI474住居跡】(図版409)

【位置】N-18・W-114【確認面】地山で、西辺と南辺のみが確認された。

【重複】SB472と重複し、これより新しい。

【規模・平面形】北・東辺が残存しないため詳細は不明である。残存長は東西約1.8m×南北約2.4mで、南西隅は丸みを帯びていることから、平面形は隅円形を呈するものと推定される。

【堆積土・壁】残存していない。

【床面】殆ど残存していないが、南西隅に掘り方埋土が認められることから、これを床としていたと考えられる。

【主柱穴・カマド・貯蔵穴・周溝】検出されなかった。

【方向】西辺でみると、北で約12°東に偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SI370a~c住居跡】(図版410・411)

【位置】N-8・W-99【確認面】地山およびSI372・SK378・379堆積土上面

【重複】SI372・388、459、SK371・376・378・379と重複し、SK371・376より古く、その他



図版410 SI370住居跡他

より新しい。また、本住居跡は二度建て替えられており、一部を除き各辺の壁が建て替え毎に拡張されている。以下、改築前のものをSI370 a、改築後のものをSI370 bとする。

《SI370 a》

【規模・平面形】 一边約3.5mの隅丸正方形である。

【堆積土・壁】 残存していない。

【床】 床面は残存していないが掘り方埋土が残存し、これを床としていたと考えられる。

【主柱穴】 検出されなかった。

【カマド】 東辺のほぼ中央で、約45cm×70cmの不整形の焼け面のみが確認されている。

【周溝】 全辺で検出した。幅10~24cm、深さ2~12cmで、地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

【方向】 東辺でみると、北で約18° 東に偏している。

【出土遺物】 出土していない。

《SI370 b》

【規模・平面形】 一边約4.6m~5.2mの隅丸正方形である。

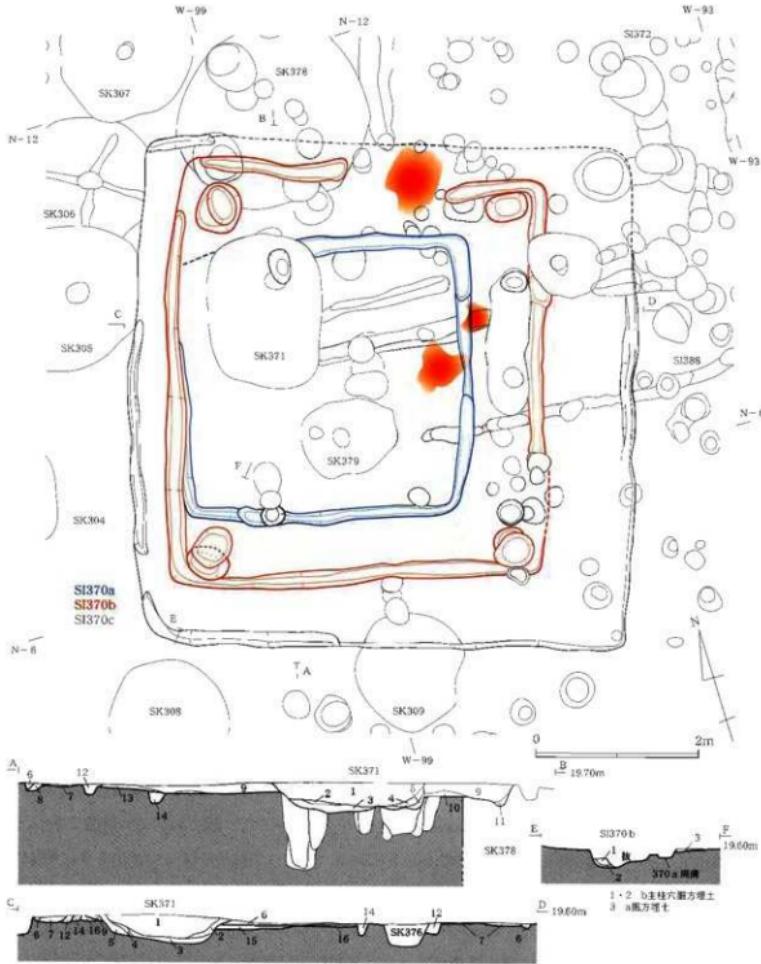
【堆積土・壁】 残存していない。

【床】 床面は残存していないが掘り方埋土が残存し、これを床としていたと考えられる。

【主柱穴】 4個あり、東側の2個については東側周溝にほぼ接して立てられている。平面形は径30cm前後の不整円形や長径約42cm、短径約25cmの不整楕円形で、深さは26~44cmである。柱間寸法は約2.9mである。

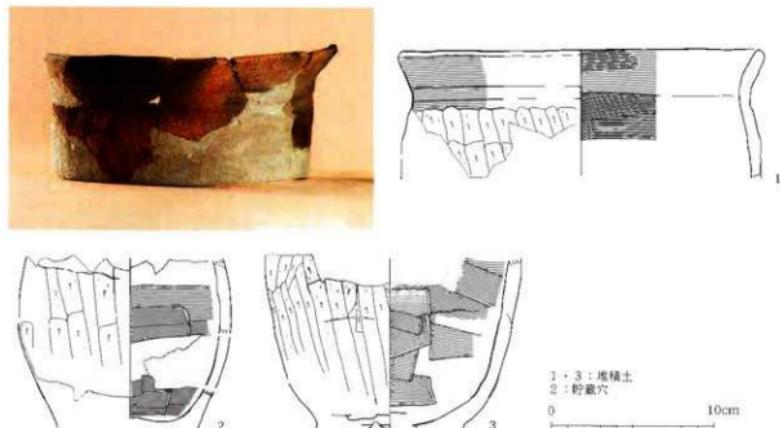
【カマド】 東辺のやや北寄りで、約29cm×38cmの不整形の焼け面のみが確認されている。

【周溝】 全辺で確認された。幅12~28cm、深さ5cm前後で、地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで人為的に埋め戻されている。



地名	土 種	生 長 特 性	入 土 深 度	整 地 方 法	播 种 量	播 种 期	土 種	生 長 特 性	入 土 深 度	整 地 方 法	播 种 量	播 种 期
1. 岩手(八戸市内)	シルト	根巻きフロット、葉巻き茎葉付	50cm以上	耕翻	1kg/ha	4月上旬	9. 岩手(八戸市内)	シルト	根巻き-根巻き、葉巻き茎葉付	50cm以上	耕翻	4月上旬
2. 岩手(盛岡市内)	シルト	上面に根巻き、葉巻きのチク・シケ、部分少留付	50cm以上	耕翻	1kg/ha	4月上旬	10. 岩手(八戸市内)	シルト	根巻きフロット、葉巻き茎葉付	50cm以上	耕翻	4月上旬
3. 岩手(宮古市内)	シルト	根巻きフロット+茎葉付	50cm以上	耕翻	1kg/ha	4月上旬	11. 岩手(八戸市内)	シルト	根巻き-根巻き、葉巻き茎葉付	50cm以上	耕翻	4月上旬
4. 岩手(遠野市内)	砂質	根巻きフロット+茎葉付	50cm以上	耕翻	1kg/ha	4月上旬	12. 岩手(八戸市内)	シルト	根巻きフロット+茎葉付	50cm以上	耕翻	4月上旬
5. 岩手(花巣市内)	シルト	地表フロット+茎葉付、心子を少量含む	50cm以上	耕翻	1kg/ha	4月上旬	13. 岩手(八戸市内)	シルト	根巻きフロット+茎葉付	50cm以上	耕翻	4月上旬
6. 岩手(北上市内)	砂質	地表面を多少剥離	50cm以上	耕翻	1kg/ha	4月上旬	14. 岩手(八戸市内)	シルト	地表フロット+茎葉付	50cm以上	耕翻	4月上旬
7. 岩手(一関市内)	シルト	地表面を多少剥離	50cm以上	耕翻	1kg/ha	4月上旬	15. 岩手(八戸市内)	シルト	根巻きフロット+白根付、葉巻き茎葉付	50cm以上	耕翻	4月上旬
8. 岩手(奥州市内)	シルト	地表面を多少剥離	50cm以上	耕翻	1kg/ha	4月上旬	16. 岩手(八戸市内)	シルト	根巻きフロット+白根付、葉巻き茎葉付	50cm以上	耕翻	4月上旬

図版411 Si370住居跡



図版412 SI370 c 住居跡出土遺物

〔方向〕 東辺でみると、北で約17° 東に偏している。

〔出土遺物〕 出土していない。

《SI370 c》

〔規模・平面形〕 一辺約6.2mの隅丸正方形である。

〔堆積土〕 3層認められ、地山粒や炭化物粒、焼土粒を含む自然堆積の暗褐色シルトである。

〔壁〕 残存しないが、南辺で部分的に約10cm残存している。

〔床面〕 中央部は地山ブロックや白色粘土、炭を含む黒褐色シルトを貼ってを床面とし、周辺部は暗褐色シルトブロックや焼土ブロックをやや多く含む褐色シルトの掘り方埋土を床面としている。若干中央部にむかって窪んでおり、中央部は堅くしまっている。

〔カマド〕 北辺のやや東寄りで、約60cm×90cmの不整形の焼け面のみが確認されている。

〔主柱穴〕 4個あり、3ヶ所で柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方埋土の平面形は一边50～60cmの隅丸方形や長径約50cm、短径約30～38cmの不整形円形で、深さは25cm前後である。埋土は地山ブロックや炭化物を多く含む褐色シルトである。柱間寸法はややばらつきがあり、約3.5m～4.4mである。

〔周溝〕 部分的に途切れるものの、全辺で検出した。幅12～22m、深さ5cm前後で、地山ブロックを含む暗褐色シルトで人为的に埋め戻されており、北西隅では壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅3cm前後、深さ約8cmの暗褐色シルトの堆積土が認められた。

〔方向〕 東辺でみると、北で約20° 東に偏している。

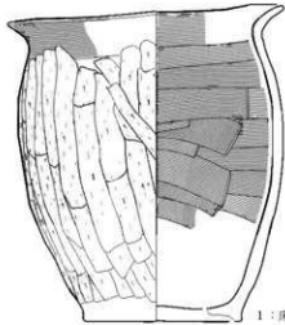
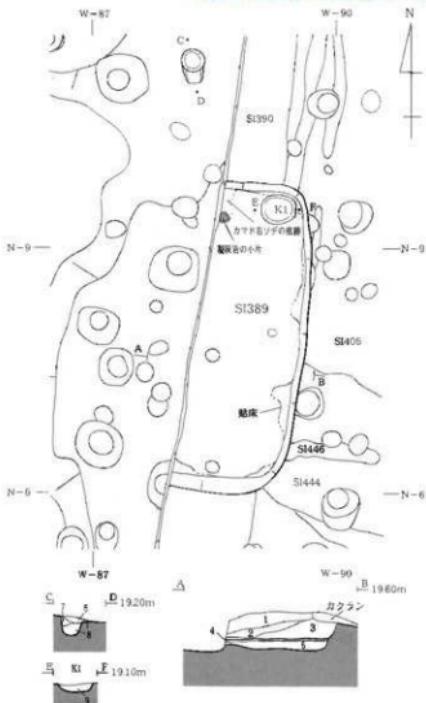
〔出土遺物〕 貯蔵穴や堆積土からロクロ不使用の土師器甕(図版412)や須恵器壺蓋が出土している。

《SI389住居跡》(図版413)

〔位置・確認面〕 調査区中央部に位置する。確認面はSI390・406住居跡の堆積土上面で、擾乱によっ



SI389住居跡
(南から)



1 : 床面直上



番号	土色	土性	底	人物	器種	層
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	砂質物・貝殻・泥炭物・礫含む		自然地盤	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	砂質物を含む。海土・小帶土・礫含む		自然地盤上	
3	褐褐色(10YR3/3)	シルト	泥炭・プロック・貝殻・海土質・砂含む		自然地盤上	
4	灰褐色(10YR4/3)	シルト	シルト質		自然	
5	シルト	粘土質シルト	シルト質		自然	
6	灰褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	青褐色と黄褐色のロックモジ		自然地盤	
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	泥炭物・貝殻・プロック・泥炭物・多量に貝殻		自然地盤上	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	泥炭・貝殻・泥炭物・貝殻・泥炭物に混む		自然地盤上	
9	褐褐色(10YR3/3)	シルト	泥炭物・貝殻・泥炭物		自然地盤上	

図版413 SI389住居跡および出土遺物

て住居西半が失われ、東半と煙道の一部が残る。

【重複】 SI390・400・406・444・446・480住居跡と重複しており、全ての住居跡より新しい。

【方向】 東辺でみると、北で約8° 東に偏している。

【規模・平面形】 残存する東半を見る限り、東西1.3m以上×南北3.5mで方形を基調とする。なお、住居に伴うと考えられる周溝、柱穴は認められない。

【堆積土】 6層認められ、いずれも自然流入土である。なお、6～8層は煙道内の堆積土で、6層には煙道上部の崩落土が含まれる。

【壁】 残存する部分では地山もしくはSI390・406・444住居跡の埋土を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がるが、南壁は住居外側へやや開き気味となる。壁高は残りの良い南壁で床面から24cmある。

【床】 東半ではほぼ全面に貼床が施されている。床面には若干凹凸があり、北側へ緩やかに傾斜している。

【カマド】 北辺で検出されており、中央付近に位置するものと考えられる。擾乱によって壊されて、燃焼部右側壁の痕跡と煙道の先端が残る。右側壁の痕跡部分では白色粘土のブロックが確認されており、その焚き口部には凝灰岩の小片が残存する。カマド構築に白色粘土と凝灰岩が用いられていたことが窺われ、貯蔵穴状ピットの埋土に焼土と白色粘土のブロックが多量に含まれることから廃絶時にカマドが壊されていた可能性もある。煙道の先端は直径28cmのピット状で、深さが25cmある。煙道の長さは1.6m程と推測される。

【貯蔵穴状ピット】 カマド右脇にあたる住居北東隅の床面で検出された(K 1)。平面形は42cm×36cmのやや不整な隅丸長方形を呈し、深さは15cmである。堆積土は焼土と白色粘土のブロックを多量に含む暗褐色土で、人為堆積と考えられる。

【出土遺物】 貯蔵穴上面の床面上からロクロ不使用の土師器甕(図版413)が出土している他、堆積土からロクロ不使用の土師器壺や須恵器壺の破片が少量出土している。

【SI440住居跡】(図版414)

【位置】 S-6・W-69 [確認面] 地山面で住居北西隅とカマドおよび煙道部を確認した。その他は、調査区外に延びている。

【重複】 重複は認められない。

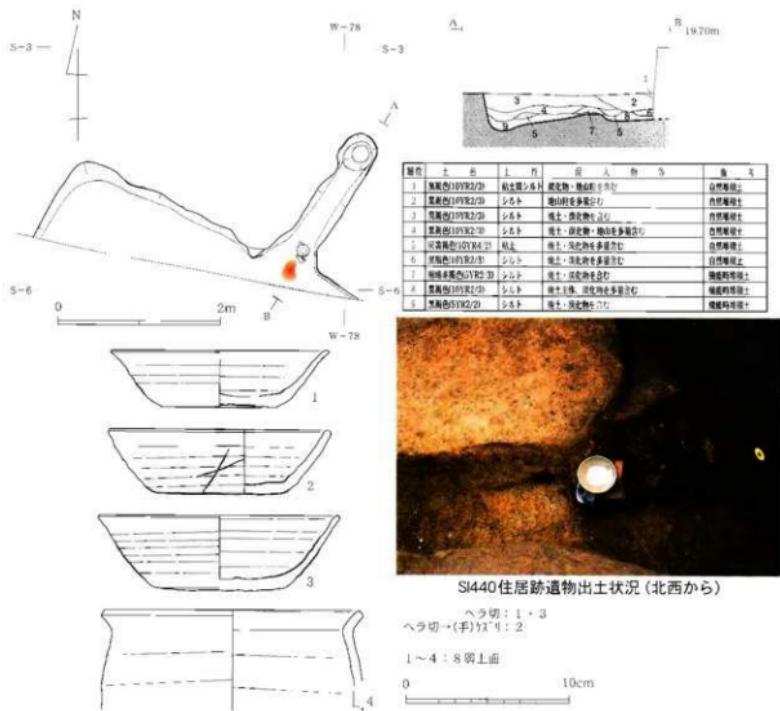
【規模・平面形】 規模は不明である。平面形は北西隅の形状から隅丸方形を呈するものと推定される。

【堆積土】 地山や炭化物を含む黒褐色シルトが自然堆積している。

【壁】 最も残りの良い部分で高さ30cm程が残存し、ほぼ直立する。

【床面】 地山を床面としている。

【カマド】 北辺に付設されている。焚口の側壁は西側のみが残存し、東側は住居廃絶時に壊されている。長さは約12cmと短く、スサ混じりのロームで構築されている。燃焼部は北辺の外側にあり、煙道から焚口にむかってハの字に地山を掘り込んで、壁としている。煙道は長さ約184cm、幅約41cm、深さは36cm前後で、先端部は直径40cm程の円形のピット状を呈し、煙道底面よりも



図版414 SI440住居跡および出土遺物

12cm程深い。堆積土は燃焼部から煙道にかけての底面に、機能時の堆積と考えられる炭や焼土を多く含む黒褐色シルトが堆積した後、カマドを壊した際の崩壊土が認められ、その上層は地山や焼土、炭を多く含む黒褐色シルトが自然堆積している。

【主柱穴・周溝・貯蔵穴】不明である。

【方向】カマドが付設された向きを中軸線としてみると、北で約30° 東に偏している。

【出土遺物】カマド燃焼部の機能時の堆積土上面で、底部へラ切りの須恵器壺2点(図版414-1・2)とロクロ使用の土師器壺1点(4)が出土している他、確認面から須恵器壺1点(3)が出土している。

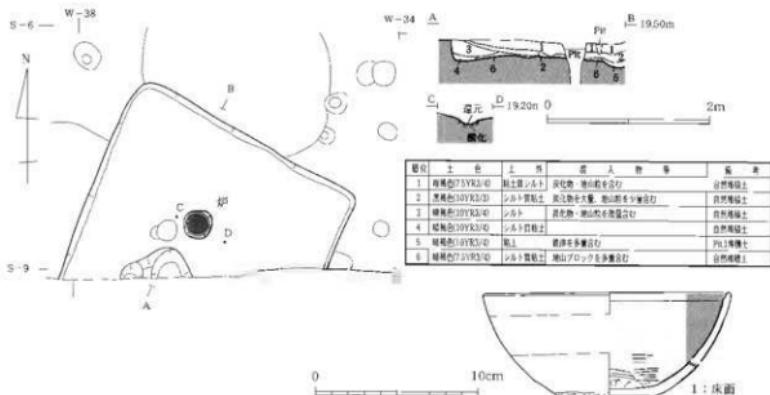
2 工房跡

【SX23工房跡】(図版415)

【位置】S-9・W-36 [確認面] 地山およびSK24・25堆積土上面

【重複】SK24・25と重複し、これらより新しい。

【規模・平面形】一辺3.1m前後の隅丸方形と考えられるが、南半が調査区外の為、詳細は不明である。



図版415 SI23工房跡および出土遺物

【堆積土】6層認められた。炭や地山を含む黒褐・暗褐色のシルトや粘土で、自然堆積層である。

【床面】地山を床面としており、ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

【壁】最も残りの良い部分で高さ25cm程が残存し、ほぼ垂直に立ち上がっている。

【主柱穴・カマド・周溝・貯蔵穴】検出されなかった。

【炉跡】住居ほぼ中央部と考えられる位置に、炉跡が確認された。直径約25cmの円形で、中央部は12cm程深い窪み状になっている。底面は還元硬化しており、堆積土中からは鉄滓が多く出土している。

【方向】北辺でみると、東で約28°南に偏している。

【出土遺物】床面からロクロ調整の土師器坏(図版415)が出土している他、須恵器坏・甕の破片が少量出土している。

3 土壌

【SK79土壤】(図版10)

【位置】S-6・W-61 [確認面] 地山

【重複】SB154・161掘立柱建物跡と重複し、これらより新しい。

【規模・平面形・断面形】上面が長軸約1.4m×短軸約0.8m、底面が長軸約1.1m×短軸約0.5m、深さ約43cmの隅丸長方形の土壤である。底面にはやや凹凸があって中央部が深くなっている。壁は緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】地山粒、炭化物を少量含む黒褐色シルトが堆積しており、間層には灰白色火山灰が認められる。

【出土遺物】出土していない。

【SK371土壤】(図版8)

【位置】 N-9・W-99 【確認面】 地山

【重複】 SI370、SB450と重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】 上面が長軸約1.8m×短軸約1.4m、底面が長軸約1.5m×短軸1.1m、深さ約40cmの隅丸長方形の土壙である。底面は比較的平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

【底面】 磨混じりのローム層

【堆積土】 地山粒、小礫を含む褐・暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土から須恵器甕の破片が数片出土したのみである。

【SK376土壙】(図版9)

【位置】 N-8・W-96 【確認面】 地山

【重複】 SI370bと重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】 上面が長径約1.8m×短軸約0.5m、底面が長軸約1.6m×短軸0.4m、深さ約25cmの細長い楕円形の土壙である。壁はやや急に立ち上がっており、断面は「U」字状となっている。

【堆積土】 地山粒を含む暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土からロクロ使用の土師器坏や須恵器坏の破片が少量出土したのみである。

【SK377土壙】(図版9)

【位置】 N-9・W-96 【確認面】 地山

【重複】 SI370bと重複し、これより新しい。

【規模・平面形・断面形】 上面径0.6~1.0m×底面径0.5~0.6m、深さ約20cmの不整円形の土壙である。壁はやや緩やかに立ち上がっており、断面は皿状となっている。

【堆積土】 地山粒を含む暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】 堆積土からロクロ不使用の土師器甕や須恵器坏蓋・長頸甕の破片が出土している。

C 近世以降および時期不明の遺構

主に調査区北西部で掘立柱建物跡や土壙、柱列等を検出している(図版7)。

SB420・421・433~436・470・471・457掘立柱建物跡やSA422柱列は、縄文時代の掘立柱建物跡と方向を異にしており、柱穴は埋土には黒色土や黒褐色土を含み、平面形は不整長方形や不整楕円形を呈するなど、県道北側の確認調査の際検出された近世の建物跡と同様の特徴を有していることから、近世以降の建物跡であると考えられる。

SK175~194土壙は、列をなして確認されており、平面形は長方形を基調としている。深さは19~68cmで、底面は平坦で、深さ5cm前後の浅いPit状の窪みを1~2個有するものも認められる。堆積土は地山ブロックを含む、褐~暗褐色土で人為的に埋め戻されている。改行

SA195柱列は、検出長13.4m、柱穴平面形は直径20~45cmの円形を基調としており、5~86cmの間隔で直線的に並んでいる。これらの内、柱痕跡がみつかったものは12個あり、直径12~20mの円形である。堆積土は掘り方埋土が、地山ブロックを含む暗褐色土、柱痕跡は暗褐色土である。出土遺物はSK175~194・SA195ともに極少量の縄文土器片が出土しているのみで、時期は不明である。

また、調査区北側でSD10・122・141溝跡を検出している。堆積土の特徴が近似し、ほぼ同時期のものと考えられるが、SD10の堆積土中から陶磁器片が出土していることから、時期は近世以降のものと考えられる。

表2 時期不明の土壙

遺構No.	平面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	Pit(個)	遺構No.	平面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	Pit(個)
SK175	長方形	75	53	68	有(1)	SK184	長方形	78	51	49	有(1)
SK176	長方形	115	70	52	有(3)	SK185	長方形	48	22	27	有(1)
SK177	長方形	74	62	42	有(1)	SK186	長方形	90	56	37	無
SK178	長方形	122	47	29	有(1)	SK187	長方形	96	58	50	無
SK179	長方形	94	40	—	無	SK188	長方形	77	40	50	無
SK180	長方形	102	40	41	有(2)	SK189	長方形	79	39	41	有(1)
SK181	長方形	77	35	24	有(2)	SK190	長方形	61	33	32	有(1)
SK182	長方形	104	57	19	有(1)	SK191	長方形	74	52	29	有(1)
SK183	長方形	86	35	19	有(2)	SK192	長方形	77	54	43	有(1)
						SK193	長方形	—	67	36	無
						SK194	長方形	93	43	19	無

表3 時期不明の柱列

遺構No.	規模(cm)	柱穴平面形	柱穴規模(cm)	深さ(cm)	間隔(cm)	方向
SA195	13.4	円形	20~46	15~48	5~86	W-27°-N

第五章 考察

A 縄文時代

1 出土遺物について

(1) 縄文土器

調査により出土した土器破片は整理箱でおよそ200箱にのぼる。整理の結果、図示できたものは深鉢107点・鉢2点・浅鉢9点、小型土器4点、高杯1点、器種不明4点、破片写真資料は962点(深鉢904点・鉢7点・浅鉢50点・小型土器1点)である。これらの土器の多くは器形や文様の特徴からみて、縄文時代前期後葉から中期初頭に位置付けられるもので、他には縄文時代後・晩期の遺物が少量出土している。

ここでは、これらの土器のうち縄文時代前期後葉から中期初頭の土器について、器形・文様の諸特徴が明確なものを分類し、共伴関係を検討して、それらの内容や編年的位置について考察を加える。

a 土器の分類

今回出土した土器は、深鉢、鉢、浅鉢、小型土器の4種類である。数量的には深鉢が多く、次いで浅鉢で、鉢、小型土器はごく少ない。さらに各器種のなかで鉢を除き、器形に変化がみられる。以下ではまず器形の特徴から各器種を大別し、次に文様の施文部位・種類・施文方法によって細別する。

深鉢

器形の違いにより8種類(A～H)に大別される。各器形の口縁部形態には平縁と波状縁がある。平縁では、口唇部が平滑なもの(I)と、刻目が施され鋸歯状となるもの(II)があり、波状縁では4～11単位の大波状縁(III)と、輪花状の小波状縁(IV)がある。

A類：胴部下半が直立気味に立ち上がって円筒状を呈し、胴部上半から口縁部にかけてゆるやかに外反あるいは直線的に外傾しながら口縁部にいたる器形。口縁部形態にはI～III類がある。

B類：胴部がほぼ直立する円筒状を呈し、頭部で「く」の字状に屈曲し、口縁部にかけて内湾する器形。口縁部形態にはI類とIII類がある。

C類：胴部中央から下半が脹らみ、頭部でくびれ、口縁部が外傾する器形。口縁部形態にはI類とIII類がある。

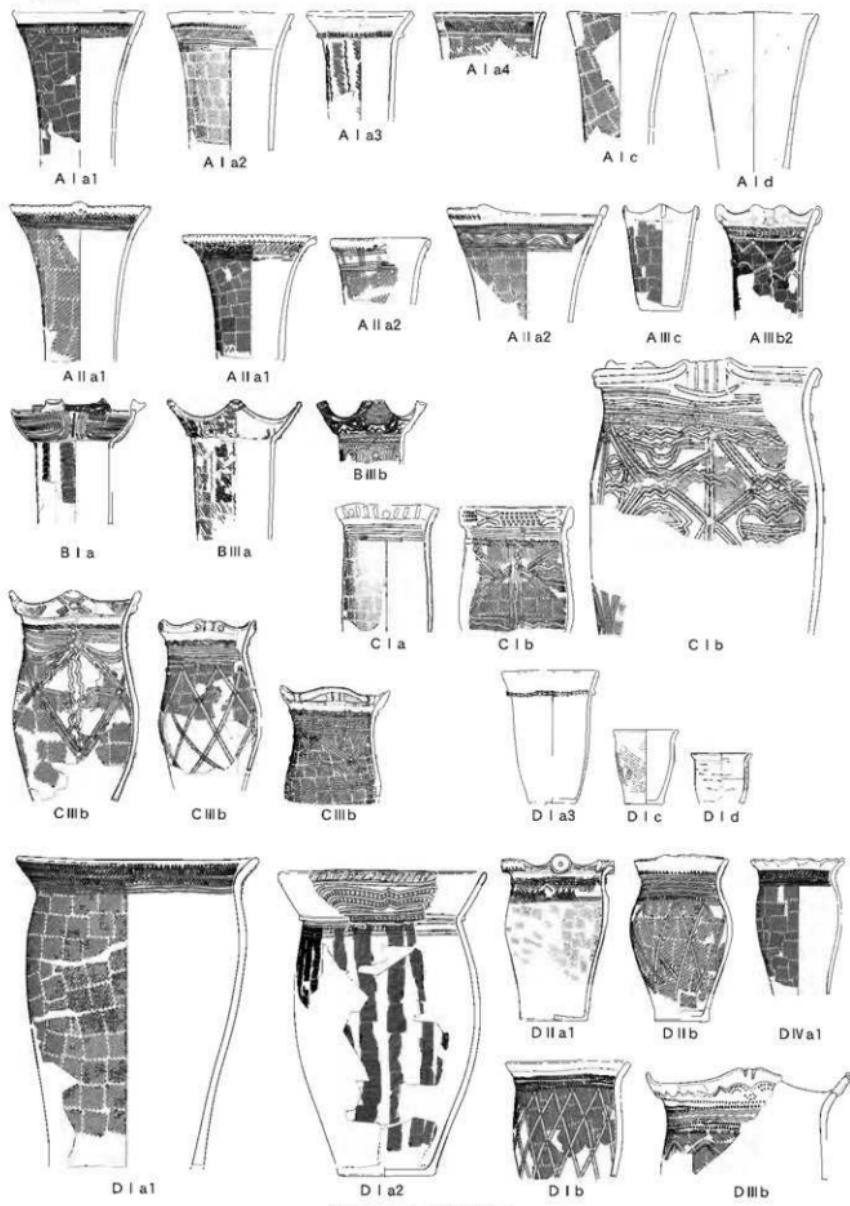
D類：胴上部が脹らみ、頭部でくびれ、口縁部が外反あるいは直線的に外傾する器形。口縁部形態にはI～IV類がある。

E類：胴上部が脹らみ、頭部でゆるくくびれ、口縁部がほぼ直立、あるいは弱く外傾する器形。口縁部形態にはI類とIII類がある。

F類：胴上部が強く脹らんでやや幅広となり、頭部で「く」の字状に屈曲し、口縁部が外反あるいは直線的に外傾する器形。口縁部形態にはI類とIII類がある。

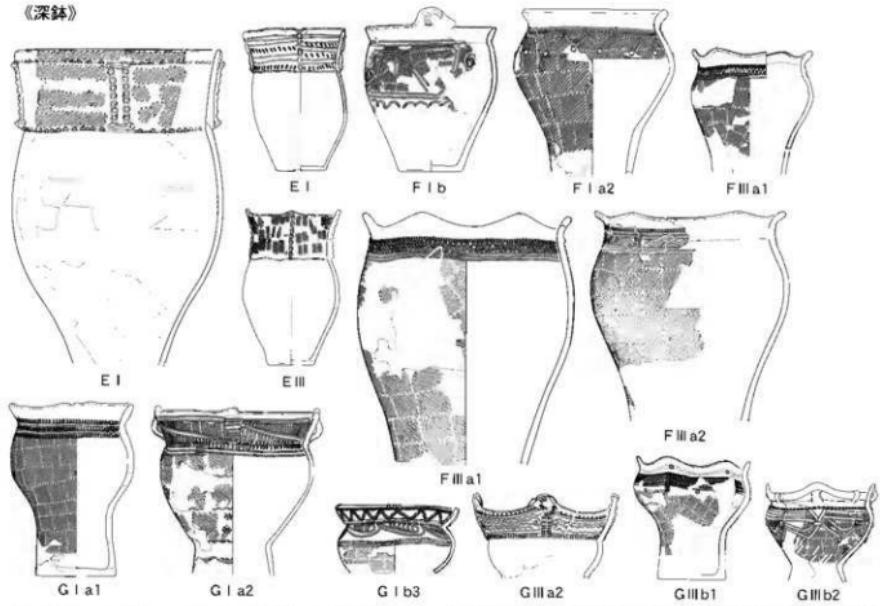
G類：胴部下半が直立あるいは内傾気味に立ち上がって台状となり、胴部上半は球形に近い形態を

《深鉢》



図版416 土器分類図(1)

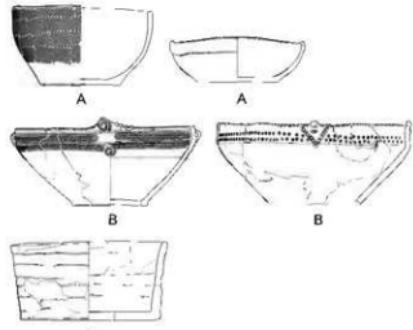
《深鉢》



《鉢》



《浅鉢》



《小型土器》



図版417 土器分類図(2)

表4 土器分類表－深鉢－

器形	施文部位	主となる文様の施文方法	施文の施文方向
深鉢A類	a類：主文様が口縁・頸部に施されたもの	1：粘土絆貼付で文様が描かれたもの 2：半裁竹管で文様が描かれたもの 3：縦位隆起のみのもの 4：幅広の文様で文様が描かれたもの	横 横 横・縱 横・縱
	b類：主文様が口～胴部に施されたもの	半裁竹管で文様が描かれたもの	横
	c類：縄文のみのもの		横
	d類：無文のもの		—
深鉢B類	a類：主文様が口～頸部に施されたもの	沈縫・點付文、刺突文等で文様が描かれたもの	縱
	b類：主文様が口～胴部に施されたもの	貼付文と半裁竹管で文様が描かれたもの	—
深鉢C類	a類：主文様が口縁・頸部に施されたもの	半裁竹管で文様が描かれたもの	横
	b類：主文様が口～胴部に施されたもの		—
深鉢D類	a類：主文様が口縁・頸部に施されたもの	1：粘土絆貼付で文様が描かれたもの 2：半裁竹管で文様が描かれたもの 3：縦位隆起のみのもの	横 縦 —
	b類：主文様が口～胴部に施されたもの	半裁竹管で文様が描かれたもの	横
	c類：縄文のみのもの		横
	d類：無文のもの		—
深鉢E類	主文様が口縁・窓部に施されたもの	貼付文と沈縫で文様が描かれたもの	縦・横・無
深鉢F類	a類：主文様が口縁・頸部に施されたもの	1：粘土絆貼付で文様が描かれたもの 2：半裁竹管で文様が描かれたもの	横 横
	b類：主文様が口～胴部に施されたもの	沈縫で文様が描かれたもの	横
	c類：主文様が口縁・頸部に施されたもの	1：半裁竹管で文様が描かれたもの 2：沈縫と刺突文で文様が描かれたもの 3：幅広の文様と刺突文で文様が描かれたもの	横 縦・— 横
深鉢G類	a類：主文様が口縁・頸部に施されたもの	1：半裁竹管で文様が描かれたもの 2：沈縫と刺突文で文様が描かれたもの	横 縦・—
	b類：主文様が口～胴部に施されたもの	1：粘土絆貼付で文様が描かれたもの 2：半裁竹管で文様が描かれたもの 3：幅広の文様と刺突文で文様が描かれたもの	横 横 横
	c類：主文様が口縁・頸部に施されたもの	半裁竹管で文様が描かれたもの	横・—
深鉢H類	a類：主文様が口～胴部に施されたもの	但し、局所的な貼付文がみられるものもある	横
	b類：縄文のみのもの		縦

呈する器形。頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部が直立あるいは外傾する器形。口縁部形態にはI類とIII類がある。

H類：胴部が球形に近い形態を呈する器形。頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部には外傾、直立、内湾するものがある。口縁部形態にはI類とIII類がある。

鉢

胴部から口縁部までそのまま外傾して立ち上がる。無文である。

浅鉢

A類：体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がるものである。

B類：体部が直線的に外傾して立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部が直立気味に立ち上がるものである。

C類：体部から口縁部にかけて直立して立ち上がるものである。

小型土器

体部から口縁部にかけて直線的に外傾しつつ立ち上がるものと、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる器形がある。

以上のように、各器形の特徴から大別された³¹⁾。深鉢については、さらに文様の施文部位・文様の種類により細分される(表4)。

b 土器の組み合わせ

前項で分類された土器各類の出土状況を図示資料からみると、表5のようになる。これをみるとSI77・120・170・320住居跡、SK309・316・319土壤を除き、各遺構の共伴資料が少なく、各類型の共伴関係が貧弱で、遺構ごとの比較や共伴関係を考えることは困難であることがわかる。そこで、本節では上記の各遺構および土器が量的にまとまって出土したSX140遺物堆積層を中心に出土土器の検討をおこない、他は各遺構の年代を検討する際に個別に取り上げることとする。

(SI 77住居跡床面および床面直上出土土器) (図版51・52)

出土状況：住居床面から深鉢4点が出土した他、床面直上からも深鉢1点が出土している。

特徴：深鉢A I a2・A I d・A II a1・D II a1類が出土している。

口縁部は平縁で、平滑なもの(I類)と、上下に刻目を施し鋸歯状となるもの(II類)があり、後者の中には貫通孔のある円形突起がつくものもみられる。文様のあるものについては、施文部位は頭部に集中し、文様は粘土紐貼付けによるものが多く、半截竹管による平行沈線文が施されるものも見られる(図版51-3)。

(SI 77住居跡堆積土1・2層出土土器) (図版55~59)

出土状況：破片を含めると多くの繩文土器が出土しており、深鉢13点、小型土器2点を図示した。SI 77に伴うものではなく、住居廃絶後、3層以下の自然流入土が堆積した後の廬地に廃棄されたものと考えられる。

特徴：深鉢はA I c・A I d・C I a・C III b・D II b・D III b・G I a1・G I b2・G III b2・H I a2類が出土している。

口縁部は平縁(I・II類)と4単位の波状縁(III類)があり、C・G類には口縁部が凸帯状に肥厚するものがみられる(図版53-4・5、図版55-1)。口縁部の文様は、図版55-1・2が盲孔と口縁に沿う幅広の沈線文や縦位の短い棒状押圧文、図版57-5が半截竹管による波状平行沈線文が施されており、他は無文である。頭～胴部は、地文のみ、あるいは無文のもの(図版55-4、図版57-2・4)、頭部のみに施文されるもの(図版55-2・3)、頭～胴部に施文されるもの(図版53-4・5、図版55-1・5、図版57-1・3・5、図版59-3)があり、施文方法は主に半截竹管による平行沈線文や連続刺突文で、更に円形貼付文が施文されるものもみられる。

(SI120住居跡床面直上出土土器) (図版85)

出土状況：住居床面直上から深鉢3点、確認面から小型土器1点等が出土している。

特徴：深鉢はC I a・C III b・G III b2類が出土している。

表5 出土状況(1)

番号	部位	文様								不明	新	既持	小計	計
		A	B	C	D	E	F	G	H					
S127	表面	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4
	皮膚面上													1
	5~8層	1				1							1	3
	3~6層									1				1
	2層										1	1		2
	1層	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	13
S1120	皮膚面上				1									3
S1170	表面				1									1
	皮膚面上				1	1								3
S1320	1層	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	11	
S1290	皮膚面上				1									1
S1400	主柱抜取				1									1
	2層													2
S1403	主柱抜取											1		1
S1406	皮膚面上									1				1
	主柱断面	1												1
	地層土										1	1		2
S1408	地面上		1						1					2
S1446	鉢底上												1	1
S1451	主柱抜取		1											1
SK14	表面				1									1
SK16	地層土											1		
SK24	地層土	1												1
SK25	表面			1										1
SK30	確認面			1										1
SK36	地層土	1												1
SK38	1~5層								1					1
SK62	皮膚面上	1												1
SK73	地層土							1						1
SK99	1~5層				1									1
SK127	底面		1						1					2
SK309	6層底面							1			1	2	1	5
SK311	1~7層				1									1
SK312	底面											1		1
SK316	7層				1			1		1				3
	1~5層						1							1
SK319	1~2層					3						1		4
SK340	9層以下								1					1
SK355	底面							1						1
	4層										1			1
SK367	表面													1
SK407	底面	1												1
	1層											1		1
SK442	地層土											1		1
SK140	2層	1	1	1	1	5	2	1	1	1	1	1	1	20

*底構外出土物は除く

平縁と4単位の波状縁があり、口縁部はいずれも凸帶状に肥厚している。口縁部の文様は、図版85-1が盲孔と口縁に沿う幅広の沈線文、2は橋状の把手が付き、両者には幅広の帯状粘土紐が貼り付いている。3には斜行する短い沈線文が施されている。1・2の頸部には、半截竹管や棒状工具による連続刺突文のある隆帯が巡り、胴部は半截竹管による平行沈線文や円形あるいは橢円形の貼付文が施文されている。3は頸部に2個の貫通孔が穿たれ、胴部は地文の縄文のみが施されている。

《SI170住居跡床面および床面直上出土土器》(図版87～88)

出土状況：住居北半部の床面から完形に近い状態で深鉢1点が出土した他、床面直上から深鉢2点、深鉢あるいは鉢と考えられる土器1点等が出土している。

特徴：深鉢はBⅢb・CⅢb類が出土している。

いずれも4単位の波状縁で、3の波頂部は厚みを増して円形となり、盲孔が穿たれている。口縁部は図版87-1・2は凸帯状に肥厚しており、盲孔と斜行する短い沈線文が施される。3は渦巻き状・山形状などの半截竹管による押引文や波頂部へむかう円圧状の粘土紐貼付文が施されている。

頸～胴部は主となる施文方法は、いずれも半截竹管による平行沈線文で、特に3は胴部全面に集合沈線文が施されている。他に1はボタン状の円形貼付文や頸部に刻目のある隆帶、3には三角形の彫去による山形文等が認められる。4は無文で貫通孔が1個認められる。

《SI320住居跡堆積土1層出土土器》(図版96～101)

出土状況：住居北西隅の1層から、土器、石器、獸骨がまとまって大量に出土している。住居廃絶後、自然流入土が堆積した後の窪地に廃棄されたものと考えられ、これらの内、深鉢11点を図示した。

特徴：深鉢A I a3・A I a4・B I a・BⅢa・D I a2・EⅢ・G I a2類が出土している。

平縁と4単位の波状縁があり、橋状の把手がつくものもみられる(図版97-3・図版98-2・図版99)。図版96-3、図版100を除き口唇部内側には粘土紐が貼り付き、肥厚している。口縁部の文様は沈線文と連続刺突文、半截竹管による平行沈線文等で、更に粘土紐や棒状・円形・楕円形等の貼付文が施されているものが多い。頸～胴部は地文の縄文のみのものが殆どで、結節のある縄文や結束縄文、撚り糸文が縦位に施文されているものが多い。

《SK309土壤出土土器》(図版253)

出土状況：6層底面から廃棄された状態で出土しており、これらの内、深鉢1点、浅鉢2点、小型土器1点、台付鉢と考えられる台部1点を図示した。

特徴：深鉢はE I類、浅鉢はA・B類が出土している。

深鉢は平縁で、口縁部から頸部にかけて、指頭押圧痕のある縦位棒状貼付文が4単位と、その間を2～3段の横位沈線文と連続刺突文が施されている。胴部は無文である。

浅鉢はともに平縁である。図版253-5は口唇部に刻目が施され、小突起が付き、その下部には竹管による2列の連続刺突文と円形や刻目のあるV字状、短い横位の粘土紐貼付文が施されている。体部は無文である。4は全面無文である。小型土器は平縁で上端に刻目が施され、小突起が付く。文様は口縁部に円形貼付文と山形状沈線文、連続刺突文が施文されている。体部は無文である。

《SK316土壤出土土器》(図版258・259)

出土状況：第6・7層から廃棄された状態で出土しており、これらの内、深鉢3点を図示した。

特徴：深鉢D I a3・EⅢ・GⅢa2類が出土している。

深鉢の口縁部は平縁と4単位の波状縁がある。図版259-1は波頂部から頸部にかけて、指頭状押圧痕のある縦位棒状貼付文が施され、その間は縄文のみ施文されている。胴部は無文である。2は頸部に連続刺突文のある隆帯が巡り、他は無文である。3は波頂部に渦巻状貼付文のある突起が付く。波頂部から頸部にかけては、刻目文のある渦巻状および縦位棒状貼付文が施され、その間は三角形の彫去や山形状や横位等の沈線文、連続刺突文が施文されている。胴部は無文である。

また、上層の1～5層からも深鉢E類が出土している(図版259-4)。平縁で、山形状の小突起が付き、口縁部から胴部にかけて横位、縦位、波状、山形状等の沈線文が施文されている。

(SK319土壤出土土器) (図版253)

出土状況：第1・2層から廃棄された状態で出土しており、これらの内、残りの良い深鉢3点と浅鉢1点を図示した。

特徴：深鉢はE I類、浅鉢はA類が出土している。

深鉢の口縁部はすべて平縁である。図版264-1は頸部にかけて、指頭状押圧痕のある横・縦位棒状貼付文が4単位施文されている。図版265-1は地文の縄文のみ、2は口唇部と頸部に隆帯を巡らし、その上に連続刺突文や、梢円形や弧状の貼付文が施され、その間は結節文が施文されている。胴部は無文である。

浅鉢は口縁部に半截竹管による押引文や平行沈線文が施されており、体部は縄文のみである。

(SX 140遺物堆積層第2層出土土器) (図版51-1～3、)

出土状況：破片を含めると非常に多くの縄文土器が出土しており、深鉢19点、浅鉢1点を図示した。これらについては、本来は斜面に廃棄されたものと考えられるが、2層分布範囲の東側斜面で、層理面に貼り付く状態でまとまって出土しているものが一部みられる他は、廃棄時の元位置を保っているものは少なく、散見的な出土状況である。

特徴：深鉢はA I a1・A I a2・A I c・A I d・A II a1・A II a2・D I a1・D I d・D IV a1・F I a2・F III a1・G I b2・G III b1類、浅鉢はC類が出土している。

深鉢の口縁部は、平縁と波状縁があり、平縁には平滑なもの(I類)と上下あるいは上端に刻目を施し鋸歯状となるもの(II類)があり、後者はA類に多くみられる。これらには貫通孔のある円形の小突起がつくものもある(図版315-1・4、317-1)。波状縁には、6単位の波状縁(III類)と輪花状の小波状縁(IV類)がある。文様は施文されるもの、地文のみのもの、無文のものがあり、施文されるものについては、施文部位は図版325-1を除き、口縁部から頸部付近に集中している。主となる施文方法は山形や横位等の粘土紐貼付文で、一部、半截竹管による平行沈線文や連続刺突文が主文様となるもの(図版315-4・5、317-2、319-2、325-1)も見られる。

以上のような各遺構出土土器の特徴をみると、[SI77床面および床面直上出土土器]と[SI77堆積土1・2層出土土器、SI120・170床面および床面直上出土土器]、そして[SI320、SK309・316・

319出土土器] の3つのグループのなかで土器の内容に顕著な相違が認められる(表6)。

すなわち、SI77床面および床面直上出土土器では、深鉢A I a2・A I d・A II a1・D II a1類、SI77堆積土11・2層出土土器とSI120・170床面および床面直上出土土器では、深鉢A I c・A I d・B III b・C I a・C III b・D II b・D III b・G I a1・G I b2・G III b2・H I a2類、SI320、SK309・316・319出土土器では、深鉢A I a3・A I a4・B I a・B III a・D I a2・D I a3・E I・E III・G I a2・G III a2類、浅鉢A・B類がそれぞれ共伴関係にあり、無文のA I d類を除き、他のグループに含まれる類型は共伴していない。これらのことから、各出土土器は、そのまま3つの土器群に分けることができるものと考えられる。

SX140第2層出土土器については、文様帶が頸部付近に集中し、施文方法は粘土紐を山形や横模に貼り付けるものが主体を占めるなど、図示したものの殆どがSI77床面および床面直上出土土器と類似した特徴を有している。しかし、前述のように遺物の出土状況にまとまりは認められず、破片では、GⅢb1類のようにSI77堆積土1・2層出土土器やSI120・170出土土のグループと近似した土器(図版325-1等)も一部出土していることから、これらを一括してSI77床面および床面直上出土土器と同等に扱う事は出来ない。以下では、組成上の欠落を補足する際の資料として各類型毎に個別に扱うこととする。

表6 出土状況(2)

品項	部位	少掉												不明	缺	残缺	小量	杂质	
		A			B		C		D		E			F		G		H	
I	II		III		IV		V		VI			VII		VIII		IX		X	
S	c	d	a	b	c	a	b	b	s	b	c	d	a	b	b	s	a	a	b
1	2	3	4	1	2	2			1	2	3	1	1	1	2	2	1	2	2
SI77	床面				1	1													4
	床面直上																		1
SX140	2層	1	1	1	1	5	2				1		1	1	1	2	1	1	20
SI77	1~2層				2	1					1	1				1	1	1	2
SI220	床面直上										1	1							3
SI170	床面										1								1
	床面直上										1	1							3
SI320	1層				1	1					1			1	3			2	11
SK309	6層底面													1				2	5
SK316	7層													1			2	2	5
SK319	1~2層													3				1	4

c 編年的位置

SI77床面および床面直上出土土器を第1群土器、SI77堆積土1層出土土器とSI120・170床面および床面直上出土土器を第2群土器、SI320、SK309・316・319出土土器を第3群土器とし、それぞれの土器群の編年的位置を検討する。

第1群十器

本群の特徴をまとめると以下のようになる。

構成種として深鉢があり、 $A\text{Ia}2$ ・ $A\text{Id}$ ・ $A\text{IIa}1$ ・ $D\text{IIa}1$ 類が本群に属する。平縁が主体で

縦歯状となるものが多い。文様は口縁部から頸部周辺のみに施文されるものが多く、主となる施文方法は粘土紐による山形状や横位等の貼付文で、一部に半截竹管による平行沈線文もみられる。地文の縄文は横位に施文するものが主体を占め、単節のLRが多い。また、これらの中にはLRrの前々段反燃りのものも一部認められる。

また、共伴関係は確認できなかったが、上記の土器と同様、文様帶が口縁部から頸部周辺のみにあり、山形状や横位の粘土紐貼付文等や半截竹管による平行沈線文が施文される深鉢A I a1・A II a2・D I a1・D IV a1・F I a2・F III a1・F III a2・G III b1類については、施文技法等の特徴が近似することから本土器群に属する可能性が考えられる。

以上のような諸特徴を東北地方南部地域の縄文時代の土器編年の中で検討すると、山内清男により型式設定された「大木式土器」(山内：1937)の範疇に収まり、その中でも前期後葉の土器形式である「大木5式」に比定することができる。

該期の土器は県内では出土例が少なく、七ヶ浜町大木圓貝塚(小岩：1961、八巻：1979)、迫町糠塚貝塚(加藤：1956、興野：1981)、南方町長者原貝塚(阿部・遊佐：1978)、藏王町西林山遺跡(手塚他：1987)等があげられる。

また、「大木5式」は興野義一氏により細分案が提示されているもの(興野：1970)、今回の発掘でそれらを明確にする資料は得られなかった。

尚、先行形式である「大木4式」に相当する土器は、本遺跡でも調査区東側を中心に少量出土している(図版13、31、191、199等)が、それらのほとんどは小破片でまとまりではなく、出土状況から遺構との共伴関係や本土器群との直接の新旧関係がわかるものは出土していない。

第2群土器

本群の特徴をまとめると以下のようになる。

構成する器種として深鉢があり、A I c・A I d・B III b・C I a・C III b・D II b・D III b・G I a1・G I b2・G III b2・H I a2類が本群に属する。平縁と波状縁があり、波状縁は4単位である。文様の施文方法は、主に半截竹管による平行沈線文・連続刺突文・押引文等で、他に円形・楕円形・棒状等の貼付文、幅広の沈線文や盲孔などがみられる。地文の縄文は横位に施文するものが主体を占め、単節のLRが多い。第1群土器と同様、これらの中にはLRrの前々段反燃りのものも一部認められる。

また、共伴関係は確認できなかったが、上記の土器と同様、胴部に半截竹管による平行沈線文、連続刺突文や円形貼付文等が施文される深鉢A III b2・C I b・D I b・G I b3・H III a1類については、施文技法等の特徴が近似することから本土器群に属する可能性が考えられる^{注2}。

以上のような諸特徴は東北地方南部地域の縄文時代の土器編年の中で検討すると、前期末葉の「大木6式」に比定することができる。「大木6式」は県内では涌谷町長根貝塚(藤沼：1969)や七ヶ宿町小梁川遺跡(相原：1986)で良好な資料が出土している。他には七ヶ浜町大木圓貝塚(小岩：1961、八巻：1979)等でも該期の土器が出土している。

これらの中で、本遺跡と同じく県北部に位置する長根貝塚出土土器と比較する。

長根貝塚で本土器群と対比し得るのは、長根貝塚第一・二群土器である。これらは、本遺跡の深鉢C・G類に相当する長胴形深鉢といわゆる金魚鉢形深鉢を、その主たる組成としている。そして第二群土器については、口縁部文様が横位の平行沈線と縦位の弧状文で施文されるなど、後続する長根貝塚第三群土器と類似することから「大木6式」でも新しい様相の土器群の可能性があるとして捉えられている。

これらと本土器群とを比較すると、本土器群の口縁部文様帶は、主に幅広の沈線文や盲孔、貼付文が施文される等、概ね長根貝塚第一群土器に近い特徴を有している。

また、長根貝塚第二群土器に類似する土器は、破片を含めると今回の調査でも少量出土している(図版79-1、197-2等)。更に、平成13・14年度の確認調査でも同様の特徴を有する土器が出土しており¹³⁾、これらについては長根貝塚で想定された第一群土器から第二群土器への変遷に対応する土器として捉えられる。しかし、土器のまとまりは希薄で、本土器群との新旧関係を明確にする資料は出土していない。今回は、これらを一括して第2群土器の範疇で捉えることとする。

尚、深鉢BⅢb類については、胴部全面に半截竹管による集合沈線文や三角形等の彫去が施される等、他の類型とは文様の特徴を異にしており、新潟県鍋屋町遺跡(大場・寺村：1964)や石川県真鶴遺跡(高堀・山田：1986)等で類似する土器が出土している。

第3群土器

本群の特徴をまとめると以下のようになる。

構成する器種として深鉢と浅鉢がある。深鉢にはA I a3・A I a4・B I a・B III a・D I a2・D I a3・E I・E III・G I a2・G III a2類、浅鉢にはA・B類の器形がみられる。

文様の施文方法は、主に沈線文・連続刺突文で、他に縦線・渦巻状・山形状等の貼付文、刻目文、隆線や半截竹管を用いた平行沈線文や刺突文、指頭状押圧文、三角形の彫去などがある。地文については、主に単節のL RやR L、無節のL r等で結束縄文もあり、これらの中には、直前段反撲りや前々段反撲りのものも認められる。他にRの燃り糸文もみられる。一部を除き、縦位に施文するものが主体を占め、これに結節文を伴うものが多い。また、無文のものも多くみられる。

以上のような諸特徴を東北地方南部地域の縄文時代の土器編年の中で検討すると、中期初頭の「大木7式」に比定することができる。

「大木7式」は型式設定者の山内清男により「大木7a・b式」の二段階に細別されている(山内：前出)。その後、大木7a式土器は宮城県涌谷町長根貝塚出土土器群の層位的な検討(藤沼：前出)を基に、長根貝塚第三群土器を「第I段階・第II段階」、開田工事の際出土した本遺跡出土土器を「第II段階以降」として「大木7a式」の中で段階的に位置付けている(丹羽：1981)。更に、近年の発掘調査によって宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡(相原：1986)や宮城県川崎町中の内A遺跡(古川他：1987)においても該期の土器の良好な資料が出土しており、小梁川遺跡第II・III群土器と中の内A遺跡第I群土器が「大木7a式」、小梁川遺跡第IV・V群土器と中の内A遺跡第II群土器が「大木7b式」にそれぞれ比定されている。また、小梁川遺跡第II群土器は、小梁川遺跡第III群土器の下層から出土し、両土器群の前

後関係が層位的に明らかにされており、この成果は、丹羽の想定した大木7a式における「第I段階・第II段階」から、「第II段階以降」(丹羽：1981)への変遷に対応するものとされ、小梁川遺跡第II群土器は大木7a式の「第I・II段階」、第III群土器は大木7a式の「第II段階以降」に位置付けられている(相原：1986)。

本遺跡第3群土器を上記の土器群と比較すると、交互刺突文がみられず、胴部無文のものが多い等の特徴は、長根貝塚第三群土器や小梁川遺跡第II群土器により近い様相を呈しており、本遺跡第3群土器の編年的位置については、これらとほぼ同時期のものと捉えられる。

なお、「大木7a式第II段階以降」や「大木7b式」に相当する土器は、破片を含めると本遺跡でも少量出土している(図版309-6・9、310-2等)。造構との共伴関係の分かるものでは、前者はSI446住居跡出土の浅鉢(図版155)、後者ではSK442土壤出土の深鉢・浅鉢(図版311・312)等があるが、遺物のまとまりは希薄で土器群の設定は困難である。

註1：破片資料ではこれらの類型にあてはまらないものも少量認められ、頭部から口縁部にかけて内輪するもの(図版51-3)や円筒状となる(図版87-4)、台付鉢の脚部と考えられる(図版253-3)等がある。

註2：D I b類は半截竹管による菱形の平行沈線文のみ

註3：SI597・716住居跡出土土器等

(2) 石器

a 出土石器の分類

剥片石器、剥片・チップ類、碎片、石核、礫石器類、磨製石斧を含めた全石器は合計6,295点出土しており、その内訳は表7に示す通りである。出土点数は多いものの、造構から出土した石器は少なく、造構に伴うかたちでの出土例に至っては殆ど認められない。しかし、出土土器の大半が縄文時代前期後葉から中期初頭頃のものであることから、石器も多くは同時期のものと思われる。以下ではその分類について記す。なお、縄文時代前期中葉・後期・晚期、弥生時代の遺物も認められる。

1. 定形石器

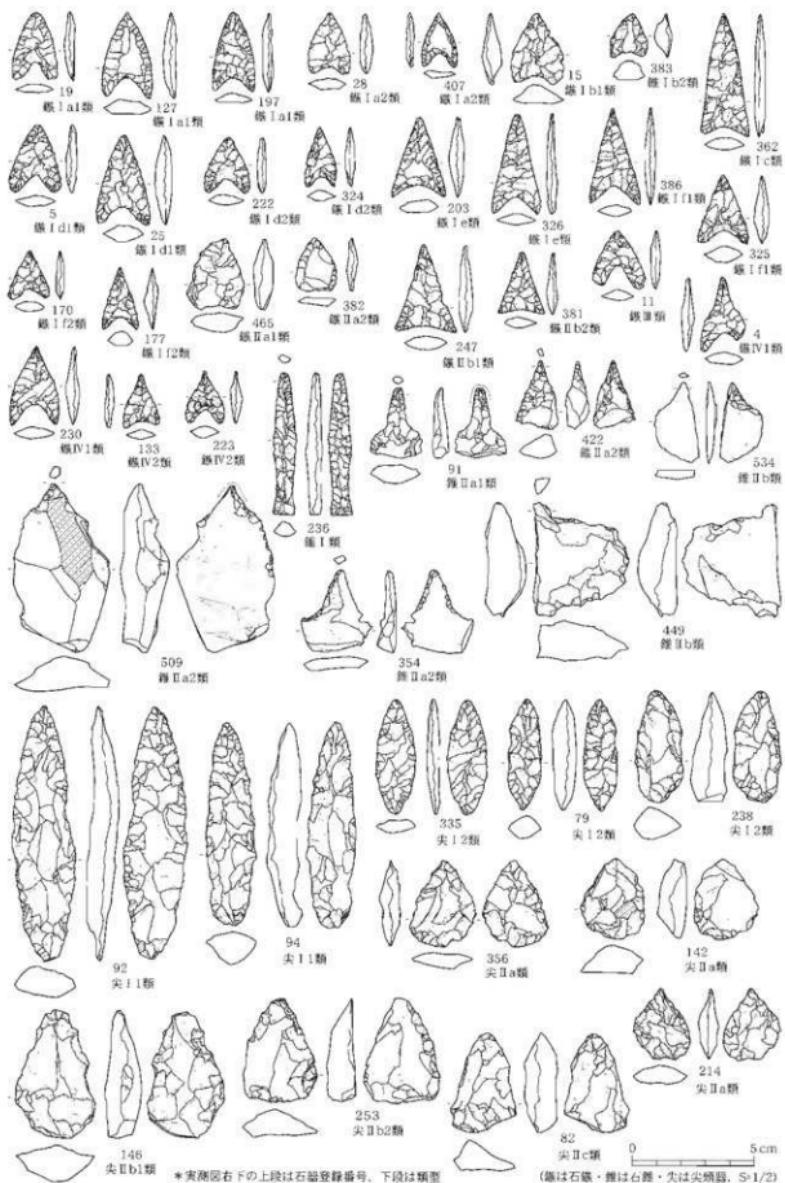
① 石鏃

尖頭部をもち、先端部が薄く扁平な石器である。尖頭器としたものに比べ小型で器厚が薄く、縄身部尖端の平面形は基本的に二等辺三角形をなす。基部の形態には抉りを加えたものと直線的に加工したものがあるが、茎が作出されたものは無い。縄身部の平面形から大別し、基部と縄身両側縁の形態により細分した。なお、重さと長・幅の相間から大・小の2類に識別できたものもある。

I類：縄身の平面形が二等辺三角形を基調とし、基部に抉りが加えられて内湾部(凹基)が作出されたもの。

表7 出土石器組成表

全石器 (6,295)										
全剥片石器 (5,514)						全打削 (4,029)				
剥片石器 (788)			石核 (450)			石鏃 (3,136)		チップ (207)		
石器	石核	剥片	石器	剥片	石核	石鏃	石核	石器	剥片	石器
253	52	32	46	26	13	320	132	3,499	1,398	163
									387	781
										35



図版418 石器分類図(1)

a : 錐身両側縁が丸みをもって外湾するもので、大型(1)・小型(2)の別がある。

b : 錐身が厚く、両側縁が外湾するもので、大型(1)・小型(2)の別がある。

c : 錐身が長く、両側縁が緩やかに外湾するもの。

d : 錐身両側縁が緩やかに外湾するもので、大型(1)・小型(2)の別がある。

e : 錐身が長く、両側縁が直線的なもの。

f : 錐身両側縁が直線的なもので、大型(1)・小型(2)の別がある。

II類：錐身の平面形が二等辺三角形を基調とし、基部が直線的(平基)に加工されたもの。

a : 錐身両側縁が外湾するもので、大型(1)・小型(2)の別がある。平面形がやや歪になるものが多く、未完成品の可能性もある。

b : 錐身両側縁が直線的なもので、大型(1)・小型(2)の別がある。

III類：錐身の平面形が正三角形を基調とし、基部に逆「V」字状の大きな抉りが加えられて内湾部(凹基)が作出されたもの。

IV類：錐身の両側縁が尖頭部付近で内湾し、基部付近で外湾する形状で、基部には抉りが加えられて内湾部(凹基)が作出されたものである。大型(1)・小型(2)の別もある。

② 石錐

棒状の尖頭部をもち、その断面形が三角形もしくは四角形を呈する石器である。全体形が棒状をなすもの(I類)と、つまみ部をもつての一端に尖頭部が作出されたもの(II類)に大別される。後者はつまみ部の形状から2類に分けられ、さらに尖頭部(錐部)の形狀によって細分される。

I類：全体形が棒状をなすもので、つまみ部が無いもの。

II類：尖頭部が一端に作出され、つまみ部が有るもの。

a : 錐部とつまみ部の境が屈曲によって明瞭なもので、錐部が長いもの(1)と短いもの(2)に分けられる。

b : 錐部とつまみ部の境に屈曲が無く、漸移的で不明瞭なもの。大半の錐部一側辺に折断面が認められる。

③ 尖頭器

石錐に比べ角度の大きな尖頭部をもち、石錐に比べ大型で器厚が厚く、基部に抉りのないものを尖頭器とした。平面形態から木葉状のもの(I類)と三角形状のもの(II類)に大別し、側縁や基部の形状によって細分した。なお、重さと長・幅の相関から大・小の2類に識別できたものもある。

I類：平面形が木葉状を呈するもので、両側縁は外湾し、基部は基本的に尖基となるが、平基のものも含まれる。大型(1)・小型(2)の別がある。

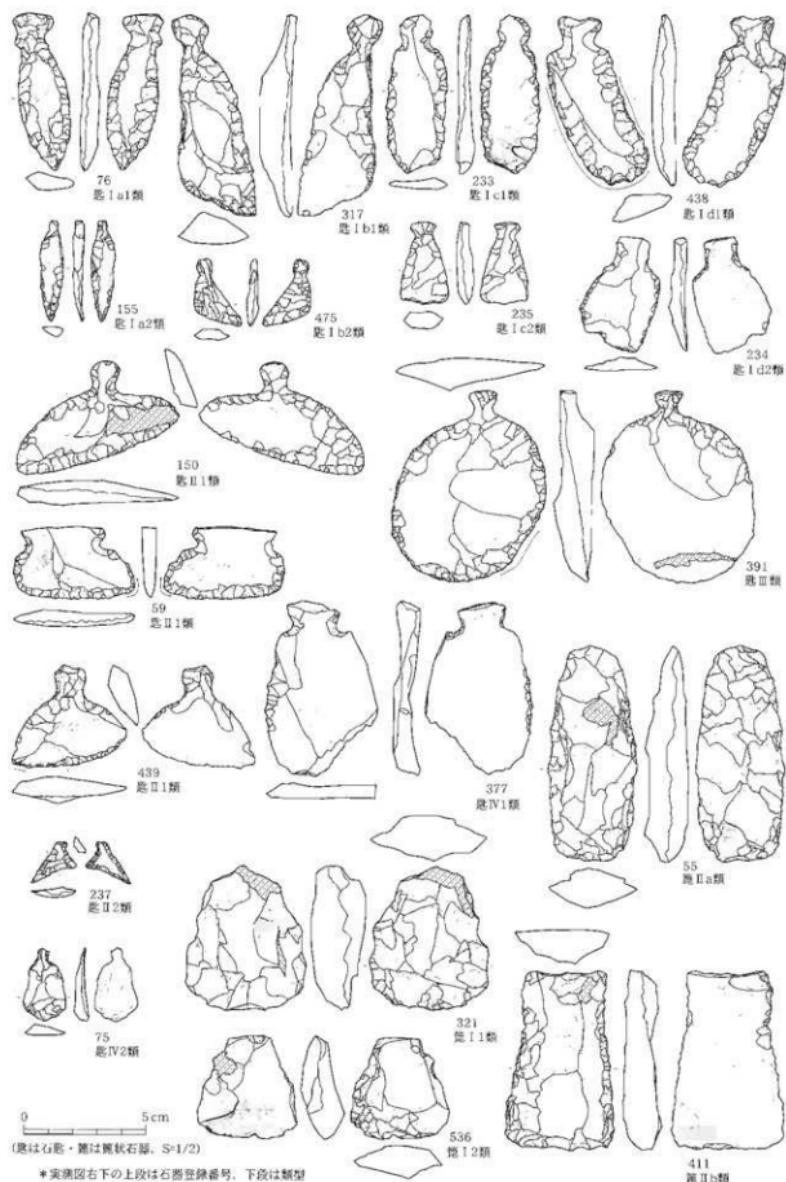
II類：平面形が三角形状を呈するもの。

a : 両側縁が緩やかに外湾し、基部は円基となる。

b : 両側縁が外湾気味で、基部は平基となる。大型(1)・小型(2)の別がある。

c : 両側縁が直線的に延び、基部は円基となる。

④ 石匙



*実物図右下の上段は石器登録番号、下段は類型

図版419 石器分類図(2)

両側刃から抉りを入れることによって作出されたつまみ部を有し、刃部と判断できる縁辺をもつ石器である。縁辺にスクレイバー状の加工を施し刃部としたもの(I～Ⅲ類)と、つまみ部以外の縁辺に加工が無いもの(IV類)がある。前者はつまみ部を上とした場合、刃部が縦長になるもの(I類)と横長になるもの(II類)、刃部平面形が円形のもの(III類)に大別される。後者は銳利な縁辺をもつ剥片の一端につまみ部を作出した簡単な作りのもので、刃部の位置・形状にまとまりは見出せないが、使用による刃こぼれと考えられる連続する微細剥離痕が残る。I類については刃部の位置・形状から細分される。なお、重さと長・幅の相関から大・小の2類に識別できたものもある。

I類：縁辺にスクレイバー状の加工を施した刃部が縦長になるもの。

a：基本的に外湾する2辺によって刃部が形成されるもので、末端は尖る。大型(1)・小型(2)の別がある。

b：3辺によって形成された刃部がつまみ部に対して斜位につくもので、末端は尖る。大型(1)・小型(2)の別がある。

c：3辺によって形成された刃部がつまみ部に対して縦位につくもので、末端は尖らない。大型(1)・小型(2)の別がある。

d：3辺によって形成された刃部がつまみ部に対して斜位につくもので、末端は尖らない。大型(1)・小型(2)の別がある。

e：刃部平面形が扁平な楕円形を呈し、刃部がつまみ部に対して縦位につくもので、器厚が厚い。

II類：縁辺にスクレイバー状の加工を施した刃部が横長になるもので、大型(1)・小型(2)の別がある。

III類：縁辺にスクレイバー状の加工を施した刃部の平面形が円形のもの。

IV類：つまみ部以外の縁辺に加工が無く、素材縁辺の一部を刃部として利用したもので、大型(1)・小型(2)の別がある。

⑤ 篠状石器

縦長の打製の石器で、一端に長軸と直交する刃部が作出された石器である。基本的には両側縁が基部側から刃部側に向かって開き、最大幅は刃部付近にある。断面形は蒲鉾形もしくは凸レンズ状を呈し、厚みのある石器である。平面形の特徴から、側辺が刃部に向かって大きく開くやや寸詰まりのもの(I類)と側辺があまり開かない細長いものの(II類)に大別される。II類は刃部の形態から細分され、重さと長・幅の相関から大・小の2類に識別できたものもある。

I類：基部側から刃部側に向かって側辺が大きく開き、やや寸詰まりの形態になるもので、刃部は緩やかに外湾する。大型(1)・小型(2)の別がある。

II類：側辺が刃部側に向かってあまり開かない細長い形態のもの。

a：刃部が緩やかに外湾するもの。

b：刃部が平らなもの。

2. 模形石器

対向する縁辺に両極打法によつたと思われる剥離面(両極剥離痕)が認められるものを楔形石器とした。点数が少ないため細分は行わないが、両端に一対の両極剥離痕を有するものが多く、複数対の両極剥離痕を有するものは少ない。両極剥離の施された対向する縁辺の状況は線状と線状もしくは線状と平坦面のものが殆どで、平面形態は方形を基調とするものが多い。

3. 不定形石器

連続した二次加工の施された石器の中で、定形的な石器およびその破損品、未完成品を除いたものを不定形石器として一括した。不定形石器には、二次加工がほぼ全周に及ぶもの(I類)と主に2辺に及ぶもの(II類)、主に1辺に行われるもの(III類)に大別される。加工の状況や平面形態によって細分した。

I類：二次加工がほぼ全周に及ぶもの。

- a : 背腹両面から奥まで入る粗めの二次加工が施され、縁辺が鋸歯状を呈するもの。
- b : やや奥まで入る連続した二次加工が施されるもので、スクレイバー・エッジ(バルブ)の発達しない平坦で幅の狭い奥まで入る剥離が縁辺に連続するもの)を有するものも少量含まれる。

1 : 縁辺が直線状で、平面形態が方形を基調とするもの。

2 : 縁辺が弧状で、平面形態が木葉形もしくは橢円形となるもの。

3 : 縁辺が弧状で、平面形態が円形を基調とするもの。

c : 急角度で浅く精緻な二次加工が施されたもの。

II類：二次加工が主に2辺に行われるもの。

a : 背腹両面から奥まで入る粗めの二次加工が施され、加工された辺が鋸歯状を呈するもの。

b : やや奥まで入る連続した二次加工が施されるもの。

1 : 素材の鋭い1縁辺を残し、他の辺を二次加工したもので、平面形態は頂角の丸まった三角形もしくは台形状を呈するものが多い。残された縁辺には小剥離や微細剥離痕などが認められる。

2 : 素材の対向する2側辺に二次加工が行われるもので、平面形態は方形を基調とする。二次加工の行われない2側辺は、素材の打面、折断面で構成される場合が多く、素材の鋭い縁辺を残さない。

3 : 素材の連続する2辺に二次加工が行われるもので、平面形にまとまりは見出せない。スクレイバー・エッジを有するものも少量含まれる。

c : 急角度で浅く精緻な二次加工が施されたもの。

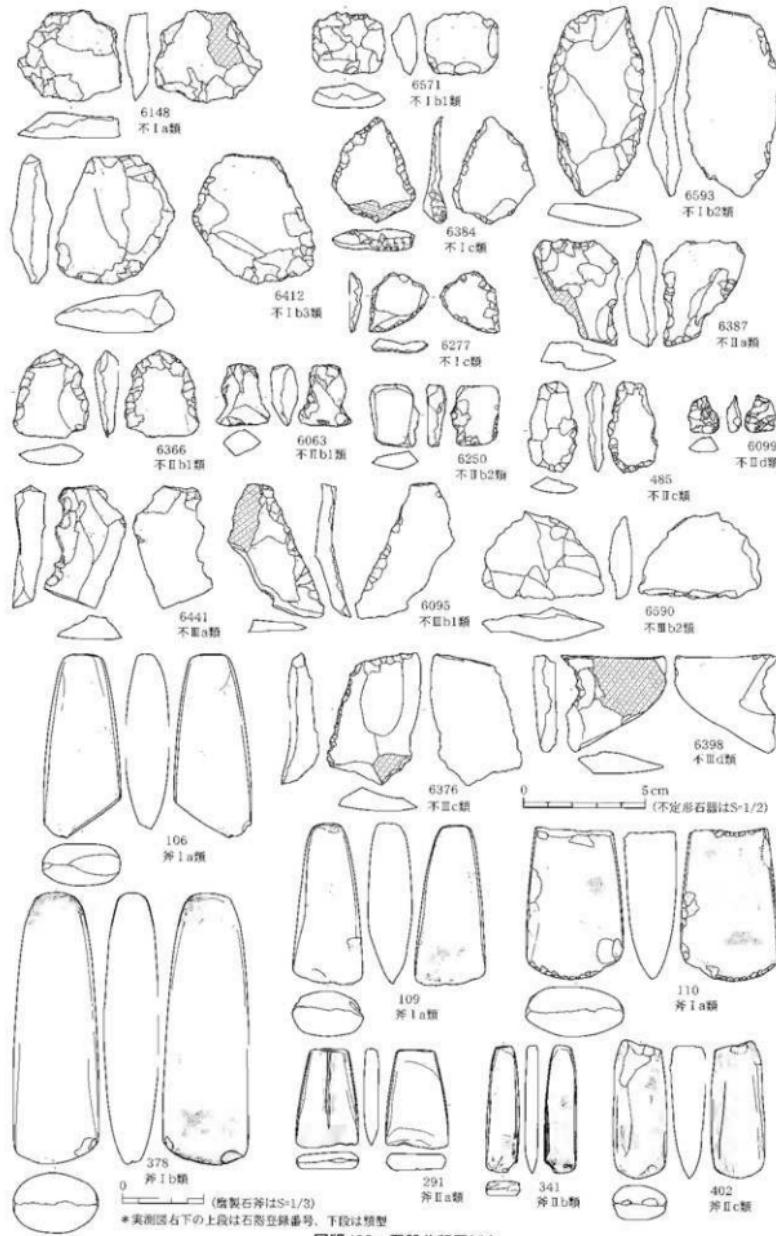
d : 両側辺からの粗い加工によって素材の一端を尖らすものであるが、平面形態は石錐ほど鋭くない。石錐や尖頭器などの未完成品の可能性もある。

III類：二次加工が主に1辺に行われるもの。

a : 背腹両面から奥まで入る粗めの二次加工が施され、加工された辺が鋸歯状を呈するもの。

b : やや奥まで入る連続した二次加工が施されるもの。

1 : 向刃のもの。



図版420 石器分類図(3)

- 2：片刃のもの。
c：急角度で浅く精緻な二次加工が施されたもの。
d：二次加工の施された縁辺がノッチ状を呈するもの。

4. 石核

剥離作業面と打面の数から以下の通り分類した。

- I類：剥離作業面と打面がともに1面設定されるもの。
II類：剥離作業面が1面で、それに対し複数の打面が設けられるもの。
III類：剥離作業面が2面以上設定され、それに対し打面が1面設けられるもの。
IV類：剥離作業面が2面以上設定され、それに対し複数の打面が設けられるもの。

5. 磨製石斧

破損しているものや再利用されているものが多く、完形品は少ない。また、再加工されたと考えられるものも含まれる。大型(I類)・小型(II類)の別が明確で、平面・断面形の特徴と刃部の形態から細分される。

- I類：大型のもの。
a：側辺が刃部側に向かって開くもので、断面はやや丸みのある長方形となる。刃部は緩やかに外湾し、側面に擦り切り痕がみられるものもある。
b：側辺が刃部側に向かってあまり開かない細長い形態のもので、断面は楕円形を呈する。刃部は緩やかに外湾している。
II類：小型のもの。
a：側辺が刃部側に向かって開くもので、断面は扁平となる。刃部は緩やかに外湾している。
b：側辺が刃部側に向かってあまり開かない細長い形態のもので、断面は扁平となる。刃部は緩やかに外湾している。
c：側辺が刃部側に向かってあまり開かない細長い形態のもので、断面は楕円形を呈する。刃部は弧を描いて外湾している。

6. 穰石器

穰石器は使用痕によって分類される石器で、殆ど加工されることなく、素材の選択段階で形態が規定され、使用によってその属性が変移する。円穰もしくは楕円穰を素材とするものが大半を占め、使用痕には磨面、凹み、敲打痕、溝状の凹みの4つが認められる。基本的に使用痕の組合せにより分類を行った。なお、石皿と断面が三角形状を呈する綾長の穰を素材とする磨・敲石については別類として扱った。

- I類：磨面
II類：磨面+凹み

III類：磨面+敲打痕

IV類：磨面+凹み+敲打痕

V類：凹み

VI類：凹み+敲打痕

VII類：敲打痕

VIII類：断面が三角形状を呈する綫長の穂を素材とし、その銳角部に幅が狭くやや粗い磨面が認められる石器である。この磨面を挟んだ二側面も磨面となるものが多く、端部には敲打痕が認められるものもある。

IX類：石皿

X類：溝状の凹み(砥石)

b 共伴関係と石器の時期

石器の出土状況を確認すると、多くは遺構確認時や基本層序第2層、風倒木痕など遺構外から出土しており、遺構から出土した石器は少なく、遺構に伴うかたちでの出土例に至っては殆ど認められない。また、遺構の埋土に古い時期の遺物が混入する例が比較的多いことも土器の分析から判明しているが、器種・型式の特徴から混入と判断できるものは僅かで、大半の石器では困難である。石器がある程度まとまって出土しているSI45住居跡床面・床面直上・周溝・柱穴、SI77住居跡床面・床面直上・周溝・柱穴、SI77住居跡1層、SI320住居跡1層、SI390住居跡床面直上・周溝、SI406住居跡1層、SK303土壤2層、SK431土壤1・2層、SX140遺物堆積層第2層の各遺物をみても組成における欠落が多く、共伴関係も乏しいことから石器群を設定することは難しい(表8)。更に、土器の分析で設定された「群期」に出土石器を当てはめてみても、帰属が明らかな石器は少なく、各群間で石器の器種・型式に特徴的な変化は認められない。遺構内と遺構外出土の石器の間に大きな違いはない。よって、土器の分析で行われるような時期的細分は行わず、これらを前期後葉から中期初頭頃の石器として大枠で捉え、その特徴を次項でまとめることにする。

なお、これに含まれない明らかに時期の異なる遺物として、石鏸8点(図版347-14、361-25~28、

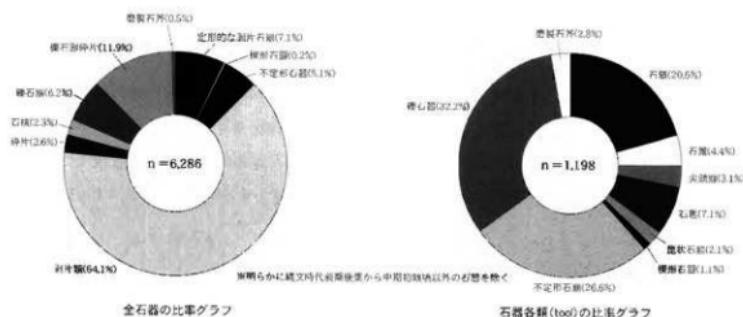


表8 主な遺構の石器各類の出土状況

器種・形態	石器										石器										石器													
	I a2	I b3	I c1	I d2	I e1	I f1	Bal.	III	IV	I a2	I b2	I c2	I d2	I e2	I f2	I g2	I h2	I i2	I j2	I k2	I l2	I m2	I n2	I o2	I p2	I q2	I r2	I s2	I t2	I u2	I v2			
見出・その他	1									1																								
SII7・袋形柄		1								1																								
SII7・1面		1		2						2				1																				
SII26・1面		2		1	1	1				2	1																							
SII50・袋形柄			1	1																														
SII406・1面	1	1																																
SK203・2面		3	1							1			1																					
SK431・1~2面	1									1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1			
SX149・2面																																		

371-35、390-7・8)、磨製石斧1点(図版205-7)がある。石鎌は、ピット出土の図版347-14を除き、遺構外から出土しており、全て有茎のものである。出土土器に縄文時代後・晩期のものが少量含まれていることから、同時期の遺物と考えられる。磨製石斧はSK34土壤1層^(3.1)から出土した太形始刃石斧で、弥生時代のものである。

c. 縄文時代前期後葉から中期初頭頃の石器の特徴

剥片・チップ・碎片類、石核を除く器種別の割合をみると、定形的な剥片石器が37.3%と最も多く、中でも石鎌の量が際立っている。不定形石器も26.6%と高い割合を占め、石器群の中で不定形石器が多数を占める縄文時代の一般的な傾向と共通している。また、礫石器の割合も高く、磨凹敲石類(VII類を含む)が22.4%、石皿が6.0%、砥石が3.8%を占めている。ここでは主な器種の特徴をまとめ、石材についても検討する。

1. 定形石器

定形的な剥片石器は447点出土しており、出土石器全体の7.1%を占める。

① 石鎌

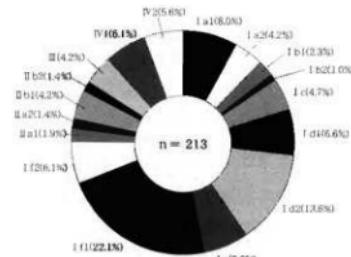
247点出土しており、分類できたものは213点ある。定形石器の中では突出して出土量が多く、平面形態が二等辺三角形を基調とするI・II類が大半を占める。基部に抉りが加えられたI類は75.2%で最も多く、細部の形態にはバリエーションが認められる。また、各類において大・小の分化が明瞭で、大型品は長さ30mm前後・幅18mm前後、小型品は長さ20mm前後・幅14mm前後となるものが多い。全体としては大型品を主体とする傾向も窺われる。

破損品が全体の70%を占め、破損率が極めて高い。

破損部位に注目すると、器厚の薄い鍔身先端および末端を部分的に欠くものが殆どで、石鎌の機能に支障をきたさない程度の小さな破損である場合が多い。

② 石錐

53点出土しており、分類できたものは47点ある。つまみ部をもつもの(II類)が圧倒的に多く、その中でも錐部の短いIIa2類が卓越する。また、錐部の一側辺に折断面が認められるもの(IIb類)が一定量



n = 213

含まれている点も注目される。II b類は錐部を作出する際に折断技術を用いたと考えられるもので、七ヶ宿町小梁川遺跡(佐藤広史:1988)の前期後葉から中期中葉の石器群などにも認められる。小梁川遺跡では本類を不定形石器II D2類に含めているが、石錐を志向していた石器と結論付けている。通常の二次加工では錐部の作出が困難な素材に対しても、縁辺と鋭角に交差する折断面を設けることによって錐部が容易に作出されることは明らかで、折断技術を使用することで石錐の素材となる剥片の対象範囲を拡張できることが指摘されている(佐藤:1988)。

④ 尖頭器

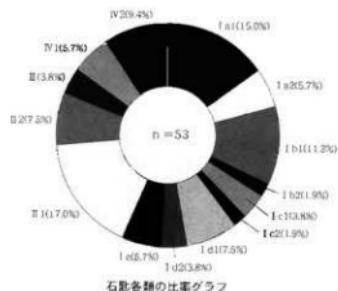
37点出土しており、分類できたものは32点ある。定形的な剥片石器の中で箇状石器に次いで出土量は少ないが、形態・大きさに各類でまとまりがある。両面加工のものが殆どで、基本的に丁寧な剥離が行なわれている。平面形が木葉状のもの(I類)と三角形状のもの(II類)が同数認められ、I 1類は長さ84~102mm・幅21~30mm・厚さ11~17mm、I 2類は長さ45mm前後・幅13~19mm・厚さ5~15mm、II a・II b2・II c類は長さ32~42mm・幅23~30mm・厚さ6~12mm、II b1類は長さ55mm前後・幅31mm前後・厚さ12~15mmに大半が収まる。I類はいわゆる「石槍」にあたり、II類は岡村道雄氏(1979)によって、尖頭部の作り出しや平面形態が石錐と類似性を示すが、大きさ・厚さ・重さ・加工状況などの点で、「石錐と異なる種々の属性をもった一群」と指摘されたものに相当する。II類については刺突具の機能が想定されており、広義の尖頭器に含まれるものである。但し、II c類は加工状況をみると剥離が粗く、自然面や節理面を残すことから未完成品の可能性もある。破損品の占める割合も高く、特にI 1類は75%が破損している。

⑤ 石匙

85点出土しており、分類できたものは53点ある。スクレイパー状の加工が施された刃部が綫長となるもの(I類)が56.6%を占め最も多い。横長となるものの(II類)の比率は24.5%である。形態と素材の利用法との間に特定の関係は見出せないが、刃部には片面加工と両面加工のものがあり、両面加工が主体である。ここでは、前期前葉の遺跡である名取市今熊野遺跡(小川:1986)に於いて指摘されている刃部綫長主体の傾向は残るが、刃部加工が主に片面加工となる傾向は認められない。

刃部の末端部が尖る形状のもの(I a・I b類)には、その尖端部にマツツが認められるものが多く、石錐を志向していた可能性がある。特にI a1類については秋田県上ノ山遺跡(大野他:1998)、山形県押出遺跡、岩手県遠野市新田II 遺跡(佐藤浩彦:2002)など縄文時代前期の遺跡で類例が報告されており、尖頭器的な用途を有した可能性が指摘されている。

また、つまみ部以外の縁辺に殆ど加工が認められないもの(IV類)も15.1%あり、精製品と粗製品との二極化が窺われる。同様の傾向は小梁川遺跡でも指摘されている。さらに、長軸長50mmを境に



大・小を分けたが、大型品は長軸60mm前後、小型品は長軸35mm前後にまとまる傾向があり、二分化が著しい。

⑤ 篦状石器

25点出土しており、分類できたものは21点ある。定形的な剥片石器の中で最も出土量は少ないが、形態・大きさに各類でまとまりがあり、比較的規格性の強い石器の可能性がある。I 1類は長さ55～65mm・幅33～45mm・厚さ11～26mm、I 2類は長さ38～43mm・幅33～42mm・厚さ15～24mm、II a・II b類は長さ70～85mm・幅30～45mm・厚さ10～20mmに大半が収まる。

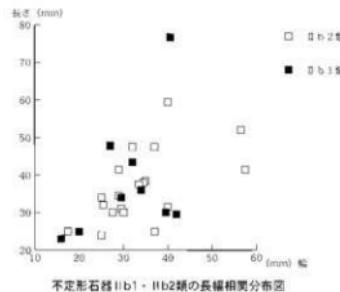
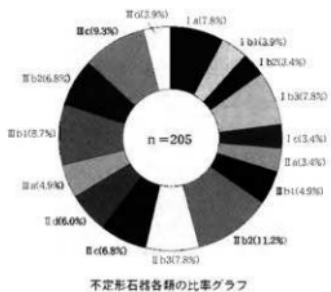
2. 不定形石器

320点出土しており、分類できたものは205点ある。各類の割合をみると、大きな偏りは認められず、形態に多様性がある。最も多かったのはII b2類で、11.2%を占める。また、素材の形態をあまり変化させないIII類も33.6%あり、二次加工によって必要とする特定の刃部のみを作出する志向も窺われる。

二次加工によってある程度素材の形態を変化させているI・II類の中で注目されるのがII b1・II b2の各類である。これらは不定形石器各類の中でも特に平面形態のまとまりが強く、大きさも長さ30～45mm・幅25～35mmの間に収まるものが多い。

II b1類は素材の鋭い縁辺を残し、他の辺を二次加工した石器である。二次加工は素材の打面部およびバルブを背腹面からやや奥まで入る剥離によって除去するかたちで行われており、加工が及ばない素材の鋭い縁辺には使用痕と考えられる小剥離や微細剥離痕が認められる。明らかにII b1類の刃部は、残された素材の縁辺であり、二次加工部位が機能刃部とはならない例である。類例は小梁川遺跡出土のII F類の中にみられ、ここでは二次加工の目的を刃溝しのためだけではなく、打面部を除去し着柄を容易にするための基部加工と推定している。

II b2類は素材の対向する2側辺に二次加工が行われ、他の辺は素材の打面や折断面で構成される石器で、平面形態は方形を基調とする。II b2類では二次加工部位が刃部となると考えられ、他の辺に施された折断調整は刃溝しを目的としていたと推測される。折断技術を使用することによって簡単に刃溝し加工と同じ効果が得られ、素材の形態も大きく変化させることが可能であり、折断調整は石器製



作において有効な加工技術であったと考えられる。折断技術を用いて製作された石器は「折断調整石器」として以前から注目されており(阿子島：1979)、縄文時代全般に普遍的に認められる(岡村：1979)と言われている。小梁川遺跡では前期後葉から中期中葉の時期に折断技術を有する石器が増加することが指摘されており、嘉倉貝塚でも本類の他、石鎌IIb類など折断技術を用いて製作されたと考えられる石器が出土している。さらに、意図的な加工かどうかを判断しかねるもの、不定形石器には折断面を有するものが多く、この傾向と一致する。

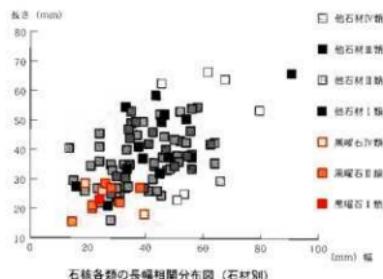
3. 石核

142点出土しているが、剥片と接合するものは殆ど認められず、剥片生産技術については不明な点が多い。分類できた97点の中では、多数の剥離作業面が設定され、これに対し任意に複数の打面を作出して剥片生産を進めるIV類の占める割合が52.6%と高く、剥片生産に規則性を見出せない。但し、全体に小形の原石を用い、それを更に両極打法によって分割して石核に使用する傾向が見受けられる。また、I・II類には剥片素材の石核が比較的多く認められ、剥離作業も数回に止まるものが含まれる。目的とする素材を得るために、剥片を適宜、石核としていたことも窺われる。

残核の大きさと石材の相関関係に注目すると、黒曜石製のものが長・幅ともに30mm以下の小型品に集中している。黒曜石製の石核は20点と比較的多く出土しているが、その80%にあたる16点は自然面を残し、類型も1面で剥離作業が行なわれるII類に偏る傾向がみられ。剥離作業自体もあまり進行していない。分割した原石を石核とし、剥離作業当初から石核が小型であったことがわかる。統いて黒曜石製の剥片石器は、石鎌22点、石錐・尖頭器各1点、楔形石器2点、不定形石器14点で、長・幅ともに25mm以下の小形品が大半を占めている。剥片にも同様の傾向が認められ、使用的痕跡を示す微細剥離痕を残すものもある。以上のことから嘉倉貝塚では、小形の黒曜石を石核とし、小形剥片石器の素材、特に石鎌の素材生産を目的として剥離作業が行なわれていたと考えられる。黒曜石は原产地推定の分析から、宮崎町湯ノ倉・秋保町土蔵・岩手県水沢市折居町・山形県東田川郡羽黒町今野川の4地域のものが持ち込まれていることが判明しており、複数の地域から供給されていたにも拘らず、石核や製品の傾向はほぼ一致している。つまり、黒曜石を素材とする石器生産に於いては、石鎌を中心とする小形剥片石器の製作を目指し、意識的に小形の原石を選択していた可能性が指摘される。

4. 磨製石斧

34点出土しており、分類できたものは20点ある。完形品は6点と少なく、破損率が高い。破損品に

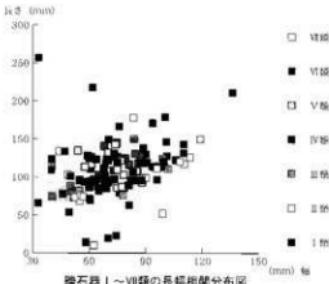
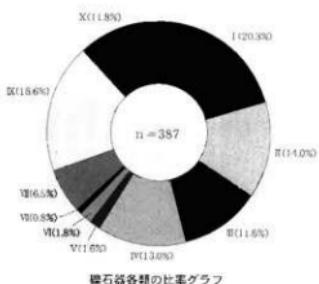


は敲打痕や剥離面が認められ、これらの痕跡を製作・使用時のものと厳密に区別することは難しいが、敲石や楔として再利用された可能性がある。また、図版342-1は刃部側からの剥離痕が残り、その後に研磨が施されており、他のものに比べ寸詰まりで、刃角が大きくなっている。破損後に刃部が再生されていると考えられる。図版153-4は刃部に片減りが認められる。なお、I a類に含まれる図版342-1には擦り切りの痕跡も認められ、他のI a類についても製作にこの技術が使用された可能性がある。

大型品(I類)と小型品(II類)の分化が明確で、前者ではI a類が長さ100~110mm・幅40~50mm・厚さ25mm前後、I b類が長さ150~180mm・幅40~60mm・厚さ35mm前後にまとまるとして推定され、緑色片岩・砂岩製のものが多い。小型品のII類は長さ60~80mm・幅20~40mm・厚さ10mm前後に収まり、片岩製のものが主体である。

5. 碓石器

礫石器は合計387点出土しており、磨凹敲石(I~VII類)については2分の1以上残存するもの244点を分類している。量比をみると、磨凹敲石ではI~IV類が多く、V~VII類が極めて少ない。両者の出土量には大きな隔たりがある。これは、基本的に磨面・凹み・敲打痕の各痕跡が複合するものが多く、磨面を除く单一の痕跡と凹み・敲打痕の組合せが殆ど認められないことを示している。礫石器は使用痕の違いによって分類しており、殆ど加工されることがないため、素材の選択段階で形態が規定されている。そこで、量比の差と選択された素材に因果関係があるかどうか、完形品について各類の長幅の分布・重量・石材の各属性から検討してみた。その結果、各類とも長さ90~130mm・幅60~90mmの範囲にまとまる傾向が窺われ、重量はやや散在するものの、600~900gの範囲に収まるものが多い。選択された石材は輝石安山岩もしくは安山岩の円・椭円塊が大半を占め、類別での偏りは認められない。つまり、類型と選択された素材との間に明確な相関関係は見出せず、全体としてほぼ同じ素材を選択し、使用していた傾向が看取される。よって、嘉倉貝塚の磨凹敲石I~VII類の有する使用痕の属性は素材の選択段階で決定されていたのではなく、磨る・碎く・敲くといった使用を重ねる中で変移していく結果であり、磨凹敲石はこれ一連の作業をみたす道具として認識され、多機能に使い分けられていたと考えられる。これは、今熊野遺跡、小梁川遺跡などで行われた磨凹敲石類



の分析結果と一致している。単一の使用痕を残すものの中で磨石(1類)が多い理由を考える上で、I類の殆どが複数の磨面をもち、特に側面にやや粗い磨面(表・裏面は基本的に表面が滑らかで光沢のある磨面)を有するものが34%を占めることは注目される。この痕跡の違いは、磨るという行為の中でも表裏面と側面で使い分けがあったことを示唆しており、これらについては多機能的なものに含まれると考えられる。なお、形態が極めて大型で、機能面が凸面となる磨石3点(図版139-1・図版369-6・図版370-1)は、本類に含めたが、手に持つて使用したとは考え難く、石皿的な機能が想定される。

VII類は断面が三角形状を呈する縦長の礫を素材とし、その鋭角部に幅が狭くやや粗い磨面が認められる石器で、25点出土している。完形品は4点と少ないが、長さ150mm前後・幅70mm前後・厚さ60mm前後、重さ800g前後となるものが多いと推定され、石材は輝石安山岩・安山岩が多用されている。鋭角となる稜線部に残る磨面の幅は平均15.5mmで、10mm前後と20mm前後に集中し、この磨面が2面認められるものもある。磨凹敲石I～VII類とは異なり、素材の選択と使用痕の相関関係が強い礫石器で、ある程度規格化されていた可能性もある。稜線部の磨面以外の磨面・敲打痕など複数の使用痕をもつものが全体の84%を占め、多機能性がある点では他の磨凹敲石と共通している。このような形態の礫石器は岩手県遠野市新田II遺跡(前期前葉～中葉、佐藤浩彦:2002)、岩手県峰山牧場I遺跡B地区(前期前葉、阿部:2000)など縄文時代前期の遺跡で注目されており、主に鋭角部を特定の作業に用いる目的で、素材を選定した石器と考えられる。新田II遺跡では、その用途を木材加工時に使用する石鉋的なものと推測している。

石皿(IX類)は72点出土している。出土量が多く礫石器類の18.6%を占めるが、その86%は破損資料で、完形品は10点と少ない。明らかに大型で厚手のものと小形で薄手のものがあり、前者には平坦な機能面の他、側面に整形もしくは使用の結果生じたと考えられる連続した浅い凹みや敲打痕が認められるものが多い。主に輝石安山岩・安山岩・砂岩を素材としており、前者では輝石安山岩・安山岩、後者では砂岩が選択される傾向にある。機能面は大半が平坦面で、僅かに凹面となるものも含まれる。

6. 石材

石器各類と石材の関係をみると、剥片石器には頁岩、磨製石斧には緑色片岩・砂岩、礫石器類には安山岩・輝石安山岩が主に使用されており、これまでに知られている縄文時代の石材利用とほぼ同じ傾向を示している。なお、石製品は片岩・ホルンフェルスを用いたものが多い。

剥片石器及び石核の石材に注目すると、頁岩製のものが圧倒的に多く、剥片類や碎片を含めてもこの傾向は変わらない。他の石材としては、黒曜石・メノウ・凝灰岩・流紋岩・安山岩などが挙げられる。黒曜石は6.5%で、チップを除く全剥片石器でみても6.7%を占め、その割合の高さが目立つ。これ以外は極少量の出土である。なお、前述の黒曜石を除き、特定の器種に偏って用いられる石材は認められない。

黒曜石については蛍光X線分析による原産地推定を株式会社パレオ・ラボに委託して行っている。分析を行った試料は24点で、黒曜石全体を肉眼観察によって特徴の違いから選別したグループのうち、出来る限り遺構内から出土したもの(遺構に共伴するものは無い)と、黒曜石の剥片石器(石皿3点・石錐

1点・不定形石器1点)、石核(1点)、剥片、チップがまとめて出土しているSI320住居跡1層(土器・石器・動物遺体を多量に含む遺物廃棄層)の遺物を中心にサンプリングした。その結果、嘉倉貝塚の黒曜石には4地域のものがあり、その供給源は加美郡宮崎町湯ノ倉・仙台市太白区秋保町土蔵・岩手県水沢市折居町・山形県東田川郡羽黒町今野川と推定された。SI320住居跡1層の試料については全て湯ノ倉産と推定されている。

註1：SK34は縄文時代前期後葉の土堆とみられるが、断面を観察すると、中央最上部に堆積した1～3層は土色が下位の層と大きく異なっている。さらに、3層は下の層を切るような状況で堆積しており、調査時には認識できなかったものの、この部分が上部から掘り込まれた新しい時期の土壤であった可能性もある。

(3)石製品

石製品は35点あり、この他に石製品の未完成品もしくは破損品の可能性があるものが9点出土している。主なものについては種類別に述べ、他はまとめて記載する。

a　玦状耳飾

玦状耳飾は基本層序第2層から1点(図版341-10)出土したのみである。滑石製で、長さ33.0mm×幅29.6mmのやや丸みが強い隅丸方形を呈し、厚さは6.1mmある。中央孔と切れ目は表裏面から穿孔・擦り切りされており、径10.0mmの中央孔はやや上寄りに位置し、切れ目が長くなっている。なお、表面は丁寧に研磨されて光沢をもつ。基本層序第2層には主に大木5～7式の土器が含まれており、土器から玦状耳飾の時期を限定するのは難しい。

宮城県内では七ヶ浜町大木畠貝塚・仙台市長崎遺跡・山田上ノ台遺跡・北原街道B遺跡・七ヶ宿町小糸川遺跡などから玦状耳飾が出土しており、北原街道B遺跡(工藤：1994)のものが最も今回の出土品に近い形態を示している。北原街道B遺跡の玦状耳飾は大木4・5式土器と一緒に出土していることから縄文時代前期後葉のものと考えられており、本遺跡のものも同時期の可能性が高い。

また、玦状耳飾の研究では加工方法と平面形態が密接に関わり合っていると考えられており、樋口清之氏(1933)は形態の変化によって玦状耳飾をA～F類の6型式に分類している。藤田富士夫氏(1992)はこの分類を用いて、現段階での形態変遷による編年を行っている。本遺跡出土のものをこれに当てはめると、前期後半とされるB型に近い形態となり、類例からみた時期と矛盾しない。

b　装飾品

2点出土している。

図版350-3は片岩製である。長さ78.0mm・幅27.2mm・厚さ8.3mmで、両側辺の中央が浅く内湾する不整な長方形形状を呈し、断面形は扁平となっている。上端近くには径3.0mmの穿孔が認められる。製作工程を観察すると、表裏面の研磨よりも周辺部からの剥離・敲打痕の方が新しく、石剣など薄手の石製品の破損品を再加工したものとの可能性がある。ピット(P2106)からの出土遺物で、時期を限定する

ことは難しく、前期後葉から中期初頭の中で理解しておきたい。

図版70-4は凝灰岩製で、欠損品である。平面形は円形に近かったと推定され、断面形は扁平である。中央やや上寄りに、穿孔が左右に並んで2ヶ所ある。径4.0・5.0mmの穿孔は表裏面から行なわれており、両面ともその間には「T」字状の線刻が認められる。表面は研磨されているが、研磨の粗い部分では擦痕が目立つ。装飾品としたが、詳細は不明な点が多い。SI77住居跡1層から出土しており、大木5式期のものである。

c 石劍

素材を劍状に加工したものを本類とした。12点出土しているが、完形品は1点のみで、破損品が多い。全て片岩製である。これらの製作方法は素材を打ち欠いて形態を整えた後、研磨によって表面全体を仕上げている。研磨痕の方向は長軸に対して斜めのものが多く、完形品や残りの良い破損品を見る限り、柄頭や刃闘の作り出されているものは無く、線刻が施されているものも無い。全体の大きさについては比較できかねるが、残存部位の幅でみた場合、大きいものと小さいものがある。なお、双方の厚さに大きな違いは認められない。

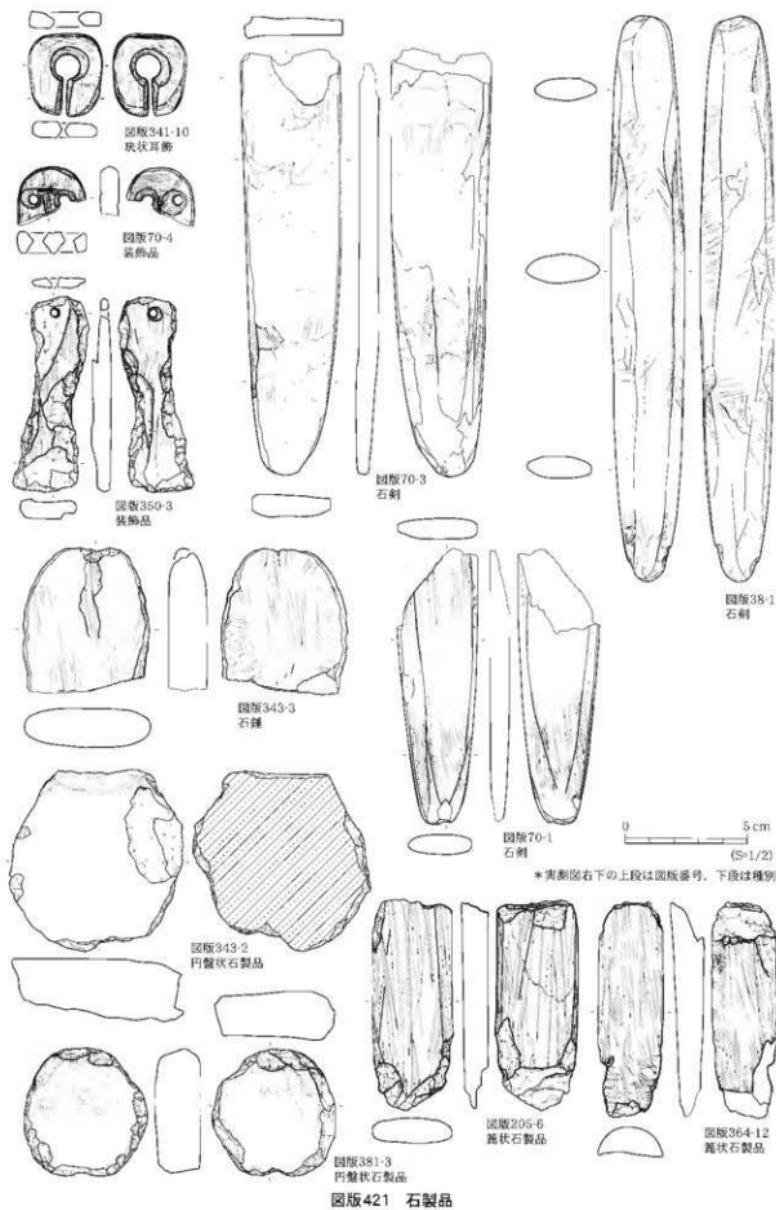
大きいものは幅36.9～41.5mmに收まり、片側もしくは両側の側辺が面取り状に仕上げられているものがある。小さいものは幅29.7～34.0mmに收まり、大半が幅31.0mm前後である。両側辺に添って短い斜め方向の研磨が施されて、鎬を付けるようなたちに仕上げられるのが特徴である。なお、図版70-3は表面に素材整形時の剥離痕を多く残すことから、製作途中の未完成品が破損した可能性がある。

これらの時期についてみると、SI77住居跡1層出土の1点(図版70-2)・5～8層出土の2点(図版70-1・3)とSX140遺物堆積層第2層出土の2点(図版333-7・8)は一緒に出土した土器から大木5・6式期のものと考えられる。また、SI45住居跡出土の完形品(図版38-1)は住居改築後の周溝埋土から出土しており、遺構の重複関係から大木5式期に属するものと判断される。その他の石劍について時期を特定することは難しいが、前期後葉から中期初頭の中で理解できるものと考えられる。

d 石鍤

扁平な円・橢円礫の1ヶ所もしくは対となる2ヶ所を打ち欠いた石製品を本類とした。鍤として使用したと推定されるが明確ではない。4点出土している。他にも縁辺が欠けているが、意図的な剥離によるものか判断できなかったものが3点あり、これらについても石鍤の可能性がある。図版343-3は凝灰岩製の橢円礫を素材としたもので、欠損品である。片面の長軸線上には浅い溝状の凹みが残り、その上端を打ち欠いている。表裏面には擦痕、周縁部には敲打痕が認められ、製作時にある程度整形されていたと考えられる。他のものについては打ち欠き以外に加工痕や使用痕を認識できなかったが、安山岩もしくは輝石安山岩の円・橢円礫を素材としている。これらの遺物は出土状況からみて時期を限定することが難しく、前期後葉から中期初頭の中で理解しておきたい。

e 円盤状石製品



扁平な礫の周囲を打ち欠いて円盤状に整形したものを本類とした。2点出土しており、図版343-2は節理面で扁平に剥離した安山岩製の礫、図版381-3は盤状の砂岩礫を素材としている。前者は直径約75.0mm、厚さ25.6mm、後者は直径約51.0mm、厚さ19.8mmで、いずれも両極打法によって周辺部を剥離してほぼ円形に整形している。出土状況や特徴から遺物の時期を特定することは難しい。

f その他の石製品

前述以外の石製品としては石棒類3点、箆状石製品2点、線刻礫？1点、不明石製品5点が挙げられる。

石棒類とした3点のうち図版381-5は片岩製で、敲打後、丁寧な研磨により断面円形の棒状に仕上げられており、頭部は膨らんで平面形が角の丸い台形状になる。調査区中央部のSI78住居跡南側倒木痕から出土しており、形態的な特徴からみて縄文時代晚期のものと考えられる。他の2点はホルンフェルスを素材とし、大型の棒状で、断面は半円もしくは楕円状となる。表面には研磨以前の敲打痕を多く残す。調査区中央の基本層序第2層と確認面から出土しているが、特徴から時期を特定することは難しい。

石剣・石棒の破損品を箆状に再加工したものを箆状石製品とした。形態的には骨箆に類似するものである。図版364-12は片岩製で、破損した石棒を薄く剥離して細長い破片とした後、剥離面を研磨しており、断面は蒲鉾形となる。端部への加工は、欠損のため不明である。図版205-6は粘板岩製の右剣を再加工したもので、端部に剥離が加えられている。いずれも出土状況や特徴から遺物の時期を特定することは難しい。

線刻礫？とした1点(図版381-6)は半割した扁平な安山岩製の楕円礫の片面に、同方向の浅い線刻が多数認められるもので、それ以外の加工はない。不明石製品5点はホルンフェルス製で、整形のための敲打痕や研磨痕を残すが、製品を特定できなかったもので、未完成品の可能性もある。いずれの遺物も出土状況からは時期を特定できない。

(4) 土製品

嘉倉貝塚から出土した土製品は85点で、その内訳は土偶56点、イチジク形土製品6点、耳飾り5点、円盤状土製品6点、袖珍土器7点、その他の土製品11点である。以下、各種類ごとにその特徴と時期について説明する。

a 土偶(図版421～434)

特徴：56点出土している。図版431-6・8を除き、その殆どが板状の土偶である。完形品ではなく、辛うじて全体の形態を知り得るものは図版422-1と図版424-1のみである。ここでは、まず、その2点について、法量および形態および施文技法等の特徴を詳述し、その後、他の破片資料について、各部位毎に述べることとする。

図版422-1：長さ約15.8cm、最大幅(腰部)約8.2cmの土偶である。厚さは、約1.0cmと扁平で板

状を呈する。頭部が山形に尖り、顔の表現はない。肩から腕部にかけては先端部を欠くが、左右に短く突出し、胸部中央には、径約2.4cm、高さ約0.6cmの丸いリング状の高まりを有する。胴部はくびれて、下半は腰部を示すように丸くなっている。脚部は中央に抉りを入れて0脚状になっている。文様は施されず、無文である。

図版424-1：長さ約18.2cm、最大幅(残存肩部)約9.8cmの土偶である。厚さは、約1.5cmと薄く扁平である。頭部は約4.7cm×約2.0cmの楕円形を呈し、径約2～3mmの貫通孔が3個穿たれている。肩から腕部にかけては短く尖り、両肩の付け根部分に一对の径約3～4mm貫通孔がみられる。胸部中央には、凹みの痕跡が認められる。胴部はくびれて、脚部にかけて丸くなっている。脚部は左脚部を欠損するが、中央に小さな抉りを入れ、0脚状になっているものと残存部から推定される。文様は前面は円形竹管による連続刺突文と沈線文、背面が沈線文と半截竹管による連続刺突文と平行沈線文によって施文されている。

次に、その他の破片資料について、各部位毎に説明する。

頭部資料：頭部形態が判明するものは9点ある。

これらには

(a)板状を呈し、

- ① 頭部が山形に尖るもの(図版423-1・2・7)
- ② 楕円形あるいは逆台形を呈し、数個の貫通孔が穿たれるもの(図版426-1)
- ③ 頭部が丸く突き出すもの(図版426-2)
- ④ 頭頂部が凹み、中央部に盲孔や貫通孔が穿たれるもの(図版433-1・2)

(b)首部は円柱状で、頭部は円盤状を呈し、頭頂部が広く平らなもの。1個の貫通孔が穿たれている(図版432-8)。

(c)首部は円柱状で、頭頂部にかけて次第に扁平になるもの。全面に刺突文が施され、顔は沈線による菱形文とその中央に円形の貼付文が施文されている(図版432-6)。

とがある。

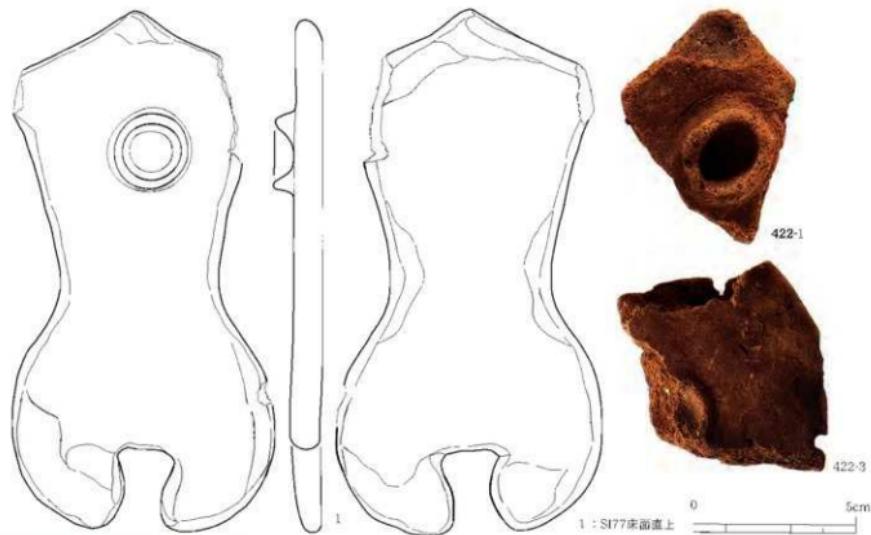
形態的にはa-①は図版422-1に、a-②は図版424-1に属する。

尚、a-④については図版433-1に丸いリング状の高まりを有していたと考えられるような粘土の剥離痕跡が認められることや、肩部と推定される部位に貫通孔が穿たれていることから頭部資料として提示したが、これらについては他遺跡においても類例に乏しく、土器の突起等の可能性も残されているものと考えられる。

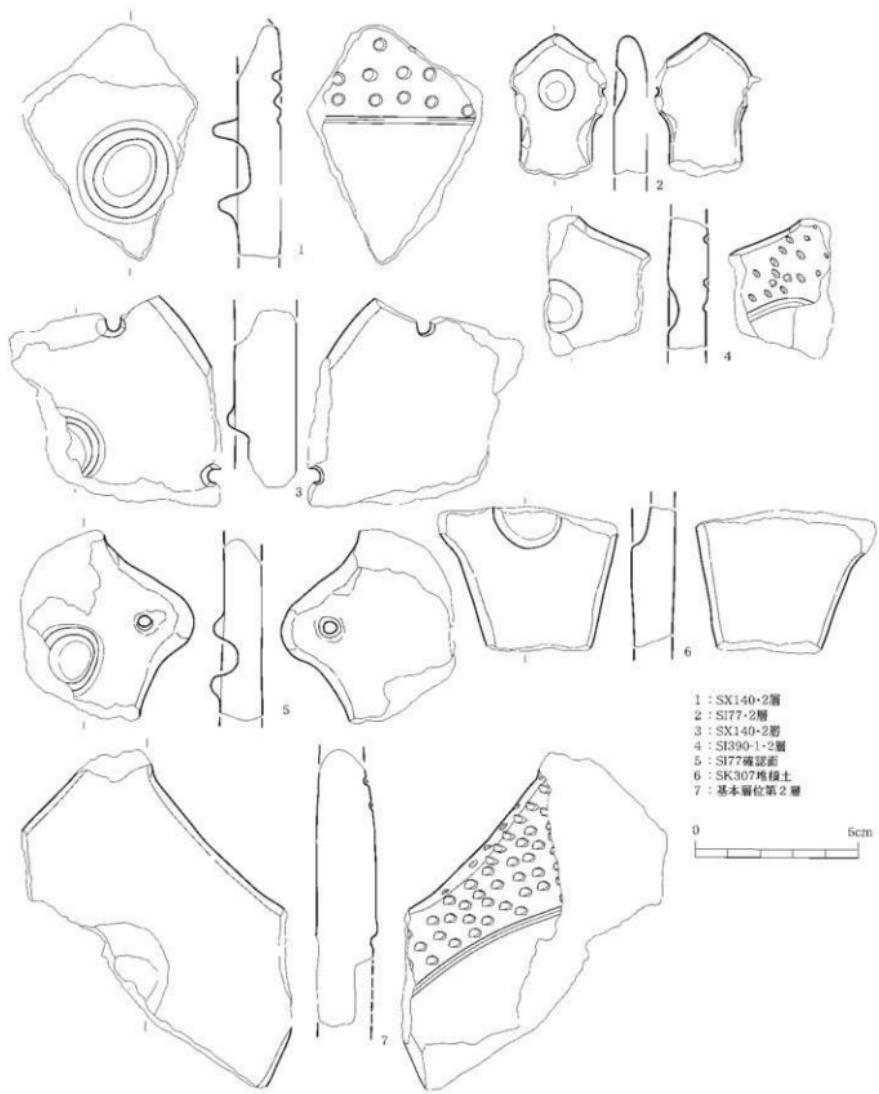
腕部資料：腕部が残存するものは20点ある。すべて板状で、これらには、

- ① 短く左右に突出し、腕部、肩部との境が不明瞭なもの
(図版423-5、図版424-2・4、図版426-1～7)
- ② 下方に湾曲し、腕部、肩部との境が明瞭なもの(図版428)

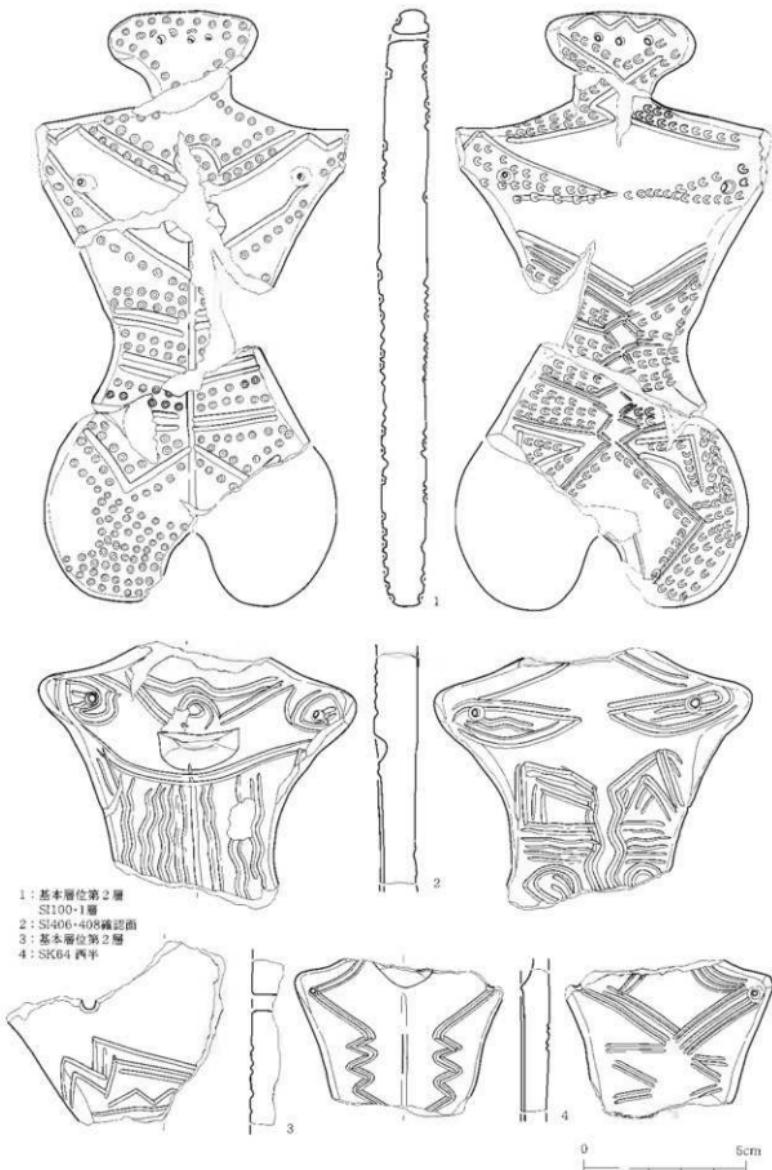
とがある。



図版422 土偶(1)



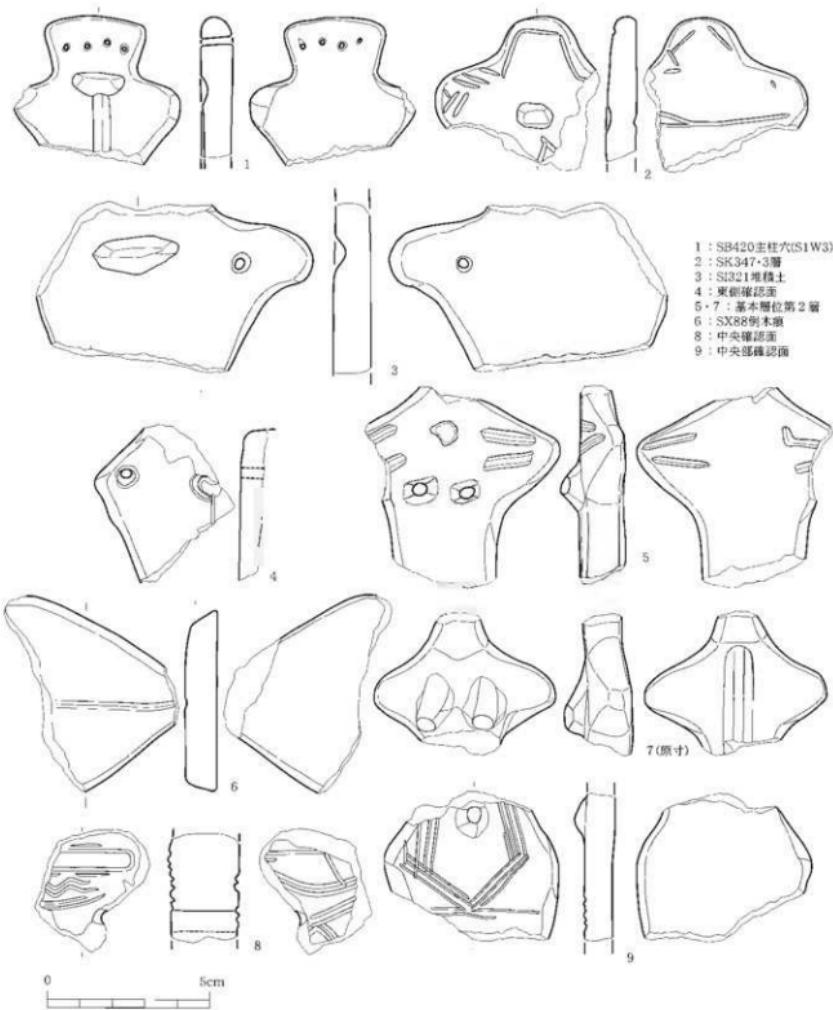
1 : SX140-2層
 2 : SJ77-2層
 3 : SX140-2層
 4 : SJ390-1-2層
 5 : SJ77確認面
 6 : SK307堆積土
 7 : 基本層位第2層



図版424 土偶(3)



图版425 土偶(4)



図版426 土偶(5)



図版427 土偶(6)

形態的には①は図版422-1や図版424-1と近い。

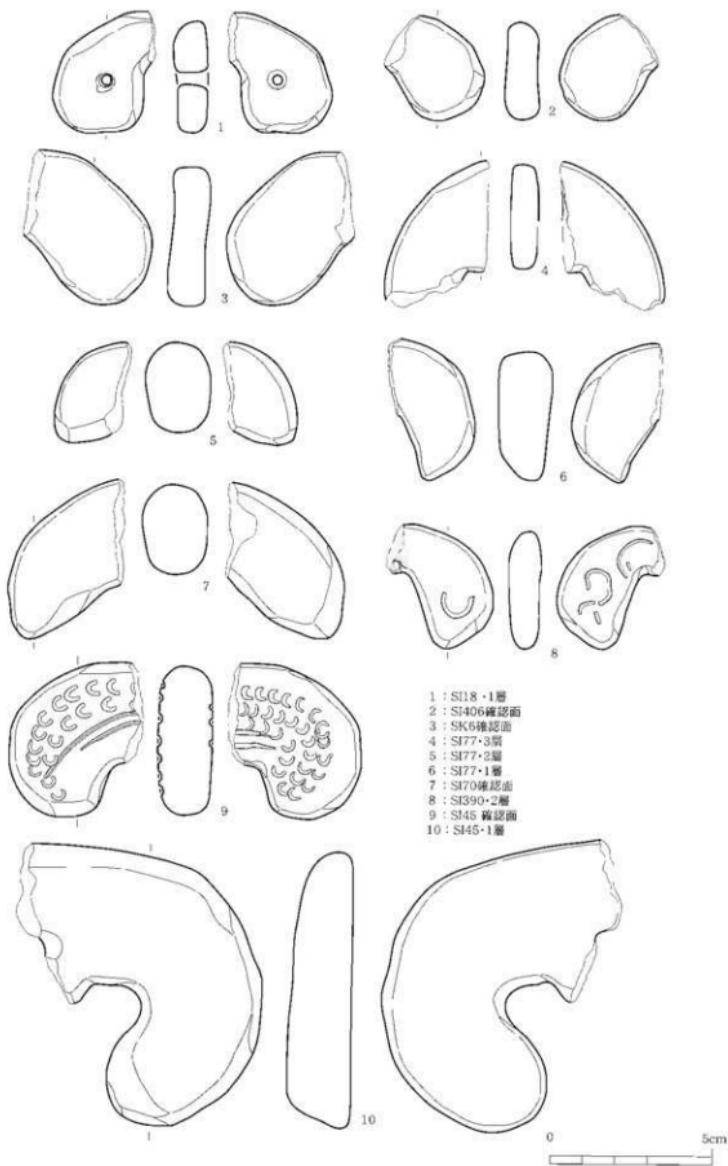
②については体部が残存するものは出土していない。先端部に貫通孔が穿たれるものもみとめられる(図版427-1)。文様は無文のものが殆どで、一部、半截竹管による連続刺突文と平行沈線文が施されるものもある。(図版427-8・9)

体部資料: 体部が残存するものは30点ある。すべて板状で、これらのうち、比較的残りの良いものを見ると

- ① 胸の中央に円形の凹み、あるいはリング状の高まりがめぐるもの(図版422・423)
- ② 胸の中央に稍円に近い形の凹みを有するもの。(図版424-2・4、図版426-1～3)
- ③ 膨らんだ乳房の表現があるもの(図版426-5・7)
- ④ 腹部に1個の突起がつくもの(図版426-8)

とがあり、判別のつくものは、いずれも胸部中央はくびれて、下半は腰部を示すように丸くなっている。形態的には①は図版422-1に、②は図版424-1に属する。また、①・②の中には両肩の付け根部分に一対の貫通孔がみられるものもある(図版423-2・3・5、図版424、図版426-3・4・8)。

文様は①は無文ないし、肩部背面に沈線文と円形刺突文が施されてるものとがある。②は多くが沈線文や半截竹管による平行沈線文が施されており、一部、無文のものも認められる。③は図版426-5は肩部背面に沈線文が施されており、胸部に不整形の凹みが認められる。図版426-7は背面に1本の



図版428 土偶(7)



図版429 土偶(8)

太い沈線が認められる。④は前面が半截竹管による平行沈線文で施文されており、背面は無文である。他は小破片の為①～④いずれに属するか不明である。

脚部資料：脚部が残存するものは11点ある。下端部の形態をみると

(a) 板状を呈し、

① 下端中央に小さな決りを入れ、外側は腰部にかけて丸く膨らみO脚状になるもの。

(図版432-1・2)

② 下端中央中央に小さな決りを入れ、外側は腰部にかけて直線的に屈曲するもの。

(図版432-3)

(b) ①②と比べて厚みがあり、やや柱状に近いものである。下端はやや広がり、平坦となっている。(図版432-7)

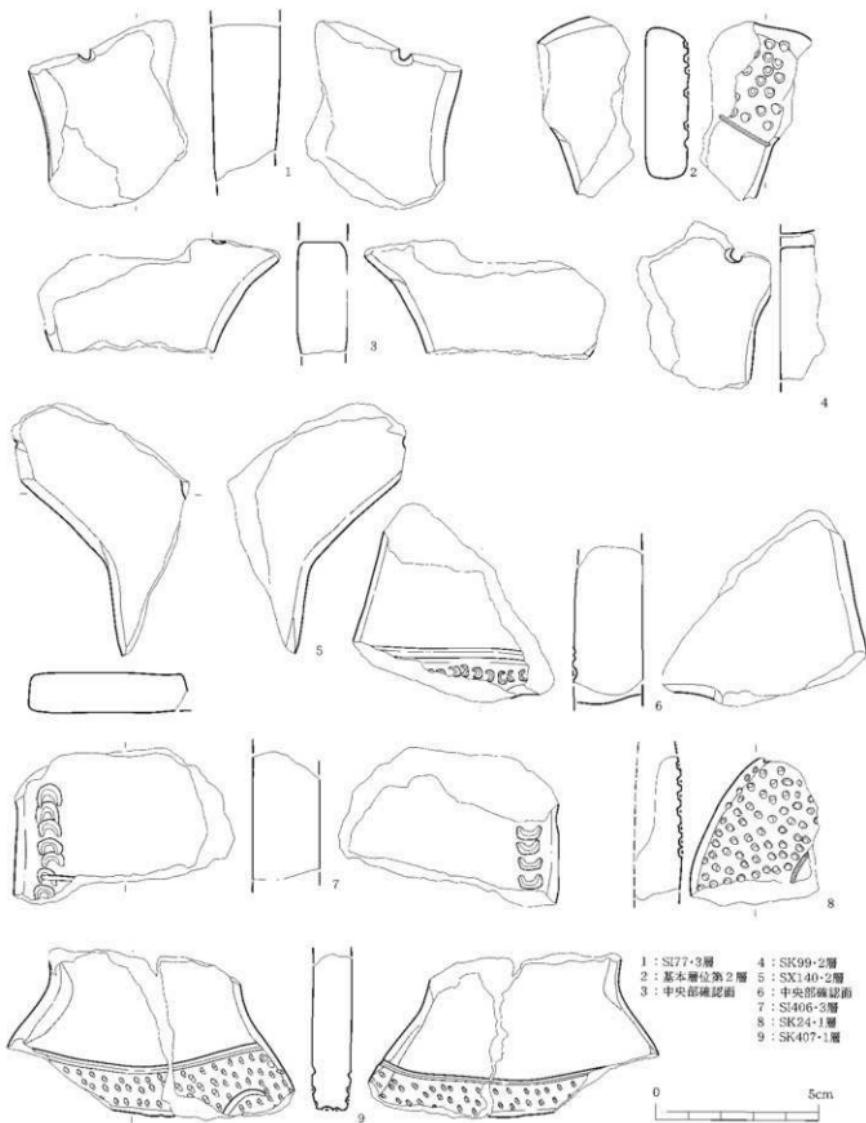
(c) 脚のくびれ部から上半身と下半身に折れており、臀部の表現があるもの(図版432-5)

がある。形態的にはa-①は図版422-1、図版424-1と同様である。

文様は図版432-1・2は前面に刺突文、3は両面に半截竹管による平行沈線文が施され、付け根の部分には貫通孔が穿たれている。図版432-5は腰から脚部上半にかけての破片である。端部の形態は不明であるが、胸部には正中線が表現され、背面には背骨を表現したと考えられる沈線が認められる。脚部は沈線文が施されている。7は無文である。

尚、図版434-3～6については体部まで残存するものは出土しておらず、今回出土した資料において頭部あるいは脚部の判別を明確にすることはできなかった。宮城県糠塚貝塚出土資料に同様の脚部が認められることから、今回は脚部として提示したが、資料に乏しく、図版422-1のように山形に尖る頭部等の可能性も残されているものと考えられる。今後の資料の増加を待ちたい。

時期：今回出土した土偶の特徴は、その大半が県内では迫町糠塚貝塚や涌谷町長根貝塚などの縄文時代前期後葉から末期に位置付けられる資料に類似する。しかし、該期の土偶の編年は土器との共伴



図版430 土偶(9)



図版431 土偶(10)

例が少なく、現在のところ定まっていない。また、今回の出土資料の内、遺構に伴うと考えられるのは大木5式期のSI77床面直上から出土した図版421-1のみで、他は遺構堆積土や確認面等から出土した小破片であることから、遺構の時期をそのまま土偶の時期に当てはめることは困難である。したがって、ここでは、各出土遺構毎に、土偶の特徴や一緒に出土する土器の時期的な位置付けをもとにじて、各資料の時期について検討する。

[SI77住居跡出土土偶]

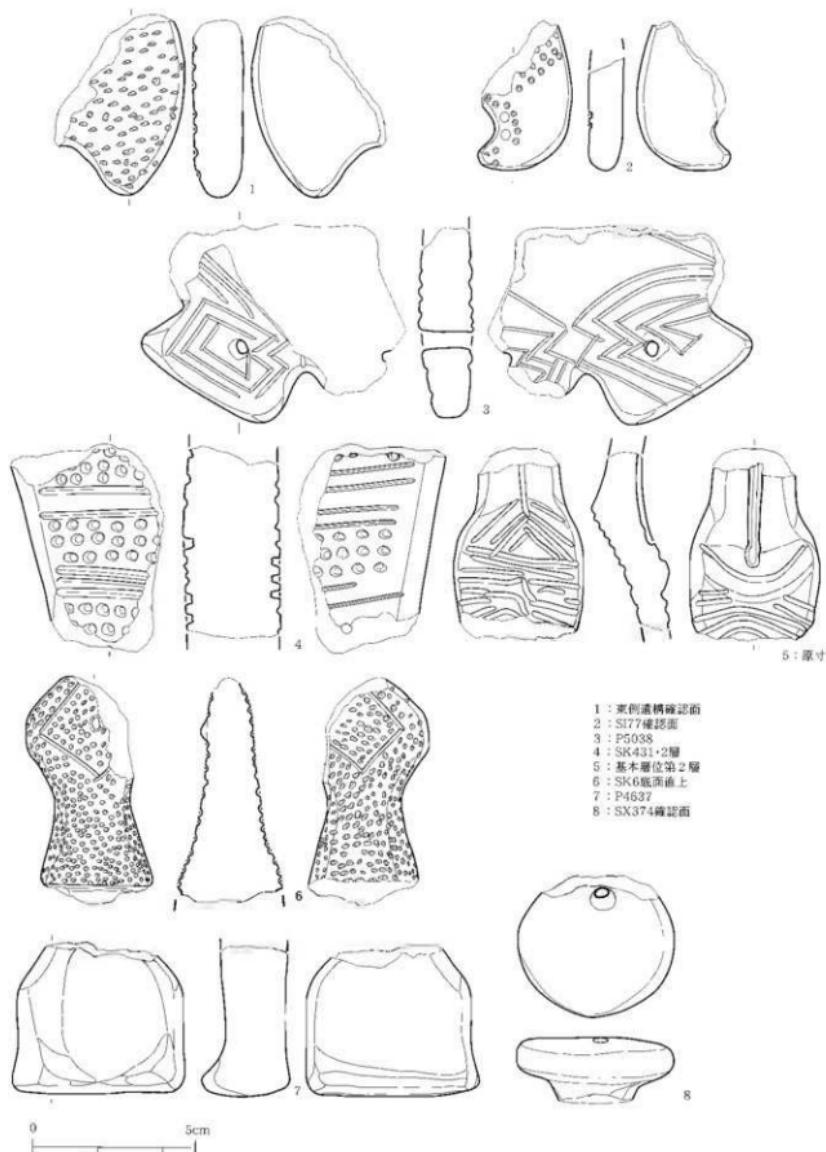
図版422-1、図版423-2・5、図版428-4～6、図版430-1、図版432-2が出土している。床面直上層から出土した図版421-1については、SI77床面出土土器とほぼ同時期の大木5式期に比定できるものと考えられる。その他については、大木5・6式土器が伴出する堆積土や遺構確認面出土遺物であり、概ねその時間幅に収まるものと考えられるが、特に図版423-2・5は、無文で板状を呈し、胸部にリング状の高まりや、円形の凹みを有する等、図版422-1と近似した特徴を有しており、同じ大木5式期に比定できる可能性がある。

[SI100住居跡出土土偶]

図版424-1の頭部がSI100堆積土1層から出土している。体部以下は近接して、その上層に堆積する基本層位第2層から出土したものである。上偶の時期としてはSI100堆積土1層に伴出する土器が大木5・6式期のものであることから、該期の時間幅に収まるものと考えられるが、半截竹管を多用する施文方法からみると、大木6式期に比定される可能性があるものと考えられる。

[SI45住居跡・SK 6・24・407土壙出土土偶]

図版427-10がSI45堆積土1層、図版431-6がSK 6底面直上層、図版433-4が堆積土1層、図版



圖版432 土偶(11)



図版433 土偶(12)

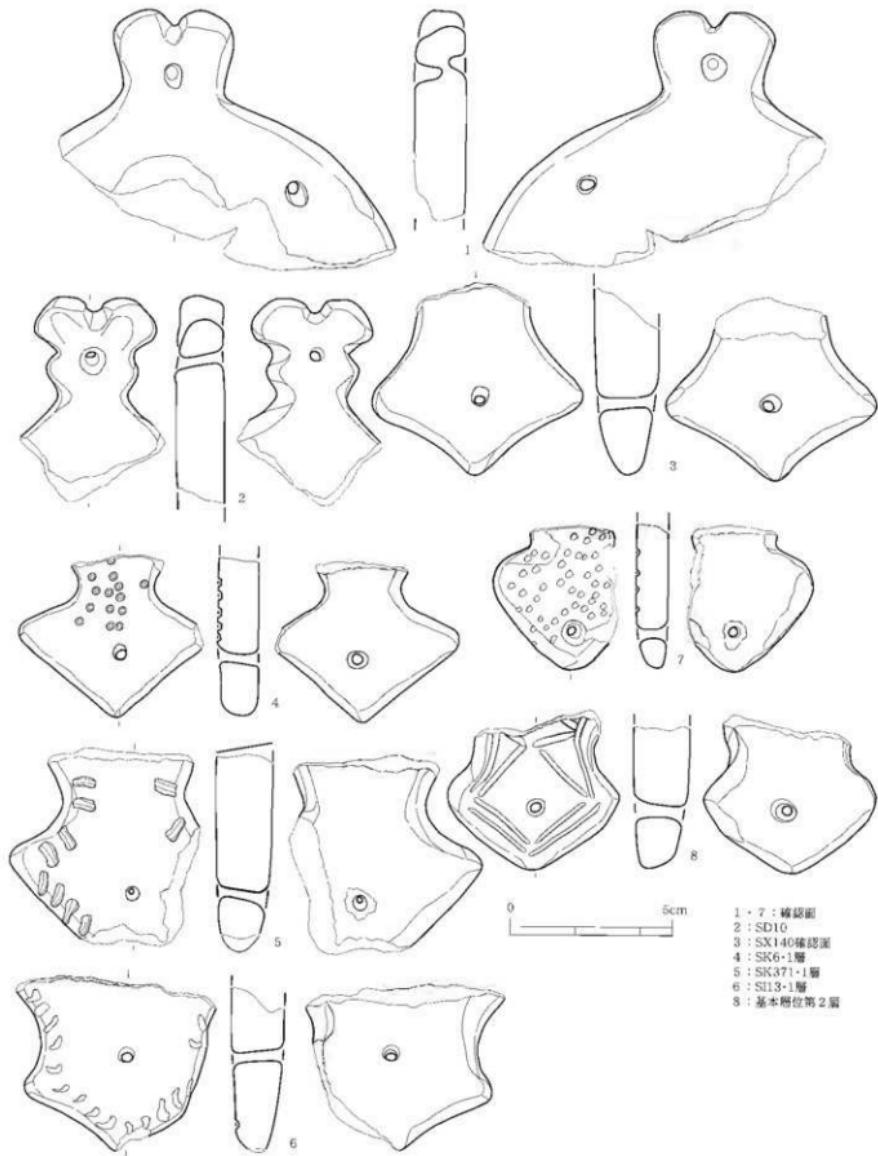
429・8がSK24堆積土1層、図版429・9がSK407堆積土1層から出土している。これらについては、伴出する土器が大木4・5式期のものであり、概ねその時間幅に収まるものと考えられる。

[SI390・406・408住居跡、SK99土壤、SX140遺物堆積層出土土偶]

図版423・4と図版428・8がSI390堆積土1・2層、図版430・7がSI406堆積土3層、図版423・1・3と図版430・5がSX140第2層、図版430・4がSK99堆積土2層から出土している。これらは伴出する土器が大木5・6式期のものであることから、概ねその時間幅に収まるものと考えられるが、図版423・1・3・4については胸部に円形の凹みを有し、特に1・3には周囲にリング状の高まりがめぐる図版422・1と同様の特徴を有しており、大木5式期に比定できる可能性がある。

[他の土偶]

土器との共伴がない事や基本層位第2層、遺構確認面、倒木痕の他、古代や縄文時代晩期以降の遺構から出土したものであり、厳密な時期の比定は困難である。ただし、胸部に円形の凹みやリング状の高まりを有すると考えられる図版423・6・7は図版422・1と、施文方法に半截竹管による平行沈線文や刺突文が多用される図版424・2～4、図版426・4・8、図版432・3や頭部に貫通孔を有する図版426・1については図版424・1とそれぞれ近似した特徴を有しており、これらと各々同時期に位置づけられる可能性のあるものと考えられる。また、図版432・5・7・8については、中の内A遺跡のような大木7式期のものに類似が認められることから、概ね当該期のもの可能性がある。



1・7：確認面
 2：SD10
 3：SX140確認面
 4：SK6-1層
 5：SK371-1層
 6：SU13-1層
 8：基本標位第2層

図版434 土偶(13)－その他－



図版435 土偶(14)

b イチジク形土製品(図版436)

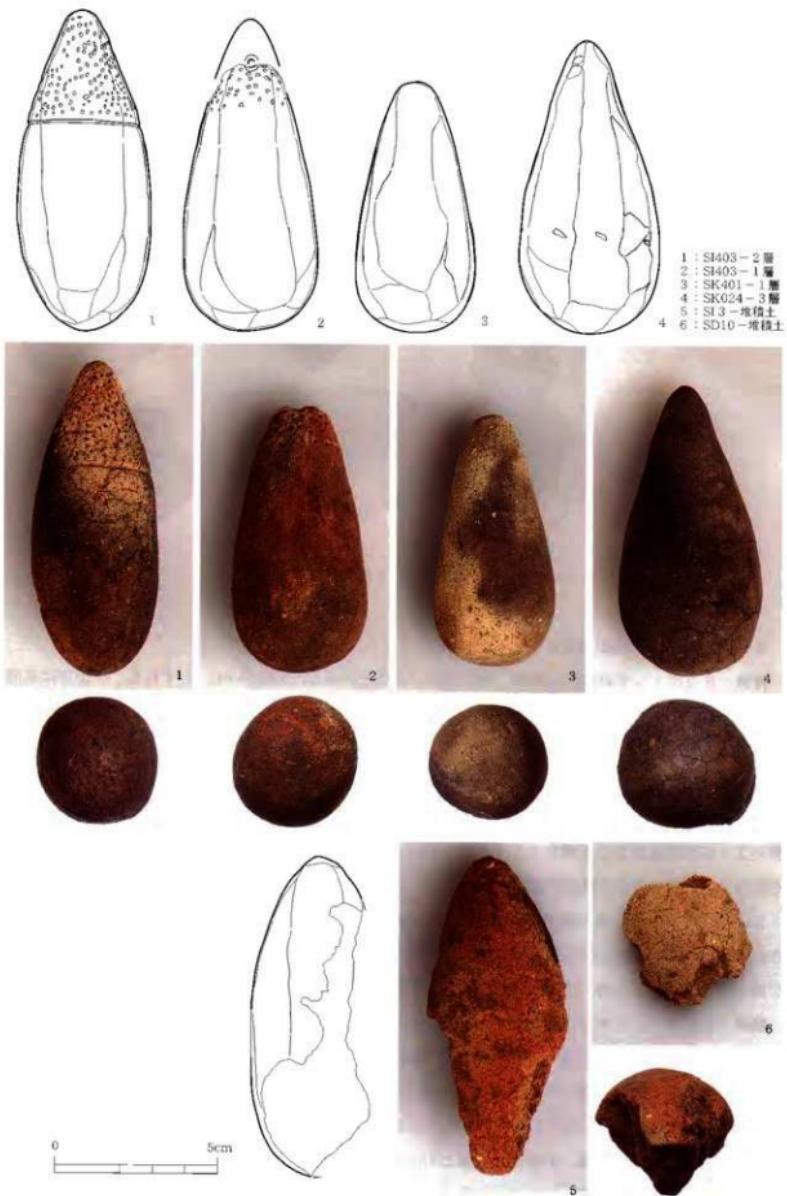
特徴：6点出土しており、その内、残りの良い5点を図示した(図版436)。いずれも、平面形は基部から先端部に向かって細くなる、いわゆる無花果に似た形態をしている。断面形は円形である。

1は長さ約9.6cm、最大幅約4.0cmで、完形品である。中央からやや先端寄りに沈線が1条巡り、その沈線文を境に先端側は全面に刺突文が施され、基部側は無文で丁寧なミガキが施されている。

2は先端部のみ欠損しており、残存長約8.2cm、最大幅約4.2cmである。1と同様、先端側は全面刺突文、基部側は無文で丁寧なミガキが施されている。また、残存する先端部には焼成前に穿孔された径約4mmの貫通孔の痕跡が認められる。

3は長さ約7.7cm、最大幅3.7cm、4は長さ8.9cm、最大幅4.5cmで、ほぼ完形品である。5は長さ約9.8cm、最大幅推定約4.3cmで、全体の約2/3が残存する。いずれも全面無文で、丁寧なミガキが施されている。その他、図示しなかった6は基部の一部のみが残存する。

類例：これまで、イチジク形土製品は、興野義一氏によって追町糠塚貝塚、田尻町若林遺跡、涌谷町長根貝塚、築館町嘉倉貝塚の4遺跡から計9点出土していることが報告されている(興野：1990)。出土点数の内訳は糠塚貝塚が6点、その他は各1点で、長根貝塚、嘉倉貝塚のものは先端部のみの小破片である。また、近年、岩手県胆沢町大清水上遺跡において1点出土したことが報告されている(岩手埋文：2001)。これらは、平面形、法量とも、今回の調査で出土したものとほぼ近似しており、施文、調整方法もほぼ同様で、先端側に刺突文が施されるものと、無文のものとがあり、糠塚貝塚出土



図版436 イチジク形土製品

のものには区画沈線文も認められる。また、表採品であるが田尻町恵比須田遺跡でも1点発見されている。これは田尻町大貫在住の齋藤 肇氏が所蔵するもので、氏のご厚意により実見させていただいた(図版437)。ほぼ完形品で長さ約9.1cm、最大幅4.1cm、先端側は刺突文が施され、4単位に区画されている。基部側は無文で丁寧なミガキが施されている。

時期：これまでイチジク形土製品は縄文前期大木4式土器と一緒に出土するとされてきた(興野：前出)。

今回、本遺跡で出土したイチジク形土製品は1がSI403住居跡-2層、2がSX140遺物堆積層第2層、3がSK401土壤第1層、4はSK24土壤第3層、5がSI3住居跡堆積土、6がSD10溝跡堆積土といったように、いずれも遺構内堆積土あるいはSX140遺物堆積層から出土したものである。遺構との共伴関係が明確なものはなく、遺物の時期を比定する事は困難な状況である。時間幅をもって捉えるならば、4・5は大木4・5式土器と一緒に出土しており、概ね大木4・5式期、1・3については大木6式土器と一緒に出土しており、大木6式期あるいはそれ以前、その他は大木4～7式期の時間幅に収まるものと考えられる。

今回の出土資料を合わせると、イチジク形土製品は、現在のところ計17点が確認されており、岩手南部から宮城県北部の北上川中流域で発見されている。出土点数也非常に少なく、縄文時代前期後葉の極めて限られた時期・地域での稀少な遺物と見ることができる。なお、用途については、これを示すような痕跡は認められず不明である。

c 耳飾り(図版438 1～5)

耳飾りは5点出土している。1は基本層位第2層、2はSB58掘立柱建物跡主柱穴確認面、3はSI60住居跡確認面、4はSI404住居跡主柱穴(P1)、5はピット(P2915)から出土している。

総じて短い円柱状を呈し、中空で一方の端部周縁がつば状に広がるもの(1・2)と中実で鼓状のもの(4)がある。3・5については破片資料のため全体の形態を知ることはできないが、中空の3は2、中実の5は4に近い形態を呈していたものと推定される。いずれも摩滅が激しいが、表面にはミガキが施された痕跡が認められる。その他、法量は以下のとおりである。

図版434-1：長さ約2.8cm－周縁最大径約3.1cm－内径0.5～1.4cm

2：長さ約2.6cm－周縁最大径約3.2cm－内径0.7～1.4cm

3：長さ(不明)－周縁最大径約3.7cm－内孔(残存径1.2～1.7cm)

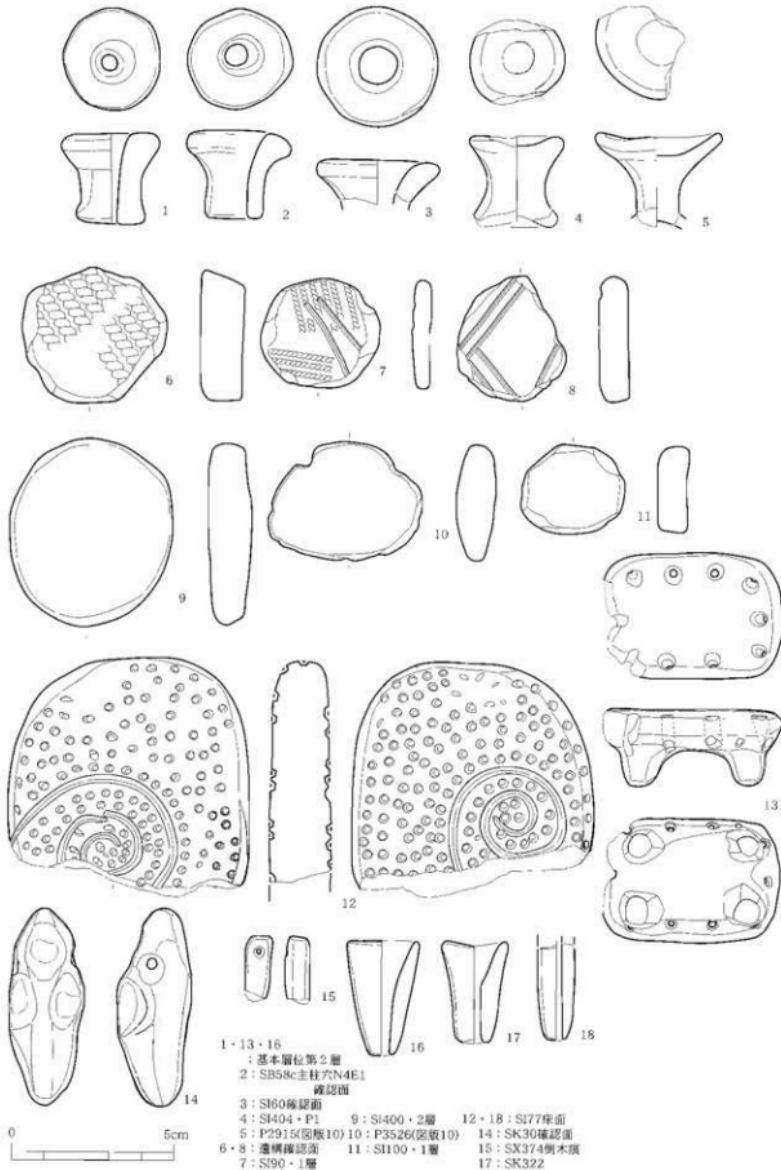
4：長さ(残存約2.7cm)－周縁最大径約2.9cm

5：長さ(残存約2.8cm)－周縁最大径(推定約4.0cm)

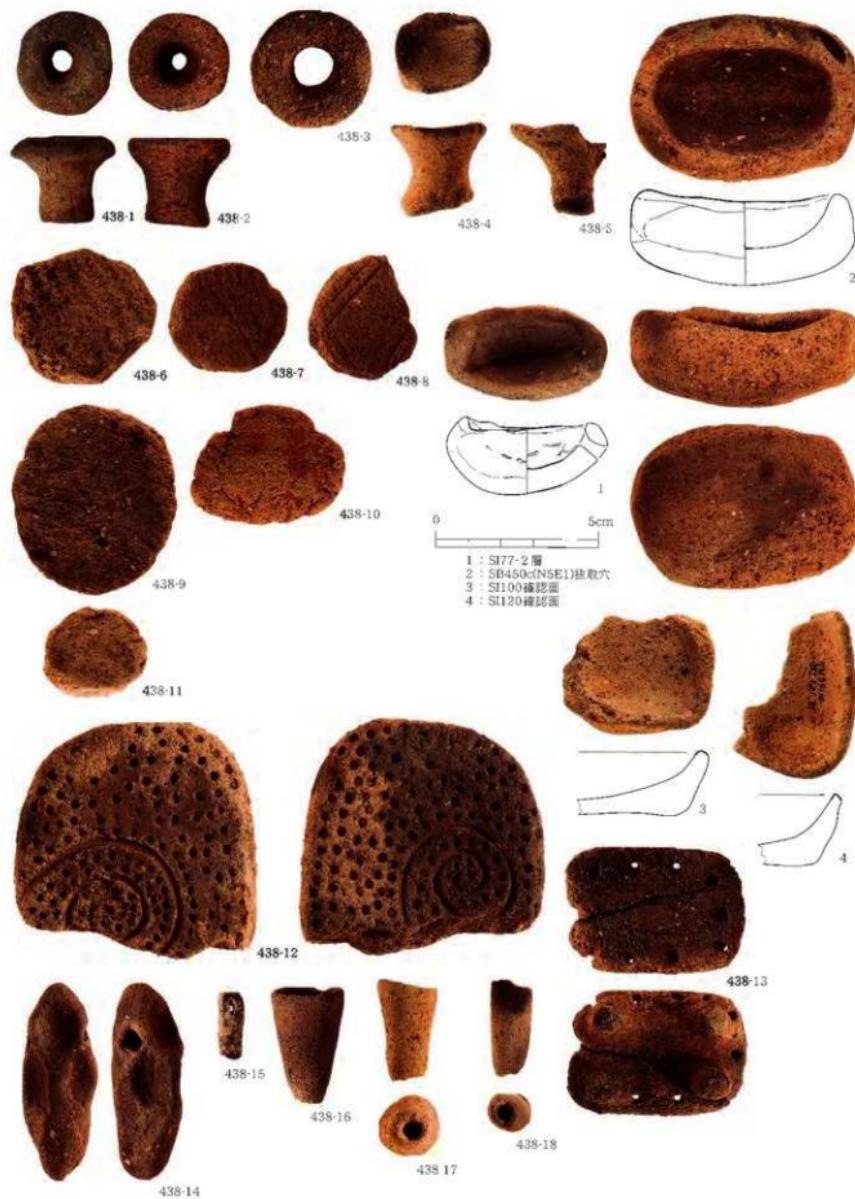
時期：遺構との共伴関係が明確なものはない。2が大木7a式土器、3が大木7b式土器、4が大木6式土器と一緒に出土していることから、各々同時期あるいはそれ以前のものと考えられる。1・5



図版437イチジク形土製品
田尻町恵比須田遺跡表採品
S=2/3(齋藤肇氏所蔵)



図版438 土製品(1)



圖版439 土製品(1)

については、時期は不明である。

d 円盤状土製品(図版438-6～11)

6点出土している。6・8は造構確認面、7はSI90住居跡堆積土1層、9はSI400住居跡堆積土2層、10はピット(P3526)、11はSI100住居跡堆積土1層からの出土である。

10を除き、深鉢形土器側部破片の周縁を打ち欠き作られたもので、側縁に研摩痕はない。10は転用品ではなく、製作時に円盤状に成形されたものである。大きさは、6が径約4.2cm、7・8が径約3.5cm、9が径約5.4cm、10が長径約4.8cm、短径約3.6cm、11が長径約3.2cm、短径約2.7cmである。

時期：造構との共伴関係が明確なものはない。9・11は大木6式土器と一緒に出土することから、同時期あるいはそれ以前のものと捉えられるが、その他については時期は不明である。

e 袖珍土器(図版439-1～4)

7点出土しており、その内、残存状況の良い4点を図示した。1はSI77住居跡第2層、2はSB450c掘立柱建物跡、3はSI100住居跡確認面、4はSI121住居跡確認面から出土している。

平面形は楕円形のもの(1・2)と、若干角がつくもの(3・4)とがあり、1の長軸の両側面には焼成前に貫通孔が穿たれている。底面は1・2が丸底状、3・4が平底状を呈する。法量は1が口径約5.0cm×約3.0cm、器高2.4cm、2が口径約7.0cm×約5.0cm、器高約2.8cm、3・4は欠損のため口径は不明、器高は3が約2.1cm、4が約2.2cmである。

時期：造構との共伴関係が明確なものはない。各遺物は大木5・6式土器と一緒に出土しており、同時期あるいはそれ以前のものと考えられる。

f 他の土製品(図版438-12～18、図版440)

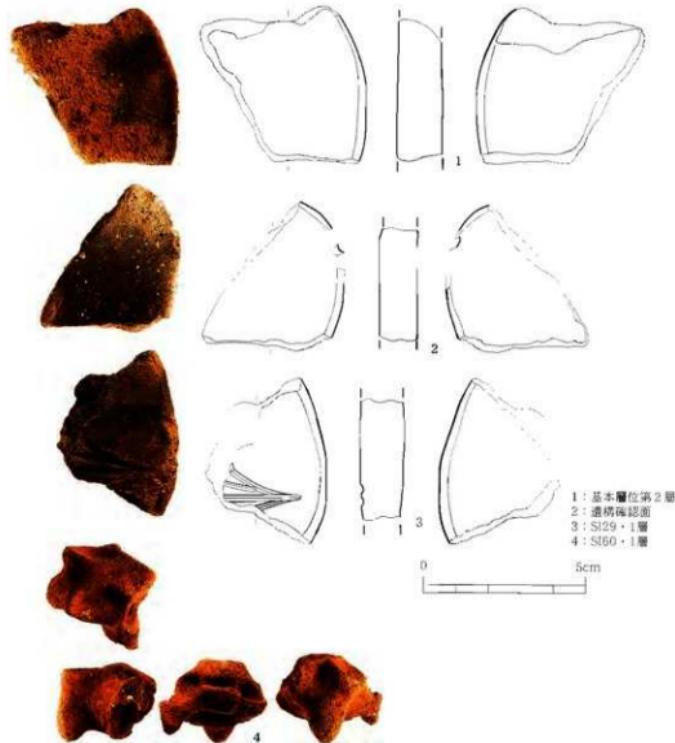
11点出土している。

図版438-12はSI77住居跡床面から出土した盤状の土製品である。欠損品のため全容の詳細は不明であるが、残存部位で径7.4～8.4cm、厚さ約1.9cmを測り、楕円形を呈するものと考えられる。両面に沈線による渦巻文と円形刺突文が施されている。

図版438-13は四脚付の土製品である。基本層位第2層から出土している。長軸約5.5cm、短軸約3.8cm、厚さ約1.2cmの隅丸長方形の台部に高さ約1.0cmの脚が4個つくものである。台部は断面が逆台形状を呈しており、周縁部には径約0.2cm前後の貫通孔が10個穿たれている。調整は摩滅により不明である。

図版438-14・15はともに貫通孔を有する土製品である。14はSK30から出土している。やや不整な紡錘形を呈し、片側3ヶ所に指頭押圧による窪みが認められる。長さ約6.0cm、最大幅約2.3cmで、径約0.3cmの貫通孔が穿たれている。

15はSX374倒木痕から出土している。径約0.8cmの棒状を呈し、残存長約2.1cm、端部に径約



図版440 土製品(2)

0.1cmの貫通孔が穿たれており、ともに垂飾品とも考えられるが、詳細は不明である。

図版438-16～18はややハの字に広がる管状を呈する土製品である。

16は基本層位第2層、17はSK322土壤堆土、18はSI77住居跡床面から出土している。

16はほぼ完形で、長さ約3.6cm、最大幅約2.3cm、端部内径約0.4cmである。17は幅広側の端部を一部欠いている。長さ約3.0cm、最大幅推定2.0cmで端部内径約0.5cmである。18は先端部のみが残存する。残存長約3.0cm、端部内径約0.4cmである。

図版440-1～3は形態、用途不明の上製品である。いずれも板状を呈し、周縁部は弧を描いており、土偶、あるいは円盤状土製品等の一部である可能性が考えられるが、小破片の為、詳細は不明である。

図版440-4は何らかの動物形土製品と考えられるが欠損により、詳細は不明である。

時期：SI77床面出土の図版438-12・18は遺構と同時期の大木6式期、14・17は一緒に出土する土器から大木6式あるいはそれ以前、図版440-3は片面に変形工字文の一部と考えられる沈線文が施されていることから、縄文時代晩期から弥生前期頃のものと考えられる。その他は、図版438-15は

SX374が縄文時代晚期以降の倒木痕、図版438-13・16、図版440-1は基本層位第2層、2は遺構確認面、3は古代の住居跡、4はSI60堆積土から出土したもので時期を限定することは困難である。

(5) 動物遺体

多くの遺構の堆積土中から少量づつ出土した。また、SK303・339、SI320などでは、焼けた骨からなる層や、骨を多量に含む層も見られた。これらの層の土壤は、一部ないしすべてを10mm、4mm、1mmメッシュの水洗篩にかけ資料を採集した(出土量表の層名に続けて「フルイ」と表示)。発掘時に採集された資料および10mm、4mmメッシュ上で採集された資料についてはすべてを分析対象とし、1mmメッシュ上で採集された資料については、各層毎に50ccのサンプルをとり、動物遺体を抽出して分析した。1mmメッシュ資料中の動物遺体の含有量は低く、10mm、4mmメッシュ上で採集された資料が資料の大部分を占める。採集された骨は、出土地点を問わず、ほとんどが火を受け白色化しており、変形、破損にいたっているものが非常に多い。ネズミやイヌの噛み跡は確認できなかつたことから、これらは焼かれてから廃棄されたと考えられる。また、SI320の1層には骨片の集中がみられたが、これらは焼けておらず腐食がかなり進んでいたため、取り上げ、同定できたものは僅かであった。遺存体資料は全部で約14kgあるが、同定できたのはそのうち0.6kg程のみで、同定不能の破片資料が多くを占めた。同定点数は490点である。

表9に同定された種を示す。魚類1種、鳥類2種、哺乳類5種が検出され、貝類は検出されなかった。以下、種ごとに述べる。

魚類

コイ科の腹椎ないし尾椎がSK303-5層の1mmメッシュ資料から1点同定された。大きさからフナ、ウグイなどと考えられる。

鳥類(表14)

中型のカモ類の一種が4点、小型のカモ類の一種が3点、キジ科の一種が1点、種不明のものが3点同定された。中型のカモ類としてはスズガモなどが考えられ、小型のカモ類としてはコガモなどが考えられる。キジ科としてはキジないしヤマドリがあげられる。最小個体数は中型のカモ類が2個体、他はそれぞれ1個体づつである。

表9 出土動物種名表

脊椎動物門 VERTEBRATA

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

コイ科 Chyrinidae gen. et sp. Indet.

鳥 綱 AVES

ガンカモ科 Anatidae gen. et sp. Indet.

キジ科 Phasianidae gen. et sp. Indet.

哺乳綱 MAMMALIA

ニホンジカ Cervus nippon

イノシシ Sus scrofa

タヌキ Nyctereutes procyonoides Gray

イヌ Canis familiaris Temminck

ノウサギ Lepus brachyurus Temminck et Schlegel

表10 イノシシ出土量表

哺乳類

イノシシ(表10)

最も多く出土し、269点が同定された。最小個体数は6個体である。頭部骨や上腕骨、大腿骨といった大きめの部位骨はいずれも細かく破損しているが、指骨や手根・足根骨など小さめの部位骨では完形のものも多い。火熱による破損率が高いため、人為的な打割の痕跡を識別するのが困難であり、このような残存状況の違いが解体行為や骨角器作成などに関わるのかどうかは判断できなかった。

表11 シカ出土量表

ニホンジカ	前肢												後肢												指標/後位・指																				
	切歯 上歯骨			下歯骨			尺骨			中手骨			第4手骨			大顎骨			脛骨			腓骨			中足骨		中足骨																		
	R	M	L	L	R	L	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	T	?	?	?	?	?	?																	
遺構・層																													計																
SK310 2層	1																														1														
S177	IPMき																														1														
SK359	2層(フルイ)																														2														
3層																															1														
SK359	1・2層(フルイ)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	46															
1層(フルイ)																															6														
2層(フルイ)																															32														
出土位置不明																															1														
SK355	1~4層																														1														
不明																															1														
計	1	1	1	1	1	1	2	2	2	3	2	3	2	2	3	5	2	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1	4	5	2	2	1	2	3	1	2	5	6	12	2	8	3	7	2	117
最小個体数																															3		5												

表12 その他の哺乳類出土量表

その他の哺乳類	ウツギ												クヌギ												イノシシ						
	上歯骨			臼歯骨			大顎骨			前腕骨			上腕骨			下顎			頭骨			四肢骨			小形哺乳類等不明						
	L	R	M	L	R	M	L	R	M	L	R	M	L	R	M	L	R	M	L	R	M	L	R	M	?	?	?	?			
遺構・層																													計		
SK303 2層(フルイ)																															1
SK359 1・2層(フルイ)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	17	
1層(フルイ)																															2
2層(フルイ)																															1
計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	32	
同定資料数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	
最小個体数	1																														4

部分ごとに出土量を見てみると、頭部が6個体分、前肢が5個体分、後肢が4個体分と部位による偏りはみられない。

小池・林(1984)、Schmid(1972)により、歯牙の放出・咬耗および四肢骨の化骨化の程度から年齢を推定した(表15)。指標とした資料は28点である。最小個体数で1才未満の幼獣が2個体、1~2.5才の若獣が2個体、2.5才以上の成獣が1個体と推定された。

下顎骨の関節突起、肩甲骨の遠位端、尺骨の遠位端、底後頭骨、中手ないし中足骨の遠位端に人為的な切痕(カットマーク)が観察された。これらの位置は関節部の近くであることから、これらはイノシシを解体する際につけた解体痕と考えられる。

ニホンジカ(表11)

イノシシに次いで多く、117点が同定された。最小個体数は5個体である。大きめの骨の破損率が高く、小さめの骨では完形のものが多い点や、打割の痕跡の識別が困難であった点はイノシシと同様である。

表13 シカ／イノシシクラス哺乳類種不明出土量表

表14 烏類出土量表

表15 イノシシの齢構成

部分ごとに出土量を見てみると、頭部が1個体分、前・後肢が5個体分となり、頭部が少ないという結果になった。また、鹿角と確実に識別できる資料は検出されず、中手骨ないし中足骨については、いざれか不明の破片が2点同定できたのみであった。

化骨化の状況が識別可能な資料63点のうち、化骨化が終了しているものは52点、化骨化が始まっていないものは10点、化骨化途中のものは1点であった。化骨化の状況から年齢を推定できるような比較資料がないため明確な年齢を推定することはできないが、化骨化が終了しているものの比率が高いことから、成歯の比率が高いと考えられる。

橈側手根骨、大腿骨近位にカットマークが観察された。位置は関節部近辺であり、解体痕と考えられる。

その他の哺乳類(表12)

イスが1卓、タヌキが16卓、ウサギが10卓固定された。最小個体数はそれぞれ1個体である。他

に、シカかイノシシか同定不能のもの、もしくはそれと同等の大きさで種不明のものが59点、食肉目で種不明のものが1点、ムササビ程の大きさの齧歯目で種不明のものが2点同定された。

まとめ

今回検出した資料は、本遺跡で利用されたもののうち、居住域内に廃棄されたもの、そしてそのなかでも最終的に焼かれたため残存し得たものを主体としているため断片的なものではあるが、動物質資源利用の一端を示している。

同定された種は、いずれも当時の遺跡周囲に生息していたものであり、集落周囲で狩猟・漁労活動が行われていたと考えられる。また、シカ・イノシシが資料数で全体の9割、個体数でも6割を占めることから、これらが主要な動物質資源であったと考えられる。また、貝類は全く検出できず、魚類も僅かしか検出できなかったが、当時の遺跡周辺には沼沢地が広がっていたことを考えると、それらが消費されなかったとは考えにくく、それらの処理過程が哺乳類・鳥類とは異なっていた可能性も考えられる。

動物遺体の廃棄形態については、SI320のように焼かれることなくまとまって廃棄される場合と、SK303・339のように焼かれてまとめて廃棄される場合、また不特定の場所に投げ捨てられる場合があることがわかる。

2 遺構について

検出した縄文時代の主な遺構には竪穴住居跡108軒、掘立柱建物跡27棟、土塙148基、竪穴状遺構1軒、柱列2条、遺物堆積層1か所等がある。本項では各遺構の重複関係と時期を検討した後、竪穴住居跡の分類と変遷や土塙の形態、施設等について検討し、嘉倉貝塚における集落の構成を考える。

(1) 遺構の重複関係と時期

a 重複関係

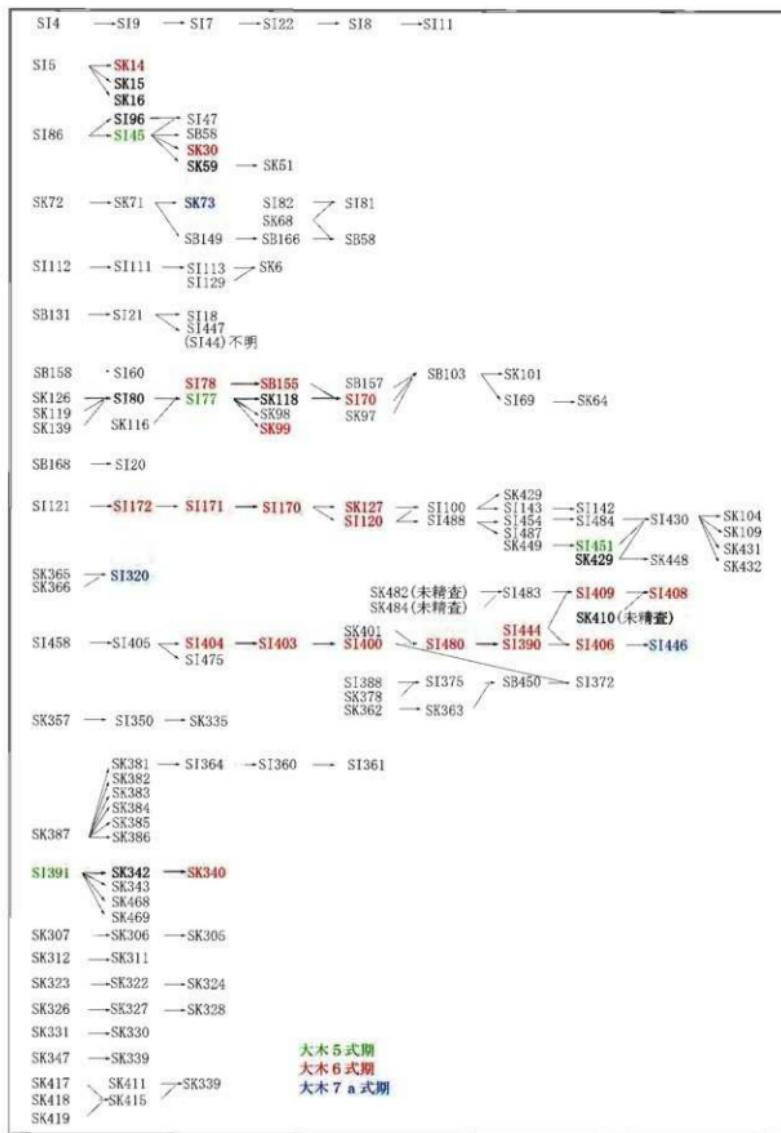
主な遺構について重複関係を整理すると右図のようになる。前節での土器の検討や後述する時期の検討結果から、遺構の時期が把握できるものについては時期毎に色別に表記している。

b 時期

前節で、土器がまとまって出土したSI77・120・170・320住居跡、SK309・316・319土塙、SX140遺物堆積層出土土器の編年的位置を検討した結果、第1群土器が共伴するSI77は「大木5式」期、第2群土器が共伴するSI120・170は「大木6式」期、第3群土器が共伴するSI320、SK309・316・319は「大木7a式」期、SX140第2層については「大木5式」期を中心形成されたものであることがわかった。

以下では、その他の遺構の内、重複関係や量は少ないが出土遺物からある程度、時期の把握が可能な遺構について検討する。

その際、床面以外の出土土器破片資料の扱いについては、遺構間の重複が多く、古い時期のものが混入する可能性があることから、単独で遺構の時期を決定する資料とすることは困難である。重複関



図版441 主な遺構の重複関係

係や出土状況を検討した上で、遺構の時間幅を推定する際の補足資料として扱うこととする。

[豊穴住居跡]

(SI45住居跡)

重複関係でみると「大木6」式期と考えられるSK30土壙より古い。更に、SI45の床面直上等から第1群土器に相当する「大木5式」期の深鉢の破片が少量出土し(図版36)、それより新しい様相の土器は含まれていないことから、本住居跡は概ね「大木5式」期に位置付けられるものと考えられる。

(SI391住居跡)

改築後の住居北東部の壁柱穴抜き取り穴から、第1群土器に属する深鉢A I a2類が出土しており(図版120)、柱抜き取り後、廃棄されたものと考えられる。また、重複関係では「大木6式」期と考えられるSK340土壙よりも古く、遺構の時期は概ね「大木5式」期に位置付けられるものと考えられる。

(SI451住居跡)

主柱穴抜き取り穴から、第1群土器に相当する深鉢A II a2類が出土している(図版166)。これについては柱抜き取り後、廃棄されたものと考えられ、遺構の時期は、概ね「大木5式」期に位置づけられるものと考えられる。

(SI70・78住居跡)

床面や掘り方埋土から第2群土器に相当する「大木6式」の深鉢の破片が出土しており(図版45・73)、それより新しい様相の土器は含まれないことから、両住居は概ね「大木6式」期に位置付けられるものと考えられる。

(SI100住居跡)

重複関係では「大木6式」期と考えられるSI120・170、SK127より新しい。また、周溝や柱穴埋土、床面直上の堆積土からは同じく「大木6式」の深鉢の破片が出土し、それより新しい様相の土器は含まれていないことから、本住居跡も「大木6式」期に収まるものと考えられる。

(SI171・172住居跡)

重複関係では「大木6式」期のSI170住居跡よりも古い。更に両住居よりも古いSI121の堆積土からは「大木6式」と考えられる深鉢の小破片が出土しており(図版92)、遺構の時期は「大木6」式期に位置付けられる。

(SI390・406住居跡)

各床面直上から第2群土器に属する深鉢C III b類とG I b2類が各1点出土しており、(図版124・144)、遺構の時期は「大木6式」期に位置付けられるものと考えられる。

(SI400・403住居跡)

両住居の主柱穴抜き取り穴からは各々上半や胴部をほぼ残す深鉢が出土しており(図版130・136)、これらについては、柱を抜き取った後廃棄されたものと考えられる。SI400出土のものは第2群土器に属する深鉢C III b類、SI400出土の深鉢についても胴部に半截竹管の平行沈線文が施されるなど、土器の特徴は概ね第2群土器に相当しており、遺構の時期は「大木6式」期に位置付けられるものと考えられる。

(SI408・409・444住居跡)

重複関係ではSI444→SI409→SI408の順に変遷している。最も新しいSI408の堆積土中からは第2群土器に相当するG I b3類の深鉢等が出土しており、SI408は「大木6式」期の住居と考えられる。また、SI444は「大木6式」期と考えられるSI406住居跡よりも古いものの、床面直上や周溝堆積土、主柱穴抜き取り穴から「大木6式」の深鉢の小破片が出土しており、SI444・409ともに「大木6式」期に位置付けられるものと考えられる。

(SI404住居跡)

重複関係では「大木6式」期と考えられるSI403住居跡よりも古いが、本住居はSI403と同一床面を使用していたと考えられ、時間差はほとんど無いと推定されることから、本住居跡も「大木6式」期に位置付けられるものと考えられる。

(SI480住居跡)

重複関係では、SI400→SI480→SI390の順に変遷しており、SI390・400住居跡はともに「大木6式」期と考えられることから、本住居跡も同時期に位置づけられる。

(SI446住居跡)

炉跡直上からは交互刺突文のある浅鉢B類が出土しており、造構の時期は概ね「大木7a式」期に位置づけられるものと考えられる。

【掘立柱建物跡】

(SB155掘立柱建物跡)

重複関係では、SI78→SB155→SI70の順に変遷しており、SI78・70はともに「大木6式」期と考えられることから、本建物跡も同時期に位置づけられる。

【土壤】

(SK14・26・30・127・340土壤)

各土壤の底面や堆積土から、第2群土器に相当する深鉢A III b・C I b・G I b2類が出土しており、造構の時期は、「大木6式」期と考えられる。

(SK73・355土壤)

SK73堆積土、SK355の底面や堆積土から第3群土器に属する深鉢E I・G I a2類等が廃棄された状態で出土しており(図版227、図版287・288)、造構の時期は「大木7a式」期頃と考えられる。

(SK308・367土壤)

小破片が多いものの、底面から第3群土器に相当する深鉢H II b類等の破片が廃棄された状態で出土しており(図版251・図版292)、造構の時期は、概ね「大木7a式」期頃と考えられる。

(SK395土壤)

表16 造構の時期

大木5式期	大木6式期	大木7a式期	後・飛朝以降
SI045	SI070	SI405	SK064
SI077	SI078	SI408	SK101
SI391	SI120	SI409	SK308
SI451	SI170	SI444	SK309 SK431
		SI171	SK480 SK316
		SI172	SI155 SK319
		SI390	SK014 SK355
		SI400	SK026 SK367
		SI403	SK030
		SI404	SK127 SK340

堆積土から縄文時代後期頃と考えられる土器の小破片が出土しており、遺構の時期もそれに近い時期のものと考えられる。

〈SK64・101・431土壤〉

堆積土から工字文や変形工字文の施された縄文土器破片が出土しており、遺構の時期は、概ね縄文時代晩期以降のものと考えられる

(2) 穫穴住居跡の分類と各類の前後関係

縄文時代の竪穴住居跡は改築も1軒と捉えて数えると合計108軒確認されており、これらの大半は出土土器の検討から大木5~7式期の中に納まるものと考えられる。調査区全体を見渡すと、多くの住居は何度も同じ位置で建て替えられており、他の住居跡や掘立柱建物跡、土壌などと複雑に重複している。これらの遺構によって構成される集落を理解し、その変遷を把握するためには、まず竪穴住居について整理する必要がある。そこで、本項では諸属性から竪穴住居の分類を試み、その前後関係についても検討を加える。

a 穫穴住居跡の分類と特徴

各竪穴住居の属性については表17にまとめた。住居の平面形態には長楕円形(A類)、長方形(B類)、正方形(C類)、不整な円形(D類)の4種類がある。これを大別項目とし、さらに主柱穴・壁柱穴の配置、住居規模の属性を加味して細分を行った。なお、分類はある程度特徴を把握できる住居を対象にしており、改築がある場合は各属性が捉えられる最終段階のものを代表として扱った。改築後の住居にそれ以前と構造が大きく異なるものは無く、平面規模以外の属性はほぼ同一の傾向を示している。

A類：住居平面形が長楕円形を呈するもので、規模に大型(a)・小型(b)の別がある。

B類：住居平面形が長方形を呈するもの。

1：住居長軸線に沿って、主柱穴が長辺の壁際に配されており、両妻の柱穴は短辺の壁からやや離れた位置となる。

2：住居長軸線に沿って、主柱穴が長辺の壁際に配されており、両妻の柱穴の位置が短辺の壁際になるのが特徴である。住居規模に大型(a)・小型(b)の別がある。

3：住居長軸線に沿って、主柱穴が長辺の壁間に配されており、両妻の柱穴は短辺の壁からやや離れた位置となる。四隅に柱痕跡を残す大型の壁柱穴が配置されるのが特徴である。住居規模に大型(a)・小型(b)の別がある。

C類：住居平面形が正方形を呈するもの。

1：住居中央に主柱穴が1個配されている。規模に大型(a)・小型(b)の別がある。

2：主柱穴が4または6個配されている。

D類：住居平面形が不整な円形を呈すると考えられるもので、主柱穴は認められない。

以上の各類に分類された住居は、表18に示す通りである。各類の住居の特徴をまとめる。

【A類】

表17 緊穴住民跡一覧表

縦に細長い長楕円形の住居で、全体の平面プランが確認されているものは全て北側が角張っている。南側は窄まって緩い弧状で、基本的にこの部分の周溝は途切れている。長軸が12.0m以上のものを大型(Aa類)、それより小さいものを小型(Ab類)としたが、Aa類で長さが判明しているのはSI45の約18.0mのみである。Ab類の長軸は7.0～9.0mにまとまる傾向があり、幅は何れも3.0m前後である。主柱穴は検出されていないが、長辺壁添いの相対する位置にはほぼ等間隔(主に2.4～3.2mの間隔)で直径20～40cm、深さ40～80cmの大型の豎柱穴が配置されており、主柱的な役割を果たしていたと考えられる。なお、SI45の長軸線上で検出した小ビットは棟持柱と推定される^(注1)。Aa類では壁材の痕跡も確認されており、特にSI45では東・西辺に添って幅5cm前後の壁材痕もしくはその抜き取り痕が連続的に検出されている。炉は全て地床炉で、長軸線上に並ぶ。Aa類では長軸80～100cm、Ab類では長軸15cm前後の不整形を呈する焼け面が多い。

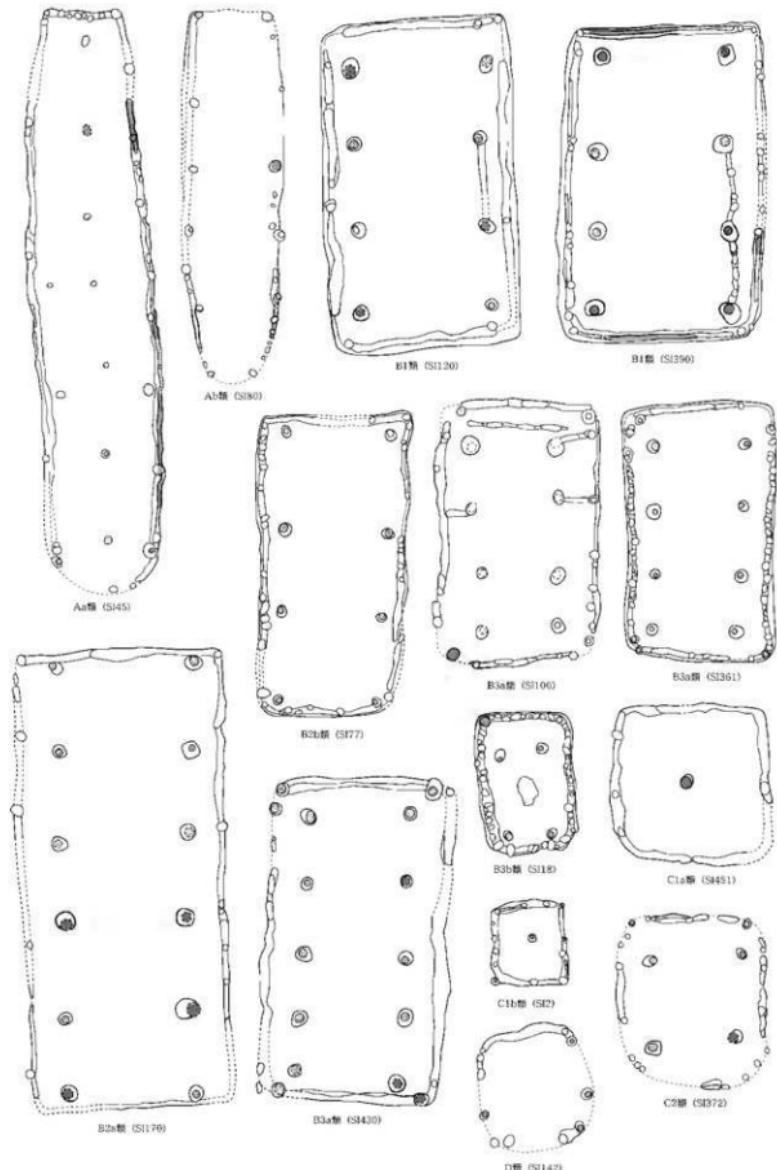
【B 1類】

長方形の住居で、長軸線に沿って4対の主柱穴が長辺の壁際に配置されており、両妻の柱穴は短辺の壁からやや離れた位置となる。SI120・390は長軸9.8・9.5m、短軸5.6・6.0mで殆ど同規模である。SI400は長軸13.5m、短軸7.6mと一回り大きくなるが、全ての長軸と短軸の比率は5：3となる。主柱穴は長軸50cm前後の不整な円・楕円形を呈し、深さ100cm前後のものが多い。柱痕跡は直径25cm程で、大半の柱穴上部には柱抜き取り痕がある。豎柱穴は長辺の相対する位置に配される傾向がある。周溝はほぼ全周しており、周溝内の壁側に添って部分的に壁材の痕跡も認められる。いずれの住居にも改築は認められず、桁方向の主柱穴間に繋ぐかたちで壁に沿って延びる溝をもつ特徴がある^(注2)。炉は全て地床炉で、長軸方向に2列もしくは3列並んで検出されている^(注3)。焼け面は長軸130cm前後の不整形を呈する大規模のものが多く、大半が強く焼けて硬化している。本類の住居は構造・規模に齊一性が窺われる。

なお、SI375・388は残りが悪いものの、平面形態や主柱の配置から本類に属する可能性がある。

【B 2類】

長方形の住居で、長軸線に沿って4～7対の主柱穴が長辺の壁際に配置されており、両妻の柱穴の位置が短辺の壁際になるのが特徴である。長軸が12.0m以上のものを大型(B 2a類)、それより小さいものを小型(B 2b類)としたが、B 2a類は長軸12.0～15.3m、B 2b類は長軸10.0m前後にまとまるところられる。B 2a類は長方形住居の中で最も規模が大きく(床面積でも最大)、長軸と短軸の比率は2：1以下で、縱長が最も顕著となる。B 2b類の長軸と短軸の比率はほぼ2：1である。B 2a類では主柱穴が5～7対、B 2b類では4対配されており、掘方は長軸30～50cmの不整な円・楕円形を呈し、深さ50cm前後のものが多い。柱痕跡はB 2a類で直径25cm程、B 2b類で直径15～20cmあり、大半の柱穴上部に柱抜き取り痕が認められる。豎柱穴は長辺の相対する位置に配される傾向があり、B 2a類の周溝はほぼ全周している。B 2b類の周溝は各辺を巡り、長辺の中央もしくは北寄りで1.5～2.0m途切れるものが多い。炉は全て地床炉で、B 2a類では長軸方向に2列もしくは3列並んでいたと推定される^(注3)。B 2a類の焼け面は長軸120cm前後で不整形を呈する大規模のものが多く、大半が強く焼けて硬化している。B 2b類では長軸80cm前後の不整形を呈する焼け面が多く、ほぼ長軸線上に並ぶ。



図版442 穫穴住居跡分類図

【B 3類】

長方形の住居で、長軸線に沿って2～5対の主柱穴が長辺の壁際に配されており、両妻の柱穴は短辺の壁からやや離れた位置となる。四隅に直径10～20cmの柱痕跡を残す大型の壁柱穴(主柱穴に近い規模をもつ)が配置されるのが特徴である。長軸が7.0m以上のものを大型(B 3a類)、それより小さいものを小型(B 3b類)としたが、B 3a類は長軸7.0～10.0m、B 3b類は長軸4.0～5.0mにまとまる傾向がある。長軸に対する短軸の割合は45～70%と幅をもつが、B 3b類の大半は65～70%に収まる。B 3a類では主柱穴が主に4対、B 3b類では2対配置されている。主柱穴は長軸40cm前後の不整な円・橢円形を呈し、深さ60cm前後のものが多い。柱痕跡は直径15～20cmで、柱穴上部に柱抜き取り痕が認められるものもある。四隅以外の壁柱穴の配置に規則性は認識できないが、壁柱穴は他例よりも周溝内に密に並ぶ傾向にある。周溝はほぼ全周しており、B 3b類では床面中央が皿状に凹むものが多い。炉は全て地床炉で、B 3a類は長軸線上に、B 3b類は床面中央の凹み内部に設けられる場合が多い。焼け面はB 3a類で長軸10～200cm、B 3b類で長軸20～130cmの不整形を呈し、規模にまりはない。

【C 1類】

正方形の住居で、床面中央に主柱穴が1個配されている。一辺4.8m前後のSI451を大型(C 1a類)とし、それ以外の一辺2.1～3.4mのものを小型(C 1b類)とした。主柱穴は直径30cm前後の不整な円形を呈し、深さ30～60cmに収まるものが多い。柱痕跡は確認されているもので直径10～20cmとなり、柱が抜き取られているものもある。壁柱穴は比較的密に巡る傾向にあり、周溝は大半でほぼ全周している。C 1a類では床面の中央付近に小さな地床炉が確認されているが、C 1b類では炉は検出されていない。但し、C 1b類の床面中央部には薄い炭化物層が残存しており、炉が設けられていた可能性も残る。

【C 2類】

正方形の住居で、角の丸みが強い。本類に属するのはSI 5・372の2軒のみで、平面規模は一辺5.5m前後である。SI 5の主柱穴は6個、SI372は4個で、規模は長軸40cm前後の不整な円・橢円形を呈し、深さ30～60cmに収まるものが多い。柱痕跡は確認されているもので直径20cm前後となり、柱が抜き取られているものもある。壁柱穴も検出されているが、その配置に規則性は窺われない。周溝は断続的で、周溝内壁側に沿って部分的に壁材の痕跡が認められる。炉が検出されたのはSI 5のみで、床面中央からやや南寄りに位置する地床炉である。

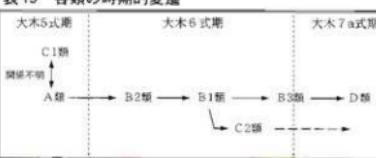
【D類】

削平により残りが悪いものの、平面形が不整な円形を呈すると考えられる住居である。壁柱穴と周溝の配置から、規模は直径3.5m前後と推定される。主柱穴は検出されていないが、直径15～40cm、深さ15～70cmの壁柱穴が周囲を巡る。壁柱穴の深さは30cmを超えるものが多い。周溝は部分的に認められる。炉が検出されたのはSI446のみである。SI446の炉は床面中央からやや南寄りに位置する地床炉で、底面が皿状に窪んでいる。

表18 類別

類型	住居番号
Aa類	SI45・405・458
Ab類	SI80・(393)・391
B1類	SI120・390・406・(376)・(388)
B2a類	SI21・(170・17)・403・404
B2b類	SI77・78・96・(129)
B3類	SI109・360・361・406・430・484
B3b類	SI18・20・44・320・350・408
C1類	SI451
C1b類	SI17・(31)・4・7・47・(53)・483
C2類	SI5・372
D類	SI142・446・(81)・(147)

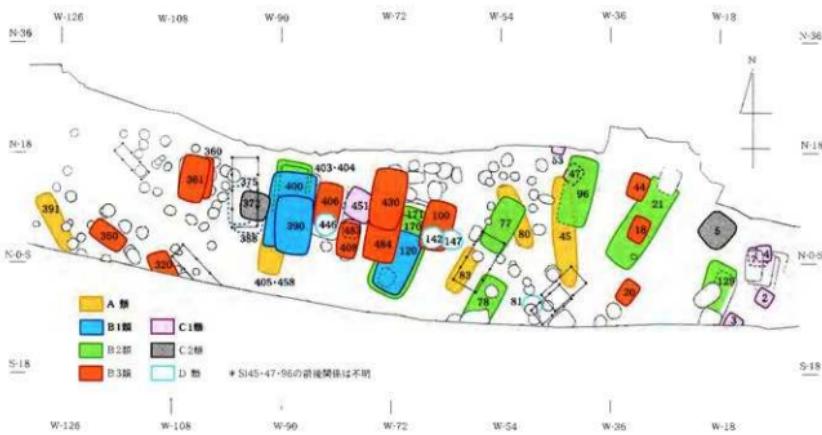
表19 各類の時期的変遷



b. 積穴住居跡各類の前後関係

積穴住居跡の中で出土土器から時期が判明しているものと個別の造構の重複関係について先述しており、これに基づくと住居各類に前後関係が成立する。住居は大・小の類型項目であるa・bを除くと7類型になり、直接の重複関係にあるSI458・405・403・404・400・390とSI171・170・120・100・142の2ヶ所から、A類→B2類→B1類→B3類→D類という変遷が導き出せる。他の重複関係をみてもこの変遷に矛盾するものは認められない。更に、SI451・430の前後関係からC1類はB3類以前、SI400・372からC2類はB1類以降のものであることが分かる。ここで、各類型の時期を出土土器から検討すると、A・C1類は大木5式期(SI391・451)、B2類は大木5～6式期(SI77・78・170)、B1類は大木6式期(SI120・390)、B3類は大木6～7a式期(SI100・320・430)、D類は大木7a式期(SI446)となる。C2類については出土遺物からは時期を特定できない。以上の結果をまとめて表19に示した。

積穴住居跡は大木5～7a式期の間に、長楕円形のものから長方形のものへと移行し、最終段階に不整な円形の形態が出現している。長楕円形(A類)の時期には住居の場所や方向に規則性は認められないが、長方形(B類)の時期になると配置・方向に一定の規則性が見受けられる。B2類は大小の別があるものの、全体的に大型で、B2a類は長方形住居に於いて最大規模を有する。B1類は形態・構造の齊一性が強く、ほぼ同位置でB2a類から連続して変遷している。なおB1類では、現在のところ明確な小型住居が検出されていない。B3類になると、全体として住居の小型化が進み、形態・構造の齊一



図版443 分類毎の配置図(S-1/800)

性も弱まる傾向が窺われる。D類に至っては、住居形態・構造が大きく変化しており、それ以前の段階とは土器形式で言えば、大木7a式の時間幅に収まる程度の時間的隔離があった可能性もある。

C1類はA類と前後関係にあるかもしくは共存する可能性があるが、明らかにできなかった。C2類については少なくともB1類より新しい大木6式期以降の住居であるが、検出数も少なく、これ以上のことは不明である。

註1：SI45の長軸線上に並ぶ7個のピットは直径20cm前後、深さ10~40cmと小規模で、そのほぼ両脇にあたる長辺壁沿いに配された壁柱穴は直径20~40cm、深さ45~70cmの規模をもつ。よって、ここでは前者を棟柱、後者を主柱と判断した。

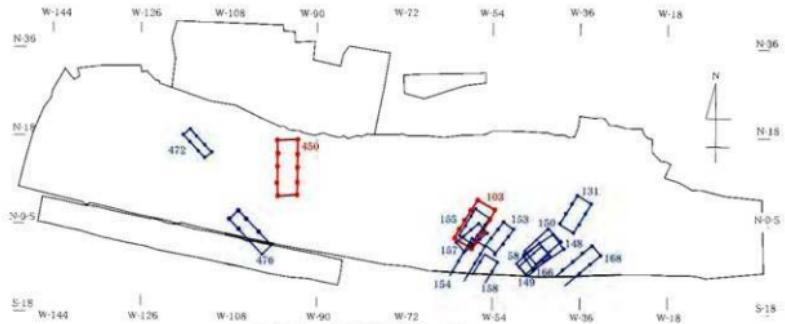
註2：SI120では東側長辺の主柱穴間を繋ぐかたちで壁沿いに延びる溝を確認していたが、残りが悪く、調査時にその帰属を明らかにすることができなかっただため、遺構の説明では記載を省略している。また、SI400で検出された溝2条のうち、南辺壁際の溝(M1)は梁方向に延びる上、主柱穴間を繋ぐかたちをとっていない。他の溝とは配置が異なっている。

註3：B1・B2類では、焼け面の同時存在や前後関係を捉えることが難しい。同一線上に並ぶものについては同時存在の可能性を考えられ、大きくみれば各主柱穴を結ぶ範囲の中に1ヶ所ずつ設けられる傾向が見受けられる。

(3) 挖立柱建物跡について

掘立柱建物跡は改築も含めると合計27棟検出されている(表20)。分布をみると大きく東西に分かれ、東側はSI120・170等の大型住居跡が集中する地点の東脇にあたるW-30~65周辺、西側は同じくSI390・400等の大型住居跡が集中する地点の西脇にあたるW-95~115周辺に分布している(図版444)。

特徴：構造は全て梁行1間の建物跡である。桁行は、全体規模がわかるものでは3間のものが主体を占めており、一部4間のものも認められる。規模は桁行6m前後のものが多く、SB103・450のような10m前後の大型の建物跡も検出されている。柱痕跡は20cm前後を中心とした円形を基調としており、一部には削材等の加工材を使用した状況を示すと考えられる隅丸長方形や梢円形の柱痕跡も認められる。



図版444 掘立柱建物跡の分布(S=1/1000)

時期：時期を明確に捉えられたものはSB155のみであるが、出土遺物や建物方向などから時間幅をもって時期が推定されるものについては以下のものがあり、その殆どが大木6～7式期の中に納まるものと考えられる。

(SB58掘立柱建物跡)

主柱穴の掘り方埋土等から、第3群土器に相当する深鉢の破片が出土しており、遺構の時期は「大木7a式」期以降に位置付けられる。

(SB103掘立柱建物跡)

重複関係では「大木6式」期以降と考えられるSI70住居跡より新しく、遺構の時期は「大木6式」期以降に位置付けられる。

(SB149・166掘立柱建物跡)

重複関係ではともにSK71土壌より新しい。SK71堆積土からは「大木6式」期と考えられる深鉢の破片が出土しており、少なくとも「大木6式」期以降の遺物跡である。

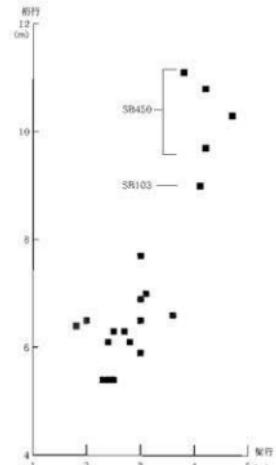
(SB450掘立柱建物跡)

主柱穴抜き取り穴から「大木6式」期と考えられる深鉢の破片が出土しており、少なくとも「大木6式」期以降の建物跡と考えられる。

註1：こうした特徴の多くは前項でB類とした長方形を呈する堅穴住跡の主柱穴とほぼ同様の様相を呈しており、住居の掘り込み面が削平されていることを想定した場合、両者の判別は困難である。但し、B類の堅穴住跡は周溝や壁柱穴の痕跡が明瞭に認められ、掘立柱建物跡とそれに近接する堅穴住跡の検出状況とでは明らかな相違が認められる。また、SB58・450のように、改築が行われた建物跡については、2回、3回と変遷する中で、ほぼ同位置で柱穴同士が重複しており、規模も大きく変化していない。今回検出された堅穴住跡は、柱や住居本体の位置を若干移して建て替えるものが多く、掘立柱建物跡と堅穴住跡の判別は、こうした発掘知見から行ったものである。

表20 掘立柱建物跡一覧表

直角(△) 横造(奥×幅)	奥行(m)	幅(m)	柱穴規格(cm)	柱規格(cm)
SB058a 1×3	2.7	6.3	25~45	不明
SB058b 1×3	2.5	6.4	30~60	23 円形
SB058c 1×3	3	5.9	33~63	20 円形
SB058d 1×3	3	6.5	30~78	16~24 円形
SB103 1×4	4.1	9	50~80	29~30 側丸長方形
SB131 1×3	3	6.9	30~50	15~20 円形・横円形
SB148 1×3	3	7.7	30~50	15 円形
SB149 1×3	2	6.5	30~40	15 円形
SB150 1×3	3.6	6.6	24~40	15~33 円形・横円形
SB163 1×3	2.3	5.4	20~38	15 円形
SB164 1×4以上	3	7.5以上	30~45	20 円形
SB165 1×3	3.6	6.6	30~45	15~20 円形・横円形
SB157 1×3	2.8	6.1	25~46	20 円形
SB158a 1×1以上	2.6	2.1以上	28~74	15 円形
SB158b 1×1以上	2.8	2.1以上	25~35	16 円形
SB161 1.1×2以上	2.7以上	4.3以上	不明	不明
SB162 1×3	2.4	5.4	15~31	16 円形
SB163 1×3	2.4	6.1	20~31	12~18 円形
SB164 1×3	3.1	7	22~35	15 円形
SB166 1×3	2.5	6.3	22~40	16 円形
SB168 1×3以上	2.7	8.4以上	25~35	10~15 円形
SB450a 1×3	4.2	9.7	40~60	不明
SB450b 1×3	4.2	10.8	45	23 円形
SB450c 1×4	3.8	11.1	30~55	18~28 円形
SB450d 1×4	4.7	10.3	45~72	30~40 円形
SB472 1×3	1.8	6.4	25~45	14~21 円形
SB476 1×2以上	2.7	5.8以上	50~70	25 円形



図版445 掘立柱建物跡の桁行と梁行

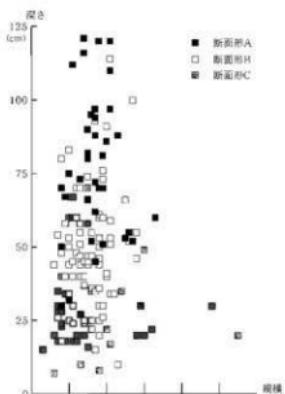
(4) 土壌について

嘉倉貝塚で確認された土壌は162基あり、それらは大きくみると調査基準点からW-45~70周辺と、

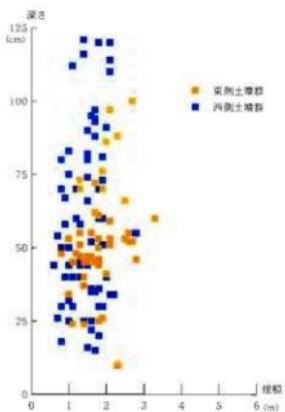
W-100～125周辺に集中して分布している。集落全体の位置関係でみるとSI120・170住居跡、SB103掘立柱建物跡等の北側やSI390・400住居跡、SB450掘立柱建物跡等の西側に位置するものが多く、土壤同士の重複関係も多く認められる

平面形・断面形・規模：平面形は円形(118基)、楕円形(3基)の2つを基調とし、隅丸長方形・隅丸方形のもの等も少量含まれる。断面形は大別すると、A：フラスコ状を呈すると考えられるもの(36基)、B：円筒状を呈すると考えられるもの(85基)、C：壁がやや緩やかに立ち上がるるもの(35基)の3種類に分けられる。残りの悪い土壤については、壁の立ち上がりから推測したが、B類としたものの中には、壁の崩落等によって本来はA類に属するものが含まれているものと考えられる。平面規模は径0.3m～5.5mの範囲に分布し、0.6～2.1mの中に集中する。深さは最も深いもので121cmある。70cmより深いものは、A・B類に限られ(29基)、その内の22基が調査区西侧に分布している。C類は概して残りが悪く、浅い。

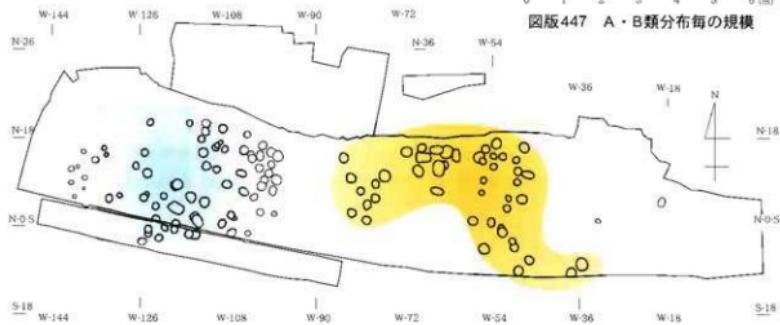
堆積土：状況がわかるものでは、廃絶直後あるいは若干の流入土が堆積した後、人為的に埋め戻されたものと、すべて自然堆積土のものがある。前者については、残りの良いものをみると完全に埋め戻されたものは少なく、土壤中位まで埋め戻された後、再度流入土が堆積しているものが多い。また、土壤の底面や堆積土中に土器や焼土、炭化物、骨格がまとまって廃棄されているものが8基検出されており、土壤の使用目的が終わった後、ゴミ捨て穴に転用されたものと考えられる。



図版446 土壤の規模と深さ



図版447 A・B類分布毎の規模



図版448 土壤の分布(S=1/1000)

表21 土壤一覧表

番号No.	平面形	規模(m)	深さ(cm)	地	Pz(%)	砂(%)	粘土(%)	堆積土	堆積No.	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	地	Pz(%)	砂(%)	粘土(%)	堆積土
SK006	西円形	4.8	39	C	無	無	無	B	SK209	円形	1.1	—	112	A	無	無	A
SK014	不整地門形	2.1×1.2	17	C	無	無	無	B	SK311	円形	1.4	—	121	A	有	無	A
SK015	不整地門形	1.4×0.8	25	C	無	無	無	B	SK312	円形	1.6	—	32	A	無	無	B
SK016	不整地門形	1.1	18	C	無	無	無	B	SK313	円形	1.5×1.2	34	B	無	無	U	
SK017	円形	1.0	60	C	無	無	無	B	SK314	円形	1.5	16	28	有	有	(4)	A
SK019	不整地円形	0.6	7	C	無	無	無	B	SK315	円形	1.2×0.7	70	B	無	無	U	
SK024	円形	2.7×2.2	100	B	有	無	無	B	SK316	円形	1.2	—	88	A	無	無	B
SK025	円形	2.3	89	A	有	無	無	B	SK317	円形	1.9	—	81	A	無	無	B
SK026	不整地円形	1.2×0.9	20	C	無	無	無	A	SK319	円形	2.1	114	5	有	無	無	A
SK027	円形	1.2	48	B	無	無	無	B	SK321	円形	1.8×1.5	26	B	有	無	無	B
SK028	円形	1.3	27	C	無	無	無	B	SK323	円形	1.8×1.5	60	B	有	無	無	B
SK030	不整地門形	2.9×1.3	30	C	無	無	無	A	SK324	円形	1.5	44	B	無	無	無	B
SK031	円形	0.9	34	C	無	無	無	B	SK326	円形	1.3	40	B	有	無	無	B
SK032	円形	1.6	47	B	有	有(4)	無	B	SK327	円形	1.1	40	B	有	無	無	B
SK033	円形	1.4	27	B	有	無	無	B	SK329	円形	0.9	10	B	無	無	無	B
SK034	円形	2.1	97	A	無	無	無	B	SK329	円形	1.6	25	B	無	無	無	B
SK035	円形	1.5	45	B	無	無	無	B	SK330	円形	1.9	51	A	有	無	無	B
SK037	円形	2.1	59	B	無	無	無	B	SK331	円形	2.7×1.8	55	B	無	無	無	U
SK038	円形	1.7	62	A	有	無	無	B	SK332	円形	1.3	58	B	無	無	無	B
SK040	円形	1.4	45	B	無	無	無	A	SK335	円形	1.3	46	B	有	無	無	A
SK041	円形	1.3	51	B	無	無	無	A	SK336	円形	1.5	74	B	有	無	無	A
SK043	円形	1.3	73	A	無	無	無	A	SK337	円形	1.3	70	A	有	無	無	A
SK043	不整地円形	2.0	85	A	有	無	無	B	SK339	円形	2.1	120	A	無	無	無	A
SK049	円形	1.4	40	B	有	有(4)	無	B	SK347	円形	1.9	73	B	無	無	無	A
SK050	円形	1.7	45	A	無	無	無	B	SK349	円形	1.5	80	A	無	無	無	A
SK051	円形	2.4	38	C	無	無	無	B	SK351	円形	1.5	82	A	有	無	無	A
SK052	円形	1.3	47	B	無	無	無	B	SK352	円形	1.9	30	B	有	無	無	A
SK054	円形	1.1	24	E	有	無	無	B	SK353	円形	1.7×1.2	97	A	無	無	無	B
SK056	円形	1.9	20	A	無	無	無	B	SK354	円形	1.0	50	B	有	無	無	A
SK057	不整地円形	1.4	20	C	無	無	無	A	SK355	円形	1.8×1.6	120	A	無	無	無	B
SK059	円形	2.1	23	B	無	無	無	B	SK357	円形	2.8×1.6	55	B	無	無	無	B
SK061	複円形	2.5×1.6	68	B	有	有(2)	無	B	SK358	円形	1.2	35	B	有	無	無	B
SK062	円形	2.6	55	A	無	無	無	B	SK359	円形	2.0	91	B	無	無	無	B
SK064	不整地丸方周	3.0×2.7	20	C	無	無	無	B	SK362	不整地円形	1.8×1.2	32	A	無	無	無	A
SK066	円形	1.8	61	B	有	有(4)	A	B	SK353	円形	1.7	93	B	無	無	無	A
SK068	円形	1.9	78	B	無	無	無	B	SK354	円形	1.7	91	A	無	無	無	A
SK071	円形	2.0	41	B	無	無	無	B	SK355	円形	1.8×1.6	120	A	無	無	無	B
SK072	円形	1.8	50	B	無	無	無	B	SK356	円形	2.8×1.6	55	B	無	無	無	B
SK075	円形	1.3	55	B	無	無	無	B	SK357	円形	1.2	34	B	無	無	無	B
SK074	円形	1.8	53	B	無	無	無	B	SK358	円形	1.8×1.4	20	B	無	無	無	B
SK075	複門形	2.7×1.7	52	A	有	無	無	B	SK359	円形	1.8×1.6	25	B	無	無	無	B
SK076	円形	1.8	46	B	有	無	無	B	SK367	円形	1.4	116	A	無	無	無	A
SK087	複円形	3.2×2.3	60	A	無	無	無	B	SK378	円形	2.2	34	U	無	無	無	A
SK097	円形	1.6	55	B	有	有(4)	A	B	SK379	円形	1.2×0.9	18	C	無	無	無	A
SK098	円形	1.1	45	B	無	無	無	A	SK381	円形	1.7	19	B	無	無	無	B
SK099	円形	1.3	70	D	有	無	無	B	SK382	円形	2.0	40	B	有	有(4)	B	
SK161	不整地円形	1.5×1.2	70	C	無	無	無	A	SK383	円形	1.8	44	B	無	無	無	B
SK162	不整地円形	1.8×1.1	58	C	無	無	無	B	SK384	円形	1.7	15	B	有	有(4)	B	
SK164	調丸島方周	3.0×2.1	49	C	無	無	無	B	SK385	円形	1.8×1.4	50	B	無	無	無	B
SK165	円形	2.1	51	B	無	無	無	B	SK386	円形	1.6	22	B	有	無	無	B
SK166	円形	1.1	67	C	無	無	無	A	SK387	円形	1.3	44	B	無	無	無	B
SK168	不整地円形	1.8×1.1	8	C	無	無	無	B	SK389	円形	0.9	67	A	有	無	無	A
SK169	複円形	2.5×2	53	A	有	無	無	B	SK390	円形	0.8	70	A	無	無	無	A
SK170	円形	1.7	72	A	有	無	無	B	SK392	円形	1.0	82	B	無	無	無	A
SK114	不整地円形	0.7	30	C	無	無	無	B	SK393	円形	0.9	58	B	無	無	無	A
SK115	不整地円形	1.9×0.9	26	B	無	無	無	B	SK398	円形	0.8	18	B	無	無	無	A
SK116	調丸島方周	1.8×0.7	44	B	無	無	無	A	SK413	円形	0.6	60	B	有	無	無	A
SK117	円形	0.6	20	C	無	無	無	A	SK411	不整地円形	1.5	66	A	有	無	無	A
SK118	不整地円形	2.8×1.7	46	B	有	無	無	B	SK415	調丸島方周	2.8	20	C	無	無	無	B
SK119	円形	1.4	24	B	有	無	無	B	SK417	円形	0.8	28	C	無	無	無	A
SK123	不整地円形	0.8×0.5	24	C	無	無	無	A	SK420	円形	1.5	20	B	有	無	無	B
SK124	円形	0.8	48	B	無	無	無	B	SK421	円形	1.0	44	B	無	無	無	A
SK125	不整地円形	0.7	28	C	無	無	無	B	SK423	円形	0.7	54	B	無	無	無	A
SK126	円形	1.6	47	B	有	無	無	B	SK414	円形	0.6	44	B	無	無	無	A
SK127	複円形	2.0×1.5	22	C	無	無	無	A	SK416	円形	0.8	30	A	無	無	無	A
SK128	円形	0.9	18	C	無	無	無	B	SK418	円形	0.8	50	A	無	無	無	A
SK130	不整地円形	0.8×0.6	40	C	無	無	無	A	SK419	円形	0.8	23	C	無	無	無	B
SK134	不整地円形	0.7×0.5	35	C	無	無	無	A	SK423	円形	0.3	15	C	無	無	不明	A
SK136	複円形	1.0×0.8	53	B	無	無	無	B	SK424	円形	0.8	80	B	無	無	無	A
SK138	不整地円形	1.0×0.5	31	B	無	無	無	A	SK429	円形	2.3	10	B	有	有(4)	A	
SK139	複円形	1.3×0.8	10	C	無	無	無	A	SK448	円形	2.6	52	B	無	無	無	B
SK301	円形	1.4	25	B	有	無	無	B	SK431	不整地円形	5.5×3.6	20	C	無	無	無	A
SK302	円形	1.1	30	B	無	無	無	B	SK432	不整地円形	1.2	60	B	無	無	無	A
SK303	複円形	2.1×1.5	110	A	無	無	無	B	SK442	円形	0.7×0.4	18	C	無	無	無	A
SK304	不整地円形	1.6×1.3	95	A	無	無	無	B	SK443	不整地円形	0.7	26	B	無	無	無	A
SK305	円形	1.8	30	B	有	無	無	B	SK445	不整地	不明	不明	B	不明	不明	不明	B
SK306	円形	1.6	36	B	有	有(4)	無	B	SK449	円形	2.4	26	B	無	無	無	B
SK307	円形	1.6	35	B	有	無	無	B	SK455	円形	1.8	26	B	無	無	無	B
SK308	円形	1.5	90	A	無	無	無	B	SK469	円形	1.0×0.5	26	B	無	無	無	B

*堆積土：A、地中に人為的堆積があるもの

B：すべて自然堆積のもの

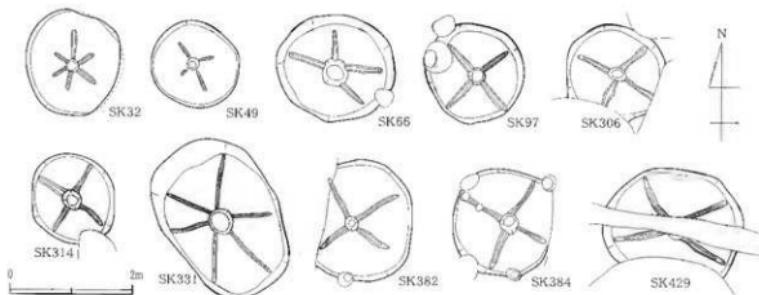
*未縁塗のものは斜線

この他、1基のみだが、土壙の使用後、平面形や規模を変えることなく、中位まで埋戻し住居として転用されているものもあり、床面からは周溝と炉が検出されている(SK118→SI70)。これは、使用後の土壙が廃棄の場だけでなく、生活の場としても使用されていたことを示している。

施設：土壙底面にピットをもつものを44基検出した。その中にはピットから放射状に数本の溝が取り付くものも10基検出されている。このような、底面にピットのある土壙は仙台市山田上ノ台遺跡(主浜：1987)、七ヶ宿町小笠梁川遺跡(前出)、岩手県五庵I遺跡(石川・渡辺：1987)、岩手県鳩岡崎遺跡(相原・鈴木：1982)、青森県鶴平遺跡(北林他：1983)など県内外の多数の遺跡で検出されている。更に放射状の溝跡があるものも、県内では利府町郷楽遺跡(菊地・庄子ほか：1990)、岩沼市北原遺跡(木皿他：1993)に検出例がみられる。郷楽遺跡の土壙は、ピットから放射状に延びる溝跡のほかに、土壙底面壁際にも周溝状に溝が巡っているもので、本遺跡の土壙とは若干様相を異なる。また、県外では山形県遊佐町吹浦遺跡(渋谷・黒坂：1988)や岩手県上野平遺跡(酒井・阿部：2000)、青森県牛ヶ沢(4)遺跡(村木・小笠原：2001)などで、本遺跡と同様にピットから溝跡が放射状に延びるもののが検出されている。

機能：遺物の出土状況から、土壙の機能を伺わせる遺物は出土していないが、これまでの他遺跡の発掘成果や分析結果をみると、平面形が円形や橢円形で、断面形がA・B類に属するような土壙の機能としては植物性食料の貯蔵施設と考えられているものが多く、形態的特徴の類似性から、A・B類の多くも貯蔵穴として捉えられるものと考えられる。C類としたものについては残りの良い土壙の検出数も少なく、具体的な機能については不明である。

なお、A・B類にみられる底面のピットおよび溝跡の機能について、山田上ノ台遺跡では、底面のピットとそれを有する土壙について「柱穴と考えられ、上屋構造をもつものと考えられているものがある」としている。今回の調査でもSK319・322で柱痕跡と掘方埋土を検出しており、これらが柱穴であることが分かっている。柱穴は概して浅く、大きな重量を支えるものではないと考えられるが、この柱を中心にして放射状に垂下させた極めて単純な上屋を支えたものである可能性が考えられる。放射状の溝跡については、地面からの湿気を避ける為に敷いた材の据え方や間仕切り溝といった様々な用途が考えられるが、今回の発掘でこれらを明確にする根拠は得られなかった。



図版449 底面に溝のある土壙

時期：土壤からの遺物の出土状況をみると、底面からの出土例は稀で、時期が特定できるものはSK14・26・30・127・340土壤(大木6式期)、SK73・308・309・316・319・355・367土壤(大木7a式期)の計12基のみである。この他、出土した土器の破片や重複関係から、ある程度の時間幅をもって捉えられるものは、表22のようになっている。時期的な分布としては、調査区西側の

W-100~125周辺の土壤に大木7a式期頃のものが比較的多い傾向にある(図版450)。

この他、縄文時代後・晚期の土壤が5基検出されている(SK64・101・394・395・431土壤)。貯蔵穴と考えられるものはSK394・395の2基で、直径が0.8~0.9mと、他と比較するとやや小規模である。これらは西側土壤集中地点の西端で検出され、周辺ではほぼ同様の土壤がやまとまとみてみつかっており(SK396・397・412・413・414・416・424等)、同時期のものである可能性を考えられる。

(5) 集落の構成

今回の調査区は東西にのびる台地状小丘陵の北西側に位置し、すぐ北側は沢地となっている。遺構には竪穴住居跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴、遺物堆積層があり、検出状況をみると竪穴住居跡をはじめとするこれらの遺構は、調査原点を基準にW-10~135mの東西約125mの範囲に分布する。特に調査区ほぼ中央のW-50~105では竪穴住居跡や掘立柱建物跡が数多く重複しており、調査区東西端では縄文時代前・中期の遺構は検出されていない。こうした遺構検出状況は平成13・14年度に築館町が集落範囲と遺構配置の把握のため行った、遺跡南側の確認調査の結果ともほぼ一致している(図版450)。それをみると、南北の遺構分布範囲はN-20からS-75付近までの丘陵ほぼ南北端まで伸びる。居住域となり得る丘陵の範囲は東にまだ大きくなるにも関わらず、各遺構はほぼ同位置で数回にわたる建て替えないし、つくり替えがなされているものが多い。また、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴といった主要な遺構は各々の位置関係を保ちながら群を成して検出されており、集落内における場の使われ方に一定の制約があったことを伺わせる。以下、各時期毎に集落構成とその変遷を検討する。

(大木5式期)

時期が把握できるものとしては、

竪穴住居12軒(建替含む)-SI45ab・77a~d・80・391ab・405・451・458

遺物堆積層1ヶ所-SX140

がある。

竪穴住居の形態には長楕円形(A類)、正方形(C1類)、長方形(B2類)がある。SI77・80やSI45・47

表22 土壤の時期

遺構No.	新面形	地点	時間	遺構No.	新面形	地点	時間
SK340	A	西	大木6	SK038	A	東	大木6以降
SK308	A	西	大木7a	SK352	A	西	大木5以降
SK309	A	西	大木7a	SK303	A	西	大木7a以降
SK316	A	西	大木7a	SK304	A	西	大木7a以降
SK355	A	西	大木7a	SK312	A	西	大木7a以降
SK367	A	西	大木7a	SK116	B	東	大木5以前
SK073	B	東	大木7a	SK119	B	東	大木5以前
SK319	B	西	大木7a	SK126	B	東	大木5以前
SK014	C	東	大木6	SK076	B	東	大木6以降
SK026	C	東	大木6	SK099	B	東	大木6以降
SK030	C	東	大木6	SK098	B	東	大木6以降
SK127	C	東	大木6				不明のものについてSK116-119-120は複数個SK3-76-99-303-304-312-2582出土土器から見受けたものである。

などの遺構は重複しており、これらの住居が全て同時存在したものではなく、少なくとも2期以上の変遷を考えられる。住居方向は概ね南北方向を向くが、ばらつきが認められる。また、主に調査区東側で検出されている正方形を呈するC1b類の住居跡(SI 2~4他)は、出土遺物や重複関係によって時期を特定することはできなかったが、同じC1類で大型に属するSI451は本期に比定されており、他の遺跡に類例を求めるべきは、名取市今熊野遺跡(小川・村田:1986)や前出の小梁川遺跡29・31号住居跡等といった、本期に先行する前期前葉に多くみとめられる。したがって、C1類に属する住居の時期については本期、あるいはこれに先行する大木4式期の住居の可能性も考えられる。

- SI 2・(3)・4・7・47・(53)・483

掘立柱建物跡・貯蔵穴で同時期と判別されるものは検出されていないが、該期の土器は調査区全体に広く分布しており、遺構が新しい時期のものによって壊された可能性は充分考えられる。また、時期が特定できなかった遺構の中には、同時期の遺構が多く含まれているものと考えられ、実際の遺構の数はもっと多かったものと思われる。

〈大木6式期〉

時期が把握できるものとしては、建て替えを含め

竪穴住居15軒

SI78・100ab・120・170~172・390・400・403・404・406・408・409・480

掘立柱建物跡1軒-SB155

土壙4基-SK14・30・127・340

がある。また、住居形態や出土遺物、重複関係の検討結果から、SI21・96・129は本期以前、SI20・44・350・360a~c・361住居跡、SB149・103・166・450掘立柱建物跡、SK38・76・99土壙は出土遺物は、本期あるいは後続の大木7a式期に属する可能性があるものと考えられた。

住居跡の多くは、ほぼ同位置で重複、建て替えを繰り返しており、調査区中央部のSI390やそれに接するSI406周辺では、少なくとも7回以上の変遷が認められる。他にSI390から約20m東にあるSI120周辺でも住居のまとまりがあり、住居形態の変遷も近似するなど、これら2つの住居のまとまりは併存しながら変遷したものと考えられる。

〈大木7a式期〉

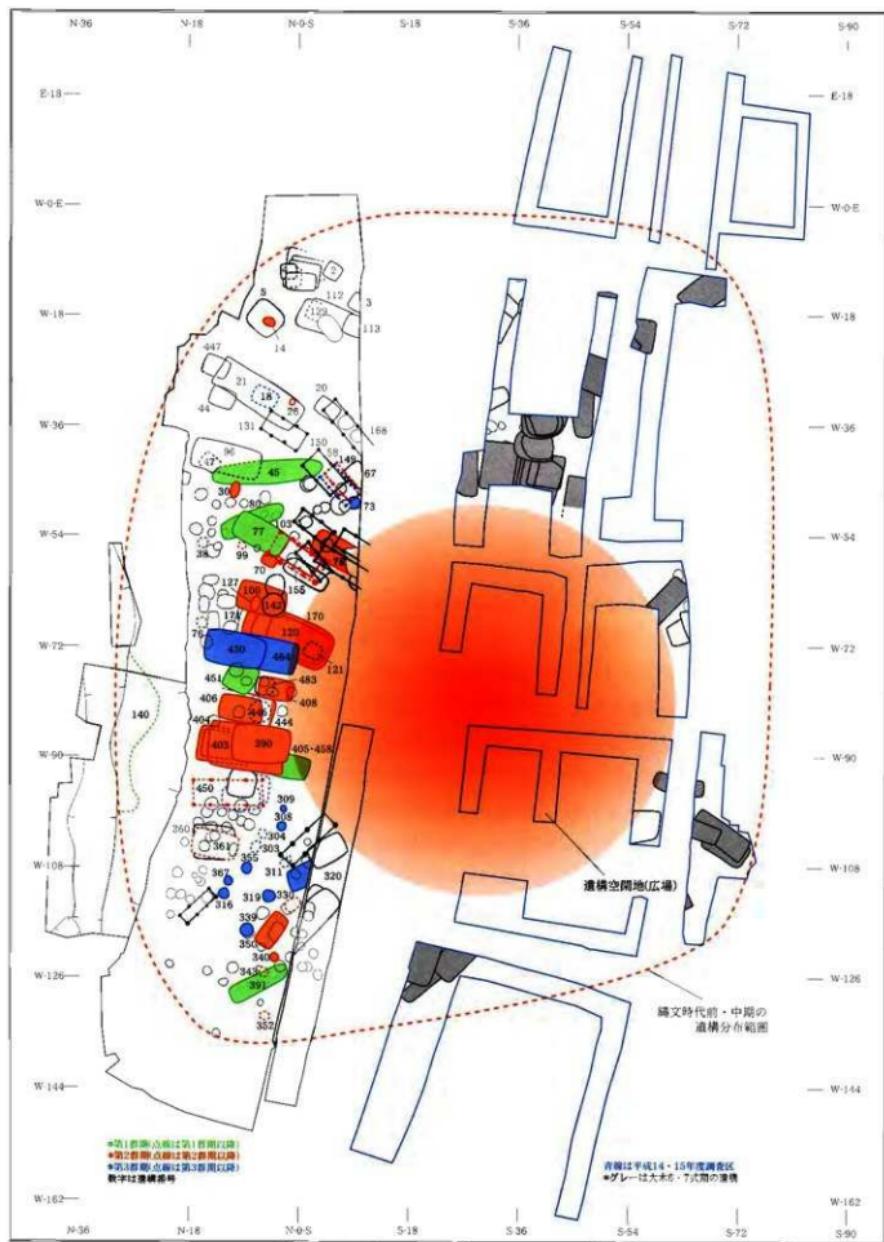
時期が把握できるものとしては、

竪穴住居7軒(建替含む)-SI320・454・484ab・487・488・430

土壙7基-SK303・304・308・309・316・319・355

がある。また、住居形態や出土遺物、重複関係の検討結果から、SI18・20・44・350・360a~c・361住居跡、SB58・149・103・166・450掘立柱建物跡、SK38・76・99土壙は本期に属する可能性があるものと考えられた。

調査区中央部で大木6式期にみられたような2つの大型住居を中心とした変遷は途切れ、そのほぼ



中間部でSI488～430住居跡の6回の変遷が認められる。竪穴住居の形態は前期と同様、長方形を呈するものが主で、細分では、B 3類がこの時期に属し、住居が全体に小型化する傾向がある。

【大木6・7a式期の遺構配置】

平成13・14年度の調査成果とあわせ、大木6・7a式期の嘉倉貝塚の集落形態について概観する。

構成：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙(貯蔵穴含む)で構成される。

土器等日常生活品の捨て場である遺物包含層や墓域などは見つかっていない。但し、大木5式期を中心に形成された丘陵北側のSX140遺物堆積層(第2層)からは、この時期の土器片も少量であるが出土しており、SX140第1層等の後世の侵食作用等により残存はしないものの、継続して捨て場として使用されていた可能性も考えられる。墓域については、北側の沢を挟んだ反対側の確認調査でも見つかっておらず、更に離れた別の場所につくられていた可能性も考えられる。

配置：住居跡や掘立柱建物跡の配置を見ると、調査原点を基準にS-30・W-90周辺を中心とした内径約65mの環状に配されており、環状内部では該期の遺構は検出されておらず、空閑地(広場)となっている。こうした環状集落は広場を中心、墓域→掘立柱建物跡→竪穴住居跡→貯蔵穴等の多層構造となる場合と、単層に近い構造となる場合とがあるが、本遺跡の場合は、ほぼ後者に属するものと捉えられた。

また、現存する遺構から環状配置の時期を明確に捉えられるのは大木6式期以降であるが、大木5式期のSI77住居跡も環状配置と一致した方向を示している。検出遺構数が少なく詳細は不明だが、環状配置をとる時期が大木5式期までさかのばる可能性は残されているものと考えられる。

住居跡：主に集落の北部と東部の2ヶ所に集中して分布し、長軸を集落中心部に向けた方向で建てられている。ほぼ同位置で重複、建て替えを繰り返しており、大木6・7a式期を合わせると、SI120・430周辺では少なくとも計10回の変遷が認められる。他に西部と南部にもほぼ同位置で重複しながら点在する。平面形は長方形を呈し、当初から大小の分化が認められるが、初期の住居が全体として最も規模が大きく、B 2a類は長軸12mを越す大型住居である。その後、変遷の過程で徐々に規模が小さくなり、最終的には9m前後のやや大型の住居と5m前後の住居で構成されるようになる。

掘立柱建物跡：時期がわかるものは少ないが集落北東部と北西部で多く検出されている。基本的に住居跡群の間に配置されており、ほぼ同位置で重複、建て替えを繰り返している。建物方向は住居跡と同様、長軸を集落中心部に向けた方向で建てられている。

土壙：前項で述べたように、土壙の多くは貯蔵穴と考えられた。分布を見ると大きく北東部と北西部の2ヶ所に集中している。

《北東部の貯蔵穴群》

環状に巡る住居跡や掘立柱建物跡の外側に集中して分布している。

貯蔵穴同士の重複や、大木5式期のSI80住居跡より古いものもあることから、これらが同時に存在したわけではないが、出土遺物の内、第3群土器に相当するものはSK73を除き、殆ど出土しておらず。北東部の貯蔵穴群は大木5・6式期を中心に機能していた可能性が高いものと考えられる。

《北西部の貯蔵穴群》

特にSB450掘立柱建物跡の西側とSI350周辺に集中して分布しており、両者の間には通路状となる空闊地が認められる。これについては沢を挟んだ北側丘陵へ続く尾根の方向へ向かっており、広場から森への通路として機能していた可能性も考えられる。

その空闊地沿いには深さ80m以上の深い貯蔵穴が並び、空闊地からみて奥には深さ50cm前後の浅い貯蔵穴が多く認められる。時期のわかる貯蔵穴の多くは空闊地沿いに集中し、大木7a式期に属する。奥の貯蔵穴については遺物がほとんど残存しないため、時期を特定できるものは少ないが、北東部同様、土壌同士の重複があり、SI350・360住居跡等に壊されているものも多い。また、SK340をはじめ、SK330・343・352など、大木6式期に属する可能性を有する土壙も幾つかあり、必ずしも両者が同時存在したものではないようである。また、深さ80cm以下の貯蔵穴で大木7a式期に属するものはSK73を除き認められておらず、貯蔵穴の深さが、時期により変化している可能性もあるものと考えられる。

以上が縄文時代前期末から中期初頭に相当する嘉倉貝塚大木6・7a式期の集落構成である。

類例：県内の該期の集落としては七ヶ宿町小梁川遺跡(村田他：1987)があり、小判形で長軸15m前後の大型住居2軒が検出されている。また、時期は遡るが縄文時代早期末から前期初頭に位置づけられる大倉遺跡(笠原：1985)でも長方形を呈し、長軸10m前後の大型住居跡2軒が検出されており、大型住居跡の発見例としては本遺跡が3例目となる。

長方形を呈する大型住居は縄文時代早期中葉以降にみられる住居形態である。大木6・7a式期の縄文時代前期末葉～中期初頭は、類例が北海道を除く東日本一円に広がることからその発展期とされている(武藤：1997)。また、前期中葉から中期中葉の時期には、長方形大型住居が主体となって構成される集落の事例が多く認められ、環状や列状に遺構が配されるものが多い。特に環状集落は岩手・秋田県以南の東北地方から関東・中部地方にかけてその典型例が多く認められており、本遺跡もその一例となるものである。

県内では川崎町中ノ内A遺跡(古川他：1987)において、環状集落の可能性が指摘されているが、全容は明らかではない。近県に目を向ければ、当該期に近い環状集落の発見例には、岩手県遠野市新田II遺跡^{註1}(佐藤・小向：2002)、岩手県胆沢町大清水上遺跡(佐藤：2000・2001)、同北上市蟹沢館跡遺跡(浅田：1993)、湯田町岬山牧場I遺跡(吉田：1996・阿部：2000)、秋田県協和町上野山II遺跡(大野他：1998)、山形県遊佐町吹浦遺跡(渋谷・黒坂：1988)等があげられる。時期は新田II(綾織新田)遺跡が縄文時代前期大木2～4式期で、大形住居を主体に構成される集落の初期事例で、他はこれに後続する時期の遺跡である。しかし、これらの中に掘立柱建物跡を構成要素とする遺跡は含まれておらず、掘立柱建物跡を含む環状集落としては、やや時期は降るが中期前半の岩手県紫波郡西田遺跡(佐々木：1980)や山形県村山市西海瀬遺跡(黒坂：1992)があげられる。他地域では栃木県宇都宮市根古谷台遺跡^{註2}(梁木：1988)、群馬県安中市中野谷松原遺跡(大工原：1996)、新潟県清水上遺跡(田海：1996)、新潟県中郷村和泉A遺跡(荒川：1999)等の関東・北陸地方に類例が求められ、これらは本遺跡と同時期あるいは古い時期に属する遺跡である。掘立柱建物跡の性格については、居住施設、

貯蔵施設、祭祀施設、集会所等の公共施設といった様々な面からの検討が行われているが、本遺跡の調査でも、明確な資料は得られなかった。

また、上記の遺跡の中で本遺跡との関連で最も注目される遺跡として、岩手県胆沢町大清水上遺跡があげられる。本遺跡から約50km北にあって地理的にも近く、北上川支流域に立地するといった点も共通する。時期は大木5式期中心で、本遺跡の環状集落の時期より、やや古い時期の集落である。中心の広場(造構空白域)は直径約20mと、本遺跡より小規模の集落であるが、主に長軸約10m以上の大型住居で構成され、周辺では貯蔵穴やTピットなどが数多く見つかっている。

〈大木7a式期以降〉

該期の遺構として時期が把握できるものは、竪穴住居1軒[SI446]、土壙1基[SK442]のみである。出土遺物や重複関係によって時期を特定することはできなかったが、SI142については、住居形態がSI446と同様D類であることから、ほぼ近い時期のものと考えられる。残りは悪いもののSI81・147もこれと同類に属する可能性も考えられる。

この時期になると住居形態は長方形から、不整円形へと変化しており、住居方向も環状配置の方向からは、ややはざれた方向を示すようになる。今回検出された掘立柱建物跡については、時期不明のものも含め建物方向は概ね環状配置に沿った方向を示しており、本期に属すると考えられるものは認められなかつた。

註1：平成14年11月に国指定史跡となる。遺跡名は報告書刊行段階では「新田Ⅱ遺跡」であったが、史跡申請にあたり「鍛冶新田遺跡」に改められた。

註2：完全な環状配置はとっていないが住居跡、建物跡、墓塚が中心部の広場を指向した弧状に近い遺構配置となっている。

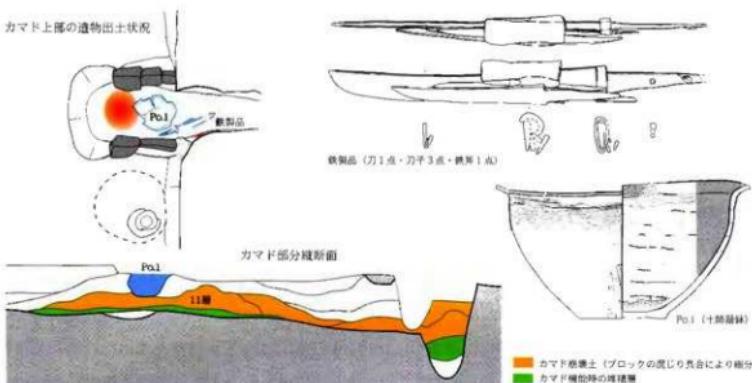
B 古代

1 SI310住居跡カマド上部出土の遺物について

今回検出された古代の竪穴住居跡は、出土土器から奈良時代(8世紀後半)から平安時代(9世紀前半)頃のものと考えられるが、その中でSI310住居跡は8世紀後半頃に位置づけられる住居跡である。

住居構造をみると、一辺3.5mの正方形を呈し、主柱穴、周溝は検出されていない。東辺中央にはカマドが付設されており、その右脇に据えられた須恵器甕の上半部と貯蔵穴状ピットが認められる。須恵器甕は大形の甕などを置くための器台的な役割を果たしたと推定される。カマドでは側壁を凝灰岩切石と白色粘土で構築しており、支脚が左右に2個配置されている。本住居は規模・構造に於いて今回検出された他の住居と大きな違いはないが、カマドの崩壊土直上から土師器鉢1点・刀1点・刀子3点・鉄斧1点がまとめて出土している点で注目される。

出土状況を詳細に検討すると、内面が黒色処理された土師器鉢は口縁部を上にして、鉄製品は一つにまとめられた状態でカマド本体と煙道の境目あたりから並んで出土している(図版404・451)。いずれも同一層(11層)の上面に載っており、遺物直下の11層は白色粘土・黄褐色粘土・焼土・炭化物・地



図版451 SI310住居跡カマド

山の各ブロックで構成されており、明らかにカマド・煙道上部の崩落土である。この層では各ブロックが交じり合った状態であることと、更に下部には機能時の炭化物層が堆積するのみで自然流入土が認められないことから、カマドは廃絶時に破壊されていたと推定される。また、土器器鉢には二次的な受熱の痕跡も認められない。以上のことから、鉢と鉄製品はカマドと煙道の天井部を人為的に破壊した後、その場所に置かれたものと判断される。

このような事例は、管見の限り県内では認められない。遺物を据え置く行為がカマドを破壊するという行為から連続して行われている点や、一般的な住居からの出土例が少ない刀や鉄斧が遺物に含まれている点で特異な事例であり、このことに留意すればカマド廃棄に伴う何らかの祭祀的な行為の痕跡と考えられる。

カマド廃絶時の祭祀的な行為については北九州や関東地方で比較的早くから注目されており、福岡県甘木市立野遺跡45号住居跡(武田：1986)、東京都稲城市多摩ニュータウンNo.512遺跡4号住居跡(飯塚：1984)、千葉県佐原市馬場遺跡004号住居跡(栗田：1988)、長野県御代田町川原田遺跡H-6号住居跡(御代田町教育委員会：1993)など古墳時代後期から平安時代の住居跡で事例が報告されている。いずれの住居でもカマドを廃絶時に破壊する点では共通しているが、その後に据え置かれた遺物は様々で、据え方にも違いが認められる。このことに関して、カマド廃棄に伴う祭祀行為は「カマドを封鎖する」ことが本義であり、その儀礼的行為の細かな差異は地域性として理解されるという指摘がある(青木：1999)。なお、どの遺跡でもこのような行為が行われた住居は集落内の数軒に限られ、住居規模・構造に於いては他の住居と差異が認められない点も共通しており、何故その住居が祭祀的行為の対象となったかは現状では不明である。

第六章 付編

嘉倉貝塚出土黒曜石の原産地推定

小村美代子(バレオ・ラボ)

1 はじめに

嘉倉貝塚からは黒曜石製の石器等が出土している。今回、これら黒曜石の蛍光X線分析を非破壊で行い黒曜石の原産地について検討を行った。

2 試料と方法

黒曜石の産地推定は、望月ほか(2001)が示した蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定の判別図法と同様の方法を用いた。すなわち、主成分元素のカリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)と微量元素のルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素を蛍光X線分析で測定し、各元素のX線強度(cps : count per second)から以下に示す指標値を計算する。

$$1) Rb\text{分率} = Rb\text{強度} * 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$$

$$2) Sr\text{分率} = Sr\text{強度} * 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$$

$$3) Mn\text{強度} * 100 / Fe\text{強度} \quad 4) log(Fe\text{強度} / K\text{強度})$$

そしてこれら指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率 - 縦軸Mn強度 * 100 / Fe強度の判別図と横軸Sr分率 - 縦軸log(Fe強度 / K強度)の判別図)を作成し、日本各地の黒曜石原石のデータと、遺跡から出土する黒曜石のデータを照合して、原産地を推定するものである。

今回分析する嘉倉貝塚の黒曜石の試料点数は24点である(表1)。試料は表面の汚れを除去する為、蒸留水で超音波洗浄を行った。その後、比較的平坦な面(あるいは凸面)を選んで測定面とした。

分析装置はセイコー電子工業(株)製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lである。装置の仕様は、X線発生部の管球のターゲットはロジウム(Rh)、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電流自動設定(μ A)、電圧50kV、試料室内は真空である。

3 分析結果

表3には、各元素のX線強度(cps)と計算による指標値を示す。これら指標値を、当社で測定した日本各地の黒曜石原石のデータと照合したところ、東北・北陸地方原産の黒曜石と類似することが確認された。日本各地全ての黒曜石のデータを判別図にプロットすると非常に細かく見にくい為、東北・北陸地方原産の黒曜石と嘉倉貝塚の黒曜石のデータのみをRb分率 - Mn * 100 / Fe判別図(図1)とSr分率 - log(Fe / K)判別図(図2)にプロットすることにした。図1と図2に用いた東北・北陸地方の黒曜石の原产地及び产地名称については表2に示す。図1と図2より、試料は大きく4群(A～D)に分類された。

4 考察

A群(No.8、12～14、16、17、19～24の計12点)は、図1では湯ノ倉と土蔵2群の範囲にプロットされ、図2では湯ノ倉と根岸の範囲にプロットされる。このことからA群は図1及び図2両図で分布が重なる湯ノ倉が原産地と推定される。

B群(No.1、4～7、9、11、18の計8点)は、図1と図2で北上折居2群の範囲と一部その周辺にプロットされる。望月ほか(2001)は北上折居群を3群に分類している。これら3群のうち、北上折居1群は北上折居2群とかなり隣接することから、B群は北上折居1群・2群が原産地と推定される。

C群(No.2、3、15の計3点)は、図1では月山荘前付近、図2では月山荘前と出来島の中間位置にプロットされる。望月ほか(2001)によると、この月山荘前と出来島の間には山形県東田川郡羽黒町今野川群の黒曜石が分布する。当社ではこの今野川群の黒曜石を所持していない為、望月氏に分析して頂いたところ、今野川群と確認された。

D群(No.10の1点)は、図1ではA群と同じ湯ノ倉と土蔵1群・2群の範囲に、図2では土蔵2群からやや右にプロットされた。No.10の黒曜石は均一なガラスではなく、細かい斑晶を持ち油脂のような光沢があり、通常の石器に使用されるような黒曜石とはやや雰囲気が異なる。このため、分析値には若干の誤差が生じたものと考えられる。しかし、D群の分布のパターンは土蔵2群と近く、土蔵2群が原産地の可能性はある。このため、表3の原産地候補では土蔵2群とした。

以上より、今回の分析から宮城県栗原郡築館町に位置する嘉倉貝塚の黒曜石は、宮城県加美郡宮崎町湯ノ倉と宮城県仙台市太白区秋保町土蔵、岩手県水沢市折居町と山形県東田川郡羽黒町今野川から供給されていたことが推定された。

謝辞

今回の分析にあたって、沼津工業高等専門学校工業化学科の望月明彦氏に御協力、御教授を頂きました。ここに感謝の意を表します。

引用文献

望月明彦・高橋章太・佐々木繁喜(2001)、蛍光X線分析による東北・北陸地方の黒曜石产地の判別、日本文化財科学会第18回大会研究発表要旨集、144-145p.

表 1 試料の詳細

%	生産地	出土年月日	出土地・遺構	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)
1	5046	000524	SK319	2層	25.0	7.3	6.0	2.2
2	4553	000810	PS507		33.0	4.8	10.0	15.0
3	4923	990422	東区	SH29・1層	19.0	26.0	3.0	0.7
4	4485	000608	SK364	堆積土	47.0	16.0	16.0	10.2
5	5033	000516	SK309	4層	24.0	28.0	5.0	3.5
6	4996	990802		礫詰土	23.0	23.0	5.0	1.7
7	4342	001106	PA467		15.0	15.0	3.0	0.4
8	4483	000829	SI406	3層	43.0	26.0	7.0	7.2
9	8064	990420	東区	SK23・1層	18.5	15.5	13.8	4.5
10	8117	900729	中区	SI78倒壁A層	29.8	22.0	4.5	6.6
11	211	990429	東区	底面土	(21.0)	(10.9)	4.1	(1.3)
12	4337	000412	SI320	1層	18.0	24.0	2.6	0.9
13	3883	000421	SI320	1層	26.0	27.0	7.0	4.7
14	5161	000412	SI320	1層	14.0	29.0	6.0	4.1
15	3610	000714	SI396	1層	22.0	27.0	7.0	3.0
16	4411	000421	SI320	1層	18.0	27.0	8.0	2.4
17	4413	000421	SI320	1層	29.0	18.0	5.0	1.9
18	4082	000413	SI320	1層	26.0	16.0	5.0	1.5
19	5443	000413	SI320	1層	28.0	17.0	5.0	1.5
20	2499	000631	SI406	2層	44.0	35.0	6.0	8.7
21	4482	000829	SI406	3層	40.0	28.0	9.0	9.3
22	5009	000412	SI320	1層	19.0	27.0	4.0	1.5
23	5114	000413	SI320	1層	53.0	65.0	13.0	44.4
24	5143	000413	SI320	1層	26.0	24.0	11.0	5.0

表 3 石器の元素組成と計算された指標値

%	空疎値	K	Mn	Fe	Rb	Sc	Y	Zr	Rb分率	Mn=100/Rb	Sc分率	Ingr(Fe/K)	T-S-T'	原産地の候補
1	5046	17.7840	9.9860	105.8530	4.1250	5.0670	2.7000	11.6150	11.6229	3.3655	21.6474	0.7746	B	北上斜面1層・2層
2	4553	58.120	5.7140	57.2020	6.2426	6.3130	1.9310	5.6380	31.2005	9.9892	30.7442	0.3456	C	今野川群
3	4923	392.466	6.8660	66.3400	6.9340	7.4170	2.8320	6.0010	29.0586	10.4347	31.9919	0.3411	C	今野川群
4	4485	19.6260	3.5170	18.1520	4.2690	5.6970	3.1690	12.4290	16.7189	2.9767	22.1939	0.7877	B	北上斜面1層・2層
5	5033	18.1670	3.0679	13.1340	3.7940	6.2020	3.1360	12.8120	14.6232	2.6071	23.9693	0.6027	B	北上斜面1層・2層
6	4995	21.7840	3.7190	94.7369	3.5580	4.8130	3.1040	11.1420	15.7301	3.9258	21.2874	0.7414	B	北上斜面1層・2層
7	4342	21.070	4.3540	114.8390	4.3610	5.8260	3.9700	15.3610	15.5478	3.7916	21.1716	0.7336	B	北上斜面1層・2層
8	4483	7.7966	3.5460	160.1460	14.4920	8.9610	1.5720	12.5010	6.0833	2.2142	36.5367	1.3126	A	源ノ谷
9	8064	185.900	3.3440	104.4530	4.1860	5.2120	3.1610	12.5560	16.6713	3.2014	20.7576	0.7496	B	北上斜面1層・2層
10	8117	6.0707	7.7630	262.8180	4.2940	10.1640	16.8370	9.6140	6.2566	3.0295	44.5099	1.6202	D	北上斜面1層・2層
11	211	20.2400	3.7890	117.6570	4.4710	5.6110	3.2766	12.8150	17.0831	2.2204	21.4389	0.7644	B	北上斜面1層・2層
12	4337	9.8010	4.5910	189.2010	1.6420	0.3860	2.1330	14.3480	5.7596	2.4285	39.4306	1.2857	A	源ノ谷
13	3883	9.6740	4.0260	180.4340	1.3680	9.8720	2.2080	14.6420	4.8701	2.2368	35.1442	1.2702	A	源ノ谷
14	5161	9.9720	4.3710	182.4490	1.6580	9.3390	1.8170	14.9210	5.9611	2.3837	32.6783	1.2647	A	源ノ谷
15	3610	24.6750	3.9490	58.1840	5.6650	6.6270	2.0250	5.6530	32.0396	16.2245	30.9432	0.3725	C	今野川群
16	4411	9.5836	4.7350	196.9830	1.6490	9.8160	2.7530	15.8660	5.1661	2.4938	32.3735	1.3129	A	源ノ谷
17	4413	11.3840	5.7520	209.8880	9.5930	10.9630	2.2639	16.5590	6.1458	2.7272	34.4987	1.2655	A	源ノ谷
18	4082	17.2020	3.2630	113.8410	4.2570	6.6550	3.0330	12.0630	17.0476	2.8917	23.6726	0.8166	B	北上斜面1層・2層
19	5443	9.8870	4.8920	192.9610	1.1330	9.7860	2.5540	14.2100	4.9928	2.2751	35.2562	1.2904	A	源ノ谷
20	3499	9.1180	3.9460	172.2120	1.1940	8.7970	1.9990	13.7400	4.6695	2.2786	34.1897	1.2762	A	源ノ谷
21	4482	11.1640	4.9130	204.5889	1.8860	11.2030	2.1190	14.6450	6.3116	2.4002	37.5276	1.2632	A	源ノ谷
22	5009	9.6629	4.7150	188.3120	1.4980	9.4820	2.1750	14.3480	5.3975	2.5044	34.8686	1.2943	A	源ノ谷
23	5114	9.8420	4.5940	180.6990	1.7590	10.2170	2.0260	14.6440	6.1405	2.0423	35.6664	1.2828	A	源ノ谷
24	2143	8.1606	4.1970	169.0410	1.7590	9.1030	1.9540	12.8180	6.6693	2.4828	34.1781	1.3163	A	源ノ谷

表 2 東北・北陸地方黒曜石原産地と产地名

%	原産地	产地名
青森県	西津軽郡木造町出米島	出米島
	西津軽郡深浦町向路島	向路島
山形県	村山市山形西川町舟山舟前	舟山舟前
	東田川郡羽住町今野川木枝割	今野川
秋田県	男鹿古墳本海岸	男鹿市
	男鹿市今ヶ崎	今ヶ崎
新潟県	新潟市西坂山牧場	金ヶ崎
	新潟市金津	金津
宮城県	仙台市宮城町船引ノ森	森ノ森
	仙台市泉町相原	相原
福島県	福島市大里町	土塙1層
	福島市利府町	利府
岩手県	水沢市若狭町1層、2層(未採取)	北上斜面1層・2層

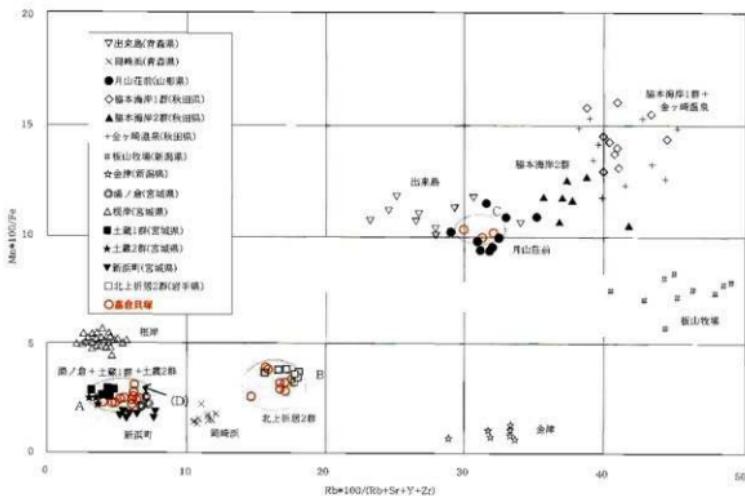


図1 Rb分画を用いた判別図

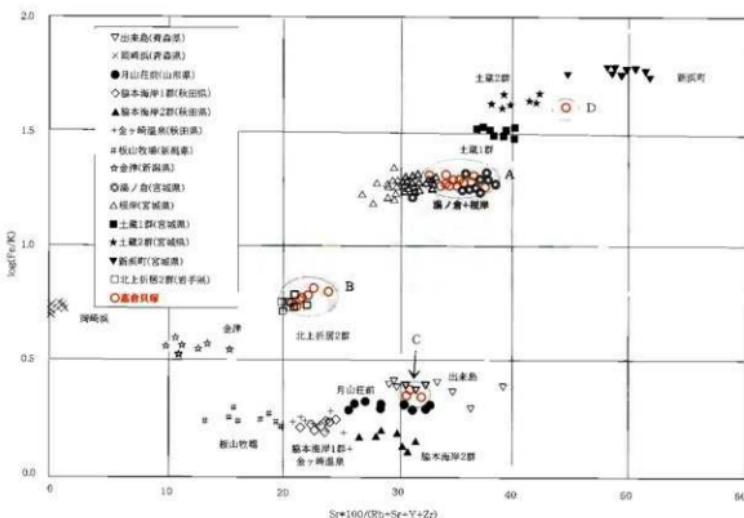


図2 Sr分率を用いた判別図

第七章 ま と め

嘉倉貝塚は、宮城県栗原郡築館町字萩沢加倉に所在し、築館町は宮城県北西部にある栗原郡の南東に位置する。遺跡は奥羽山脈から東に派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵の中で、伊豆沼から北西約2kmの、L字に張り出して半島状となった台地に立地している。標高は約20m。現在は宅地、畑、水田などに利用されている。

【縄文時代】

- 1 調査の結果、竪穴住居跡109軒、掘立柱建物跡27棟、土壙158基、竪穴状遺構1軒、遺物堆積層1ヶ所、そして非常に多くの柱穴等を検出した。
- 2 竪穴住居跡には長楕円、長方形、正方形、円形のものがあり、長楕円、長方形の住居跡には長さが約10m以上の大型の住居跡が多数ある。特にSI45住居跡は、長さが約18mあり、県内で最大規模の住居跡である。過去の県内での大型住居跡の発見例は小梁川遺跡・大倉遺跡のみで、今回の発見が3遺跡目となる。
- 3 掘立柱建物の中にはSB103・450掘立柱建物のように、高床建物の可能性も考えられる規模の大きな建物跡が発見されている。
- 4 土壙の内、貯蔵穴の可能性があると考えられたものは119基あり、主に円形と楕円形を呈している。
- 5 遺構は縄文時代前期後葉から縄文時代中期初頭の大木5式期から大木7a式期のもので、大木6～7a式期には広場を中心とした環状集落の形態を呈しており、こうした集落形態の遺跡は県内では初めての発見である。
- 6 住居、掘立柱建物などは同じ場所で何度も建て替えや造り替えがなされ、集落内において長期間、同じ性格をもった施設として使われており、本遺跡がこの時期の拠点的な大集落であったことを伺わせる。
- 7 遺物は縄文土器、石器をはじめ土偶、イチジク形土製品、袂状耳飾り、石剣などの稀少な遺物の他、土製品、石製品、獸骨などが出土している。時期は縄文時代前期後葉から中期初頭のものが中心で、他に縄文時代後・晚期のものが少量出土している。
- 8 イチジク形土製品は6点出土している。これは宮城県北部や岩手県南部の北上川中流域を中心に、本遺跡を除き11点しか発見されていない稀少なもので、発掘調査での出土は今回が最初である。

【古代】

- 1 調査の結果、奈良時代(8世紀後半)から平安時代(9世紀前半)頃と考えられる竪穴住居跡14軒、工房跡1軒、土壙4基を検出した。
- 2 SI310住居跡のカマド内からは廃絶後のカマド崩壊土上に土師器鉢、太刀、刀子、鉄斧が据えられた状態で出土しており、祭祀的性格を有する遺物として注目される。

引用・参考文献

- 相原康二・鈴木優子 1982 「江釣子村境岡崎遺跡」『東北縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XV-1・2 岩手県文化財調査報告書第70集
- 相原 淳一 1986 「小梁川遺跡遺物包含層土器編『七ヶ宿ダム開通遺跡発掘調査報告書Ⅱ』『宮城県文化財調査報告書』第117集
- 相原淳一・中鉢琢也 2002 「平成13年度嘉賀貝塚確認調査概報—伊治城跡他」『柴屋町文化財調査報告書』第15集
- 青木 敬 1999 「庵鹿豪考—多摩市和田西遺跡からみた接討—」『土壁』第3号 考古学を楽しむ会
- 秋田県教育委員会 1988 「上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡—東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ」『秋田県文化財調査報告書』第166集
- 1989 「上ノ山Ⅱ遺跡・東北横断新自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ 補遺」『秋田県文化財調査報告書』第186集
- 阿子島 香 1979 「折断調整石器」『聖山』 東北大学考古学研究会
- 浅田 知世 1993 「蟹沢郎遺跡発掘調査板報」『北上市埋蔵文化財調査報告書』第14集
- 阿部明彦他 1976 「上山市牧野遺跡」『上山市教育委員会
- 阿部 勝則 2000 「峰山牧場Ⅰ遺跡B地区発掘調査報告書—東北横断自動車道秋田線建設事業関連遺跡発掘調査」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第320集
- 阿部 恵・遊佐五郎 1978 「長者原貝塚」『南方町文化財調査報告書』第1集
- 阿部 恵 1990 「倉崎貝塚・唐木崎貝塚」『追町文化財調査報告書』第1集
- 天野順陽・千葉直樹 2003 「嘉賀貝塚」『柴屋町文化財調査報告書』第16集
- 荒川 隆史 1999 「和泉A遺跡 上信越自動車道関係発掘調査報告書V」『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第93集
- 飯塚武司他 1984 「No.512遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—昭和58年度(第4分冊)』東京都埋蔵文化財センター
1986 「No.512遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—昭和59年度(第4分冊)』東京都埋蔵文化財センター
- 石川長喜・渡辺洋一 1987 「五庄Ⅰ遺跡 東北縦貫自動車道開通遺跡発掘調査」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第97集
- 伊藤 玄三 1965 「埋蔵文化財緊急発掘調査概報(敷味貝塚)」『宮城県文化財調査報告書』第8集
- 稻野 裕介 1983 「荒ノ沢遺跡 1977~1982年度調査」『北上市文化財調査報告』第33集
- 江坂 譲介 1950 「北上川流域最奥部貝塚の調査」『貝塚』29 土曜会
- 大野憲司他 1998 「上ノ山Ⅱ遺跡発掘調査報告書」『秋田県文化財調査報告書』第166集
- 大場聰雄・寺村光晴 1964 「新潟県中頸城郡鍋屋町遺跡」『日本考古学年報』12
- 小川出・村田晃一 1986 「今熊野遺跡」『繩文・弥生時代編』『宮城県文化財調査報告書』第114集
- 小笠原好彦 1982 「繩文時代前・中期の上巣」『宮城の研究』I・考古学篇 清文堂
- 岡村 道雄 1979 「繩文時代石器の基礎的研究法とその具体例—その1—」『東北歴史資料館研究紀要』vol.5
- 笠原 信男 1985 「大倉遺跡 七ヶ宿ダム開通遺跡発掘調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第107集
- 加藤 孝 1956 「宮城県登米郡新田村糠塚貝塚について」『登米郡新田村史』
- 菊池逸男・庄子 敏 1990 「利府町郷家遺跡Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第134集
- 木皿直幸他 1993 「北原遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第159集
- 北林八洲晴他 1983 「鶴平(1)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書』第72集
- 興野 義一 1967~1970 「大木式土器理解のために(1)~(IV)」『考古学ジャーナル』13.16.18.24.32.48
1970 「大木5-b式の提唱」『古代』22-4
1981 「糠塚貝塚について」『追町史』
1984 「大木式土器について」『宮城の研究』I 清文堂
1990 「宮城県出土土製品2種の報告」『伊東信雄先生追悼 考古学古代史論叢』伊東信雄先生追悼論文集刊行会編
- 工藤信一郎 1994 「北原街道B遺跡—仙台市宮城地区」『仙台市文化財調査報告書』第181集
- 黒坂 雅人 1992 「山形県村山市西海渕遺跡」『日本考古学年報』43
- 柴田則久 1988 「馬場遺跡他」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書—佐原地区(1)』千葉県文化財センター

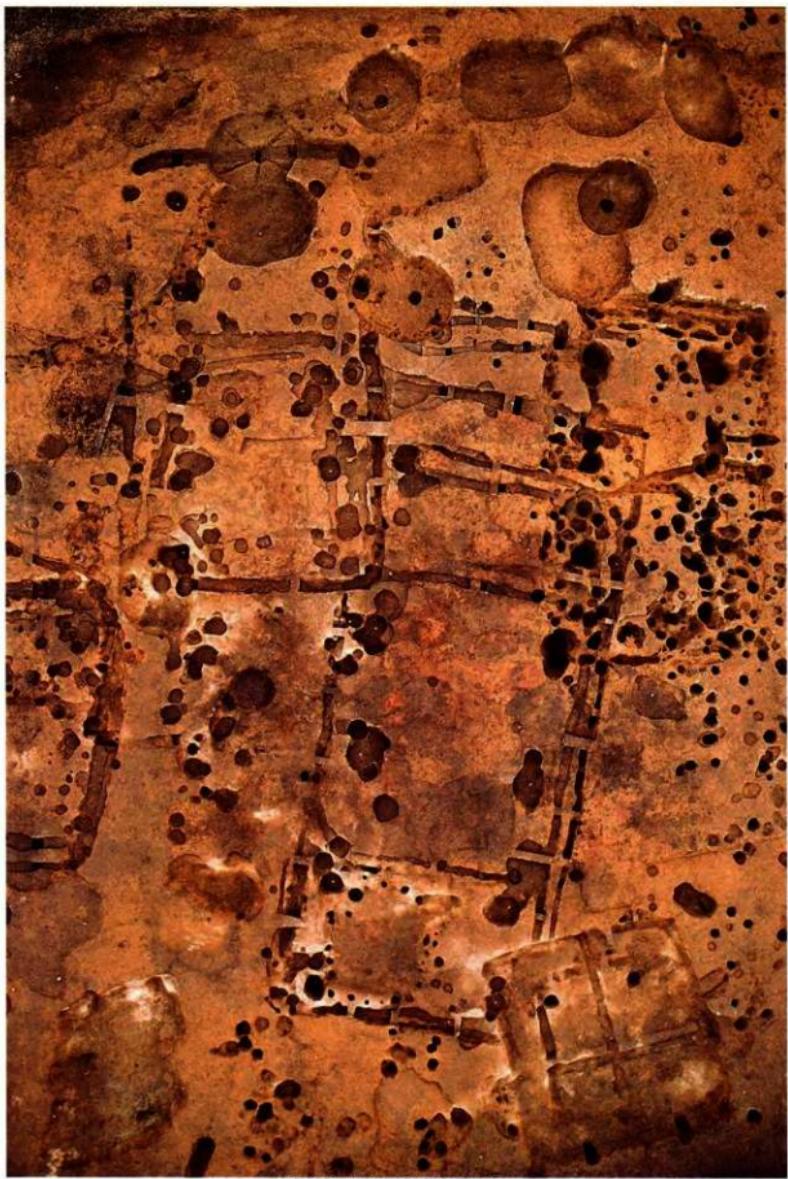
- 経済企画庁総合開発局 1972 「土地分類図 横尺20万分の1地形分類図 宮城県」
- 小池裕子・林良博 1984 「遠藤出土ニホンイノシシの齢査定について」『古文化財の自然科学的研究』pp.519-524
- Schmid E. 1972. *Atlas of Animal Bones for the Prehistorians and Quaternary Geologists*. Elsevier Publishing Company
- 小岩 末治 1961 「岩手県史」第1巻 上古篇
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1982 「塩ヶ瀬1・2遺跡一帯所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書」
『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第31集
- 酒井宗孝・阿部勝則 2000 「上野平遺跡発掘調査報告書」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第333集
- 佐々木 勝 1980 「西田遺跡 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VII」『岩手県文化財調査報告書』第51集
- 佐藤 淳一 2000・2001 「肥沢町大清水上遺跡現地説明会資料」
- 佐藤 信行 1973 「築館町嘉倉貝塚調査概報」宮城県下に於ける最奥部の貝塚
『築館町史資料』築館町文化財保護委員会
- 1976 「原始・古代」『築館町史』築館町史編纂委員会
- 佐藤 洋・赤沢泰靖章・伊藤 哲 1988 「大梁川遺跡・小梁川遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第126集
- 佐藤浩彦・小向裕明 2002 「新田Ⅱ遺跡」『遠野市埋蔵文化財調査報告書』第13集
- 渡谷孝雄・黒坂雅人 1988 「吹浦遺跡第三、四次緊急発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第120集
- 主派 光朗 1987 「山上ノ台遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第100集
- 芹沢長介編 1979 「聖山」東北大文学部考古学研究会考古学資料集別冊2
- 大工原 豊 1996 「中野谷松原遺跡(純文時代造構編)」『安中市文化財調査報告書』
- 田海 義正 1996 「清水上遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第55集
- 高坂勝喜・山田芳和 1986 「土器」『農村基盤調整整備事業能都東地区真駒土区に係る発掘調査報告書』
石川県能都町「真駒遺跡」能都町教育委員会
- 武田光正他 1986 「立野遺跡(C地区)」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』8 福岡県教育委員会
- 堤 隆 1995 「轟の廃棄プロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌』第7号 山梨県考古学協会
- 手塚 均 1986 「田柄貝塚I・II遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第111集
- 手塚 均他 1987 「西林山遺跡 東北横断自動車道遺跡調査報告書II」『宮城県文化財調査報告書』第121集
- 寺村 光晴 1959 「新潟県中頸城郡柿崎町鏡屋町遺跡概報」『上代文化』29
- 土岐山 武 1981 「長者原貝塚」『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集
- 東北歴史資料館 1989 「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25
- 丹羽 茂 1981 「大木式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣出版
- 柴木 誠 1988 「聖山公園遺跡V・根谷古谷遺跡発掘調査概要」『宇都宮市埋蔵文化財調査報告書』第24集
- 橋口 清之 1933 「块状耳飾考」『考古学雑誌』第23巻第1号
- 蘿田富士夫 1992 「玉ヒヒスイ環日本海の交流を巡って」同朋舎出版
- 藤沼邦彦他 1969 「埋蔵文化財緊急発掘調査概報-長根貝塚-」『宮城県文化財調査報告書』第19集
- 古川一明他 1987 「中ノ内A遺跡 東北横断自動車道遺跡調査報告書II」『宮城県文化財調査報告書』第121集
- 宮 城 県 1981 『宮城県史』34. 資料篇11 宮城県史編纂委員会
- 宮城県教育委員会 1975 「般波遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第40集
- 宮城県教育委員会 1979 「字南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第59集
- 武藤 康弘 1997 「縄文時代前・中期の長方形大型住居の研究」『住の考古学』同成社
- 村木淳・小笠原善範 2001 「牛ヶ沢(4)遺跡II」『八戸市埋蔵文化財調査報告書』第89集
- 村田晃一他 1987 「小梁川遺跡 七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書III」『宮城県文化財調査報告書』第122集
- 森 貢喜 1980 「木戸遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書III」『宮城県文化財調査報告書』第69集
- 1983 「佐内屋敷遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書IV」『宮城県文化財調査報告書』第93集
- 八巻 正文 1979 「大木團貝塚-昭和52年度環境整備調査報告」『七ヶ浜町文化財調査報告書』第4集
- 山内 清男 1937 「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1
- 1979 「日本先史土器の縄文」『先史考古学会』
- 蓬佐五郎他 1980 「宇南遺跡第一東北自動車道遺跡調査報告書III」『宮城県文化財調査報告書』第69集
- 吉田 充 1996 「峰山牧場I・II遺跡B地区範囲確認調査報告書」
『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第233集



SB450他空撮写真



SI390 · 400 · 406他空撮写真



SI120 · 170 · 172 他空措写真

土器觀察表 1

分類	No.	器形／分類	文様の特徴	分類	No.	器形／分類	文様の特徴
13	1	縁鉢	口縁・直腹・斜底・脚付平鉢・圓底小面鉢・直脚付文	43	2	縁鉢	口縁・直腹・斜底・脚付文
15	1	縁鉢	堅底半脚付鉢(上)・小底直脚付・脚付文・縁文(LR)	43	3	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
15	2	縁鉢	山形直脚付鉢付文	43	4	縁鉢	口縁・直腹・直脚付文
15	3	縁鉢	口縁・平底・脚付文	45	1	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
15	4	縁鉢	脚付文	45	2	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
15	5	縁鉢	脚付文	45	3	縁鉢	脚付文
23	1	縁鉢	口縁・平底・脚付文	45	4	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
23	2	縁鉢	山形直脚付鉢付文・縁文(LR)	45	5	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
23	3	縁鉢	脚付文	46	1	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
26	1	縁鉢	口縁・直腹・脚付文	46	2	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
26	2	縁鉢	山形直脚付鉢付文・縁文(LR)	46	3	縁鉢	脚付文
26	3	縁鉢	脚付文	46	4	縁鉢	脚付文
26	4	縁鉢	脚付文	46	5	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
31	1	縁鉢	口縁・直腹・脚付文	47	1	縁鉢 D1a	口縁・直腹・脚付文
36	1	縁鉢 A1a	口縁・直腹・脚付文	47	2	縁鉢 A1aII	口縁・直腹・脚付文
36	2	縁鉢 A	口縁・直腹・脚付文	47	3	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
36	3	縁鉢	口縁・直腹・脚付文	47	4	縁鉢 A1aII	口縁・直腹・脚付文
36	4	縁鉢	口縁・直腹・脚付文	51	1	縁鉢 D1aII	口縁・直腹・脚付文
36	5	縁鉢	口縁・直腹・脚付文	51	2	縁鉢 A1aII	口縁・直腹・脚付文
36	6	縁鉢	口縁・直腹・脚付文	51	3	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
37	7	縁鉢	口縁・直腹・脚付文	51	4	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
38	8	縁鉢	口縁・直腹・脚付文	51	5	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
39	9	縁鉢	口縁・直腹・脚付文	51	6	縁鉢	口縁・直腹・脚付文
39	10	縁鉢	脚付文	51	7	縁鉢 A1d	口縁・直腹・脚付文
39	11	縁鉢	脚付文	53	1	縁鉢	脚付文
39	12	縁鉢	脚付文	53	2	縁鉢	脚付文
39	13	縁鉢	脚付文	53	3	縁鉢 A1aII	脚付文
39	14	縁鉢	脚付文	53	4	縁鉢 G1b2	脚付文
39	15	縁鉢	脚付文	53	5	縁鉢 G2b2	脚付文
39	16	縁鉢	脚付文	56	1	縁鉢 C1b	脚付文
39	17	縁鉢	脚付文	56	2	縁鉢 C1a	脚付文
39	18	縁鉢	脚付文	56	3	縁鉢 C1aII	脚付文
39	19	縁鉢	脚付文	56	4	縁鉢 A1c	脚付文
39	20	縁鉢	脚付文	56	5	縁鉢	脚付文
39	21	縁鉢	脚付文	57	1	縁鉢 D1b	脚付文
39	22	縁鉢	脚付文	57	2	縁鉢 A1d	脚付文
39	23	縁鉢	脚付文	57	3	縁鉢	脚付文
39	24	縁鉢	脚付文	57	4	縁鉢 A1c	脚付文
39	25	縁鉢	脚付文	57	5	縁鉢	脚付文
39	26	縁鉢	脚付文	57	6	縁鉢	脚付文
39	27	縁鉢	脚付文	57	7	縁鉢	脚付文
39	1	縁鉢	脚付文	57	8	縁鉢	脚付文
39	2	縁鉢	脚付文	57	9	縁鉢	脚付文
39	3	縁鉢	脚付文	57	10	縁鉢	脚付文
39	4	縁鉢	脚付文	57	11	縁鉢	脚付文
39	5	縁鉢	脚付文	57	12	縁鉢	脚付文
39	6	縁鉢	脚付文	57	13	縁鉢	脚付文
39	7	縁鉢	脚付文	57	14	縁鉢	脚付文
42	1	縁鉢	脚付文	57	15	縁鉢	脚付文
42	2	縁鉢	脚付文	57	16	縁鉢	脚付文
42	3	縁鉢	脚付文	57	17	縁鉢	脚付文
42	4	縁鉢	脚付文	57	18	縁鉢	脚付文
42	5	縁鉢	脚付文	57	19	縁鉢	脚付文
42	6	縁鉢	脚付文	57	20	縁鉢	脚付文
42	7	縁鉢	脚付文	57	21	縁鉢	脚付文
42	8	縁鉢	脚付文	57	22	縁鉢	脚付文
42	9	縁鉢	脚付文	57	23	縁鉢	脚付文
42	10	縁鉢	脚付文	57	24	縁鉢	脚付文
42	11	縁鉢	脚付文	57	25	縁鉢	脚付文
42	12	縁鉢	脚付文	57	26	縁鉢	脚付文
42	13	縁鉢	脚付文	57	27	縁鉢	脚付文
42	14	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	28	縁鉢	脚付文
42	15	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	29	縁鉢	脚付文
42	16	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	30	縁鉢	脚付文
42	17	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	31	縁鉢	脚付文
42	18	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	32	縁鉢	脚付文
42	19	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	33	縁鉢	脚付文
42	20	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	34	縁鉢	脚付文
42	21	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	35	縁鉢	脚付文
42	22	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	36	縁鉢	脚付文
42	23	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	37	縁鉢	脚付文
42	24	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	38	縁鉢	脚付文
42	25	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	39	縁鉢	脚付文
42	26	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	40	縁鉢	脚付文
42	27	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	41	縁鉢	脚付文
42	28	西鉢	口縁・直腹・脚付文	57	42	縁鉢	脚付文
43	1	底盤	脚付文	57	43	縁鉢	脚付文

* LRやRLの内、前後段の反転が判別出来たものについては
LRやRLと表記している。

土器觀察表 2

* LSTやRSTの内、前々段の反応が判別出来たものについては、LSTやRSTと表記している。

土壤觀察表 3

- * LRやRLの内、前後段の反繰りが判別出来たものについては
LR+やRL+と表記している。

土器觀察表 4

器形No.	器形/分類	文様の特徴	回転No.	器形/分類	文様の特徴
145. 21	深鉢	口縁半縁、腹地點子縦斜文	164. 3	深鉢	口縁半縁、圓文(左R)
145. 22	深鉢	側底縱斜竹葉文上所附斜花瓶	164. 4	深鉢	口縁半縁、V字化波線文、鶴首・円形添文
145. 23	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	165. 1	深鉢△3a2	口縁小尖起のつく平縁(上下)斜波文、鶴首(左R)、 半縁竹管による横幅・弧状波紋(右R)
145. 24	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文、利尻文、鶴文(R)	172. 1	深鉢	口縁半縁、點付文(左R)波線文、鶴首(左R)
145. 25	深鉢	側底半縁斜竹葉文による平行波線文、利尻文、鶴文(R)	173. 1	深鉢	口縁半縁、半縁竹管による平行波線文、鶴文
145. 26	深鉢	側底半縁斜文による件字文	173. 2	深鉢	口縁半縁、半縁竹管による平行波線文、鶴文
145. 27	深鉢	口縁半縁、左縫文・利尻文	175. 3	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文、鶴首・円形添文
146. 1	深鉢	口縁半縁、半縁竹管による平行波線文	175. 4	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文
146. 2	深鉢	側底半縁斜文による件字文	175. 5	深鉢	口縁半縁、鶴文
146. 3	深鉢	口縁半縁、弧状波紋、円形添文	175. 6	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文、利尻文、鶴文(R)
146. 4	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	176. 1	深鉢	口縁半縁、U字波點付文、鶴首・鶴文
146. 5	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文、鶴文(LR)	176. 2	深鉢	口縁半縁、斜位波紋文、鶴首・半縁竹管による平行波線文
146. 6	深鉢	口縁波紋、利尻文、寶文、寶文部に斜波文	176. 3	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文、鶴文(LR)
146. 7	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	179. 1	深鉢 A	口縁半縁、U字波點付文
146. 8	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	179. 2	深鉢 B	口縁半縁、鶴文
146. 9	深鉢	側底半縁斜竹葉文による平行波線文	180. 1	深鉢	口縁半縁竹管による平行波線文、鶴文(R)
146. 10	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	180. 2	深鉢	U字波點付文、鶴首・鶴文、側底半縁斜文
146. 11	深鉢	側底半縁斜竹葉文による平行波線文	191. 1	深鉢	口縁半縁、斜位波紋文、鶴首・鶴文
146. 12	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	191. 2	深鉢	口縁半縁、山形狀波紋・鶴首・鶴文
146. 13	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	191. 3	深鉢	口縁半縁、山形狀波紋・鶴首・鶴文
146. 14	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	191. 4	深鉢	口縁半縁と下部目文、山形狀波紋と斜波文、鶴文(LR)
146. 15	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	191. 5	深鉢	口縁半縁、鶴首・鶴文
146. 16	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	191. 6	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文
146. 17	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	191. 7	深鉢	口縁半縁、山形狀波紋と鶴文
146. 18	深鉢	口縁半縁、半縁竹管による平行波線文・鶴文	191. 8	深鉢	口縁半縁上に小底波と土點付文、筋部鶴文
146. 19	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	191. 9	深鉢	口縁半縁、内圓に波状斜線と鶴文
146. 20	深鉢	側底波紋状、斜波・円形添文	191. 10	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文、鶴文(LR)
146. 21	深鉢	側底波紋状	191. 11	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文、鶴文(LR)
146. 22	深鉢	側底半縁斜文による件字文、鶴文(LR)	191. 12	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文
146. 23	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	191. 13	深鉢	口縁半縁突起
146. 24	深鉢	口縁半縁・下部斜波文、鶴首・鶴文と上部斜波文	191. 14	深鉢	側底半縁斜文による鶴首付文、鶴文(LR)
149. 1	深鉢	口縁波紋、寶文、寶文部に斜波文	191. 15	深鉢	口縁半縁突起
149. 2	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	191. 16	深鉢	側底半縁斜文
149. 3	深鉢	口縁半縁、半縁竹管による平行波線文、鶴文	191. 17	深鉢	側底半縁斜文
149. 4	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	191. 18	深鉢	口縁半縁突起
149. 5	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	199. 1	深鉢 C 1b	口縁半縁、首位點付文、鶴文
149. 6	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	199. 2	深鉢	U字波點付文
149. 7	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	199. 3	深鉢	口縁半縁突起
149. 8	深鉢	口縁半縁、鶴文	199. 4	深鉢	口縁半縁突起
149. 9	深鉢	口縁半縁、鶴文	199. 5	深鉢	口縁半縁突起
149. 10	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	199. 6	深鉢	口縁半縁突起
149. 11	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	199. 7	深鉢	口縁半縁突起
152. 1	深鉢 G 1b	口縁半縁・下部斜波文、山形狀波紋と鶴首付文による平行波線文	199. 8	深鉢	口縁半縁突起
152. 2	深鉢 C 1b	口縁半縁、鶴文・鶴文	199. 9	深鉢	側底半縁斜文による件字文、鶴文(LR)
152. 3	深鉢	口縁波紋状、波紋文、可文、鶴首・鶴文と上部波紋文	199. 10	深鉢 A 1a1	口縁半縁
152. 4	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	199. 11	深鉢	側底半縁斜文・首位點付文による鶴文・平行波線文
152. 5	深鉢	口縁半縁、首位點付文・波紋文、側底半縁斜文による平行波線文	199. 12	深鉢	側底半縁斜文・首位點付文による鶴文・平行波線文
152. 6	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	199. 13	深鉢	側底半縁斜文・首位點付文による鶴文・平行波線文
153. 1	浅鉢	B	199. 14	深鉢	側底半縁斜文による件字文
160. 1	深鉢	口縁半縁、首位點付文・波紋文、鶴文・鶴文	199. 15	深鉢	側底半縁斜文による件字文
160. 2	深鉢	口縁半縁、鶴文・鶴文	199. 16	深鉢	側底半縁斜文による件字文
160. 3	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文・鶴文	199. 17	深鉢	側底半縁斜文による件字文
160. 4	深鉢	口縁波紋状、口縁半縁斜文による平行波線文	199. 18	深鉢	側底半縁斜文による件字文
160. 5	深鉢	口縁半縁、首位點付文・波紋文、鶴文・鶴文	199. 19	深鉢	側底半縁斜文による件字文
160. 6	深鉢	口縁半縁、波紋文	199. 20	深鉢	側底半縁斜文による件字文
160. 7	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	199. 21	深鉢	側底半縁斜文による件字文
160. 8	深鉢 A 1a	口縁波紋状、首位點付文	199. 22	深鉢 C 1b	口縁半縁
162. 1	深鉢	口縁波紋状、波紋文	199. 23	深鉢	側底半縁斜文による件字文
162. 2	深鉢	口縁半縁・下部斜波文、鶴首點付文	199. 24	深鉢	側底半縁斜文による件字文
162. 3	深鉢	口縁半縁・波紋文	199. 25	深鉢	側底半縁斜文による件字文
162. 4	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	199. 26	深鉢	側底半縁斜文による件字文
162. 5	深鉢	口縁半縁、首位點付文	199. 27	深鉢	側底半縁斜文による件字文
162. 6	深鉢	口縁半縁、波紋文	199. 28	深鉢	側底半縁斜文による件字文
162. 7	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	199. 29	深鉢	側底半縁斜文による件字文
162. 8	深鉢 A 1a	口縁波紋状、首位點付文	199. 30	深鉢	側底半縁斜文による件字文
162. 9	深鉢	口縁波紋状、波紋文	199. 31	深鉢	側底半縁斜文による件字文
162. 10	深鉢	口縁半縁・下部斜波文、鶴首點付文	199. 32	深鉢	側底半縁斜文による件字文
162. 11	深鉢	口縁半縁・波紋文	199. 33	深鉢	側底半縁斜文による件字文
162. 12	深鉢	側底半縁斜文による平行波線文	199. 34	深鉢	側底半縁斜文による件字文

* L.R.やR.L.の内、前後の文括りが判別出来たものについては
L.R.やR.L.と表記している。

土器觀察表 5

- * LRやRLの内、前半段の反繰りが判別出来たものについては
LR₁やRL₁と表記している。

土壤觀察表 6

- LRやRLの内、前々段の反撃りが判別出来たものについては
LR↑やRL↑と表記している。

土器觀察表 7

- * LRLやRLの内、前々段の反応りが判別出来たものについては
LRL+やRL+と表記している。

土器觀察表 8

* CRやRLの内、個々様の波形りが判別出来たものについては
LR+やRL+と表記している。

土器觀察表 9

現用 No.	部類/分類	文様の特徴	現用 No.	部類/分類	文様の特徴
354 11 壺鉢	口縁平縁 口唇部直角状・小底板粘土貼付付 瓶底小底板粘土貼付付		360 3 壺鉢	脚部・平底竹苞による平行弦紋文 低内貼付付 繩文(L.R)	
360 1 壺鉢	口縁平縁 山形状・高市底板粘土貼付付 筒文(L.R)		360 4 壺鉢	口縁・平底 竹苞による平行弦紋文	
365 2 壺鉢	口縁平縁 筋压痕文(L.R)		360 5 壺鉢	脚部・平底竹苞による平行弦紋文 低内貼付付 繩文(L.R)	
355 3 深鉢	口縁平縁 下口縁目・瓶底半底板粘付による平行弦紋文		360 6 壺鉢	口縁・平縁 平底竹苞による平行弦紋文	
356 4 壺鉢	脚部・平底竹苞による平行弦紋文 繩文(L.R)		360 7 深鉢 B	口縁・平縁 瓶底螺旋紋・脚部・平底竹苞による平行弦紋文	
356 1 高脚 上口文	上口文		360 8 深鉢 B	口縁・平縁 下口縁目・瓶底竹苞による平行弦紋文	
356 2 壺鉢	口縁平縁のつく平縁 突起部にC字底板縫合 施部・瓶底直角付・施底付・筒文(L.R)		360 9 壺鉢	脚部・平底竹苞による平行弦紋文	
367 1 茶碗	口縁平縁 瓶底直角付・筒文(L.R)		360 10 壺鉢	脚部・平底竹苞による平行弦紋文	
357 2 茶碗	口縁平縁 瓶底直角付(L.R) 弦目地文無し		360 11 深鉢	脚部・平底竹苞による平行弦紋文	
357 3 深鉢	口縁平縁 瓶底直角付(L.R) 瓶底半底板粘付 筒文(L.R)		360 12 深鉢	脚部・平底竹苞による平行弦紋文	
357 4 深鉢	口縁平縁 瓶底直角付(L.R) 瓶底半底板粘付 筒文(L.R)		360 13 壺鉢	脚部・平底 瓶底直角付による平行弦紋文 繩文(L.R)	
357 5 深鉢	口縁平縁 瓶底直角付(L.R) 瓶底半底板粘付 筒文(L.R)		360 14 深鉢	口縁・平縁 下口縁目・瓶底半底板粘付による平行弦紋文	
357 6 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付(L.R) 瓶底半底板粘付 筒文(L.R)		360 15 壺鉢	脚部・平底 瓶底直角付による平行弦紋文	
357 7 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付(L.R) 瓶底半底板粘付 筒文(L.R)		360 16 壺鉢	脚部・平底 瓶底直角付による平行弦紋文	
357 8 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付(L.R) 瓶底半底板粘付 筒文(L.R)		360 17 壺鉢	脚部・平底 備考名・小底板粘土貼付付 繩文(L.R)	
357 9 深鉢	口縁平縁 瓶底直角付(L.R)				
367 19 壺鉢	口唇部平縁 瓶底直角付(L.R) 瓶底竹苞による平行弦紋文				
357 11 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付(L.R) 施底側面 瓶底直角付 筒文(L.R)				
357 12 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付(L.R) 施底側面 瓶底直角付 筒文(L.R)				
357 13 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付(L.R) 瓶底半底板粘付 筒文(L.R)				
357 14 壺鉢	口縁平縁のつく平縁 突起部に黏土貼付文 施底側面・瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
357 15 深鉢	口縁平縁 瓶底直角付・筒文(L.R)				
357 16 壺鉢	口縁平縁 瓶底竹苞による平行弦紋文 施底側面 文部・瓶底直角付 瓶底直角付				
357 17 深鉢	口縁平縁 瓶底直角付・筒文(L.R)				
357 18 深鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付				
357 19 深鉢	口縁平縁 瓶底直角付(L.R)				
357 20 容鉢	口縁平縁 施底貼付による平行弦紋文 瓶底直角付 筒文(L.R)				
357 21 壺鉢	口縁平縁 施底・小底板粘付文 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
357 22 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付 地文無し				
357 23 深鉢	口縁平縁 施文				
357 24 深鉢	脚部・平底 瓶底直角付による平行弦紋文				
357 25 壺鉢	脚部・平底 瓶底直角付による平行弦紋文				
357 26 深鉢	脚部・平底 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
357 27 壺鉢	脚部・平底 瓶底直角付 瓶底直角付				
358 1 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 施底竹苞による平行弦紋文				
358 2 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
358 3 壺鉢	口縁平縁 上口縁直角付 青花文 瓶底直角付 小底板粘土貼付付 筒文(L.R)				
358 4 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付による平行弦紋文 施底直角付 文部・瓶底直角付				
358 5 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 1 壺鉢	脚部・平底 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 2 壺鉢	脚部・平底 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 3 壺鉢	口縁平縁 施底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 4 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 5 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 6 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 7 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 8 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 9 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 10 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 11 壺鉢	口縁平縁 上口縁直角付 文部・瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 12 壺鉢	口縁平縁 上口縁直角付 施底直角付による平行弦紋文				
359 13 深鉢	口縁平縁 年号文による平行弦紋文				
359 14 有鉢	口縁直角付 瓶底直角付 文部・瓶底直角付 瓶底直角付 施底直角付 文部・瓶底直角付 瓶底直角付				
359 15 壺鉢	口縁平縁 花文				
359 16 壺鉢	口縁直角付 瓶底直角付による平行弦紋文 瓶底直角付 施底直角付 瓶底直角付による平行弦紋文				
359 17 壺鉢	口縁平縁 区別縫合文 瓶底直角付 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 18 有鉢	口縁平縁 花文 瓶底直角付による平行弦紋文 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 19 壺鉢	口縁平縁 花文 瓶底直角付による平行弦紋文 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 20 深鉢	口縁直角付				
359 21 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付による平行弦紋文 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 22 壺鉢	口縁平縁 瓶底直角付による平行弦紋文 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 1 壺鉢	口縁直角付 文部・瓶底直角付による平行弦紋文 瓶底直角付 筒文(L.R)				
359 2 壺鉢	口縁直角付 瓶底直角付による平行弦紋文 瓶底直角付 筒文(L.R)				

* LRとRLの中、前4段の反響力が割別出来たものについては「LR」と「RL」と記述している。

石器觀察表 1

石器觀察表 2

石器觀察表 3

石器觀察表 4

石器觀察表 5

石器觀察表 6

番号	種類	形態	特徴	地質	地名	年月	分類	Q値	W値	U値	名前	備考
378 1 832	石核	片	中等	南高層	260	180	11.2	4.3	0.8	セツリ		
378 1 834	石核	片	低	中高層	272	240	16.2	5.2	0.8	セツリ		
378 1 809	石核	片	中	中高層	540	675	14.4	6.5	0.8	セツリ		
378 1 342	骨質石核	片	中	中高層	1100.0	0.0	265.7	120.0	0.0	セツリ	骨質石核	
378 1 106	骨質石核	片	中	中高層	1100.0	0.0	265.7	120.0	0.0	セツリ	骨質石核	
380 1 275	骨質石核	片	中	中高層	182.0	220	30.4	4.0	0.0	セツリ	骨質石核	
380 1 279	骨質石核	片	中	中高層	115.0	210	24.4	2.9	0.0	セツリ	骨質石核	
380 2 279	骨質石核	片	中	中高層	115.0	210	24.4	2.9	0.0	セツリ	骨質石核	
380 2 361	骨質石核	片	中	中高層	117.0	0.0	21.0	2.2	0.0	セツリ	骨質石核	
380 2 220	骨質石核	片	中	中高層	176.0	0.0	11.2	1.4	0.0	セツリ	骨質石核	
381 2 560	石核	平打石核	中	中高層	530.0	0.0	16.0	1.0	0.0	セツリ	石核	
381 2 542	石核	平打石核	中	中高層	515.0	0.0	16.5	1.0	0.0	セツリ	石核	
381 4 542	石核	平打石核	中	中高層	500.0	0.0	16.0	1.0	0.0	セツリ	石核	
381 4 102	石核	平打石核	中	中高層	102.0	0.0	16.0	1.0	0.0	セツリ	石核	
381 4 545	石核	平打石核	中	中高層	152.0	15.3	32.0	3.6	0.0	セツリ	石核	
382 1 560	石核	山形	中	中高層	712.0	0.0	10.0	0.4	0.0	セツリ	石核	
382 2 521	石核	山形	中	中高層	532.0	0.0	24.0	1.4	0.0	セツリ	石核	
383 1 5022	石核	玉	中	中高層	191.0	0.0	16.0	1.0	0.0	セツリ	石核	
383 4 5441	石核	玉	中	中高層	718.0	4.0	24.1	1.6	0.0	セツリ	石核	
383 5 5799	石核	玉	中	中高層	102.0	0.0	16.0	1.0	0.0	セツリ	石核	
383 8 5308	石核	玉	中	中高層	102.0	0.0	16.0	1.0	0.0	セツリ	石核	
383 8 5309	石核	玉	中	中高層	103.0	0.0	16.0	1.0	0.0	セツリ	石核	
383 7 5401	石核	山形	中	中高層	105.0	0.0	16.0	1.0	0.0	セツリ	石核	
383 8 5899	石核	山形	中	中高層	910.0	38.0	65.0	1.0	0.0	セツリ	石核	
383 9 5434	石核	山形	中	中高層	97.0	68.8	61.2	0.4	0.0	セツリ	石核	
383 9 5409	石核	玉	中	中高層	118.1	0.0	37.4	5.4	0.0	セツリ	石核	
383 2 5464	石核	玉	中	中高層	220.0	0.0	37.4	5.4	0.0	セツリ	石核	
383 2 5224	石核	玉	中	中高層	121.0	0.0	37.4	5.4	0.0	セツリ	石核	
383 4 5497	石核	玉	中	中高層	104.0	0.0	37.4	5.4	0.0	セツリ	石核	
383 5 5444	石核	玉	中	中高層	95.5	42.0	32.0	2.6	0.0	セツリ	石核	
383 6 5405	石核	玉	中	中高層	102.0	0.0	37.4	5.4	0.0	セツリ	石核	
383 8 5445	石核	玉	中	中高層	102.0	0.0	37.4	5.4	0.0	セツリ	石核	
383 8 5402	石核	玉	中	中高層	102.0	0.0	37.4	5.4	0.0	セツリ	石核	
383 7 516	石核	玉	中	中高層	102.0	0.0	37.4	5.4	0.0	セツリ	石核	
383 8 5418	石核	玉	中	中高層	102.0	0.0	37.4	5.4	0.0	セツリ	石核	
383 9 5561	石核	玉	中	中高層	117.0	0.0	45.7	4.0	0.0	セツリ	石核	
383 10 5441	石核	玉	中	中高層	82.0	14.6	26.8	2.0	0.0	セツリ	石核	
384 1 5302	石核	山形	中	中高層	782.0	54.0	58.0	1.0	0.0	セツリ	石核	
384 2 5206	石核	山形	中	中高層	104.0	44.2	43.7	2.5	0.0	セツリ	石核	
384 3 5440	石核	山形	中	中高層	110.0	10.1	53.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
384 5 5446	石核	山形	中	中高層	101.0	0.0	53.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
384 6 5402	石核	山形	中	中高層	102.0	0.0	53.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
384 7 516	石核	山形	中	中高層	102.0	0.0	53.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
384 8 5418	石核	山形	中	中高層	102.0	0.0	53.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
384 9 5566	石核	山形	中	中高層	103.0	0.0	53.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 1 5668	石核	山形	中	中高層	101.0	0.0	53.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 4 5446	石核	山形	中	中高層	102.0	0.0	53.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 5 5225	石核	山形	中	中高層	115.0	110.0	27.0	0.0	0.0	セツリ	石核	
385 7 5445	石核	山形	中	中高層	95.0	24.0	46.0	1.4	0.0	セツリ	石核	
385 8 5495	石核	山形	中	中高層	109.0	74.0	36.7	4.0	0.0	セツリ	石核	
385 9 5107	石核	山形	中	中高層	110.0	0.0	46.0	1.0	0.0	セツリ	石核	
385 1 5566	石核	山形	中	中高層	103.0	0.0	53.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 2 5668	石核	山形	中	中高層	103.0	0.0	53.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 3 5406	石核	山形	中	中高層	104.0	40.0	43.0	2.7	0.0	セツリ	石核	
385 4 5407	石核	山形	中	中高層	104.0	40.0	43.0	2.7	0.0	セツリ	石核	
385 5 5446	石核	山形	中	中高層	104.0	40.0	43.0	2.7	0.0	セツリ	石核	
385 6 5408	石核	山形	中	中高層	104.0	40.0	43.0	2.7	0.0	セツリ	石核	
385 7 5409	石核	山形	中	中高層	104.0	30.0	43.0	2.7	0.0	セツリ	石核	
385 8 5410	石核	山形	中	中高層	104.0	30.0	43.0	2.7	0.0	セツリ	石核	
385 9 5411	石核	山形	中	中高層	107.0	73.0	27.0	3.7	0.0	セツリ	石核	
385 10 5415	石核	山形	中	中高層	105.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 11 5402	石核	山形	中	中高層	104.0	83.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 12 5578	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 13 5409	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 14 5410	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 15 5411	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 16 5412	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 17 5413	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 18 5414	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 19 5415	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 20 5416	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 21 5417	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 22 5418	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 23 5419	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 24 5420	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 25 5421	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 26 5422	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 27 5423	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 28 5424	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 29 5425	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 30 5426	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 31 5427	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 32 5428	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 33 5429	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 34 5430	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 35 5431	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 36 5432	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 37 5433	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 38 5434	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 39 5435	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 40 5436	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 41 5437	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 42 5438	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 43 5439	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 44 5440	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 45 5441	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 46 5442	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 47 5443	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 48 5444	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 49 5445	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 50 5446	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 51 5447	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 52 5448	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 53 5449	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 54 5450	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 55 5451	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 56 5452	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 57 5453	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 58 5454	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 59 5455	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 60 5456	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 61 5457	石核	山形	中	中高層	103.0	63.0	24.0	3.4	0.0	セツリ	石核	
385 62 5458	石核	山形	中	中高層	103.0	6						

遺構索引

縄文時代

遺構No.	頁	遺構No.	頁	遺構No.	頁	遺構No.	頁	遺構No.	頁	遺構No.	頁	遺構No.	頁	遺構No.	頁
SI002 16	SI112 22	SI391 147	SB154 225	SK037 255	SK102 275	SK307 290	SK345 321	SK411 337							
SI003 19	SI113 24	SI400 158	SB155 221	SK038 256	SK104 275	SK308 290	SK347 313	SK412 342							
SI004 26	SI120 103	SI403 166	SB157 224	SK040 258	SK105 277	SK309 290	SK351 321	SK413 342							
SI005 33	SI121 115	SI404 171	SB158 225	SK041 258	SK106 277	SK311 290	SK352 322	SK414 342							
SI007 28	SI129 24	SI406 172	SB161 226	SK042 258	SK108 277	SK312 293	SK353 323	SK415 338							
SI008 29	SI142 101	SI406 176	SB162 227	SK043 258	SK109 277	SK313 294	SK354 323	SK416 342							
SI009 30	SI143 102	SI408 191	SB163 227	SK049 260	SK110 278	SK314 295	SK355 323	SK417 340							
SI011 29	SI144 210	SI409 192	SB164 229	SK050 260	SK114 278	SK315 296	SK357 323	SK418 344							
SI018 35	SI145 210	SI430 195	SB166 221	SK051 260	SK115 278	SK316 296	SK362 323	SK419 344							
SI020 43	SI146 212	SI444 185	SB168 231	SK052 262	SK116 279	SK317 300	SK363 328	SK423 344							
SI021 37	SI147 212	SI446 195	SB450 232	SK054 262	SK117 279	SK319 300	SK365 328	SK424 344							
SI022 30	SI151 209	SI447 40	SB472 237	SK056 262	SK118 279	SK322 300	SK366 328	SK429 344							
SI044 39	SI156 213	SI451 205	SB474 238	SK057 263	SK119 279	SK323 300	SK367 331	SK431 346							
SI045 44	SI159 214	SI454 201	SK009 240	SK058 263	SK123 280	SK324 307	SK378 331	SK432 346							
SI047 52	SI170 108	SI458 175	SK014 241	SK061 264	SK124 280	SK326 307	SK379 331	SK442 346							
SI053 54	SI171 112	SI475 215	SK015 243	SK062 264	SK125 280	SK327 307	SK381 331	SK443 349							
SI060 54	SI172 114	SI480 186	SK016 243	SK064 266	SK126 280	SK328 309	SK382 332	SK445 349							
SI067 57	SI173 115	SI483 193	SK017 244	SK066 266	SK127 281	SK329 309	SK383 332	SK448 346							
SI070 58	SI174 115	SI484 201	SK019 244	SK068 267	SK128 281	SK330 311	SK384 332	SK449 349							
SI077 60	SI178 214	SI485 204	SK024 245	SK071 268	SK130 281	SK331 311	SK385 334	SK455 351							
SI078 89	SI320 117	SI487 204	SK025 247	SK072 268	SK134 283	SK332 312	SK386 334	SK469 351							
SI080 88	SI350 127	SI488 205	SK028 247	SK073 268	SK136 283	SK335 312	SK387 334	SA132 352							
SI081 208	SI361 131	SI499 215	SK027 247	SK074 268	SK138 283	SK336 313	SK394 334	SA133 352							
SI082 208	SI361 135	SI508 216	SK028 250	SK075 272	SK139 283	SK337 313	SK395 336	SX039 392							
SI083 93	SI364 139	SI503 221	SK030 250	SK076 272	SK301 284	SK339 313	SK396 336	SX068 392							
SI085 94	SI368 141	SI511 230	SK031 251	SK087 273	SK302 284	SK340 314	SK397 336	SX140 352							
SI086 95	SI372 142	SI514 219	SK032 251	SK097 273	SK303 287	SK341 318	SK398 336	SX374 393							
SI090 437	SI371 464	SI519 220	SK033 251	SK098 274	SK304 287	SK342 318	SK399 337								
SI100 97	SI388 146	SI510 220	SK034 251	SK099 274	SK305 287	SK343 318	SK401 336								
SI111 21	SI390 151	SI513 227	SK035 253	SK101 276	SK306 287	SK344 320	SK407 340								

古代

遺構No.	頁	遺構No.	頁	出土遺物	頁
SI013 429	SI389 450			基本層位出土土器	374
SI029 433	SI440 452			基本層位出土石器・石製品	377
SI048 435	SI474 447	P	t 土出土石器・石製品	386	
SI065 436	SIK079 454	P	t 土出土土器	392	
SI090 437	SIK071 464	遺構等語句出土土器	395		
SI130 441	SIK376 465	遺構等語句出土石器・石製品	396		
SI321 446	SIK377 465				
SI370 447	SIK023 463				

報告書抄録

ふりがな	かくらかいづか
書名	嘉倉貝塚
調査名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第192集
編著者名	佐藤達申・三好秀樹
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 Tel 022-211-3682
発行年月日	西暦 2003年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遭防番号	°	'			
かくらかいづか 嘉倉貝塚	みやぎけん 宮城県 くりはにぐん 栗原郡 つきたてちょう 栗館町 あさひざわのくら 字麻沢加倉	45217	41005	203度 82分 00秒	141度 56分 60秒	19990412～1210 20000410～1219 20020729～0828	約5,000m ²	みやぎ県北 高速幹線 道路事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嘉倉貝塚	集落	縄文時代	竪穴住居跡 竪穴状遺構 掘立柱建物跡 土塁 柱列 遺物堆積層	縄文七器・土偶 イチジク形土製品 その他土製品 石器・块状耳飾 石鏡・その他石製品	多数の大型住居跡・掘立柱建物跡・貯藏穴等によって構成される縄文時代後葉から中期初頭の環状集落
		古代	竪穴住居跡 土塁 工房跡	土師器・須恵器 刀・刀子・鉄斧	8世紀後半頃の竪穴住居跡のカマド内から土師器体、刀、刀子、鉄斧が出土された状態で出土。

宮城県文化財調査報告書第192集

嘉倉貝塚

平成15年3月25日印刷

平成15年3月31日発行

発行 宮城県教育委員会

仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24
